魔王の息子

蝉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王の息子

【Ｎコード】
Ｎ１１４１Ｎ

【作者名】
蝉

【あらすじ】
例えばこの物語の語り部、鯨木澪士という少年はこれまでに世界から絶望しか与えられてこなかった。しかし運命は数奇に狂い、彼を異世界にへと堕としてしまう。どうしようもなく人間を失敗してしまった《異形》は、そこで一人の少女に出会う――――そうして、宴の幕は上がった。
第二部。そこは決して楽園などではなく、平和と安寧の地でもなかった。鯨木澪士は自らの矛盾にのた打ち回りながら、その手で掴んだ《幸せ》にさえ悶え苦しむ。幕は既に下りていたが、世界は再び

彼を舞台にへと引きずり込んでいった。聖人は愉快に裁かれ、断罪
童話は優雅に傅き、楽園の仔等は健気に贖う。怪物は法螺を吹き、
化物は愛を物語り、異形は孤独の詩歌を紡いだ。ではでは、さあさ
あ、今宵も宴を始めようか。

プロローグ（前書き）

今回初投稿となります。始めまして蝉と申します。
こんな駄文でよろしかったらどうぞ。

プロローグ

「城内にいる者は全て殺せ！　女子供であろうと、ここが魔王の根城であることを忘れるなっ！　容赦は捨てろ！　我らシュテンベルグの加護の下、魔王の全てを根絶やすのだ！」

先陣を切り、怒号を撒き散らすは彼(か)の勇ましき者。神の加護の下、正義の旗の下、迎え撃つ衛兵らしき格好の者達を一線にて斬り捨てる。らしき、というのは彼らは一様にして異形の姿だったからだ。ある者は頭から角が生え、またある者は目が三つ有り、またある者は皮膚が鱗状になっていたりとまたある者は……。

人は皆、彼らを魔族と呼び、時には魔物と称した。

それだけ、彼らの容姿は異様だった。

「忌々しい魔族共がっ！」

そう吐き捨て、長年培ってきた剣技と、この魔を滅ぼすといわれる聖剣とで、目の前の敵陣を薙ぎ払い、活路を見出す。仲間の魔術師二人が十分に援護に徹してくれているおかげで、この上なく戦いやすかった。後方に続く討伐部隊の精鋭達も先程の怒号により、士気がさらに上昇している。

この戦い、必ず勝たなければならない。

この世界に平和と平穏を取り戻す為にも。

勇ましき者は、そのままついに魔王の座する場所まで突き進んだ。厳格かつ荘厳な王座の扉の前で、彼は一旦静止し、そして意を決め、いざ参らんと扉を蹴り開け、そこに泰然と座する者と対面した。

「待っていたぞ、勇者よ」

「魔王っ……っ！」

魔の王と、勇ましき者。
善と悪。
光と闇。
互いの宿命は十分過ぎるほどに理解し合っていた。

「魔王！　世の混沌を統べる王よ！　貴様を倒し、世界に平和と平穏を取り戻す！」
「よかろう、勇者よ。その力、その正義、我にとくと見せてみよ」

口上はこれまで。後は存分に殺し合い、屠り合い、潰し合い、喰らい合い、奪い合い、どちらかが息絶えるまで、どちらか生命費えるまで、勇者と魔王は、戦い続け、争い続けるだろう。
それが二人の宿命ならば。

「はあああああっ！」
「さあ、宴の始まりだ」

その夜、魔王の城を含む半径三ビットに亘って突如として巨大な黒い空間が発生し、その空間内にいたもの魔王の城を含め全てを飲み込んだ。後に残ったのは広大な窪地と、多少の瓦礫があるだけだった。果たしてそれが魔王が行使した魔術か魔法であるのかは定か

ではないが、勇者と、二人の魔術師、そして何人かの仲間達だけが瀕死の重傷を負いながらも奇跡的に生存していた。だが、生存したは良いもの、その仲間のほとんどが廃人という結果に終わり、二人の魔術師の内の一人もまた例外ではなかった。

その後、勇者は魔王を討伐した英雄と謳われ、当然の流れのように恋仲であったウェルテール王国第一王女との婚約を果たして、王の座に収まり、名高き賢王として末永く国を治め、近隣諸国にもその名を轟かせた。しかしながら、勇者は本当に魔王を討ち取ったのか、と疑問視する者もいないではなかったが、今はなき魔王の城跡、あの夜のことを語る者も、語れる者もいない。

彼(か)の勇ましき者、賢王、アルム＝ゼフォン＝ウェルテールでさえ、あの夜の出来事を深く語ろうとはしなかった。

ただ、魔王の城跡として語り継ぐその地は今もなお、広大無辺な窪地が存在するだけだという。

著者　マークス＝リコル

『魔王討伐の軌跡』より第四章五百六十四項からの抜粋。

第一話　とある人間失敗の最後と最期

俺は暴力が嫌いです。

でも圧倒的かつ一方的な暴力ってさ、綺麗だなって思うんだ。

例えば映画とかアニメとか漫画とか小説とか何でもいいのだけれど、主人公が敵に追い込まれていき、絶体絶命のピンチに陥ったとしよう。しかし主人公は、何やかんやの起死回生の逆転劇によって、情け容赦なんか無用に敵を跡形もなくブッ飛ばし、最期の最後には予定調和なハッピーエンドが待っている……という、そんな展開が、俺は好きだ。大好物だ。

けれど、弱いものイジメは嫌いだ。強者が弱者をいたぶるなんて、大嫌いだ。つまらないし面白くないし吐き気がするしジンマシンが出るし、本当、嫌悪の念さえ抱くよ。

弱きを助け、強きを挫く。

故にこれが、俺の主軸たるモットー。目標であり、目的でもある。

「おい、鯨木。てめぇさっきからナニ笑ってやがる」

名前さえ記憶していない誰かが、俺の名を呼ぶ。この、鯨木澪士（いさなぎれいし）という俺の名を。変わった名前だね、とかよく言われたりするのだが、どうか放っておいてくれ。鯨木先生が俺にくれた苗字で、名づけてくれた名前なんだ。他人がとやかく言わないで欲しい。

「なに笑ってやガンだよごらぁ！」

「ガチでしばくぞ？　おい」

「つか、そろそろマジでやっちまおうぜ」

いやだなぁ。ただ映画と読書が好きなだけな、こんな線の細い男の子をわざわざ人気のない屋上まで拉致ってさ、こうやって六人がかりで取り囲むなんて。ほら、鉄パイプなんて振り回さないでよ、危ないな。いやあ、それにしても空が高い。風もほど良く吹いていて気持ちがいい。今感じている夏の残滓も、もうしばらくたてば秋の香りに塗り換わるのだと思うと、少し切ない感慨になる。夏は、俺が好きな季節だからだ。

「あぁあ？　びびってんのかよオマエ」

「ぶはっ、それマジウケル」

びびってるわけないだろ。それこそ『マジウケル』だっつーの。

まったく夏休み明けの久しぶりの登校だというのに、初日からこんな調子じゃ先が思いやられますな。来年は受験だっていうのに。チミたち勉強しろ勉強。

「……でさぁ、いったいなんなのお前ら？」

俺は気だるさとかったるさを堪えて、頭をボリボリと掻きながら訊いてみた。ふむ。髪も大分伸びたな。また『天牛（かみきり）』で切ってもらうか。

「そりゃあよ、決まってんだろレイシちゃんよお？　テメェが最初にヤってきたんだろが。そのお礼参りってことだよ」

少し後ろで踏ん反り返っていたクラスメイトの……え、とー、誰だっけ？　あー、と、ととと……トンヌラ？　まあいいや、トンヌラくんで。一応はリーダー格っぽいし、区別はしておこう、区別は。そのトンヌラ氏が俺に腐った笑みを向けてきた。手に持った鉄パイプを、威嚇っぽく屋上のコンクリートに叩きつける。

「忘れたとは言わせねえぞ？」

「こらこら、誤解を招く言いかたはやめろって。確かに、俺はお前らをボコったかもしんないけどさー。苛めはいかんでしょ、苛めは」

それを俺は止めただけに過ぎないんだけど。

というか、夏休み中の学校の校舎裏で陰険にもカツアゲや袋叩きなんて、許せるはずがないでしょう。例え学校にいる教師の目がい

つもより少ないからって、ねえ？
　弱いもの苛めは、駄目だよ。
　だから、俺なんかに虐められても、仕方がないだろう？　因果応報。やられた者の痛みを知れってね。まあ、んなことよりも、お前らが苛めてた奴っていうのが、俺の知り合いだった時点で、お前らの運は尽きてたんだよ。
「で？　お前らはいったい俺に何を求めてるの？」
「それも決まってんだろがぁっ！」
　トンヌラ殿は血走った目で、何かの言葉ををハイテンションで叫び散らしながら、俺に鉄パイプを振り下ろしてきた。俺はその一撃を半歩引くだけでかわし、ついでにクロスカウンターの要領で、トンヌラさんのどてっ腹に鋭いボディーブローを埋め込んだ。一瞬、トンヌラ様の身体が宙に浮いた。陣痛に耐える妊婦さんも顔負けの悶絶した表情で、ヒューコーと辛うじて息をしている彼をそのまま抱き止め、耳元で囁いてやる。
「真葛原勇義（まくずがはらゆうぎ）」
　これが、お前達が苛めてた者の名前だ。あいつは身体が弱くて、気も弱くて、名前負けしているランキング第一位に輝く男だ。でも親が金持ちらしいから、すぐにお前らみたいなクズにカモられちまうんだよなあ。けれど以外に強情なところもあって、自分が苛められている事実なんかを絶対他の人なんかには喋らないんだ。あの時、偶然俺が見かけたから良かったものを……まったく。本当に、いつからお前達みたいなカスに絞り続けられていたんだか。
「覚えておけよ」
　お前らが傷つけた者の名を。
「そして、知れ」
　これから味わう恐怖を。
　こんな馬鹿げた茶番を二度と起こさせないようにする為にも。
　徹底した恐怖という恐怖を、心の奥底に植え込んでやろう。
　俺はそう呟き終えると、既に意識を手放そうとしているトンヌラ

っちを突き飛ばした。力なく固い屋上の地面に転がった彼を見て、さっきまで意気揚々とニヤついてた他の五人が、凍りついた。ようやく状況を把握したのか。これだからシナプス伝達の遅い人間は困る。別に不思議なことでもないだろうに、何でそう超常現象でも目撃したみたいな反応するのだ。

狩る側が、狩られる側になるのも。

被害者が、加害者になり得ることも。

至って不思議なことじゃないのにさ。

まあ、とりあえずは、決め台詞のひとつでも吐いておこうか。

ではでは、さあさあ。

「宴を始めようか」

「俺は暴力が嫌いです。でも、弱者を虐げようとする人間は、もっと嫌いです」

だから、嫌いなもので、もっと嫌いなものを潰すのである。つまりは最優先事項の問題。要するに矛盾考察を孕んだ難題。

例としてあげるなら、戦争を根絶する為に戦争を起こすようなものであって、そんな俺の主張は、他人から言わせれば不可解極まるものであろう。現に『夢魔（スリープウォーカー）』こと百鬼紅夜（なぎりこうや）曰く、『そんなもの逃げればいいのにさ、澪士は無用心に首を突っ込み過ぎなんだよ』と呆

れつつも肩を竦めていた。
「うぅ……あっ……」
んー？　何だ、一番最初にのびていたトンヌラ殿ではございませぬか。今頃お目覚めですか。他のお仲間はみんな仲良く血を流してお休み中ですよ。お前ももう一回ぐらい沈んどきますか？
澄んだ青空の下で、屋上に転がる邪魔臭い何人かを蹴っ飛ばしつつ、意識を薄っすらと取り戻したと思われるトンヌラちゃんのもとまで近寄って、ワックスでべたつく髪の毛を掴み、無理矢理に彼を立たせてから、屋上の一番隅のフェンスにまで引きずっていった。トンヌラくんはもう何の抵抗の意思を示さずに、情けなく俺になすがままにされていた。
「ハローハロー。破裂しない程度に殴ったつもりだったけど、内臓のご機嫌はいかが？　そんじゃ次は顔面の整形手術に移りましょうか。ジャニーズも驚きのイケメンに仕上げてやんよ」
「ひっ、ゆ、許して……」
「勇義（ゆうぎ）の奴もさ、お前にそう言ったんじゃないのか？　それで、お前は止めたのか？　ええ？　違えよな？」
「ぁあ……」
「そうやってお前は生きてきたんだろ？　お前が中学時代に何人学校に来れなくさせてきたか言ってやろうか。こちとら、お前のことについてはするっとまるっとすっきりかっちり調べはついてんだよあぁん？」
ガンガンガンガン、とトンヌラさんの胸倉を掴み上げ、後ろのフェンスに叩きつける。彼は涙目涙声で謝意と謝罪の言葉の喚いているが、俺は絶好調でそれらの虚言（たわごと）を無視する。
何度も何度も、固いフェンスの網目へ衝突を繰り返す。何度も何度も否応なく。あまりの恐怖に歪む彼の顔が、俺の嗜虐心を大いに刺激する。
強者が弱者に覆される瞬間が、たまらなく好きだ。
悪が一方的に駆逐される瞬間も、それと同じくらいに大好きだ。

別に自分が正義の味方だなんて傲慢なことを思っているわけではない。人生も、世界もまんま映画みたいな単純な構造はしていない。この世に悪はない。したがって正義もない。そんな常識は、母親の子宮にいた頃から知っていた。

まあ、その母親及び父親にも捨てられた孤児院育ちの俺にとっては、『親』というものほど、希薄な存在はない。形式的には、孤児院の院長たる鯨木先生が、俺を養子として引き取ってくれたものの、それでも、先生は先生でしかなく、俺にとっての一番ではない。孤児院にいる皆の鯨木先生であり、俺一人の特別であるわけにはいかないのだ。

閑話休題。

そんなわけで。この世に正義も悪もないならば、俺は自分の流儀と礼儀と、思想とエゴと、善意と悪意で、本能に従い、義務を行う。映画のように、アニメのように、ヒーローが悪い奴らを一掃する。そんな愉快痛快豪快爽快なことが、俺は大好きだ。

だってそれは、現実ではないから。

現実ではあり得ないし、起こりうることもない。

だからせめて、俺は正義の味方を気取りたいんだ。

理想を語り、空想を実行するんだ。

「まあ、こんなことしたんだから、また千曲（ちくま）に怒られちまうなぁ。ま、それも承知の上なんだけどさ」

俺がこういう人間の屑みたいな連中が嫌いなのは、あいつも分かってくれているのだろうが。

それでも、説教は確実だろうなあ。

まあ、そんなのは後々（のちのち）ゆっくりと受けるか。

俺は改めてトンヌラどんの胸倉を締め上げ、

「苛め格好悪い、とかよく言うけどさ。イジメが格好悪いんじゃなくて、格好悪い苛めをするお前らが悪いんだよ。だったら俺がカッコイイ虐めってやつを教えてやんよ、ってこと」

そう言って俺は本日最高の一撃を食らわせてやる為に、これでも

かと拳を引き絞り、腰を捻り引く。孤児院暮らしという理由だけで苛め――否、迫害を受け、否応にも鍛えた、鍛えざるを得なかった、この俺の暴力をお前に叩き込んでやる為に。

さあ、宴の終演だ。

俺は、俺の渾身の力を乗せた拳を解き放つ。入院なんかで済むと思うなよ？　オペの準備はブラックジャックによろしく。明日の朝日は拝めないと思いな。

そのまま解き放った拳はトンヌラ氏の顔面に吸い込まれ、硬いフェンスとの両挟みで彼は即効でヘブンズザウィーアーゴーとな……

……るはずだった。

「え――？」

手応えが、ない。いや、確かに俺はトンヌラちゃんの鼻頭を殴り、その軟骨部分の潰れる感触もあった。でも、どうしてだか手応えだけがない。

あ、そっか。

フェンスが外れたのか。

だからそのまま後ろに流れるようにして彼はフェンスを突き破り、今にもイカロスの如く空へと羽ばたいているわけか。なあんだ、単純にただそれだけのことじゃないか……ってあれ、でもイカロスって最後海に落ちたんじゃなかったけ？

「ちぃっ――！」

ここ屋上ですよ。下手しなくても軽く死んじゃいますもん。

そんなの絶対駄目だって。

だから俺は反射に近い速度で彼の腕を取り、引張り抜こうとする。

しかし、仮にも一般体型の男子高校生の質量を俺の腕力だけで引き戻すことなんて、到底不可能なのは百も承知。でも俺はやる。やるしかなかった。

「ぅらあああああっ！」

俺は彼の腕を思いっ切り引っこ抜いて、どうにか彼を屋上の縁まで戻すことが出来た。

それとは逆に、自分を代わりに空中へと投げ出すことによって。
あれ……。
作用反作用ってやつかな？
うん。でも、まあいいや。
トンヌラが落ちずに済んで。
別に、人殺しになりたくなくてやったわけじゃないけど。
何でかな。
自己犠牲の精神なんて、柄じゃないのに。
ああ、このまま落ちたら確実に死ぬな、俺。
予定落下ポイントがうわーいなことにアスファルトだし、障害物になりうる木なんかも皆無だ。
はい死にましたー俺死にましたーおめでとうございますー送迎はパトラッシュの荷車でお願いしますー。
……何か、最後まで、いや最期まで能天気というか、お気楽というか。救われねえな奴だな俺は。千曲が俺のことをよくバカって言うのも理解できるよ。孤児院の弟妹（ていまい）達は元気に過ごせるだろうか。
それだけが少し気掛かりだ。俺を捨てた顔も知らぬ両親にもささやかなる祈りを。どうか野たれ死ね。千曲は、俺の死を悼んでくれるだろうか。いや、きっと怒るな。今のうちに謝っておくよ、ごめん。
ま、聞こえちゃいないだろうけどね。

ではでは、さあさあ。

人生終了のお時間です。

生涯最後の一刹那（ひとせつな）です。

忘れ物はございませんか。

悔いは残しましたか。

世界にさようならを。

全ての人に感謝を。

弟妹達には幸福を。

友人らには祝福を。

それではまたの機会に。

ごきげんよう。

第二話　ああ、走馬灯ってのはありゃ？だよ（前書き）

主人公視点以外は三人称にしてあります。
国の名前とか町の名前とかはとっさの感性で名づけています。
それと誤字脱字などがありましたらごめんなさい。

第二話　ああ、走馬灯ってのはありゃ？だよ

意識は無意識に絶ったはずなのに、俺は何故だが再び意識の暗幕を上げることになった。

開いた目に一番最初に飛び込んでくるのは、青い。

「う、み……？」

しー、あい、すぃー。

海。その通りである。

視界の一面が海。海。海。

内陸県に生まれ育った俺だが、海を見るのは初めてでもないし、毎年夏休みには静岡にある千曲の別荘に遊びに行くので別段見慣れないほどでもない。故に立地条件もいい上に海の眺めも最高という千曲の別荘で肥えたこの眼球は、多少のオーシャンビューには心動かされないのである。

しかし。

「う……わあ……」

思わず俺は感嘆した。いや、感動すらしていた。

こんなにも……こんなにもすばらしい光景は初めてだったからだ。

まさしく果てしなく突き抜ける蒼穹。それに相対するように大海は広がり、朝焼けの太陽が、沈んでいく夜を侵食していくように、世界は夜と朝に二分されていた。

幻想的と言うよりも、ある意味ファンタジーな光景だった。

だが、ただ一つ、着目すべきは。

自分が今、絶好調に降下中という点だけなのであるが。

紐無しバンジーならぬ、パラシュート無しスカイダイブ、みたいな。

もう風とかビョービョー痛いくらいに当たってくる。

気を緩めればいつでも卒倒できる自信があった。

……。

……。

……ああ、アレだ。

神様の粋な計らいってやつだ。

もしくは夢だ。

死ぬ前にイカロスだとか、明日の朝日だとか思ってたから、こんな夢みてんだな、きっと。でも、最期の最後にこんな綺麗な光景見れたんだから、やっぱり神様にも感謝しとかなきゃな。うん。

でも、もう十分です。

こんなご褒美みたいなの貰っちゃうと、せっかく決めた死ぬ覚悟が揺らいでしまう。誤魔化してきた感情の牙城が、脆く崩壊してしまう。だから、俺はもう一度目を閉じる。暗幕を下ろす。そして、前述の通り静かに卒倒した。

出来れば、次に目が覚める時には、暖かい部屋と、優しく笑う、両親に、会えると、いい、な……。

リブラル王国の主な資金源は他国との貿易にある。大陸の最南端

に位置するこの国では、主に海域を利用した交易による公益で国は十分に潤い、大規模な戦争もここ半世紀なく、常に各国、隣の大陸からの技術、品物、言葉、人種、文化が入り乱れ、半ば混沌としている体もあるが、それでも毎日人は動き、言葉は飛び交い、市場は回っていた。

そしてその交易国家リブラルで、数ある主要な貿易港の一つがある、セレンという港町の郊外。背後に鬱蒼とした森を控え、前方には遥かなる水平線を臨む、小さな丸太小屋に、少女は一人住んでいた。

少女はいつものように、とある日課の帰り道で、ペタペタと砂浜に足跡の軌跡を面白くもなく描いていた。

打ち寄せる白波の浜辺で、遠くに煩い汽笛の響きが聞こえた時、

「……？」

ふと見上げた視界の隅に、人の倒れている姿が映った、と思ったら消えた、と思ったらまた映った。それは一々波に攫われて、そして再び座礁するという何だか面白い現象が起きていたからであった。

少女は小走りにその生きているのか死んでいるのかも分からない面白人物の元へ近づいた。

ハリソン・フォードが好きだった。

ジャッキー・チェンに憧れた。

ジョージ・クルーニーを尊敬した。
クリストン・イーストウッドは最高にイカした男だった。
そんな名だたる名俳優達を、俺はいつもテレビの画面から応援していた。どんな問題も事件もミッションも、いつだって彼らはピンチに立たされても、諦めず最後には難なく解決して、ヒロインとの熱烈なキスを噛まして、エンドロールに突入だ。俺はそんな彼らになりたかった。正義じゃなくても、英雄じゃなくてもいいから、最後には必ず勝つような、そんな人間になりたかった。誰かを守れるカッコイイ奴になりたかった。
だから。
だから俺は鍛えて鍛えて強くなって、苛めてくる奴らを片っ端からブッ飛ばして、弟妹達を泣かせる奴らは容赦なくブチ殺して、それでも向かってくる奴らは一様にして黙らせた。というか黙るまで殴った。それが、孤児院の風評を貶めていることに気づくのに、幼かった自分は、そんなことにも気づかないでいた。中高生相手でも、病院送りにさせるなんて普通じゃない。そんな普通じゃないガキがいるその孤児院も普通じゃない、と。
でも俺は、ただ皆を守りたかった——なんてのは嘘。
単に俺は、糞みたいな自分のプライドを守りたかっただけ。
自分のコンプレックスを、劣等感を、なけなしの暴力で当り散らしただけ。
もしも、千曲と、千曲の親父さんがいなかったら、俺の居場所も、他の皆の居場所も無くなっていただろう。
はて、そんな昔のことをどうして今頃になって思い出しているのだろう。さてはこれが噂に聞く走馬灯？　でもそれって死ぬ前じゃなかったけ。ってことはまだ死んでないのかよ俺。いい加減死ねよ俺。次の人生では卍解するってきめたんだ。間違えた。挽回するって決めたんだ。だからさっさと死ね……ぇえ？
「おはよう」
「……お、おはようございます」

さてここで問題、顔にある二匹のブタって？　正解、まぶたー。で、その目蓋を開けてみれば目の前には何が？　正解、小さな女の子がいた。

俺は木製の固いベットの上で上半身を起こし、傍（かたわ）らに立つ女の子と向き合った。何度か瞬きしてから周囲をぐるりと見回す。

ふむ。ここはどこだ。あの世か？　にしては随分と風情あるログハウス風味の家だな。広さはおおよそ二十畳ほど。仕切りのない一部屋。丸太を積み上げたと思われる壁。天井は意外に高く、何やら蛙やらイモリやらの干物が吊るされている。右隅には、薪がくべられた竈（かまど）と石造りの台所。中心には長方形のテーブルと椅子が1セット。テーブルの上には広辞苑並みに分厚い本が積み重なっていて、その内の一冊は広げられていた。本棚が左側の壁を占領しており、一寸の隙間もなく大小様々な書物が収まっていた。あと小さな窓が等間隔で設置され、日の光が常に部屋中へと満ちる構造となっていた。やべえ、俺こういうのスゲー好きなんですけど。ちょっと興奮する。じゃなくて、ここはどこかっつー話。それはまあ、目の前の女の子に聞くとして。

「ね、ねえ君、ここ」

「ねえ、あなたいったいどこの人？　どこから来たの？　何しに来たの？　というか何で打ち上げれてたの？　船が大破したとか？　だったら交易船に乗って来たらのかしら？　でもそれなら船の残骸が周りにあってもいいはずよね？　それがなかったってことは、やっぱりあなたはどこから来たのかしら？　ここいらは海流が複雑だから、向こうの大陸から流されてきたっていうのは流石に無理があるわよね？　あははは、それとも空から落ちてきたとでもいうのかしら？」

脳内キャパがオーバーヒートしました。しばらくお待ちください。

「……」

「……」

ロード中……復活しました。

「……え、何？」
「だから――」
「あとっ、君の質問のじゃなくて、えと、とりあえずここ、どこ？」
「あら、そんなことも分からなかったの？」
その少女は、さも常識を語るかのように、猿でも知っている一般知識を披露するかのような、仕方ないとも呆れたとも言わんばかりに、溜息を吐いてから、
「ここはリブラル王国西南に位置する、静寂を忘れた町、セレンよ。っといっても、ここは誰も寄りつない『背徳の森』のすぐ傍の郊外だけど。ねえ、それよりもあなた、お腹すいてない？　セレン名物のフォガムの焙り焼きがあるんだけど、どうかしら？」
どうやらここに俺の常識は無いらしかった。

第三話　現実を見ましょう

「私、イリアよ。さっきはいきなりでごめんなさい」
「俺は澪士……鯨木澪士。別に気にしてないよ」
「イサナギレイシ……変――珍しい名前ね」
「よく言われる」
「レイシって方が名前かしら？　だったら私はレイシって呼ぶわ」
「ああ、分かったイリアちゃ……」
「ちゃん、は要らない」
「分かったよ、イリア」
「ふふん。よろしくね、レイシ」
黒に近い濃紺のような長髪をしたイリアという十歳前後の女の子は、満足気に微笑んだ。
俺も笑った。外面だけ。
というか今それどころじゃない。
ここはどこだ！　俺は誰だ！　鯨木澪士だ！　んなこたぁどうでもいい。
何故、俺は生きている？
屋上から落ちて、死んだはずではなかったのか？
奇跡的に助かったとでもいうのか？
だとしてもだ。
身体を確認しても傷や骨折したような痕はないし、ここも決して病院なんかではないことは確かだ。
それとも何か？　俺は思っていたよりもずっと長く眠っていた訳か？　しかし、俺がここにいる説明がつかない。目覚めれば病院のベッドでグッモーニングなはずだが……。
まず、リブラルなんて国は聞いたこともねえし、まずここは日本

ではないのだろうか。それとも少女のいたいけな冗談か何かか？
お兄さんをからかって楽しいのか。それとも空想遊びの一環だろうか？　俺が居た孤児院でもそういう子は結構いたけど。かまって欲しくて堪らなくて、突拍子もない嘘を吐く子が。その中には火星から来たなんて言う可愛い子もいたけど……果たしていったいそうなのだろうか。

ってか、この娘絶対外人だよなあ。青い髪（黒に近いとはいえ）なんて初めて見たし、すげー日本語うまいよなー。

ってことはやっぱりここは日本のどこかなのだろうか。

ふむ。

にしても……このフォガムってやつうめー。形はでかい鳩の丸焼きっぽいけど、身は焼き魚みたいに柔らかくて香ばしい。なんて鳥だろ？

「ほらレイシ、口の周りに油が」

「え？　ああ、うん。ありがと」

イリアが甲斐甲斐しく俺の口元を布で拭ってくれる。

どっちが子供か分かりゃしない。

んーしっかりしたお姉さんタイプの娘なんだけどなあ。こういう娘が、例え遊びとはいえ、嘘なんて吐きそうにないんだけどなー……フォガムうまっ。

「それにしてもレイシってば、珍しい髪の色ね。瞳の色も」

「え、そうかな？」

アジア民族は皆こうだけど。アジア系に会うのは初めてなのかなこの娘は？

「イリアだって青い髪だなんて珍しいじゃないか」

「あら？　青い髪なんてどこにでも居ると思うけど」

え？　そうなの？　確かに俺はグローバリズムに富んだタイプじゃないけど、濃紺の髪だなんて初めて見たし。うん？　もしかして染めてんのかな？　髪を青く染めんのが流行ってんのか？　まあ、どうでもいいか。

「……ところで、俺はどうしてここにいるのかな？」
とりあえず最初の疑問。
「えっと、それはね……」
イリア解説中。
「ふむふむ。俺は近くの浜辺で座礁しており、それをイリアが偶然発見し、ここまで運び、看病してくれたと、そういう訳ですか」
「うん」
彼女の瞳をじっと見据えてみる……どうやら嘘ではないらしい。
しかし、また新たな疑問だ。浜に打ち上げれられていた？　んな馬鹿な。俺はいつ陸地から海へとルーラをしたのだろうか。そもそもルーラが使えるのだろうか。あ、でも待って。あの、夢のような、パラシュート無しスカイダイブ……あれか？　あれなのか？　それで俺はそのまま海にダイナミックエントリーして揺ら揺らと漂いながらこの辺近くの浜へと運よく打ち上げられたとでもいうのか？　着ている制服の裾を持ち上げて見る。いや。いやいやいやいや、まっさかー。
「それじゃあまるで」
どっかで見たファンタジーのようではないか。
異世界に落っこちた主人公のようではないか。
あははははははははは、傑作だ、傑作。
夢見がちなお年頃はもう卒業だよー。現実はそんなに甘くないんだよー。
俺みたいに親の顔も知らねえ奴もいれば、親の顔なんか忘れたいって奴もいた。虐待されていた奴もいたし、存在までもが消された奴もいた。俺はそういう捻くれてたり、尖っていたり、狂っていたり、壊れていたりした奴を何人も見てきたじゃないか。傷を舐め合ってきたじゃないか。信頼出来る大人なんて片手で数えられるぐらいだけだったじゃないか。現実なんてこんなものだと教えてくれたのはこの世界だったじゃないか！　ふざけんなよ。何がファンタジ

ーだ。月が二つ夜に輝いているとでも言うのか。アホらしい。俺は帰る。ここがどこだか知らんが帰る。

「え、あ、どこ行くの？」

突然立ち上がった俺に驚くイリア。

「悪いけど帰らせてもらうよ。フォガムごちそうさま。看病してくれてありがとう。近いうちにお礼でもさせてもらうよ」

そう早口に言って俺は出入り口らしき扉のドアノブを押し開け、外に出る。

「帰るってどこに？　家って近いの？」

「分からない。でも帰るんだ」

いなくなった俺を千曲も心配している――否、怒っているかもしれないから早く帰って謝らなきゃ。弟妹達に飯作ってやんなきゃ。シチュー作ってやるって約束したのだ。

「駄目だよお、もう日が沈むし、今夜は双月夜だから魔物達も興奮してるし、危険だよ」

あ？　何？　魔物？　ごめんね、もう君の空想遊びに付き合ってられる暇無いんだ。早く家に帰らなきゃいけないからさ……？

……。

そこで、違和感。

何が何だか分からないけど、違和感。脳内へと無数に流れ込んでくる疑問符の塊。何だ？　何が？　どうした？　分からない。分からないけれども、それは、きっと、答えはきっとすぐ傍に――――

「……嘘」

太陽が海に沈む間際。俺の視界に入り込んできたのは、世界を朱色に染めつつ、水平線上に仲良く二つ並ぶ夕日だった。はて、目の錯覚か。それとも人類はいつの間に人口太陽を打ち上げたのであろうか。はて、先程から海上から群れで首を出しているのは巷で話題のネッシー殿ではありませんか。はて、雲に隠れるようにして空に浮かぶあの大地はなんでしょうか？　新手のラピュタでしょうか。これも目の錯覚でしょうか。この目がいけないのでしょうか？　こ

の目が、目が！　目がっ！　目があああああああああああああああああああああ！

「ど、どうしたの！？　レイシ、地面に頭ぶつけて！？」

「いや、こうすれば夢から覚めるかなーって思って」

額から血がどばどば流れる。痛いなあ。夢じゃないのかな。全てが嘘にならないなあ。ドッキリならそろそろカメラ持ってきてもいいんですよスタッフさん？　俺は十分驚きましたから。それにしても凄いＣＧですね。日本の技術力に驚愕ですよ。はい。

なははは、オッカシイナー。俺はあの時、死んだはずなのに、何故かこうして生きていて、何故かこんな面白ビックリテーマパークに来ていて、イリアって外人の娘に会って、フォガムがまいうーで……ああああ千曲、千曲、千曲に会いたい。会っていつものように現実を教えてもらいたい。鯨木（おくじらさん）先生にも会いたい。家に帰りたい。孤児院に戻りたい。俺の居場所に還りたい！　あはは、そうさ、こんな夢は時期に覚める。そして俺は病院のベッドで千曲に「馬鹿」だの「死にぞこない」だのと罵られるんだ。ああ、いいなそれ。最高だ。マゾっ気はなんかこれっぽっちも無いけど最高に幸せだと思える。ふはははははっははは。

「ははははいつ覚めるんだこの夢は？　もっと痛くしないと駄目なのかな？　ははははは」

「あ、あのうレイシ？　これは少なくとも夢ではなくて、現実よ」

現実よ。

ゲンジツヨ。

あはん？　プリティガール。これが現実だって？　ＨＡＨＡＨＡ冗談はよせやい。現実ってのはもっと暗くて腐ってて澱んでいて歪んでいてどうしようもなくて救いようもなくて果てしなく終っているものなんだよオーケー？　これが現実だってんなら、アニメだっ

て、ネットゲームの世界だって、某ネズミの国だって現実だばかやろー。

「ねえ、レイシ？」

イリアがうずくまる俺の肩に手を掛けるが、

「触んじゃねえっ！」

俺は立ち上がって振り払う。

俺の夢の住人如きが、気安く触ってんじゃねえぞボケがっ。

いつか小説で読んだことがあるぞ。こういう夢の世界に囚われた主人公が出口を見つけて、元の現実に戻る話を。さあて、出口はどこだ。探せ探せ探せ！

俺は半ば狂乱しながら、半分自暴自棄に、勢いよく駆け出した。

第三話　現実を見ましょう（後書き）

大佐ネタです。すみません。

第四話　冗談にしては洒落たジョークだ

「なっはははははは！　出口ぃ！　出口ぃ！　出口はどこだあああああっ！」

早く俺をこのふざけた世界から出しやがれえっ！

低い木の枝が、走り狂う俺の二の腕を切り裂いたが、気にしない。履いていたうわばきの片方が途中で脱げたが、気にしない。どうやらここは森の中らしい。いつの間にか一面が鬱蒼と生い茂る木々に覆われていた。

「あはははははっ、あはは、あは、ぼはあッ……ごへあっ、ぐはあっぼは、ごはっごほっ……」

息、切れた。苦しい。息が。酸素。酸素酸素酸素が欲しい。思いっきり吸って、吐いて。また吐いて、じゃなくて吸って吐いて……良かった、死ぬかと思った……あれ？　死ぬかと？　俺は、生きてる？　息してる？　ここで？　この世界で？

「……最っ高ぅにクールな冗談だぜそりゃ」

俺は立ち止まって近くの木に寄りかかり、ずるずるとへたり込んだ。随分とデッドヒートで飛ばして来たが、足がもう疲労感で言うことを聞かない。

「ふひひひ、異世界？　ひひひ、いいねいいね最高だ。俺が勇者様ってか？　ひひひ。だったら魔王はどこだ？　ひのきのぼうで倒せってか？」

おいおいそりゃないぜアミーゴ。せめて鍋のフタぐらい持たせろってんだ。

「ふ、ふふふふっ……」
可笑しいな？　いや、逆に可笑し過ぎて涙まで出てきやがった。
こんなに笑わせくれたのは千曲のブリタニアンジョーク以来だぜ。
「……」
オーケー。
正直に言おう。
俺は今とてつもなく、

「不安なんだ」

本当、オカシクなっちまいそうな程に不安なんだ。胸を掻き毟りたい衝動に襲われて大変なんだ。岩に頭をぶつけたくて堪らないんだ。千曲の顔が見たくてどうしようもないんだ。いい歳して涙ぼろぼろ流して、情けないったらありゃしない。
いつも着飾っていた鎧を剥がされたような。
無闇に建設した城壁を全て取っ払われたような。
情緒不安定なんて生温い。
情緒不確定とさえ言い難い。
この異世界という意味不明な訳分からんちんのファンタジーが、俺は怖くて仕方がない。恐ろしくて仕方がない。助けて貰えるんなら悪魔にだって命をやろう。神にだって糞を投げつけてやろう。ローマ法王にだってシャイニングウィザードだバカやろう。アフガンにだって銃持って参戦しやる。千曲のブラジャーだって奪ったっていい。その後、例え地獄の閻魔様に暑中見舞いを持っていくことになったとしても、だ。
誰か誰か誰か俺を助けろ。誰でもいいからこの世界から俺を助け出してくれ。そして抱きしめてくれるならなお良い。
ガサガサガサガサ。

「……あぁ？」
前方の叢が突然と揺れた。気のせいではない。確かにガサガサと……。
「……オーライ」
怪しく光る紅眼。逆立ったふさふさの毛並み。唸る牙。抉る爪。
グレイハウンドも、狼でさえも、是非ともお友達にはしたくないくらいに異様な巨躯と、警戒心向き出しで、今にもこちらに飛び掛らんばかりのご様子。
「額にある三つ目の瞳がとってもキュートよ犬畜生」
俺の前に、魔物が、現れた。
さてどうする？
戦う？　勝てると思っとんのか。
呪文？　んなもん知らん。
逃げる？　逃げられるとでも？
道具？　一文無しじゃボケェ。
じゃあ、後は。

「宴を始めるしかねえだろうが」

遊んでやんよ犬っころが。
フリスビーは持ってないけど。
なけなしの暴力だったら十分過ぎる程に持ち合わせているんでねえ。
ご期待に添えると思いますよ、きっと。
俺はそっと足元に落っこちていた木の枝を先が尖るように半分に折り、石ころを何個か手に収める。
これは戦いじゃない。命を投げ捨てた殺し合いだ。
だったら存分に暴れてやんよ。

「お座りからきちんと躾けてやるぜファッキン！」
唸りが、叫びへと変わった。

第四話　冗談にしては洒落たジョークだ（後書き）

グレイハウンドって見たことあります？
恐いくらいでかくて、のしかかれたら洒落にならないんですよ。
ちなみに作者は犬派より猫派です。はい、どうでもいいですね。

第五話　不運であったが、不幸ではない（前書き）

「アイツは自他共に認める重度の映画中毒だからね、死ぬ時はどこぞのターミネーターみたく親指立てて溶鉱炉に飛び込むに違いない。アイツの病的なまでの潔さは私が保証するよ。例え自分が死のうと、相手を殺さなくちゃいけない場面であろうと、アイツは決めたらとことんやり抜く。それがアイツの――澪士の数少ない美点ではあるけど、欠点でもある。まあ、唯一の救いは、アイツにまだそんな場面が訪れていないことだけね」

「ところで、千曲さん」

「何？」

「澪士さんはいったいどこに消えたんでしょ？」

「さあ？」

第五話　不運であったが、不幸ではない

「おお、ワン公よ、死んでしまうとは情けない」
ま、殺したのは俺なんだけど？
「ひはは、うひひひ臭え。臭えなあおい」
血と肉の臭い。久しぶりだ。元気にしてたか？　中二の時に野犬の群れを相手にしたのを思い出す。だが、これは酷い。あの時よりも数倍は酷い、吐き気を催す臭いだ。だが残念。嘔吐出来るだけの内容物は殺し合いの最中に全て吐いてしまったので、もう吐けるものがありましぇん。
「……経験則で言えば、血の臭いに惹かれてまた何か変なのが集まるってくるって感じなんだけど」
なあ、どうよ？　と隣で眼球全てに太い木の枝が植林され、後ろ足が百八十度に折れ曲がり、止めの一撃とばかりに喉笛に尖った木が見事に貫かれおり、夥しい血液が大地を濡らしている、今や哀れにただの肉塊と成り果てた魔物の姿に、俺は問いかけた。
無論、返答はない。
「……釣れないねえ」
こんな大型の生物の生命（いのち）を終らせたにも関わらず、俺はある種の達成感に浸っていた。
しかし、肩の肉を食いちぎられ、胴体はあのエグイ爪で抉られ、打撲だわ裂傷だわ出血多量だわでマジ勘弁。痛みなんか脳内麻薬のせいでとっくの昔に忘れた。ただそれだけが唯一の救い。身体なんてもう動かない。口の中が血と唾液が固まって気持ち悪い。おーう。

俺もこのままだとその内死んじゃうんDEATH！　うん、ツマンネ。

「……ちょっと、ちょっとー、自分の筋肉がピンク色だなんて知りたくなかったぜー」

肉が削げ落ち、幾分スリムになった自分の左腕を見てしまった。

わーいスプラッタ。撮って撮ってー誰か写メってー。

「なーんて」

本日？　二度目の死の実感。今度こそ、死ねるのか？　俺は、死ぬのか？　あーやだやだ。死ぬなんてまっぴら御免こうむるでござる。何だよ何だよ。生かしたと思ったらまた死なすのかよ。神様もツンデレが過ぎるぜガッデム。休暇にベガス行く暇あったらもっとちゃんと仕事しろよジーザス。

「こえーなー死ぬってこえーなー。千曲ぁ……死ぬって恐いなあ」

屋上からスパッと落ちたなら、まだ諦めがついたけど。

こうジワジワと死に近づいていくというのは、どうとも言いがたく、何とも形容しづらい恐さがある。

ああ、あははは、中途半端にも程がある。

所詮、俺みたいな脇役ポジションがお似合いの死にかただぜ。まったく。

しかしせめて、映画に出てくる小悪党のようには死んでやらん。

もっと潔く、簡潔に、シュワちゃんみたいに親指立てて死んでやる。

生きて欲しい。行き続けて欲しい――――。

いや、無理っす。

ああーやべい。視界も霞んできた。脳味噌がマックシェイクになったみたいだ。ああ、自分の世界ともオサラバしてきたってーのに、

この世界にもサヨナラしろってか。

別れは、得意じゃないのに。

理不尽だとは思わない。
不条理だとも思わない。
不幸だとは思いたくないが。
不運であったとは思いたい。
後悔はあるが、幸福ではあった。

生傷が絶えない毎日だったが、絆創膏を貼ってくれる人がいた。
辛いことが多い日常だったが、その分誰かが笑ってくれるならそれでいい。
どうしようもない人生だったが、どうしようもなくとも俺自身があることに変わりはないのだ。
こんな、つまらなくも下らない、面白可笑しい物語な世界で、俺は終る。
ただ、それだけ。

ではでは、さあさあ、毎度お馴染みとなりました。

人生終了にして終焉のお時間です。

またのご利用はないでしょう。

またの機会もないでしょう。

あ、そう言えば、
「イリ、ア……に……お、礼」
したかったなあ。

第五話　不運であったが、不幸ではない（後書き）

短いですね、すいません。

第六話　充分に発達した技術は魔法と見分けがつかない（前書き）

「ヘクチィンッ！」
「ワッショイッ！」
「フィクサーッ！」
「ギガスラッシュッ！」
「皆くしゃみの仕方個性的過ぎ……皆して風邪？」
「いんや、誰か噂してるぜこりゃ」
「この感じ……多分澪士くん辺りかな」
「うん、先輩っぽいね」
「ウチもそう思うつーかー、マジ澪っちっしょこれ」
「って皆、ここ澪士君の葬式で何言ってんの！？　ほら、千曲もなんか言ってやって……」
「アイツは、死んでないよ」
「ち、千曲？」
「ただ、姿が見えないだけなんだよ。面白いことにね。だって、『宴はまだ始まってない』んだから」
「だね」
「ああ」
「はい」
「そうっしょー」

「帰って来たらぶっ殺す」

「「「「同感！」」」」

「え、えー……」

第六話　充分に発達した技術は魔法と見分けがつかない

そう言えば朝も、昼も何も食べていないことにイリアは気づいた。まあ、問題はないが、それよりも今はこの愚かな少年を看病してやることがイリアにとっての最優先事項だった。

まったく呆れたものだった。

夜になって、しかもよりにもよって双月夜の時にあの『背徳の森』の中を駆け出すなんて。

双月夜――定期的にある、その名の通り月が二つ出る夜のことだ。その晩はいつもより異常に大気中のマナが増え、魔物共がそのマナにあてらて凶暴化する。他にも、種類によっては産卵する魔物もいる。

イリアはうっかりエクトプラズマまで出てしまいそうなるくらいに深々と肺の中の空気を吐き出した。もう少し発見が遅ければ、本当に手遅れになるところだった。肉体の損傷は激しく、特に肩口がそっくりそのまま無くなっていたのは酷かった。それもそのはず、魔物に対して生身の人間が立ち向かえるなんて笑止千万もいいとこで、しかも相手は『三眼狼（プルミエルゼ）』。熟練の冒険者でも一匹相手に相当手こずる魔物だ。群れをなすのは強い雄だけで、どうやらレイシが殺したのは若い雄だったようだ。不幸中の幸いと言えばそれまでだが、それにしても本当に良かったとイリアは思った。

「……」

「……」

「……あれ」
「気づいた？」
身体の小面積をほぼ包帯で巻かれた彼は、ベッドの上でポカンとした表情でイリアを見た。
「……また、死にぞこなったのか」
「そのようね」
「……往生際が悪いな。潔さが、俺の数少ない長所なのに……ｂｙ千曲」
「あなた、外見以上に中身も変わってるのね」
「何しろ環境が環境でしたから」
殺戮嗜好の後輩に、二律背反の先輩、仙人のようなギャルやら、夢遊病者なエスパーなどなど、選り取り見取りで奇人変人超人怪人ばっかりでしたから、とレイシは思い出すというよりも懐かしむように言った。
「なあ、イリア」
「なに？」
「ありがとう」
「うん？」
「まだ、君にちゃんとお礼言ってなかったから。それにまた、助けられちゃったみたいだし。だから、改めて、ありがとう」
ほんのりとした笑顔で。
何かを吹っ切れたように。
レイシは、
「ところで……」
「ん？」
「君ってさ」
魔法使いなの？

イリアは愉快そうに笑った後、ゆっくりと頷いた。

俺は上から下までなめるようにイリアを見分した。といっても何が分かる訳でもないんだけど。

十歳前後の容姿に、質素だが洒落た浅葱色のポンチョみたいな服を着ている。ローブとでも言うのだろうか。濃紺の髪は肩まで伸ばし、思わず突きたくなる柔らかそうな白い肌をしていた。

ちょっと落ち着いて考えてみれば、引っかかることがいくつかあった。

彼女は俺を浜辺で拾ってきたと言うが、こんな幼い少女に俺みたいな成人男子の重い身体を担いで、この家まで運んでくることが可能だろうか。おまけに、俺が目覚めた時、着ていた制服（半袖ワイシャツにズボンだが）は、どうして乾いていたのだ？　脱がせた形跡はないし、乾かした痕跡もない。どうしてなのか、という疑問はあの時は浮かばなかった。全てが唐突で突然すぎて、混乱していたということもあるだろうが、それはさておき。

「君に、両親は？」

あんだけ重症を負ったにも関わらず、俺はこうして何の障害も無

く喋れるということがいい証拠だ。包帯こそしてあるが、既に痛みらしきものはなく、そして昨日一番の被害を受けた肩は、ソフトボール並みにごっそり持っていかれたのに、何故かその持っていかれた部分にも包帯が巻いてある。元の肩の原型を、形作って。
「もう随分前に死んじゃったわ」
「じゃあ、ここに一人で？」
「ええ」
「どうして」
「魔術の修行の為、かしら」
ここが本当にファンタジーの世界なら、魔法というものが実際にあったなら、全て説明がつく。
「だったら何でこんな郊外に」
「私の魔術が暴発して街全部を吹き飛ばしてしまったら？」
「爽快だね」
「まったくよ」
ふふふふふ、とイリアはなおも愉快そうに口元を抑えた。
「まあ、『魔術師』なんてものは、一部魔物と同じような扱いを受けるからね、人の多い所なんてはなっから願い下げよ」
迫害。
異端を差別すること。
この世界でも、人間がやることなんて同じだということか。
「でもここのセレンって街は交易上色んな人種、種族が集まるから、そういったことは滅多にないんだけど」
それでも私はこうやって、一人暮らしてる訳。騒がしいのは嫌いなの。
と、イリアは妖しく人差し指を唇に当て、小さく微笑んだ。その幼さにはあまりに似つかわしくない仕草ではあったが、イリアだと何だか絵になる光景だなと俺は思った。別にロリコンってわけじゃないんだけど。
「……それにしても、俺の身体の傷、すごい治りようだな」

「ああ、まだ動いたりしちゃ駄目よ。特に肩の肉は《くっつけた》ばかりだからうごいたりしたら取れちゃうかも」
何を、くっつけたって……？
「あんま聞かない方がいいわ」
「……じゃあ聞かない」
「賢い選択ね」
ふふん、と歌うように鼻を鳴らすと、イリアは俺から離れ、台所に回って、何やら鍋を用意し、忙しく動き回っていた。
ふと、絵本に出てくるような皺くちゃの、鼻の尖った魔女が大鍋を掻き回す姿が目に浮かんだ。まさかとは思うが。
「何見てんのよ。あなたをこれから煮詰めるとでも思った？」
イリアは小馬鹿にしたような物言いで、違うわと首を振った。
「傷を癒すも、病を治すもまずは食よ。食べることが一番！」
なるほど、ためになるお言葉だった。
「私のスープは死人をも歩かせるわ！」
とんだTウィルスだった。
あ、そうだ。その前に、
「な、なあイリア……」
「んー？　ああ、心配しなくても、あなたをすぐにでも追い出すつもりはないわ。傷が治っても行く当てがないんだったら、当分の間はここで暮らしていけばいいわ」
「でも、騒がしいのは嫌いって言ってなかったか？」
「静か過ぎるのも退屈なの」
「さいで」
どうやら、俺の方が野暮だったらしい。つーか、イリアが江戸っ子並みに粋だぜてやんでぃ。
「そんじゃ、ご好意に甘えさせてもいますかね」
「勿論、動けるようになったらきっちり働いて貰うわよ」
「どんとこーい」
しばらくして、スープのいい匂いが部屋中に広がった。

第六話　充分に発達した技術は魔法と見分けがつかない（後書き）

何だか変な前書きありますね、別にさして気にしなくてもいいです。
複線でも何でもありませんから、多分。
元の世界サイドの視線が欲しかっただけだから、特に他意はないです。はい。

第七話　異常も過ぎれば日常

朝日が昇ってからおそらく一番日が高くなるまでの間。右手には大海原を臨み、左手には鬱然とした森を控えたイリアの家の外で、ただひたすらに薪を割っている自分がいる。

薪割りのコツは瞬間的な力の入れ具合と、手首のスナップが重要であることを、この歳になって初めて知った。そして、こっちの世界に来てから妙に身体能力が上がった気がするのは俺の勘違いだろうか。前にあの『背徳の森』とやらを全力疾走した時、思ったよりも随分長い距離を走っていたそうなのだ。おかげで探すのに手間取ったとイリアがぼやいていた。こうしてずっと薪を大量生産している今も、てんで息が切れた感じはなかった。

イリアの家に厄介になって、かれこれ一週間が経とうとしている。最初の二日間は自身の療養の為、ベッドの上を占領していたが、三日目になると嘘みたいに身体が全壊していた――間違えた。全快していた。肩の損傷もそっくりそのまま治っていた……ってどっちかって言うと、《直った》に近いかも。戻った肩の部分は皮膚の色が新しかったが、こうして外で労働に勤しんでいれば身体と同じく日焼けしてもうほとんど分かんなくなった。ちょっと前まで俺肩無かったんだぜ？　と言っても誰も分かるまい。

「いよっと」

カーン、と胴ぐらいの太さの薪が四方に弾け飛ぶ。む、力入れすぎた。

「ただいまー……ってレイシってば、今までずっと薪割してた訳？」

と、森の中からイリアが手提げ袋を持って帰ってきた。
「え、そうだけど？」
「この森を更地にでもする気？　そんなにあっても使い切れないわよ」
「あ、ごめん」
「もう……まあ、いいわ。これで半年は薪割りしなくても済みそう」
「で、今日のお土産は？」
「小麦のパンと、果物がいくつか」
「あ、この世界じゃ、小麦のパンって高価なんだろ？」
この一週間で俺がこの世界の住人じゃないとイリアには説明しておいた。にわかに信じられないとイリアは驚愕を隠せない様子だったが、しかし、前例が無い訳ではないらしかった。この世界の神話、伝説なんかにも異世界からの訪問者の姿が描かれ、伝記、目録などにもそれに似たような文章があるらしい。
それでも、俺が異世界人だということを信じて貰う証拠にはならないのだが、イリアは意外にもすんなりと信じてくれた。もし俺がイリアの立場だったら多分信じないと思う。アイタタタッな電波さんだー、サイコさんだー、と関わり合いには絶対なりたくないこと必至だ。
しかし、イリア曰く、
『あなた大分変わってるけど、嘘を吐くような人間じゃないと思うわ。私、見る目はけっこうあるのよ？』
小生はこの幼い少女の慧眼に感服極まる所存であった。この世知辛い世の中、人を信じる心がいかに大切であるか、諸君らも手首を擦り合わせ臭いを嗅ぎ、片方の足の裏を見て、よーく考えてみるといい。何とアホな姿であろうか。
まあ、その後にイリアは『異世界人だなんて神話クラスのレアな存在を魔術師として手放す訳ないじゃないの……ふふふふ』とほくそ笑んでいたが、見なかったことにしておいた。

閑話休題。

「ええ。でも今年は小麦の豊作だったからいつもより市場に出回っていたの」

俺の疑問にすっきりと答えてくれるイリア。

ここからセレンの中心市街まで、普通は徒歩で二鐘（一鐘が一時間くらいらしいが、この世界ではあまり時間という概念がないらしい）かかるが、イリアは魔術を使ってひとっ飛びなのでそう数分とかからないらしい。だからこんな郊外に暮らしていても不便はないのだろう。

「ふーん……そっかー」

そこで俺はイリアが帰ってきたら言おうと思っていたことを言ってみた。

「なあイリア、俺もそのセレンって街に行ってみたいなーなんて。ほら、もう身体には異常はないし、体力も戻った訳だし」

イリアは少し考える風な仕草をして、

「そうね、レイシにもこの世界を知って貰わなきゃ困るし」

「だろ？」

「うん、明日にでも行きましょうか。その変な服一着だけっていうのも寂しいしね」

イリアが指した変な服というのは俺が今着ている制服のこと。洗濯は毎日しているが、やはり一着だけというのは何かと不便だ。

服を新調して貰えるならこちらとしても大変助かる。それにしても、

「イリアって資金源はどっからくるんだ？」

「あら、言ってなかったかしら？　この間、あなたが倒した『三眼狼（ブルミエルゼ）』、毛皮に牙に爪、捌いて然るべき所に持っていけばお金になるのよ。この世界では色んなギルドがあるからね、便利なものよ。この森で取れる物も大概はお金になるから資金に関しては心配しなくてもいいわ」

「へー」

売れば何でも金になるっていいな、それ。つーか、あのワン公いつの間に捌きやがった。イリア、恐ろしい娘っ。

それから俺らは家へと引き返し、イリアは最近同じように俺の世界のことを聞きたがるので、紅茶と一緒に談笑に花を咲かせ、逆に俺もイリアからこの世界の常識を学んでいた。それよりも俺はファンタジーにはお約束の『魔法』についてイリアに教えを乞うていた。その内ね、とイリアは面倒臭そうにあしらっていたが、俺は諦めないぜお嬢ちゃん。

特に異常もなく。

さして平和でもなく。

怠惰に努力して。

懸命に諦観しながら。

そんな日常を送り。

慣れ、という言葉をこれ程までに実感したことはないと思った。

それは、一度完膚なきまでに崩壊した、俺の《普通》という固定観念を再度組み立てていくような、でもきっと、それは今までの自分じゃないことは確かで、恐いと思う反面、それを良しとする自分もいた。

ふざけた世界だと思う。

冗談にしか思えない日々だが。

少なくとも俺は。

「この世界を、好きになりかけてる」

「ん？　何か言った？」

「んにゃ、何も」

俺は残った紅茶を勢いよく全て飲み干した。

第七話　異常も過ぎれば日常（後書き）

第八話　未知なる道は満ちている（笑）（前書き）

「ちっ、何てこったよ。誰だこんなところに空間の歪作った奴は」
「歪と言うよりは、《穴》だね」
「そうだろうよ。しかも次元修正すら施されてない。細かい所がなってねえな。こりゃ、《開いた》つーより、《抉じ開けた》って感じだな」
「まあ、それ以前にこれは魔術師というか、もはや『魔法使い』のレベルだよ。異界の門を開くにしても、そう簡単に出来るわけじゃない」
「だな。俺は後でイギリス本部に報告しとくから、来島は山梨支部に連絡しておいてくれ」
「ラジャ。で、この穴に落ちたと思われる少年については？」
「それはまだ黙っとけ。俺ら魔術師が一般人に影響を与えたとなれば、始末書だけじゃすまん。行方不明だったら行方不明のままでいいだろう」
「ラジャー」

第八話　未知なる道は満ちている（笑）

俺は初めて外套（ローブ）というものを装着していた。フード付きで、袖の部分がやけにぶかぶかな仕様になっており、下は膝丈（ひざたけ）部分で切れていた。色は赤褐色で、触り心地は思ったよりなめらかだった。普段着慣れていないせいもあってか、少々違和感じみたものを抱いていた。

「いい？　これからあなたに魔術を掛けるわ。それでセレンまで来て頂戴」

「何の魔術だよ？」

「単なる身体強化よ。まあ、今でも十分あなたの身体能力は高そうだけど、これから掛ける魔術は超人的なそれを一時的にあなたの身体に施すの。それで走ってセレンまで来て貰う」

「それで、イリアは？」

「私は先に行って待ってるわ」

「走って？」

「空間を渡って」

「あ、ずりーなあ、ワープかよ。俺にも掛けてくれよ」

「そ、ワープ。でもレイシにこれを掛けたら、レイシの身体の方が負荷に耐えられないわ。転送後に身体の外面と内面が裏返っていたら、いくら私でも助けられないわよ」

「うぅ……かなりエグイなそれ。じゃー、分かったよ。走っていくって」

「そう時間はかからないわよ。レイシの世界の時間の単位で言うと、そうね……十五分ぐらい？」

「はやっ」

歩いて二時間の距離をたった十五分ですか。マラソン選手も練習

を投げ出したくなる勢いだ。
「ってなことで……はい終わりー。じゃ、待ってるからね」
「え、ちょっ」
とイリアの方を振り向くともう姿かたちは勿論、影すら残っていなかった。えーちょっと本当に走っていくのお？　にわかに信じ難しなんですけどー。ってか、イリアの奴、本当に魔術掛けてくれたのか？　そんな素振り全然見えなかったけど。
「うーん……」
でも、やっぱり改めて考えてみるとイリアって不思議だよなあ。普通、あの歳で魔術師名乗れるってすごい、んだよな？　この世界の魔術師の基準は知らないが。自分では天才だからねと高笑いしながらのたまっていたけど……。
「考えても仕方ない、か」
自分の境遇もあってか、詮索はあまり好きではない。他人の過去を根掘り葉掘りに探るのは生理的に嫌なのだ。だから、まあ、いいや。
「うしっ」
事前にイリアから教えられたとおりに、森の小道へと入った。しばらく進んでいくと視界が晴れ、森を抜けた。抜けた先には一面の草原の丘が広がっており、時折流れていく風が、草原全体を優しく撫でていた。その広大な緑の丘には、白線を引いたような踏み固めた一本道が延々と伸びていて、この道をまっすぐ進んでいけば、セレンの街に辿り着くのだという。俺は、むーんと、一回だけ伸びと深呼吸をしてから、クラウチングスタートの体勢をとった。
それでは位置について、よーい……
「どんっ！」

果てしなく広がる草原に一つの踏み均されただけの一本道。その果てには堅牢なる石造りの外壁があり、その向こう側には朝日に目覚めだしたセレンの街が遍在し、さらにその先は遥かなる水平線に、いくつか交易船であろう帆が見えた。

そして、セレンの街の出入り口である通行検問所近くにて。

俺は親愛にして敬愛なる命の恩人であり、生活の保証人でもあるイリアとの再会を果たしていた。

「あら、意外と遅かったわね」

「……」

「どうしたの？　土みたいな顔色して、というか土埃だらけね」

「……」

「……」

「……なあ、イリア」

「何かしら……くっ」

「あ、てめー何笑い堪えてんだよ！　分かってたろ！　絶対知ってあの魔術俺に掛けたろ！」

「な、慣れれば大丈夫よ。多分……くふっ」

「多分じゃねーよ！　吹いてんじゃねーよ！　時速何キロだよ！　ブレーキどこだよ！　藤原さん呼べってか！　止まれ止まれ止まれ、って止まらねーしっ！　時かけですかこのやろー！　何だありゃ！　転ばないと止まれないって無茶振り過ぎるだろ！」

！　を何個使ったと思ってんだコン畜生っ！　ここまで累計十一個也。

俺はよーいのドンで駆け出したはいいもの、速い。そして止まらないという。まるで何かの冗談のように足は初速からヴィスタも驚くトップスピードで、まさしく暴走しだし、道すがら誰にも会わなかったことが何よりの僥倖だと思うが、もしかしてイリアはそのことまでを計算して早朝から出発したのではないかと俺は確信しつつ

あった。でも、あんだけの距離を恐ろしいスピードで暴走したのに、不思議と疲労感はゼロだった。これが魔術か。

「あなたの言ってることの半分以上は意味分からないけど、大変だったことは理解出来るわ……くくくふっ」

「だーかーらー吹いてんじゃねえよ」

「くは、あはははははは」

「あーついに開き直って笑い出しやがった！　むかつくっ」

もうお兄さんは怒ったぞ。お兄さんにも堪忍袋が爆発することもあるんですよこら。容赦はしませんよ。この神にでも動物園のゴリラの如く糞を投げつける俺を舐めんなよ。妹弟達が聞いただけで震え上がる、この俺の暗黒秘技を食らうがいい！

「くははは、はは、はって――い、痛たたたたたわ、悪かった！　悪かったわよ。ご、ごめ、ごめんなさい。狙ってました。狙って忠告をしなかったですぅ！」

俺はイリアの側頭部をツインバインドコークスクリュー（グーでこめかみの辺りをグリグリすること）から解放してやった。

「わ、悪気はなかったわよ」

「本当か？」

「悪意ならあったけど」

「どっちにしろ同じじゃねえか！」

イリアっ、恐ろしい娘っ！

「さ、気を取り直して、街に行くわよ！」

「何さりげなく流そうとしてんだよ。忘れねーぞ。俺は根に持つタイプだぞ」

「もおー謝ったじゃない。許してよ。こんないたいけな少女の悪戯（おちゃめ）ぐらい」

「悪戯（おちゃめ）レベルじゃあねえっての……」

外国のドッキリ番組のレベルだぞこれは。出演者の女優さんとか醜態晒しまくりで、後に仕事のオファーが急激に減った的な。

俺はローブと制服をパンパンと十分に叩いて、汚れを落としてか

ら、
「む、じゃあこんなこと二度としないって誓うか？」
「ええ」
「それは、何をもって誓いとする？」
「この私の可憐さと、愛らしさ、そして魔術師たる誇りに賭けて」
「……上出来」
俺はイリアの頭をワシワシと撫でる。ついでにつむじを攻めるのも忘れずに。
「じゃ、行くか」
「そうね」
今度こそ気を取り直し、俺はイリアと連れ立って検問所までやって来た。検問所の衛兵のおっさんとは顔見知りなのか、イリアが気軽に挨拶している。
「おや、見ない顔だね」
「ええ、私のお兄ちゃんなの。こないだ都から帰ってきたのよ」
と、何だか俺はイリアの兄設定ということになっていた。
「へえ、そりゃ。じゃあ兄さん、この街は初めてだね？」
「あ、はい」
「この街は良いとこだぜ。何より活気がある、っと兄さん、この街が何て呼ばれてるか知ってるか？」
「えと、静寂を忘れた街、でしたっけ」
「そうともさ！　だから俺らみたいな衛兵は夜になっても寝床なんかにつけねえってことよ。それだけこの街は賑やかで、騒がしい。兄さんもきっと気に入ると思うぜ」
とおっさんは少し咳払いしてから改めて俺に向き合い、にかっと気持ちよく笑ってから、
「ようこそ、セレンへ」
街はあんたを歓迎しよう、と。

俺も笑ってから、大股でセレンへと足を踏み入れた。

「ほー人が多いな」

まだ早朝にも関わらず、大通りには人の往来がけっこうあり、あとマーケット式に露店の準備や、既に売り出している店もちらほらあった。

「まあね、リブラル有数の交易街だから。人は腐る程いるわ」

「へー……あ、イリア」

「ん？」

「猫耳、猫耳」

今しがた、明らかに頭部から獣の耳らしきものが生えた茶髪の女性が俺らの脇を通り過ぎて行った。決して秋葉原で見かけるようなコスプレの類でないことはこの世界に来てから十全に理解しているつもりだったが、やはり初見だとギョッとする。

「ああ、獣人ね。獣人は比較的けっこう多い種族よ。ここは色んな人種も集まるけど、他の種族とかも例外じゃないわ。たまに龍人族なんかもいるわね。あとは、エルフなんかも時折に見かけるかしら？　あいつらは神経質で商人向きじゃないけど、すぐれた魔術とかを保有してるからね。あとは何と言ってもドワーフね、奴らの金属に対する執着は魔術師のそれを追い越すものがあるわ。まあ、種族とかに関しては大まかに言えばこれくらいかしらね」

獣人に、龍人、エルフにドワーフ……にゃははははははわーいわーいイエス！　ファンタジー。俺ってば本当にファンタジーの世界に来てしまったんだなあと再実感。

俺は嬉しいのか？　悲しいのか？

否、戸惑っているんだ。
例えば、手が届かない程貴重な物を貰ってあたふたするような。
お金は欲しいけど、いきなり二億とか貰っても困るだけ、みたいな。
そんな感じ。
違っているかもしれないけど、そんな感じ。
「ほあー……というか暑いよ。イリアぁーこのローブいつまで着てればいいんだよお」
現在、フードで頭もすっぽり覆い隠しているので、暑苦しいことこの上ない。
「我慢して。あなたの髪の色とか瞳の色、おまけにそんな変てこな服は目立つのよ。目立つということは目をかけられるということ、つまり、柄の悪い連中なんかに絡まれたりしたら面倒臭いじゃない」
「んーまあ、納得」
決して、治安が良いわけじゃないらしい。それもそうか。人の集まるところにイザコザの一つや二つない方が可笑しいからな。にしてもローブ暑い。
「まずは服を見繕わなきゃね。これから私の知り合いの店に行くわよ」
「服屋か？　別に着られれば俺は布切れでも何でもいいんだけど」
パーソナルスキル、『貧乏性』発動。効果、着られれば何でもいい。食べれるなら何でもいい。住めるならどこだっていい。
「駄目よ。私が許さない。レイシにはもっと身なりを良くしてもらわなきゃ」
「何で？」
「それは……まあ、ごにょごにょ」
「ごにょごにょ？」
「……あ、ほら、着いたわよ。さあ、中に入って」
何だかうまくはぐらかされた気がするが、
「って、これが服屋か！？」
いつの間にか俺らは路地裏に入っていたらしく、その奥にある怪

しげな店の前で俺は至ってもっともなツッコミをしていた。
　怪しいっ。怪し過ぎて逆に怪しくないところがまた怪しい。結局は怪しいのだ。古びた外装。鬼瓦みたいなオブジェや、気味の悪いトーテムポール。槍を抱えた悪魔の石像があったと思ったら、等身大の十字架が立てかけてあったり、軒先には何かの獣の首やら足やらが吊るされていた。店主のセンスがハイテンション過ぎるのか、それともヘブン状態なのか知らないが、絶対まともじゃないことだけは理解した。
「魔術ショップとかアイテム屋とか言われたほうがまだ頷けるって」
「あら、よく分かったわね。ここはそういう所よ」
「なしてここで服を……？」
「私は魔術師よ。普通に普通の服を買うとでも？」
「……さいで」
　理由にはなってないけど、まあ、とにかく俺らはその怪しい店内に突入した。
「グリンダーいるー？」
　グリンダって、そんないかにもな名前ってことは。
「んー久々の客かと思ったら、何だイリアじゃーん」
　おそらく会計だと思われる場所で座椅子に腰掛けていた女性が、読んでいた分厚い本から視線を上げ、こちらを見据えた。
　歳は俺より少し上、柔和なタレ目で、身体つきはグラマラスに尽きた。オーイエイ。煌くようなブロンドに、これまた魔女が被るような尖がり帽子。服装は意外と露出部分が多く、目のやり場に少し困る。
　やっぱり、いかにもな魔術師だった。イリアの仲間か。
「何の用かしらー、と、そちらの人は誰かしらー」
　間延びしたおっとりとした喋り方で俺を指差さす。
「グリンダ、急で悪いけど、コレに《合う》服を見繕ってくれないかしら」
「もうー何よ何よここは服屋じゃないのにー」

「服も、置いてあるんでしょ」
「そうだけどー」
店内だから別にいいよね、と俺はいい加減にこの鬱陶しいローブを脱ぎ捨てた。そして初めてちゃんとグリンダさんと目を合わせる。
「……どうも」
何だかんだでシャイボーイな俺は、そんなぶっきらぼうな挨拶しかできなかったが、
「……まあー」
途端、グリンダさんは驚きに目を見開いた。タレ目が見開くと何だか別人に見えることを俺はぼんやりと発見した。
「黒髪に漆黒の瞳……なるほど、なるほどね。分かったわ。さっそく作業に掛かりましょう」
「え」
ちょっ、口調が、変わった？　本当に別人になったみたいで、俺の方がびっくり。としている間にグリンダさんは店の奥に引っ込んでいってしまった。
「な、何？　寸法とかいいの？」
「グリンダは一回見ただけで、その人物にぴったりと《合う》服を創ることが出来るの。私はグリンダと一緒に制作に加わるから、レイシはその間、街をブラブラしてていいわよ。出来上がったら呼びに行くから」
「そんな、俺がどこにいるか分かるの？」
「魔術師だもの」
「さいで」
「ああ、何かごたごたがあったら、『イリアちゃん超可愛い』ーって叫べば飛んでいくから」
「叫ばざるを得ない状況にならないことを祈るよ」
「可愛げがないわね」
「求めてすらいねえよ」
それにお前だけには言われたくない。

と二、三言葉を交わした後に、俺は店を出た。忠告通りにローブのフードを目深に被り直し、メインストリートへと出る。ふと、ちらりと振り返って見たら、何故だかあの店までの道のりが消えていた。路地裏というもの自体が、あたかもそんなものが無かったかのように消滅していた。は、ははは。これも魔術か。

「……さて、どこ行こうか」

おのぼりさんの如く俺がきょろきょろと辺りを見回していたら、俺の視界を掠めるように一つの看板が目に止まった。

『ラサニール特別記念図書館』。

映画好きでもあるが、それ以上に読書家でもある俺にとって、図書館、とは何と甘美で優雅で興味を誘起する魅惑な楽園のような響きを持つ単語なのだろう。検閲に対し図書館の戦争する人々の気持ちも分からないでもない。つーかあったら俺も入隊したい。

ということで。

「きゃっほー」

行き先は決まった。

第九話　馬鹿にはしてません、虚仮にしたんです（前書き）

「どうして澪士先輩は消えちゃったんだと思います？　鳴神（なるかみ）先輩」
「さあ」
「どうして先輩が、消えなくてはならなかったのでしょう」
「さあ」
「先輩は、帰ってきますよね？」
「さあ」
「……あなたは、いったい先輩のなんだったんですか？」
「さあ？」

第九話　馬鹿にはしてません、虚仮にしたんです

紙という記録媒体の歴史はそう古くない。植物繊維を原料とした凡庸型の紙が、一般庶民にまで広く使われるようになったのはここ二十年くらい前である。それまで紙というものは羊皮紙だけで、一部の重要な情報を記すだけか、聖典にのみ使用されていた、らしい。

だから、サラサは思う。

何てちょうど良い時代に生まれたのかしら、と。

サラサにとって書物とは、生きがいである。もっと詳しく正しく言うならば、書物という記録媒体に記された知識と情報を、際限なくこの身に吸収出来るのが、何よりの幸福だと思える。

知ることが、好きだ。

知るという行為が、彼女にとって何よりの喜びであった。単純に言えば、知識欲の塊だと彼女自身は自覚していたが、悪いことだとは思わない。

剣を携え、魔物に立ち向かい、それがいかなるものより気高く崇高だと信じて疑わない愚かな冒険者よりも。

着飾り欲張り見栄っ張りで、頭からっぽで自分本位でしか物事を考えられない下種な貴族や、その令嬢よりも。

本を読みふけり、知識を増やしていくことの方が、遥かに有意義なことと思える。

お高くとまった貴族のパーティーに出席するぐらいなら。

どこぞの世間知らずなお坊ちゃまにへと貞操を捧げるくらいなら。

こうして独り知識の海に沈んでいた方が百倍マシだ。

社交界なんて知るか。結婚なんか知るか。ラサニール家の未来？知るかそんなもの。自分より秀でたお姉様や、お兄様がどうにかしてくれるだろう。それとも何か？　あんたが妾に孕ませたあのガキにでも家を継がせたらどうだ？　それならきっと安泰だろうね。

「ふ、ふふふふ……」

サラサは独り本の山脈に埋もれながら、らしくもなく苦笑した。

さて、夜を明かして本を読んでいたから、すこぶる眠いのだが。

では寝てしまおうか。

来訪者なんてどうせ滅多に来ないんだし。

私はずっと独りなんだし。

これからも、ずっと。

サラサがそうしてまどろんで睡魔に身を委ねてから、そう早くない間に彼女は再び現実へと呼び戻されることになる。

久方ぶりの図書館の利用者が、ラサニール特別記念図書館一応は管理者のサラサの元へと、突拍子もない発言と共に。

「ねえ、魔王と勇者って知ってる？」

「ほほう……」

思ったよりかは大きいな。でも普通の市民図書館と大差はないか……否、訂正。

「なんつー成金趣味」

スタイルはギリシャの遺跡っぽい感じだけど、あちこちに成金臭のする装飾が施されていた。金ピカの支柱だとか、窓なんかにも一々芸が細かい彫り装飾があったりと、職人技を魅せられた。

「ま、問題は中身だよね」

重要なのは蔵書数。この世界では俺の言葉が通じているのは確認しているし、文字もイリアの家の中で見つけた本を読めたことで実証ずみだ。まあ、日本語じゃないのにすらすらと解読できたのは不思議でならないが、細かいことは気にしなーい。ご都合主義ばんざーいな俺にとっては瑣末なことでしかないのだ。わはははは。

「……じゃさっそく」

いかにも豪華で重厚そうな扉を開けた。開いていたということは開館しているってことだよね？　後々で不法侵入とか嫌だからね？

お兄さんは悪くないからね？

ということで入ってみました。

感想。

「ハラショー！」

本！　本！　本！

本の山。本の海。そんな定型比喩では表現しきれないほどの本が、視界を覆った。体育館みたいに内部は吹き抜けになっており、天井が高い。そこから整列するように本棚がずらー……っと並んでいた。二階部分もあるが、そこもきっと神経質みたいに本棚が列をなしているのだろう。しかし、公共のような寛げる開けたスペースが少ないというか、見渡した限りほとんど無いっぽかった。申し訳程度に本棚の合間合間に椅子があるくらい。

「利用者のことはまったく考えてない設計だなあ」

と、一人ごちてみたり。

俺はとりあえずふらふらと見回しながら進み、目的のものがないかと探すが、見当たらない。

と、そこで。

「司書さん？」

館内の奥の奥に、丸く囲うような机にポツンと人の姿があった。

とてちてとてちてと近づいてみてみると、どうやらぐっすりと船

を漕いでいるご様子。まあ、職務怠慢お疲れ様ですねと労いの一言でも掛けようかなと考えたが、そんなことより目的のものを早く見つけたいのだ。出来れば借りていきたいし。俺は司書さんを夢の国から救出することに決めた。

「ねえ、魔王と勇者って知ってる？」

司書さんはビクッ！　と可愛く反応すると、ずれた眼鏡をわたわたとかけ直した。少し吊り上ったような目と、これまた綺麗な銀髪にカチューシャを装備して前髪を上げている。

「だ、だ、だ誰よあなた！」

と少々威嚇気味の声色。

「一般の利用者ですが」

こちらは余裕をもって大人の対応。

「り、利用者？」

彼女はそんな単語は初めて聞いたとばかりにうろたえる。はて、何で彼女はこんな警戒しているんだろう、俺ってそんなに怪し……？……ああ、このローブのせいかな。ちょうどここでは人気もないみたいだし、脱いでも問題ないかな？　別にいいか。いい加減に暑苦しいのだ。

「あのねえ、ここは一般の人間が気安く来るようなところじゃ……あ……？」

ローブを取り払った俺の顔を見て、彼女は固まったように言葉を失くした。

「ん、何？」
「え、いや、その……髪が」
「髪がどうかした？」
「じゃなくて、髪も、瞳も、真っ黒って」
「ふうん。やっぱ珍しいのかな？」
「多分、虹色の次くらい珍しいかも」
「虹色の髪の人なんているの？」
「……さあ」
彼女は本気で考え込むように首を捻ったが、自分で言ったことを逆に訊かれて困っているようでもあった。
「まあいいや。この中で、勇者と魔王についての本を読みたいんだけど」
「あ、あたしにどうしろってのよ……」
「探して」
「何で、あたしがっ」
「だって司書さんでしょ」
「っ……そうだけど」
「じゃあ、一緒に探してよ」
俺は彼女の目を精一杯覗き込む。しばらく耐えていたが、彼女は根負けしたように視線を外した。
「わ、分かったわよ。探せばいいんでしょ、探せば」
「よかった」
彼女は椅子から立ち上がり、頼もしい限りにずんずんと先へ進んでった。同時に白を基調とした床まで届きそうなドレスの裾がクラゲのようにふわふわと揺れた。ウエスト部分はキュッと帯で締められていて、上半身の身体の線が強調されていた。そのせいか、同時に彼女の胸の貧相さも際立っていた。
「ねえ、さっき言ってたこと。ここって一般の人って利用しちゃいけないの？」
「……あなた、街の人間じゃないのね。別に利用しちゃいけな

いってことはないけど、ここにあるのは全て価値の高い書物ばっかりだから、破損したり、紛失したりしたら、かなりの罰金だからね、滅多に人なんてこないのよ」

「へー俺も気をつけよ」

「……軽く言うわね、あなた。たかが平民が一生働いたって手の届かないような本だって……あ、もしかしてあなた貴族？」

「だから一般人だって」

彼女はある書棚の前で立ち止まった。

「……にしても、あなたみたいな人が本を読むだなんて、珍しいわね」

彼女の発言には妙な覚えがあった。ああ、千曲に言われたことがあったんだ。『澪士みたいな不良系が読書が趣味なんて、ギャップ萌でも狙ってんの？』って。そんなにギャップが激しいのかなあ……。

「君こそ、こんな広い図書館を一人で管理してるの？　大変じゃないのか？」

「別に……利用者なんてほとんどこないから、書棚整理だけで済むし」

「ちなみに人が最後に来たのは？」

「半年……くらい前かし、ら？」

「あちゃー」

「あちゃーって何よ！」

あちゃーはあちゃーだよ、眼鏡の司書さん。そもそもこの図書館公共の場としては終ってないか？　図書館の機能を果たしていないというか。

「えと、魔王と勇者についてだっけ？」

そう俺の今日一番の目的。魔王と勇者についてだ。イリアには互いの語らいの中でこの世界には魔王と勇者という存在がいることを聞かされたので、俺はどうしてもそのことが詳しく知りたかった。だって、ねえ？　ゲームや本の中だけの存在だと思ってたのが、こ

の世界では本当のことなのだ。興味がないと言えば、流石に？になる。

「記録が見たいの？　それとも叙事詩？」

「記録の方で」

彼女は書棚から何冊か取り出すと俺に押し付けて、これで用は済んだとばかりにさっさと元いた場所まで戻っていった。

俺も戻る。

「って何でついてくんのよ！」

「だってそこが一番開けてるし、明るいじゃん。落ち着いて読めるとこが他にないんだよ」

「あたしが落ち着かないわよっ」

「別に俺のことは空気だと思っててていいし、気にしないで」

「気にするのよ！」

「君って……あー、俺の名前は澪士。鯨木澪士。司書さんの名前は？」

「サラサ……サラサ＝ラサニールよ……って何で名乗ってんのよ！」

「いや、名前知らないと何かやりにくかったし。あれ、というかラサニール？　この図書館の名前も確か、ラサニールって付いてなかったっけ？」

「今頃気づいたの？　私はね、ここの建設者兼管理者でもあるラサニール家直系の者よ。どう？　驚いた？」

「へーそうなん」

「……」

「……」

「……あなた、ラサニールって聞いて驚かないの？　ここいら一帯を直轄領地とする伯爵家のラサニール一族なのよ？」

「わー驚き桃の木ケンタッキー」

「……馬鹿にしてるでしょ……あなた……っ！」

「いえいえ」

虚仮にしているんですよ。

とは、口が裂けるチーズになっても言わなかったが。
それでも、彼女――サラサからは、傲慢チックな、上からものを言う態度だとか、他人を見下すような、いや～んなオーラがチクチクと俺の琴線に触れてきやがるんですよ。はい。

故に、少し虐めてみました。

結果はまあ、知れてるけど。

「……絶対あたしのこと、ば、ば、馬鹿にしてるんでしょ！　そ、そうよ！　本当は何もかも知って、あたしのことをからかいに来たんでしょ！　最初っからオカシイと思ったのよ！　あ、あの人の！　お父様からの差し金なんでしょうどうせ！　分かってるんだからっ！　何年もここに引きこもったままのああ、あたしがっ、家紋に泥を塗るこしか出来ないあたしが！　うう鬱陶しくて仕方ないんでしょうっ！　知ってるんだから全部！　なな、何よあなた！　とうとう愛想尽かされたあ、あ、あたしを、頼まれてここ殺しにでも気た訳！？　ええ、どうぞ！　お好きなってございましっ！　本の中で死ねるなら本望よ！　どうなのえぇ！？　何か言ってみなさいよおっ！」

「ふうん」

俺は椅子を一脚その辺から持ってきて、窓際近くの日当たりが一番丁度良い場所に陣取り、浮け取った三冊の内、『魔王討伐の軌跡』と題名されている本をまずは読み始める。

「……な、なな何よ馬鹿にしてぇっ！」

真っ赤になったサラサは俺に向かって元気良く辞書くらい大きさの本を投げた。危ねえなあ。俺は片手でそれを受け止める。で、ちょっと強めの口調で怒る。

「本に当たるな。書物は大切にしろ」

彼女は荒い息で一瞬放心したかと思うと、その場で急にうずくまり、声もなく泣き始めた。

めそめそ。

しくしく。

怒りが、悲しみが、憎しみが、含羞が、後悔が、矜持が、折り重なって掻き混ぜあって、すすり泣く彼女の声なき声が俺に否応なく伝えてくる。伝わってくる。

酷い。

どうして虐めるんだ。

どうしてかわいそうなあたしを追い詰めるんだ。

帰ってくれ。

消え失せろ。

お前が憎い。

あたしはお前が恨めしい。

あたしはお前を許さない。

あたしはお前を殺したい。

彼女の過呼吸がねちっこく俺を責めたてる。ヒックヒックと滑稽に。

でも俺はまだここにいるつもり。何せ虐めの途中だ。投げ出す訳にはいかないからね。

しばらくの間、彼女の嗚咽だけが静かな館内に虚しく残響していた。

第九話　馬鹿にはしてません、虚仮にしたんです（後書き）

えー女の子を泣かせるなんて酷い主人公ですね。最悪ですね。
だれだ！　こんな話を書いた奴は！
自分だ！

第十話　死は最愛なる隣人、生は忌むべき同居人（前書き）

「君は何の為になら死ねる？」
「生きる為にだったら死ねる」

第十話　死は最愛なる隣人、生は忌むべき同居人

死にたい。
もう殺してくれ。
みんながあたしを馬鹿にしている。
後ろ指を差して嗤っている。
名門貴族のラサニール家の令嬢が、社交界にも出ないで陰気臭く人目にも触れず図書館に引きこもってはや数年。街の人間もあたしのことを知っていてここには誰も寄りつかない。知っている。十分過ぎる程に理解している。誰もあたしに関わろうとしない。関わりたくないのだ。家族からも見放され、唯一この場所を提供されているだけで。知っている。そしてこんな黒髪黒目の変な奴にまで馬鹿にされた。そして一番言われたくなかった、言われる必要もない程に当たり前なこと『本に当たるな。書物は大切にしろ』分かっている！　そんなこと書物を誰よりも愛しているあたしが知らないはずがない。でもあたしはやってしまった。本に、八つ当たりしてしまった。最低だ。最悪だ。死にたい殺してくれ――――――――――――――――――――という彼女自身の自己嫌悪の螺旋に出口はなく、身の内に絶え間なく溢れる自殺志願も死亡志望も決して叶うはずもなく、ただそう長くもない永遠が終わる頃、慰めもせず、声をかけることもなく、ただ黙々と読書に耽るだけで、まるでこちらの方が空気みたいな存在に成り果てた程に徹底した放置を決め込んでいた彼が、不意にこちらの方を振り返り、まっすぐ射抜くような視線をぶつけてきた。

「もう、泣かないの？」

うるさい。

ん、静かだな、と思ったら、サラサの嗚咽が聞こえなくなったせいだった。俺は本から顔を上げ、サラサの方を振り返り、

「もう、泣かないの？」

と、少々笑いを含めて言ってみる。

「な、な泣いてなんかないわよ！」

まぁー何というじゃじゃ馬っぷりか。惚れ惚れするよ。うん、目元をごしごし拭っているのが可愛いね。そうですね、俺は変態です。

サラサが言っていることを察するに、被害妄想の激しさは間違いなく一級品。俺が殺し屋だって？　おいおい俺の知り合いにもヒッキーはいたが、そこまで過激じゃなかったぜ。精々『戦争だ！　第三次世界大戦が起きるんだ！　同士諸君今こそ決起せよ！　カラシニコフを構え、彼奴らを駆逐し、根絶やしにするのだあ！』と自室で狂喜乱舞していた程度だ。いったい彼は何と戦っていたのだろうか。

まあ、このくらい可愛げがあった方が、虐め甲斐もあるんだけどね。

「気が変わった」
「……え」
俺は彼女の机にまだ読み終わってない本を置き、踵を返して出口に向かう。
「じゃあね、サラサラさん」
「あ……」
彼女は何か言いかけたが、俺は無視して進み、扉を開け、外に出る。
「うーん……」
身体を反り上げて伸びをする。同じ姿勢で読書をしていたせいか筋肉が凝り固まってしょうがないのだ。

「本は借りなかったの？」

「おおう、びっくりした」
イリアが背後に立っていた。唐突に、前振りもなく。
「んーまあね、気が変わったから」
「ふーん？　そう」
イリアは興味無いとばかりに先に歩き出した。俺も後を追う。
「そう言えば、服ってできたの？　二時間もいなかった気がするんだけど」
「グリンダは仕事が早いからね。それに今回は私も協力したしね、早いのは当たり前」
「さいで」
「これから試着だから、楽しみにしてて」
ふふっ、と悪戯っぽく笑うと、イリアは俺の手を繋いできた。
「ん？」
「手を離さないでね。迷子になると困るから」
だから、どっちが年上でどっちが年下か分からなくなるじゃないか。やめてよね、そういうの。まるで俺がガキンチョみたいなキャ

ラになるじゃないか。俺はお兄さん設定でいきたいの。皆大好き澪士兄ちゃんだぞこのやろー……っと、と、とってえええー……。

「いつの間にか、俺はあの店の前に立っていたとさ」

忽然と俺の目の前にあの怪しい店が現れ、場所もさっきと同じ路地裏となっている。分からない。瞬きした瞬間に背景と立ち位置がそっくり次のコマに進んだみたいな感覚だ。

「歩くの面倒臭いからショートカットした」

「せめてさ、前振りはしてよ」

「やったじゃない。手を繋いだりして」

分かりにくいようっ。

「まぁー似合う似合うー。流石ね、私。今回もいい仕事したわー。ね、分かるー？　この黒の生地にはね、『炎獅子』の貴重な黒毛と『魔甲蟲』の血で染色した黒絹をベースに、天竜種の鬣（たてがみ）で補強してー、服飾には魔術作用を施した深紅のルビーをワンポイントにしてー、ボタンなんかも『一角獣（ユニコーン）』の角を使った特注品なのよー。そうそう！　ズボンも見てよこれー！　都の先進裁縫技術を応用して編み上げたこの品！　一回一回呪（まじな）いを込めて編んだから、破れたりも、傷つくこともないまさに完璧な仕上がりー！　おまけに洗濯しなくても一切汚れることのない自動洗浄機能まで付いたまさに至極の一品なんだよー」

グリンダさん後半はジャパネットの人みたいに声が裏返ってたけど、まあ、すごいなあってことは把握した。

形だけ見て言えば、膝まで届くぴったりとしたコート（フードも付いてる。これはあらかじめイリアに注文しておいたのだ）みたいな感じで、ズボンも微妙にゆったりとした黒いスラックスみたいだ

った。着心地履き心地はなめらかで最高に最良だ。ただ、妙に凝った金の刺繍や、紅いルビーがどことなく高級感を漂わせている。ねえ？　るびー？　宝石？　ちょ、待って。こんな豪華なのはいらないよ。俺はただ普段着が欲しいだけなんだって。でもって、
「で、グリンダさん。そんなに凄いと値段の方はお高いんじゃないですか？」
「ところがー！　何と今回は初回サービス及びイリアの口添えもあって、何とびっくりー！　今なら君の身体の一部、主に眼球とか内臓とか貰えたりしたらそれでいいよー」
「わおーお買い得ですね。皆さんもこの機にどうぞご連絡ください。電話番号は後ほど……」

「ひひぃがぐえひぐゃああああああああああああアアアッああああああああああああああああああああアアああああああああアアアアああああああああああああああああぁぁああああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁっあああアアアァァアアアアアアッ！」

ぎゃああああああ！　グ、グリンダさんが何か燃え出したあっっ！　水！　早く水！　誰か放水して！
「まったく、おふざけはなしよ、グリンダ」
バシャア、と水の塊がグリンダさんの上に落ちる。消火終了。だが、今だプスプスと煙があがり、あの、独特な髪の焼けるような不快な臭いが漂っているのだが、
「もうー何よー、急に酷いわねー」
と、けろっと復活したグリンダさん。あのー髪焦げてますよー顔面焼け爛れてますよー…………ってわーすげー見る見る内に治っていくー。化粧水は何使っているんですかー？
「あなたがつまらない冗談言うからよ」
「だからって普通ツッコミに魔術なんて使うー？　しかも『欲する（ディザ）イアオブヘル

焔の蹂躙』なんてさー」
「で、どうなの？」
「とにもー、じゃあ、対価はレイシくんの髪だけでいいわよー」
「え、俺の髪？」
何で何で？　どうして？　俺の髪なんかがどうして対価なんだ？
「何でイリア？」
「レイシの髪が珍しいからじゃない？」
「それだけじゃねーだろ、絶対」
「じゃあ、後で話してあげる」
とまたはぐらかされてしまった。それでは後でしっくりじっくり話して貰おう。
で、俺はバッサリと短髪にされ、俺の黒髪はグリンダさんによって瓶詰めにされてしまった。それから俺らは少しの間グリンダさんのとこでお茶をご馳走になってから、少しの買い物をして、帰路へとついた。店を出ていく時、目を見開いたまま風景が変わる瞬間を見ようとがんばったが、やっぱり次のコマに進むような感じにしか認識出来なくて、不思議でしょうがなかった。街の検問所を通る時には、あの衛兵のおっさんと挨拶を交わし、「いい服だな兄さん。似合ってるよ」と褒められ、人気がいなくなった辺りまで歩いてから、常々溜め込んでいた疑問をイリアに掲示する。
「もしかして帰りも走り？」
もうヤダからね。あの暴走特急。走って帰るなら時間をかけて安全に歩いていくからな。
「いえ、レイシが着ている服は魔物の素材を使った特注も特注、魔術仕様の特級品よ。一般的には『礼装』とも言われていて、それだけで魔術効果があるの。だから私と一緒に転移魔術を使っても大丈夫になったの。だからもう走る必要はないのよ」
「え、マジで」
「うん」
じゃあ、でもさでもさ、グリンダさんの店に行く時のは、あれっ

て転移魔術じゃないの？　とイリアに訊いてみたら、
「あれは転移じゃなくて、結界の中にただ私達が認識されただけ。及び、私達がグリンダの店を認識したってだけの話よ」
「え、転移とどう違うの？」
「んー砕いて言うとね、元々グリンダの店っていうのは私達が見えずとも、あの街にいる限りどこにでもあるのよ。それを、私達が認識すれば、そこにグリンダの店がある訳、分かった？」
「へーなるほどぉ……」
ごめんなさい、全然分かりませんでした。分からないことは感性に任せよう。英語の授業の時も俺は全て感性、インスピレーションで乗り切った男だからな。テストは別として。
と、まあこんな感じで。
俺の初めての街訪問はこれにて終了。
だが、明日もきっと俺は街に行くと思う。
読みかけの本を読みに。
あの図書館へ。
「んじゃ、さっそく飛ぶわよ！」
「ちょい待って！　まだ心の準備がああああ」
身体が飛ぶ前に、意識の方が先に飛んだ。

第十一話　愛しさと憎しみは同義語

カツカツ、と石造りの床を鳴らして歩き、驚きに目を見開く彼女の前に仁王立ち。俺はよっ、と片手を挙げてご挨拶。
「ど、どうして」
「俺がここにいるかって？」
「っ……」
さて、どうしてでしょうねえ。まあ、別に隠すことでもないんけど。
「ここは図書館だろ？　本を読みにきた以外に理由はあるか？」
あるっちゃあるんだけどねー。
例えば、君を虐める為に来た、とか。
「か、帰ってよ！　あ、あなたのせいで、あたしがどれだけっ……」
死にたいくらいに恥を掻かされたか。
自身を殺したいくらいの羞恥に塗れたか。
神に祈る程の後悔に見舞われたか。
彼女の言葉は言わずとも分かる。俺がそうさせたんだから。
「だからって君はここの支配者ではない。あくまで管理者であり、ここの秩序が守られている限り、君の命令で俺はここを出て行く理由は無い。君自身の感情の我儘なんかで、俺が君に従う理由も無いよ、サラサラさん」
俺はしがない読書好きの、つまらない一般人で。
君は下らない臆病者で、あられもない自虐者だ。
そうだろう？
「ほ、本だったら勝手に持っていけばいいでしょっ。だから、もうここには来ないでよ！」

「それだって俺の自由だ。借りずにここで読書するのも、君が決めることじゃない。俺の勝手だ」
「うぅっ……」
ああーまた涙目。果てしなく嫌そうな顔をして、瞳をうるうる潤せている。かーわーいーいー。はい、俺は変態でございます。
「いったい……あなたは、何なのよ……」
「言っただろう。俺はただの一般人だよ、サラサラさん」

「ねえ、ラサニール家ってそんなに偉いの？」
「……」
「直轄領地ってことは、形式的にはセレンの事実上の支配者ってことだよね？」
「……」
「そのえっらーい伯爵家の令嬢のサラサラさんがどうしてこんな所に引きこもっているのか、真相はＣＭの後すぐっ！」
「……」
「彼女は心中思っていた。この胸の高鳴り。抑えられぬ心臓の鼓動。初めて彼を見た瞬間から、彼女は既に気づいていたのだ。甘酸っぱい青春の味、そう！　これが恋なのだと！」
「……」
「……サラサラさんって胸無いよね」
「うっさいわぁっ！」
はっ、と彼女は我にかえると、見事に赤面して、こちらをきっと睨む。
「さっきから何なのよもう！　それとサラサラさんって何！？」
「サラサラサニール……さらさらさ……サラサラさ？　サラサラさ

ん！」

「意味が分からない！」

「いいじゃーん、サラサラさん。実際、さらさらしてそうな綺麗な銀髪してるし」

「なっ……！　あ、あたしはサラサよ！」

「じゃあサラサ」

マグマのように赤く猛っていたサラサは、一瞬虚を突かれたように、ぐっと詰まって、目線をあっちこっちに慌しく空中に彷徨わせてから、萎れたように自分の椅子に収まった。

「もう……疲れたわ」

と、手で顔を隠すように当て、呟く。

「運動不足だな」

「あなたのせいよ」

恨めし気に俺をまたも睨むサラサは、はあ、と何かを諦めたように嘆息した。

「あたし、あなたが嫌い」

「奇遇だな、俺もサラサのことはあまり好きじゃない」

「じゃ何でここにいるのよ」

「何でだろうねえ」

俺は苦笑して誤魔化し、サラサの目線ビームを受け流しつつ、本のページを捲った。ほうほう、何々、そもそも魔王というのは強力な魔力を持ち、凶悪な魔物や魔族達を従え、あらゆる絶対の君臨者として存在する魔族の長に与えられる称号であり、その存在定義としては格諸説があり、様々な論議が重ねられている。そして十数年前にウェルテール王国の勇者によって討伐された歴代最後の魔王は、歴史上の魔王の中でも随一の魔力を誇ったと言われ……（省略）……であるからして、魔王という存在が幾度となく消滅しようと必ず同じような存在が復活するのは、世界の意思の予定調和のようだと思わざるを得ないのである――か。なるほどね、このマークスさんって人はどちらかというと魔王を擁護するような意見な訳ね。

絶対悪ではなく、必要悪。
なるほどねー。
他の本を見ても、表紙からして魔王が悪者みたいなのばっかだし。例えば『悪の魔王を倒した正義の勇者』とか、まんまやん。『勇者は見た！　魔王の全て』って、どこのサスペンスやねん。つー感じ。俺は出来るだけ中立かつ忠実な、偏ってない思想の本が見たいんだよね。だから、このマークスさんの本が比較的一番良い。
「サラサはこの本読んだことある？」
と半円卓の机に座って何やら作業中のサラサに声をかけた。
「……」
オーサイレント。
「そこは無視すんなよ。単なる問いかけなんだから」
「……ここにある本は、全部読んだから」
「……うそ」
「本当だって」
「ちなみに蔵書数は？」
「えと、四万……五千くらい、かなあ」
わーお。ちょっとしたインデックスさんじゃないですか。幻想も糞もあったもんじゃねえ。
「すごいね。驚いた。お見逸れした。たいしたもんだ。俺の中で君の評価が上がり、読書趣味の女の子から、活字中毒の病人へと認識が改まりました」
「それって、絶対褒めてないよね？」
「褒めると貶すっていうのは対義語ではなく、同義語なんだよ。知ってた？」
憎悪と愛情が同じ感情であるように。
相手を気にかけている時点でそれはベクトルの違いであり、本質の違いではない。
「綺麗」だとか「不細工」だとか、「秀才」であるとか「馬鹿」であるとか、相手に対して評価を下している時点で、それは同じこ

と。評価の基準と高低さの違いだけであって、その根本の違いではない。

そう俺は彼女に語った。

「な、何者なの本当にあなたは……思想家か何かなの？　にしてもあなたのその考えは矛盾してる。だったら、褒めると、貶すの対義語は何なのよ？」

「褒めるの対義語は『褒めない』。貶すの対義語は『貶さない』」

「それこそ矛盾よ。馬鹿らしい」

「この世に矛盾していないことなんてないし、この世は馬鹿らしいことだらけだ」

「それじゃ答えになってないじゃない」

「答えになる必要はないよ」

俺がそう言い返すと彼女は呆れ半分怒り半分でそっぽを向いてしまった。ひひひ、頭が固い娘をからかうのは楽しいなあ。まあ、この俺の思想も、言ってしまえばポディシブシンキングのハイエンドだからなあ。今まで受けてきた数々の罵倒や悪口をプラス思考に考える為の自己防衛の一環でしかなく、そこに矛盾が有ろうと無かろうと俺にとってはどうでもいい。重要なのはどう賢く考えるかより、どう都合よく考えるかだ。これ、生き方の常識。

「じゃあ、俺はそろそろ帰るよ」

「二度と来ないでよね」

「また明日も来るよー」

「話聞いてる？」

話を聞かないことに定評がある俺は、絶望的な表情をしているサラサを尻目に、そのまま図書館を後にし、外に出る時はちゃんとフードを被る。この上からさらにローブを着て隠すなんて面倒極まりなかったので、その為にフードの付け足しを依頼したのだ。

「……」

石畳が綺麗に敷かれた道を感慨深く歩きながら、服の下に入れておいた首飾りを出して、太陽に透かすように見据えた。

淡く蒼い光を放ちシルバーの細かい綺麗な縁取りによって、ストリートで売っている安いアクセサリーにも見えたが、ところがどっこい。

「こんなので俺にでも魔術が使えちゃうんだよなあ」

正確には転送魔術だけなんだけど。

それでも魔術は魔術。

今日、この街に行きたいとイリアにねだったら、何かこの首飾りをくれた。一度行ったことのある場所なら五十ビット（一ビットが約一キロくらい）までなら一瞬で行けるそうだ。俺はこのネックレスを貰ったとき狂喜乱舞したものだが、単にイリアが面倒臭がっただけなのは確かだったと思う。行くなら勝手に行ってこいということなのだろう。補足でイリアが、やはりこの俺が着ている、このコートみたいに丈の長い、スーツもどきの黒服による影響が大きいのだとか言っていたが、俺的にそんなオーラもスタンドも出ているような気はしないんだが、まあ、原理はどうあれ結果が良ければまるごとオールオッケーよん。さんはいせーの、ご都合主義ばんざーい。

「つー訳で、この服をくれたグリンダさんには再度お礼を言わなきゃあかんなあと、俺は思ったとさ」

俺は人気の無い所まで移動し、目を瞑る。

イリアはグリンダさんの店はただ認識すればいいって言ってたけど、半信半疑だが俺は俺なりにがんばってみる。

「認識……にん、しき……にん……人……しき……識……」

あああ、糞ッ、雑念が！　落ち着けえっ。集中しろおっ。つい下らないことで、某殺人鬼のことを思い出してしまった。傑作だぜ。

さあ、もう一回集中。グリンダさんの店ーグリンダさんの店ぇーグラマーなグリンダさんの店ぇー……

「何やってるのレイシくんー？」

「おおうっ！？」

目の前にグリンダさんが現れた！
戦う？
逃げる？
道具を使……じゃなくて。
「グリンダさん、いつの間に」
「いつの間にっていうかーさっきから私の店の前でうんうん唸ってるレイシくんがいたから、声かけたんだけどー」
「……」
確かに俺は今、あの怪しいグリンダさんの店の軒先にいた。どうやら既に俺はこの店の前に気づかず立っていたらしい。それなのに俺は一人で無駄に念じていただなんて、穴があったら舗装したい！
「……ゲフンゲフン。とまあ、一日ぶりです、グリンダさん」
と俺は居住まいを正す。さーて本日一番のシリアスモードです。おふざけはここまでですよ。こんな俺でもシリアスになればやるときゃやるのです。
「あなたとは、この世界について少し話をしに来たんです」
ひいては、この俺という存在についても。
お礼については二の次ということで。

怪しい光を放つ水晶髑髏やら、蛙やら何やらの小動物のホルマリン漬けみたいなものなどが陳列する店内のとある一角に俺は案内された。商談用のスペースなのか、ローテーブルを挟んで、薄いクッションがひかれただけの木製の長椅子が対になるようにあった。
「はい、召し上がりなさいなー」

「どうもー」
グリンダさんに差し出された紅茶を俺は手に取る。俺は紅茶よりがぶ飲みコーヒー派なので、紅茶の良し悪しは分からないが、とても豊満でいい香りがした。
「さて、レイシくんは私と何を話したいのかなー？」
「俺の黒髪と黒目について。それとあなたの勘違いを解きに」
「勘違い？」
「俺はね、あなたが期待するような者じゃないってことですよ。魔術も使えない、ただの一般人です」
俺は紅茶を一口含みながら、言った。
「俺は決してあなたが思うような魔王なんかじゃないですよ」

第十二話　歴史は繰り返すのではなく、ただ巻き戻っているだけだとしたら？

「あぁ～また外れたー」
「宝くじ？　当たりもしないのに、よく飽きもせずにいつも買うわね、鳳蝶（あげは）は」
「違うよ、胡蝶姉（こちょうねえ）。宝くじは当てることじゃなくて、希望を買うことに意義があるんだから」
「それで？　希望なんか買ってどうすんのよ？」
「希望を信じられなくなる自分が恐いんだよ」
「じゃあもし、その希望が叶ったら？」

「希望が叶ってしまったら、それは希望じゃないよ。だったら私はそんなモノいらない」

第十二話　歴史は繰り返すのではなく、ただ巻き戻っているだけだとしたら？

魔法と魔術は違う。そうイリアは俺に言った。

「この世界ではどんなものにでも魔力は宿るわ。花にも虫にも大地にも、勿論人間にも他の種族にも。だからその意思さえあれば誰にでも魔術というものは使えるの。それが魔術と魔法の違い。魔術というのは時間と練習さえ積めば誰にでも使える――言わば学問の一種よ。でも、魔法っていうのは違う。時間を掛けても、練習を重ねても、例えどんな犠牲を払ったとしても、魔法というのものを行使出来る者は、限られる。この世界で魔術師は数多くいるけど、『魔法使い』とまで名乗れる存在は、数えられえる程度しかいないの」

それとね、とイリアはテーブルのコップを手に取り容赦なく床に叩きつけた。当然、ガラスのコップは木っ端微塵に砕け散った。

「例えばこうやってコップを割る。この行為を魔術で行っても同じこと。過程の違いはあれど、起こる結果は同じ。つまり、魔術というのは起こることしか起こせないの」

空を飛ぶ魔術も、一瞬で転送する魔術でも、目的地に行くという結果には代わりないから、結果が同じならその過程はいくら省いても問題はない。

炎を放つ魔術だって、相手を燃やすという点においてなら、油を浴びせて種火をつけるのと結果は同じ。つまりそういうことだろう。

ついっ、とイリアは人差し指を振ると、再起不能に砕け散ったコップはまるで巻き戻しを見るかのように、テーブルへとコップの欠片が集まり、何事もなかったかのように元の原型に戻った。

「でもね、魔術で壊したものは、魔術では直せない」

それが世界の意思。
この世の摂理（ルール）であり、秩序（オーダー）だから。
それでも、イリアはと俺に目を向け、
「……その法則を無視することの出来る唯一の方法が、魔法なのよ。魔術とは、世界が許容する範囲で世界の意思を捻じ曲げる方法。魔法とは、世界の意思をそっくりそのまま覆す方法。起こせないことを起こす、それが魔法。理解した？」
「なんとなく、ね」
俺は肩を竦め、頷く。
イリアの講義は続く。
「この世界では、火、水、雷、風、土などの元素魔術が基本になっていて、伝説では精霊達を使役する術なんてのもあるけど、これは精霊魔法といって、魔法のカテゴリーに分類するわ。精霊っていうのは世界の一部だからね、それを使役するっていうのは世界の一部を支配するのと等しい所業よ。まあ、精霊魔法なんてのはほとんど伝説上の存在だから、今でも現在しているかは謎のままなのよ。それから他にも魔法にカテゴライズされてるのは――――概念や時空、次元とか、そして……蘇生。特に、蘇生は魔法に限らず何よりの禁忌とされてるわ。例え信徒の者であっても――ああ、神職者のことを忘れてた。神職者の使うのは神術。一昔前は白魔術とも言われてたわね。『信仰』という、また魔術とも魔法とも性質の異なる特殊なベクトルを有しているらしいわ」
へー、と俺は相槌を打ちながら、脳内で情報の整理に励む。
「んまあ、魔術魔法の講義はここでお終い。さて、次は本題のレイシの黒髪黒目について話してあげる」
「はい先生」
「何かしらレイシ」
「話の流れから、俺にも魔術が使えるのでしょうか？」
「それについてはあと。話の腰を折らないで」

怒られた。ごめんなさい。
おほん、とイリアは咳払いし、話を続ける。
「んーとね……レイシ。あくまでこの世界での常識というか、基準なんだけど、黒髪黒目っていうのは、とある特別な意味を持ってるの」
イリアは少し言い難そうに口ごもって、
「特別な、意味？」
「そう、これはまぁ、昔話になっちゃうんだけど、何百年も前の、歴代もっとも最悪と言われた魔王がいたんだけどね、その魔王の辞世の句というか、死に際に『我はのちに同様同等の姿で再びこの世に降り立とう』っていう負け犬の遠吠えにもならないような迷惑極まりないものを残していってね、で、その魔王の容姿が黒髪黒目だった訳。だから、その魔王が死んでから……黒髪黒目に生まれた赤子は、全員、殺された」
俺は黙ってイリアを見る。
イリアも目を逸らさずに俺を見る。
「他にも、黒髪に黒い瞳を持った種族もいたんだけど、その頃のこの地方では理由も意味もなく、徹底的にそれらの種族は無差別に惨殺され、無常利に殺戮され続けた……しかも、各国がそれらの政策をむしろ推奨してたくらいだったからね」
イリアは淡々と語るでもなく、感情で話すでもなく、あくまで情状に、真実を明かすように。
「勿論、少数だけど生き延びた者達もいて、確か極東の方に逃れたとか何とか、でももう何百年も前の話しだしね、詳しいことは分からないわ。それで、この大陸からはもう、黒髪黒目なんて種族、人種は存在しないのよ」
「なあ、イリア。もしかして、その黒髪黒目の赤ちゃんがもし生まれたら、今でもここでは、その……殺してるのか？」
「……ええ。もはや、それはこの地方の風習と化しているわ。生まれたばかりの赤子にまずしてやるのが、母親との対面じゃなく、

瞳と毛の色の確認。それで黒髪に黒い瞳だった場合、神職者がその赤子の首を落とし、儀式が行われ、最後に火を放たれて終わり。母親はそのことを承知で、受け止めるしかないの」

「狂ってんなあ……」

生まれたばかりの赤ん坊の首を落とす？　それも神職者が？　最後にはバーベキューだって？　おいおい久々に聞いたジョークにしてはこれまた随分とクールじゃねえなあジョニー。テキサスだってそんな面白愉快なことは起きてなかったぜファーック。

まんま中世の魔女狩りを連想してしまう。集団ヒステリーってやつか。それか歴代最悪と言われたその魔王がそんなにも暴虐かつ残虐だったせいなのか。それにしても国がそれを推奨してただって？

政策？　ふざけんじゃない。何が政策だ。ロマの民の迫害のような、ユダヤ人の大量殺戮のような、黒人の奴隷制度のような、弱者を虐げ、笑って踏み潰していくような……忌々しい。胸糞悪い。吐き気もしてきやがった。人間のやることなど、所詮どこでも同じなのか。あれ、二度目だな、こう思うの。まったく。

「ああ、もう分かった。十分だ。俺の容姿は殺したい程珍しいってことがよーく分かったよ」

「もしも、神職者なんかに見つかったら、本当に殺され兼ねないわ。だから、街を歩くときはフードを深く被って、誰とも会わないようにしてね、まあ、一応これからは、知らない相手に対してはレイシの髪色と瞳は黒く見えない――というか、黒だとは認識出来ないようになる魔術を掛けといてあげるし、セレンには神職者なんて滅多にいなから心配ないと思うけど」

「ほほう、まーた便利な術を」

「それから、本当に恐いのは神職者だけじゃないのよ、レイシ」

「ん、どゆこと？」

俺は首を傾げる。神職者に捕まったら異端審問（魔王審問？）されて首切りキャンプファイヤーだろ？　これ以上に恐ろしいことなんてあるのか？

「レイシみたいのを狙うのは神職者達だけじゃないわ。魔術師だって、レイシみたいなの狙ってると思うわよ」
「え、何で魔術師が？」
ってかイリアも魔術師じゃん。
「魔王の再臨を願う者もいれば、その魔王の能力（ちから）を欲しいと思う者もいる訳よ。魔王の死に際の戯言を信じる愚者も未だにいるってこと」
「そんな、だってもう何百年も前の話だろ？」
「魔術師の中にだって何百年だって生きる奴もいるし、それよりも今となってはその魔王を象徴とする邪教みたいのも一部、秘密裏に出来上がっちゃってる始末」
「うわぁ……」
「だから、黒髪黒目の子供や赤子だけを扱っている奴隷商の奴らもいるわ。売られていった者は、魔術師に散々体中を調べられた挙句に、魔王の生まれ変わりじゃないと分かるや否や処分される。そんな愚劣で意味の無い無駄な作業をし続けている狂った魔術師もいるのよ。転生なんて……蘇生の次にありえない魔法よ。例え魔王という存在であったとしても、そんなこと出来るはずがない」
奴隷商。やっぱりあるんだこの世界では……ん、あれ？
「え、じゃあ、グリンダさんはもしかして」
「ええ、まあ、彼女はそこまで熱心じゃないけど……信じてるっちゃ信じてるわね。魔王の再臨を……何故だかは知らないけど」
と、イリアは不意に俺から視線をそらし、そっぽを向いた。でも俺はそのことには気づかず、自分の髪を指でいじくっていた。
「だから、俺の髪なんか」
グリンダさん。その宝くじは絶対外れていると思います。ってか、イリア。外れと決まっている宝くじで、あの黒服を買ったのか？
ちょっ、ボッタクリじゃないか？
「いいのよ、別に。実際、彼女はレイシの身体の一部が欲しかったわけなんだから」

いいのかなあ。
「まあ、いっか」
と俺は悩む時間も短く、納得に至った。悩んだって仕方がない。単に腹が減るだけです。俺の信念の一つ。
以上、俺がイリアから受けたこの世界の魔術知識講座と、俺の容姿における危険性及び重要性確認講義でした。

……と俺は昨日のイリアの話を回想にして、目の前に同じく座るグリンダさんを見つめる。言っておくが、決して熱い類のものではない。
「やだーそんな熱い視線で見つめてー」
だからさ、注意書きしておいたでしょう。ちゃんと読んでください。
「まったく。グリンダさんも俺が魔王じゃないって最初っから分かってたでしょうに」
俺なんかが魔王の生まれかわりだなんて思えますか。そしたらアジアの人々が全員が魔王候補になってしまうのではないか。数を絞るのに大変そう。
「といってもー、私としては一応は規則だからさー。やっておかなきゃいけないのよねー。君の安全の為にもさー」
「へ？　規則？」
「んーんーこっちの話ぃー」
誤魔化すように紅茶へと口をつけるグリンダさん。俺もあえて言

及はしなかったが、いったい何なのだろう。まあ、必要以上に詮索するのも野暮というものだろう。俺もティーカップの中身を一口含んで、静かに嚥下してから、言ってみた。
「それで、どうでした？」
「んー、なにがー？」
「俺の髪を調べてみて」
何だか妊娠の結果を聞く妊婦さんの気持ちになったみたいだった。
そうなると医者役のグリンダさんは、
「んー残念ながら今回もハズレだねー」
これが実際に妊婦さんへの台詞だったなら、嘆き悲しむところなのだろうが、俺としては得てしてほっとした気持ちだった。
「まあー私としては君が魔王だったとしてもおかしくはないと思うんだけどなー」
「はははは」
グリンダさんの冗談にも俺は笑って対応する。俺が魔王？　はっ、最高だぜセニョリータ。そんな面倒臭いテンプレが俺に降りかかってくるわけないっしょ。今日から魔王ってか？　ここは眞魔国ですかこのやろー。
「まあ、これでも食べてー」
「あ、どうも」
グリンダさんから何だか固そうなクッキーらしきものを頂いた。
皿の上から一つ摘まんで口に含む。
ぱりぼぽりぱりぱりばぼり。
「……」
頂いてといて何だが。
あんまり美味しくはなかった。

第十三話　君が謝るのは誤りだ

その少女、ヴァネッサ＝マランディを初めて見た者の抱く第一印象として、おそらくは万人が共通して「無口」あるいは「寡黙」であると答えるだろう。視線の強さは射抜くが如き迫力を誇るが、その口から発せられる音はほぼ皆無である。故におおよそ彼女に特定の好意を向けるような者は家族を除き、ほとんど存在していなかった。

しかし彼女は決して無口でも寡黙でもなく、意図して喋らなかったわけではない。

ただ、喋れなかったのだ。

この世に生を受けてから、彼女の声帯は異様に小さかった。それは先天的な未発達障害とも言える。年月が過ぎても重ねても相変わらず彼女の声帯は震えることを知らなかった。

コミュニケーションとはまずは互いに声を出し、言葉を交わしての意思疎通が基本である。

その能力を欠いた彼女に友達などというものはなく、作る器用さも持ち合わせておらず、彼女がもっとも信頼を置く姉だけが唯一の話し相手だった。

喋れもしないのに話し相手などとは滑稽だ、と彼女も思わないでもなかったが、声の出ないヴァネッサの言葉を不思議と姉はよく理解してくれた。

そしてその姉からの頼みなら、彼女は二の句も告げずに喜んで従

うであろうと想像するに難くはないだろう。
ヴァネッサが姉から頼まれたのは食料の調達、所謂、単なる『おつかい』である。おつかいの先はヴァネッサも顔見知りの店だったので食材の書かれた紙を差し出して、お金を渡し、食材を受け取り、「まいあどり、ヴァネッサちゃん」と気のいい店主の声を聞き、残るはまっすぐ家に帰るだけで、事は全て終わるはずだった。
実際、帰路に着くまでは良かった。
だが、姉の為にと姉の役に立てる数少ない場面で気持ちが急いたせいか、ヴァネッサは普段使わないような路地裏を通ってまで、少しでも早く姉のもとに急ごうとした。そこに彼女には何の非難も責め立てる点はない。姉の喜ぶ顔が見たかった。頭を撫でて褒めて貰いたかった。そこに他意も悪意も何も無い、一途な気持ちだけだった。
しかし。
そこで、運がなかった。
「！」
路地裏を抜けようとした時に、いきなり目の前に壁が立ち塞がり、ヴァネッサは勢いよくぶつかってしまった。
「ああ？　んだオらっ」
その壁は人語を話す壁だった。別に塗り壁でもバッタンでもなかったが、ヴァネッサにとって見れば人語を話す壁の方がいくらかマシだったかもしれない。
図体だけは良い、明らか柄の悪そうな男が、三人も目の前に立ち塞がっていた。ヴァネッサは早くどうにかして相手に謝罪の意思を示さねばならなかったが、声を持たぬ彼女にとっては難業でしかんなく、身振り手振りで相手に伝えようとしたのが、突然のことで彼女の意識は硬直し、言い換えれば軽いパニック状態だったのではないかと思う。
ぶつかっておいて何も反応を示さないヴァネッサに少しカチンときたのか、不良は少し声を荒げてヴァネッサに迫った。その行為は

ヴァネッサのパニックをさらに拍車をかけるだけで、彼女はなす術もなく固まるだけだった。

男は言う。ぶつかったなら、謝れと。

だが、その意思を伝える為の能力(ここえ)が彼女にはない。

それでも彼女は彼女なりに頭を下げ、謝意を表したつもりだったが、男達はそれでは満足しなかったようだった。

男は言う。嬢ちゃんはお口も利けないのかなあ？

はい、利けないのです。

別の男は言う。頭下げるだけでいいと思ってんの？

自分にはこれが精一杯なのです。

また別の男が何かを言いながら、彼女のスカートの裾を摘まんできた。その顔は果てしなく歪んだニヤケ面だった。ヴァネッサは必死に抵抗する。

そして彼女は、はっと気づいた。彼らはもう既に自分の謝罪など求めていないのだと。彼らの下卑た笑い顔がそう語っている。

逃げなければ。

でも、残念ながら身体が動かない。動かせない。

恐い。

誰か、誰か、誰か。

少し先はもう明るい街道なのに、彼らが大きな壁となってこちらの状況を知らせまいとしている。

ああ、自分は、どうなるのだろう。

この男達に、どうされるのだろう。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん、恐いよ。

彼女は絶望の淵で、目に涙を貯めかけたその頃、もしかしたら空耳だったのかもしれないが、だが確かに、この耳に届いた、その声は、愉快そうな、からからと気持ち良く笑っているような、しかし決して善意や情けの欠片も含んでいないような、残虐かつ残酷じみた、まるで魔王のように、

「宴を――は、じ、め、よ、う、か？」

さーてグリンダさんの店を後にした俺は、猛烈かつ無性にお腹が減っていた。グリンダさんのクッキー程度では小腹も満たされません。俺の腹の中のウィーン少年合唱団も絶好調でその歌声を惜しみなく披露してくれている。ぐぎゅるぅー。

「腹が減っては戦は出っ来ぬぅー、腹が減るから戦はすっるなぁー」

と、俺も少々鼻歌気味に口ずさみながら石畳の道を歩く。にしてもこの街、外観だけは本当に中世ヨーロッパみたいだよなあ。世界史好きな俺としては嬉しい限りなんだけどさ。ああーデジカメで撮りてー。

俺は服の内ポケットの中を探るが、そこにデジカメなどという最先端科学技術の結晶は無く、ただイリアに貰ったこの世界での通貨が、ちゃりちゃりと金属特有の冷たさを俺に伝えてくるだけ。イリアはこれで好きに何でも買え、とか言ってたけど、このお金がどれくらいの価値があるか分からないし、もしも、これがイリアが仕掛

けた罠ということも考えられる。例えば俺が何か果物を買おうとする。それで俺がこの硬貨を店主に出したら「がははは、お客さんこれじゃ、スニッカーズもシゲキックスもうまい棒すら買えねーぜ」とか言われて思いっきし恥を掻くような展開にもなり得るかもしれない。

被害妄想が激しいのかそれとも必要以上に用心深いだけなのか、ふーむと俺は悩みながら、一応はどこかで市場でも開いてないかなと辺りを詮索していた。

そんな矢先に、俺の虐めっ子レーダーがビビビッと何かをキャッチした。

父さん、妖気ですね？

「ああん？　嬢ちゃんはお口がきけないのかなあ？」

「ぶつかったらまず謝るのが普通だろ？　頭下げるだけいいと思ってんの？　何だまっとんだゴラぁ！」

「それともお兄ちゃん達と遊びたいのかなあ？　どうなのホラっ」

隊長！　あれは伝説の三下、絵に描いたようなＨＵＲＹＯＯ！ではないでしょうか！

うむ！　鯨木隊員、確かにあれは絵に描いたような不良だな。最近はＤＱＮとも言われているらしいが、不良には変わりない。我らは是非ともあの近頃絶滅危惧種に認定されつつある者共を容赦なく駆逐せねばならんな、鯨木隊員？

イエスマイロード！

それとあの絡まれている可憐な少女を救わねばならぬ。強者を挫くだけではなく、弱者を救わねば、我らのエゴと礼儀に反するからな、分かったか？　鯨木隊員。分かったなら返事をしろぉ！

イエスユアハイネス！

それでは早速。

「宴を――は、じ、め、よ、う、か？」

俺は道の端っこにある路地裏の人気のない所で、明らかに幼いと思われる少女に絡む、図体だけは良い兄ちゃん達に近寄る。

「ほらほらどうなんだよお……ひぃうぐっぎｋおｓｄｆ＃ｘ％！！」

少女のスカートの裾をニヤニヤしながら摘まんでいた奴に、とりあえずは股間にぶら下がるモノへと爪先を埋め込んだ。どうか息子さんによろしく。

「ああ！？　んだテメエは！？」

一番体格の良い男が野太い声を五月蠅く荒げる。

「はいはい、小さな女の子に男が三人も集って絡んで情けないと思いませんか？　日本じゃむしろお前らみたいのはもはや絶滅危惧種決定なんだよ。どこのお約束ですか。俺でも初めて見たわこんなコッテコテな存在。写メっていいですかこのやろー。つーかむしろ世界遺産にでも登録されてこいってーの。分かったかこのイッツファッキンアラウンドユアオーケーィ？」

「わ、訳わかんねーこと抜かしやがって、ぶっ殺すぞ！」

「イエスイエス。かかって来いよ。宴は既に始まってんぜ？」

「おらっ！」

わっわ、いきなりバックから攻めんじゃねーよ、殺すぞハゲ。俺はもう一人の男から脇から腕を入れられ、締め上げられてしまった。

「けっ、この糞ガキがっ、よくもやってくれたじゃねーか」

股間を押さえながらフラフラと立ち上がったインポ野郎が俺を睨んで、下品な笑いと共に拳を振りかぶる。

「覚悟は出来てんだろうなあ？」

そりゃお前らの台詞だろ。

「このガキがっ」

これは俺を羽交い絞めしている奴の台詞。多分、これ以上まともな台詞は絶無だと思われるので、皆様しっかりとご拝聴を。

「へっへへ、しっかり押さえてろよ」

はいはい、しっかりかっちり押さえられてますよーだ。ま、意味無いと思うけどね。

「おらぁっ！」

「はがっ！？」
インポさんが恐らく息子の痛みに耐えながら、がんばって力一杯に放った拳は、動きを封じられた俺にではなく、俺を羽交い絞めしていた男の鼻頭にガツンと当たった。
「あ、は？」
インポさんも、殴られた男も唖然と呆然していた。俺はそんな鼻から赤いナイアガラを流す男の頭目掛けて、空中から思いっ切り足を下にして《落っこちた》。
ぐしゃりと男は俺に頭部を踏み潰されて、地面に叩きつけられ、這い蹲りながらも、天へと召された。アーメン。
「……はあ？」
とインポさん、カポーン……じゃなくてポカーン。
まあ、普通はそういうリアクションだわな。羽交い絞めしていた男が一瞬の内に消えて、上から落っこちてくるんだもの。
そして今度こそ止めを刺そうと、俺はインポさんのうなじの辺りに右足が来るように《移動》した。
「――がぁっ！？」
ガッチャ！　計画通り！　俺は勿論、新世界の神的なニヤリ顔も忘れない。
後頭部を蹴られ、意識を絶ったインポももう立ち上がることはなく、綺麗な白濁とした目をしていた。
「……このガキ、ま、魔術師！？」
そこで勘の良いもう一人の男が逃げようとするが、俺は彼より先に回りこむようにして移動する。
「はぁい」
「ひぃっ！」
彼は瞬時に踵を返すが、その振り向いた先にも、
「やあ」
俺がいる。
「うわぁぁぁっ！」

こらこら、情けない声出すんじゃねーよ。まるで俺が弱い者苛めしてるみたいじゃんか。お前らは強者なんだろ？　だったら最後まで強者役を貫けよ。

それで俺を満足させろよ。

「ほーらっ」

男の空中真上に移動してからの踵落としに、それをやってからの刹那に男の懐に潜り込める位置に移動し、地面を蹴ったタックル紛いのボディーブローからの、今度は男の背後に立ち、手刀で脊髄を打ち砕き、既に彼の意識は無いだろうが、おまけのフィニッシュを前のめりに倒れる男の前に瞬間移動し、これぞ決め手とばかりにシャイニングウィザードを食らわせた。

彼は声も無く、吹き飛ばされ、死んだように天を仰いだ。

「……まさか、本当にリアルコンボを実現出来る日が来ようとは」

ストツーでハメ技の百二十連コンボを決めたら、千曲にキレられたことはあったが。

服の下のイリアから貰ったあの首飾りを触る。

半径五十キロくらいなら、一瞬で移動することが出来るアクセサリー。正確には、転送魔術が半永続的に込められたものらしいが、しかし別にこのアイテムは遠距離だけに使用するものではない。例え近距離であったとしてもこれは十分に使えるのだ。俺がこうして相手を殴りやすい位置に瞬間移動したり、空中からの踵落（かかとお）としや回し蹴りも容易に実行出来るのだ。

「こういう使い方もありってわけだ」

グリンダさんの店を出てから、ふと思いついたアイディアだったが、なるほど、こいついは使えるな。

うしししししっ、とほくそ笑んでいると、俺は少女の存在をぽっくり忘れていたことに気がついた。

「あ、君、大丈夫？　変なこととかされてない？」

案の定、彼女はあっけにとられたまま、隅っこで立ち竦んでいた。

「怪我とかも、ない？」
　ようやく少女は我に返り、声も出さず何だか慌てた風な、わたわたとした立ち振る舞いをして、俺はああ、何だと得心がいき、少女と視線を合わせるようにしゃがみこんでから、にひぃーと笑ってみせた。
「なんだ、君、喋れないのか」

　茫然自失とはまさにこれのことかとヴァネッサは思った。何だかよく分からない動きで（というか消えたり現れたりと）、あの男達を次々に倒していった、今は前方にしゃがみこんだ黒服の魔術師だと思われる彼は、自分の欠陥をあっさりと見抜いたのだ。
　一目でかなりの上物だと思われる縫い目も無い高級そうな黒服に、意外とかなり若いと思われる顔立ち（これは後で不思議に思ったのだが、彼の瞳と髪の色だけはどうしても思い出せなかった）。それに少し、かっこいいと思った。
（一応は、助けてくれたの、かしら？）
「うん、そのつもりだけど？」
「！」
（え？　何？　今、私は何も言っていないのに……？　こ、心を読まれた？）
「んー驚いた顔だね。俺は君が言いたいことは君の瞳を見れば、なーんとなく分かるんだよ」

（な、何故？　どうして？　長年一緒に暮らしてきたお姉ちゃんならともかく、どうして今会ったばかりのこの人は、私の言葉が分かるの？）

と、ヴァネッサはまたもや混乱の渦に放り込まれた。声の無い自分の言葉を理解出来るのは姉の他に誰もいなく、父だってたまに自分の意図が伝わらない時がある。それなのに、初対面であるこの彼は、自分の声無き言葉が分かるという。ヴァネッサにとってそれはまさに晴天の霹靂、カルチャーショックにも似た衝撃的な事実だった。

彼は懐かしむような、もう二度と手に入らないものを遠くから眺めるような切ない表情をして、自分の疑問の嵐を解決するように話し始めた。

「俺には妹弟達がたくさんいたんだけどね、その中には心が壊れたせいで言葉を失くした子もけっこういたんだよ。その子達はね、言葉の代わりに色んな表現で、他人に意図を伝えようとするんだ。例えばそれは暴力であったり、自傷であったり、絵であったり、音楽であったり、その他諸々の奇怪で愉快な行為だったりね。その分、君は表情豊かで、何より瞳に意思を伝えるだけの力があるから、俺としてはかなり分かりやすいよ。故に、君の言いたいことなんて俺にとっちゃ朝飯前な訳」

と、彼はふと思い出したように、腹に手を当て、こちらに眉根を下げた困ったような顔で、

「俺さ、実はお腹空いてんだよね。どこか美味しい店があるとこ、知らないかな？」

それならば、とヴァネッサは思い切って彼の手を引いた。

第十四話　正義も自由も希望も幸福も、全てプライスレス（価値なんてない）

「目は口ほどにものを言うとはよく聞く言葉だが、果たして実際はどうなんだろうね？」

「……」

「人は基本口で意思を伝え合う生き物だ。そのために言葉と言うものが発明されたのだからね」

「……」

「まただんまりかい？　君との一人会話もそろそろ飽きてきたよ。昔一度だけ会ったイサナギ君って子は、目線だけでボクと会話が成立してたけど、あれは奇天烈な体験だったよ。幽体離脱や臨死体験よりも貴重な経験だったと思うよ。もはや概念化された言葉という偉大な発明も無駄だったのではないかと思うぐらい、イサナギ君って子はすごかったよ。ねえ、どうだい？　『白鴉（ホワイトアウト）』なんて碌でもない異名を持つ君としては？」

「碌でもない名前も存在も、俺の方じゃなくてあんたの方でしょうが、『名探偵（バッドネーム）』。それに……あんたは目でも口でも、例えその存在であったとしても、物を言っちゃあいけない」

「ふうん、何故だい？」

「あんたが語ったら、この物語（せかい）は悲劇か惨劇にしかならないんだから」

第十四話　正義も自由も希望も幸福も、全てプライスレス（価値なんてない）

彼女の名前はヴァネッサと言うらしい。名前を尋ねた際に俺の掌（てのひら）に文字を書いて教えてくれた。

どうやらヴァネッサが喋れないのは失語症――――ブローカやウェルニッケみたいのではなく、また精神的なものでもなさそうだった。ヴァネッサが自らの喉を指差していたので、おそらく声帯器官の障害か異常なのかと思われるが、それにしても彼女は驚く程雄弁だ。目は口程に物を言うとはよく聞くが、そう言えば、『ライフイズビューティフル』の中でも『沈黙こそ最大の叫びだ』とかっていう台詞もあったっけ。でも本当に彼女は叫ぶように語り、歌うように喋る。まあ、実際はヴァネッサからのアイコンタクトを読みとって、確認の意味を含めて俺が一方的に口を動かしているだけなのだが、傍から見るに独り言の多い痛いだけの人である。

しかし、ヴァネッサも頷いたり、身振り手振りの反応をしてくれるので、俺としてはすっごい救われる。

と、ここで今更ながらヴァネッサの容姿解説。

見事なまでに壮麗な朱色の髪を肩先で二つに結び、額の富士が将来美人にさんなるだろうと大いに思わせ、少し伏せ気味の目に、小さな鼻が愛くるしい。服装は気取った感じがしない程度に艶やかで、彼女の髪ととおそろいの朱いフレアスカートはヴァネッサによく似合っていた。

俺は先程の柄の悪い兄ちゃんら三人を虐めてから、余計に腹の虫が覚醒してしまい、一応助ける形となったこの少女にどこかアド

街的な良い店を知らないかと尋ねて、こうして彼女に手を引かれて導かれている訳だが、もう一方の片手で食材らしきものが詰まった買い物袋を重たそうに持っていて、俺が持とうかと提案したが、自分でやる、とどうやら十分に責任感の強いところもあるようだった。

「……、……。……？　……！　……？」

「え、俺が魔術師かって？　それに貴族？　ははは、どれもハズレだよヴァネッサ。確かに俺が使ったのは魔術だけど、俺は魔術師じゃないし、この一見高そうな服だって、知り合いに口利きしてもらって格安で譲って貰った物なだけだから、俺は至って貴族なんかじゃないし、金持ちなんかでもない」

「……？　……、……。……！　……」

「え、ああうん。俺はこの街の人間じゃないよ。ここから少し離れた郊外に住んでんの」

「……？」

「んー何でって言われてもなあ。税金盗られんの嫌なんじゃない？　あ、俺じゃなくて同居人が。うん、もう一人一緒に住んでんの。ってか俺が居候してんだけどね」

「……？　……。……、……」

「えー、あ、あははははは、ヴァネッサは面白いこと言うなあ。それじゃまるで俺がエアーマンを倒せないロックマンみたいじゃないか、冗談はよせやい」

「……！　……、……」

「ぷっはははは！　いいねいいね最高だよそのジョーク、帰ったらイリアにでも聞かせてやろう」

と俺はヴァネッサとの楽し過ぎる会話を興じつつ、綺麗な街並みを眺め、まだ見慣れていないせいか、時折すれ違う異種族の見目形を目にする度に内心ギョッとしていたり、そんなことをしている間に、目的地に着いたようだった。

ヴァネッサは、ちょっと待っててね、とアイコンタクトで伝え、目の前の店の中に入っていった。俺は言われた通りに大人しく待つ。

暇なのでその店の看板に目をやる。
『マランディの酒場』
そうでかでかと銘打たれていた。
入り口は西部劇に出てくるようなあの、パカパカ開く胴体辺りの部分にしか扉がない、アレだ。中を覗いて見ると円卓が五つに、カウンター席があり、右端っこには暖簾みたいのが垂れただけ風通しの良さそうな入り口があり、その奥から何やらガチャガチャと皿でも洗っているような水の音がする。
「……！　……」
「あら、おかえり。少し遅かったわね……ってて、何？　ちょっと、何よヴァネッサ、私まだ仕事が……」
「……！　！」
「分かった分かった、え、何？　お客さん？」
ヴァネッサが暖簾を払い除けて、何やら女性を一人引っ張って出てきた。
そこで、俺と目が合う。
互いに何度かぱちぱちと瞬きした。
「……えーと、どちらさま？」
お客様です。

「妹から事情は聞きました。危ないところを助けて頂いたようで、姉としても礼を言います。ありがとうございました」
「いや、別に、そう深く頭を下げられても」
カウンター席に腰を下ろし、ヴァネッサのお姉さんと対顔した俺は、そんな彼女の行動に戸惑う。

「あ、遅ればせながら、私、ヴァネッサの姉の、レヴェッカ＝マランンディと言います。ここ『マランンディの酒場』の看板娘をやっています」

うわあ、この人自分で自分のこと看板娘って言っちゃってるよ。まあ、間違っちゃいないんだろうけど。

サラサは俺と同じくらいだったけど、レヴェッカさんは年齢は俺より少し上なくらい。さすがは姉妹と言うべきか、彼女も見事な赤毛をしていた。ヴァネッサと比べると色合いの深みが濃く、朱と言うよりも紅と称したほうがしっくりくる、綺麗なチェリー色の長髪を腰辺りできゅっと結んでいて、全体的にふっくらした髪型だった。微妙に凛々しい眉が気の強さを強調しているが、彼女の口調からしてそれは確かなことだろう。

姉、と言うよりは、姐御と呼んでも差し障りないくらいである。

レヴェッカの姐御ぉ！

……うん、違和感ないな。

俺は密かにレヴェッカさんを姐御キャラに設定しておいた。

「どうもご丁寧に。俺の名前は鯨木澪士。澪士の方が名前」

ここ異世界でも虐めっ子やってます。

「イサナギ……レイシ、あまり、聞かない名前ね。どこの国なの？」

「礼儀と作法を重んじ、国のトップがころころ変わるような、夢と希望のオタクの聖地がある国ですよ。名をジパング、または日本」

非核三原則を掲げる、民警がとっても優秀な、平和ボケした国ですよ。

「ジパング……にっぽん……どちらも、聞いたことないわ」

「でしょうねー。ちぃぃぃっさい東の島国ですから」

ああ、思い出してきたら何かホームシックになってきやがった。

米食いてー。

味噌汁飲みちぇー。

千曲ぁ……。

「……なーんちゃって」

ぼそりと誰にも聞かれないように呟いた。病的な潔さが俺の売りなはずだろ？　今更ぐちぐち女が腐ったみたいになってんじゃねえよ。

「ねえ、レイシくん、一つ訊いていいかな？」

レヴェッカさんは俺の目をまっすぐ見ていた。

「はい、何です？」

俺も反射的に見つめ返す。

「……レイシくん、君はどうして、妹の言葉が分かるの？」

レヴェッカさんが不思議そうというよりかは、怪訝そうに俺に訊いてきた。

対する俺は黙っていた。

レヴェッカさんはそんな俺の反応に痺れを切らしたのか、滔々と話し始めた。

「ヴァネッサはうまれた時から声を持たなかったわ。お医者様が言うには、喉に異常があるとだけしか言わなかったけれど、正確なことは分からならかった。でも私は、声を持たないヴァネッサに、必死で言葉と、文字を教えたわ。それが、せめてもの私がヴァネッサにしてやれることだったから。そりゃ、今までずっと日常的に暮らしていたら、大体ヴァネッサが何を伝えたいのか、何をしたいのか、私だって完璧じゃないけど、おおよそ理解することが出来る。でもあなたは……今日初めて会ったばかりのあなたが、どうしてヴァネッサと意思疎通出来るのか、どうしても解せない」

解せぬ、か。ま、そりゃそうね。

レベッカさんにしてみれば、こんな得たいの知れない奴が、いきなり自分の可愛い妹と楽しく会話しているなんて、ちょっと面白くないよなあ。

ハンディを背負って生まれてきた妹を、自分が今まで面倒見てきたのだ、と。

それなのに、何でお前はそう簡単に、容易く、自然と、声を持たない妹と会話が出来る？　自分以上に、妹と意思を疎通させている

のだ、と。
面白くない。
レヴェッカさんは多分、そう言いたいんだ。
んまあ、これはあくまで想像であって、レヴェッカさんはそこまで思ってないのかもしれないけど。こんな感じじゃないかなあ、と俺は見当をつける。
「……そうですね、言ってしまえば、俺のは単なる『経験』ってやつですよ」
「経験……？」
「そ。人生とはどれだけ体験し、いかに経験したかで、その者の価値と価値観を決め、深さと奥行きを定めるんです。別に俺の人生の価値が奥深いって言っている訳じゃないんですけど、ただ、俺としてはヴァネッサみたいな子はさして珍しくないというだけなんです。人は足を失ったって走ることは出来るし、盲目であっても絵は描けるし、耳が聞こえなくてもピアノは弾けるんです。例え、声が無くたって人は歌えるし、叫べるんです。そうでしょう？」
「……」
「だから簡単なことです。俺はヴァネッサが、どれだけ雄弁か体験したし、いかに賢くて強い娘か経験してる。そして俺はヴァネッサみたいな子と会話するのは、初めてじゃない。いやむしろ《そっちの方》が俺にとっちゃ普通だったんですよ。そ、普通。だから、レヴェッカさんがあんまり気にすることないよ……俺が普通に異常なだけなんだから」
「……」
レヴェッカさんは詰まったように押し黙った。
いかんなぁ、ちょっと困らせちゃったか。
と、俺が自分の行いを反省していると、くいっくいっ、と不意に小さく袖が引かれた。ヴァネッサだ。
私は、そんなに強くはないし、賢くもないよ。
それにお兄ちゃんは、イジョウなんかじゃ、絶対ないよ。

くりくりとした純粋な瞳が、そう言った。
「ありがとう、ヴァネッサ。ごめんね、変な話しちゃって、お姉さんを困らせちゃったね」
「わ……私こそごめんなさい。その、つまらないこと訊いて」
レヴェッカさんが申し訳なさそうに俯く。あの凛々しい眉も八の字の形になる。ちょっと面白い。
「いいんですよ、レヴェッカさん」
俺は場を和ませるように軽く笑った。効果があったのかは知らないが、レヴェッカさんもほっとしたように微笑んで、ヴァネッサも安心したように笑顔になった。
「さあ、もう昼時だ。妹の恩人には是非とも我が店の味を堪能していってもらわなきゃね」
「……、……！」
「それじゃあ、お言葉に甘えていきましょうか」
少年合唱団の皆もそろそろお開きにして。
さあさあ、飯だ飯だ。

「ごちそうさま」
俺は至福に満ちた気持ちで合掌する。
「気になってたんだけど、レイシくん、その両手を合わせて言う言葉って、何なの？」
「これは、俺の国の風習でしてね、食べ物に対する命と、それを作ってくれた人に感謝を示す儀式なんですよ」
「へえ、変わった儀式ね。でも、悪くないわ。うちの店でそんな貴

族みたいに上品に食べてくれたのは、レイシくんが初めて」
ふふふふっ、と機嫌良さそうにレヴェッカさんは笑った。
カウンター席に並ぶ皿は全て空っぽになっていた。俺が食い終わる度にレヴェッカさんは気を良くしてどんどん料理を運んできたが、俺も俺でその全てを食べ尽くした。
現役高校生（元）の胃袋を舐めないで貰いたい。特に俺は過去に色々と障りがあったので、『食える時に食えるだけ食っとけ』という何ともいやしんぼな標語が心の信念表に書き連ねてあるので、難なく俺の胃はレヴェッカさん自慢の一品達を平らげたのであった。
「ふう……でも、まさか小麦だけじゃなく、米まであるとはね」
形からして、ジャポニカ米に近かったけど、それでも米は米だ。
「ああ、この食材は最近市場に回るようになったやつでね。確か東の交易船が持ってきたんだったかしら？　試しに買ってみて、調理方法も取り扱ってた店の人に聞いて作ってみたんだけど、どうだったかな？」
「最っっっ高ぅですよ！　懐かしすぎて涙でそうでしたもん」
「そう、気に入ってくれて嬉しい」
他にもバターで野菜と一緒に蒸し焼きした見た目はグロいだけの魚や、海鮮類を主体としたコクの深いスープと黒パン、あとは例のフォガムまで、俺の舌を唸らせるものばかりだった。
ヴァネッサも最初は俺の食いっぷりに口を開けていたが、食い終わる頃には可笑しそうに口を押さえていた。
お昼時の時間帯のはずなのに、店の中はがらんどうとしていて、俺がこの酒場の経営状況を案じてレヴェッカさんに訊いてみると、普段は日が暮れてから仕事が終わった男達が酒盛りをする為に、この店へと大勢訪れるらしい。故に真昼間から仕事もせずに酒をのむような奴はいないし、仕事がなくて酒を飲む奴も、金がないんじゃこの店には訪れない。加えてレヴェッカさんも夜中に来る仕事帰りのおっちゃん達に対応していつもは料理の仕込みをしているそうなのだが、やはり暇なのだそうだ。時折、客は来ることには来るらし

いが、暇なもんは暇なのだ、とヴァネッサさんは愚痴るようにぼやいた。夜中に集中して来るな、とも。

「じゃあ、俺がその数少ない時間帯の常連にでもなりますかね」

「あら、嬉しいこと言ってくれるじゃない」

「……！　……、……！」

ヴァネッサが興奮気味に飛び跳ねた。

それから少しの間二人と談笑してから、俺は『マランディの酒場』から去った。

去り際、カウンターに手持ちの金を全部置いたら、ヴァネッサさんが、

「ちょっと、レイシくん、お金はいらないわよ。これは妹を助けてくれたお礼にって……」

「いいんですよ、別に。それにこれだけ食っといてはいサイナラじゃ済まんでしょう。足りないかもしれないけど、有り金全てここに置いときますから」

「んもぅ……それじゃ意味がないじゃない」

「それじゃあ、また今度来るとき、新作の料理でも試食させてください。それでいいですよね？」

「……分かったわ」

そんなやり取りをして、俺はあのウェスタン風味なドアを開け、ヴァネッサが最後まで手を振っていて、俺も手を振り返して応え、建物の影まで歩いてから、そのままイリアの家まで文字通り直帰する。

早くイリアにヴァネッサの爆笑ジョークを聞かせてやるんだ。

不思議な人物だったと、レヴェッカは思った。服装から貴族か金持ちの坊ちゃんだと思っていたが、彼は自身のことをただの一般人だと言っていた。プライドだけは高い貴族がそんなこと言うはずがないし、彼が『経験』という言葉も世間知らずな金持の坊ちゃんとは絶する程に言い難い。妹を暴漢から守ってくれたことから腕は立つようだが、風格は兵士や冒険者といった戦う者のそれではない。

なら、彼は何だ？

レヴェッカはこの上なく思考を巡らせたが、答えは出てこない。

だが、悪い人間ではないと思う。

というか、彼のことはかなり気に入っていた。

気になる、とも言える。

とそこで、ヴァネッサが天井を仰ぐように口を「あ」の形に開いた。彼女がいつも何かを忘れていたということに気づいた仕草だった。ヴァネッサはレベッカの元まで近づくと、掌に文字を書き始めた。

その単語がレヴェッカの脳内で変換されていく内に、レヴェッカは目を見開いた。

お、に、い、ちゃ、ん、は、ま、じゅ、つ、が、つ、か、え、る。

お兄ちゃんは魔術が使える。

「……そういう、ことか」

なるほど、彼は魔術師だった訳か、どうりで不思議な雰囲気を放つ子だと思った、とレヴェッカは得心いったという風に頷くが、ヴァネッサはなおも掌に文字を書き続ける。

で、も、ま、じゅ、つ、し、じゃ、な、い。

「え……ヴァネッサ、それってどういう……」

レヴェッカはそこでふと、彼が置いてった小銭が目に入った。今までよく見ていなかったのだが、その小銭――否、小銭なんかではない。

「イシュオール銀貨……」

数ある銀貨の中でも特に純度の高い銀を使っているので、信頼は恐ろしいくらい高く、市場によく出回っている銀貨の数倍の価値がある代物である。

当然、この店の料理など、イシュオール銀貨一枚でもお釣りが足りないくらいである。

そして、そのイシュオール銀貨が、八枚。

例えるなら、スーパーカップを万札の束で買ったようなものである。

今、私が卒倒しても神様はきっと許してくれるだろう、とレヴェッカは足腰が抜けたように崩れ落ちた。

銀貨の種類がまだよく分からないヴァネッサは、どうしたの？と姉に手を伸ばす。

「は、はは」

彼は、いったい何者なの？

レヴェッカはそう思わざるを得なかった。

一方その頃、件のレイシは。

「なあ、イリア。俺がこの世界で言葉が通じるのって、イリアの仕業？」

「あら？　言ってなかったかしら？」

「ご都合主義の正体はお前か！」

第十四話　正義も自由も希望も幸福も、全てプライスレス（価値なんてない）

銀貨の価値とかは、狼と香辛料なんかをかじった程度に参考。

皆さんも重々承知でしょうが、プライスレスの本来の意味は、
価値がつけられない程すごい、とかって意味です。
作者の腐った訳語に騙されないでね。

第十五話　金は天下を回るが、金が無くとも世界は廻る（前書き）

「おい、イバラキくん。そこの蹴りはもっと鋭く」
「人をそんなつい最後を濁って言っちゃいそうな名前で呼ばないでください、師匠。俺の名前は鯨木（いさなぎ）です」
「すまんね、噛みました」
「いいえ、わざとです」
「かみちゃまちゃ」
「噛むってレベルじゃない！？」
「勝ちました」
「何に！？」
「蟹飽きた」
「どんな羨ましい食生活を！？」
「まあ、アレだよ、イタダキくん。君が強くなったとしても君自身が幸せになれる訳じゃないだろうに。どうしてそんなに鍛えるんだい？」
「鯨木です。別に……俺は幸せになる為に鍛えてる訳じゃあ……」
「まあ、いいや。君の劣等感なんて興味ないし」
「……」

「まあでも、ただいつだって注意を怠らないことだね。君はいつか君以上の最悪に出会うと思うけど、その時こそ、君の覚悟が試される時さ」

第十五話　金は天下を回るが、金が無くとも世界は廻る

中世ヨーロッパでは、都市が自由都市、自治都市として認められる為にはまず必要なのは利益と利潤の追求である。

独占法でも、禁止法でも何でもやってのけて、儲けて、稼いで、つまりは金だ。

金が集まるところには権力が集まる。権力が集まれば権利が生まれる。

それが自由都市、自治都市というものだ。

だからこそ人はそこに体制を敷き、戒律を築き、組織（ギルド）を設け、秩序を掲げた。

それはここ、静寂を忘れた街セレンであってもその仕組みはほぼ変わらなかった。オプションで領主のラサニール家がピラミッドの頂点で牛耳っているというだけの話だ。

そしてその栄えある豊かなセレンを目指して、貧しい農村から上京して来る人は数多い。夢を見て、希望を持って、大志を抱き、ありとあらゆる場所から人々は集まる。

だが現実は、その大半の者が夢破れ、希望は砕かれ、大志は糞と成り果てる。

そんな人々は自然とある一定の区域に追いやられ、貧民窟（スラム）が出来て、売春宿が出来て、人身売買が起こり、殺人殺傷なんて血生臭いこともまま起きるようになった。

セレンの治安が決してよろしくないのは、そのせいでもある。
かくしてそのアンダーグラウンドにて、ルイという名の少年は生まれた。
産まれて、生きた。
盗み。
奪い。
時には傷つけ。
生きる為になら死ぬような危険なことだって厭わなかった。
それが彼の――彼らの生き方であり、生き様だった。
選択肢など、元からありはしなかった。
どうしようもなくなった人々の間に生まれた、どうしようもない彼らにしてみれば、生きることと盗むことは同義であり、盗むことは生きることと同語であった。
なあ。
なあ、どうして？
どうして、こんなになっちまったんだ？
ルイは時折考えてしまう。答えなど、正解など、とっくの昔に捨て去ったはずなのに、考えても、どうしようもないことなのに。ふと考えてしまう。
「……バカだなあ」
それはそこはかとない考えをする自分に対してでもあったが、実際は遥か下の路地裏で、血溜まりを広げ倒れている知り合いに向けての呟きだった。
二階建て建物の屋根に腰を下ろし、俯瞰するその光景にルイはチッと舌打ちしながら、誰にも届くことのない独白じみた言葉を紡ぐ。
「成り上がりのキモの小せぇ商人貴族に手ぇ出すから悪いんだよ、キール。護衛の影も見逃すなんざ、この街でも、ここスラム（クソだめ）でも生きていける訳がねえんだ。だからお前はバカなんだよ、キール」
死んだって、殺されちまったって。
慈愛も。

同情も。
追悼も。
冥福も。
ここにはねえんだ、常時品切れ状態なんだよ、このスラム（クソだめ）には。
だってここは、死んだってどうでもいい奴しかいねぇんだからよ。
ルイは苦笑でも、嘲笑でも、哄笑でもなく、笑う。
笑って、笑って、笑って笑う。
面白味もなければ、愉快でもないのに、笑う。笑うことにすら笑う。
形だけの、表面だけの笑いを世界に提供する。
これは、ルイが世界に対する問いかけだった。
ほら、またどうでもいい奴が死んだぜ？　どうなんだよ神様？
世界は少しでも綺麗になったか？
世界はどうでもいい奴しか殺さない。
それが、この場所で生きたルイの唯一の解答だった。
「……そんじゃな、キール。イイ夢見ろよ。俺はお前の分まで生きて――盗んできてやっからよ」
ルイは屋根からひょいっと飛び降り、器用に壁を蹴って、ベランダの桟を足伝いに華麗とも言えるアクロバティクな動きで着地し、一度知り合いだったモノの方を振り返り、そして一歩。一歩づつ、神に愛された聖者達の街へと、今日もまた生き（盗む）る為に。

その日も俺は例によって例の如く、この『ラサニール特別記念図書館』を訪れていた。あの一人ぼっちなお嬢様を今日はどんな風にいじってやじってなじってかじってやろうかと鼻歌気味に画策しな

がら来訪してみれば、あらまびっくり先客がいた。
　いつもの定位置の席に座るサラサが、机越しに背の高い、見事な白髪を後ろに撫でつけた老年の紳士っぽい人物と話していた。
「それではお嬢様、私はこれで。何か御用がありましたら、いつでも何なりとお召しくださいませ」
「いつもありがと、じぃ」
　俺は本棚の影で佇み、その『じぃ』なる人物が通り過ぎてったのを確認してから、サラサの元へと近づいた。
「……ん、じぃ？　何か忘れ物でも……ってあなたか。また、来たのね」
　と心底うんざりした顔で、魚の死んだような目を俺に向ける。
「来ちゃった」
　俺は彼氏の家に突然押しかけてきたはた迷惑な彼女のような台詞を吐き、サラサは自殺でもするかのような勢いで顔をしかめた。まるでチャウチャウみたいで、面白い。
「……もう、今更来るなとは言わないけど」
　半ば諦観したように眼鏡のズレを治すサラサ。ついでに溜息のセルフサービスまで。
「どうしたの？　何か悩み？」
「……それを本気であなたが言っているのだとしたら、あたしは今ここであなたを殺す覚悟が決められるわ」
「でもそんな君のハートにジャスティスブレイクッ！」
「意味が分からない！」
　俺にも意味なんかさっぱりだ。
「はい、これ」
　と俺は不意打ち気味にサラサの眼前に紙袋を掲げた。
「な、な何」
「差し入れだよん。来る途中に屋台で買っちゃった。干し葡萄のクッキーだってさ。一緒に食べる？」
　サラサは急なことでドギマギしながらも、目を輝かせて、

「え、あ……その、あ、ありがと」
「誰がお前などにやると言ったぁ！」
「前言撤回も甚だしいっ！」
ひひひ、サラサとのやりとりは楽しいなあ。楽し過ぎるからこそついつい遊んでしまう。虐めてしまう。懐かしくもあれ、切なくもあれ、俺とサラサはここ最近飽きもせずそんなやりとりばかりをしていた。
俺は悪人だけど、悪魔ではないからして、勿論、差し入れのクッキーはちゃんとサラサにも分けて、二人で食べた。蛇足だが、サラサは意外と食い意地が張っている。このいやしんぼさんめ。
「さっきの人って執事さん？」
「何だ、見てたの……ええ、そうよ」
へえー。俺はある一定の趣向を持つ喫茶店以外で執事という存在を初めて実際に目撃したのか。何か感動だ。しかも、じぃって。名前がセバスチャンだったりしたら完璧だろうに。
「ちなみに名前はセバスチャン？」
せっかくだから訊いてみた。
「え？　全然違うけど」
ちっ。やはり現実は甘くないか。
「……んーでも、やっぱりお嬢様なんだ、サラサは」
「そうよ、まったく。少しは口を慎むように勤めなさい」
「分かりましたでござぇます。おぜうさま？」
「……あたしが悪かったから今すぐその口調を戻して。胃に穴が開きそうよ」
おぜうさま――もといサラサは頭を抱えるように懇願した。お願いされたんじゃあ、仕方ない。悪ふざけはここまでとする。
「で、執事さん帰っちゃったけど？」
「じぃは普段、屋敷の方に従事してるのよ。あたしの世話を焼いてる暇なんて元からないわよ。だけど時折、こうして必要最低限の身の回りの世話をしに来てくれるの」

「ふうん」
必要最低限、ね。
君が許容出来る範囲で、あの献身的そうな執事さんも容認出来る範疇での、身の回りの世話、か。
きっと君も渋々承諾したんだろうね？
だって、君に残された唯一のプライドが、それだもんね？
一人で引きこもって、立てこもることが、ねえ？
……なーんて、そんなことは、さすがに訊きはしなかったけど。
そこまで、虐めるつもりなんてないんだけど。
まあ、ともあれ。
俺はいつも通りに興味をそそる本を物色し、積み上げ、クッキー片手に読書を開始。
しばらくして。
「サラサってドラゴン見たことあるー？」
俺がクッキーをぼりぼり貪り、『世界魔物百科事典　新装版総集編』を捲りながら、サラサに問いかけてみる。
「はあ？　何言ってんの？　ドラゴンどころか魔物すら見たことないわよ」
「ああ……引きこもりだからか」
「な、何よその哀れむような目は！　あのねぇ、普通の一般人が魔物を目にしといて無事で済むはずがないでしょうが。引きこもりとか関係ないの。あたしは戦士でも魔術師でもないんだから、そんなの当たり前でしょ」
「戦士か魔術師じゃなきゃ魔物は倒せないのか？」
「そんなことはないけど……でも、好き好んで魔物と対峙しようとか、退治しようとか考えるのは、戦士とか魔術師とか後は冒険者くらいよ」
「あー、何かギルドもあるって聞いたな」
「ああ、冒険者ギルドね。他にも傭兵ギルド、セレン商業ギルド……とか、この街には色々なギルドがあるわね。ほら、少し先に『背

徳の森』ってあるじゃない？　あそこを狩場としている冒険者がけっこういるのよ」

「ほぇー」

命知らずもいたもんだ。けっこう危ない奴とかいるのに……

昨日なんかイリアに頼まれて薬草摘みに行ったら、バカでかい食虫植物みたいな魔物に襲われて食われかけたし、俺。

ちょっとしたトラウマ製造ランドだぞ、あそこは。それも奥に進めば進む程。

俺はここ最近、心的外傷がどっさり増加中でもっさり更新中である。

精神が半ば崩壊しかけてるしね……あ、それは元からか。

まあ、冒険者の皆様はそれ相応に強いんだろうけど。

まあ、それは単に俺が弱いだけなんだろうけど。

ふむ。

「また、鍛えるかなあ……」

「え？　何か言った？」

「いや、サラサの胸は小さいなあって――」

ブオォンッ、と豪快に俺の顔二センチ横を何かが通り過ぎていった。

カーンッ。

そぉっと振り返って見ると、何か鉄製のペン立てが硬い床に転がっていた。

サラサはいたって笑顔である。

「何か言った？」

「……いや。別に」

うわーお、まさかツッコミが早くも物理的手段に移ってくるとは計算外だ。いや、違うな。胸か、胸なのか！　そりゃあ、人には誰だって劣等感（コンプレックス）というものがあるし、そこを突かれたら自我を忘れて暴力に訴えることもあろう。うむ。今後から彼女の胸には一切合切触れないでおこう。ノータッチだ。まあ、触れられる程価値がある

胸だとも思えないけど。
「何か言った？」
「何も言ってねぇっす」
今日の俺日記。
今日は、まさか、図書館でも、トラウマが、出来るとは、思いませんでした、まる。
サラサは、胸部に、ついては、禁句。
俺は心の日記帳にそうとだけ記しておいた。

「――おおうっ」
そろそろお暇（いとま）しようと思い、サラサに別れを告げ、「来るんだったら、今度はもっとマシなもん持ってきなさい」とふんぞり返ったサラサの言葉を無視し、いつもながらやけに大きい扉を開け、外に出た時である。
脇の方に先程のセバスチャンが立っていた。
白髪のオールバックに、老眼鏡と、一目で分かる執事服。老人とは思えぬ程のシャキンとした背筋で何だか背が思ったより大分高く感じる。
「……」
「……」
こっちガン見してるし。
「……え、と」
俺がしどろもどろな反応をしていると、
「お初にお目にかかります。私（わたくし）、ラサニール家に代々仕えるラインデル家のエドワード＝ラインデルと申します。以後、お見知りおき

を、イサナギレイシ様」
「あれ、俺の名前」
「お嬢様からあなた様のことは伺っております。最近、変な奴が出入りしていられると」
「はあ……」
変な奴、ね。ま、否定はしないけど。
エドワードさんは俺をキッと貫くような視線を浴びせ、どこか値踏みするような、観察されているような、見透かしているような落ち着かない気持ちに俺をさせた。
「私、執事（バトラー）たる者の務めとして、お嬢様に近寄る《害虫》めらは一挙一動の動作も許さず徹底的に排除する所懐でしたが……あなた様はどうやら違うようで安心致しました」
「……俺も安心しました」
恐えええええぇぇっー！　この執事メッチャ恐えええええ！
表情変えずに排除とかって単語を平気で使っているところとかマジ恐えええ！
「しかし、もしもお嬢様を傷つけ、まさか、泣かせてしまうようなことがありましたら、その時はご覚悟を……」
汗腺のしまりが悪いな。さっきからタラタラと水漏れ状態だ。しかしこの執事、表情が凍ったように動かないな。
と、執事さんがうやうやしくも、泣きたくなるくらい紳士的に頭を垂れて、
「それでは、失礼を」
そう言い残し、瞬きしている間に執事さんは忽然と風のようにいなくなった。
何者！？
今日の俺日記。追記。
今日は、恐い、悪魔みたいに恐い執事さんにも、会ったよ、ち、ちちびりそうだった、よ、まる。
心の日記帳に新たなページが書き加えられる。それも麻薬患者並

みの乱筆で、ガクブルです。

大通りに出るとそこは格店先が軒並み連なり、人々の活気でいつもながら賑わっていた。

賑わっていた、と言うよりは、喧し過ぎるとも思うが。

商人同士の怒号や、客との値切り合いなど、けっこう五月蝿い。

なるほど、イリアがこの街に定住したくない気持ちも分からんでもない。俺は喧騒から離れるように道端へと逸れていくと、

「おっとごめんよ」

不注意にも路地裏から出てきた少年とぶつかってしまい、俺も謝ろうと口を開く頃にはもうその少年の姿は雑多な人の波に溶け込んでいった。

ん。

俺はふと、あることに気づく。

「……あの子……」

消えていった少年の背中を思い返しつつ、どうしようかなと考える。

んー仕方ないなあ。

やれやれ。

もっと気をつけなきゃなあ、まったく。

注意は常に怠ってはいけないと、師匠にも言われてたのに。

俺は気が進まないが、よっこらしょっと行動を起こした。

「へへっ、ちょろいな。でも、どこの上京もんだ？　護衛も付けずにあの黒服の貴族は？　まあ、意外とたんまり貰えたからな。いい仕事したぜぇ」

にひひひ、とルイは機嫌良く手の内に収まるずしりと重量感のある皮袋をお手玉のように投げて弄ぶ。

オレは生きてる。

死んでない。

世界はまだオレを殺せてない。

オレはまだ死ぬ程にどうでもいい奴なんかじゃない。

それこそルイの僅かに残ったこの世界の存在証明（アイデンディティ）であり、存在理由（レゾンデートル）。それが、盗み、生きること。

調子が乗ったのか、ルイは適当な歌詞とリズムで歌を口ずさんだ。

「にひひひ、金は天下のまっわりーものー♪」

「だっが、金はなっくとも世界はまーわるー♪」

「でもって地獄の沙汰も金しーだーいー♪」

「天使に賄賂もわーすれっるなー♪」

「そうっさ♪　金ーで買えないものは――――な、い……？」

あれ？

いつの間にか、隣でさっきカモった貴族風な兄ちゃんが立っていて、何故か一緒に歌まで歌って……。

「……？」

「……？」

「……！？」

「……♪」

「あああああああアアああああああアアアあァぁあああああアアアアアぁあっ！！」

見つかった見つかった見つかった見つかった見つかった！　逃げろやばいやばいやばいやばいやばい！　捕まる捕まる？　捕まって、どうなる？　キールの二の舞だ二の舞三の舞四の舞！　キールキールきる切る斬る斬る斬られる殺される殺される殺される殺される殺され殺される護衛護衛護衛はどこだ！　どこだ！？　いない！？　でも！？　はっ！　いや！？　こいつ！　まさか！　貴族なんかじゃない！？　確かに巻いたは

ずだ、でも、ここにいる!?　それは、嫌な、嫌嫌々嫌な予感しかっ……！

ルイは焦っていた。これは、この感覚は、昔一度だけあった。庶民風の若い男から財布を仲間と協力してスった時のことだ。完全に巻いたと思っていたのに、その男は、いきなり自分達の真上から降りてきて、ニッコリと残虐な笑みを向けると、

『神様にお祈りは済ませたか？』

と言ってから、何かの呪文を唱え始め、仲間の少年達が二人、突然と炎に包まれ、燃え上がり、灰しか残らなかった。ルイは財布を捨て必死で逃げ去った。本気で、全力で、全力疾走でどうにかこうにか逃げ果せた。

その時の記憶が、映像が、蘇る。鮮烈に、強烈に、はっきりと。

魔術師。

逃げろ。

しかし。

「これは返して貰うよ」

その男と反対方向に駆け出そうとしたら、どうしてだか、目の前に、その男は立っていて、ルイの手から皮袋を取り上げた。

「わアア、ああっあ、あ、ぁぁがあはあはあわがあ」

殺される。

コロサレル。

オレは、どうでもいい存在だから、殺される。

死ぬ、いや、だ嫌だ死ぬ、キール、キールみたいに斬られて、いや、燃やされて、死んで、殺されて、死ぬ。死ぬ、死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死死死死死死死死死死死死死っ！

ルイが極度で極端な恐慌状態に陥ってから、黒服の男は、金縛りにあったように動けないでいるルイと、まるでヘビに睨まれた蛙を体現したかのような形で、しばしの間見つめ合い、そして空気が弾けたように男は手に持った何かをルイに突き出す。

短剣か。

それとも魔術の予備動作か。
ルイが目を瞑り、絶対の死を覚悟したその瞬間、

「フォガム、食べる？」

鼻腔に、香ばしい匂いが広がった。

第十五話　金は天下を回るが、金が無くとも世界は廻る（後書き）

久々の裏設定

キャラは濃いけど本編には登場しないシリーズ

名前　本名不明（ほんなふみょう）。通称　師匠。

澪士の幼い頃に武道を教えていたと思われる人。
普段は寺の住職。禿げてはない。
澪士の養父、鯨木先生のお友達。というかむしろ悪友。
その経緯から澪士はこの人に武術を教わる。
鯨木先生曰く、

「生臭坊主の鏡」

とのこと。

先日友人から、

仙人みたいなギャルってなんだよ!?

って聞かれました。

作者にも分かりません。

第十六話　目上と年上は違うよ？

果たして自分の昔の頃をしかとはっきり明確に語れる者は存外少ないのではなかろうか。もしくは、語りたくないという者の方が多いのかもしれない。誰だって自分の黒歴史を暴露したいなどという酔狂な奴もいないだろう。

過去は過ぎ去るからこそ過去と言うのだろうが、しかして、自らがした行為、起きた出来事、触れた感覚、流れた時間、その時の心情、それらが全て消滅する訳ではない。

むしろそこにかくしてあるべきだ。

記憶という手段で。記録という方法で。

あるいは歴史という物語で。

自分自身が忘れても、忘れようとしても、決して消えない、無くならない。

絶対誰かが――何かが、記憶し、記録し、覚えているのだ。

でも俺の場合、過去のことについては記憶でも記録でも歴史でも物語でもなく、それはそんな上等なものではなくて、もっと歪で、あまりに醜く、見ているだけで辛くて、悲しい、

「傷痕」

なのである。

傷で懐かしむ記憶。傷で残る記録。傷で語り紡ぐ歴史。

それらはかくして現存し、存在する。

消そうとしても消えないし、そんなこと、するつもりもない。

これは俺の証だから。俺の生きた証だから。
存在証明であり、存在理由。
俺は一生覚えてて、死ぬまで忘れることはない。
そう、決めたあの日から俺は少しだって進歩したのだろうか、成長したのだろうか、多分、一歩も前に進んでないだろうし、一ミリだって伸びてはいないだろうけど。
でも。
まあ。
それはそれで仕方ないかなあって思う今日この頃。
だってここ俺がいた世界じゃないし。
別にいいかなあって。
「そう思うわけですよ、俺は」
「なあ、兄ちゃん……さっきから何ぶつぶつ独り言いってんだ？」
がぶりとルイは香ばしいフォガムにかぶりつく。
俺も同じように?りつく。
むしゃむしゃむしゃむしゃ。
見た目は鳩程度の大きさの鳥の丸焼きだが、香辛料の張りのある風味に、魚の白身のような柔らかい食感のフォガムは今日もまたいい仕事をしていた。
ルイに盗られたのは銅貨が入った方の皮袋だったので、このフォガムは銀貨の方の皮袋から出費したので、屋台の店主のおっちゃんが釣銭足りねえよと困っていたが、釣りはいらねえぜっ、とカッコつけて（一度やってみたかった）みたら、今度はこっちが困ってしまうほどに泣かれてしまった。
銀貨とかお金の種類ってよく分からんなあ。ちゃんと百円とか、千円とかって書いてくれればいいのに。
今度ちゃんと勉強しとこうかな。
「……」
「……」

実はさ俺、今ひっじょぉぉぉぉーに気になることがあるってーか、したくてやりうたくて堪らなくてうずうずしているつーか、まあ、その、何だ。
「なあ、ルイ」
「あんだよ、兄ちゃん」

「……俺は君の耳をほにほにしたい」

あらすじと言うか、ここまでの経緯。
突然俺が目の前に現れたもんだから驚き叫んだ彼に俺はあらかじめ用意しておいたフォガムを差し出した。
俺の単純な思考回路はこんな演算結果を叩き出したからだ。
子供がスリをする。
それはお金が欲しいから。

お金がないと食べ物が買えないから。
買えないということはお腹が減る。
あの少年はお腹が減っている！
という何とも安直な結論を算出した訳だが、まあ、当たらずも遠からずってところだろう。
てな訳で。
俺は呆然となすがままにされている彼を連れて小高い見晴らしのいい場所まで歩いて移動し、現在の状況である。
十分に落ち着いてから少年に名前を訊くと、少年はルイと名乗った。ただのルイであると。褪せたような灰色の髪に、光るような金眼。歳はヴァネッサよりもちょっと下くらい。それでも八歳か九歳くらいに見えた。
こちらに敵意が無いと理解してくれたのか、俺があげたフォガムを素直に受け取ってパクついていた。
そして。
そして、である。
「君の耳をほにほにしたい」
大切なことなのでもう一度。
「……は？」
ルイは目を点にして、俺を凝視していた。
そんな彼の側頭部には何と見事な耳が！　究極にして絶対の、最高にして最強の耳が！
猫耳が！
ＮＥＫＯＭＩＭＩが！
ひょこひょこと、生えていらっしゃる！
尻尾は見当たらないけど、重要なのはその耳である。
これをほにほにしないで何であろうか。猫耳を見たらほにほにしないはでは日本男児たる者の名折れである！　てか猫派猫好きな俺にとってはここストレス社会ならぬ、ストレス異世界でこの目前に控えるオアシスに飛び込まないでどうする。てか、触りてー。撫で

てー。ほにほにしてー。
つーか、もうやっていた。
「……は、はうあー。ね、猫耳やあー。ホンマあかんねんこの手触りー」
「……」
ルイくん、何が何だか分からないような顔してます。いきなり知らない男に耳を揉まれ触られ弄くり回されるなんて、予想だにしないからね。当然です。いやあ、ポカーンとしている顔も可愛いですなあ。はーい、俺は変態でございまぁす。
「な、何すんだよ！」
ルイはようやく反応し、俺の手を必死で振り払う。
「え……」
「何ですっげー傷ついたみたいな顔してんだよ！　オレが悪いみたいじゃねーか！」
ルイはぷんすかと憤慨し、可愛らしい猫目を吊り上げる。
「俺の財布スったくせに何言ってんだよ」
盗人猛々しいとはこのことか。
「そ、それは……」
途端、ばつが悪そうな顔をするルイ。何だ、やっぱり素直で良い子じゃないか。
「……ま、いいけどね。それが、君の生きる術なんだろ？」
「え……」
「なんとなく、分かるよ。いや、知っているのかな、俺は」
「……」
俺の孤児院にもいたしねえ、手癖の悪い子が。万引きしてしょっぴかれた子とかさあ。わんさかいたよ。
君みたいな。
俺みたいな。
「別にもういいよ。俺は最初から気にしてないし、君をどうにかするって気もないし。俺としてはこの（イリア）金が戻ってきてくれ

たから、それでいい」
「……」
「ん、何だよ？　俺の顔に何かついてんの？」
「……兄ちゃんは、変だ」
ルイは困惑した瞳で、俺を睨みつける。
怒っているかのように。
悔しがっているように。
「普通は、オレみたいなガキなんてその場で殺されて当たり前なんだ。でもよ、何だよ兄ちゃん、そりゃ。何だよ、そりゃ？　気の毒そうなオレみたいなガキに同情か？　兄ちゃんは博愛主義者か？　偽善ならいらねえんだよ。んなもん犬にでも食わしとけ。言っとくけどな、オレは兄ちゃんみたいのが一等嫌いなんだよ」
「……」
「オレらみたいなガキはなあ、盗んででも奪ってでも生きていかなきゃならねえ。悪いことでもしなきゃ生きられねえ。そんなオレに、あんたは何を甘いこと言ってんだ？　見逃す？　はっ！　ふざけんじゃねえ」
「なら君は、ここで殺されたいのか？」
「……そうじゃねえよ。オレが言いたいのは、あんたがふざけたことぬかってっから、ムカついて……とにかくトサカにきてんだよ」
「……はっ、ははははっは」
「何笑ってやがんだよ！」
「いやさぁ、ルイ。別に俺はさあ」
ルイの言いたいことはつまり、こうだ。
偽善はいらない。
同情もいらない。
何故なら、そんなものは。

「別に俺は君を見下してなんかいないよ」

所詮、見下しているのと変わりないから。

可哀想に、可哀想。

貧しくて可哀想。お腹が空いてて可哀想。汚い身なりで可哀想。

可哀想、カワイソウ。

何て自分より不幸で不遇で、可哀想。

と、見下すのと変わらない。

「な、な、何だよ！　知った風な口ききやがって！」

「だって知ってるもん」

君より、誰より、知っているから。今まで、ずっと見てきたから。

狂って壊れて歪んでイカれた者達に、俺は今まで会い続けてきたから。

だから、君のことは分かるよ。

分からないけど、分かるよ。

知らないけど、知っているから。

「何だよ、何だよ！　クソッ！」

ルイは俺に背を向け、立ち去ろうとする。逃亡するかのように、逃避するかのように。

俺は、

「ちょい待ち！」

俺はルイの背中に声をかけ、ルイがちらっと振り向いたところで、銅貨の入った皮袋を投げた。ルイは器用にキャッチする。

「……何のつもりだよ」
「同情も偽善もいらねえんだったら、せめて俺の自己満足ぐらいは受け取っとけよ。それでしばらくはお前の生き方は休業しとけ」
ルイはしばらく立ち止まって、それから何も言わないで脇目も振らず走り出し、見えなくなった。
「……たぁっく」
なーんて面倒臭いことでしょうかね。
こんなところで、昔の俺のそっくりさんに会うとは思わなんだ。
しかも、見たところ俺以上の最悪だ。師匠の言っていた通りだ。
《最悪》、と言えば『名探偵（バッドネーム）』の澱川（よどみがわ）さんを思い出すなあ。まあ、アレは俺以上の最悪じゃなくて、俺より異常な最悪だったからなあ。対処のしようがない。
「ふむ」
あの子とは、近い内にまた出会える気がする。
祝おう。
過去の俺との再会だ。
祝おう。
最悪との邂逅だ。
祝おう、祝おう。

ムカつく。
あの見透かしたような目が。
ムカつくムカつく。
あの知った風な口のきき方も。
ムカつくムカつくムカつく。
何より、何よりも。
少しでも嬉しいと思ってしまった自分にムカつく。
腹立たしい。
恨めしい。
憎たらしい。
クソッ。畜生っ。
「ふざけんなよ。ふざけんなよ、オレっ！」
息を切らして自分のねぐらに戻る。密集住宅地のとある一角。もはや人が住んでいいのか分からないくらいにあちこちボロボロな、質素な部屋。狭い玄関部分と主たる部屋を分割する、スライド式の襖のような仕切りを開けて、部屋に二つあるベッドの内の一つに飛び込んだ。ルイは踊る心臓と、止まぬ動悸をどーどーと鎮めながら、薄いシーツを握り締める。
手元に握り締めた皮袋を見る。
ずしりと銅貨の重さが実感出来る。
変な、奴だ。
否、変人だな、ありゃ。
というか変態とも言える。
人の耳を無断で勝手にほにほにしやがって……デリケート部分だぞこのやろう。
頭に生えた自分の耳を触る。まだ、あの男の手の感触が残っていた。

不思議な違和感だと、ルイは見慣れた汚い天井を見上げる。
あの兄ちゃん……そう言えば、名前訊いてなかった。
こちらには名乗らせておいて……ムカつく。
ルイは、いつの間にか自分の口元が笑っていることに気づかなかった。久しぶりの、もしかしたら初めてかもしれない、母以外からの人の温もりが、本当は涙が出るくらい嬉しかったことも。それよりも、ルイは無意識の内に直感していた。あの男から感じる、どうしようもない同属の匂いを、悪徳の香りを。だからこそ、否定出来ない。拒絶し切れない。もししてしまえば、それは自分自身を否定し拒絶するような気がして、ルイは無意識下にそんな自己防衛を施していた。
「……なあ、母さん。今日、俺ってば変な野郎に会ってさ」
ルイは、部屋にあるもう一つのベッドの上でネムッテイル母に語りかける。
「オレにこんな金よこしやがって……盗みを休業しろって。ははっ、笑えるぜまったく。なあ、母さんもそう思うだろ？」
ルイはベッドに近寄り、母の手を握る。
「でも、これでまた、母さんの薬が買えるね」
でも、あいつなんかに感謝なんて、これっぽっちも絶対してやんないけどね。
とルイは母に微笑みかけ、顔面を横切った蝿を五月蝿そうに手で払って、少し乱れた母の布団を直した。
自分と同じ、頭部に獣人族特有の耳がある。髪も同じ灰色で、ルイは自分が何から何まで母から受け継いだのだと、誇らしい気分になる。
「……」
感謝など、してやるものか。
むしろ、あっちはそんなものなど望んですらいないだろう。
誰かから盗んで奪って。
誰かを騙して裏切って。

そんな人生を送ってきた――――送らざるを得なかった自分に、今更他人の偽善に、あの男は自己満足とすら言っていた行為に、触れてしまって、自分は少なからず嬉しいと思っていて、期待してしまって、また、会いたいだなんて、戯言が思い浮かぶまでになってしまって。

ああ。

ルイは一気に脱力したように嘆息する。

気温が上がったせいだろうか、纏わりつく蝿が目障りだった。

第十六話　目上と年上は違うよ？（後書き）

裏設定

キャラは濃いけど本編には登場しないシリーズ

名前　澱川（よどみがわ）　影踏（かげふみ）

通称　《名探偵（バッドネーム）》

作者が中二病全開で膿みだしたキャラ。いつか前書きにも登場した。名探偵の名の通り、事件を次々呼び込んでしまう異常体質で、『災害』という現象の人間モデル。ちなみに周りで起きた事件は全部自分で勝手に解決してしまう、色んな意味でマッチポンプな人。

澪士曰く、

「早く広辞苑は災害の欄にあの人の名前を入れるべきだ」

とのこと。

んー今回は、ってか今回も心理描写が多いなあ。何だか退屈な感じもするわあ。次回からはもっとレイシが活躍出来るといいなあ。

第十七話　三度の飯より飯が好き（前書き）

第十七話　三度の飯より飯が好き

こんにちは、澪士です。みんな大好き澪士兄ちゃんです。
今日は天気が良いのでほのぼのと潮風を浴びながら、庭でのんびりと空でも眺めて過ごしています。間違えた。正確には過ごしていた、だった。
現在、俺はお隣さんの『背徳の森』にて愉快なピクニック中だった。
「イリア、俺は何でここにいるんだっけ？」
「もう、レイシの金遣いが荒いから、こうしてお金になりそうなものを探しているんじゃない」
「なるほど」
そういや、そうだった。
前回、俺が『マランディの酒場』で有り金全て置いてきたことにイリアは大激怒し、今後から自分で使う金は自分で稼ぐようにと俺は言いつけられ、こうしてこの森で金目の物を探しているのであった。当然、この森には危険な魔物もいるので、ボディーガードというか、この森に一番詳しいイリアにも付いてきて貰っているのだ。
自分より一回り小さい女の子に守って貰う俺って……と手を地に突き、おーてぃーえるしそうになったが、そこはスキル『切り替えスピーディ』を発動し、何とか凌げた……気がした！
「まったく、献身的な私の優しさに涙して頂戴」
「およよよ、まごう悲しきかな」

「……」
ボコッ、とイリアが持っていた杖で俺の頭を殴った。
けっこぉ痛かった。
本当に涙が出てきそうになった。
「おふざけは嫌いよ」
「せーましぇん」
いやはや、相変わらずどっちが子供かわかりゃしない。

「レイシ、そんな草いくら摘んだってはした金にしかならないわよ」
「え、だってこれだって薬草だろ？　売れば少しでも金額になるじゃないか」
「そんなみみっちぃことなんてやってられないわよ」
「でもさぁ」
「今日、私が付いてきたのに理由があるとは思わないの？」
「はあ、何でしょう」
「もっと大物狙いでいかなきゃ」
「え、大物って……」
「ほぉら、来た来た」
「う、そ……」
さーて、我ら不思議発見隊は随分と森の中心部辺りにまで進んで来たわけだが、これまで小動物的な何かなら時折見かけたけど、襲ってくるでもなし、近づいたら脱兎の如くな感じで、危険と思われる魔物にも出くわさなかった。そんでイリアは、休憩でもしましょうか、と立ち止まり、俺は少し開けた場所でこうやって地べたに腰を下ろしていたのだが、件のイリアはローブの大きい袖の部分をごそごそと漁り、お香のようなものを出して、もうもうと焚き始めた。

俺はそんなイリアの行動を怪訝に思いながらも、あえて訊くことはせず、この前家にあった本で学んだ薬草の知識を生かし、平和的かつ牧歌的に、付近に生えていた薬草を摘んでいたのだが、でも、コレは、ねえ……。

「『邪獅神（ヴァレフォル）』。ふふん、いきなりＡクラス級の大物がかかったじゃない」

のしのしと、いやむしろ、どしどしと、前の茂みからその立派な体躯が、現れた。一言で表すなら、でかいライオン。でも耳の後ろ辺りに山羊みたいなクルクルした角が生えてるし、オットセイみたいな長い牙も二本生えていた。グヴヴヴヴッ、と気味の悪い唸りを上げてこちらを威嚇して睨んでいる。

やっほーい、ご機嫌だぜぃ！

小便ちびっちまう。

「ちょっ、ま！　イリア！　やばいよ逃げよう！」

「何言ってるの？　倒すのよ」

「誰が」

「レイシが」

「はあああああっ！？」

「そんな驚くことじゃないじゃない。あなた、前に一人で『三眼狼（プルミエルゼ）』を倒したのよ？」

「いや、あれは追い込まれてたっつーか、がむしゃらで殺ったというか……」

「なら今回もがむしゃらでヤれば？」

「んな無茶な」

「大丈夫よ。あの時はレイシ一人だったけど、今回は、私がいるじゃない」

「そんな、惚れてまうやろーみたいな台詞言ってもらっても」

「あと、はい」

「ん？　何これ……ナイフ？」

「武器もあるしね」

「さいで」
イリアから貰ったのは装飾芸細やかな、稲妻みたいにくねくねした、切れ味抜群そうな短剣。俺はそれをしかと握り締め、イリアとの会話を打ち切り、目の前のライオンと向き合う。
ワン公、の次はニャン公ですか。猫耳は好きだけど、顔がごついし、耳をゴワゴワしてそうで俺の好みじゃないことは確か。
食虫植物のときはこの転送ネックレスで何とか難を逃れたけど。
察するに、さっきイリアが焚いていたお香みたいなのに惹かれてきたんだと思うが、ニャン公よ、災難だなあ。
きっとお前は、これから四肢を裂かれ（獅子だけに）、皮を剥がれ、爪牙を抜かれ、眼球を抉られ、臓物を引き摺り出され、骨もお持ち帰りに、毛一本だって残らないのだろうなあ。
あーあーやだやだ。
悲しいけど、これって戦闘なのよね、みたいな。
「こいつを倒せばしばらくは遊んで暮らせるわよ」
「さいですか……そんじゃまあ、いっちょ」
何だか最近すっかりお馴染みとなりましたが。
今日もキメていきましょうか。
ではでは、さあさあ。
「うた――」

「宴の始まりね！」

……決め台詞盗られたあああああっ！

「俺、い、生きてる……？」
「生きてるから、もう泣くのはおよし」
な、泣いてなんかないやい！　といつぞやのサラサを思い出す。
結果的には勝ちました。アイムウィンです。そりゃもう、何度死ぬかと思ったか。
作戦的には、俺が前線で肉弾戦をし、イリアが後方で魔術の援護という隊形になった訳だけど。
「……イリア助けてくれねーしっ！」
「何言ってんの？　助けてあげたじゃない」
「ピンチの時だけな！」
イリアはほぼ観戦状態で、俺が喰われそうになったり、その鋭い爪でミンチになりそうなった時だけしか支援攻撃はしてくれなかったのだ。しかも、援護攻撃の炎球らしきものを放ったはいいが、俺にまで被害が飛ぶし、髪の毛焦げたぞばかやろー。そんな半端な援護で、どうにか俺は勝てた。というか、この短剣のおかげで勝てた

ようなものだが。
　それは俺が十四回目の死地に追い込まれた時に、イリアが出したと思われる氷塊が、ライオンもどきのドタマにクリーンヒットして、そこで俺は動きが鈍った奴の空中真上に《移動》し、落下する重力の勢いを利用して、奴の額にずぶりと短剣を突き刺した。短剣は突き刺したと同時に周囲に雷光を輝かせ、雷鳴を轟かし、雷電を放った。俺が「何だ何だなんなんだ！」と驚愕と混乱を一緒くたにしながら、尻餅をついている内に、ライオンもどきはプシュー、といつかパソコンが雷でヒートした時のような音をたて、ドシィンッ、と豪快な音で倒れた。
「ほほお、さすがは『雷皇（カダクラン）』に祝福された小剣だけはあるわね。なかなかの威力だわ」
　と、イリアは後ろで一人ふむふむと納得した顔で頷いていたが、俺にとってはどうでもよかった。
　生きてる。
　俺、生きてる、息してる！
　この事実だけで俺はもうお腹いっぱいだった。
「は、ははは、レベルで言えば、もうギガスラッシュかギガデイン覚えてもいいくらいレベルアップしたよねー？」
「ほらほら、倒したならさっさと剥ぐわよ」
「ははは一、モンハンでさあ、剥ぎ取りで使うナイフって思えば一番切れ味高い気がするよねー？」
「……ダメね、完全にイっちゃってるわ……ちょっとやり過ぎたかしら……？」
　とイリアは俺を放置して独りでにライオンちゃんの解体に取り掛かる。まずは俺が刺したあの短剣を引き抜き、それを再びライオンちゃんの頭蓋に※自主規制中※あらまビックリ、綺麗に皮が剥が※良い子はマネしないでね※血飛沫に伴い内臓の各所が※見せられないよ！※血の臭気と臓物の湯気が辺りに漂い、イリアは全身が赤く染まりながらもひたすらにナイフを振り続け、ついには※お花畑を

ご想像ください※そして作業が終わったのか、イリアが腰を上げ、切り分けたモノを中くらいの大きさの皮袋に詰めていった。それは明らかに皮袋の大きさと詰めていく質量の対比が合っていないはずなのに、皮袋は膨らむ気配も見せず、まるで中が小宇宙か四次元ポケットの如く、イリアが解したモノを飲み込んでいく。

俺はただ、その光景をぼぉーと「へーすごいやん」とか「ホンマ、イリアはあの猫型ロボット並に便利やわー」とか思いながら、黙って見ていた。

というか、疲れてたんだ。身体が疲れて動かんのです。あと、極度の緊張状態からの解放で情けなくも腰が抜けてしまった。

あーもう、ヘトヘトなのです。

誰か労ってくれてもいいと思う。

「そろそろ、正気に戻ったかしら？」

解体業から戻って来たイリアが言った。ローブに付着した血は既に消えていた。イリアが魔術で洗浄したのだろう。俺の服もグリンダさん特性自動洗浄機能が搭載されているので、汚れ等は見当たらないが、顔や身体の露出部分の所は汚れているというか、生傷だらけ。

涼しい顔したイリアとはそこだけが大違いだった。

「……あー、うん。誰かさんが人のまん前でスプラッタな作業を見せてくれなかったら、もっと早く復活したと思う」

疲れ過ぎてゲロもでねえ。ってか、ゲロをする体力も残ってないのだ。

「このくらい早く慣れて頂戴、レイシ。あなたの世界だって肉を食べるときはまず家畜を殺して解すでしょ？」

揃えて並べて晒してやん……までは言わないが、イリアが言うことは尤もだった。

「慣れ、るかな」

「次期に慣れるわ」

イリアは俺の肩に手を乗せて言った。

俺も頷いた。
それはこの世界に必要な、慣れ、何だよな。この世界に慣れる為の、慣れ。
「お金稼ぎは、これで終わり？」
「レイシが続けたいとあれば」
「冗談」
「ふふっ」
「そんじゃま、帰ろう」
「ええ、帰りましょう」
これは本格的に鍛え直さなきゃなと、俺は思った。

イリアと澪士が帰宅準備を始めている頃、澪士達から北西にかなり進んでいった所にて。
「ふう……今日は何だか手こずったな」
「それはラウルが集中切らすから、連携が崩れたんじゃない」
「そりゃアンジェリカも同じだろう」
「しょうがないじゃない、突然曇ってもないのに雷なんて降るんだからっ」

「ラ、ラウルさんも、アンジェリカさんも喧嘩はよ、よしてほしいっス」
「ふむ、バリーもだんだんうちのチームに慣れてきたな。それに、お前の魔術には今回も助けられた」
「あ、ど、どうもっス。クリスティーナさん」
「まったく、クリスはポカしすぎなのよっ。今日の『三眼狼（プルミエルゼ）』の群れの掃討だって、いきなり先陣切ってバカみたいに突っ込んでくし、援護する人のことも考えてよっ」
「まあ、いいじゃないか。結果的にはこうして無事に殲滅出来たんだから。なあ、ラウル？」
「運良く、な」
「それも神は我々に味方しているのだ。こんな心強い後ろ盾はいまい？」
「へいへい、あんたが大将だよ」
「クリスティーナさん、かっけーっス」
「バカばっかり」
クリス、と呼ばれた大剣を肩に軽々と担ぐ髪の長い女騎士。
アンジェリカ、と呼ばれた弓矢を携えたポニーテールの女弓兵。
ラウル、と呼ばれた婉曲した双剣を腰に差す右こめかみに傷のある戦士。
バリー、と呼ばれた魔道書を抱える気弱そうな少年魔術師。
この四人はぐるりと周りに幾多と積み重なる魔物の屍を前に、一仕事終わったような雰囲気で、思い思いの形で互いに健闘を称え合っていたようだった。
「しかし、あの雷は本当になんだったのだろうな？」
クリスは顎に手を沿え、ふーむと首を捻った。
「あれは、すごい魔力を感じたっス。相当高位の魔術が行使されたと俺は思いますっスけど、予想するに『不義への雷槌（トールハンマー）』か、それ以上っス」
「解説ありがとう、バリー。まあ、それでも今日、この森でクエス

トを受けているのは私達だけのはずだが」
「もしかして、飛び入りでクエストを受注した人がいたのかも」
アンジェリカが言う。
「それもギルドに帰って確認するしか方法はないけどな」
こめかみの傷をポリポリと掻くラウル。
「まあ、分からないことはまず置いておこう。セレンに戻ってからでもいくらでも考えられる。それと今日のノルマは達成した。持っていけるものは持ち帰り、迅速にギルドへ帰還するぞ」
「あいよ」
「分かってるわ」
「らじゃっス！」
各々と四人は魔物の残骸から牙や角を剥ぎ取り、背嚢にいっぱいいっぱいに詰め込み、ここまで付けてきた木の切り傷を道標に、帰路へと着いたのだった。
「……」
「ん、どうした？　バリー」
何か黙考するように口を開かなくなったバリーに、ラウルが声をかけた。
「あ、いえ。何だか変な予感がして……」
「変な予感？」
「さっきの魔術――――何か気になるんスよ」
「ふうん」
「何やってんの！　置いてくわよっ」
少し先からアンジェリカが怒鳴った。
「ああ、はいはい。……ほれ、バリーも行くぞ。あんま深く考え過ぎんな」
「……まあ、それもそうっスね」
バリーは気を取り直し、歩みを進めた。
かくしてこの四人組と澪士との邂逅は、翌日セレンの街中にて、何とも数奇な偶然によって、どうしてだか果たされることになる。

第十七話　三度の飯より飯が好き（後書き）

裏設定というか裏ネタ

今回の新キャラ。クリスティーナ、ラウル、アンジェリカ、バリーの四人。
お気づきの方もいるかと思いますが、この四人の名前の元ネタは『アダムスファミリー』の俳優さんたちから拝借しています。

アンジェリカ・ヒューストン

ラウル・ジュリア

クリスティーナ・リッチ

バリー・ソネンフェルド（監督）

何故、アダムスファミリーなのか？　いえ、別に深い意味はないです。たまたまビデオデッキから昔撮ったアダムスファミリーのビデオが発掘されたのでその影響です。
そう言えば、新しく始まった仮面ライダーに出て来たアレってまんまハンド君みたいですよね。はい、蛇足です。

あと魔物の名前
「ヴァレフォル」
ユダヤの魔神でソロモン王に封印された７２柱の魔神の一人。ライオンの姿、或いはロバの頭を持つライオンの姿であらわれる。

補足

イリアが言っていた「カダクラン」とは。
フィリピンのルソン島の山岳地帯に住むティンギアン人が崇める神様。雷神であり、忠犬キマットと共に空の上に住んでいるという。

ふむ、今日は何だかネタ満載だな。また人識ネタ使っちゃったよ。
あとがきがすげーながくなっちゃった。
あとがき長ぇし、うぜぇよと思われる方は是非とも飛ばしちゃってくださいね。

第十八話　人は考える生き物、人は考え過ぎると死ぬもの（前書き）

「裏切りってのはいつだって突然だ」
「何ふざけたことほざいてんだよ。物事に突然じゃないことなんてあるのか？」
「そりゃそうだけど、今は裏切りについての話なんだよ、蜉蝣（かげろう）」
「ふん、裏切られるのが嫌なら信じなきゃいいんだよ。ほら、これで万事解決だ」
「身も蓋もない回答だ。救いようがない」
「救いようがなきゃいけない話なのか？」
「いや、これは救われない話ってことさ」

第十八話　人は考える生き物、人は考え過ぎると死ぬもの

出会い、というものはいつだって突然だ。

まあ、俺の場合なんかけっこう特殊なケースで、母親の股座から放り出されて、両親と非感動的な対面を果たしから、一年も経たない内に俺は両親とはオサラバして（つーか捨てられて）、それで次に出会ったのが鯨木先生で、俺のお父さんだった。そんで千曲。俺の友人兼恩人及び大切な存在。いや、勘違いしないで欲しいんだけど、別に好きだとかそういうんじゃなくて……んぁぁー言い難いな。そして孤児院の弟妹達。一応は孤児院だから、時折、引き取り手が見つかったり、子供を捨てたはずの親が何だかんだで戻ってきたり、いつの間にか行方不明になってた子もいたっけ。そんな感じで、とにかく色んな奴と出会ってきて、別れてきた。

会うは別れの始め、とはよく言ったものだが。

実際その通りだから仕方がない。

しかし、こっちの世界に来てしまってからは、俺はほとんど全ての者達と、さようならを告げる間もなく、別れ離れになってしまったのだけれど。

だからと言って、元の世界に戻る為の方法を探す旅に出発するでもなく、ただ、毎日こうやって惰性に怠惰にすべからく毎日を送り、考えると元の世界と大して変わらないような生活をしている自分がいる。

寝て、起きて、食べて、寝て、フラフラして、食べて、たまに働

いて、怒られて、遊んで、寝る。
俺の活動パターンなんて所詮こんなもの。どこにいたってやることは同じ。どうせ変わらない。強いて言えば、千曲に怒られる分が、イリアに代わっただけのこと。
それは俺自身が変わらないからで、俺が俺であるというだけのことで、そんなものは、結局――――――
「……なんてね」
考えてみちゃったり。
うむ、これ以上思考を深めると鬱になって自殺しちゃいそうだからやめておこう。
芥川龍之介の如く。
太宰治のように。
睡眠薬は持ってないけど、入水自殺なら出来そうだからね。
「人とは考える生き物、人は考え過ぎると死ぬもの……って、いつか各務（かがみ）が言ってたっけ」
ぽわーんと、殺戮嗜好の後輩の姿が目に浮かぶ。隙があったら刺しちゃいますよ？　と語尾にハートマークを付けて、無垢そうな可愛い顔でいけしゃあしゃあと言うのだからたまったもんじゃない。
実際何度か刺されたし。
そんなあいつとも別れちゃったんだよなぁ。
いたらうざったくもあるけど、いなくなったらちょっと寂しく感じてしまうって、何か反則だよなあ。失ってから初めてその価値に気づくみたいな感じで、俺は何となく嫌いだ。
「レイシ、さっきから何ぶつぶつ言ってんの？」
隣でイリアが訝しげに言った。
「別に何でもないよ。ただの独り言」
「独り言ならもっと静かに呟いて頂戴」
「へいへい」
「睦言ならもっと耳元で囁いて頂戴」
「へいへ……って何でだよっ！」

「妹設定にも飽きたから、そろそろ恋人設定にでもしてみようかと」
「いや、無理があるだろ」
特に年齢差とか。
「精神年齢の差が、かしら？」
「ごめん、俺の方が高いっていうことでいいんだよね？」
「ああ、そんなことも分からないなんて、精神じゃなくてオツムの方の問題だったのね……」
「その哀れむような視線はやめいっ」
……と、俺がイリアと無駄に不毛な会話をしている内に、俺達は目的地に到着した。
はてさて、俺が目的地と称したここは通称、冒険者ギルドと呼ばれている場所で（正式名は『セレン中央部特化役職協会』というらしいのだが、そこは面倒なので割愛）、セレンのほぼ中央に位置し、そのせいか人通りも人の出入りも目が回る程に多かった。
サラサの図書館よりも、さらに大きい煉瓦造りの建物で、どこか欧州の古ホテルのようにも思えた。
何故、俺がこんな所に来ているのか。その理由は至極単純。
昨日、イリアが剥ぎ取った『邪獅神（ヴァレフォル）』なる皮やら牙やらを売り飛ばしに来たのだ。
つまりは換金ですね。
俺は腰に吊り下げた例の皮袋を見る。あの馬鹿でかいライオン一匹分の質量が入っていると思うとおぞましい気もするが、我慢する。
「ではでは、参るとしますか」
いざ、と俺は大きく開け広げた玄関へと歩いていった。

「ばかやろお！　何で『海猿（シーモンキー）』の毛皮がこんな値上がりしてんだよ！」

「誰だよ畜生！　いっきに『魔鉱石（マナダイト）』の売りをしやがったのは！　これじゃ破産だ！」

「あはははは！　苦労が！　今までの苦労はいったいなんだったんだ！」

「うそ……命懸けであんなにがんばったのに、たったこれだけなんて……」

……う、わあぁ……。

いざ、と意気込んで入ってみたわいいもの、その中の混沌具合に早くも俺は帰りたくなった。

前方には大型の掲示板みたいなのが張り出してあって、そこに人が大勢屯している。

掲示板に向かって怒鳴り声を上げるいかつい男。

頭を掻き毟って打ちひしがれる商人風の青年。

笑いながら涙を流すという奇行をやってのける獣人族らしきおっさん。

床にぺたんと放心したように座り込む弓と矢筒を抱えたポニーテールな彼女。

「すげぇ……ちゃんとレートみたいなのがあるんだ」

「そりゃそうよ」

まあ、考えてみれば当たり前なんだけどね。

でも、これは……まんま株市場みたいなノリだな。それもリーマンショック後並みのカオス状態である。まったく、恐慌を起こすのはいつだってアメリカだ。

「さ、受付に行きましょ」
「ああ、うん」
俺らはそれらの喧噪から距離を置いて、受付に向かった。
ギルドの入り口を抜けると、そこはただっ広いエントランスみたいになっていて、大理石のような綺麗に磨かれた石の床と、高い天井にはこれまたでかいのシャンデリアがぶら下がっていた。
右端には椅子やテーブルなどがあり、ゆっくり寛げるロビー的な空間が設置されてあった。何人かは雑談しながら、ビールらしきものを飲んでいた。頼めば貰えるのかもしれない。ミルクはメニューにあるだろうか？
「あのーすいません」
俺は一番隅っこの受付カウンターに行き、やる気なさそぉーな顔の彼女に声をかけた。
「はーい、どうなさいあしたぁ？」
深夜のレジ店員を連想させる対応に、何故だか懐かしい感慨になる。けれど、その受付嬢さんは何故か俺の顔をじぃっと意味深に見つめていた。
「……お、俺の顔に何かついてます？」
少々戸惑いつつも、俺がそう反応を返すと、受付嬢さんは「いえいえ、なんでもねっす」と首を振った。
「えー、それで今日はどんな御用で？」
「魔物の素材を換金しに」
イリアが答えた。
「ああー、はいはい。ギルドカードはお持ちですかぁ？」
「これで」
イリアは何やら銀製のカードを渡した。
「……あらあら、Sランクの人でしたか。少しお待ちを」
カードを受け取ると、受付の彼女はカウンターより向こう側の奥に引っ込んでいった。しばし待っている間、俺は周囲をちらりと見回してみる。

さすがに冒険者ギルドと言ったところか、モンハンのコスプレとしか思えないような人種ばかりだった。でも、そこいらいるようなハリボテのコスプレなんかではなく、列記とした存在感というか、歴戦たる威圧感というか、そんな曖昧なもでしかないが、確かにそれは感じられた。

「えー、お待たせしましたぁ」

さっきの受付さんが戻ってきた。手にはメモと羽ペンをスタンバイしている。

「魔物の種類と、各種素材箇所をどーぞ」

「識別名『邪獅神（ヴァレフォル）』。クラスA。素材箇所は毛皮、爪牙、角、骨、その他全て」

イリアがすらすらと淀みなく言う。しかし受付嬢さんの方もすらすらと羽ペンでメモっていく。

「はーい、確認しましたぁ……いやぁ、さすがはSランカーと言ったところですか。狩る獲物もレベルがぱないですねぇ」

受付嬢さんが感心してんだかしてないんだか分からない口調で言い、「それじゃあ、ブツを」と続ける。

イリアもブツを、と俺にアイコンタクトする。

「……」

何だか、マフィアの裏取引でもしているようだった。

俺はとりあえずは気にせずにこの異次元皮袋の中に手を突っ込み、続々と中身をカウンターに並べる。「へぇー、珍しいアイテム持ってるんですねぇ」と受付嬢さんが興味深そうに皮袋に対してコメントを漏らしたが、俺は次々に出てくる皮とか骨とかを取り出しすのに苦心していた。

「はーい、それでは換金までの間は、少々お時間がかかりあすのでぇ、ロビーでお待ちくらさぁい」

俺が出した素材の全てを箱のようなものに詰めると、受付嬢さんは、再び奥に引っ込んでいった。イリアも俺も、暇を持て余した神の如く手持ち無沙汰になってしまったので、言われた通り、ロビー

で待つことにする。
よっこいせ、と俺はロビーのベンチに座った。
「……」
「……暇ね」
うむ、暇だ。
退屈は人を殺すとはよく言うもので、俺も殺されないように、再度周りに目を向けてみる。相変わらずクラウドさんみたいな剣を持った人だとか、ゲイボルグみたいな槍をもった人だとか、色々いる。
正直、見ていて飽きない。
「……せっかくだから、レイシの分のギルドカードも作ってきましょうか？」
図書カードでも作ってきましょうか、とイリアがそんな調子で言うので、危うく聞き逃してしまうところだったが、俺は嬉々として頷いた。
「え、作れんの？　それは是非とも」
「分かった」
とてちてててててて、とさっそくイリアは受け付けの方へ行ってしまった。
「……」
今更気づいたのだが、俺が暇なことには変わらなかった。
だから再度周囲の観賞に励もうと思ったのだが、ついうっかりなことに、隣に座っていた人と目が合ってしまった。
「……どうも」
そのまま無視するのも失礼かと思ったので、俺は気まずくも挨拶をした。彼女も「ごきげんよう」と優雅に応えた。
よく見ると、その人は、先程床に座って放心していたポニテの彼女だった。一際目を惹くショッキングピンクの髪色に、物騒なデザインの弓と矢がぎっしり詰まった矢筒を抱えていた。
「あなた、見ない顔ね」
「ええ、まあ。新参です」

互いに少し緊張が解けたのか、顔の強張りがうっすらと消える。
「俺はレイシです」
「アンジェリカよ、初めまして新人さん」

「あの、ここっていつもこんな騒がしいんですか？」
俺は気になって問いかけてみる。
「んーまあ、騒がしいことは騒がしいんだけど、最近は何だか妙に騒がしいわね」
「何故です？」
「物資の急な値上がりや値下がりや、Ｂクラス以上の魔物が人里に下りてきたり、まあ理由はいくつかあるけど、どれがどれって言える訳じゃないわ」
「そう、なんですか」
このような大々的な混乱は、何かの均衡が崩れた時の兆候、もしくは結果の場合が多い。リーマンショック、という冗談もあながち間違いじゃないのかもしれないな、と俺は思った。
「ちなみにアンジェリカさんは、さっきは何であんなに打ちひしがれてたんですか？」
「やだ見てたの、恥ずかしい」

アンジェリカさんは恥らうように赤面して、俺を恨めし気に睨んだ。

「……まあ理由はね、まったく酷いもんよ。昨日までレートは正常だったのに、今日に限って換金しに来たら、昨日の買値の四割減よ。分かる？　四割減よまったく。代わりに鉄鋼類や貴金属の価値が数倍に跳ね上がったんだけどね。もう、滅茶苦茶よ」

そこからアンジェリカさんは貯めに貯めた鬱憤が爆発したのか、ぐちぐちと愚痴を零し始め、というか雪崩の如く飛び出してきて、俺は対応に困った。

「クリスったらいつも天然の唯我独尊で後先考えやしないしバリーはバリーで常時へこへこしてるだけだしそれに控え私なんかどれだけ（前略）ラウルだって仕事はちゃんとこなすけどそれ以外はてんで興味なしっていうか人の心情にてんで鈍感というかこないだなんて（中略）まったく何年一緒にいると思ってんのよ乙女の気持ちぐらいとっとと気づきなさいよあのばかあアアなんで私の方がこんなぐじぐじしなきゃいけないのよああんもうラウルよラウルのせいよ私がこんなに悩んでいるのにあのニブチン野郎は（以下略）」

俺が知らない名前まで出てきてしまった辺り、もはや俺の手に負えるものではなくなってしまい、どうしたもんかと誰か助けを求めようと周りを見回して、予想通りというべきか、期待通りそこに救いの女神はいた。

イリアが、ちょいちょいと手招きしている。

俺はそろぉ、とイリアの手招きに肖り（あやか）、その場から緊急脱出を試みた。

後方では未だアンジェリカさんのマシンガンコンプレイントが続いている。

俺はさようならーと静かにアンジェリカさんに別れを告げ、逃げた。

出会いが突然なら、別れもいつだって唐突なのだ。

「レイシぃ、あんまり変なのに絡まれないでよぉ」
冒険者ギルドから這い出た後、街道でイリアが非難気味に俺をねめつけた。じゃり、じゃり、と換金して貰った硬貨の音が俺のポケットの中で歩くリズムに乗って跳ねる。意外と量があって重い。
「うん、悪かった。気をつける」
本当、気をつけなければ。ああいう人は、酒を持たせるとさらにやばくなるパターンだ。神支那先輩と同じタイプだ。うん、久しぶりにある種の危機感を覚えた俺だった。
「それとはいこれ、レイシのギルドカード」
「おおお」
イリアが手渡したそれに、俺は感動を噛み締めながら受け取った。
「そんなに喜ぶもの？　それって」
「いやあ、モンハンをやりこんでいてた俺にとってはかなり感激ものだよ」
モンハン？　とイリアは小首を傾げた。俺は気にせずに貰ったギルドカード、を眺める。
名刺サイズの茶褐色のギルドカード。レイシ・イサナギと銘打ってある。
「これって、やっぱり依頼とかをこなしていけば、色とかが変わってくるのか？　イリアみたいに」

「まあ、そうね。クエストレベルが高いのをこなしていけば、手っ取り早く上がっていくけど」
「例えばどんな？」
「そうねー。Ｓクラス級の龍を何匹か倒せば一気に……」
「俺はその辺で一生薬草でも摘んでるよ」
「ふふふっ、別に卑下することないわよ。だってレイシは階級だけで言えばＡクラスの『邪獅神』を倒したんだから」
「それは、イリアが炎とか氷の魔術で援護してくれたからだろ」
「そうね。他にも能力低下とか重力負荷なんかの『状態異常（バッドステータス）』や呪いという呪いをヤツに掛けてあげての勝利だったけどね」
「げ、マジすか」
どーりで俺なんかがあんな化け物相手に死ななかった訳だ。長年の疑問が解決。
「階級だけで言えばＡクラス。能力だけで言えば、あんなのＣクラス以下よ。つまりレイシが最初に倒した『三眼狼』ぐらい強さってことね」
「うへぇ……」
と俺が芽生えつつあった自信という芽がイリアが明かした事実という名のロードローラで潰されて打ちのめされていた時に、
「おぅっ」
「うわわっ！？」
ドンッ、と道角でもないければパンも銜えてすらないのに人とぶつかってしまった。
「い、いてぇっス」
しかも相手は男。女性ですらない。これはガックリしない方がおかしいだろう。
「って大丈夫か」
まあ、相手の性別が何であろうが、一応は相手の安否を伺っておくのが道徳的かつ人道的ではなかろうか、とそんなごくごく、当然至極な常識に気づき至るまでの道のりは険しく果てしないものだっ

たからして第三章に続く！（意味不明）。
「あ、す、すいませんッス。お、お怪我はないっスか？」
「ええ、この盾がいたから大丈夫よ」
「おい」
ビシィッ、とイリアに突っ込むマネをする。
「それは何よりで……あ、ああすいませんっスけど、俺ちょっと急いでるんでこれで失礼するっス！」
とその分厚く古臭い本を抱えた、チェ・ゲバラが被っているような白いベレー帽の青年は、風の如く走り去っていった。しかし走りながらも「ホント！　すいませんっしたぁー！」と他人の目もあるのに臆することもなく最後まで謝り叫んでいるところを見ると、いい奴なんだな、と思った。
「……ふう。何なのかしらね、今日は。んじゃ……私はこれからグリンダところに寄るけど、レイシはどうする？」
「ああ、俺は……俺も別に寄るところがあるから」
「……ふうん。いつもの図書館？」
「いや、別のとこ」
「……他に知り合いでも出来たのかしら？」
「んまあ、そんなとこ」
「……はいはい、お友達が増えて良かったわねー」
「……何か、含みのある言い方だな」
「べっつにーなーんも含んでないもーん」
とイリアはいじけるようにつんっと顔を逸らしてから、帰りは一人で帰って来てよねー、とクルクル回りながら俺から離れて行き、日が沈む前には帰って来なさいよねー、とも付けたして、いつの間にかまるで霧のように姿が見えなくなった。きっとグリンダさんの店に《認識》された、あるいは《認識》したのであろう。
「……むう」
何不貞腐れてんだか、あの娘は。
「……土産でも買って、ご機嫌取りでもしましょうかな」

不意打ちで歳相応の態度や行動をとられると、こっちが戸惑うちゅーに。

まったく。

まったく、まったく。

まったく、という言葉が口癖か決め台詞になってしまいそうだ。

『宴の始まりだ！』、とかいう初期の頃はこんなノリと思いつきで言ってしまっただけの安直適当で臭すぎる言葉よりかは、よっぽど決め台詞か口癖になってしまいそうだ。

「はーあ……まったく」

まったく、どちらが子供かわかりゃしない。

ちなみに今の時刻はお昼時。

「いらっしゃーい……ってああ！　レイシくんじゃない。いらっしゃいな」

レヴェッカさんが快活な声で俺を歓迎してくれた。

「……！」

ヴァネッサも嬉しそうな様子で俺に抱きついてきた。

「ちわーっす」

と、俺が『マランディの酒場』に足を踏み込んだ瞬間、いきなり

カウンター席にいたコメカミに傷のある男の人と、馬鹿でかいクレイモア（※爆弾じゃありません）を背負う長髪の女の人が振り向いて、俺を見た。
「なんだ、人違いか」
「にしてもバリー奴遅ぇな。いつまでかかってんだ」
俺はドキがムネムネ。どうやら人違いか何かだったらしい。驚いた。
「何ぼさっと突っ立ってんだい？　さっさとこっちに来なよ」
「あ、はい」
俺はレヴェッカさんの催促に応じてカウンター席に行き、隣に座るハンターみたいな二人を気にしつつも、俺は席に座った。
「ほらほら、席に座ったんなら早く注文しなよ。それもなるべく高いもんをね」
「えー、お客に自由はないんですか」
「ないない。それに私、レイシくんのことは……お客なんかだとは思ってないわよ？」
「酷いなー。借金取りか何かみたいな扱いですかー俺はー」
「……ん……まあ、そんなとこよ」
「ひでーなー」
ところで、レヴェッカさんと俺の会話に疑問を抱く者は数多くいることだろう。その経緯をいくらか掻い摘んだ要約で説明したとしても、いかんせん長くなることは確実なのだが、そこはいた仕方なしと了承して貰いたい。
俺がヴァネッサとレヴェッカさんに初めて会った日の帰りに俺が置いてったリュシオール銀貨とやらをレヴェッカさんは受け取れない、貰い過ぎだ、と俺に銀貨を突きつけ返してきたのだが、俺は俺で一度代金として払った金を素直に受け取ることは出来なかった。そこはみみっちぃ男のプライドとして理解して頂きたい。そこで、俺が発案したのは、これから俺がこの店で注文する料理の金額の分を差し引いていってくれればいい、という方法である。つまりは逆

の意味でのツケにしといてくれという提案だ。俺がぶーぶー説得した甲斐もあってか、レヴェッカさんも渋々と了解してくれた。

そのせいで、俺が店に顔を出す度にレヴェッカさんは俺にたくさんの料理を食べさせようとする。早く清算したい気持ちは分かるが、俺は帰りの瞬間転移の際に毎度毎度カオナシの如く大地に吐瀉物のはかいこうせんを撒き散らしそうになるのはそろそろ勘弁願いたいもであった。以上ＱＥＤである……一度使ってみたかった。

「はいはいはい！　どんどん食べてねえ！」

「いやー、さすがにこれは……」

レヴェッカさんがどんどん次から次へと腕を奮って料理を作り、それをヴァネッサが、残したら許さないよ？　と警告じみた笑顔で運んでくる。俺は辟易としながらも箸――はないんだけれど、木のスプーンを伸ばす。

やはり、旨い。

量だけじゃなく、味もしっかりとしていて、一つ一つが丁寧に仕上がっている。どこか、学生などに愛され続ける定食屋のような感じだった。

「……なあ、腹が減ったな、ラウル？」

「……そうだなクリス。おれなんか今にも餓死しちまいそうだぜ」

「持つべき者は持たざる者へ。教会の教え通りなら、きっと優しい慈悲深い誰かが私達に食べものを恵んでくださるに違いないというのに」

「ああ、どこかそんな聖人君子みたいな御仁はいないのかねえ」

……何だろう、視線を感じる。

右顔面にちくちくと刺さる原因を追ってみると、予想通りあのハンターチックな二人がガン見していた。恐いくらいに俺のことを見ていた。ただ、見つめていた。会話だけは水平に続いているのに、視線だけは俺に固まっていた。正直、スルーして食事を続ける根性は、俺には無かった。

「……」
「……」
「……」
「……あの、一緒に食べます？」
並んだ料理の一品を、どうぞと差し出してみる。
「おお！　何と慈悲深い少年か！　神の使いはここにいたのか！　私は今激烈に感動しているぞ！」
がつがつがつがつがつがつ。
「ああ、そうだぜ！　おれ達みたいな乞食同等な存在に恵んでくれるたあ、神様仏様レベルの善行だぜあんちゃん」
ぱくぱくぱくぱくぱくぱく。
「ああ、これも日頃の行いが良い私達に天からの褒美に違いない」
むしゃむしゃむしゃむしゃむしゃ。
「いやあ、あんちゃんはどこぞの国の大司教よりかはずっと立派だぜ。あんちゃんが今から宗教始めんだったらおれぁは第一番目の信者になるぜおいクリスその肉よこせ」
「礼を言うぞ少年！　もはや私は君という存在に心奪われ誰がよこすか馬鹿め！　これは私のだ！」
「あんがとよ、あんちゃん本当に礼を言クソてめークリス！　おれのパイ返せ！」
「少年、この恩は決して忘れはパイだとっ！？　誰が貴様の胸など欲しがるものかっ！」
「胸じゃねーよ！　お前が今口の中に押し込んだものだよ！」
「知るか！　口の中に入れた者勝ちだ！」
「栗鼠かテメーは！　ふざけんなお返しだ！」
「あああ！　貴様は今やってはならないことをしたな！　人の大好物を盗るとは何事だ！　人として恥ずかしくないのかこの人間のクズめ！　豚め！　子宮からやり直して来い！」
「お前に言われたかねーよ！ってあああああっ！　おれのムニエルがああ！」

……。

……。

俺は隅っこで巻き添えを食わぬよう、パンを千切って口に放り込み、極力静かに食事を楽しんだ。

「いやあ、悪かったなあんちゃん。昨日からまともに食ってなくてさ。連れがもうすぐ金持って帰ってくんから、とりあえず食った分は後で払うからよ」

「いや、別にいいですよ。俺もこんな食い切れる自信なかったし、一緒に食事が出来て楽しかったですよ」

ほとんど曲芸じみた動きで料理を奪い争ってたもんですから、見ていて愉しかったですよ。まさにフードバトル（※この場合本来のフードバトルという言葉の意味は適用されない）。

「いやはや、本当に器のでかい少年だな。普通は憤怒してもいいだろうに。ん、そう言えば君は貴族か？」

「いえ、よく言われますけどただの一般人ですよ」

「そうか……ああ、しまった。紹介がまだだったな、すまん。私はクリスティーナ。気安くクリスと呼んでくれ。そして、こっちの食い意地が張った馬鹿はラウルだ」

「食い意地張ってんのはお前もだろうが！　って、よろしくなあんちゃん。あんちゃんの名前は？」

「俺は澪士。好きに呼んでください」

「分かったぜ、レイシのあんちゃん」

「承知したぞ、レイシ少年」
なんだかんだで結局呼び名はあまり変わらなかった訳だが、悪い人達ではなさそうだと俺は苦笑気味に思った。
「少年も、ここの常連なのか？　あまり見ない顔だが」
クリスさんはヴァネッサから樽ジョッキを受け取り、ジョッキの中身を呷りながら話を振ってきた。
「ええ、まあ、最近ですけど」
「うむ、ここの店の料理は美味いからな。レヴェッカの腕も確かだ」
「ああ、まったくだぜ。ああ、ヴァネッサちゃんビールおかわり」
「ヴァネッサ、私もだ」
と、ヴァネッサが二人の声に応じて、お盆に空のジョッキを乗せてとてとてと厨房に向かっていった。意外とヴァネッサの給仕の姿勢には、あの年頃にしては随分と熟練したそれがある。夜の一番混み合ってくる時間帯の彼女はさらに機敏な給仕捌きを見せてくれるのだろうか、と思ったら少し微笑ましくなった。
「クリスさん達のチームはいつもご贔屓にしてもらってるの」
と、紅い髪を揺らしてレヴェッカさんがデザートのフルーツの盛り合わせを持ってきた。ヴァネッサも甲斐甲斐しく樽ジョッキをカウンターに置く。俺にはミルクを持ってきてくれた。俺はヴァネッサにありがとう、と言う。ヴァネッサははにかんだ。
「でもいつもは夜に来るのに、今日はどうしたの？」
「んー、ちぃーっとな。セレンに帰るのが遅くなっちまって、昨日から禄に食ってねーんだよ」
「うむ、そうなのだ」
「えと、チーム？」
俺はその言葉の響きを疑問に思い、尋ねた。まさかダンスチームでも草野球チームのことでもあるまい。
「あれ、知らないんだっけレイシくん。チームっていうのは……」
「いやレヴェッカ、それは私が話そう。少年、チームというのはな、私達が所属している冒険者ギルドの中で」

「つまりは、特定の仲間とつるむということなんだぜ、あんちゃん」
「おいラウル、何故貴様が私の説明を阻害する」
「いいだろ別に、おれがあんちゃんに説明したって」
と、何だかお決まりのように口喧嘩を始めた二人を尻目に、俺はヴァネッサさんに説明の続きを仰いだ。
「えーと、クリスさんやラウルさんの他に、あとアンジェリカとバリーくんって子がいるんだけど……」
レヴェッカさんがそこまで言い終わるか終わらないかの内に、店の入り口のウエスタンゲートが勢いよく揺れ、
「アンジェリカさん粘りすぎっスよ、受付の人困ってたじゃないスか」
「いいのよあれくらい。こちとら命懸けで取って来た素材なのよ。あんな金額で譲れますかってのよ」
こちらも騒がしい調子で、二人の男女が入ってきた。
一人は、どこかで見たことのあるような目に痛いショッキングピンクのポニーテルの彼女で、物騒なデザインの弓と矢筒を肩に引っさげている。
もう一人の方もどこかで見たことあるような古めかしい本と、白いベレー帽を被っていた。
その二名が、店内に足を踏み入れた瞬間、あ！　と同時に声をあげ、俺を二人シンクロニシティして指差した。
「さっきギルドで会った！」
「ぶつかった人！」
いやはや、と俺は頭を掻く。
いつだって出会いや別れが唐突で突然なら。
再会だってきっと、いつだって急激なんだろう。

第十八話　人は考える生き物、人は考え過ぎると死ぬもの（後書き）

裏設定

キャラは濃いのか分からないけど本編には登場しないシリーズ

名前　神支那千五百（かみしなちいほ）

性別　女　趣味　酒盛り　スキル『鋼の肝臓』

所謂普通の酒飲みキャラ。

澪士のいっこ上の先輩、つまり三年生。でも歳はみっつ上。何故ならそれは2回ダブっているというとってもユニークな先輩。四月に誕生日なので、二十歳が過ぎるや否ややけ酒を嗜み始め、澪士もそれに付き合わされ、酷い目にあった。以来澪士はアルコールを嫌い、ミルクを愛するようになったという。

異世界に来る前の澪士曰く、

「俺はきっと三十路超えてもこの人の晩酌に付き合わされるんだろうなあ」

と苦笑。

第十八，五話　人間にとって最大の贅沢とは、人間関係における贅沢のことである。

日が沈んでから随分と時間が経ったような気がする。そわそわと落ち着かない。

夜闇が訪れてから、室内の異常な静寂さだけが満ちていた。ざわざわと気が気でない。

見慣れた部屋なはずなのに、どこか歪んで見えた。決定的な違和感が支配する我が家で、家主の自分だけが異端者のようだった。

それはどうして、何故なのか。

無意識に自問自答を繰り返す。

無意味に他問自答を捏ね返す。

無邪気に他問他答を混ぜ返す。

解答は既に自分の中で出ているはずなのに、自分はそれをあえてはっきりと証明しようとはしない。それは決して嫌悪や否定からではなく、もしもそれを認めてしまえば、自分は歯止めが利かなくなると理解しているからだ。だから、曖昧なままにしおく。曖昧模糊な気持ちなままにぼかしておく。

ただそれは、今の日常を壊したくないからであって。失いたくないからであって。

それは、きっと卑怯なことなのだろう。
あやふやに自分自身を誤魔化して。
うやむやに気づかないふりをして。
思えば大人気ない行動だった。幼稚な態度や言動だったとも思う。
後悔はいつだってあまりに遅い。遅過ぎるのだ。
い、嫌だ。
天窓から透きとおった月明かりが差し込み、部屋を仄かに白く照らす。
嫌だ、嫌だ。
普段はほとんど聞こえない波の音が、嫌に鼓膜まで届いてくる。
嫌だ嫌だ嫌だ。
時の流れがこれ程までに永遠と流れるのは、いつぶりであろうか。
猶(なお)のこと孤独と言う形の無い怪物が、自分を丸ごと飲み込もうとする。

もう独りになるのは、嫌なのだ。

早く、帰って来て欲しい。もしかしたら、しかし、もう二度と帰ってこないのではないかという不安が、胸を締め付ける。彼は、あの街が気に入っていた様子だった。毎日のように街に繰り出し、その日あったことを自分に面白可笑しく聞かせてくれた。だが、常に必ず日が暮れる前には帰って来てくれた――――くれたのだ。
元々、彼はこの家に縛られる謂れはない。
金が貯まったら、いつでも自分の元を離れていくことだってありえるのだ。
そんなことも考えられなかったのか。

作っておいたスープが食卓にある。自分と彼の二人分。湯気はとっくの昔に息絶えた。そこには冷たい液体があるだけだ。

独りだ。

その事実が、ひやりと心臓に押し当てられ、早鐘を打つ。苦しい。唇を噛む。眉根を寄せる。額に皺を集める。綺麗に顔面が崩れる。目尻にしょっぱい水が溜まる。嗚咽は漏らさない。腰掛けていたベッドのシーツを固く握り締める。そのまま耐える。目から雫はぎりぎり零れない。

彼女がじっと嵐が過ぎ去るのを待つかように、自身の感情を我慢していた時に、ゆっくりと光が入り込むように、その家唯一の出入り口である扉が開いた。

クリスさん、ラウルさん、それにアンジェリカさんとバリーの二人が加わり、酒場の状態はとんだお祭り騒ぎになってしまった。

「何だ何だ、お前ら知り合いだったのかよ」

「あ、さっきは本当すいませんでしたっス」

「ねえあんた！　何でさっきは黙って消えたのよ！」

「因果な巡り合わせだな。うむ、これも何かの縁だ。今日はとこと

ん飲み明かそうではないか！」

「……」

俺は黙ってことの成り行きを見守るしかなかったが、懐具合を暖かくして戻って来たからか、バリーやアンジェリカさんも次々に食べ物を注文した。冒険者とは皆こんな大食いなのだろうか、と俺は思った。ちなみにクリスさんやラウルさんも、先程あんなに食ったはずなのに、まだ食事を続ける気でいた。

改めて互いに自己紹介を済まし、語らい、特にバリーとは何とも意気投合し（ツッコミ役同士であるからか）、周囲の人達へのツッコミ役に励んだ。

クリスさんやラウルさんからは、数多くの武勇伝を聞かされ、アンジェリカさんには、自分の弓の腕前を自慢され、バリーからは新入りの身でこき使われているとかの苦労話に花を咲かせ、その後アルコールがログインしてからは飲んで歌えやの馬鹿騒ぎのバッカーノで、騒ぎの臭いを嗅ぎつけたのか、いつの間にか酒場の客が増えていて、あちこちでも宴会が開始されている状況になっていた。

加えて、樽ジョッキを掲げたラウルさんが赤ら顔で今回こなした魔物の掃討クエストの経過を身振り手振りで落語家の如く語り始めたので、やんややんやと野次馬がその話を聞き入り、途中で合いの手を入れたりと盛り上がっていたり、アンジェリカさんが酔っ払ったまま弓の妙技を披露し、犠牲となったバリーが頭の上に洋梨に似た果実を乗せた状態で、涙目で俺に助けを求めていたりしていたが、俺は俺でもはや収集のつかなくなった酒場をどうにかしようとにヴァネッサと一緒に給仕をしていたので忙しかったのだ。

そしてクリスさんだけは、一人でカウンターに突っ伏して眠りこけていた。

そんな訳で。

時間帯にして既に九時頃だろうか。いやまあ、大変帰りが遅くなってしまった次第です。

「イリアに心配かけてなければいいんだけど」

いつもは日が沈む前に帰るから、イリアにはいらない気遣いをさせてしまったかもしれない。

俺は現在、もはや我が家同然と化したそのログハウスの玄関前にいた。窓からの明かりは伺えない。もしかしたら、イリアはとっくに床についてしまったのかもしれない。ならば物音を立てないようにドアは開けなければ、と、俺はそぉーと静かにドアノブを握り、ゆっくりと開けようとした瞬間、どんっ、といきなり黒い塊が家の中から出てきて、ボディアタックを仕掛けてきたが、俺は何とか耐えて尻餅せずに済んだ。

「おおう!?　……って、イリアか？　何だよ急に」

多大なる衝撃をストマックに受け、危うく今日食べた中身がボンジョッルノーしようとしたが、どうにか喉元までに踏み止まることが出来た。

「……」

「……イリア？」

顔を俺の腹の部分に押し付けたまま黙って動かないイリア。

「……遅い」

くぐもってはいるが、確かな強い口調でイリアは言った。

「え……？」

「遅い」

「……うん、ごめん」

「遅い」

「悪かった」

「待ってたんだから」

「めんぼくない」

「遅いよ」

「すいません」

「スープも作ったのに」

「このとおりです」

「許さない」

「謝ります」
「もう遅いのよ」
「余地はないの？」
「ない」
「本当に？」
「……」
「ほんの少しも？」
「……少し、ある」
「どんな？」
イリアが喋る度に、声で腹が震えて少々くすぐったかったが、そこは堪えてイリアの言葉の続きを待った。
「……あ、頭撫でて……」
「こう？」
俺はイリアの綺麗な濃紺の髪に手を触れる。さら、さらら、とした心地良い手触りを感じ、旋毛辺りからうなじにかけて丁寧にイリアの頭部の曲線をなぞった。
「……そ、それと……こ、今夜は、一緒に寝てくれること、わ、分かった？」
「分かった」
俺は即答で頷き、それからイリアを抱きしめるように腕を回して、ひたすらに謝罪をした。

ごめん。

ごめん。

ごめん。

イリアは、許さないんだから、と呟き、俺の背にも手を回し、抱擁を返した。

すぐにイリアの頭がコテンと俺の右肩に乗っかった。ぐずぐずと鼻を啜る音が聞こえた。右肩に何かの雫が落ちた。イリアからは、甘い蜜のような匂いがした。

俺達はお互いの温度を共有するかのように、しばらくそうして何も言わずに抱き合ったまま時を過ごし、それから予定調和のようにあっさりと離れて家の中へ入った。

俺はもう一度だけ、ごめん、と言った。イリアは顔を俯かせて、許してあげない、と俺の手を握ったまま、ぼそりと嘯いた。

第十八，五話　人間にとって最大の贅沢とは、人間関係における贅沢のことである。

また会いましたね？

みんな様ごきげんよう、蝉です。
短いですね、すいません。
十八テン五話とは何とも中途半端な回ではございますが、これは十八話のオチというか、そんな感じなものなので了承ください。

あと、この今回のタイトルについては、佐野洋子さん著「友達とは無駄である」の中から頂戴いたしました。
「１００万回生きた猫」、有名ですね。作者も大好きです。

昔は「１００万回死んだねこ」であり、教育上の理由でタイトルが変更されたという都市伝説が流布しているそうですが、そのような事実はないみたいです。

ではでは、また次回にて。

あーあー、あと一つだけ、宣伝してもいいでしょうか。
作者がもう一つ書いている「嘘以下の回想」久々に更新しました。
この物語を読んでくださる読者様なら、少しニヨニヨ出来る設定となっております。暇なときでも、除いてってくださいな。

長文失礼。

第十九話　偽善を学ぶことも大切

「ひっ！　って……何だルイかよ、驚かすなよ。まさかさっきの奴がこんな路地裏まで追いかけてきたのと思ったぜ。まあ、それより見ろよこの金の量。大漁だぜ、大漁。久々にがっぽり儲けたぜこりゃ。ひひっ、今夜は二週間ぶりに肉が食えるぜ。お？　何だよルイ？　もしかして羨ましいのか？　ひひっ、まあ待てよルイ。お前にだって肉の切れ端ぐらい分けてやらんでもぶへはがっあぁ！？」

ルイと呼ばれた灰色の髪の少年はは目の前の同い年ぐらいの彼に拳を振るった。顔面を抉るように殴った。腹を踏み締めるように蹴った。相手の意識が薄れるまで必要に殴打を繰り返した。

もはや抵抗出来ない程に痛めつけてから、襟首を吊るし上げ、建物の壁に押し付けた。

「……な……な、ん……で」

「教えてやろうか？　それはお前が馬鹿だからだよ、ベック」

「……は……？」

「だが馬鹿なお前に教えてやることはない。教えてやれることもない。だから今は眠っておけ。馬鹿なお前は、次に起きた時にはきっと全て忘れてるだろうからよ」

そう言って、ルイは止めと言わんばかりにスナップを存分に効かせた振りで、主に頭部を中心に背後の壁に思いっ切り叩きつけた。

「う、あ……」

がくんっ、と完全に気絶したであろうベックと言う名の少年は、手を放した途端に力なく路地裏の路上に倒れ込んだ。そして何気に驚異的だが、ベックは意識を絶つまで決してその金の詰まった小袋

から決して手を離すことはなかったのだけれど、ルイは彼が一心不乱で掴んでいたその袋を無造作に剥ぎ取ってから、改めて自分の足元に転がる同類を一瞥する。

右頬が青く鬱血している。それと対をなすように鼻から滝のように流れ出す赤い液体が鮮やかだった。少々やり過ぎてしまったか、前歯が不恰好に欠けていた。

「不用意に犬の餌になりたくなきゃ、身の丈以上のことはするんじゃねえよ、ベック。クソ商人の豚共のせいで、挽肉されたキールのことを忘れたのか？　ああなりたくなきゃ仕事はもっと弁えてやんな」

と、もう本人には聞こえもしないのに、そんな忠告なのか脅迫なのか分からない台詞を浴びせてルイは、じゃら……と小気味の良い音を鳴らす皮袋を懐にしまい、ズボンのポケットに不良よろしく手を突っ込んで、何食わぬ顔で大通りに抜け出た。人を一人を気を失うまでに痛めつけておきながら、微塵の動揺もせずに、自然に、平然と、いつも通りに。

日陰者には眩し過ぎる太陽の下で、視線を下に向けながら。

ある目的を持って、歩き出す。

ある目標の為に、歩み出す。

「……クソ面白くない」

そうぶっきらぼうに呟いて。

猫耳をひくひくとご機嫌斜めに動かして。

少年ルイは今日もいく。

「はーあー……」
いい天気だなあ、と俺は空を見上げながら放心した。
俺は今日も今日とでサラサの所へ読書兼冷やかしにレッツラゴーでもしようかと思ったのだが、途中疲れてしまってやむなく立ち止まり、よっこらしょっ、とこうして一休みしている訳だが。
「なんか一日中こうしてたいわー」
俺が今こうして放心状態になっている場所は、このセレンの街の中央広場的な所で、壮麗な建築美が伺える壮大な噴水を中心に、背の高い建物が囲うように並び連なっている。視線を下げれば、そこには活気ある露店の数々も軒並み包囲するように連なっており、やはり人の往来は激しい。ここまで来るまでに何度か人にぶつかってしまった程だ。その中の一人はあらかじめ意図的なようだったが、俺にはどうでもよかった。
そして俺は真ん中にある巨大な噴水の縁に腰を下ろし、水面に反射する光に目を細めたり、時折跳ねる水飛沫が服に黒い染みを作ろうとも気にするでもなく、ただぼんやりと雲の形を眺め、さんさん降る日光を楽しんでいた。
まるでジジイ？
情緒があると言って欲しいね。
嘯風弄月な日本人の気質とも言いますか。
欧州の人は、自然に対抗する考えを持つ民族というが。
日本人は自然と調和すること選び、それを美徳とする民族なのだ。
いつか本で読んだことがあるのだが、東ヨーロッパでは元々冬と夏の二つの季節しかなかったらしい。中部ドイツからハンガリー、ロシアまでにいたる農耕儀礼として『冬送りと夏迎え』という志向

の年間行事があり、長く、寒く、厳しい、暗黒が支配する恐ろしい冬の終わりを待ち、一日千秋の思いで優しく、暖かく、気持ちの良い陽光の再来と春（あるいは夏）の訪れをじっと耐えながら悲願する。

　これらの祭りでは、東欧の人達は「夏」と「冬」の二軍に分かれ、互いに自分の長所を自慢し合ったり、剣を振るっての戦いを繰り広げたり、歌合戦をしたりし、互いの優劣を競い合って、最後には冬が負け、夏の勝利が高らかに宣言されるという趣向なのである。

　この行事には冬という季節を魔、もしくは死の象徴と捉え、それを打ち負かしたり、撃退したりして、新しい夏を迎えるという点で、冬と夏の交替、大地の死と蘇りという農民にとって重要な季節の周期性が反映されている、と本には書いてあったが。

　そしてサラサの図書館で閲覧したこの地方の気候に関する本では、ここいらは南東の端に位置している為か比較的温暖な地域で、季節も夏と秋の二期生に分かれているらしい。冬については――――まあ、冬と呼ばれる程の寒波滅多に到来することもなく、だからこそ一年中滞りなく機能することが出来るセレンは交易都市としてこれ程までに繁栄したのであろう。

　だが、やはりこの大陸でも、北に進めば進む程寒さはより一層厳しくなっていくそうで、貧困さも比例して然りらしい。

　最近ではハーロック――このセレンのあるリブラル国の北西にある国では、極度の貧しさ故か、農村地帯から農民達の私腹を肥やす貴族に対しての反乱が幾度かあったらしい。

　さながら『ジャックリーの乱』か『ワット・タイラーの乱』なんかを思い出させる。百年も戦争してたら、まあそうなるわな。

　とかまあ。

　閑話休題。

　そんな感じで俺は日向ぼっこを堪能しながら、ぽわぽわと取りとめもなければ、当て事もない仕入れたばかりの知識に酔いしれていた時分に、

「……あたっ！？」
じゃらん、と音がして、何かが側頭部に直撃したのだと気づいた。
いたたた、と頭を押さえながら横を見ると、見覚えのある皮袋が足元に落ちていて、さっきの衝撃のせいかその口から銅貨を数枚吐き零していた。
「んな……これは……？」
何でこんな所に、と俺がそう思った時、
「しばらくだな、兄ちゃん」
一対の猫耳がひょこひょこと、俺を見ていた。
唇の端を少し吊り上げ、挑発気味に笑って。
何日ぶりかのルイの姿が、そこにはあった。

「それ、兄ちゃんのだろ？」
ルイが俺の足元にある皮袋に目をやって言った。
「ああ、そうだけど」
俺も誤魔化す必要もないと思い、正直に頷いた。
「ったあく、なぁにまたカモられてんだよ……つーか、その反応だと、なーんか自分がスられてんの分かってたみたいじゃんかよ？」
「ん。そうだけど」
「はん。いったい何のつもりだよ」

「別に盗まれても困らない額だしね。俺が困らないんだったら、困ってる別の誰かが持ってたほうがいいだろ？」
　ルイは一瞬心底呆れたような表情をしたが、すぐに不機嫌そうに顔を歪めた。
「ふん、お得意のご慈悲ってやつかい？　ありがたくて涙が出るね。でもな、一つ言っておくぜ兄ちゃん。ああいうガキは一度デカイやまが成功すると、次は味をしめてもっとデカイやまに手を伸ばす。そうなったら、翌日には挽肉にされて犬の餌になるしかないんだ」
　キールみたいにな、とルイは誰かの名前をぼそりと呟いた。
「……」
「だから忠告するぜ、兄ちゃん」
「……」
「ヘタな偽善はよしな。無駄に犠牲を呼ぶだけだぜ」
　俺はしばし黙考してから、
「……分かった。今度から食いもんをだけを盗られるようにする」
　と改善策を提案した。
「っ……！　人の話を聞いてんのかあんたは！」
「聞いている。その話の結果から、今度はもっとうまくやろうと思う」
「オレはその気持ち悪りぃ偽善が気に食わねえって言ってんだよ」
「偽善は悪ではないよ」
「だが正義でもないだろ」
「それは分からないけど、少なくとも善意はある。偽りでも何でも」
「そこに悲劇が生まれれば、それはもう立派な悪さ」
「禅問答が好きなのかい？」
「嫌いじゃないね」
「きみは優しい」
「何だよいきなり」
「きみはいつだって誰かのことで怒ってるようだ。自分のことでは

なく、他人の為に憤っているようだから」
「また……その見透かしたみたいな物言いだな」
「いや、ただの感想だよ」

「それで？　何か用があって来たんじゃないの？」
俺とルイはそれから「ふん！」「あは☆」と最後の掛け合いをフェルマータに、一先ずは会話を打ち切り、本題に入ることにした。まさか俺に忠告する為だけに会いに来た訳でもあるまい。なので俺は謹んで真面目に、きっちりかっちりのおふざけなしで真剣にことの次第を運ぼうと試みようとしている訳である。
「そして何故（なにゆえ）、兄ちゃんはオレの耳を無断でほにほにしている？」
「はっ！　つい」
「と言いつつも手を止めようとしないのは何故かな？」
俺の隣で噴水の縁に腰を落ち着けたルイは、むすーと腕を組んで俺のほにほにを享受していた。押し黙った反応だが、実際はかなり頭にきていると思われる。しかし、俺は気にするでもなくむしろ堂々と言う。
「何故なら！　そこに猫耳があるからだ！」
「悪い、今のオレには理解出来ない」
あーいんすとーる、と歌う雰囲気でもないが。
俺は名残惜しくもルイの頭部からにょきんと生える耳から手を放した。ルイは俺が触った感触を消そうとするかのように嫌そうな顔

で髪をぐしゃぐしゃと手で揉んだ。その灰褐色な髪がごわごわと膨らんで、猫耳の存在があまり目立たなくなり、存在感が薄れた。俺は少し残念。

「ったくよお、本当兄ちゃんはいったい何なんだ？　偽善者だったりなんだったり、それともただの変態か？」

「うん」

「普通に肯定しやがった」

「自覚ぐらいあるさ」

「自覚あったのか」

毒気を抜かれたようにルイは力なく俯き、はあーと肺の中の全ての空気を溜息で吐き出した。

「……まあいいや。ご察しの通りあんたに用件があって来たんだ。財布と忠告はそのついでだ」

ルイは表を上げてこちらを横目に話し始めた。噴水の水の勢いが強くなった気がした。

「この前、オレがあんたから受け取った金。あれはオレが三十の日付を数えてようやく稼げる額だった。だから兄ちゃんの言うとおり、しばらくはオレの生き方を休業してやるよ。でも、それじゃあ話がウマ過ぎるってんだ。それだけは納得していないんだ、オレは。もし兄ちゃんが神職者かなんかだったらオレは素直に納得したけどよ。だってそれが教会の仕事だからな。神に仕える者の義務だからだ。だが、見たところあんたは貴族か、それともただの金持ちのボンボンだろう？　兄ちゃんには、そんなことをする仕事も、義務もない。それで、だ」

「それで？」

「オレはあんたに少しの間だけ雇われてやる」

かぽかぽと俺達の前を馬車が通り抜けていった。遠くからやかましい男の怒声が聞こえた。俺は二、三度瞬きをしてから、

「……ほお」

と小さく感嘆の声を漏らした。

ルイは人差し指を上に向け、ここが重要ですよと言わんばかりに話を続ける。

「オレは貸しってのが心底嫌いでね。後々がすげー面倒臭いんだよ。そんで借りたら返す。つまりは等価交換ってやつだ。あんたが望むであれば、命に別状ないことならどんなことだって頼まれたっていい。諜報でも偵察でも報復でも復讐でも強奪でも強盗でも救出でも救済でも、ありとあらゆることをしてもいい。なんなら、オレのケツ掘ったってかまやしない。いい話だと思うが、どうだい？」

ルイはもう挑発気味に笑うでもなく、淡々と事実を述べるかのように言った。ルイの言葉はこの俺、鯨木澪士を試すか、見極めるかのように捉えられた。だが単純にルイは自分の貸し借りを清算したいだけのようにも思える。それは、今まで誰にも頼らず、信じず、独りで生きてきたことの矜持なのか。自分の中では許されないことなのだろうか。

いずれにせよ。

「その話、乗ったよ」

「だろうよ……はっはー、何だ？　さっそくケツでも開拓するか？」

ぶはっ、と俺は実に愉快に吹き出して笑った。

「くくくっ……まあ変態の自覚はあるが、俺は男色家でも少年愛者でもないんでね。そういう腐った淑女の皆様が狂喜するような展開は絶対訪れないよ。っていうかねーよ。ルイはその辺勘違いしすぎだ。俺は猫耳というか猫が好きなだけなのであって、決してショタコンでも何でもない」

「ふうん、よく分からないけどそうだったのか」

「残念？」

「何が、だよ……？」

「大丈夫、俺は猫耳を含めてルイのことは好きだから」

「やっぱり兄ちゃんは危険だ」

ルイはすすすと俺から距離をおく。俺はにやにやしながら、では

さっそくと立ち上がり、ルイの正面に回った。
「んじゃ、さっそくルイにはやってもらいたいことがある」
「お、おう。何でもこい」
ルイは流石に僅かばかり緊張した面持ちで、俺に威勢の良い視線をぶつけた。俺は悪戯っぽく微笑んでから、強張るルイを驚かすように、言った。

「俺に、この街を案内してくれ」

第二十話　偽善を学ぶことも大切　そのにー（前書き）

「独りは寂しい」
「独りは悲しい」
「独りは辛い」
「独りは嫌い」
「故に人は群れる」
「故に人は群がる」
「欠いた心を満たさんが為に」
「限りない孤独を埋めんが為に」
「笑みを絶やすな、嘘を吐き」
「輪から外れるな、自らを忘れ」
「仮面を剥がすな。そして」
「自身を閉ざせ。そして」
「ただ」
「ただ」

「「繰り返せ」」

「さすれば惰性に退屈な日常と」

「しかれば虚構に溢れた世界とが」

「「お前を歓迎しよう」」

第二十話　偽善を学ぶことも大切　そのにー

先輩はいったい何なのでしょう、と殺戮嗜好のとある後輩は言った。

確か俺はその時答えを持っていなかったと思う。後輩は話を続ける。

……きっと僕は人間を失格しているんでしょうけど、先輩は多分、人間を失敗しているんです。先輩は、僕や百鬼(なぎり)先輩みたいに、どこかしら狂ってもなければ壊れてもないし、歪んでもなければイカれてもない。それは確かにその通りなのでしょう。ですが、それはあなたが受け入れてしまっているからに違いないんです。全てを、あるがままに受け入れてしまっている。先輩、僕が初めてあなたを殺そうとした時のことを覚えてますか。忘れたわけではないでしょう。でもあなたは、あなたを殺そうとした僕までも受け入れてしまった。それはハッキリ言って異常なことです。あなたは、例え壊れてしまっても、狂ってしまっても、歪んでしまっても、イカれてしまっても、すんなりあっさり受け入れてしまう。よって先輩はどこにも異常がないように見える……でも、見えるだけです。あなたは……もうこの際言ってしまいますが、あなたは僕が今まで見てきた誰よりも異常です。異常で、異質なんです。僕は、正直恐いくらいなんです。先輩のことが。

俺は、よく分からないよと首を振った気がする。

分からなくていいんです、今は。けど先輩のそれは、ある意味『

最悪』と言われる部位のものなんですよ。あの《名探偵》とは比較するまでもないですが、先輩はある種の『最悪』です。断言します。

それで？　俺が最悪だとどうなるのかな？　と俺は素朴な質問として後輩に尋ねた。

どうもしません。どうしようもないくらいにどうもしません。あなたは周りに直接影響を及ぼすようなタイプではありませんから。ですが、あなたは言ってしまえば鎖のようなものなんです。

鎖？　と俺は小首を傾げた。

はい。鎖です。あなたの存在は、僕らみたいな異常にとっては非常に重要なものなんです。先程、先輩の特性を受け入れてしまうということとしましたが、もっと言えば、僕みたいなのをこっち側に繋ぎとめておいてくれる手綱のような存在なんです。実際、僕は先輩といる限り滅多なことではこの異常を発動させる気は起きません。何故なら、先輩が僕を受け入れててくれるから……認めてくれるからです。先輩は僕にとっては立派なメシアの役割を果たしているんですよ。

メシアって……大袈裟な上に大仰だよ、と俺は苦笑しながら呆れてしまった。まったくこの可愛い後輩はいきなり何を言い出すやら。

先輩が分かってくれなくても結構です。これは僕自身の想いですから。理解する必要もありません。でも、あと一つだけ言わせてください。先輩――あなたは、僕を受け入れてくれた時、あなたの心は僕以上に傷ついたはずだ。これまでもそうだったのでしょう？　あなたは他人を受け入れていく度に、その人以上の傷を負う。躊躇いもせず、臆することもなく、あなたは傷を刻んでいく。あなたはそれを笑って良しとする……失敗です。あなたは人間失敗です。そんな人間がこの世にいていいはずがないのに。ないのに、あなたはここにいる。

俺はいつも感情を表に出さないクールな後輩の、そんならしくない言動に戸惑った。後輩は悔しそうに、悲しそうに、視線を下に向けて俯いた。

……蜜の味を覚えた者は、罪の道に堕ちていくしかない。人間の血の味を覚えた虎が、人間しか襲わなくなるのと同じように。

僕は、あなたを、鯨木澪士という人間を知ってしまった。だが、あなたに責任はありません。僕に問題があるだけです。いいんです、気にしないでください。あなたは悪くない。いいんです、それで。

先輩は先輩のままで。あなたはあなたのままでいてください。

俺は、その通り何もどうにもしなかった。

だから先輩、勝手にどこか消えちゃったりしないでくださいね？　僕とこっち側の鎖を失わせないでくださいね？　僕をこっちに引き止めておいてくださいね？　先輩がいなくなることで、初めてあなたの『最悪』は発動して、僕と、僕の周囲のバランスが崩れ始めるんだから。それは僕だけじゃない。あなたに関わった人全てのバランスが瓦解してくる。滅びの綻びが顔を出す。それが先輩の犯した唯一の罪だ。もう戻らない。戻すことの出来ないくらいに、あなたは爆弾を抱えすぎたんだ。それがいつ予告なしに爆発するか、僕は恐いんです。先輩が、恐いんです。

俺はそれ以上のことは覚えていない。確か、後で後輩に缶コーヒーを奢ってやったことだけは覚えている。後輩の照れたようにぶっきらぼうな笑いも。その日はやけに夕日が強烈な紅を放っていたということも。

今は遠い昔のことのように思える。

それにしても、俺は何故そんなことを急に思い出したのか。ノスタルジーな心境にでも陥りたかったのか。それとも単に目の前に広がる水平線に沈んでいく暮れなずむ夕焼けを見て、俺の海馬（某社長のことではない）が刺激され、記憶が呼び起こされたのか。しかし何だか、元の世界にいた頃が遠い昔の出来事ように思えて仕方がないな。あーあ、まーだ情けなく昔のことをずるずる引きずってんのかよ、俺は。まったく喘息が全身にまで回ったみたいだ。煩わしいったらありゃしない。喘息全身だ！

「ほれ兄ちゃん、ここの高台からの夕日の眺めはこの街一番だ。女を連れてきて甘い言葉で落とすもよし、独り泣きたい時はあられもなく叫ぶもよしだぜ」

「へーなかなかだね」

と俺はそこの屋台で買った、木の棒に肉団子をぶっ刺してじっくり火で焙ったものをパクついた。ルイもまた同様にパクついていた。

「……とまあ、一通りこれでセレンの見所と名物のうまいもん巡りは終了ってことなんだけどよ。なあ兄ちゃん、こんなんでよかったのか？」

「ああ、うん満足」

「本当、変わった奴だな、兄ちゃんは」

ルイがふはーと嘆息しながら言った。同時に猫耳がピョコピョコ動いたのが可愛かった。

「そういえば、ルイって耳はあるけど尻尾ってあるの？」

「はあ？　獣人だぞオレは、んなもん当たり前だろが。普段は服の中にしまってあるだけだよ……まあ、獣人って言っても俺の場合は、半分、だけどな」

「半分？」

「オレの血縁上の父親は人間で、母親は獣人なんだ。だからオレも

顔つきが他の獣人よりかは人間に近い」
「へーそうなん」
ま、オレのことなんてどうでもいいんだよ、とルイは食べ終わった肉団子の串でシーハーと歯茎の間をほじくり、それが終わるとプッと串を高台の縁の下へと吐き捨てた。
「お行儀が悪い」
「育ちが悪いもんで」
ルイはにゃはは、と悪戯っぽく破顔した。
一件目、ハルベイのパン屋――惣菜パンが美味かった。
二件目、セレン中央銀行――この世界にでもサラリーマンはいた。
三件目、パロック雑貨店――大抵の生活必需品はここで揃えられるらしい。
四件目、セレン商業ギルド――職を探したいならここ、職を始めたいのならここ。
五件目、ラサニール本家――柵で周りを囲ってあったので遠目から観賞。大きな屋敷で、ここがサラサの実家だと思うと、何だか感慨深いものがある。だが少しルイの様子がおかしかったのは気のせいだろうか。
六件目、ガウリスの鍛冶屋――これは単に通り過ぎただけなのだが、偶然、武器の整備をしていたらしいクリスさんとアンジェリカさんに店のガラス越しで出会った。ルイのことについては、一日この街のガイド役を頼んでいるのだと紹介した。そうしたらアンジェリカさんは何故か安心したような様子であったが、クリスさんはどうしてか残念そうだった。俺には二人の思惑がさっぱりだったが、きっと知らない方がいいに違いない。
そして最後の七件目――セレンの北西部に位置するこの高台。遠く先の水平線まで臨める最高のスポットだった。石造りの縁から身を乗り出すとセレンの街並みも俯瞰出来て、散歩がてらつい訪れたくなる場所だった。
以上セレン良スポットベストセブンでした。

薬〇印の新名物の紹介も、セレン街コレクションもやりたかったのだが、残念ながら、番組の時間と経費が大人の事情でごにょごにょ。

とまあ。

閑話休題。

要するに、ルイのおかげで俺は今日一日大変楽しく過ごせたということで一つ。

「なあ、オレの家がすぐ近くにあるんだけどよ、寄ってくかい？ろくなもんはありゃしないけど、茶ぐらいなら出せるぜ」

「ああ、そうだな……」

――遅い。

――遅いよ。

――許さないんだから。

と、俺はそこでイリアの顔がはっと思い浮かんだ。

昨夜は、イリアに大変辛い思いをさせてしまった。独りになる惨さを、孤独に晒される寂寥を、俺自身が最も理解していたはずなのに、それをさせてしまった。不注意故でも、決して許されることではない。

そしてふと、遥か彼方に広がる水平線を眺めていたら、

『人は孤独を恐れるものよ。だって人間は他人との接触により、初めて心を感じることが出来るのだから』

『心を感じたくない人間なんていないよ。もしいたとしても、それは人間じゃない。人間の形をした、醜い何かさ』

遥か、と、彼方という単語からに因んでか、昔孤児院にいた「遥（はるか）」と「彼方（かなた）」という双子の兄妹の言葉が唐突に頭に浮かんだ。幼かったくせに随分とませた口を利く兄妹だったが、何だったかな、『『森が呼んでるのぉー』』と声を揃えてそのまま行方知れずになったんだっけ。懐かしいな、今頃どこで何してんだか……って閑話休題。

んまあ、結論としてはイリアにもうこれ以上辛い思いはさせたく

ない訳でして、俺としては。世界が暗幕を下ろす前にはイリアにただいまといいたい訳でして。はい。

でも、ね。

「うん、じゃあ、お邪魔になろうかな」

「おう、こっちだ兄ちゃん」

まだ日が暮れ始めて時間もそんな経ってないしー、まだ門限には余裕はあるっていうかー、ルイのせっかくのお誘いを蹴るのも何だか忍びないしー、うん、そんな訳で。

俺は先を行くルイの背中を追った。

それらに至っては、もしかしたら予兆だとか第六感だとかいう胡散臭い特殊機能がにべもなく働いたのかもしれないが、俺としてはそれは大いに歓迎出来るとは言い難く、しかし、いかんせん、結局それらの物事からは決して逃れることのない運命（さだめ）にあったのかもしれないと、俺は思う。時間や時代、次元や空間を超えて、《それは》俺に必ず降りかかる出来事だったのだろうと、俺は師匠の言葉を思い出す。

『まあでも、ただいつだって注意を怠らないことだね。君はいつか君以上の最悪に出会うと思うけど、その時こそ、君の覚悟が試される時さ』

確かに、と俺は頷かざるを得ない。注意を怠った結果がこれなのだから。

ここで一つ余談だが、いつか俺が突拍子もない奇々怪々な機会から、ひょんなことで『出遭って』しまった、あの《名探偵》は、師匠の言うところである俺以上の『最悪』であった。それもとんでもない。でもそれは異次元、別次元というレベルの話であって、というかお話にならない事柄であって、その時は俺に覚悟は塵程にも必要とされなかった。例えば、それは広大無辺な城壁を見上げ、これを素手で突き崩せと命令されたようなもので、はなっから到底比較するまでもない事実に諦観観念を催すというか、ふざけたくらいに差があるということは、もはや別のベクトルであるべきことと考えてしまうというか、本質は同じだが、つねに平行線を辿り、断じて交わることのないものと思えてしまうようなことなので、俺はあの人物と対面した際に、そう、言ってしまえば、俺は彼を受け入れてはいなかったのだ。

存在としては、何とか受け入れはしたが。

人間としては、どうしても受け入れ難かった。

まあアレは、俺以上の最悪と言うよりかは、俺より異常な最悪であったと言うべきだろう。といっても、あの人は『最悪』と言うよりも、『災害』たる人物であった訳であるが、まあ、それはひとまずは置いておこう。

何より今俺が最優先すべきは現状の説明であるからして、さっそくその実行に移りたいと思う。

俺はルイに誘われ、ルイのマイホームにお邪魔することになった。

ルイの家があったのは所謂、『貧民窟（スラム）』と呼ばれる場所の、建設調和などどこへぞ消えたか、乱雑に増築、改築を重ねたような、まるで一つの城のようにも見える集合住宅地のとある一角だった。

六畳二間の狭い空間だった。それでもここら辺で比べれば、子供一人と母一人住むに十分すぎる広さだという。四畳一間に子供が五

人住んでいる物件もあるとか。
ルイの母親については此処まで来るに事前知識を享受していた。
病気で床に伏せっきりの母がいるのだと。ルイは毎週母親の為に薬代を稼がねばならないといけないのだと責任強く言っていた。その折、ちらっと俺の方を盗み見て、
「だから、兄ちゃんには感謝してる、んだからな。あ、ありがとよ」
と俯いて俺に表情を悟らせまいとがんばっていた。だが、俺にはその時のルイの表情が手に取るように分かっていたので、ルイの苦労も徒労に終わったのことは秘密だ。
ルイは、さあ、あがんな、と俺を招き入れ、俺はお邪魔しますとだけ言ってドアを潜った。
俺は、きっと——分かっていたのではないかと、今になって思うのだ。
嫌な予感がしていたのではないかと。
予兆でも第六感でも。
何でもいいけど。
足を踏み入れた瞬間、水捌けの悪そうな、かび臭い風が俺を駆け抜けた——と同時に何かの、何らかの異臭も鼻に突いた。
「茶でも淹れてやるから、奥にいきな。母さんにも兄ちゃんを紹介したいからよ。オレの新しい職場として」
にししししっ、とふざけて笑うルイを尻目に、俺はもう気が狂いそうな心境だった。
目の前を、一匹の蝿が通り過ぎた。
俺は額に冷や汗を垂らしながら、生唾を飲み込み、その可能性を否定した。
そんなこと、そんなことがあるはずがない、と。
でも身体は正直だ。既に鳥肌がぞわぞわと謙虚にスタンバっていた。
さっきから蝿がぶんぶんと文字通り五月蝿い。いつの間にか一匹

から三匹に増えていた。
一歩踏み出す。一歩ずつ進む。
覚悟はあるか？　と誰かが尋ねた。
目の前に、スライド式の襖のような仕切りがあった。
覚悟はあるのか？　とまた別の誰かが尋ねた。
俺は仕切りに手を掛けた。
受け入れる覚悟はあるか。
迎え入れる覚悟はあるか。
許し入れる覚悟はあるか。

覚悟が必要なことなら、もう既に覚悟している。
だから俺は迷いなく、その仕切りを解き放った。

ヴヴヴォヴヴヴぉぉヴォォぉぉおおおおおおおオオオオオオおお
おおおおおおおおおおおオオオオオおおおおおおおおオおおおおォ
ォォォォォォおおおおおおおオオオオおおおオオォぉぉぉおおおお
オオオオおおおおオオオオぉぉぉおおおおおおおおおおおオオォォ
ォォォォォォンンん……………………………………………………………………
……………………。

おぞましい。オゾマシイ。ぞっとするくらいの蝿が黒い一つの生命体のように空中を這い回り、蠢き回り、俺の身体に無許可にも張り付き、そして飛び立ち、やがて開いた窓から霧散するように数を減らしていき、どうにか黒い視界から、色を取り戻すことが可能になった。

「ん、兄ちゃんどうした？　そんな所で突っ立って？」

ルイが盆に三つコップを載せて俺の脇をすり抜けた。

「ほら母さん、これがオレの言ってた変な兄ちゃんだ」

ルイはその部屋にある唯一のベッドに近寄って、言った。

「今日からさ、オレ、兄ちゃんのところで働くことになったんだ。ほら、オレが兄ちゃんに貰った金の分だけ。あ、ほら母さん薬の時間だよ」

ルイは盆の中から一つ、吸い口のある器を手にとった。どうやら薬湯らしいそれを、ベッドの上で横たわる《ソレ》の口らしき箇所へ運んでいった。

「はは、苦くてもちゃんと飲まなきゃだめだよ、母さん」

流し込んでいった薬湯は、がぼがぼと至る所の穴から漏れ出していた。

「ほら、兄ちゃん、これがオレの母さんだ。すげー美人だろ。でもだからって惚れるなよ？」

にゃははは、と冗談めかして笑うルイを、俺はもう見てられなか

った。

そこに立っているのは城壁でも何でもなく、等身大の『最悪』に他ならなかった。

そして俺以上の、最悪にとり憑かれた、紛れもない、比べることの出来る、一番身近で生々しい実態。

「うん、今日は母さんの顔色も良さそうだし、久々に夕食は豪華に……お、おおう！　何だ何だ兄ちゃん！　いきなり抱きついたりして……？　……あ！　え!?　ちょ、待ってタンマ！　兄ちゃんその気があるって、え？　冗談だろおい!?」

俺はルイの焦り切った声も気にせず、ただ固く、強く、ルイを抱きしめ続けた。

次第にルイも俺の変調に気づいたのか、俺に少し強張ったままの訝しんだ声で訊いた。

「なあ、兄ちゃん……？　いったいどうしたんだよ……？」

「……ルイ。俺はこれから酷いことをする。酷なことを言う。でもそれは違えないようのない事実であり、真実であり、現実であることをどうか承知して欲しい。でも君はきっとすぐには認めようとはしないだろう。もしかしたら激昂して俺を殴るかもしれない。それは別に俺はかまいやしない。好きなだけ、気が済むまで殴っていい。それでも、俺はこのことを君に告げなくてはならない。否、告げなくてはいけないんだ。だから、耳を澄ましてよく聞いて欲しい」

ルイがごくりと喉を鳴らすのが分かった。心臓も激しい十八ビートを奏でているのが伝わってきた。

俺は間違いなく残酷な奴で、ルイに耐え難い過酷なことを今から告白する。それはルイにとっては大きなお世話以外の何ものでもないんだろうけど、押し付けがましい偽善に過ぎないのだろうけど、でも、俺は――――――――――

「君の母親は、もうとっくに死んでいる」

そう、ルイの耳元で囁いた。

第二十話　偽善を学ぶことも大切　そのにー（後書き）

裏設定

キャラは濃い？のだろうけど本編には登場しないシリーズ

名前　妹の遥（はるか）&兄の彼方（かなた）

前書きにて初登場。
互いのことはハル、カナと呼び合っている。十二歳くらいの双子。
双子にして双子。双子以上の何者でもない。
外見そっくりなのでたまに入れ替わってたりする。互いの境界線はないに等しい。
十歳のころから澪士の孤児院にいたが、謎の失踪を遂げる。
きっと森が呼んでいたせいである。不思議の星の双子ちゃんだからしょうがない。
昔そんなアニメのタイトルがあったような。作者の気のせいでしょうか？

えーと、んなわけで「偽善を学ぶことも大切　そのにー」でしたー。
タイトルは決して考えるのがめんどーとか思った訳ではなくてですねえ、はい・・・すいません、ネタ切れです。いえぃー。
はい、いえぃーじゃありませんね。次回はまじめに考えます。
ルイくんウツ展開に関しては勘付いてた読者もいるんじゃないでしょうか。
伏線の使い方がよく分からない作者です。
ではでは、また耳介にて。

「うそいか」更新しましたー。良かったら見てね。

第二十一話　偽善を学ぶことも大切　そのさーん（前書き）

「けらけら。ねーそういや何で人間には尻尾がないんだと思う？
蜉蝣（かげろう）？」
「ああ？　んだよ藪から棒に」
「いやあ……けらけら。ほら、あったほうが可愛いじゃん。猫耳もさ。それで何でないのかなーって思ってさー、けらけら。素朴な疑問さ」
「はんっ！　んなもん至って簡単だぜ、蝪蛄（かつろう）」
「え？　何々？」

「んなもん尾っぽがブチ切れるまで腰振ってた奴が生き残ったからに決まってんだろ」

第二十一話　偽善を学ぶことも大切　そのさーん

しん、と辺りは音を無くして、世界は動きを止めたようだった。
俺は強く力を入れすぎていた腕を解き、ルイと正面を向き合って視線を繋げた。
「ルイ、しっかりしてくれ」
ルイは、焦点の合わない瞳で、ただ、
「……に……にゃはは」
笑っていた。
一向に生気のない死んだ目で、夢に捕らわれたかのような光のない瞳で、口の端を醜悪に持ち上げ、笑っていた。
「ははは、は、何、言ってんだよ、兄ちゃん？　母さんが、死んでる？　んなわけないじゃん。ほら、見ろよ？　生きてるだ、ろ？　死んでなんか、いないさ」
悪い冗談だ、とルイは虚ろで空っぽな笑みを返した。
俺は沸き起こる衝動に歯噛みして、立ち上がる。ルイから離れ、彼の言う『母さん』なるモノの所まで近付いた。
ベッドがある。その上にルイの母親がいる……否、ルイの母親だったものが、静寂を貫き、そこに横たわっていた。俺は《ソレ》から覆っていた薄い掛け布団を、なるたけ迷わずに剥いだ。
「！？」
布団を剥いだ折に、蝿が再び何十匹か飛び立ち、二、三匹口の中に入った。荒々しい嫌悪感にすぐさま咽て、口の中の異物を吐き出した。
そして。
「……っ」

思わず、呻きそうになった。
まずは鼻が？げそうな異臭もそうだが、何より肉体の腐乱が激しい。腐り果てて何箇所か骨が露出している。特に顔面は酷い。皮膚は浅黒く変色し、眼球は落ち窪み、半開きの口中から蛆が蠢いているのが見え、しかしそれ以上に蛆は際限なく身体中を這っている。
死体を見るのは初めてではないが、正直、ずっと見ていていられるものでもない。この想像を絶する悪臭も同じく然りだが、久しぶりだとはいえ、やはりキツイ。
だから、呼吸を止め、目を逸らした。
死後数週間、いや数ヶ月は確実に経っている。その間、ルイはずっと息絶えた母親の面倒を見てきたというのか。
肉が壊死してようとも身体を拭き。
物言わぬ母親の亡骸に絶えず語りかけ。
何も受け付けようとしなくとも薬や食料を運び。
何という。
想像するだけで吐き気を催す――――気持ち悪さ。
そう、気持ち悪い。
目前に骸と成り果て臥しているソレよりも、数段、数倍――気持ち悪い。
「ルイ、君は、コレを見て何とも思わないのか」
ルイは、けたけたとその場から動かずに笑って、
「何だよ、いつも、の母さんジャない、カ。兄ちゃん、ソンなに乱暴にし、ないで、くれ。母さンガびっく、りしテルじゃ、なイか」
けたけたけたけたけたけたけたけたけたけたけたけた。
「……ルイ、しっかりしてくれ」
君の母さんは、もう死んでるんだ。とっくに終わってるんだ。
「何故、君が、現実を見ようとしない。認めようとしない。俺に現実主義を語ったのは嘘だったのか？　それとも……」
歪（ゆが）んだ情愛がそうさせるのか。

歪んだ運命がそうさせたのか。
どちらにせよ。
いずれにせよ。
俺はルイを起こさなきゃならない。
夢から目覚めさせなきゃならない。
君の弱さを暴かなければならない。
幻惑から解き放たなきゃならない。
その為には、酷いこともするし、酷なことも言う。その覚悟も用意してある。だから、俺は、
「ルイ、理解ってくれ、君の母親は既に……」

「うぅゥるさぁァィイィぃぃぃィィイイぃぃぃィィぃぃイイぃぃぃぃぃっ！！」

あらゆる音を拒絶するように耳を塞ぎ、いかなる者にも牙を剥くかのように狂い叫び、ルイは慟哭するかの如くあらん限りの声量で、吼えた。
「うるさいぃいうるさいうるさいうるさっいいぃぃぃいいいぃぃい！　黙れ黙れ黙れ黙れ！　死んでなんかいない！　母さんは死なない！　ふざけるな！　母さんは、母さんはどうでもいい奴なんかじゃないぃっ！　お前は！　お前は母さんを侮辱する気かぁっ！　許さねえ、許さねえぞっ！」
まるで一匹の獣が、そこにいた。

世界はどうでもいい奴しか殺さない。
それはルイがこれまで生きてきた中で見つけた数少ない真理の一つだった。
意味の無い奴は殺す。
価値の無い奴も殺す。
世界はいつだって非常で無常で不合理で不条理で。
終わりがあっても始まりはなく。
始まりがあっても終わりはなく。
人は死に。人は殺していった。
下らない理由で、大した意義もなく。
種族間の傾向はあれど、そこに隔絶した違いはない。全てが共通した絶対意思というものが偏在してある。
体毛が濃いか、尾が生えているか。耳が長いか。牙が生えているか。背が低いか、高いか。指の本数が合わないか。目や髪は何色か。体格は逞しいか、乏しいか。言葉が通じないか。オツムは足りてるのか。
されど、少なからず人間という形をしている時点で、種族間の相違など無いに等しい。
その口は他者を罵る為にあって。
その手は他者を殴る為にあって。
その足は他者を蹴る為にあって。
みんな、同じなのだ。
だけれど、ルイは少なくとも識っていたのだ。

その口は他者に優しく語りかけることも出来るのだと。
その手で他者に救いを差し伸べることも出来るのだと。
その足は他者の為に走ることも出来るのだと。
ルイの母は、そうルイに教え諭していた。
誰かに罵られたって、殴られたって、蹴り飛ばされたって。
憎しみだけは抱かないで。
あなたが傷つくことは勿論悲しいけれど。
あなたが憎悪に満ちて、人を傷つけることはもっと悲しい。
器用じゃなくてもいいから、不器用でもいいから、他人を想いやれる子になって。誰かを愛してやれる子になって。
誰にでも優しい子じゃなくて、誰かに優しくなれる子になって。
神様だって、きっと見ていてくれるから。
ルイ、それが私の願いです。唯一の望みです。
ルイの母は、静かに、しかし力強く、床に臥せた身体で、ルイにそう語り聴かせ続けた。彼女自身、自分がもう長くはないのだと理解していたのだろう。
彼女は優しかった。
そして美しかった。
誰にでも、分け隔てなく。息子のルイだけでもなく、身寄りのない孤児達にも食料を分け与えたり、寝床を貸すこともしばしばあった。ルイはそんな母に呆れながらも、誇り高く思っていた。そして、この地域の子供達は皆彼女のことが好きだった。だが、数年前から、心労が祟り、病魔に身体を蝕まれ、床に着くことが多くなった母の代わりにルイは、母を楽にさせようと懸命に働いた。その頃からか、ルイが盗みを始めたのは。奪うということを覚えたのは。
だがしかし、ルイの懸命ながんばりも虚しく、彼女はひっそりと物静かに逝ってしまった。
自分にそっくりな綺麗な顔立ちの、まだ若い母の、時期に冷たくなるであろうその手をぎゅっと握り、ルイは思った。
世界はどうでもいい奴しか殺さない。

どうでもいいヘマを仕出かした奴は殺されて、どうでもいい欲に走った奴も屠られ、どうでもいい矜持にしがみつく奴は死んでいき、どうでもいい存在はいつの間にか消えていく。

だったら、母はどうしてだ？

母は、何故死んだ？

否。

違う。

否、否！　否否、違う！

死んでなんかいない！

これまで他人の為にどれだけ自身を犠牲にしてきたか、他者の為にどれだけ自己を磨り減らしてきたか。優しい母が、美しい母が、慈悲に満ち、慈愛に溢れ、修道士だって地に堕ちるくらいの生き方を、生き様を見せてきた母が、こうも短命に終わるはずがない。

ありえない。

アリエナイ。

――母さんはどうでもいい奴なんかじゃない。

カミサマダッテキットミテイテクレルカラ。

母が死んでしまうのが、運命だと、世界の意思だとでもいうのなら。

そんなもの、間違っている。

オレは、認めない。

母さんは死んでなんかいない。これまで通り、生きている。

今はただ、調子が悪いだけなのだ。

すぐにまた、元気になる。

カミサマダッテキットミテイテクレルカラ。

自分の頭を撫で、いつものように優しく笑いかけてくれる。

ルイは後戻り不可能な自己肯定を繰り返し、その盲目なまでの言わば思い込みで、母親の死を否定した。一度自分の中で確証されてしまった持論は、やがて思想ばがりでなく、脳髄を、思考を、意識を、身体を、まるで母親を蝕んでいた病魔がルイに乗り移ったかの

ようにじわじわと侵食していった。
体温が消え去っても。
死斑が浮かび上がっても。
肌が黒く変色していっても。
異臭が鼻を突こうとしても。
蛆がわんさか湧いてきても。
ただ飽きることなく語りかけ、身体を拭き、食事を運び、薬を飲ませ続けた。
その光景は、一種のネクロフィリアを彷彿とさせ、彼女を慕い、ルイの仲間だった周囲の者も、母親の屍骸の面倒を見続けるルイを気味悪く思うのと同時に、哀れみながらも距離を置きただ見守ることだけしか出来なかった。
彼に母親の死を認めろと言ったのは何も澪士だけではない。ルイの仲間内の何人かが、ルイに申告したことがあった。お前の母親は死んでいると。
全員立てなくなるまで叩きのめされた。
彼にはもう、現実が見えていない。
これが決定打だったのだろう。
カミサマダッテキットミテイテクレルカラ。
目を瞑り、耳を塞ぎ、口を閉じ、大切な本当を避け続けたルイは、都合の良い妄想で自己を保とうとしたのだろう。
だからこそ、ルイは叫び、吼える。
母さんはどうでもいい奴なんかじゃねえ。
死んでいるとか言わせねえ。
母さんを侮辱する奴は例え誰であったとしても容赦はしねえ。
母さんを――――オレを否定する奴は何としてでもブッ飛ばす。
オレはオレを肯定する。否定なんて、絶対させやしない。
頑なまでのその姿は、
「うあああああああああああああああああああああああああっ！」

まるで、一匹の獣のような。

ルイは今にも俺に飛び掛らんばかりの荒息で睨みつけていたが、どうやら僅かに残った理性でその激情を押さえつけているようだった。これ以上俺がいても、ただ彼を苦しめるだけなのかもしれない。まあ、俺が消え失せるにしても、ルイが苦しみ悶えることには変わりないのだろうが。

スイッチはもう、押してしまったのだから。

「少し時間をあげる」

俺はなるべく落ち着いた声で、ゆっくりと諭すように言った。

「明日、またここに来るよ。その時までに、君の答えを聞かせてくれ」

「……」

ルイは不動にして射殺すような視線を向けたままで、俺はそれ以上何も言わず黙って部屋を後にした。

乱雑に増築された集合住宅を背にしたところで、俺は顔の酷く腫れた少年と目が合った。と言うよりも、少年が俺のことをじっと意味ありげに見つめていたのだ。近くにまで歩いていって、俺は立ち止まった。

「……あんた、さっきルイと一緒にいたな」
「ああ」
俺は頷いた。右頬が紫に染まった彼は、
「ルイがついに身体でも売ったのかと思ってたけどよ、どうやら事情が違うようだ。……あんた、ルイの母親を見たな？」
「……ああ」
「だったら分かるだろ？　もうルイのことは放っておいてくれないか」
よく見れば顔以外にもあちこちに生傷のある少年は、俺に忠告するように懇願した。
「聞いていたのか？」
「あんだけ大声で叫べばな。それにここの壁は薄い。すすり泣きだってうるさいくらいに聞こえる」
それは……やはり、そうなのだろう。
「そう。でも、俺はルイを放っておけないよ」
「それが、あいつを傷つける結果に終わったとしても？」
「このまま、滅んでいくルイの姿を見るよりかは」
「……分かった。じゃもう、何も言わねえ。何がどうなってもあんたの好きにしな……でも、一つだけ」
少年は頬の痛みの所為か、引き攣ったような笑みで、
「あいつは、ルイはいい奴なんだ。不器用だけど、優しい奴なんだ。他人に優しく出来る奴なんだ。あいつのお袋さんも、生きてた頃はすげー美人で、おれらみたいな薄汚いガキにもメシを分けてくれたりして……だから、だからさ、お袋さんが死んじまって、ルイは少しおかしくなっちまったけど、けどよ、手遅れじゃねえんだ。まだ、間に合うんだ。あいつは、ただ、クソガキみたいに駄々捏ねてるだけで、それで……」
「分かってる」
俺ははっきりと、言った。少年はしばし口を閉ざして、何かを言いあぐねていたようだったが、やがて、

「ルイを、頼むよ」
「ああ、任せろ」
名も知らない少年は、任せた、と笑って、集合住宅の方へと消えていった。俺は空を見上げて、
「……日が、沈む」
今日が、終わる。

「ただいま」
「おかえり」
随分と慣れ親しんだ言葉の掛け合い。この短い二言の単語を交わしただけで、この行き所のなかったやるせない気持ちが大分楽になった。
「あら、レイシ」
「ん？」
イリアは、少し眉根を寄せて、
「ひどく、屍臭がする」
「……」
「……まあ、あえて深くは訊かないけど」
「ごめん」
「謝らないでよ。詮索がそんな好きじゃないだけ。でも、面倒臭いゴタゴタに足を突っ込んでいるんだったら、早めに手を引くことね」
「うん……ありがと」
「礼を言って欲しい訳でもないの。ほら、お風呂の準備してあげるから、さっさと入ってその臭いを何とかしてちょうだい」

多分、服からではない。この自動洗浄機能が付いたグリンダさんお手製の一品から臭った訳ではないだろう。故に、それ以外の露出した部分。主に頭や髪から臭った訳なのだろうが……イリアめ、目聡いな。否、鼻聡いとでも言うべきか。いや、そんなことではなくて。自分ではまったく気にしていなかったが、やはり臭うものだろうか。では、ルイは一体どうなのだろう。俺は決して死体とかに見慣れている訳ではないので、臭いとかそういうのに敏感な方ではないのだが、ルイと一緒にいた時はまったく気づかなかったし、気にもしなかった。だからこそ、ルイの自宅で、あんなに驚くことになった訳だが。

なら、イリア？

「ん、何よ？」

「いや、何でも」

そういや風呂についての説明がまだだった。ここから海岸沿いに歩いていった場所に丁度良い岩だながあり、時折イリアはそこに魔術で熱した水を入れて即席の露天風呂をこしらえるのだ。海を眺め、波の音を聞きながらで、なかなか乙なものである。

「……百鬼（なぎり）の奴なら、もっとうまくやるんだろうけどなあ」

ふと、知人であるとある夢遊病者のことを思い浮かべた。

あいつなら、もっと的確な対応を知っていて、もっと正確な対処をとるのだろうけど。

今の俺にはこれが精一杯。

そして救うことは出来なくても、せめて壊してあげなくてはならない。

悲しい事実を告げ。

冷たい真実を伝え。

消せない現実を教え。

その幻想をぶち殺す、なんて、どこぞの幻想殺しの言葉ではないが、まさしくその通りだ。

大きなお世話かもしれない。

迷惑なお節介なのかもしれない。
そのままでいた方がずっと幸せだったのかもしれない。
でも、だからってそのままルイが幻惑と虚構に身を滅ぼしていくのを、静観し、傍観するだけというのは、非常に我慢ならない。偽善でも、自己満足でも何でもいい。単に俺が嫌なだけなのだから。
目の前で、誰かが終わっていくのは、もう、御免(ごめん)だから。
「なーんて」
柄にもないことを、思ってみたりした。

第二十一話　偽善を学ぶことも大切　そのさーん（後書き）

裏設定

キャラは濃い？のか知らんけど本編には登場しないシリーズ。

名前　百鬼紅夜（なぎりこうや）
通称　《夢魔（スリープウォーカー）》

典型的な中二病っぽい名前と、二つ名まであるという中二っぷり。
澪士のいた学園で『論外児』という、「問題にならない問題、問題することすら問題、つまりは論外」という触れ込みの問題児のハイエンドみたいな称号を得て、こんな二つ名が名づけられたそうな。
いつも眠たそうな目をして、というか寝ながら歩いたりしてる。
ちなみにえすぱー。精神攻撃が得意。

澪士曰く、

「あいつが本当に覚醒したら、何が起こるか分からん」

で、あるとか。

はいはい。さてさて。サイハテ。
北の大地に赴き、青白い恋人を抱いて帰ってきた作者の八日ぶりの更新です。行進です。後進です？
ということで、偽善を学ぶことも大切　そのさーん　でしたー。
はい、うん。タイトルね。

べ、別にタイトル考えるのがメンドかったからってわけじゃないんだからねっ！

……ああ、すいません。ツンデレ化しても駄目ですよね。ごめんなさい。

次回は本当に新しいの考えますので。猛省。

ってなわけで、また次回にて。感想待ってます。みんな様の意見とか是非とも聞きたい所存でございますので、どうか。

ああもう一つ。宣伝です、すいません。

「嘘以下の回想」後進しますたー。どうぞお暇でしたらお立ち寄りを。

第二十二話　死が等価値だなんて誰が決めた

朝日が顔を出し、どれくらいの時間が経った頃であろう。
「母さんはどうでもいい奴じゃない」
それはもはや呪詛のように、自分自身だけに言い聞かせる為だけの言葉となっていた。
「ああ、そうだね。君の母さんは素晴らしい人だったと聞いている」
彼はただ事実を述べるだけのように、淡々と言った。
「母さんは死んでない」
なおもまだ、哀れなまでに自己暗示を繰り返す。
「何故、そう思うんだい？」
彼は尋ねる。ニュースキャスターのように淡々とした調子のまま。
「世界は、どうでもいい奴しか殺さない」
ルイは自分の唯一見つけることの出来た真理を呟く。
「……確かに、そうかもしれない。それもまた世界の真実の一つなのかもしれない。でも、なら君は、自分の母親の死をどうでもいいことにするのか？」
「……」
「君はもう知っているし、理解もしている。後はただ受け入れていないだけだ」
「……か、母さんは」
「君の母さんはどうでもいい奴じゃないし、素晴らしい人だった」
「し、死んでなんか……」
「君の母さんは死んだ。これは絶対だ。でもな、一つだけ言わせて

くれ」
彼は一呼吸おいて、
「この世に、どうでもいい奴なんかいないんだよ」
「……ぁ」
やめろ。
「この世をどうでもよく思ってる奴ならけっこういるんだけど、でも、この世にどうでもいい存在なんかいないんだ」
彼は淀みなく続ける。
「君の母さんが死んだのは誰のせいでもない。世界のせいでもない。ましてやルイのせいでもない。けれども、愛する者の死を受けとめられないのはな、それはお前自身の弱さのせいなんだよ、ルイ」
「……ぅぅ、ぁッ」
言うな。
「ルイ、君は――――お前自身の弱さのせいで、母親の死を侮辱するのか。お前は自分で自分の母親を汚辱し、困辱させるのか」
「……ううぅぁぅっ」
それ以上、何も言わないでくれ。
「お前は母親の死を辱め、陥れ、そして汚したんだよ。ルイ、それは愛じゃない。ただの甘えなんだ」
甘えなのだと、彼は言う。彼の放つ言葉は一々短剣のように鋭く、自分の情けない精神を抉っていき、巨大な槌のように荒々しく、自分の幼い心の牙城を破壊していく。
でも、それを――その事実を認めてしまったなら。
受け止めて、しまったなら。
受け入れて、しまったなら。
「……オレは……」
自分は、独りになって、しまうではないか。
母が亡くなり、自分は、孤独ではないか。

独りは寂しい。
独りは悲しい。
独りは辛い。
独りは嫌い。
「……嫌だ……」
独りは、嫌だ。
頭を抱え、蹲る。そうしないと、身体がバラバラ千切れてしまいそうな気がしたから。耳を塞いで、目蓋を閉ざす。そうしないと、今聞こえていることが、見えているもの全てが、いとも容易く崩壊し、自分のいる世界が、突然音もなく消失していくような気がしたから。
だが、それもまただの妄想で。
結局、現実逃避の一手段にしか過ぎなくて。
虚構で塗り固めた脆過ぎる自身の殻は、もう何の用途もなさない。薄い壁を取り払ったら、そこに残るのは下らない現実否定に身をやつした幼い自分。辻褄の合わないご都合主義の自己定義で身を固めただけの、妄信という名の鎧を剥ぎ取られた裸の自分は、何も出来ない、何者にもなれない、ただの泣いているだけのガキだった。
でも。
優しく、愛でるように。
温かく、慈しむように。
この頭をゆっくりと撫でる大きな手は。
幻想でも、妄想でも、作り事でもなく。
本当だと、本物だと。
「それに、そろそろ母さんを休ませたら、どうだ?」
「……ごめんなさい」
オレは、信じたかった。

言葉ほど意味の無く、虚しいものはないという。
それは意図を持ったただの音であり、数瞬の内に儚く残響した後、無だけがポツンと残るだけの代物。
蹲り、地に額を付け、嗚咽を漏らすルイは、終始ひたすらに「ごめんなさい」と謝り続けていた。それはいったい誰に対する言葉なのか。母親に対する謝罪なのか。自分に対する弁明なのか。それとも世界に対する赦罪なのか。
そこには多分、意味なんか無いのだろう。虚しいものに違いないのだろう。
いくら言葉を重ねたって、過ぎ去り失ったものは帰ってはこない。悲しみの反動で繰り返される嗚咽も、吐き出される後悔も、そこに大した意義はない。
何故ならそれは、既に彼の中で簡潔に完結してしまっているからであり、終了してしまったものに意味を求めるなど、それこそ無意味というものだろう。今はただ、ルイの気持ちに清算がつくのを待つだけだ。
いずれにせよ、俺は取りたてて何も言わずにルイの髪を柔らかく撫でることしか出来なかった訳だが。
まあ、俺なんかが出来るのはここまで。
背中を軽く押して程度のことだけど。

後はルイ自身が決めていくことで。
俺の出る幕はここで終演。
宴は始まってすらいないが。
今回は裏方暗幕の知られざる物語ってことでひとつ。
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」
ルイの呟きはなおも続く。
……その姿は、かつての己を見るようで、あの日、あの頃の記憶に鮮明なデジャヴを与える。俺は頭痛に似た違和感を抱えながらも緘黙し、ルイを撫でる手を休めぬまま、ほんの少しでもルイの救いになればと祈りつつ、目を細めた。
祝おう。
過去の俺との再会だ。
祝おう。
過去の自分にさようならだ。
祝おう。
そして、過去の自分に「おかえり」と言おう。
そしてお前は独りじゃないのだと、時間を掛けてゆっくりと囁いてやろう。
祝おう。祝おう。

第二十二話　死が等価値だなんて誰が決めた（後書き）

むはぁー・・・やっとルイくんの章が終わったずらぁ～。
ちょっとやっつけ感があるのは大いに反省。
他のキャラたちが随分と空気になってた期間だったんだなもし。
という訳で、念のため風化した他のキャラたちのおさらいでもするザマス。
めんどくせーなと思われる方はすぐ飛ばしてください。

「サラサ（サラサラさん）」
ヒッキー。ツン。眼鏡。なんちゃって司書。おぜうさま。

「ラインデル」
執事。何かと怖いじぃや。レイシのトラウマ。

「レヴェッカ」
酒場の看板娘。姐御。フラグは立っているのか・・・？

「ヴァネッサ」
レヴェッカの妹。口がきけない。でも雄弁。フラグはちゃんと立っ

ています。

冒険者組

「クリス」
大剣（クレイモア）の使い手。「うむ」が口癖のはず。うむ。
ちなみに愛剣の名は『ジュワユーズ』。

「アンジェリカ」
弓使い。ピンク髪。貴重なポニテ。ラウルのことがムッチャ好きやねんけど想いを口に出せないもどかしさ！　こいつもツン属性。
ちなみに弓の名前は『パラドックスアポロン』

「ラウル」
追加オプションに無精髭が加えられた。そして乙女の想いに鈍感。

「バリー」
魔道書を抱えた青年。「～っス」が語尾なキャラ。影が薄い。

「グリンダさん」
空気、そして空気。イリアとはとても親しい間柄。

ってな感じですか。次回からは新しい話です。姉御やヴァネッサにも出番があります。冒険者組にも活躍の場が・・・？

ではでは、また次回にて。

第二十三話　待て、しかして希望せよ（前書き）

「言葉なき詩篇を」
「限りなき境界を」
「正解なき世界を」
「終焉なき開幕を」

「「我らは紡ぎ続けよう」」

第二十三話　待て、しかして希望せよ

浮かぶは追憶。流れる追懐。焼きついた追想。
『君は、自分が何故生きているかって考えたことある？』
『お前がっ！　お前なんかがいたせいでっ！』
『死ねばよかったのに』
ピィーガガガッピッピィーダピピーザザーガッガガガジザーッピィィー誰かかの顔ザーギギピギガッビィーいつかの声ィィギィジブリュザイアーズィージィビーザーピビュイーギーザーザー。
『ぶはははははは！　あたしがわざわざ壊すまでもねぇ。お前ぇはとっくに完っ璧にぶっ壊れてるよ』
『……君は、悲しいね……』
ピガーッガッガザーコワシガガザー壊しヤややコワシ屋ピービザークラッシャーズズビガーザーザー砂嵐。砂嵐。
『澪士兄ぃは異常なのー』
『澪士兄ぃは異質だよー』
ザーザー砂嵐。砂嵐。双子ふたハル遥カカナ彼方タタタザザーザーロード中。ロード中。
『ははっ、まだまだよイザナミくん。まだまだ、だ』
『澪士さん、今日はいったい誰と喧嘩してきたんですか？』
砂嵐、砂嵐ザーザジザー師匠ししょーだお師匠様だっしな生臭坊主クソ坊主やんおお、お鯨木先生せんせーだせんしぇーおおっおっおおお父さんおとうさ父さんさんささぴぃ――――――。

『澪士、君の夢はなんだい？』
『先輩、僕は…………あなたを殺したい』
『プププーッ、澪っちってば超ウケルー』
『えへへへー、どうしてわたしってば、いつもこうなんだろうね』
『ねえ、澪士、あの時の約束ってまだ覚えてる？』
――――ああ百鬼（なぎり）、各務（かがみ）、堺崎（さかいざき）、双ヶ岡（ならびがおか）先輩、そそしてああ千曲、ちくちちまチクマ千ちくく曲千曲ちくちちちｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔくま千曲千曲覚えてるオボエテマス忘れる訳ありませんでももう二度と果たせそうにありりゅりません残念ですロード中ロード中ｎｏｗｌｏａｄｉｎｇなうろーでぃんぐナウローディング失敗失敗しましたた只今アクセスがひ非常じょジョジョに込み合っておりますすすしばらく時間をおいてから再びびアクセスををノイズのいずノイズくん不協和音わおんわんわんのノイズいずノイズ――――――――――――。
　深刻なエラーが発生しました。
　しし深刻なエラーがエラーがえっええっエラーエラーが発生しましとぅあたたああアアあああアァアアアアアあああぁぁ。
『まことに勝手ながら、自称《最響（さいきょう）》を名乗らせて貰っているよ』
『さあ、我ら蟲塚（むしづか）、蠢（うごめ）き犇（ひしめ）き這い回り、虱潰しに蝕みましょう！』
『ぎひひひ、《最凶》の名にかけて、虫けらの如くギッチョンギッチョンにしてやるよ！』
『笑えない。それは最高に笑えないよケケケけらけらけらけらけらけらけらけらけらけらら！』
　ダレ、誰だれかの声。知らない誰か。まだ視ぬ《いつか》と《どこか》でのお話。
『のう、×××、これは何じゃ？』
『ちょっとはしゃぎ過ぎやしないか、×××××、お前それでも神様かよ』
『なにおう！　×××くせに生意気な』
　また別の誰か。知らない誰か。《まさか》と《もしも》のお話。

これは、知らない物語。俺も君も僕も貴方も彼も彼女も誰も知らない物語。まだ、まだまだだですｃｏｍｉｎｇｓｏｏｎカミングスーンかみんぐすすーんすーん。

待て。しかして希望せよ。

ロード中ロードーロ中ロー回復しましたしたリカバリーリカバリーりかばりばりー。

やっと戻ってこれた。でもどこに？？？　戻る場所なンテあルの？？？？？？？？？？？？？？？

そうなの？？？？？？？？？？？？　分からないない知らないよ？？？？？？？？？？？？？？

ボクハダレデスカ。

ぶりゃぶあぬいぐふぁあああは千曲千曲ぁぁあぁごめなごめんなさざささいオレは俺おれはああるらゲバラめいぎゅりぶがはもうぶりゅるりぃｒｈｇｍｉｒｇｇｓｄぎゃぼｇｙｉｕｉｒｒーーーー。

ああ、声がする。知らない誰かの知らない声。自分に何かを言っている。呼びかけている。叫んでいる。問いかけている。囁きかけ

ている。
俺に何かを伝えようとしている。
それは警告で忠告で諫言で戒厳で概念で観念で仲裁で天災で罪悪で最悪で救済で重罪で惰性で我精で祝福で宿憤で快楽で諧謔で正解で制外で限界で幻怪の何でもなくて。
虚偽と真実の裏表で。
でも聞こえない。聴こえない。伝わらない。意味を持たない空白だけが突きつけられる。
『　　』
再起動してください再起動してください。
『　　』
今すぐシャットダウンをシャットダウンしてください。
『　　』
電源ケーブルを抜かないでください。
『　　』
もうしばらくお待ちください。
『』
ブツッ。

「……」
パチリと目が覚めた。酷く意味不明な夢を見ていたような気がする。でも、夢の中の俺はそれを全て理解していたような気もする。

まあ、どちらにせよ内容なんてもうからっきし覚えてなどいなくて、目覚めると同時に泡沫へと消えてしまった。

「……ふう」

上半身だけを起こし、ぼぅーと脳みその覚醒を待つ。

昨日は、ルイの母親の埋葬に骨が折れた。

ルイが落ち着きを取り戻した後、俺は彼女を埋葬しようと提案した。亡骸自体は失礼ながら布団で包ませて貰い、とある場所まで俺が担いで『転送』したから公衆に晒すことはなかったが、一番大変だったのは文字通り墓穴を掘ることだった。

まさか本当にこの言葉を体現する日が訪れる日が来るとは思いもしなかったが。

そのとある場所とは丘が広がる共同墓地で、教会が管轄下に置いており、許可さえ下りれば誰でも金銭は必要なく埋葬出来るとか。主に貧民階級の人々が利用するらしい。

俺とルイは合流してから、その墓地を管理者というか、墓守り的なおっさんに話を通すと、さっそくある一角に案内され、無言の内にスコップを渡された。どうやら後は勝手にしてくれということらしかった。

埋め終わった柔らかい土に、ざくっと十字架にした木の杭を最後に打ち付けて、一束の花を添え、黙祷を捧げた。

牧師さんとかは呼ばなくていいのか？　とルイに聞いたが、「本当に祈ってくれる奴だけ祈ってくれればいい」と首を振った。

お布施がぼったくってんだよ、あの糞神父共は、とも。

そしてルイはもう一房花束を抱えていて、少し離れた所にあったまだ真新しい十字架の下に置いた。俺はその墓は誰だったのか、と尋ねると、

「別に……単なる昔馴染みだった奴だよ」

どうでもいいヘマで死んだ、どうでもよくない仲間だった奴だよ、と。

ルイは小さく、キール、と呟いたようだったが、それがその墓の

下で眠る者の名だったのか定かではないが、ふっと悲しそうに笑ったルイの横顔は、以前よりも吹っ切れたような清々しい感じだったことが、なかなか印象的だった。そしてルイはその後もいくつかの墓碑を周り、目を閉じ、祈りを捧げていった。俺も一応はそれに従順した。黙祷。合掌。

そんなことがあった訳で。

「……いちちっ」

筋肉痛ばんざーいである。

と、そこで。

「……イリア？」

家の中にイリアの姿がないことに気づいた。

隣のベッドには布団を跳ね除けたらしい形跡しか残っていないし、台所にも目を向けたがそこにもいなかった。

それに朝日はまだ昇り始めて半刻も経っていないっぽいし。はて、イリアはいったいどこへと消えたか。

「……あ」

ふと、隣でさんさんと生まれたばかりの陽光を降り注いでいる窓から、ちらりとイリアの後姿が映った。

ローブをずるずると引きずっていく小さな背中はそのまま森の影へと消え失せてしまった。

「……ふうん」

俺はそうやって一つ頷くと、軽い麻の寝巻きのまま、家を出た。

イリアには週に何度か朝早く起きてする日課のようなものがあるらしいことは知っていた。俺がイリアに助けられた時も、その日課の帰り道のことだったらしいからね。イリア自身、ちょっとした散歩だと言っていたが、俺はそうだとは思わない。

何故かって？　勘ですよ、勘。

という訳で。

「追跡ぃー」

ザ・ストーキングです。

岬。そこは紛れもない正真正銘の岬に他ならなかった。火曜日にやるようなサスペンスで、最後に犯人が自暴自棄に自供してから自爆して海にダイブするかのような、あの場面に使われる岬そのものである。

が。そこにはある一片の相違があった。海に角を伸ばすように、そりたった岬の先には、二つの墓石があった。いや、墓石と言うには少々無骨過ぎる体もあったが、それは確かに墓石であった。

その亡き者の名が刻まれた石の前にイリアは立っていた。

祈るでもなく。

悲しむでもなく。

恨むでもなく。

憎むでもなく。

ただ、立っていた。

可憐に目を伏せ、儚げなその表情は、見る者を惑わせ、狂わせるかのような幼いながらも妖艶じみた雰囲気があった。歳相応の可愛らしさではない。歳相応に反した凍てつく氷のような端麗さが、そこにはあった。

崖から下はケツの穴も萎む絶壁。潮風も滞りなくイリアの長い髪を乱した。イリアはそんなことは瑣末事としていたって気にするでもなく、無言でその一人だけの空間に閉じこもっていた。

ざぱーんと波が荒々しく叩きつける音。
遠くで海鳥が暢気に鳴いている。
背後で獲物に襲い掛かる前の獣の如く静かに息づく気配。
しばし、時間が過ぎて。
「……はぁ」
と、そこでイリアは短く嘆息し、視線だけを振り向き、言った。
「……別に、いいのよ出てきても」
「あれ、やっぱバレてた？」
「ばればれよ」
後ろの木の茂みから、がさがさとよく見知った顔が出て来た。ぼさぼさの黒い短髪に、寝巻きのままの体たらく。にへらと笑った締まりのない表情。でも誰よりも深い闇と、暗い光を灯したような目をした、不思議で不可思議な彼。
今は誰よりも近しく、親しい存在。
家族、と称すにはいくらか傲慢が過ぎるだろうか。
「邪魔するのも悪いかなって思って」
「ついてきたくせに、変な気遣いだけはするのね」
てへっ☆　と可愛くもない上に何かイラッとくる仕草を彼はしてから、
「それって、誰のお墓？」
と何ともストレートな質問をしてきた。イリアは少し言いよどんでから、言った。
「私の、大切だった人達の、お墓よ」

イリアが大切だった人なのだと語った二つの墓石にある名前を、俺は見る。
見た。
「……それじゃ、もう戻りましょう。お腹も空いたし」
「あ？　え、ああ、うん」
俺は少し戸惑いつつも、先を行こうとするイリアの背中を追った。
……んまあ、詮索なんて野暮なことはするつもりはないけど。
イリアの過去に興味がないと言えば、嘘になるけど。
ま、いっか。
イリアがどうあれ、どうあったことさえ、どうでもいい。イリアも根掘り葉掘り訊かれるのも嫌だろうし。それはどちらもお互い様。だったら、別にこのままでいいんじゃないか。
と、俺は結論付けました、まる。
「今日の朝飯は何にしようか」
俺は追いついたイリアに言った。なるべく、軽い調子で、いつもと変わらぬ有様で。
「そうね、昨日スープが余ってるから温めなおして……」
「いやいや、ここは俺が仕入れてきた米でおじやなんかでも」
「おじや？　それもレイシのいた所の料理？」
「おうよ。風も少し寒くなってきたしな。温かい食いもんで暖まろうぜ」
「それも、そうねっ」
イリアは満面の笑みで笑って、俺も同様に微笑んだ。
森の道を通って、俺が打ち上げられていた砂浜に足跡を残し、家の玄関を開けるまで、俺達は手を繋いで帰った。
イリアの手は握ったときは冷たかったが、家に入ってみるまでの

間に、俺と同じ体温を共有していた。
互いの温もりは、同じだった。

その一方、セレンの街では。
「よう、嬢ちゃん」
「……。……！？」
とある事件の始まりが、唐突にその開始を告げていた。

第二十三話　待て、しかして希望せよ（後書き）

どうも蝉です。今回のタイトルの元ネタが分かった人は作者と語り合いましょう。
最初ッから内容がぶっ飛んでますね。ノイズくん。薪章突入です。
うぁーい。
澪しの夢の内容については特に言及するつもりはありません。夢は夢です。

でも、仙人みたいなギャル、っについては名前が決まってよかったと安心しております。堺崎さんです。また今度紹介するかも。

哀れキール君には黙祷を。
それに澪士め、イリアとイチャパラしやがって。もうお腹いっぱいだわまったく。
というかヴァネッサに何があった!?　と今後の執筆をがんばりたいと思いますってな訳で、まーた十戒にて。

第二十四話　生まれ方は選べないが、生き方は選べる（前書き）

「何食ってんの？」
「ガム」
「ぼくにもくれよ」
「クーリッシュだよ。甘くないよ？　辛いよ？」
「んなもん、この世で七年も生きてれば嫌でも分かる」

第二十四話　生まれ方は選べないが、生き方は選べる

その日、ヴァネッサ＝マランディにとって別段何かがあるといったわけではかった。強いて言えば、今日は遠洋交易に出ていた父が八日ぶりに帰ってくる日だな、と思い出したくらいだった。それ以外は普段通りに、夜明けと共にベッドから起きて、姉とおはようの挨拶を交わしてから、顔を洗い、姉と一緒に髪を梳かし、寝巻きを脱いで、服を着替えて、これも姉と一緒に厨房で朝の仕込みをし、それが終わった後、港まで父を迎えにいって欲しいと姉に頼まれた。そしてヴァネッサは数日ぶりに見る父の顔を思い浮かべながら、早く会いたいな、と心躍らせ、交易船が往来する港に向かったのであった。

ここまでの流れで、ヴァネッサに特筆すべき問題点は皆無である。彼女が澪士と初めて会った時のように、怪しい路地裏を通るでもなし、誰かに因縁をつけられるでもなし。

実際、ヴァネッサはあの出来事があって以来、そういった危険な可能性がある事柄には臆病なくらいに気をつけていた。

それはそれはとても賢明なことであろう。

自分の身を守れるのは、結局は自分しかいないのだから。

でも。

ヴァネッサのことはいつだって守ってやるからな、とお兄ちゃんは言っていた。

だがそれは、《いつでも》ということだけであって《どこでも》という意味ではない。まさか四六時中自分の傍にいてくれる訳ではないのだから、最低限自分の身は自分で守れるように努力しなくてはいけないと、賢い彼女は理解していた。

でも、四六時中お兄ちゃんがいてくれるなら、それはそれで大歓迎なんだけど。

……むふっ。

と、下心が疼かない訳ではなかったが。

いや、別にお兄ちゃんに髪を梳かして貰うのだとか、二人で買い物をしたいなぁだとか、夜は同じベッドで寝るのだとか、もしかしたら一緒にゆ、ゆ湯浴みなんかも……とか夢想していたのでは、決してない。し、してないんだよ！　といったい彼女は誰に対して弁明していたのやら。

まあ、兎にも角にも。

ヴァネッサはてくてくと港に向かう途中で、

「よう、嬢ちゃん」

なかなかどうして、彼女はあっさり誘拐された。

魔王。

それは世界の混沌を統べる王。
それはいかなる魔の絶対覇者。
それは君臨すべし闇の支配人。
何をとっても、どれを選んでも、そんな言葉ばかりが連なる本だらけ。
俺はいい加減書物の在り来たりな内容に辟易していた。
「勇者の方でも、読んでみるかな」
だが、勇者も勇者の方で、賛美や賞賛だけしか書かれていないのが多いし。あーあ。まったく。俺はもっと正確な《事実》だけが知りたいのに。
魔王とは対極にして対立の存在。
それが勇者。
魔王とは比べ諸国各国が各々に勇者なる人材を立て、魔王討伐に繰り出すのだから、数は半端なく多い。まあ、その中でも実際に魔王を倒したのは極数人。それも歴史から見てもはや伝説上の存在だ。しかし、十数年前に歴代最後の魔王を倒したとされるウェルテール王国の勇者――――もとい、今はその国の王様として現役を真っ当されているようだが、現在生存している人もいるにはいるようだ。
「ん、これは」
俺がおもむろに書棚から取り上げたのは、件の歴代最後の魔王について詳しく書かれた本のようだった。ぱらぱらとページを流し読みする。
「……ほうほう、歴史上最も強い魔力を誇った……圧倒的軍事力も兼ね備えた……へえへえ、ん、二つ名までである……『闇魔界の冥王』、『恐慌の絶対者』……ぷっ、すんげー中二臭がするですけどーぷぷぷー……ん？　あれ……『最果ての魔』」
「ちょっとレイシー！　こっち手伝ってよー！」
書棚の向こう側から、サラサの呼ぶ声がした。館内ではお静かにが鉄則なはずの図書館がこれじゃ様にならない。
「はいよー」

と俺は応じて、いいとこだったのになーと不平を漏らしつつも、サラサの所まで向かった。

サラサは、車輪の付いた脚立の上に乗っかって、高いところの棚に本を戻していた。

「ちょっと、この台揺れないように押さえてて」

「ああ」

俺はがしっと彼奴を……じゃなくて脚立を支え、サラサもその安定感に確証を得たのか、すくっと完全に立ち上がり、書棚整理に専念した。

突然だがここで一つ確認事項だ。俺は自他共共々認める変態であることは諸君も知っての通りだが、さて、俺は自分が変態だと明言している以上に紳士であることに勤めている。ザ・ジェントルマン、である。

いついかなる時でも、淑女に対する気遣いを忘れず、少女に対する優しさを忘れず、幼女に対する愛しさを忘れず。

例えそこにパンチラやポロリのキャッキャウフフがあったとしても！　俺は見て見ぬフリをする！　それが紳士というものであるからして。

そんな訳で俺は、

「……」

「え、と。これがここで、この本があそこで……あーレイシ、少し右にずらして」

真上を揺れるサラサのスカートに目がいっていた。

ひらひら。

ヒラヒラ。

ひらひ……あ、惜しい。内腿まで見えたのに。

……えーあー、ゲフンゲフン。えと、これはつまりあれだ。仕方のないことなのだ。やむを得ないことなのだ。だって、俺はこの脚立を支えてなきゃいけないし、それには上のサラサの行動を見ていなきゃいけし、まさか下を見ながら足継台を動かして、真上の

サラサがバランスを崩して落ちてしまったら大変なことだ。あの執事さんにも殺されてしまう。だから、常に上の様子を確かめていなければならない。

つまり、そういうことだ。

細かいことは気にするな。

「えーこれとこれがあそこでー……ん？　え、ちょっとレイシ何を見て……あぁっ！？」

「ちっ」

クソ、もうバレた。最近何だか俺の企みが露見するのが早いな。何故だ。まさか、これが噂に聞く世界の意思だとでも言うのか！

何たることか！

「え、ちょっ！　レイシ！　ああ、あんたちょっと何してんのよ！　み、見た！？　みみ見えたの！？」

「あー見てない見てない。サラサのが白だなんて知らない知らない」

「や、ややっぱり見たんじゃない！　さ、最低っ！　今すぐ殺してあげるからそこで待ってなさいよ！」

あら。適当にカマかけたのに何だか当たってしまったようだ。俺の勘って変なところでよく当たるからなあ。恐や恐や。

や？

「え」

「きゃっ」

視界が、急に、暗く、影で。

暗転。

「きゃああっ！」

「うぉおおお？！」

ドシンッ！　と埃が舞い上がる。サラサが、上から落っこちてきた。親方　空から女の子がーとボケている場合でもない。

殺人的な重量が俺の顔面にのしかかった。当然俺は重みのベクトルに流されるまま後頭部を床に打ち付け、構図的にはサラサのクッションの役割を果たした。

人間クッション。
何だか卑猥な響きである。
「っつぅー……って、ちょっとレイシってば大丈夫!?」
「はんほか」
「きゃあっ!?　お尻の下から喋らないでよ!」
サラサが飛び跳ねるようにして俺から退いて、臀部を手でカバーしながら、恨めがましく見下ろした。
「ふぃー……まあ、サラサの尻が存外薄くて助かったよ」
「そう、それはよかっ……ないわよ!　な、何言ってんのよこの馬鹿レイシ!　次に変なこと言ったら殺すわよ!」
サラサの頬が、まるで深紅の薔薇が咲いたみたいに色づいてからも、俺は床に仰向けになったままで、動かなかった。否、動けなかったというべきか。意識と言葉は意外と何とかはっきりしているのに、脳味噌がとろけたみたいに機能しない。身体は人形のようにぐったりとその自由を失っていた。
そんな俺のおかしな様子に気づいたのか、サラサが、心配げに、
「ねぇ……ちょっと本当に大丈夫なの?」
「うん、まあ、多分軽い脳震盪だと思う。心配ないよ」
「で、でも……あっ、そうだ、今すぐにじぃを呼んで……」
「大丈夫だって、このまま放っておけばじきに治る」
「あ、ああ……ご、ごめんなさい、あ、あたしのせいでっ……」
「ちがーうよ。単に俺が悪ノリしただけで、罰が当たったんだ。因果応報ってね。まあ、それでも、サラサに、怪我がなさそうで良かった」
あの高さからだと、下手しなくても捻挫や打撲は十分にあり得た。
だから、良かった。
サラサが傷つかなくて。
自分以外の誰かが傷つかなくて。
「……」
「……何?」

「レイシ……あなたって、本当に馬鹿ね」
サラサが、しゃがんで枕代わりに膝を貸してくれた。それも、かなりぶきっちょに。
俺は。
「よく言われる」
しかも君に似た女の子に、よく言われてた。
傲岸不遜で、生意気で、不器用で、素直じゃなくて、少し泣き虫で、でも本当は凄く優しい子で、俺の大切な――――存在。
だから、かな？
だから、なのかな。
俺がここに足を運んでしまう理由は。
懐かしい面影を求めて。
サラサに、もう二度と会えないであろう者の姿を重ねて。
それは。
「なんて――――――――」
なんて戯言（ざれごと）を。
とんだ囈言（たわごと）を。
だるい譫言（うわごと）を。

どうにもならない絵空事を――――。

俺は。
「はは、はっはは」
「レ、レイシ？」
「ははっ、何でもない。何でもないよ、サラサ」
そう何でもない。
何でもない自分の、何でもない愚かさを。

ただ、再確認しただけのことだから。

第二十四話　生まれ方は選べないが、生き方は選べる（後書き）

第二十五話　生き方が選べなくとも、死に方ぐらいは選べる

銃声。轟音。
怒声。爆音。
悲鳴。絶命。
阿鼻叫喚。
血と、硝煙の混ざり合った臭い。
死の臭い。
鼓膜や嗅覚は既に麻痺していて、正確な識別が出来ない。判別が不可能。
誰が敵で。
誰が味方で。
誰が生きていて。
誰が死んでいて。
ぼくにはもう、分からなかった。
しかし、でも、だが、どうしてだか、その人は、

『ぶっはははあはは！』

空薬莢が舞い、命の価値がそこら辺の石ころと大して変わらないようなこの現状で、場所で。
その人は笑っていた。

壊れたように。
壊れていくように。
千曲は泣いていた。
失うように。
失っていくように。
千曲は、どうして泣いている？　誰が、千曲を泣かせた？　何が、何故？
ぼくは、どうしたらいいのか分からなかった。
死ぬことも。
生きることすらも。
まったく。
すると、覆面を被った誰かが、ぼくらに銃口を向けた。ぼくはとっさに千曲を庇うように立ち塞がった。黒い穴が、額に押し当てられる。冷たくて、固い、静かな死への導き。
ああ。
ぼくは、ようやくここで死んでいいと思った。
千曲の為に死ねるなら、それでいいと思った。
ガチャッ。
銃の上部がスライドされる音。ぼくの生が終わる福音。ぼくの死が始まる賛美歌。
全ての為の序奏曲。
その誰かは、銃口をぼくに向けたまま、何かを叫んだ。それはどうもぼくに対して発したものではなく、その呵々大笑を繰り返す、見るも巨大な、大槌を肩に担いだ、その人に向けたものだった。
その人は、
『ぶはははは！　お前ぇは！　それでいいのか？』
その人は、気のせいでなければ、ぼくを見つめて、言ったようだった。
ピストルを振り回す人はなおも怒鳴り散らすが、その人はてんで気にした風もなく、続けた。

『その子の身代わりになって死んで、はいさよならで本当にいいのかよ？　つまんねえ、つまんねえなおい！』

ぶはははは、と。

狂騒狂乱が支配するこの場で、まるでその人だけが浮き彫りにされたような、その人以外が全部背景と化したような現象が起きたみたいで、その人の声は、不思議と明確にはっきりと、ぼくの耳に届いた。

その人は――――――――彼女は、さも愉快そうに、

『運命に抗う意思を、必然に歯向かう努力を、予定調和をぶっ潰す覚悟を、お前ぇはそうやって簡単に捨てちまうのか？　何一つ出来ず、成さず、生み出さずに、お前ぇはそこで終わるのか？　ぶはっ、もっと欲張れよ。望みは一つとは限らねえんだぜ』

助けたいなら助けろ。

救いたいなら救え。

死にたいなら死ね。

生きたいなら生きろ。

否定しろ。肯定しろ。

『さあ、お前の望みは何だ？』

ぼくは。

ぼくは、ぼくは、ぼくは、ぼくは、ぼくは、ぼくは、ぼくは――――。

俺は――――――――。

『こんな結末は、いらない』

誰か傷ついて、誰かが悲しんで、誰かが苦しんでいく。
何より、千曲が泣いている結末なんて、いらない。
いらない。
　いらない。
いらない。
俺が欲しいのは――――――。
『だったらよぉ、ぶっ壊してみろ！　その下らない運命とやらを、つまらない必然ってやつを、因果や因縁なんかもまとめて含めて、お前自身でぶっ壊せ！』
走れ！

そう、彼女は叫んだ。俺は泣いている千曲の手を無理矢理掴んで、一直線に走り出した。
銃を持った人が、走り出した俺らに銃身を向けた。引き金に指をかけるのが見えたが、俺は止まらなかった。弾丸が、俺と千曲の背中を撃ち貫くのを想像した。血反吐を吐きながら、悶え死んで逝く光景を思い浮かべた。でも、実際に響いたのは銃声ではなく、耳鳴りのように響いた爆発音だった。そして地鳴りみたいに底が揺れるのを感じた。一瞬背後を振り向いたら、四散した無数のガラス片が鱗のように刺さった、銃を持つ人間が、オブジェのように転がっていた。心臓辺りにも、細い鉄の棒がお子様ランチの旗のように突き刺さっていた。確実に、死んでいた。
『ナイス爆破、藍』
彼女が、血糊で染まった大槌を担ぎながら、口元を吊り上げた笑

顔で、呟いた。
千曲は、まだ泣き続けていた。
俺は、そこで初めて自分が笑っていることに気づいた。だから、丁度いいかなって思って、泣いている千曲を笑いながら宥めた。
醜く、歪で、不細工な、自分の笑い声が、今でも耳に残る。
あの時、きっと俺の中で何かが、壊れたのだろう。
いや、『壊し屋』の二人に言わせれば、俺のは単に身の内にある本質が、芽吹き、顔を出しただけだという。ならば、壊れたのは、その本質を囲っていた殻か、檻ということなのだろうか。
まあ、何でもいいのだけれど。
どうでも、いいのだけど。
今となっては。
もう、取り返しのつかない、致命的な俺にとっては。
後悔すら、過去に置いてきた俺にとっては。
欲しいものなんて、何も無い。

知らない人に物を貰ってはいけない。知らない人に付いていってはいけない。知らない人から声を掛けられたら注意しろ。
そんなことを、幼い頃によく言われていた。
思えばけっこう無茶苦茶な教戒である。

初対面の奴にはいつでも警戒を怠らず、いつでもはなっから疑ってかかれ、と言っているようなもので、これじゃあ、将来根性の捻くれたガキが大量生産されたとしても頷けること請け合いだ。

とはいえ、そういう自分もけっこう昔は、知らない人から普通に物を貰っていたし（飴とか鞭とか）、付いていったことはないが、連れ去られたことも幾度かあったっけか。

まあ、あの事件は『鳴神機関』の関係者である千曲を攫おうとして、俺も一緒に巻き込まれた感じだったのだが、その際に助けられた『壊し屋』――――クラッシャーズの瑠璃（るり）さんと藍（あい）さんにはまっことにお世話になったなぁ。ああ、懐かしけり。

そんな訳で、前置きはとりあえず。

「やあ、君が噂のルーキーかい？」

俺は知らない人に声を掛けられた。

ギルド内はいつも通り喧騒でごった返していた。しかし、前来た時よりかは若干平静を取り戻したって感じで、サラサと午前中を過ごした俺は、後頭部に微妙に残る倦怠感のまま、ギルド本館に訪れていたのだった。

といっても、別に魔物の素材換金に来た訳ではなく、ただ単に何か簡単なクエストでもあればなあー薬草摘みとかないかなあーと思い、こうしてクエストボードの前で、無数に張られた依頼用紙の閲覧をしていたのだが、

「どちら様でしょう」

俺は、気さくに声を掛けてきた目の前の人物に尋ねる。

「ああ、失礼。私の名はバルゴ。バルゴ＝フェリギオス。最近噂の

ルーキーに一つご挨拶でもしようとね」
「はあ……」
と、俺は曖昧に頷く。
……ああ……何だっけ、そう、確か、「ハリポタ」のルシウス・マルフォイみたな、金色の長髪を全てオールバックにした髪型で、二十代後半くらいの男だった。しかし、目元は柔和に微笑んでいて、ルシウス役のジェイソン・アイザックその人よりかは数段優しそうな感じだった。
そして彼は紳士的に手を差し出し、握手を求めた。俺はその手を握る。
「レイシです」
「ああ、知っているよ。まだアンバークラスにもなって間もないというのに、たまにふらりと立ち寄ったかと思えば、クラスBの魔物の素材を平然と持ち込み、時にはクラスAの魔物まで悠然と狩ってくるという、謎のニューフェイス、大物新人、レイシ＝イサナギのことは」
「は、はあ……」
とまたも曖昧に頷くしかなかった。
確かに、俺は多分けっこうレベルの高い魔物を狩って殺して捌いて売り飛ばしていた訳だが、俺が魔物と対戦する際、とある因子の存在があることを忘れてはならない。
イリア。
そう、俺はイリアというチートの下で指導と監視と援助と支援をもってして、どうにか……どうにかようやく、あの化物たちと相対していたのだ。
例えるなら、ポケモンのタッグバトルで、俺がレベル7のウパーだとして、相方のイリアはレベル100のデオキシス。
いや、ミュウツーでもいいんだけど。
まあ、いずれにせよ、俺はどことなく湧いた背徳感から、視線を何となくクエストボードの方に逸らす。

で。

「……む？　ああ。そうか、ああ、そうだな、君にとっては煩わしいのかもしれないな。実力はあるが、まだアンバークラス故、それより上位のクエストを受けられない。もしクエストを受けられれば、素材換金なんかより、もっとまとまった報酬が手に入るというのにな……ああ、分かるよ、その気持ち」

……何だか、妙な誤解を招いてしまったか。俺はどうにかしてその誤解を解こうと試みようとしたが、

「そこでだ！」

がしっ、と力強く肩に手を置かれ、俺は話し出すタイミングを完全に失う。バルゴさんは、そりゃあもうキラキラだか、メラメラした瞳で、顔を近づける。

「私はね、今ギルドのあり方を変えようと、日々活動しているのだよ。評価されるべき者を評価し、実力に見合った対価を与え、真に有能な人材を教育し、輩出していく……私は、そんなギルドを目指している訳だよ。だから私は、君のような高い実力を持った若者が不当に評価されているのに我慢ならなくてね――どうだろう？　私が直々に本部に訴え、ギルドカードのランクを上げさせてみるように交渉してきてあげようか。なんなら、そのまま私らのチーム、『ルドベキア』に参加してみないか？　君のような優秀な若者は是非とも……」

近い！　顔近いっす！

俺は完全にバルゴさんの勢いに呑まれ、あうあうとしていたところに、

「ヴあぁぁぁぁるぅぅごちゃぁあーん！」

そこにはキャストオフしたパンツ一丁のルパンが……ではなく、渋い無精髭に、細身の双剣を携えたラウルさんの姿があった。

「そんでぇ……よっ、レイシ」

ちゃき、と閉じたピースをこめかみに当てて、何とも爽やかな挨拶を俺に向ける。

「――『双牙のラウル』……おやおやチーム『コーレア』の方が、いったい何の用ですかな？」
「べっつにー、用なんて特にないさよ、バルゴ＝フェリギオス。まさか、どっかの誰かさんがせっせと自分の信者集めをしてようだなんて微塵も思っちゃいないさ。ただ、俺は俺の知り合いを見つけたもんでね、声を掛けようと思っただーけ」
なーレイシー？　とラウルさんが話を振ってくるので、俺はなんとなーく空気を呼んで首肯した。
「な？　そういうこった」
「……なるほど。それは納得しました。では、私はこれで失礼するよ」
と、スタスタ歩き去ってしまうかのように思えたバルゴさんが、最後にこちらを振り向いて、
「レイシくん、さっきの話、返事は別に今すぐにとは言わない。どうか熟考して検討してみてくれ。決して、君にとっては悪い話じゃないはずだ」
ふっ、と軽く笑って、バルゴさんは行ってしまった。
「……ふん、バルゴめ。さっそくレイシに目ぇつけてきやがったな」
「……ら、ラウルさん、あの人とはお知り合いで？」
「ん、まーな。同じ時期にギルドに入った同期でよ、一時はつるんで仕事してた頃もあったが、まあ、今となっちゃあ疎遠だな、疎遠」
ふと、ラウルさんの目つきが、一瞬どこか遠くを見るようだったのは気のせいだったのだろうか。
何か、事情でもあるのかもしれない。
「……ふっ、まぁ、レイシ、あの男には気をつけるこったな」
ラウルさんの表情が真剣なそれに変わったので、俺も身構えた。
「何です？」
「あいつはな、可愛い新顔がいると自分のチームに引き込んでだな……」
「ええ」

「ケツを掘る」
「えー！？」
「あいつは男色家だからな」
「えー」
「被害者はもう、ギルド内だけで既にほぼ半数近くに上っている」
「えー」
「俺も奴の性癖に気づいてから、奴から距離を置くようになったんだ」
「えー」
「……とまあ、おれからの忠告は以上だ。精々、ケツの穴は常に締めとけ。それと、この後お前は暇か？　ちっと昼時は過ぎちまったが、これからレヴェッカのとこで飯食おうと思ってんだけどよ、レイシも一緒にどうだ？」
「ええ」
よし決まり、それじゃ、また後で声かけてくれなー、とラウルさんは去っていった。
「……」
事情が……何だかなあ。
さっきから「えー」としか反応できない俺。
えー。

『マランディの酒場』。
以前と変わらず、昼食時の客層は薄い。ギルドからはけっこう離れた所にあるので、わざわざここまで通う人も少ないのだという。

なので、現在は俺を含めた五人だけが卓についていた。
故に、割と静かな食事風景が……まあ、広がってなくもない。
少なくとも、微笑ましい程には平和的だ。
「バリー！　右翼陣営が手薄だ！　そこから一気に畳み込め！」
「は、はいっス！」
「うむぅ！　こちらも負けられんぞアンジェリカ！　後方援護を頼む！」
「私はそんな大食でもないんだけどねえ。あ、レイシ、その肉貰うわよ」
「……どうぞ、お好きなように」
なるほど、平和的ねえ。
台所は女の戦場、とかよく言ったものだけど、食卓も食卓で戦闘だった。
これぞ、フードバトル（この場合、本来の意味とはなんら関係ない）。
まあ、食べることには変わりないのだけど。
「ハア……クリスさんも、アンジェリカも何であんなに食べて体型が変わらないのかなあ？　不思議というか、羨ま……」
「……裏山？」
「……んーんー、何でもない」
隣で、我らがレヴェッカ姐さんの、何とも悲痛な呟きが零れた。
男の俺には多分分からない悩みなのだろうから、気にしないでおく。
「……あれ、そう言えば」
俺は、いつもと圧倒的な違和感の正体に気づいた。
ヴァネッサが、いない。
どうしたのだろう。
「ねえ、レヴェッカさ……」
と俺がヴァネッサのことを訊こうと口をついた時、
「おおう！　これが噂の色男か！」
だん！　とカウンターに樽ジョッキが勢いよく五つ並んだ。俺は

少し驚いて、厨房から出て来たその人物を見る。
もっさもっさの逞しい顎鬚に、捻り鉢巻を巻いた、厳つい顔立ち。一言で表すなら、海の男。鮪漁船がいかにも似合いそうな恰幅のいい中年だった。
「やだ、父さん、言えば私がやったのに。交易船から戻って来たばかりでしょう。休んでればいいのに」
「うわっはははは！　そうも言ってられねえよ。この街随一の大食漢と名高きチーム『コーレア』御一行がいらっしゃってんだぜ。俺も動かなきゃ礼に欠けるってもんだ」
レディもいるんですけどー、とアンジェリカさんが抗議の声をあげた。わはははは違いねえ、と彼は笑った。
「い、色男？」
多分、俺に対して言ったその言葉に疑問を投げかける。
「おうよ、色男。レヴェッカからなあ、色々とき」
「とおおおおおととととっと、と父さん！　レイシくん！　紹介するね、これが私の父。少しの間、遠洋交易に出てて、今日の朝帰ってきたのね」
「おう。ガイルだ、よろしくな」
「は、はあ。レイシです、どうも」
で、色男ってなに？
そう、俺が追撃の質問を出すが、何故かトランザムしたみたいに真っ赤になったレヴェッカさんに阻止というか、阻害されて、何が何だかで流されてしまった。俺の中で、永久に解けない謎がまた一つ増えてしまったことに少し切ない思いになる。
「うははははは、分かった分かった。こんくらいで怒るなよ、レヴェッカ」
「もう、父さんったら……」
と、一悶着の家族会議に一先ずは終止符が降りたようで、俺のささやかな放置プレイも終わりを告げた。
「ちょっと厨房に戻るけど、父ぉさん、変なことレイシくんに吹き

込まないでよ」
「おうよ、任せろ」
レヴェッカさんがどうやら父親に睨みを利かせて釘を埋め込んでいったが、
ガイルさんはどこ吹く風で微笑んでいた。
もう、楽しくしょうがないみたいに。
まるで、《壊す》ことが大好きな、瑠璃さんみたいに。
「……ふうん、レヴェッカが見るだけのことは、あるな。確かに、こりゃ男前だわな」
品定めでもするみたいな視線で俺を下から上まで観察して、言った。
「は、はあ、どうも」
褒められた？　ので、一応は頭を下げる。
「まあ……あいつにゃ、随分と遅い春なのかねえ……母ちゃんが逝っちまってから、けっこう苦労させてきちまったからなあ。そろそろ、頃合なのかねえ」
か細く、独り言のように呻くガイルさんが、ジョッキの一つを俺に渡した。
「さあ飲めよ、レイシ。俺のおごりだ」
「あ、えと、俺未成年なんで……」
「ああ？　未成年？　なに言ってんだ？」
ああ、そうか。
この世界に、この国に、この街に、日本現代の法律がある訳がないんだ。何を勘違いしていたんだ、俺は。何をお門違いな規律を守ろうと考えているんだ、俺は。
それでもなあ、やっぱりどうしたもんか。
酒はあんまし飲み慣れてないんだけど。
「レイシー、ガイルの旦那の酒を断るとあとが恐いぜー」
ラウルさんが自分のジョッキを口に運びながら、無意味な助言を提示してくれる。

「……うぅっ、分かりましたよ、飲みますよ」
「おおう！　そうこなくっちゃな！」
ガイルさんは嬉しそうだった。
コミュでも生まれてしまいそうな程に。
久々の酒の味は、相変わらず苦かった。

「娘さん二人を残して船出なんて、心配じゃなかったんですか？」
「なあに、俺の娘達を甘く見るなよ？　特にレヴェッカなんか見てみろ。あいつは強いぜ？」
「まあ、確かに」
気の強さなら、誰にも負けなそうだけど。軽い男がからかい口調で下品なジョークを言われたとしても、それ以上のキツイ冗談で対応出来るだけの資質が、彼女にはありそうだ。
「それによ、ラウルやクリス達にもこの店のことは頼んであるからな、心配はなかったよ」
それはまあ、安心であろう――――か？
ああ、そうそう、と俺は再び疑問の掲示を試みてみる。
「あの、ヴァネッサの姿が見えないんですけど？」
「ああ、そうなんだよ。俺のことを港まで迎えに来てくれたらしいんだが、どうも行き違いになっちまったみてえでな……だから、そろそろ気づいて帰ってきてもいい頃なんだが……」
ガイルさんは、途端に不安な表情で入り口を見つめ、そわそわと落ち着かない感じで、しばらくそうしていたが、
「……ちょっと俺、そこら見て回ってくるわ」

とカウンターから飛び出して、ウェスタンゲートを跳ね除けて行ってしまった。
「……心配ないとか」
そんな父親なんて、いるはずないのにね。
もしいたとしても、それは父親じゃなくて、自分の身体を構成したただの素体に過ぎない。
父親、か。
ふうん。
「あれ？　父さんってば、どっか行っちゃった？」
レヴェッカさんが手をエプロンの裾で拭きながら、厨房から出て来た。
「ああ、うん。ヴァネッサ探しに行ってくるって、今」
「もう、父さんも父さんだけど、ヴァネッサもどこで道草くってんだか」
「案外、攫われてたりしてー」とラウルさん。
「んな訳あるか。ヴァネッサは賢い子だ」とクリスさん。
「そーよ、あの子はすこぶる用心深いわ」とアンジェリカさん。
「にしてもヴァネッサちゃん、遅いっスねー」とバリー。
とそんな愚にもつかない不毛な会話を繰り広げていた俺達の下に、しばしの時間を置いて、ガイルさんが帰ってきた。
ガイルさん、だけが。
がたいの大きな体躯を身震いさせて。
まるで、世界の終わりの喇叭を聞いてしまったかのような深刻な顔で。
バイブレーション効果を秘めた声音で。
「ヴァネッサが、攫われた」
ここに一つ、ラウルさんの勘の良さが証明された。

第二十五話　生き方が選べなくとも、死に方ぐらいは選べる（後書き）

まあ、まあ、とりあえず。今回のネタ説明でも。

ルドベキア

キク目　オオハンゴンソウ属　花言葉は『正義』『公平』『平等』

コーレア

ミカン目　コーレア属　花言葉は『信頼』

ってな感じで格チーム名は花の名からとりました。花言葉でだいたい決めました。ペルソナ。

てーかラウルさんにも二つ名あったんですね。それもけっこう適当な。

あと澪士くんにも貞操の危機が嬉々として迫ってくる訳です、はい。

歪みないです。

第二十六話　子供のように大人しくしてな（前書き）

「ぶははは。そう言やぁよ、昔に『鳴神機関』があたしらに依頼してきた誘拐騒動――藍、お前ぇは覚えてっか？」
「……ああ、覚えてるよ……克明にね」
「あん時に助けた、澪士ってガキのことは？」
「……『鳴神機関』の令嬢の救出及び、犯人グループの壊滅。それがあの時、僕らが受けた依頼だった……でも、瑠璃はその一見巻き込まれただけの少年をも、同時に助けた……普段、《壊す》ことだけしか頭に無い瑠璃が、そんなことをするなんて……当時はすごく興味深かったからね。当然……覚えてるさ」
「ふん。ぶっ飛んで言ってくれるじゃねえか」
「……せっかくだから、この際訊くけど……どうして瑠璃はあの時、あの少年を……助けたんだい？」
「別にあたしゃぁアイツを助けたつもりはないし、助ける義理もなかったよ。でもよ、ただな」
「ただ……？」
「あんなにもぶっ壊れた瞳をした奴を、あたしは多分、放っておけなかったんだよ――可能性をな、見過ごせなかったのさ」
「……可能性？　……なんの？」

「ぶははははは！　んなもん、世界が面白くなる可能性に決まってんだろうが！」

第二十六話　子供のように大人しくしてな

誘拐。
かどわかし。
まあ、何とも懐かしい響きではないか。
経験があり過ぎる程に、あるだけに。
果てしなく吐き気を催す懐かしさだ。
実際、昔のこととか色々フラッシュバックで思い出しちゃって、胃の中身が惜しげもなくひっくり返っちゃったんだけど、僥倖なことに、俺が内容物をウェルカムしたのは酒場を後にしてからのことであったので、こんな情けない醜態を晒すイベントは起きなかった。らっきー。
さてそれで、建築美を徹底的に無視した、とある集合住宅の一角にある部屋の前に、俺はいた。時間が惜しい。今すぐ事を運ばなければならない。だからノックの予告なしに扉を開ける。
これもまた僥倖か、神様の粋な計らいか。俺の目的の人物は、目を丸くさせてそこにいた。その人物が驚いた表情のまま、何か言おうとするのを遮って、俺はにやりと笑って言い放つ。
「ルイ、さっそくだが仕事だ」

そして少し時を遡って、『マランディの酒場』にて。
真っ青な顔して帰ってきたガイルさんが、プルプルと震えた手で

差し出したのは、朱色の、一束の髪だった。
朱い。
髪の毛。
ヴァネッサの、鮮やかな朱色をした髪の束。
その場にいた一同全員の息を呑む音が、聞こえた。
「……と、父さん、どういう……ことなの……？」
冷静な声で、一番最初にガイルさんを問い質したのは、意外なことにレヴェッカさんだった。
いや、聞こえは冷静だが、やはり動揺は隠し切れずに、声の末尾が震えていたのを俺は聞き漏らさなかった。動揺を無理矢理に飲み込んで、それに耐えているかのような危うさだった。
「……わ、わからねえ。いきなり、知らない奴が、お、俺にこ、《これ》を押し付けてきて、『お前の娘は預かった。今すぐ金を用意して、指定した場所まで来い』って……」
「それって……」
「完全な身代金誘拐だな」
レヴェッカさんの呟きに、クリスさんが淡白な声音で続いた。
やばい。
「ヴァ、ヴァネッサが……」
絶望に打ちひしがれるガイルさんを尻目に、
「あわ、わ、わ、ど、どどうしましょう」と淡々ながらも慌てるバリー。
「とりあえず、ここにいる者だけで話を進めよう。周辺近所に知られ、情報が行き渡ってしまったら、犯人側にも動揺が走る。それでは不味い。最悪、ヴァネッサの命が危険だ」と平静なクリスさん。
「そんじゃ旦那、表はクローズしておくぜ。酒場は一旦休業だ」と入り口に向かうラウルさん。
「はあ、まったく」と嘆息するアンジェリカさん。
「……お、おいアンタら」
ガイルさんが戸惑ったように何か言いかけたが、それを無視して

クリスさんが話し始める。
事務的に。
業務の一環のように。
あくまでも、淡々と。
「ところでガイルさん、『指定された場所』というのはいったいどこですか？　そして『金を用意しろ』だなんて、明確な額は言われましたか？　それと私達の今後の動向ですが、まずは作戦と、その実行について十全に会議してから……」
「――アンタらは他人事だと思って！　何を勝手に話を始めてやがる！」
ビリビリ、と。
部屋全体が揺れたのかと思うくらいに、ガイルさんの怒鳴り声は、酒場全体に木霊した。
「……」
対するクリスさんは、無表情のまま、無言だった。他の者も一向に示し合わせたかのように、黙ったままだった。
当然、この俺も。
レヴェッカさんだけは、困惑したように硬直していた様子だったが。
「！　……っつ……す……すまねえ。でけえ声出して」
「……いえ、私共も少々薄情だと思われる態度や言動をしました。気に障ったのなら、謝ります。申し訳ありません。ですが、ガイルさん。私達は、そういう人間なんです。そういった人種なんです。ガイルさん、想像してみて下さい。例えば、吹きすさぶ雪原の中、『雪狼（ホワイトルプス）』の群れに囲まれたとしましょう。あなたは動揺し、右往左往している余裕がありますか。答えは否です。魔物との戦闘において、我らはいつでも《冷静》であらねばなりません。肩が裂かれようと、腕が？がれようと、例え仲間が死に至ろうとも、我々は心乱されてはならないのです。動揺しても、それが更なる被害に繋がるだけしかないということを、我々は理解しているからです。常に冷

静な判断を下し、常に平静な決断を下さねば、我々はこの世界で、この戦いの中で生きていけないのです。だから、今回のヴァネッサの件でも、一見、無情な対応のようにも思えますが、感情に任せず、勤めて事の次第を進めていきたいと思います」

「ああ……わかった。本当、すまねえ」

ああ、やばいなこりゃ。

「私達も勿論、ヴァネッサのことは心配です。自分のこと以上に不安です。ですが、感情に流されているだけでは、何も始まりません。落ち着いて、これからの方向性を、話し合いましょう」

「……ああ」

最後はガイルさん、しょんぼりと子供のように背を小さく丸めて、大人しく椅子に座った。

子供のように、大人しく。

他の者も各々に集まってきて、円座の隊形になる。

「……まず、ガイルさん。要求された金額と、指定された場所と言うのは？」

「あ、ああ。場所は、港の方の……」

俺はガイルさんが語るそれらの情報を、脳内で並べて揃えて検証してみる。指示された身代金を渡す場所は港の廃材置き場付近。だが不思議なことに、はっきりとした金額は指定されていないという。ただ、あるだけ持ってこい、とだけ。期限は、今夜、月が最も高く上る十二の刻まで。

以上が、今の自分達に提示された情報。

「……ふうん。なかなかオカしいぜそりゃ」とラウルさんが怪訝深げに鼻をならす。「計画性がない」

「でも、単に行き当たりばったりの計画性の無い犯人だったりして」

アンジェリカさんが口を挟む。

ぐるぐる。

「それなら、事前情報があるのはどうなんスかね？　少なくとも、ターゲットにされたヴァネッサちゃんが、ここのお店の子だって知

っていたわけっスよね。加えて、ガイルのおやっさんの顔も割れてた。だから、店から出て来たおやっさんに接触できた訳っス。これだけ予備調査をしていて、計画性が無いなんて、少し考えにくいっス」

ぐるぐるぐるぐる。

「うむ。それもそうだが、しかし、犯人の意図はともかく、ヴァネッサの安全の確保が最優先事項だ。金の工面はどうにかなるだろう。指定がない以上、我々が用意出来るまでのものでいいだろう……。……ところで、少年。君に何か意見はあるか？」クリスさんが、わざとらしいぐらいに、自分に話を振ってきた。「何か言いたそうな顔をしているが」

「……別に。これといって意見はありませんが、皆さんは、これからどうするつもりですか？」

俺が言うと同時に、ガイルさんとチーム『コーレア』の面々は顔を見合わせて、当然の如く代表としてか「私達はもうしばらく、ここで解決案を模索するつもりだが」とクリスさんが答えた。

「そうですか。じゃあ、俺は俺で、個人行動をとらせて貰います。もち、ヴァネッサと犯人のことについてですよ」

「何か心当たりでもあんのか？　レイシのあんちゃんよぉ」

「まあ、無い事も無いです」

「大丈夫っスか、レイシ。一人で」

「ああ、バリー。心配ないよ」

「レイシ、それは貴方がやることで、貴方しか出来ないことなのよね？」

「はい、アンジェリカさん。まあ、そうですね」

「少年。私が、どうこう言える立場ではないので、君の行動自体は君自身で決めたまえ。だが、もし益になる情報を掴んだら、一度こちらへ戻って来てくれ。私達も、これから協力を得られそうな者にも応援を要請するつもりでいる。くれぐれも、一人で先走ることのないように。頼むぞ」

「了解です、クリスさん」
俺は四人に微笑んでから、うな垂れるガイルさんに向き合い、
「ガイルさん。ヴァネッサのことは、大丈夫です。クリスさんやラウルさん、アンジェリカさんや以下略もいるし、俺も俺でがんばってみますから、心配ないです」
遠くで「以下略ってなんスかーっ！」とバリーの幻聴がしたが、幻聴なので無視する。
「……レイシ。すまねえ、俺……」
いいんです、と俺は再度微笑み、最後に立ち竦んだままのレヴェッカさんに近づいて、
「レヴェッカさんもそんな心配しないでください。ヴァネッサはきっと連れ戻してみせます。だから、そんな顔――しないでください」
「レイシくん……うん、そうよね。私がうじうじしてちゃ、駄目よね。うん、しっかりしなきゃ、だよね」
「はい、その意気です」
俺はレヴェッカさんの立ち直りようを見届けてから、店の裏口までの道順を訊いた。正面入り口が、監視されているとも限らないので、一応は念の為に裏口から出ることにしたのだ。
「あ、あのレイシくん」
裏口に案内された俺が、今に裏口から這い出ようとしたところで、レヴェッカさんが言いどもるように、
「レイシくん、ありがとね。妹の為に、こんな……もしかしたら、いえ、もしかしなくてもレイシくんまで危険なことに巻き込んで……」
「何言ってるんですか、レヴェッカさん」
俺はヴァネッサが好きで。
他のみんなもヴァネッサが好きで。
言うまでもなく、レヴェッカさんやガイルさんも、ヴァネッサが大好きで、大切な家族で。
「そんなヴァネッサが窮地なら、助けるなんて当たり前っしょ」

苦笑しつつも、俺は言う。
「レイシくん……」
「では、レヴェッカさん。朗報を待っててください」
と俺は微笑む。
微笑み、続ける。
俺は犯人を許しません。
誘拐なんて、許せません。
そして何より、ヴァネッサの誘拐を許してしまった俺が一番許せません。
なので。
ヴァネッサをもしも傷つけでもしたら、俺はどうなってしまうか解りませんが。
俺がやるべきことは解ります。
「レイシくん……無茶だけは、しないで……」
今は誰よりも自分の妹とのことが何よりも心配であろうに――他人なんかの俺までも気遣ってくれるレヴェッカさんのそんな優しさに胸を打ちつつも。
今や脳味噌グルグルの俺は、人形のように固まった微笑みのまま、路地裏を駆け出し、角の角の角を曲がり、奥の奥の奥を進み、人目が完全に失せたところで、胸も内と言うか、何と言うか、内部に淀み溜まったモノを全て。
「おうぇぼぁりょろろろろろろろろろろォォrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrr…………」
元気よく吐き出した。

「そんで、事情は解ったけどよ。いったい兄ちゃんはオレに何をさせたいんだ？」
「ひとまずは、情報収集を頼む。この街に関わる犯罪勢力、集団、人を一人隠せそうな場所、一定以上の人数が屯している場所、何でもいい。圧倒的かつ徹底的な情報収集を依頼する」
「んまぁ……依頼内容は把握したがよ、やっぱり変だぜ、この事件」
「そんなことは十全に理解している。だから、ルイにこうやって情報を頼んでいるんじゃないか」
「まあまあ、そう慌てんなって……いつもの飄々とした兄ちゃんらしくないなぁ。なんだい？　やっぱり可愛い少女が絡むと兄ちゃんは……うっ、わ、悪かったって、だから、そんな恐い目で睨むなよ、もう。まあ、そうだな、この事件ってまず身代金誘拐ってそのもの自体がおかしいんだよ」
「一応、理由は？」
「誘拐されたのは酒場の娘だろ？　普通、身代金っていったら相手は貴族か何かだろ？　酒場にどんだけの金があるってんだよ。まあ、けっこうな人気店ではあるらしいが、それでも用意できる額の上限は決まっている。そんなところに目をつけた犯人の意図が分からねえ」
「貴族の誘拐の方が、リスクが高いからじゃないか？」
「確かにそうだが、でもよ、助けを求める為に、結局、人が行き着く先は街の自警団か何かなんだから、庶民も貴族も大して変わらねえよ。それに、だ。そもそも誘拐っていうのは獲物を捕まえたらとっとと奴隷商にでも売りつけるのがセオリーってもんなんだよ。身代金よりかは、儲かる額は多少は低いだろうけど、それでも安全かつ確実だ。こんなご時世に、わざわざ身代金誘拐だなんて、手の込んだまどろっこしいやり方をする奴なんかいないのさ」
　っていうか皆無だ、とルイは断言した。
「だったら、何だって言うんだよこの事件」

「んなもんオレに訊かれたって知らねえさ」
まあ、その通りであるが。
でも、そんなことはどうでもいい。
どうだっていい。
俺は腐りきった灰褐色の頭脳なんて持ち合わせていないので、糞みたいな探偵や、糞以下の《名探偵》みたいに、事件のトリックや犯人の意図など一切合切一ミクロンも興味はない。
ただ、ヴァネッサが無事なら、何だっていい。
それだけだ。
「不可解な点は多い。もう不快な程に不可解だ。こりゃ調べんのに少し骨が折れるかもな」
ルイが頭をぽりぽりと掻きながら呟いた。
「それでも、やってくれるか？」
「兄ちゃんの頼みだ。断る理由もない」
そう言ってルイは、「まあ、少し寛いで待ってなー」と言い残し、さっそくといった感じで部屋を出て行った。
俺は一人手持ち無沙汰にしばし突っ立っていたが、それから二つあるベット内の一つに腰掛ける。それは、いつぞや前まで、ルイの母親がその身を横たわらせていた場所だった。今はベッドの骨組みと、薄いシーツが覆っているだけで、これといって嫌悪感や抵抗感は微塵にも抱かなかったが、不思議と妙な感慨深さがあった。
ルイの中で、母親という存在は錘（おもり）であり、楔（くさび）であり、支柱であり、意義であり、守るべき存在であり、守られていた存在だった。
その母親という影から、ルイは完全に吹っ切れた、はずだ。
振り切れた、とも言える。
しかし、母親という存在の名残が、今もこうして現実にある。別に壊してしまえだなんて思ってもいないが、妙に違和感じみた印象を受けるのだ。
これじゃあ、まるで。
「待ったせたな！」

そこで、ルイが少々息を切らせて帰ってきた。
「随分と早いな……まだそんな経ってないぞ」
ルイがここを出て行ってから、一時間も過ぎていないはずだが。
「ふふん、暇している奴ら全員集めて走らせたからな。いわゆる人海戦術ってやつさ。そんで結果は、けっこうな量のネタが入ったぜ。大判振る舞いだ」
鼻高々に成果を報告するルイに、俺は急かすようにその先を促した。
「で、ルイ。そのネタっていうのは」
「まあ、急かすなよい兄ちゃん。順々に説明しやっから……まずはそのヴァネッサっつー子の居場所が、分かったぜ」
「本当か！」
マジでか！
「嘘吐いてどーすんだよ」
にゃはは、とルイは悪戯っぽく笑ってから、俺を試すように視線をよこして、
「さあ、兄ちゃん。これからどうするんだい？」
はっ！
そんなもの！
答えなど、既に決まっている。

「宴でも、始めてみようじゃないか」

第二十六話　子供のように大人しくしてな（後書き）

キャラは濃いけど本編には登場しないシリーズ

名前　柴（しば）　瑠璃（るり）＆藍（あい）
歳　二人とも二十代後半くらい。

二人揃って『壊し屋（クラッシャーズ）』。双子。似てない双子。対極な双子。
洒々落々の傲岸不遜たる呵々大笑の抱腹絶倒である瑠璃さんは愛槌トール（透）くんを振り回し、日夜破壊作業にお勤め中。
今まで破壊してきた中で一番スゴイもの「戦車」ずどーん☆
弟の藍くんは爆弾野郎の根暗インテリ寡黙メガネ。ノートパソを常に持ち歩く。破壊活動の規模だけなら瑠璃を上回る。
今まで破壊してきた中で一番スゴイこと「ビルのドミノ倒し」どかーん★
まあ、「二人は壊し屋！」みたいな。

結構昔から考えていたキャラ。出せて嬉しい作者。
同じく双子の遥と彼方兄妹曰く、

「「会ったことないから分かんないのー」」

ああ、さいですか。

第二十七話　死ぬことは恐くありません、自分が生きることに比べれば

誘拐軟禁拉致監禁と言えば、連想するステージは至って限られる。廃工場、地下室、マンションの一室と何でもござれり。つまりは要するに、人気の無い、あるいは人に気づかれにくい場所ということでだ。当然、それはここ異世界でも共通認識であり、そして、セレンにある、以下の条件を満たした場所というのは、

「教会？」

「正確には、『元』教会だな」

随分と前に、ご乱心めされたヒャッハーな神父様が、自分の妻子を含めた十三人を皆殺しにしたという事件があって、それ以来管理する者がいなくなり、今やこうして廃れ寂れて放置プレイを受けているのだと、ルイからの解説。

「で、いつの間にかガラの悪い連中の溜まり場と成り果てた、とさ」

「めでたくもない上に面倒極まりない」

「そいつは言えてる」

にひひひ、とルイは愉快気に笑う。

俺は滲み出る苛立ちと腹立ちとを押さえ込みながらも、親指の爪を噛んだ。

そんな俺達二人がいるのは、件のヴァネッサが囚われているとの情報がある教会から、監視可能な距離までに離れた、とある建物の平たい屋根の上にいた。ここから見える教会は、見るも無残に寂れていて、壁の半分が蔦に活き活きと侵略されている。教会の周辺には他の建物はなく、手入れがなされていない広い敷地が、堅牢な柵

で囲われていた。
そして丁度、真正面に位置するこの民家は、最も監視しやすいスポットだった。住民の皆様にはお騒がせして申し訳ない（家主らしきご主人にチップを弾んでおいたら、爽やかにサムズアップしてくれた）。
「……しかし、本当によく分かったな、こんなにも早くヴァネッサの居場所が」
俺は敬服と労いの意を込めてルイに言った。
「はん。だてにこの街の裏を生きてるわけじゃねえんだぜ。この程度の諜報なんて、朝飯前よ」
鼻の穴を大きくして、誇らしげに胸を張る猫耳少年。
しかし、すぐにルイは表情を冷静なものに変えて腕を組み、でもよ、と前置きする。
「たとえ情報戦でこっちが先勝したとしてもよ、浮かれんのはちぃと早いぜ。これが相手の罠だって可能性も捨てきれない。無用心に先走るのは止めといたほうがいい」
「むぅ……」
俺もルイと同じく腕を組んで考えてみる。変に相手の罠に掛かってしまえば、ヴァネッサを助ける前に自分がやられてしまう。ヴァネッサだけを救出出来ればいいのだけれど、それは流石に無理があるだろう。ここはやはり一旦酒場に戻り、クリスさん達に報告するか……。
ぬーん、と俺が眉根にしわを寄せて思案していた折に、
「なーれねぇ頭脳労働はするもんじゃねえぜ、ルイ」
ふと、背後で人の立つ気配がした。
振り向くと、そこにはいつぞや前に集合住宅の所で会った、生傷の絶えない少年だった。腫れた頬の変色は治まっていたが、前歯が一本欠けていたのはそのままだった。
「んだよベックか、何しに来た？」
ルイが隣で鼻を鳴らした。

「何って、お前があそこの偵察しろって言ったんだんだろうが」
「あーあー、そうでしたそうでした。で、どうだった？」
「窓も全部締め切られてたから、屋根裏から忍び込んで、天井越しに見てきたけどよ、数はおよそ二十人前後、そろいもそろって武装済みだ。んまあ、少女一人を見張るのにしては随分と大所帯だったな」
「なあ、ヴァネッサは、無事だったのか？」
俺は恐る恐るベックと言われた少年に尋ねた。最悪の可能性は、出来れば考えたくない。
「んー、ちぃっと見ずらかったけど、おおむね大丈夫そうだったぜ。縄で縛られている以外は、特に何されたって感じでもなかったな、うん」
まあ、これからいったいナニされるかもしんねーけどな、と彼は愚にもつかないような笑えない冗談を言った。
本当、笑えない。
「くだんねぇ冗談は死んでから言いな、ベック。てめぇの脳味噌が手遅れだってぇのはみんな知ってるからもう死ねよ。つーか死ねよ。ありったけ死ねよ」
ルイは冷たい声で彼を罵った。ベックは肩を小さく竦めて、悪かったよと呟いた。
「ああ、それと、外に出てた巡回役がそろそろ戻ってくる頃らしいぜ、奴らも偵察じみたことをやってるらしい」とベックは付け加えるように言い、「ほらほら、あれだ、あれ」と教会の方を指差した。
俺とルイは、まったく同じ動作で教会の方へ目をやった。確かに、教会の柵沿いに歩いている男が遠目で見えた。その男はやがて正面の門扉を抜け、教会の敷地内に入り、教会の内部へと吸い込まれるように消えていった代わりに、しばらくして、一人の男が出て来た。
そこで、
「あ」
俺は、何とも間の抜けた声を出してしまった。

出さざるを得なかった。
あ。
ああ。
あーあああ。
なるほどー。
「なるほどなー」
そういうことですか。
そーゆーこーとーですかー。
なるほどなー。
馬鹿だなー俺ぇー。
ホント、馬鹿ですねぇ俺。
こういう時にこそ、千曲に罵って欲しいのに。あらん限りの暴言と妄言と壮言と高言で、とことん罵倒して欲しいのになあ。
あーあ。
「……ん？　おい、兄ちゃんどこいくんだ？」
ルイが、突然立ち上がり、歩み出す俺に対して、怪訝げに訊いた。
俺は、
「ああ、うん、ちょっと乗り込んでくる」
「ああ、そうか、気をつけてな……って、はぁ！？」
ルイは驚いて俺の肩を掴んで止めようとするが、
「おいおい、どうした兄ちゃん！　一人で行く気か？　そんなん死ににいくようなもんだろ、兄ちゃんの仲間を呼んでからでも遅くはねえからよ、ほら、考え直せって」
「もちろんルイにも、協力してもらうよ」
「はぇ？」
素っ頓狂な声を上げて、ルイは俺をまじまじと凝視した。

俺はその男の前に、すたっと降り立った。

「おっひさー」

俺が、そう言うと、ポカンとしてたアホ面が、見る見る内に驚愕に染まり、何かを口にしようとするが、俺はその前に貫き手でソイツの喉仏を潰し、鳩尾には拳を一発埋め込んだ。男は汚い胃液を撒き散らしながら、うずくまり、呻き声以外何も喋れなくなる。俺は男の髪の毛根ごとひっ掴み、ずるずると教会の柵の所まで引き摺って、改めてもう一発殴打し、襟首を締め上げ、背後の鉄製の柵に叩きつける。

せっかくだから、もう一回打ちつけてみてから、

「ようこそ澪士の部屋へ。今日の下種人（ゲスト）は貴様だぜファァック。精々、洗い浚い吐いてくれよ?」

俺が初めてヴァネッサと出会った時、卑しくもヴァネッサに絡んでいた三人の内の一人である、その男の襟首をさらにきつく締め上げた。

その少女、ヴァネッサ＝マランディが現在の状況に至るまでの経緯は単純単調。道端で変な男（後にその男が以前、自分に絡んできた奴らの一人だと気づいた）に声を掛けられ、振り向いたと同時に麻袋を被せられ、思考が現実に追いつかないまま、あれよあれよと訳の分からぬまま混乱している間に、この教会へと放り込まれ、縄で拘束され、一応は彼女も彼女なりに抵抗を試みたが、右頬をグー

で殴られ、それから意識が朦朧としてしまい、抵抗する意思さえも奪われてしまった。

かれこれ、何時間が経過しようとしているのか。

憔悴、とまではいかないが、少し疲れてきたな、と彼女は思った。切れた内頬を舌で触れてみる。ピリッとした痛みと裂けた肉の感触。そしてか細い鉄の味。不快感が込み上げる。縄で雁字搦めにされた手首が痛む。

周りの男達……全員が全員、とても笑顔が似合うような面とは、少なくとも言い難かった。例え、スマイルが無料で要求出来るとしても、決して頼みたくない部類の者か、それかきっとバイトの面接で書類審査の段階から落とされるような人相の者しかいなかった。まあ、用心棒としてなら、あちこちで抜擢されること請け合いであることは確かだが。

その中で、まだ若い、いかにもな小物臭がプンプンする男が、怖気立つような厭らしい視線で、自分を舐め回すように見てるのを、彼女は気づいた。

「なあ、もうこの嬢ちゃんで楽しんでもいいんじゃねえか？」

「だな、待機してるだけじゃ暇だしよぉ」

一気に、全身が粟立った。

意味は、よく分からない。が、コイツらは自分に、何かをしようとしている。酷いことをするのだと、彼女は、本能的に感づいた。冷やりと、無感触な緊張が、胸を締め付ける。

「勝手なことはするなお前ら。あの方の指示が来るまで、おれらはここで待機だ。余計なことはするなよ」

一番格上風の男が、威厳たっぷりに言い放った。

「……けっ、わかったよ」

「……ちっ」

不平と舌打ちを残して、彼らはヴァネッサから離れていった。はぁ、とヴァネッサは一先ずは嘆息した。自分を攫った奴らの一人のおかげで窮地を抜け出せるとは、何とも皮肉なことだった。

しかし、依然として以前と状況は変わらない。
自分は、攫われた状態のままで。
助けが来るのも分からない。
助け、か。
お姉ちゃんは、心配しているだろうか。
お父さんも。
クリスさん達も……。
「……」
お兄ちゃん……。
いつか絶対助けがくるだなんて、希望的観測をする程に彼女は楽観主義者ではなかった。でも、決して悲観する訳でもない。チャンスを待ち、機会を窺い、自力で逃げることさえ考えていた。何故なら、声を持たないというハンディキャップを背負った彼女は、意思を伝えるということよりも、行動に走ることの方が多く、そのせいか酷くアグレッシブな性格になってしまった訳で、今回もまた強気な姿勢を崩さなかったからだ。
めそめそ泣いている暇があったなら、考えなさい。
くよくよ悔やんでいる暇があるなら、立って前を見なさい。
彼女の姉――つまりはレヴェッカが、よく自分の妹に言い聞かせていた言葉。姉であり、そして母親の役目も担った彼女が、ヴァネッサに厳しくも言い付けていた言葉。
姉の教えを一心に受けた彼女は、同じ年頃の少女達よりも、遥かに強い心を持っていた。
彼女は、強かった。
だが、やはり心細いし、不安だった。家族に会いたい。みんなに会いたい。
お兄ちゃんに会いたい。
ぐらぐらと揺れる支柱。
だからこそ、信じたかった。
何とは、決して言わないが。

おそらくは、きっと。
「おい、奴らの動向は……」
「まだ店から出て来た奴は……」
「人払いは済んだか……」
「あの方に付いていけば我等は……」
会話が、断片的に聞こえてくる。何かの作戦会議的なことは把握出来るが、詳しい内容がよく聞き取れない。せめて、この事件の意図ぐらいは知りたい、と彼女はさりげなくゴロンと横たわったまま、縛られた身体でうねうねと芋虫のように少しだけ移動した。
と。
何か。
地面から、伝わる音。
耳を床に貼り付けて、じっと澄ましてみた。
あ、また音。
地面を、蹴る音。
「……おい、今外で物音が……？」
誰かが、そう呟いた瞬間、
バターンッ、と教会の扉が勢い良く開いたのと同時に、おそらく人だと思われる赤い塊が、潰れた蹴鞠のように飛んできて、ぐしゃりと床に転がった。
誰もが、物事を静止せざるを得ない展開。
誰もが、行動を急変せざるを得ない転回。
「……！」
そんな中、ヴァネッサだけが、驚駭と歓喜に満ちた瞳で、声もなく、彼の名前を叫んだ。
彼は、
「ヴァネッサ、助けにきたよん」
ああ、信じた甲斐があったというものだ。

一発限りの猫騙しは決まった。俺は瞬時にヴァネッサの元へ《移動》し、彼女を抱きかかえる。

「今だっ！」

俺の号令と共に数度の爆発音が響き、教会内はむせ返すような黒煙で充満する。ルイの交友関係の久を利用して、ドラえもん並みの早急さで用意させたケムリ玉。作戦実行犯はベックくんであるので、あとで菓子折りをもって感謝しに行かねばなるまい。

連中が混乱しているうちに近くの窓から脱出した。そこにはルイが焦燥に駆られた表情で待ち受けていてた。

「う、うまくいったのか？」

「今のところはね……っと切れた。大丈夫か？　ヴァネッサ」

「……！　……、……！」

俺は所持していたナイフ（男の子はいつでもナイフを所持しているものなのです）で、ヴァネッサを拘束していた縄を断ち切り、彼女の安否を問うた。ヴァネッサは、目に涙を浮かべて、興奮気味に俺に抱きついた。

「ああ、良かった、ヴァネッサ。無事で何より……だ、あ、あああ、あヴァネッサ、頬が、ああ腫れて……」

俺は、優しく羽毛のような力加減で、ヴァネッサの赤紫に鬱血した右頬に触れた。ヴァネッサは僅かに表情を引き攣らせたが、大丈夫だよ、との意図を含んだ笑顔を、俺に向けた。

ああ、何てこと、だ。

あぁ、ごめんよ、ヴァネッサ。

ごめんよ。

もう、駄目だ。
俺は、もう駄目だ。
スイッチは、もう押されてしまったのだ。
「悪いがルイ、至急この娘を家に帰して欲しいんだ。酒場の場所は分かるよな？　じゃあ頼むわ」
「おう任せろ……ってお、おい兄ちゃん、何してんだ？　……ってまさか嘘だろおい。やめやめやめい！　何考えてんだよ！　正気じゃねえぜ兄ちゃん！　この娘は救出したんだろ？　もうあそこには用はねえはずだ、なんで再度敵陣に突っ込む必要があるんだよ。さっさとトンズラしようぜ！」
必死の形相で俺を止めようとするルイ。だが、俺は無気力にその手を振り払い、
「俺があいつらを引き止める。その間に、ルイはヴァネッサを連れて逃げろ。それに、これは俺にとってのけじめでもあるんだ」
「なに寝ぼけたこと言ってやがる兄ちゃんは……ケジメ？　一人でしんがりをやるなんざ無茶だ！　考え直せって！」
俺はルイの訴えを半分受け流しながら、ヴァネッサの方に向き直る。
「……！　……！！　……っ！」
「でも……ごめん。俺、今から征かなきゃいけないんだ。本当に、ごめん。ヴァネッサは、ルイ達と一緒に先に酒場に戻っててくれ。レヴェッカさんや、ガイルさん達に早く顔をみせてあげて。俺も、後で行くから」
俺は最後にヴァネッサに笑いかけて、
「――――……！！」
「ちょ、兄ちゃん人の話を聞いて」
ヴァネッサの瞳の訴えも、ルイの制止の声も無視して、俺は走り出した。

完全に視界から消えた澪士の背中を見届け、ルイは頭をかきむしりながら立ち上がる。
「ああもうチクショウめ！　こうなったらとっととトンズらすっぞ。ほら、お前もいつまでもボーッとしてんな！」
「……」
ぐいぐいとルイに手を引かれながら、ヴァネッサは思う。
彼が、自分を助けにきたと教会に乗り込んだ時のことである。
何故、お兄ちゃんは、あんなにも悲しい顔を――。
途方もなく非常に、途轍もなく異常に、こちらの方が悲しくなってしまう程に、彼は、悲哀に満ちた表情をしていた。
確かに、彼は自分を助けにきたヒーローだというのに。
もっとヒーローらしい顔を、すればいいのに。
彼は、どうして。
「ほら何してんだ。早くしろ」
言葉遣いの荒い同年代くらいの少年の声に急かされて、ヴァネッサは少年の背中を追った。彼のことは心配だが、今は彼の言葉に従おうと思った。
心残りを振り切り、彼女は父と姉の顔を思い浮かべた。

第二十七話　死ぬことは恐くありません、自分が生きることに比べれば（後書き）

キャラは濃いかもしれんけど本編には登場しないシリーズ

名前　堺崎仙女（さかいざきせんな）

趣味　人を小馬鹿にからかうこと。澪士弄（いじ）り。

生息地　その日の気分で変える。

いわゆる、仙人っぽいギャル。ついに紹介する日が来るとは。作者の口出任せに誕生したキャラ。美白ギャル。厚底ブーツと縞々のニーソにミニスカという絶対領域を装備。だが携帯は持っていない。ライトブラウンの挑発気味な長髪。神出鬼没。高いところが好き。同学年なので、歳は澪士と同じなはず・・・？たまに老獪なことを言う。「っていうか～」「みたいな～」「的な～」こんな感じ的な言葉遣いっていうか～みたいな～？

澪士曰く、

「謎を知ろうとすると、さらに謎が深まる人物」

なんだって。

第二十八話　言う者は知らず、知る者は言わず

スタッ、と俺は教会の入り口に着地する。
「ハーイ、俺はここだぜセキスイハイム」
煙幕が段々と晴れていくにつれて、人相の悪い野郎共の視線が集まってくる。うわぁ、果てしなくいらない。
「答えろ！　何者だ貴様！」
その中の誰かが、声を荒げる。
「うるさいな。少なくともお前らの敵だよ。だから安心しなって」
改めて、再び俺はこの場所へと舞い戻ってきた。教会内の時間は著しく動き始め、蜂の巣を突いた騒ぎとなっていた。男達は蜂が踊るように世話しない。ブーンブーンって八の字ダンス。ダンスダンスダンスイズザヴァンパイアバンド。んー、関係ない。
「何故、戻ってきたのか聞いておこう」
以外にも冷静な対応で、リーダー格の厳つい男が言った。
「そりゃ、あんたらに暴力を振るいにきたに決まってんじゃん。ああ、あとヴァネッサを殴った奴は挙手しなさーい。今なら特別に全身骨折と三半規管のどれか一つの提供で許してやるから」
「このガキ……ふざけてんのか」
「こんな真面目な優等生捕まえといて言うことじゃないね。無遅刻無欠席無欠勤だぜ」
「訳の分からないことを……！」
そう俺と彼が軽口を叩いている間に、ぐるりと全四方三百六十度完膚なきまでに囲まれてしまった。なかなか統率も取れている。
「お前ぇら油断するな。このガキ、魔術を使うぞ」
リーダーチックな彼が周囲に警告する。やはり、最初にあの下種を血まみれにして放り込んだのが警戒を呼んだのか。呼ぶに値すると判断されたのか。俺的にはもっと大いに油断して欲しかったのだ

けれど。まあ、俺の優等生デビューは露へと消えたのは確かだった。
両手剣（トゥーハンドソードメイス）、戦棍、戦斧、戦槌（バトルアックスウォーハンマー）（瑠璃さんを思い出した）、などなどの凶器をお持ちになったみんなの熱い視線が俺に集まる。ああ、美しいとは罪である。
なら、醜いことは罰なのか。
何とも、言い得て奇妙である。
「さあ、おじさん達、俺と一曲しゃるうぃーだんす？　最大級、最大限の暴力をもってしてお相手しよう」
そうやって、俺が精一杯のかっこつけをしてから、いつもの決め台詞を吐いてみる。
ではでは、さあさあ。
「宴を始めようか」

膝を軽く屈め、肩の力を抜き、半歩足を広げ、両手は広げたまま、左腕を前に出し、右腕は脇を閉めて顎の辺りに持ってくる。
師匠直伝、対多人数戦において最も適した戦闘姿勢及び戦闘様式。
裏八式（うらはちしき）、混（こん）の型――濁（しょく）の構え。
「うらああっ！」
でっぷりとした腹を抱えた巨漢が戦斧を振り下ろした。俺は神経を集中させて、それを半歩ですれすれになるようにかわし、空中へ《移動》し、攻撃の反動で瞬発的な動きが出来ない巨漢のお顔に廻し蹴りを食らわせる。

「おりゃあっ！」
ブヲンッ、と横薙ぎに振るわれた剣をブリッジ体勢になることで避けて、そのままバック転をするノリで、ちょうど俺が逆立ちになる形で爪先を相手のコメカミ辺りにクリティカルヒットさせ、そのままの勢いで上空へと俺は跳ね上がり、たまたまそこにあった誰かの顔面を踏み潰して着地した。
「このガキがっ！」
休憩する暇も与えずに次の攻撃が来た。戦槌で俺の側頭部を狙ってきたその凶器を、俺は慌てず力の流れに沿うように、その戦槌をゆるりと受け流した。図体が無駄にデカイ男は、その戦槌の威力を抑え切れなかったようで、隣で剣を構えていた男達の中へと突っ込んでいき、一気に二、三人が再起不能となった。らっきー。
ヒュゥン、と短剣が耳元を掠め、頬に熱い線が迸った。だが、クロスカウンターの要領で俺は短剣の男の首筋に手刀を振るい、相手の体勢が崩れたところで足払いをしかけ、男は無様に後頭部を床にぶつけて気を失った。
「てめえら気をつけろ！　このガキ、妙な体術を使いやがる！」
妙な体術ですって、師匠。失礼しちゃいますね。
ま、実際その通りなんだけどね。
徒手空拳を主体とする、空手の手刀や突き、テコンドーの足技、合気や古武術などの要素も加えられた、新機軸の独立した武術。様々な武道を学んできた師匠が独自に考案したという――――謂わば、色々な武術の特徴を取り込んだ総合格闘技術。
これは、武道でなければ、武術とも言い難い。
これは決して、武術、武道などと名乗れる程立派なものではない。
色々な武術の長所を寄せ集めた、正直に言ってしまえば単なる喧嘩殺法であり、こんなものと一緒くたにされちゃあ、逆に他の武道の人達に失礼ってもんだ。
と、師匠が愚痴でも零すように言っていたが。
まあ、そんなことはとりあえず。

「数人で取り囲め！　反撃の隙をあたえぶぎぃが！？」
俺は、懐に潜り込むような位置に《移動》し、指示を喚いて出していた例のリーダー男の顎を掌底で砕く。舌でも噛み千切ったのか、口から血を滴らせているのを見た。男は倒れ、止めに鳩尾を踏み抜いておくのも忘れない。指示を出していて、こちらの動きに反応が遅れたのが致命的であったのだろう。これで、この烏合の衆は、少なくとも司令塔を失った。これで多少は統率がバラければいいのだが。
「ほら、ほら、ほら。俺はここだよ。さっさとかかって来いよ下種共。豚のような悲鳴でもあげてみろよ。ぶー、ぶー、ぶーってか」
安い誘い言葉。
容易い挑発。
引っかかってくれると嬉しいな。
でもまあ、そんな単純に引っかかる奴なんていないだろうけど。
「クソガキが！」
「ふざけやがって！」
「ぶっころすっ！」
……あらあら、意外にも単純な奴が多いようで。
ま、こちらとしては大変助かるけどね。
情に任せただけの攻撃程、扱いやすいものはない。まず素手の奴が殴りかかってくるが、俺はその拳を腕ごと蛇の如く絡めとるように受け止め、迷わず関節とは逆の方向に重心をかける。
グキョリ、と活きのいい音が鳴った。
つんざく悲鳴を上げるそいつを、俺は鼻面を蹴り飛ばして退かせ、すぐにその背後を狙って来た奴の腕をすかさず手に取り、背負い投げの要領で石造りの床に遠慮無しで頭から叩きつける。
通常、こういった投げ技というのは、下が畳か、相手が受身を取れることを前提として行われるものだが、下が固い床や面、おまけに相手も受身がとれないとなると、使いようによっては、投げ技は最も危険な殺人技になってしまう。掴み取られ、自分の足が地から

離れた時点で、もう逃げようがないのだから。
柔術も、元を正せば武士同士での戦場組討ちであるからして、殺人の要素は十分に含んでいるのである。まあ、ほとんど全ての武術武道武芸というのは殺し合いからの発祥なので、どんな武術であっても使い方を間違えれば楽に相手を死に至らしめる。
そこん所、俺はみっちりきっちり師匠に教え込まれ、叩き込められた。
『イカルガくん、人は簡単に死ぬよ。あっけないくらいに、人は死ぬ。だから暴力には枷が必要なんだ。武術とは、その最たるものだよ。用法用量を守り、説明書をよく読み、若葉マークはいつだって貼り付けておくものさ。分かったかい？』
と、師匠は毎度の如く言い聞かせ、耳にタコであった。っていうかあの人、俺の名前をまともに呼んだことなんてあるのだろうか。
閑話休題。
なんて、俺が師匠の言葉を思い出している間に、同時に突っかかってきた二人を正確かつ的確に捌く。
それにしても、何なんだこの連中は。随分と厳つい強面な奴が多いが、実力は素人に胸毛が生えた程度。数が数だけに苦戦劣勢を強いられることは元より覚悟の上だったが、とんだ拍子抜けだった。
まあ、俺がイリアから貰ったこのネックレスのアイテムのおかげで、今の戦況な訳だけれども。
それにしても、だ。
こんなケツのシベリアンブルーなガキに多勢に無勢で相手して、こんなにも惨めにあしらわれるなんて、こっちの方が悲しくなってくる。
それでも、容赦なんてしてやんないけど。
殺しは、流石にしないが。
生かしておいても、やらない。
そうだろう？
ああ、そうさ。

それがお前の人生さ。
もう、スイッチは入っちまったんだから。
でも、スイッチを切り替えてくれる奴はどこだ？
え？
もう、この世界にお前を受け止めてくれる奴は、いないんだぜ？
そうだったね。
でも、どうでもいいや。
どうでもいい？
スイッチが切り替えられないなら、電池が切れるまで人形のように踊り続けていればいい。
そうだろ？
なあ、そうだろ？
だからさ、そんな悲しい顔すんなよ、俺。
「足りない足りない満たされない！　宴はまだまだ始まったばかりだぞ！　もっとだ！　もっともっともっと！」
宴は、なおも続いていく。

「さーて、どこにぶっ飛んだっけかなー」
呻き声だけが渦巻く教会内。人がそこら辺にバタバタと倒れている。俺は立っていた。けれど無傷という訳ではない。多少なりとも怪我は負った。でも大したことはない。

「んーどこかなー」
辺りをきょろきょろと物色していると、ガシッと急に足首を掴まれた。
ん？　と俺が下を見ると、足首を掴んでいたのは、あの一番格上風の男だった。
「き……きはま……」
「あらあら、舌が短くなって喋りズらいですか？　闇魔様もアンタの舌を抜こうにも抜けなくなっちまってお笑いだ。ああ、そうそう、一応はアンタらの敗因を教えてやろうか。それはな、ずばり！　俺が強かったからーーーーーーじゃぁ、ないぜ。単にアンタらが馬鹿だったからさ。考えてもみろよ、室内で、しかもこんな大人数で、あんなでかい凶器を振り回してもみろ。それを逆手に取られて、味方に被害が出るのは目に見えてる。俺が倒した数より、アンタらが勝手に自滅していった数の方が多いくらいだろ。さらに今度は、そういう危険性が互いに牽制を強いるから、動きも若干制限され、隙も生まれる。こういう場合は素手か、もしくはナイフぐらいが一番妥当だっただろうな。まぁ、そういうこった。ごくろぉーさん」
そして数で押し切れば、俺なんかは手も足もでなかったはずだ。解り易く例えるなら、大剣使いがいつだって迷惑がられるものなのさ。斬り上げで出来なくて何が大剣と言えよう。
まあ、そういう理由もあった訳で、意図的に俺は教会の中での戦いに持ち込んだんだけどね、ってな訳で講義は終了。授業料はこれでいいですよ、っと。
俺は彼の手を振りかぶって解き放ち、そのまま振りかぶった足を彼の腹部に手加減無しで放った。
ぺきり、と肋骨の砕ける感触が爪先から伝わった。彼はびくんびくんと少し痙攣してから動かなくなった。
「……さて、探索探索」
俺は最初の作業に戻る。
でも、すぐに終わった。

「みーつけた」
俺がブッ飛ばした訳じゃなく、仲間の同士討ちでブッ飛ばされていたので、所在は分からなかったのだが、同じ室内にいる限りすぐ発見出来ることは自明の理だった。
「お前と、お前。ありゃ、こっちは意識がないや。幸運だね。じゃあお前、まだ意識のあるお前だ」
長椅子の所でのびていた奴は一先ずは放って置き、俺は祭壇近くで苦しげに唸っていた奴の胸倉を掴み上げ、ゆっさゆっさと荒っぽく上下させる。
「なあ、聞いたよ。お前らなんだってな。『あの方』の作戦とやらにヴァネッサの名前を出し、誘拐というエッセンスを唆したのは。えぇ？　そうなんだってな」
「……あ…うぅっ……」
「何とか言えよ」
俺は呻くだけのそいつの小指を握り締め、ポキリと通常の可動域の外側に圧し折る。五月蝿くなるのは嫌なので、叫ぼうとしたそいつの喉をすかさず手刀で潰す。そいつは声も出せないで、新たな苦痛に悶える。
ああ、許し難し。
あの時、ヴァネッサと最初の邂逅を果たしたあの日。俺は、この暴漢らを叩きのめし、ヴァネッサの窮地を救った。それは、咄嗟の状況判断から、ヴァネッサを守らなければという意思が働かせた行動で、別にこいつらに対して恨みや憎しみがあった訳ではなかった。故に、ボコしたまま放置しておいた。
ああ、でも、こいつらは。
その際に、確かな憎悪を、確かに孕んだのだ。
なんて間抜けで、どんだけ馬鹿なのだろう、俺は。
今まで、最もよく経験してきたことではないか。
憎悪とは、時間を置けば置く程、消え薄れることはなく、むしろ色濃く染まっていくことを。

その煮えきらぬ怒りの矛先が、いつだって弱者に向けられることも。

よぉく、知っていたはずだ。

なのに、俺は。

「あーあ、何を平和ボケしてたのかなあ、俺は」

憎悪ではなく、恐怖を――しっかりかっきりきっちりみっちりと、心の奥底に埋め込んでおけば、こんな由々しき事態にはならかったはずだった。

ヴァネッサが狙われるような失態は、犯さなかったはずだ。

ああ、あの時。

「ちゃんと、潰しておけばよかったなあ」

今となっては遅過ぎる後悔。今更過ぎる贖罪。

だからでも、ないんだけど。

もう、しょうがないことなんだけど。

「……俺の気が治まるまで、お前ら二人はとことん痛めつけてやるよ。最初の一人は既に血達磨になってお前ら二人を待ってるからさ、安心しなよ」

一緒の天国へ連れてってやるからよ。

と、俺がアインアンクローでそいつを持ち上げた折に、

ゾクリ、と。

「！」

意識が追いつくよりも早く、身体は行動に移っていた。俺は瞬く間にその場から離れるように《移動》した。振り向けば、先程まで俺がいた地点ではささやかなバーベキューパーティーが開かれて

いて、俺が痛めつけようとしていた彼は、自らバーベーキューへの食材を志願したようで、火達磨になりながら、死の咆哮を謳い上げていた。

何だ、これは。

彼は俺に血達磨にされるよりも、自ら火達磨になった方がマシだとでも言うのか。

そうじゃなくて。

絶句した。

二の句が継げない。

愉快なファイヤーダンスを繰り広げた彼は、やがてただ消し炭となった。

「……臭い」

人の、焦げた臭い。覚えのある、嗅ぎ慣れた臭い。肌が、皮膚が、肉が、髪が、骨が、無慈悲に焼ける臭い。

「『火炎球（ファイヤーボール）』」

はっ、とまた俺は訳も分からず飛翔する。着地した後に見ると、俺がいた場所では長椅子が哀れにキャンプファイヤーの犠牲になっていた。

俺はやっと、局面が急変している事実に気づく。そして、でかい火の玉が飛んできた正面入り口の方を向く。そこには、影。いや、逆光のせいで黒い影のように見えただけ。実際は、目深に被ったローブを纏った奴らが、他のお客様の迷惑も考えずに入り口を占領していた。その中で、中央にいる奴だけが、センスのない、上半分だけの仮面を装着していた。髭がうっすらと生えていたから多分、男性だと思われる。

「また、変な奴らが現れたよ」

俺は顔を顰めて小声で愚痴ってみる。明らか、こちらの味方ではないことは明確。

「……やれやれ、随分な状況なことだ」

中心にいた仮面の奴が、嘆息するように喋った。

あれ？　と俺は思った。
「まあ、いい。捕らえろ」
仮面の男が、言った――と同時にローブの連中がこちらに向かって動き出した。俺の毛穴は、とっくに昔にオールグリーンで開放されていた。
何こいつら、やばい。
床でゆっくり寝ていらっしゃるこのチンピラの皆様なんかとは比べるまでもない。
今、目の前にしている奴らが、ある種の一線を越えた者であると、俺は惜し気もなく本能的に理解してしまった。歴戦たる実力を備える、とある境界線を踏み越えた者達。瑠璃さんや、あの漆黒の『夜鷹（ナイトホーク）』にも通じる、プロの気配。圧倒的な力の差を地肌で感じてしまった。
『いいかい、イザナミくん。もし、その筋のプロに出会ったら、とりあえず逃げることだよ。プロとアマの違いっていうのはね、まず容赦がないんだ。これと決めたことは何が何でもやり遂げる。そこには情も感動もないのさ。君の実力ならそこいらのゴロツキ程度なら楽に倒すことが出来るだろうけど、プロ相手なら、てんで歯が立たないだろうからね。気をつけるんだよ』
ああ、もう師匠なんでこんな時に出てくるんですか。思い返さなくても分かってますよ。貴方の言葉は耳たこなんですから。はいはい、逃げます逃げますってば。
てか、逃げなきゃやば――
「――――っいいいいいっ！」
向かってきた中の一人が見えないぐらいに速い動作で投擲したと思われるアイスピックのような形状のナイフが俺の手の平を貫き、投擲のままの勢いで、引っ張られるように床に釘刺されて、それから次々にぐさぐさと服の端を狙って完全に俺の身体は床に縫い付け

られてしまった。そして止めと言わんばかりに別の奴が上空からの膝落としで、動けない俺に迫ってくるが、俺はその前に集中し切れてない意思でどうにか《移動》し、少し離れた位置へと緊急脱出することが成功した。俺が標本になっていた場所では、屈強な身体をした男の膝が、床に亀裂を発生させながら同心円状に沈み込んでいた。もしあそこに俺がいたらと思うとぞっとした。

「――いぁあっ！」

頭上に、殺意の剣先が凪いだ。はらり、と将来貴重になるだろうと予想される髪の毛が束単位で散る。小学校の頃に流行った囃し言葉が思い浮かぶ。頭を斬ったんじゃない。髪の毛が斬られたんだ。

しゅ、集中しろ。遠くに、もっと遠くに《移動》を……

「おおぉう！」

再び、意識を集中させる暇もなく奴らが襲いかかる。俺は天井近くまでに《移動》して回避を試みたが、いきなり地中から顔出した無数の鎖によって両足が絡めとられ、そのまま下へと叩きつけられた。痛い。風穴開けられた右手もそうだが、先刻までの乱闘のせいで体力はほぼ零に等しい。全身を打ちつけた激痛に晒されながらも、俺は意識の集中を止めなかった。奴らは俺が今痛みで身動き出来ないと踏んで油断している。実際、ローブの連中はゆっくりと歩いてこちらに近付いてくる。チャンスだ。これを機にこの教会から《移動》で脱出する。どこでもいい。どこか別の所へ、と念じる。

しかし。

「……え」

胸元のネックレスが、反応しない。

うんともすんとも。

応えてくれない。

「……くっくっく、どうだね？　動きを封じられ、魔術も使えられまい」

仮面の男が、にたりと気持ちの悪い笑みで、声で、言った。今や俺の身体全体が地面から蛇のように這い出てきた鎖によって、ぐる

ぐると簀巻きにされてしまい、自立可動式の鎖はじゃらじゃらと音を立てながら、俺を宙へと少し浮かせる感じで縛り上げた。
「……っ」
窮地。
危機。
四面楚歌。
絶体絶命。
孤立無援の八方塞。
澪士ちゃん、ぴ～んち。
なんて、ふざけてる場合でもないんだけど。
正直、手詰まり。チェックメイト。王手が掛けられました。
俺の唯一の武器である、イリアから貰ったこのネックレスのアイテムも、何故だが使用不可能状態だし。
あーあ。
さーせん、師匠。俺、ここで終いっすわぁ。
ああ、例えばこれが小説や映画だったら、都合よく救援救助が来たりして、クライマックスのどんでん返しのハッピーエンドがあるんだろうけど、これは少なくとも現実だし、例えこの世界がファンタジーであっても、その法則は変えられない訳で、よくよく幸運僥倖が重なったりはしない。ご都合主義なんて糞喰らえだ。いつでも何でも、原因があって、結果があるだけなんだから。
奇跡なんて、起きやしない。
あの時も。
あの時も。
あの時だって。
決して助けなんか来やしなかったのさ。
自分でどうにかするしか、ないのさ。
でもこの状況は、文字通り手も足も出やしない。
でも。
抗え。考察しろ。逆らえ。思考しろ。歯向かえ。この状況に。

考えろ。考えろ。考えろ。考えろマクガイバーだ。
「大人しく、観念したらどうだ？」
仮面の男が、俺の首に手を掛ける。段々に締め上げる力をいれていく。苦しい。酸素が、脳に廻らなくなる。血が急停止して顔が赤くなる。だが、時期に青くなり、果ては白く染まっていくだろう。
「ぁがっ……」
んー？
あちゃー。
もう、駄目かな？
ああ、駄目だ。
この展開をひっくり返すような要素なんかどこにもない。
周りに集まって来た他の奴らも、目深に被ったローブのせいで表情はよく窺えないが、どことなく嘲笑しているのが分かった。
「あ……あぁ」
ああ、あ、可笑しいな。ツマラナイナ。途中までは良かったんだけどね。ここで俺の出番は終了ですか。お疲れ様です。おやすみなさい。役立たずですいません。小物の俺が出しゃばったのがいけないんです。見てくださいこの様を。笑っちゃうでしょ。可笑しいでしょ。所詮こんなもんなんです。いつだって、俺は、中途半端にやらかしたまま終わるんです。自ら完了させたことなんて何一つ無いんです。惨めで、情けないったらありゃしない。ごめんなさい。本当、救いようのない馬鹿で。
だから。
「あと……は、たの、み……ま、す」

「『不可視の弾頭（エアロミサイル）』！」
「『光陰矢の如し（イビルライトエイム）』！」

俺を囲んでいた何人かが、見えない何かに音もなくいきなり吹っ飛ばされ、残りは幾人かは、光と闇の螺旋の衝撃に呑まれ、教会の壁を粉々に貫いて場外ホームランにされた。
教会の出入り口。逆光で浮かび上がる四つの影。この場において、最も頼りになる四人の姿。
「少年、生きてるか！」
「おいあんちゃん！　助けはいるか！」
「今なら大特価でご奉仕中っス！」
「ローンも組めるわよ！」
……チクショウめ。
ああ……糞っ。これだから、人生は。
「……後払いで、お願い……しま、す」
奇跡なんて、ある訳ない。
因があって、果が残るだけ。
それだけなんだ。
ああまったく、ご都合主義万歳だ。

第二十九話　塵が積もってもただの塵

祈ることと、縋ることの違いは何か。
祈りは愛だと、ある物書きが記した。しかし、それ以上に縋るという行為は、悲しいくらいに哀れなものだということを、とある厭世家は語っていた
祈りとは慈愛であり、縋るということは悲哀である。
では、祈るということそのもの自体は、神に縋るという行為に他ならないのではないだろうか。
そして、どこかのとある教会の修道女が、紫煙を吹かしながら呟く。
『そもそもな、神サマに本気で縋ろうなんて奴はいないんだよ。縋ったって無駄なことは、ハナタレのガキでもよーく知ってる。だーかーら、さ。あたいらは祈るだけなのさ。神サマに祈って、自分に縋る為に、な』
そこに「愛」があるか。
そこに「哀」はあるか。
つまるところその程度の相違でしかなく、けれど絶対的な格差であった。
その女性、レヴェッカ＝マランディにとっても、ただ黙って祈りを捧げ、いるかどうかも分からない神に縋るということ以外に、自分は何もできないという事実は、苦行にも等しい所業だった。
自らの無能さを突きつけられるような。
大切な妹の為に何も出来ないという歯がゆさ。

『紅色の髪の乙女』とも呼び声高い彼女には、その艶やかな髪色以上に鮮烈な激情を兼ね備えていた。

故に、歯がゆい上にもどかしい。

妹の一大事に――自分はどれだけ役立たずなのだ。

腹立たしい上に苛立たしい。

加えて、そんな自分が情けない。何も出来ない自身が恨めしい。

ふと、ぐるぐる当てもなく考え込んでいると、果てのない自己嫌悪にまで陥ってしまう。

「落ち着け、レヴェッカ」

椅子に腰掛けつつも、どこかそわそわとしているレヴェッカの肩に、クリスは優しく手を乗せた。

はっ、として、レヴェッカは自分が知らぬうちに震えていたことに気づく。

「……ご、ごめんなさい、私……」

「うむ。いいんだ、無理もない。今、バリーの魔術で信用の置ける者達に使いを送った。犯人達の数が不明な以上、こちらも戦力を揃えていた方がいいだろうからな。少年も、どこへ行ったかは知らないが、彼も独自で心当たりを探っているようだし、大丈夫だ。これだけヴァネッサの為に皆が動いているのだ。必ずヴァネッサは戻ってくる」

「……うん、ありがとう、クリスさん」

「……うむ、お前は昔から強い女だ」

「クリスさんほどじゃあ、ないよ」

彼女がそう言うと、壁に背を預けていたラウルが、その体勢のまま、口を開く。

「だけどよ、少なくとも十分に強くなったよ、レヴェッカは。お転婆だったガキの頃よりかは、ずっとな」

「ラウルさん……」

二人の言葉に励まされ、レヴェッカは気の持ちようを立て直して、しっかりせねばと自身を奮い立たせる。

もっと、しゃんとしなきゃ。
私は、お姉ちゃんなんだ。
うじうじ落ち込んでばかりしていては、いけない。
もっと、しっかりしなきゃ。
と、決意新たに自分を鼓舞する彼女の下に、待ちに待った――しかして思いもよらなかった吉報と、その吉報自体も一緒に、酒場の入り口のウェスタンゲートを破って、飛び込んで来た。
「……！」
「ヴァネッサ！」
ここまで止まらずに走ってきたのか、息を切らして姉の胸にダイブするヴァネッサの姿が、そこにはあった。一泊遅れて、父親のガイルも、娘の突然の帰還に驚愕と涙を浮かべて、父娘三人一緒に固く、離れ難い抱擁を交わした。
そして、もう一人の来訪。
「君は……確かルイだったか。何が、どうなっている？」
「ルイくん、何で君がここに？」
酒場の入り口を破ったのはヴァネッサだけではなかった。ヴァネッサの後から、灰褐色の髪の中から生えた耳をヒョコヒョコと忙しげに動かしているルイが、息を切らした様子もなく、だが、少しの焦燥感を顔に忍ばせて、立っていた。
「おう、おう、質問なんて後回しだぜ、あねさん方。只今緊急事態だ」
ルイは、芝居がかった調子で口を開く。しかしその口調とは裏腹にその表情は真剣そのものだったので、女冒険者二人も一旦口を閉ざした。
「レイシ兄ちゃんの、ピンチだ」
ルイは、そう言った。

そして、現在。

俺は、自分の濁り切った眼球に遍く映ったありのままを語ろうと思う。そこには細分の虚偽も相違も含まれず、ただ刻々と流れる視覚情報の奔流を、韜晦も後悔もせず、明快かつ明解に、苦し紛れの言葉遊びを織り交ぜながら、紡いでいこうと思う。

まず華やかな登場を決めてくれたチーム『コーレア』の面々。前置きもなく、まず先陣を切ったのはクリスさんだった。等身大もある巨大な大剣（クレイモア）を担ぎ、こちらへまっすぐに突進してくるのと同時に、俺を囲んでいたローブ集団は、蜘蛛の子のようにその場から散り、クリスさんの喝が轟き、

「はあっ！」

空気の戦慄（わなな）く、音がした。

と思ったら、それはクリスさんの大剣が俺の鼻先を掠めるように振り下ろされた音で、次の瞬間には大剣が床を砕き、鼓膜をつんざく爆音が響いていた。哀れなことに床には奇天烈にもエグイ亀裂が蔓延（はびこ）っていた。床、解せぬ。

そして、俺に巻きついていた自立可動式のチェーンが、じゃらんとあっけなく千切れる。わーお、敵を牽制する一撃と見せかけて、俺を緊縛プレイから解放する為の一線だった訳ですね。クリス先輩マジぱねえっす。

晴れて鎖の束縛からの脱出に成功した俺は、そのまま情けなくクリスさんの胸に抱き止められた。

「……馬鹿者め。先走るなとあれほど言っただろ」

「……す、みま……せん」
弱々しく声を返すことの出来ない俺を、クリスさんはしっかりと抱き寄せる。
ちなみに、クリスさんは無骨でゴツゴツした軽装タイプの（関節部分が露出した機敏性を重視したもの）プレートアーマーを装備していたのでそんな、胸の感触が～とか甘いことを想像してはいけない。抱き止められた硬い鉄の冷たさが、主人と同じく自分を諫めているようだった。
「帰ったら説教だ。覚悟しておけ」
「……はい」
俺のか細い返事を待たずに、当然のように戦況は流れ、アンジェリカさんが連続で放った数本の矢が、散り散りになった敵の追撃にかかる。そこへさらに追い討ちをかけるように「『不可視の弾頭（エアロミサイル）』！」と声が重なり、単騎となった敵の何人かを、《見えない何か》が吹っ飛ばす。
「よう、レイシ。ハッピーか？」ラウルさんが横に来て、二対の刀身の細い剣を携えながら、俺に問う。
「……ええ、ラウルさん。そりゃもうハッピーヤッピートリッピーですよ」
何てったって、頭の中がハッピー過ぎてどうしようもないですからね。
「はぁいレイシ、気分はどう？」アンジェリカさんも追いついて、弓で威嚇射撃をしつつ、俺に尋ねる。
「最高ですね、文句なしです」
痛み以外の感覚しかない今の俺にとって、『気分』という単語のゲシュタルト崩壊が始まっていますけど。
「大丈夫っスか、レイ……」バリーが何か言おうとするが、
「オメェはだぁってろ！」
「何でぇ！？」
と俺の一喝に涙目になりつつも、にやりとバリーは口元を持ち上

げた。俺も、ニヤリと口端だけで笑う。
そんな風で四人と愚かな人間失敗が集まったところで、二人の遠距離攻撃が止み、先方との膠着状態が始まった。アンジェリカさんが、ぎりぎりと弓づるを引く。バリーが魔道書を開いて構え、いつでも魔術発動の姿勢になる。クリスさんは俺に肩を貸したまま片手でその超重量の大剣を平然と構えて、ラウルさんは、ただ目の前の敵を睨みつけている。特に、例の仮面の男を。
悲しむような。
怒りのような。
そんな視線で、男を見据えてから、さりげなく俺の足元に転がる鎖の断片を拾うと、
「魔封じの鎖……こんな対人用のえげつねえエモノを使う奴なんて、俺の知ってる中で一人しかいねえ」
なあ？　ばぁぁぁるぅごちゃーんよぉ？
と、ラウルさんは、恐らく仮面の彼に対して挑発的に言葉を投げかける。
「……やはり、昔に連れ添っただけのことはあるな、ラウル」
仮面の男は、苦笑しながら、ゆっくりと自らの顔面に張り付いた仮面を外し、そこには想像した通り、長めのブロンドをオールバックにした、あのバルゴさんだった。
……これで、ようやく俺の疑問が解消された。
どこかで、聞いたことのある声だと思ってはいたが。
ていうか、今日の午前中に聞いたばかりだ。
「連れ添った、だなんて気持ち悪いこと言ってんじゃねえよ。けっ……その周りの連中も、ギルドでお前に忠義深い信者だろどうせ」
ラウルさんが言った連中とは、只今四人にまで数を減らした取り巻きの者達だった。

「何を言うか。彼らは、我らがチーム『ルドベキア』の一員だよ。実に優秀かつ有能な者達だ」

再び、仮面を付け直すバルゴさんは、自分の息子を誇る父親のように、生き残った四人を順々に指していく。

「『焔舞のロゼ』『砂壊のゼネル』『死突のエーネ』『氷斬のスイ』……どうだ？　ギルド内でも屈指の兵（つわもの）であり、指折りの強者（つわもの）達だ。我がチームの要たる四人だよ」

名指しされた四人は、各々に頭部を覆ったフードを剥ぐ。なるほど、これはなかなかにヤバめにキまっている人達だ。それぞれキャラが立ちそうな顔をしている。特にあの、『砂壊のゼネル』って屈強な男の人、さっき俺に膝落しを決めようとし、床を滅茶苦茶に陥没させた人だ。あと、『死突のエーネ』って女の人も、最初にクナイみたいな飛び道具で、俺の手の平に風穴を開けた人だ。

――――――やべえ、思い出したらまた痛くなってきた。あ……あああ、あ、やべやべやばいやばばばばややべい！　忘れろ忘れろ目の前のことに集中しろ。アドレナリンアドレナリン放出放出大量輸入。急いで早く脳よ我が意に従え。うるさい。さっさとしろ。

ここで死にたいのか。

「ふんっ。それじゃあ、他の奴らはどうなんだよ？　皆、お前の為にそこで呻いているぜ」

「……ん？　ああ、《コレ》のことか？」

バルゴさんは、足下近くに転がる、まだ辛うじて意識のある男の腹部を蹴り上げ、男は反対側の壁まで吹っ飛ばされ、呻き声すらも無くなった。

「使えない人間は、嫌いでね」

「テメェ……」

ラウルさんは、瞠目した後に、歯軋りの音さえ聞こえるくらいに怒りを露にした。そこにはもう、悲しみの断片も感じられない。紛うことなき憤怒の感情。

「お前が、この事件の主犯だと分かった時から、俺はもう覚悟して

んだ。お前の狙いも、薄々勘付いてる。だから、俺は……」
ラウルさんは、再度その手に持った双剣を構え直し、
「お前を――――止めてやるよ」
そう、憤怒にかられた強い意志を示した。

「……勘付いてる、か。くくっ、さすがだな、『双牙のラウル』」
「うるせえ。その名で呼ぶな、『血鎖（けっさ）のバルゴ』」
バルゴさんは、そうやってラウルさんとの会話を打ち切ると、今度は、この俺に視線を寄越した。何故に？　と思いながら、俺はクリスさんに肩を貸されたまま、その視線に応えるように見返した。
「レイシくん、まったく……こんな結果で君と再会しようとは思わなかったが、なかなかどうして、残念だよ」
「何が、残念なんです？」
相手の話の意図が掴めない。俺は尋ねる。
「君のような、確かな実力のある若者は是非とも私の仲間になって欲しかったのだが、それも、もう叶わなくなってしまったことがだよ。何せ『転移（トランゼーション）』なんて希少かつ高等な魔術を会得してる者なんて、滅多にお目にかかれないからね。それにしても……君は『転移』の魔術を体得しているにも関わらず、他の魔術を使用しなかったのは何故だね？　ここのクズ共にも、『転移』以外の術を行使していなかったようだが、不可解だね」
「……」

いやぁ、俺、瞬間移動しか能力ないし。それも俺の実力じゃなくて、イリアから貰ったこのネックレスのおかげだし、っていうか、そもそも魔術師でもないし。

どうしたもんか、と俺は何と答えようか言いあぐねていると、

「……ふっ、なるほどな。格下の者などに、攻撃魔術を使うまでもないと――そういうことか」

「……は？」

「そして、直接的な攻撃魔術以外の、それもわざわざレベルの遥かに高い『転移』の魔術だけを併用し、実力の違いを見せつけながらも、あえて肉弾戦を選び、遊戯の如くこのクズ共の相手をしたということか……だが、突然の私らの介入は想定外だったようだな。さすがの君も、咄嗟の判断で回避しか道がなかったのだろうが、ふふっ、慢心はいけないよ、レイシくん。油断はいつだって大敵だ。しかして……知れば知るほど君を手放すのが惜しくなるよ、レイシくん」

例の如く、無駄に洗練された無駄ばっかりの無駄な考察が暴走特急しているご様子で、一人で勝手にふむふむと頷いている。

まあ、いいや。どうでも。

俺は、もういいですよ、とクリスさんの肩から腕を外した。

勝手に勘違いしてくれるなら、それでもいい。何より、訂正するのもメンドクサイ。

「……でさあ、あんたらの目的っていったいなんなの？」

おおっとここで痺れを切らしたのかアンジェリカさん、今回の騒動の核心を突くことを訊いてきましたぁ！　さあさあどう出るか、バルゴ大西（誰だ）相手のこの鋭いストレートにどう反撃に出るのか見ものです。

「――名高い弓の名手であられるアンジェリカ嬢の質問には、少々返答に窮しますな」

くくくっ、と含みのある笑いを隠さないバルゴさんは、窮する態度など微塵も感じさせないで、かく語り始める。

「ずばり、言っておきましょうか。我々の目的は、貴方達チーム『コーレア』の壊滅」

ずばり、壊滅でしょー。

俺の脳内のマルオ君が椅子を振り回して騒ぎ出す。

ああ、これで、繋がった。

違和感の全てが解凍され始め、その解答の全貌が疑問の海から引き上げられる。

何だ、こんなことだったのか。

こんなことの為に、ヴァネッサは、攫われ、閉じ込められ、殴られ、傷つけられ、酷く辛い思いをして。

ああ。

「……なん、ですって」とうまく思考が働かないらしいアンジェリカさん。

「うむ。そういうこと、か」と凍るような無表情で呟くクリスさん。

「……っス」とコレといって何も言うことが無いのか、特に反応のないバリー。

「やっぱりかよ、糞がっ」となおも感情だけを高ぶらせるラウルさん。

「……」

俺は。

どんな反応を返せばいいのだろうか。

「あの少女を誘拐したのも、元々は貴方がたを誘き出すためのエサ。貴方がたが救援を要請すると思われる者達も大半は我々の手の内だ。まあ、何人かは愚かにも抵抗した故に、いた仕方なく力ずくで黙ってもらったが」

「……なるほどな。道理で連絡がつかん訳だ」

クリスさんが吐き捨てるように言った。

「計画では、指定した場所に、貴方達はおそらくあの酒場の主人の護衛としてついていくはずだった。そこへ、この教会に待機させておいたクズ共を向かわせる予定だったのだが――――そこで、君だ

よ、レイシくん」
　俺の名前が呼ばれた。
　唐突でもなければ、突然でもない。
　そこで、俺の名前が出て来て然るべき展開だ。
「君のおかげで、計画に支障が出たのだよ。人質は逃がされ、あげくに返り討ちにされて……例えクズ共でも大幅な戦力低下だ。『ルドベキア』が誇るこの四人でも、『コーレア』に勝つにはいくらか無謀過ぎるからね。こんなクズ共でも『コーレア』の面々の体力ぐらいは削ってくれると思っていたのだが……所詮クズはクズか、何の役にもたちはしない」
　やれやれ、と肩を竦めるバルゴ＝フェリギオス。
「……何故、あんたはラウルさん達のチームの崩壊を望むんだ？」
　バルゴさん以外に声を失っている中、少々置いてけぼりな俺は事態の全容の把握に努めることにした。
「まあ……ギルドに入って間もない君には分からないだろうがね。ほら、言っただろう、私はギルドの改革を望んでいると、その為には彼らが邪魔なんだよ。実力に値する評価を、実績に見合う対価を、真に優秀な人材を集め、育て、我らがギルドこそ、この大陸で絶対の存在になる為に、私は日夜活動している。仲間を集め、支持も集まった。だが、そこにいる『コーレア』の面々が我らの悲願を阻害し、我らの正義を否定するのだよ。どうだい？　酷いとは思わんかね？」
「ふざけんなっ！」
　ラウルさんが、叫んだ。
「お前の言うことは、弱者を切り捨てて、強者だけを生かしていく道だ！　それは、正義でも何でもない。ただのエゴだ！」
「ならば訊こうラウル。お前はこのままでギルドがこれから先も存続するとでも思っているのか？　今の現状を見てみろ、物価の浮き沈みは激しく、商人も見切りをつけ去っていき、他方のギルドにま

で仕事を奪われ、あぶれ出した者が明日食う飯も満足に確保出来ないでいる始末。支配人（ギルドマスター）は何も動こうとせず、このままではただギルドの崩落を待つだけだ。私は、そんなことは許さない、否、許せずはずがない」

「だからと言って、下の者を切り捨てる考えにはマスター同様、私らは賛同出来んということだ」

冷静な口調でクリスさんが口を挟むが、

「甘いぞクリスティーナ！　ギルドで数少ない特有Ｓランカーの称号を持つお前が、まだそんな甘ったれたことをほざくか！」

「実力主義の剣が、どれだけ諸刃なのか、お前は知らない」

「諸刃？　はっ！　傷ならばいくらでも甘んじて受けようじゃないか。そんなものはなから覚悟の上だ」

開き直るようにバルゴさんは言うが、ラウルさんは噛み付くように、

「俺らを潰すことも、その覚悟とやらなのかよ」

「ああ、そうだとも！　マスター派閥の主力のお前達が消えれば、ギルド内の勢力図の天秤が、愕然と我らに傾く。そうなれば、我らの計画遂行達成も滞りなく進み……あわよくば、私が支配人の座に収まる日も近くなるというものよ」

クリスさん、ラウルさん、アンジェリカさん、バリーの全員が、あまりのバルゴさんトークに唖然。

「……」

俺はそんな彼らのやり取りを見ながら、沈黙。

何じゃ、そりゃ。

聞いてて、何だか笑いが込み上げてきそうで、しかし、バルゴさんのやったことは許せることではないので、怒りと可笑しさが相対して相殺。

つまりは通常状態。

要するに普通な反応の俺。

普通に何でもない反応。

それが、俺の反応。
「下らない」
だから、カマをかけてみる。
「……何、だと？」
予想通り、バルゴさんはすぐに俺の言葉に喰いついた。
俺は息を肺に溜め込み、口先八丁舌三寸の――――愚にもつかない反撃を試みる。
「下らない、と言った。つまらないつまらない、実に下らない。あんたの野望野心のおかげで、あの娘（ヴァネッサ）が傷ついた。その事実に変わりがないことは明確なんよ。本当に下らない。崩壊？　崩落？　ギルドの未来？　はっ！　阿保らしい上に馬鹿馬鹿しい。そんな手前な問題に、勝手に他人を巻き込むな。迷惑極まりない。いくら不況だからって、カルト教団みたく布教してんじゃねぇよ。んなことは他所でやれ。もうこの時点であんたはアウトでダウトだ。嘘八百の詐欺師と同じだ。おい、チャウチェスクとジンバブエの大統領って知ってるか？　俺の知ってる中で上位を争う大詐欺師達のことだ。ちなみに一位は断トツの某ヒットラーさまだ。今のあんたはそれの一歩手前。『正義』なんて言葉を軽々しく使う奴は絶対に信用するな、だなんて猿でも知ってる常識だぜ？　そんなら最初っからエゴイズムを唱えていた方が百倍マシさファァァァック！　糞喰らえな説法している暇があったら、もっとやることがあるだろうが。絶対の存在？　もっと現実見ろよファッキン！　つーかあんたの二つ名も笑えるな。『血鎖のバルゴ（笑）』ってか？　あっははははは恥ずかしい、恥ずかし過ぎるよこりゃ傑作だ。まあまあ、精々あんたは一生部屋にヒッキーして自分の息子握ってピストン運動で震わせて自家製カルピスでもブチ撒けてろよこのロゥインザフィシズアプラグナントジャスキディングベイベェー！」
レッツパーリーだ皆様方。
「なっ……！？」
ぱくぱくと二の句が告げないバルゴさんを尻目に、何とかそこま

で言い切った俺は、また別の意味でぽかんと呆然として俺を見ているラウルさんに向かって、ほらラウルさんも何か言ってよ、と煽る。ぱたぱたと点火させるように、煽る。

「……ぷっ、ははは！　やっぱお前最高だぜ、レイシ」

と、吹きだしたラウルさん。その目には、既に怒りも憤りも感じられず。ただ、その二対の剣のように、研ぎ澄まされた強い意志だけ。

ラウルさんが前を見据え、思いっきりの声量で、決めてくれる。

そう、最高の台詞で。

「バルゴぉ！　お前、その仮面ぜんっぜん似合ってねーから！！」

っていうかすげーだせえから！

俺と、チーム『コーレア』のメンバーは、その宣告に死にたくなる程に腹を抱えて爆笑した。

第二十九話　塵が積もってもただの塵（後書き）

みんな様二週間ぶりくらいです。蝉です。
こんなに投稿期間を空けたのは初めてな蝉です。
えー、最近筆が進まなくてですね、はい。
何だか今回もやっつけみたいになっちゃったかも。
いえーい今回は新しい名前がいっぱい出てきましたね。
というかクリスさん、イリアと同じSランカーだったんですね。
チーム『コーレア』って意外とギルド内で幹部的扱い。

第三十話　私は最も正しい戦争よりも、最も不正な平和を好む

「……見返してやる」

貧民窟の最下層で、とある日の少年は、奴隷用の手械と鎖で繋がれた手足を引き摺り、復讐という名の剣を手に入れた。

「私は、私を見下してきた奴ら全員を見返してやる」

とある日の青年は、正義という名の盾を振りかざし、新たに出来た守るべき大切なものの為、何より己が宿願を果たす為、貧民窟時代からの唯一無二の親友に手を差し伸べた。

――――――――お前となら、どんなことだって出来る気がする。

――――――――共に、私らの時代を築くんだ。

――――――――さあ行こう、一緒に。

信じて、疑わなかった。

一番の理解者。一番の相棒。

互いの生死さえ預けあう、気の置けない相手。

だから、信じて疑わなかった。
迷わず、自分の手を取ってくれると。
同じ想いで賛同してくれるだろうと。
しかし――――――――その手は、あっけなく振り払われた。
その瞬間から、信用も信頼も、親友という立場も消え失せ、相互の関係は、これまで過ごしてきた時間が初めから無かったかのように、崩れ去った。
最愛の友は、最大の敵となった。
最後に、彼という存在に残ったものは、ただ無駄に使い古された盾と、ただその鋭さを増しただけの剣。そして、自らが名乗ったバルゴ＝フェリギオスという名のみだけとなった。
彼は独りになった。

「だーッはははははははははははははははははははははは！」
「う、む……む、むふふふふはははははははははははははは！」
「あはははははは、あ、ああはははは、はは腹痛いっス！」
「ぷっ……ぷぷきゃはははっきゃはははははははははは！」
哄笑轟笑の抱腹絶倒。
失笑絶笑の呵々大笑。
笑い声――――誰が誰かはご想像にお任せするとして。
大いに、高らかに俺達は笑い上げた。
俺は目の前のバルゴさんの反応を窺いながらだけど。ふむ、どうやら現状に思考が追いついてきたらしく、ふつふつと煮えたぎるように、へその薬缶を沸かしているのが見て取れた。
「キサマらぁっ！」
あ、怒りメーターが上限をブチ抜けたご様子。おまけに揶揄された仮面を剥ぎ捨てると、
「そこで笑っていられるのも今の内だ！　すぐに後悔させてやる！」
※俺的脳内翻訳補正※『もー！　バカにしてー！　ぞんとうに怒ったんだほー！』。
「これまでの分の借りもまとめて返上してくれようぞ！　私が地獄を見せてやる！」
※俺的翻訳※『私が怒ったら恐いんだぞー！　とにかく凄いんだぞがおー！』。
「このような屈辱は久しぶりだ、絶対に許しはせん。覚悟しろっ！」
※俺訳※『べ、別に恥ずかしくなんかないもん！　仮面だってワザとだもん！　ワザと中二っぽくしたんだもん！』。

「殺れぇっ！」
※訳※『やっちゃえー！』
「下がれレイシ！」
おおうっと、頭ン中でエキサイティングに翻訳遊びしている暇じゃなかった。クリスさんから警告を受け、とりあえずは教会の出入り口にまで退散することにした。
幸いにも俺のような虫けら如き存在はとっくの昔に眼中にないようで、バルゴ四天王（仮）の人達に背中を狙われるような事態にはならなかった。僥倖僥倖。そんな訳で、俺の立ち位置は、必然的にクリスさん達を見守るだけの立場となったのはやむを得ないこと極まりないと思う。バルゴ四天王（笑）の四人もさっそくといった感じでチーム『コーレア』の面々に襲い掛かり、あちこちで剣と剣が逢瀬を交わす音が響き、教会内に木霊している。
まあ、でも。
この場で俺がしゃしゃり出ても足手纏い以外の何者でもないので、大人しく自分に与えられた役割に従事したいと思います。
「さーて」
実況解説担当の人間失敗ことわたくし鯨木澪士が、非分過分を承知で、非礼失礼を前提に、努めて歪みなく務めさせていただきましょう。
それでは。
どうぞ御緩（ごゆる）りと。

鳴り渡る爆音に続き、教会の外壁が爆散し、立ち込む埃と塵灰に紛れて、早くもバリーは戦場を教会から、外へと場所を移した。

身に火の粉を吹き散らしながら、教会の屋根に降り立つ人影が、ハイテンションマックスな物言いで。

「ひゃははは！　あたいの焔から逃げられるとでも思ってんの！」

渦巻く紅蓮が、バリーを喰らうかの如く呑み込むが、バリーを中央として半ドーム状に展開された風の障壁によって、炎の渦は四散した。

「へえ……流石は『コーレア』の一員、『風撃のバリー』の異名をとるだけのことはあるわね」

「いらねえっスよ、そんな黒歴史確定な異名」

バリーは魔導書を構えつつ、不敵に苦笑してみせる。

「お噂はかねがねっス、『焔舞のロゼ』さん。どっかの森を魔物ごと焼き払ったとか何とか。……エルフは、みんなお淑やかで、静謐なイメージがあったんっスけどね」

バリーが皮肉を含めて言うと、ロゼはひゃはひゃはと甲高い声で笑い、くすんだ短めの赤毛を揺らし、そのエルフ特有の長い耳を触って、その綺麗に括れた腰に手を当てて言う。

「あたいは別に、息の詰まる森の奥で、掟と戒めに縛られて生きてきた訳じゃないからね。ガキん時に奴隷商に攫われて、退廃した境涯の中を流れに流れてきたのさ。アンタのイメージを壊して悪かったかい？」

「いや、そうでもな『不可視の弾頭（エアロミサイル）』！」

バリーの呪文と共に、ロゼの立っていた教会屋根の部分が爆ぜ、ロゼはその前に辛うじて避けていたが、これでもかと不機嫌に顔を歪め、バリーを睨んだ。

「……アンタ、いきなり卑怯なんじゃないの？」

「俺は別に騎士とかじゃないっスから、第一、戦闘において卑怯も糞もないんっスよ……ｂｙレイシ」
「ふんっ……いい性格してんのね」
「お褒めに預かり光栄の至れり尽くせりっス」
まあ、これもレイシの言葉っスけどね、とバリーは肩を竦めて苦笑するが、ロゼはさらにその眉間を険しくさせて、
「もういい……燃え尽きろっ！」
着ていたローブを取っ払い、ロゼが腕を振り上げると、周囲の魔力の循環が彼女を軸として集まり始める。
「……《忌むべきは意味することの最善『災禍に叛く舞踏』、不屈なるは背徳の檻『忘却の恩恵』へと『欲する焔の蹂躙』に跪け》」
淀みない洗練された呪文の詠唱を、まるで一つの歌のように――
――ロゼは、目標を見据え、解き放つ。
「『紅炎こそ我が僕（プロメテウスプロミネンス）』」

刹那、天にまで貫く太い柱が――――紅蓮に燃え上がる炎の柱が、バリーのいた地点から突如として現れ、火炎旋風における強い大気の渦が発生し、周囲一帯の温度も飛躍的に上昇して、生えていた草花も緑樹もまとめて灰と帰した。
「……っひゃはは」
異なる別の呪文を一つの詠唱へと昇華させる超高等技術――――
『重奏詠唱（カンタータ）』。普通は二人か三人かでお互いの息の合わせ、双方の魔術を同時に結合させて発動するのが基本であるが、この場合、ロゼは驚くべきことに一人で『災禍に叛く舞踏（ギルティデッド）』と『忘却の恩恵（コンプレットテロル）』と『欲する焔の蹂躙（ディザイアオブヘル）』との三つを連結させた『三重唱（トリオ）』をやってのけ、『紅炎こそ我が僕（プロメテウスプロミネンス）』を発動させた。
無論、魔力の消費量は半端ではない。元々、二、三人で発動するべきところを、ロゼはたった一人でやり遂げたのだ。しかし、ロゼの様子を見る限り、あまり疲れた印象は受けない。精々、いい汗掻

いたな、ぐらいにしか感じていないようだった。
「ひゃは……いつだったか、あたいを安値で買い上げた豚野郎の顔をローストした時のことを思い出すねえ。それに、この技を喰らって生きてる奴なんかいやしない。バルゴ様からは、強いて抹殺命令は受けてないんだけど、まあ、いいさね。全て灰に還っちまえば、問題なっしさ」
――――自分が奴隷だった時代を、ロゼは燃え尽きていく何かを見る度に、思い出す。奴隷狩りの者達に、村を焼かれ、父母を殺され、訳も分からぬままに攫われた幼い自分。肥えた豚のような商人に、玩具として買い上げられた惨めな自分。
――――燃え尽きろおぉぉっ！
炎上する屋敷。赤く染まる視界。死に物狂いの、命からがら逃げ出した。
そんな折――――どうにかして糞商人の下を離れた、行き場の無いあたいを拾ってくださったのが、バルゴ様だった。路上に蹲る、汚い身なりのあたいを、一目でお気づきになさってくださった。
――――なるほど、なかなかに見所のある魔力をやどしているようだ。
――――どうだい？　一緒に来るかい？
「あたいは、あの方の望みの為になら、どんなことだって厭わないのさ。そんだから、アンタを灰にしても、悪く思わないことさね」
一応は、追悼の意を示しているつもりなのか、ロゼはまだ轟々と音を立てる炎柱に駆け寄る。そろそろ、魔術を解いてもいい頃合か、

とロゼが思い立った瞬間に、
「……ひゃ？」
今まで空をも焦がす勢いでまっすぐに伸びていた柱が、いきなり、蛇のようにうねうねと、その芯を失い、しばらくの間くねくねと身を捩じらせてから、術者の意思を無視して、弾けるように胡散霧消した。
パタン、と魔導書を閉じる音がした。
「『紅炎こそ我が僕（プロメテウスプロミネンス）』……いやあ、凄い魔術っス。よもや何百年も前に根絶した魔術の再現を、まさかこの目で拝めるなんて、すげーラッキーっスね。『重奏詠唱（カンタータ）』での『三重奏（トリオ）』……『災禍に叛く舞踏』で大本の骨組みをし、『忘却の恩恵』で誤差修正と安定性を確保。そんで『欲する焔の蹂躙』で味付け、って感じっスか。いやはや、これだけ複雑な術式を一つの詠唱に無駄なくまとめ、それも一人で発動してみせる……うわー目から鱗とはまさにこのことっス」
炎の柱が霧散した中心に、平然として自己考察を晒すバリーがいた。
「う、嘘……何で……」
「言っておくっスけど、別に俺は魔術の行使はしてないっスよ？」
「ま、まさか……あ、『暗号解析（アナリスコード）』」
「ご明察っス」
「ううう、う嘘だ！　そんなこと出来るはずがない！　三つの複合魔術から生まれた『紅炎こそ我が僕』は、あ、あたいだってまだ完璧には解読してないのに、それをこの場で瞬時に解読するなんてことは……」
最後の言葉尻は、力なく萎（しぼ）んだ
『暗号解析（アナリスコード）』とは、行使された魔術の術式と構成と構造を読み解き、精神回路からのアプローチによって、その術を細分化し、消滅させるという技術である。
例えば、「木を燃やす」という現象の魔術の術式を、「木は燃や

さない」と置き換えることによって、その魔術の根本を否定する形とする。

しかし、この技術は決して誰にでも扱えるものではなく、前提条件として、相手よりその行使した魔術のことについて詳しく知っていなくてはならない。それでも、例え相手よりその魔術の構成や構造に精通していたとして、相手が使用したその魔術を分析、分解にまで至るには果てしなく長いプロセスを必要とし、その段階をまず一歩ずつ踏まなくてならない。

だから、これらの七面倒臭い手順を踏まなくてはならない『暗号解析（アナリスコード）』という技術に関しては、一般的には利用されていない。ぶっちゃけ、相手の魔術攻撃を防ぐだけなら、自分の魔術で相殺した方が手っ取り早いからだ。

だが、絶対に防ぎ切れないような大型魔術に関しては、この『暗号解析（アナリスコード）』は大いに有効である。仮に街や大地を一瞬で消し去るような大規模な魔術であったとしても、『暗号解析（アナリスコード）』を使用すれば、一瞬でその魔術の発動から全てを無効化出来るのだ。まあ、出来ればの話だが。

一部では、魔術による呪いなども、この『暗号解析（アナリスコード）』を応用して治療することもあるのだとか。

「まあ、さすがの俺でも、防御しながらこの技を解析するのはちとキツかったっスけど、どうにか間に合ってよかったっス。俺の障壁も、あと少しでもたなかったっスから」

よかったよかった、とほっとするように笑うバリーに、ロゼは苛立ちながらも、恐れにも似た感情で、言う。

「あ、アンタは、風系統の魔術しか使用しないって……」

「いやぁ、そんなことないっスよ？　むしろ火系統の魔術の方が俺は得意だったりしまっス。火の元素魔術は、俺ら魔術師にとっても基本っスからね、一番最初に極めたのも火の魔術だったりしまっス。『重奏詠唱（デュオ）』だったら、『二重奏』くらい俺でもこんな風に……」

バリーは魔導書を開くと、空いてる右手を天に向け、

「『暴風烈火（フレイムテンペスト）』！」

手の平に渦巻いた旋風は、やがて火の粉を纏い始め、徐々に巨大化していくと、バリーはそれをロゼに向かって放った。

炎の竜巻は呑み込むようにロゼを包むが、そこはロゼの十八番。

『我が身に害する全てを廃せ』という意味合いを含んだ術式を、魔力の質を高めた炎の障壁で具現化する。

「くぅっ……！」

何とか、防いだ。

ギリギリ、と言ってもいい。

『暴風烈火（フレイムテンペスト）』の勢いが止み、視界が開けると、そこにバリーの姿はなかった。

「どこにっ――！？」

と。

背後から、

「ここっスよ」

ばっ、と振り返りつつ、急いで後退し、詠唱を――――

「――が、《外因より出し我が深層の……」

「『欲する焔の蹂躙（ディザイアオブヘル）』っスか？　無駄っスよ、さっき解読したっスもん」

呆れつつも嘲笑冷笑する彼の姿に、ロゼは背筋に震えが走った。

何だ。

何だ、こいつは。

「つーか、そんな中級魔術くらい、詠唱破棄でもしたらどうっスか？　詠唱なんてものは相手にこれから出す魔術の内容を教えてるようなもんっスよ？」

バリーはそう言い終るのを皮切りに、思わず虫唾がはしるような綺麗な笑顔で、これでフィニッシュだと言わんばかりに、

「『見えざる巨拳（エアハンマー）』！」

「ひゃいっ！」

バリーが魔導書を持っていない方の手を振り下ろして叫ぶのと共

に、ロゼはまるで《見えない何か》に押し潰されるような体裁で、先程の炎柱の熱によって熱く固くなった大地へと、熱烈な接吻をお披露目した。

メコッ、と素晴らしく芸術的なまでに地面に埋め込まれたロゼは、そのまま一切の挙動を停止させた。

「やれやれ……っスね」

第一戦。

バリー対ロゼ――――勝者、バリー。

その時、ゴングの代わりでも買って出たかのように、教会の鐘が荒ぶるようにその神々しい音を鳴り響かせた。

そして教会内にて。

「おらおらおらぁ！、お前のみみっちぃ矢なんてオレ様には通用しないぜ！」

「ちっ……」

アンジェリカは舌打ちをしながら、自身の弓に魔力を注ぎつつ、弦を引き絞り、

「『光陰矢の如し（イビルライトエイム）』！」

と光と闇の螺旋を解き放った。

だが、
「ふぅんがぁっ！」
直線的に放射されたアンジェリカの技は、寸分の違いなく『砂壊のゼネル』に直撃したが、腕を前にして、防御体勢に入っていたゼネルは、光と闇の螺旋を驚くべきことに受け止めていて、さらにはそれを拳一つで打ち砕いてしまった。
「……っく、嫌な奴と当たったものね」
まさに鉄壁。
おそらく、魔術による肉体強化か、または何かしらのアイテムの効果か。
いずれにせよ、相手の言う通り、こちらの武器では相性が非常に悪い。
実際、自分の使える技の中で、最も物理的な威力のある『光陰矢の如し』も、相手の鋼の肉体の前ではてんで歯が立たなかった。
自分が手に持つ『パラドックスアポロン』は、その元となった魔物の貴重素材もさることながら、名工、ハイバーン＝ネグラントがこの世に残した四十八の名作の一つである。
彼は鍛冶師であるのと同時に錬金術師であり、加えて魔術師でもあったからして、故に、この弓もそんじょそこらの単なる弓ではなかった。弓幹に細やかに施された装飾ように見える部分も、全て術式の一部であり、とある条件下における、特定の手順を踏むことによって、例え自身が魔術師でなくても、その弓自体に刻み込められた魔術を発動することが可能なのだ。
アンジェリカの場合、『光陰矢の如し』を発動させる為には、まず目標を視認し、自身の魔力を『パラドックスアポロン』へと注ぎ、『起動呪文（アクセスワード）』を唱える。まあ、たったこれだけのことなのだが、中には死にたくなるくらい複雑なものも存在する。そういったのは、もはや儀式やら何やらと呼ばれる類のもので、戦闘場面においては滅多に使用されることはない。
蛇足で一つ付け加えるとすれば、澪士がイリアから貰い受けたあ

の『転移』の魔術の術式が刻印されたネックレスもまた、意識の集中から、移動地点の明確化、そして『転移』せよという意思決定が必要となり、この段取りを行って初めて『転移（トランゼーション）』という魔術が使用出来る。このように、『起動呪文（アクセスワード）』が一々必要ないのも存在する。

ともあれ、アンジェリカは考えを巡らしつつ、ゼネルの石床をも軽々と亀裂を走らせる攻撃を避け続けた。

「おらおらおらぁ！　ちょこまかと動くな！」

「相手を砂になるまで壊す、ね。『砂壊のゼネル』とはよく言ったものだわ」

ふん、と鼻を鳴らすアンジェリカの口調は余裕そのものだったが、だんだんと逃げ場のない角へと追い込まれていくのは明確だった。

何度か何の変哲もない矢を発射してみるが、矢は相手の身体を貫きもしなければ、掠ることさえ矢は自分の仕事を放棄したようで、残りの何本かは、敵の手甲に跳ね返り、地面に刺さった。

「オレ様の肉体美の前じゃあ、どんな攻撃も無駄なんだよ！」

「はぁー……うざっ」

と言いつつも、結局アンジェリカは教会の角にまで追い込まれてしまった。

最後の抵抗なのか、アンジェリカは背負った矢筒に入った残りの矢を残らずゼネルに向かって表面的に飛ばしたが、ゼネルは愉快そうに鼻で笑って、自分に降り注ぐその攻撃を甘んじて全部受け止めた。ゼネルの肉体には、何一つ傷もダメージも見受けられなかった。

「おらおら、これで終わりだ」

「……そのようね」

アンジェリカは項垂れて諦観を吐き出す――――訳ではなかった。

「あなたの――――終わりね」

神速とも言える素早さで、アンジェリカは懐から出した一本の矢をつがえ、弦を震わせた。

「『術式展開（オープンセット）』」

矢は、ゼネル本人に当たることはなく、起動を反れ、その足下の

地面に突き刺さった。石床を砕いて活け作りにされた矢は、アンジェリカの呟きに呼応するかのように、自身に刻まれた魔語（ルーン）を発光して浮かび上がらせ、別個に刺さった他の四本と、地面に光の線を這わせて連結した。
「なっ！？　これは……ま、魔方陣！？」
「まあ、今更気づいても遅いんだけどね」
　石床に伸びる光の線は、ゼネルを中心とした、複雑な五芒星を描き、ゼネルの一切合切の身動きを封じる。
「き、聞いてないぞ！　お前の魔術はその弓に込められた術式だけだと……なぜ、弓の者が魔術を使える！」
「あら？　弓兵が魔術を使うなんておかしいかしら？」
　口に手をあて、せせら笑うアンジェリカ。目先の情報だけに踊らされた敵の哀れな姿に、アンジェリカは失笑を禁じえない。
「別に、隠してたわけじゃないんだけどね。ただ特別使う機会が少なかっただけよ。それも、バリーがあたしらのチームに入ってきてからは、あたしの魔術もとんと活躍しなくなったけど」
　まあ、そもそもあたしの本業は弓だからいいんだけどね、とアンジェリカは肩をすくめながら言ってから、
「そして、あたしの矢は、あなたにはあまり効果がないようだから、ちょっと攻め方を変えさせてもらうわ」

『聖神崩壊（ホーリーホリック）』。

　と、アンジェリカの『起動呪文（アクセスワード）』の詠唱を終えた途端、
「ぎ……ぎぎぃひ、い、がぎぃぃあやらあああ嗚呼アぁぁあああアアアアアああアアアアアアアアアアアアアアアああアアアあアアアアアあアアあぁァアああああああああああああ嗚呼アアアアァァああ！！」
　光が、光という名の化物が。
　神役者という名の侵略者が。

侵犯者という名の審判者が。
ゼネルの内部に入り込み、犯して、侵して、可笑しくて、支配し、侵害し、狂わせ、躍らせ、楽しくて、縦横無尽の自由自在に、疑心暗鬼も悲憤慷慨も丸めて捏ねて一つになって光が光と光に光を光し光る光で光は光と共に――――――――。
精神という精神の全てが、融解し、瓦解し、境界線を無くして、倒壊し、崩壊した。
ぷしゅぅー、と雷撃に打たれた訳でもないだろうに、機械がショートした時のような音を立て、ゼネルは白目を向き、その巨躯は前のめりに倒れ、事切れた。
無論、その後の反応は何もない。
「ふぅ、やっぱ、久しぶりの魔術は応えるわね」
それも精神系の魔術を使うなんて、いったい何年ぶりかしら。
と一人ごちてから、ちょこんと脱力するようにしゃがみこんでしまった。
「……うん、疲れた」
久しぶりに使った魔術、それもチョイスが『聖神崩壊（ホーリーホリック）』とは、何ともハードなことである。魔方陣――戦闘における魔術の中で、最も難解で、段取りの難しく、発動までの予備動作が多い魔術様式。手間はすこぶるかかるが、一度発動させてしまえば、その効果は目を見張るものが多い。だからこそ、本当に成功するか否か、正直とても不安だったが、まあ。
結果は上々。
終わりも重畳。
物理攻撃から、精神攻撃へと攻撃方法を転換したのはなかなかに功を奏したのだが、いかんせん、残りの体力も計算に組み込んでおくべきだった。疲労過労。君の瞳に困憊。
「シャワー、浴びたい」
第二戦。
アンジェリカ対ゼネル――――勝者、アンジェリカ。

彼女は、まだ戦闘の続いている仲間に目線だけをやってから、少しの間だけ、静かに目蓋を下ろした。

第三十話　私は最も正しい戦争よりも、最も不正な平和を好む（後書き）

特別企画

真剣（？）十代（一部）だべり場（笑）！

蝉「はいどうもー、予告通りに始まりました特別企画。今日のあとがきでは、作者とゲストキャラにおける無駄に長いだべりを延々としたいと思います。それでは、今日のゲストは……今回素晴らしいまでの噛ませ犬っぷりを披露してくれた、ロゼさんとゼネルさんです。はい拍手ーイエーひゅーひゅーどんどこパフパフー」

ロゼ「……」

ゼネル「……」

蝉「え、と……あの二人とも、何か言ってよ」

ロゼ「……背中痛い」

ゼネル「……光、光を……光光光をもっと光を」

蝉「……お前はゲーテか？　あー、えー……一旦ＣＭ♪」

～ＣＭ中～

蝉「はーい、気を取り直して二人とも自己紹介からどうぞ」

ロゼ「ロゼです（背中がシップ臭い）」

ゼネル「ひか……ゼネルだ（挙動不審）」

蝉「はいどうもー、気張っていきましょっい」

ロゼ「あたい、家、帰る」
蝉「いやいやいやいや、早すぎますよロゼさん」
ロゼ「どうせ、読者もこんな糞企画見てないって」
ゼネル「そうだそうだ、黒歴史になる前に引き返せ」
蝉「あーうっせえ！　始めたもんはしょうがないんだよ！　このままいくぞおらああ！」

～噛ませ犬キャラとしての背景～

ゼネル「なんか、ロゼだけ過去の回想とかあってずるいな」
ロゼ「当たり前でしょ、この作品で初めてのエルフ族なんだから、贔屓があって当然よ」
蝉「まあ、最初は別に書くつもりなかったんだけどね」
ロゼ「そうなの！？」
蝉「なんかぽわ～んと思い浮かんだから、つい書いちゃっただけなんだよ」
ゼネル「では何故、オレ様のことは書かなかった？　オレ様とバルゴ様の感動エピソードを」
ロゼ「上腕二等筋と後背筋の流動がすばらしい！　と、筋トレ中のアンタに、バルゴ様がお声をかけたっていうエピソード？」
蝉「それとも、公園にて青いつなぎを着たバルゴに『入らないか（チームに）？』と誘われたエピソード？」
ゼネル「何でだ！？　というか作者！　あんたは特にやめろ！　あんたがそう言うと必然的に公式設定になるだろうが！」
蝉「あ、じゃあ、そうしよっか」
ゼネル「ふざけるなあ！」
ロゼ「まあ、この企画自体おふざけみたいなものだしね」

～魔術について～

蝉「なんだか今回はいっぱいワザが出てきたね、ルビを考えるのに大変だった」
ロゼ「なんか専門用語とかもたくさん出てきたけど、ふつーそういう設定って、初期の頃に説明しておくものじゃない？」
蝉「いやあ、まさかこんな白熱戦闘場面を書こうとは思いもしなかったから」
ゼネル「そうなのか？」
蝉「うん、けっこー話の流れが初期のプロットより肉付きが激しいね。三十話ぐらいで終わろうとも思ってた」
ロゼ「ああこの作品、終わりってあるんだ」
蝉「そりゃあるさ。終わりは、どんな物語だってあるよ。まあ、未完の作品っていうのも存在するけど、それぞれである種の終わりの形なんだよ」
ロゼ「あとどれくらい書くつもりなの？」
蝉「けっこう核心をつく質問だね……んー、全体で言えば、進行度は今六割ちょい書いたのかな」
ロゼ「その中で、あたいらの再登場は？」
蝉「皆無だぶるごふぉお！？（二人に殴られた）」

～あたいのターンね！～

蝉「何だ、このタイトル……？」
ロゼ「言わずもがな、あたいのターンね！」
蝉「意味不だわ」
ロゼ「今回ちょっと許せなかったことを物申すわね」
蝉「はあ……」
ロゼ「それは……バルゴ様の台詞を！　あのレイシってガキが勝手に脳内翻訳したことが！　許せない！」
蝉「そんな訳で、澪士本人をご用意しました」
澪士「うぇ、ちょっ！？　えええ！？」

蝉「どうぞ焼くなり燃やすなりお好きに」
澪士「糞が！　作者あとで虐め殺す！」
ロゼ「さあ、覚悟しろ小僧」
澪士「ひぃぃぃ！（二人の追いかけっこが始まる）」
ゼネル「オレ様は空気か……」

～無題～

ゼネル「無題って何だ？」
蝉「そのまんま。特にお題はない。フリートークだ」
ロゼ「相変わらずいい加減ね～」
蝉「今更だろう？」
？「あ、あのー」
ロゼ「うん？　何だ、エーネか。なんでアンタがここにいんの？」
蝉「作者が呼びました」
ゼネル「何故に？」
蝉「次回の重要キャラだから（？）」
エーネ「ふぇ？　あう、そ、そうなん、ですか？」
蝉「ああ、うんうん、そうなんだよー（笑）」
エーネ「や、やったです！　わたし、が、ががががんばりましゅ！」

一同（噛んだ……でも可愛いからいいや）

蝉「せっかくなので、エーネさんのプロフィールをどうぞ」
エーネ「ああ、えっと、歳は二十二ですけど、身長は低いです」
蝉「合法ロリですね、分かります」
えーね「わたしの武器は、槍です。あと、クナイみたいな尖ったものを投げるのが得意です」
蝉「『死突』の異名がここで明かされましたね」
えーね「え、えへへへ。串刺しは、得意です」

蝉「え、えへ、へ……（恐いですこの娘）」
えーね「むしろ、突き刺すことしか、能がないんです、わたし（にへら／／／）」
蝉「あ、あはははは……そんな訳で番組終了のお時間がやってまいりました。次回もこの企画の後編をお送りしたいと思いますので、お楽しみに」
ロゼ「誰も楽しみにしてないって」
ゼネル「黒歴史作成乙」
えーね「あ、あの、えと」
蝉「だあああああ！　うっせえなチクショウが！　やるんだよ、やっちゃうんだよもぉぉぉー！　まったくもう……次回は残りの奴とかが登場するのでよろしく☆」

澪士「次回も見てくれよな（焦げ臭い）」

第三十一話　人は傷つくまで気づかない

『焔舞』と『砂壊』の二人は、うまいことアンジェリカとバリーが引き付けてくれた。バリーは何やら屋外の方へと追いやられていったようだが、まあ。心配は無いだろう。

しかし、アンジェリカの相手はどうだろう。矢が利きそうな風体はしていなかったが、となると、ご無沙汰振りのアンジェリカの魔術が見られるかもしれない。アンジェリカの魔術はまた違った意味でエグイからなあ、とラウルは少しだけ震えてみせた。

「よそ見してる暇なんてありませんよ！」

槍の矛先が、ラウルの横顔を抉ろうとするが、ラウルは受け流すように二対の剣で弾き、そのまま少し後退する。

「ほほう、エーネちゃーん、恐いやねー」

額に僅かな汗の玉を浮かべつつ、ラウルは茶化すように言う。

「無駄口を叩く余裕があるなら、お前から先に叩っ斬ってやろうか？」

同じく敵から一時距離をとったクリスが、ラウルの所にまで下がってきた。

ラウルは「冗談じゃねえ」と心底洒落にならないといった感じで呟いた。

「お前と殺り合うぐらいなら、ハーゼルバイスの『孤高の樹海』に一人残されたほうがよっぽどマシだ」

ブルル……と、今度は本当に震えてみせたラウル。

戦況は、互いが互いにじりじりと相手の出方を窺っている状態が続いていた。ラウルとクリスも軽口を叩いているように見せかけて、

相手の挙動の一切に注意を払っていた。
「……クリス」
「ああ、分かってる。お前は、お前のやるべきことを果たせ」
「……悪いな」
「なに。貸しにしといてやる」
ふんっ、とラウルは鼻で笑ってみせて、サーベルタイプの双剣の柄を固く握り直す。呼吸を定め、相手を見据えた。
『死突』が、今やそのローブを脱ぎ捨て、自前の槍――――形状的には重槍（パルチザン）に近いだろうか、その重槍（パルチザン）を、キッ、とこちらに向けて構えている。『死突』こと、歳の割には童顔矮躯のエーネと比例して、その凶器のリーチの長さが如実に現れる。
もう一方の敵、『氷斬のスイ』はその両手に外見上は日本の刀に酷似した剣を中段の構えで、こちらと対峙していた。アンジェリカのような長いポニーテールではないが、スイの方もその蒼い髪を、まるで武士か何かのように後ろで結い、その目も、蒼く凍った色をしていた。
共に実力は確かな、ギルド内でも評判の高い兵共（つわもの）だ。
一筋縄では決していくまい。
その後ろで、この者達を統括するバルゴも、泰然と控えている。
勝率は、完全にはまだ見えない。
しかし、それでも。
前に進まなきゃ、いけないのだ。
「んじゃま――征くか！」
「ああ、征くぞ！」
一気に、地面を踏み込み、蹴り出した。先方も、こちらの動きを読んでいたようで、同じく床を蹴った。
「『氷斬のスイ』――参る！」
スイが、居合いの動作でクリスに斬りかかる。
キィィィン、とすぐ背後で剣士同士の熱い火蓋が斬って落とされたのが聞こえた。しかし、ラウル自身にも、すぐさまエーネの槍の

猛攻が襲いかかる。
「『死突のエーネ』、行きます！」
「もう見切ったわ！」
一線――――と、呼ぶに相応しい斬撃が、エーネの身体を蹂躙し、重槍（パルチザン）も持ち手から四等分に分割され、「ひぃぅぅっ」という情けない声を遺言に、エーネは教会の長椅子ごと巻き込んで、反対側の壁までブッ飛ばされた。その後の応答は、悲しいことながら何も窺えない。ゴングがあれば、誰かささやかに打ち鳴らして欲しいものである。
いずれにせよ、第三戦。
『死突のエーネ』、ラウルの一撃によりリタイア。
「バルゴぉぉぉぉ！」
「さあ、来いラウル！　今日こそ決着の日だ！」
エーネさんのログアウト振りも程々に、こちらはこちらで因縁の対決が暑苦しい程に始まろうとしていた。バルゴが操る、先っぽにスパイクやら鎌やらが付属した無数の鎖がじゃらじゃらと唸りをあげ、ラウルの双剣もその刀身に鋭い光を放つ。
「うおぉぉぉ！」
「はあぁぁぁぁ！」
互いの戦意を露とする声が、交差する。
だが。
しかして。
それよりも。
粉砕された長椅子に埋もれた中から微かに聞こえた、弱々しいか細い呻き声。
「……ひぅ」
哀れエーネ、我々はお前のことをきっと忘れない。

金属と金属が擦れ合う聞くに耐えられない音を奏で、クリスとスイは文字通りの鍔迫り合いを繰り広げていた。
「確か、お前はミチノーク……北東の出だったな」
「それがどうした」
「いやなに、面白い太刀筋だと思ってな」
「ふん……貴様こそ、何だその鈍は！」
剣同士のぶつかり、弾く音。クリスは一旦後ろへ下がり、スイも五、六歩程後退して互いに間合いを確保してから、スイはクリスの愛剣を指差し、
「我の目を誤魔化せると思ったか！　その剣、斬れぬようになっておるだろう」
「うむ、流石は目敏いな。バリーから教えてもらったんだが、『無刃（ブレイドコーティング）』という魔術らしい。あまり魔力を有していない私にでも出来る簡単な術だ」
「……何故（なにゆえ）か、その行為の真意は」
「私の剣、『ジュワユーズ』は、その性質上手加減が利かないからな。紛いなりにも同じギルドの者だ。身内を殺すのは、私としては御免被るところなんだよ」
だから安心して掛かって来い、とクリスは平淡な物言いで、スイ

を見遣る。そこには何の欺瞞も傲慢も、見下すような感慨も微塵に含まれてはいなかった。例え敵対し合っていたとしても、身内である限りは、同じ身内がケジメをつけねばならない。

殺すことは簡単だ。

簡単に殺すことは可能だ。

だが、ギルドで数少ないSランカーたるクリスには……上の立場に座すクリスにとっては、それが何の問題の解決には至らないことを知っている。

無論、このような騒動を引き起こした罪は重い。何より、一般人を巻き込んでしまった時点で、この者達に下される処罰はより厳格なものになることは必須だ。ギルドとは、信用という不確かなモノで成り立っている以上、その見えもしない信用を失ったら、そこで何もかもが終わりなのだ。

故に、然るべき場所で、然るべき対処と、処罰を。

上に立つ者の義務として、クリスはここで彼らを殺す訳にはいかなかった。

彼らを罰するのは、自分個人の意思で決定しては駄目なのだ。あくまでも、ギルドとしての名目が必要になってくる。

まあ、そんなチャチな言い訳を用意しなくとも、クリスには。

と。

スイが。

唐突にも。

「ははははははははははははははははははははははははっははははっははははははははははははははははははははははははははははははははははははは！　笑止！　笑止千万！　自惚れるのも大概にいたせい、見損なったぞ！　クリスティーナ＝レイブンハート！　貴様がどんなに力ある者だろうと、我が剣技『氷爪斬刹破』の前には誰も体温などを感じてはおらん！　『凍土の鬼』と恐れられた魔物の豪爪を用いた我が愛刀『雪小花』が、貴様のSランカーたる称号ごと凍てつかせてやろうぞ！　同じ剣士として、最強の名を欲しいままにしている貴様の首を獲るのが、我

が念願の」

「あー台詞の途中で非常に恐縮なんだが」

クリスは実に申し訳なさそうな声音で、スイの熱の入った話を遮ると、

「お前のその剣技とやらも、時間があれば是非とも拝見したいのだが、なにぶん、ラウルの方がてこずっているようでな、そろそろ私も手助けに行きたいのだよ」

本当、悪いな。

そう言って、クリスの姿が、残像を纏い始めた。

スイの目には、クリスが手に持つ『ジュワユーズ』が何層にも重なったように映ったが、そう認識するまでにスイの思考回路のシナプス伝達は、幾分遅過ぎたようだった。

ふと前置きもなく、十五メートル前後離れていたクリスとスイの距離は用をなさなくなった。

右脇腹に、何かが押し付けられる感覚。

だが何とも幸運なことに、この時点で既にスイは意識を解き放っていた。現状だけで言うならば、単にクリスが、《捉えきれない動き》でスイに肉迫し、『ジュワユーズ』による《音の壁を越えたスイング》を、《視認さえ叶わないスピード》でスイの胴体に叩き込んだだけのことだった。

ただ、それだけこと。

音速の域を破ったクリスの一振りは、辺りに爆音を轟かせ、その一撃を避けようもなく（『無刃』のおかげで裂けることもなく）もろに喰らったスイは、一つの砲弾と成り果て、斜め上へと打ち上げ

られて、教会の高い天井をも突き破り、数瞬のコンマが過ぎてから、聖なる鳴鐘を地上にへと舞い降らせた。そりゃもう、悔い改めたくなるくらいに。

鳴り響くは勝利の福音……ってか！

まったく、汚い鐘の音である。

「うむっ」

むふーと鼻息を漏らすクリス。信仰深い彼女にとっては、これ以上ないくらいに決まりきった勝利であろう。

『格とか、レベルの違いじゃないんだよ、クリスは』

これはいつかのラウルが、酒に酔いしれ、仲間の一人の異常さを愚痴るように零した一言。

『あいつはよぉ、もう力の差とか関係ねえんだ。だって立ってる次元が違うんだからよ。レベルじゃねえ、ステージが違うのさ。それもあいつの実力は、あいつ自身の実力なんだから恐いもんさ。魔術も、アイテムも、武器や能力補正の効果さえも使っている訳じゃねえ。あいつ自身の力なんだよ。確かに、種族はおれと同様、人間なはずなんだがなぁ』

とのこと。

実を言えば、スイ程度の相手なら、クリスは例え素手だったとしても余裕で勝ち星をあげていただろう。手加減なら、意図しなくても普通に出来ていたのだ。子供相手に、本気になる大人がいないように。

まあ、どちらにせよ。

第四戦。

クリス対スイ――――勝者、クリス。

「さて、と」

さっそくといった感じに、クリスはラウルの援護に向かおうと、自分の愛剣を担ぎ直した。

飛来してきたスパイク付きの鎖を剣で弾く。ハンマー付きのも頭上から落下してくるが、半歩下がって紙一重で避けた。そして次々に飛んでくる鎖の群れを走行しながらかわしていく。

「うぉいっ！？」

ドゴォッ、と突如足下の床を突き破ってきたニードル付きの鎖が懐を狙い掠め、肩辺りに抉るような裂傷が、深紅の薔薇のように、赤い花を咲かせた。

「どうしたラウル！　動きが鈍いぞ」

「はっ！　攻撃パターンが予定調和（セオリー）過ぎんだよ！　退屈で欠伸が出るぜ！」

「ほざけっ！」

バルゴが叫ぶと、その両袖から伸びる鎖の群集をまとめてラウルに集中させた。ラウルも咄嗟に対応するが、剣と両腕、そして左足を、まるで鎖鎧ように絡めとられてしまったが、ラウルもラウルでギチギチと締め上げる鎖の、ぐいぐいと引き寄せられる力に、顔を険しくさせて対抗していた。

僅かな間の、拮抗状態。

「けっ、これが本当の封鎖ってな。まったく面白くもない」

「ふん、相変わらず減らない口だな。昔から……お前はずっとそうだった」

「昔の話を持ち出すほど、おれたちゃそんな老けてねぇと思うがな」

「……そうさ。これから先も未来がある。私は、その未来の為に生きるのだ。だから、こんなところで立ち止まっている訳にはいかないのだ！」

「……過去に縛られたままの男が、何を言うかと思えば……下らないな」
「何……だとっ！」
「ギルドの未来、我々の未来って、何度も何度もしつこいくらいに謳うお前は、あの頃から何の進歩もしちゃいねえ」
「……貴様に……貴様などに何が分かる。私の手を振り払った貴様に、何が分かるというのだ！　あの頃とは違う。今の私には、力がある。あの頃とは違う！」
「いんや……何も変わらねぇよ、お前は。おれが、お前の手を振り払ったことで、お前をそうさせたって言うんなら、あの時、一思いにおれが剣を抜いてればよかったのかな。まあ、今更なんだけど、結局、これも手前の尻拭いなんだよな。なあ、そう思わないかバルゴ？」
「黙れ、ラウル、貴様はここで死ぬのだ！」
「死ぬ、か。それも、良いかもしれないな」
でもよバルゴ、お前を独りにはしねぇよ。
ガキィィィン、とラウルが自身に巻きついていた鎖を断ち切ると、そのまま一直線にバルゴへと突っ込んでいく。
覚悟を決めて。
因果の鎖も。
因縁の鎖も。
かつて、唯一無二の親友だった者の繋がりさえも。
全て、断ち切る為に。
ラウルの双牙が、迷いなくバルゴの心臓を貫こうとする。
しかし。
「甘いわあぁっ！」
バルゴが勝ち誇った笑みで叫ぶと、視界の端の両サイドから現れた二対の鎖がラウルの足首を縛りつけた。
「しまっ」
ラウルの焦りの声も空しく、ラウルの足首に巻きついた鎖は、彼

を教会の高い天井近くにまで一本釣りのように跳ね上げ、そのまま落下する勢いも利用して、遥か下の地面に叩き付けた。

「がはっ」

吐き出したのは、吐血の混ざった咳嗽。

溢れ出る血反吐。

肺と心臓の位置がぐちゃぐちゃになったような苦痛に、顔を歪めるラウル。

叩きつけられた石床も、ラウルの身体を模るように窪み、亀裂が這っていた。

「これで終わりだ！　ラウル！」

祭壇の上で、バルゴが両手を広げるように構えると、袖から、着用していた服のあちこちからも貫いて、鎌やスパイク、鉤やハンマー、スライサーや錨状のものまで、どこからともなく無尽蔵に出現した。

「『強制封鎖（モデルキープアウト）』！」

バルゴの掛け声と共に、襲いかかる鎖の軍団。ラウルは、動けない。

いや、もしかしたら、動かなかったのかもしれないが。

自分の死が、目前に迫ってくる。そんなことは当たり前に分かっているはずなのに、ラウルは特筆すべき抵抗手段を見せなかった。

諦観した、訳ではない。

ただ、ラウルは、これでいいかな？　と思っただけだった。

享受した、のかもしれない。

何を？

「さあな」

ラウルは少し微笑んで、向かい来る自分の死を見据えた。

さあ、来るぞ。来るぞ。来るぞ。

死が、やって来るぞ。

鎖の影が、ラウルを覆い、そして――――――――、

「何をやってるんですか、アンタは」

ぐしゅぐしゅと肉の裂ける音。ビチャビチャと血飛沫が地面を濡らす。

「……なんで、……お前」

驚愕に目を見開くラウル。言葉が、喉を塞いで出てこない。

ラウルの壁として立ち塞がったその人物は、

「もう一度言います、何をやってるんですかアンタは。どうして、そんなとこでいつまで寝ているんですか。それがラウルという男の姿ですか。情けない。あの人は、アンタの親友なんでしょう。だった、とか言い訳用意してんじゃないですよ。さっき、お前を独りにしないって堂々と言ってたでしょうが。有言不実行なんて許しませんよ」

けらけらけらけらと虚勢に笑いながら、苦悶に表情を険しくさせ、歯軋りする口元からは、一筋の赤い液が漏れていた。幸いにも頭部は外れたようだったが、肩にも腕にも胸にも腹にも脇腹にも太腿に

も脛にも、悉く何かしらが掠り、抉り、突き刺さり、肉体に埋め込めれていた。
レイシ。
と、ラウルが若干震えた声で、彼の名を呼ぶ。
「これで最後です、ラウルさん。アンタはいったい何をやっているんですか？」

まったく、らしくもないと自分でも思うのだが、いかんせん、傍観者を気取るにはやっぱり俺には我慢も修行も足りないなあと痛感した。
っていうか、すっげー痛く感じる。痛覚がフル稼働で回っております。
痛い痛い痛い痛い。
あーもう、泣いていいかな。
嘘吐けよ。泣いて出るような涙なんて、昔にどっか置き忘れてきただろうが。
だから、落涙なんてしないけど。
でも、心は傷むんだから、仕方がない。

「さあ、どうするんです。ラウルさん。俺は、もう何も出来ませんよ。アンタの覚悟は、そんなもんですか。しっかりしてくださいよ、俺をそんな落胆させないでくださいよ」

さてさて、俺の上辺だけの威勢もそろそろ限界だな。二本足で立っているだけ、すげー大したもんだよ。誰か俺を褒めてくれ。

「レイシ！」

これは、クリスさんの声。

俺にぐさぐさと遠慮もなく突き立てやがったくれた鎖のもろもろをクリスさんが剣で一刀両断してくれて、やっとのこと俺は片膝をつくことを許された。

「馬鹿者が！　下がっていろと言っただろう！」

クリスさんの叱責叱咤。ああ、解っていますよ。解っているんです。でも、身体が勝手に動いちゃったんだがら、しょうがないでしょう？

「レイシ……」

「いつまでそこに寝そべっているんです？　これ以上、俺にラウルという男を失望させないでくれよ。俺の知ってるラウルという男は、そんな腑抜けたツラはしてなかったはずだ」

さあ、行けよ。

行ってケジメでも何でもつけて来いよ。

「……」

ラウルさんは一回目を閉じて、開いた。

そうして、しかと立ち上がった。

自分の双剣は、驚くべきことに地面に落とされても、絶対に放さなかったようで、再びしゃんと握り直す。

「うおおおおおおあああああああああああああああああ！」

腹の底からの雄叫びを上げて、俺の横を駆け抜けて行くラウルさん。擦れ違いざまの彼の目は、もう、何の邪念も後悔もなかった。

そう。それでいい。

アンタのやるべきことは、決まってる。

俺とは違って。
遠くで、ラウルさんの背中がある。でも、視界が霞んでよく見えない。よく見えない視界。ああ、またかよ。肝心な所で、いつもこれだよ。まったく使えない身体だ。
でも、まあ。
俺の役割は、これでやっと終わりを迎える。
本日の教訓。
案の定、傍観者なんて、気取るもんじゃないな。

後日談というか、今回のオチというか。
どこかで見たような言い回しだが、気にするな。
「この馬鹿者がぁっ！」
重症のはずな俺に、更なる激痛を加えたのは他ならぬクリスさんだった。
『帰ったら説教だ』と、言った通りに、有言実行なクリスさんである。俺はミイラの如く包帯ぐるぐる巻きの状態だったのだが、ゴツ

ンと一発新たにタンコブを拵えたのは言うまでもない。
そんな俺のことはさておき、今回の騒動のまとめを語ろうか。
その後、半分朦朧として、クリスさんに介抱されていた俺には預かり知らぬことなのだが、どうやらバルゴさんは、ラウルさんに倒されたらしく、彼はめでたく御用となり、正式な処分と処罰が下るまでのしばらくの間は、セレンの警護団の監視下に置かれるとのこと。あのバルゴ四天王（笑）及び、バルゴさんの配下だった者達も等しく、皆で楽しくブタ箱行きだという。ちなみに今回の事件で、死傷を負った者はされど、死亡した者はゼロ。最初に丸コゲになったあの彼も、全身火傷を負ったものの、どうにか生存していたらしい。現在はギルドの方で集中治療室で穏やかに過ごしているとか。
俺はその事実に対して、心の底からほっと安心した。どんな形であれ、俺のせいで人が死ぬのは絶対に嫌だから。
それで。
ラウルさんは、バルゴさんを殺さなかった。
殺しは、しなかった。
色々と考えてみても、やっぱりこの結果に終わったとみるべきか。
「結局、おれはバルゴを殺さなかった。そのことについて、お前はどう思う？」
セレンの南方に位置するこのとある小さな医院（この世界で初めてナースさんという天使を見た俺はここで死んでもいいと思った）で、窓から流れ来る潮風を受けながら、隣のベッドで俺と同じくミイラ状態のラウルさんが尋ねた。バルゴさんとは刺し違えのような形で決着をつけらしく、俺と同様以下の怪我を負ったらしい。
「別に？　いいんじゃないですか？　それに、ラウルさんは『殺さなかった』んじゃなくて、『殺したくなかった』んでしょう？　バルゴさんは、確かに許せないことをしました。ヴァネッサに危害を加えるようなことをした。それは、絶対に許せない。でも、彼は決して絵に描いたような、酷い悪人ではなかった。そうでしょう？」
「……」

「アンタは、まだ彼に救済の余地があると、思ったんでしょう？　まだ手遅れでないと思ったんでしょう？　実際、俺もそう思いましたよ。俺が今まで見てきた悪人の中で……いや、彼は悪人にすらなりきれなかったんだ。中途半端な存在ですよ、バルゴさんは」

「……そういや、レイシはバルゴのことを、ずっと『さん』付けしてたな。それは、何でだ？」

「だって、彼は侮蔑するべき人間ではないからですよ。例え、非道邪道に身を窶（やつ）していたとしても、彼は悪人ではなかった。決して善人という訳でもなかったかもしれないけど、単に彼は独りよがりだっただけです。『頼る』ということも、『縋る』ということも、その方法すらも、彼は、知らなかったんですよ」

「……あいつが、最後に言ってたんだ。おれが奴の急所を外して、剣を突き立てた時、意識を失う前に一言だけ……『私は、私達の家（ホーム）を守りたかった、ただ、それだけなんだ』って……あーあー、糞っ、卑怯だよな、そういうの。おれもバルゴも、身寄りの無い孤児だったからな。日々食う飯の確保もままならないで、ガキの頃を過ごした。だから、そんなおれらを温かく迎えてくれたギルドは、おれらにとっちゃたった一つの家みたいなもんなんだよ……今の支配人（ギルドマスター）も、父親みたいな存在だ。ああ、だから……なんだろうな」

「要するに、ギルドのことを考えてたのはホントだったけど、とどのつまり、彼は不器用だっただけの話じゃないんですか、これって」

「ああ……そうなんだろうな」

「それに、バルゴさんが言った『私達』っていう言葉の中には、ラウルさん、あなたのことも含まれてたんじゃないですか、絶対。というかむしろバルゴさん、本当はラウルさんと……」

「だとしても、あいつは……」

「んまあ、過去に縛られてたってことに関しては、あなたも同じ穴の貉なんですよ、つまるところ」

そう、かく言うこの俺も。

皆、同じ穴でぐるぐる永遠と貉ごっこに興じているのだ。

そう言えば、バリーがもはや半壊してしまった教会の隅で、何やらごそごそとやっていたけど、何だったんだろう。多少回復した俺が声を掛けると、一瞬、驚いた風に俺の方を見て『な、何でもないっス』とそそくさと行ってしまったが、まあ、バリーのことだ、そんな気にすることでもないだろう。

とまあ、そんな訳で。

俺の毎日は、

「うむ、レイシ。今日も私が説教に来たぞ」

「やっほーラウルー、元気ぃ？」

「ちわっス」

「……！　……！」

「ああ、こらこらヴァネッサそんな走らないで、レイシくんもまだ重体なんだから」

「おう、レイシにラウル。店休んで来てやったぞ」

久しぶりに、大人しく入院生活を送ろうかと思っていたのだが。

まだまだ、騒がしくなりそうだった。

第三十一話　人は傷つくまで気づかない（後書き）

真剣（笑）十代（？）だべり場（＾ｑ＾）

提供

鳴神機関

グリンダの魔道ショップ

マランディの酒場

蝉「いえーい始まりましたよ、だべりバの後編！　そして、この番組はごらんのスポンサーによってお送りされております」
澪士「ヴぉぉぉぉぉぉい！！」
蝉「ん、どうしたスクアーロ？」
例氏「誰かスクアーロだ。つーか、作者。あとがきだからって好き勝手していいと思ってんな？　調子にのるのもいい加減にしろ。そして、前編ではよくもいきなり登場させてくれたな。おかげで髪の

毛焦げたわ！　ちょっと歯ぁ食いしばれ」
蝉「まーまー、そう怒るなって。今週、鎌倉行ってきたから、お土産の鳩サブレーやんよ」
礼死「んおっ、わう……う、うめー鳩サブレーちょーうめー……ってこんなもんで許されるとでも……」
蝉「はい、はんなりいなり」
霊死「う、おー！　はんなりいなりマジはんなり……っておい」
蝉「焼きたて煎餅各種もあるぞ」
令史「や、やべ……ざらめ煎餅マジ好物……」
蝉「漬物もあるよぃ」
零詩「漬物ぱねぇー！　ご、ごはん食いてー！」
蝉「あるよー」
鈴士「おおう作者サンクス……ってあれ？　俺、さっき何か怒ってなかったっけ？」
蝉「忘れる程度の怒りなんて、怒りの内に入んないよ。ってな訳で、一旦ＣＭ！」

～ＣＭ～

グリンダ「あなたの、テレビに、時価ネットグリンダ！　み、ん、な、の、欲しかない！　は～いやってきました時価ネットグリンダの時間よ～。司会は勿論私、グリンダ＝ジェラリッティよ。はい、そこの空気キャラと言った君は退場ー！　さっそく商品の紹介をすわねー。今日の目玉はコチラ！　なんと名前を書いただけで相手を殺すことの出来る呪殺ノート。お値段はお安めの眼球二つでいいかしら～。ふふっ、目玉商品だけに対価は目玉ってね～。そして次にご紹介するのは、何と物質法則の概念を超えた無尽蔵に物を入れられる四次元ポケッ」

ブツッ

蝉「スポンサー間違えたかなぁ……」

～今日のゲスト～

蝉「はい、前話に負けて劣らずの噛ませ犬っぷりを演出してくださったお二人にご登場していただきます。まずは重い槍を操る思いやりのある子で定評のある『瞬殺のエーネ』こと……」

えーね「瞬殺じゃありません～『死突』ですぅ～」

蝉「えー残るもう一人、『お手上げ侍』こと……」

スイ「誰がお手上げ侍だ！　原型がとどまっておらぬではないか！」

蝉「の！　三人でお送りしマース」

～終わりましたね～

蝉「ヴァネッサ融解……じゃなくて誘拐編終わりましたねー」

スイ「うぬ」

エーネ「そうですねー」

蝉「お前らの出番もお終いだね～。つーか、豚箱逝きじゃん？」

スイ「……」

エーネ「……だ、大丈夫ですよぉ！　次回はわたし達のの脱獄編がぁ……」

スイ「諦めろ、エーネ」

エーネ「ふぇ……」

蝉「次回はサラサのお話です」

～わ、わたしのターンです！～

エーネ「前回のロゼさんを見習って、わ、わたしも今回、物申します！」

蝉「ふーん、誰に～？」
えーね「作者！　あなたにですよぉ！」
蝉「マジで！？」
えーね「何でそんな心底驚いた顔をしてるんですか……あ、さっそく鳩サブレー食べてる場合ですか！　ちゃんと話を聴いてください！」
蝉「あーうんうん（ボリボリ）」
エーネ「前回、わたし活躍するって言ったじゃないですかぁ」
蝉「ああ、言ったような気もするね（バリボリバリバリ）
えーね「それなのに、わたし、全然というか、わたしに関する総行数が、九行ぐらいしかないじゃないですかぁ……」
蝉「えー最初善戦してたじゃん（新たなつつみを開ける）
えーね「そ、それでもぉ、なんかこう、もっとわたしの必殺技的なのを……唯一わたしだけ書かれていないというか……」
蝉「へぇーばりばりばりばりばり（サブレーの零れカスが辺りに飛び散る）」
えーね「なんか……もう、いいです」
スイ「今回は、我が空気か……」
グリンダ「そのうち良い事あるって♪」

～最後に～

エーネ「は、はれぇ、もう最後ですかぁ？」
蝉「酔っ払いは寝てろ」
エーネ「ひ、ひどいれすぅ」
蝉「そろそろネタが尽きてきたのが原因」
スイ「お主のせいではないか」
蝉「うるせえ！　もう疲れたんだよ！　こっちも眠いんだよ！」
スイ「完全に逆ギレではないか」
蝉「ああ、もうほかに何にも書くことないので、ここらで〆としま

す。この度はこのような馬鹿企画にお付き合いくださり、まことにありがとうございました。次回はまた作者が暴走したときにでも、またこのような糞企画を立ち上げたいと思いますので、その時もどうか是非ともよろしくお願いします。ほれ、お前らもなんか言え。特にスイは竜馬風にな」

えーね「あ、あの、ありがとうございました」

スイ「ま、ま……まっこと、礼を言うぜよ」

グリンダ「☆（ゝ・ω・´）ノ　アディオス」

蝉「顔文字やめい！」

レイシ「（´∀`）ノ~ サイナラー」

蝉「お前もかよ！」

ロゼ「あたいのターンは！？」

ゼネル「オレ様も出るぜ！」

蝉「ああもう最後の最後で大集合かよ……それでは（＊＞ω＜）ノ）バイバイ　（結局自分もやってしまった）」

千曲「これで終わり、なのかしら？　そう言えばせっかくスポンサーになったのに、私の出演は？」

蝉「まあ、外伝でな」

第三十二話　悲しみは湖じゃないから飲み干せる（前書き）

「あなたが本当に神様だと言うのなら、ぼくの願いを聞いてくれますか？」
「いいよ。聞くだけじゃなくて、キミの願いを叶えてあげる」
「なら……大切なものが、欲しいです」
「大切な、モノ？」
「はい、命を賭して守りたいくらいに大切なものがほしいです」
「……いいよ。叶えてあげる」
「ありがとう、神様」

「愚かだね。目に見えるものが、本当に大切なものとは限らないのに。実に愚かだよね、人間は」

第三十二話　悲しみは湖じゃないから飲み干せる

その少女、サラサ＝ラサニールにとって、自らが管轄管理しているこの図書館は、この世で唯一無二の自分の居場所であり、宛がわれた都合の良い檻でもあった。
書物に埋もれた孤高の牙城。
活字に溺れた孤独の籠城。
見るに耐えない最後の砦。
心中に張り巡らせた殻の体現。
つまりは、あたしというものの再現。
咽ぶ程に読み物で溢れたここは、あたし自身。
サラサは、読んでいたページから顔を上げ、何となくそう思った。
薄暗く、陰気な雰囲気を醸している辺りなど、まんま自分にそっくりではないかと、自嘲する。
自己嘲笑。
なんて。
これでいったい通算何千回目になるのだろうか。
いや、もしかしたら何万回目かもしれないが。
回数など、とうの昔から数えるのを止めた。
もう、とっくに飽きてしまったからか、もしくは、諦めてしまったからか。
「……来ない、な」
今日は彼の姿が見えない。
いつもは、うるさいぐらいに話しかけてくる彼の影が、ない。

サラサは少し目を閉じて、再び手元の本に視線を戻した。

その翌日。

執事のラインデルが、少し大きめの木箱を二つ抱えてやって来た。

サラサは待ってましたとばかりに、ラインデルに木箱の催促をする。

木箱の中は、緩衝材として綿が敷き詰められていて、まるで巣に守られた雛のように、綿に包まれていたのは、陸路でドナドナとやって来た我が国が誇る作家達の新刊各種。もう一方の箱には、交易船にどぶらこっこ揺られてやって来た他国の注目度の高い作品のラインラップ各種。冊数は計四十二冊。

ちょうど読むものが切れていたので、丁度良かった。

これで、今月も暇を持て余さなくて済む。

暇を……。

「……」

……改めて、我ながら自分という存在が悲しくなってくるが、今月は自分が一番好きな著者の新作が同梱してあったので、そんな自己嫌悪はすぐにどうでもよくなった。その著者の『光の涙』というタイトルの本を幼い頃に読んで以来、その著者のファンとなり、こうして新刊が出るたびにチェックを欠かさない。

彼にも、近々その本を是非とも薦めてみたいものだ。

彼、にも。

「……」

今日も、あの喧しい姿がない。

いつもは日に一度か、二日にいっぺんは必ずと言っていい程に訪れてくるはずなのに、今日に至っても来ないとか。

来ないとか。

ありえないわ。

……明日こそは、きっと、顔を見せるはずだ。
来たら、文句の一つでも言ってやって、この本を薦めてやろう。

その翌日の翌日。
果たして、彼がこの図書館を訪れることはなかった。
おかしい。
どうしたのだろう。
サラサは、不安げに首を傾げる。
彼が途中で栞を挟んだ本が、自分が居座っているカウンターの引き出しに閉まってある。続きを読みたくてわくわくと顔を輝かせて、自分の所までやって来る、無邪気さを残す子供のような彼に、いつも自然に顔を綻ばせてしまう自分がいた。
そんなサイクルが、自分の中で作られつつあった。
それをいきなり突き崩された感覚。
ぱたぱたと、並べたドミノが壊され倒れていくように。
気を紛らわせる為に本を読んでも、内容が頭に入っていく気配はなかった。

その翌日の翌日も、そのまた翌日も。
結局、七日が過ぎても、彼がこの場所を訪ねてくることはなかった。
おかしい。おかしい。おかしい。
そう言えば、とサラサはついぞ前に彼と話した内容を思い出す。
確か、彼は最近、冒険者ギルドとやらに加盟したとかなんとか。それでは、彼は今、依頼か何かを受け、絶賛クエスト中だとでも言うのか。
いや、それはない。
サラサはすぐに首を振る。
彼自身が言っていたのだ。遠方に赴くクエストは、面倒臭いから受けないのだと。俺はそこらで薬草とかきのことか採取してたほうがお似合いなのだと。
では、別の可能性を考えてみて、サラサは、はっ、とした。
まさか、何かしらの事故に遭い、あまり外を出歩けない状態なのかもしれない。安全第一を何よりに謳う彼だが、依頼を受けて森やどこかに向かう以上、魔物に襲われる可能性は皆無という訳ではないのだ。しかし、いや、でも……まさか、どうなのだろう。
一度そう考えてしまうと、思考の発車は止まることを知らない。ありもしない、あり得もしないことまで、余計に余剰に考え込んでしまう。
「……ね、ねえ、じぃ……」
そしてサラサはついに、自分の思考の呵責を抑えきれなくなり、執事のラインデルに頼んでしまう。彼が、今どうしているのか。どうして、最近この場所へ訪れないのか。有能な執事だ。自分が頼めば、すぐさま調べてきてくれるだろう。
だが。
その有能な執事は、いや、実に優秀過ぎる執事は自分が訊いた直後に、その場で、至って何でもない風に、
「イサナギレイシ様なら、八日前からお怪我を負い、南方の海辺に

ある診療所にて養生中でございます」
「……」
知っているなら教えろ。

そう言えば前回言い忘れていたことなのだが、俺はイリアにしばらく入院することの旨をしかと報告していた。
教会で最低限の応急処置をアンジェリカさんから受けた後、出血量が一番酷いとのことだったので、俺はクリスさんの速達便で診療所に運ばれることになった。
お察しの者もいるかと思うが、俺はクリスさんに抱きかかえられた。
無論、お姫様抱っこである。
もうお婿にいけない。
しかも速えええええ！　クリスさん半端なく速えええええ！
途中、建物の屋根とか普通に跳んでたし。
でも俺の方に負担を掛けないようにと気遣ってくれたみたいで、揺れや振動といったものはちっとも感じなかったが。
ラウルさんはバリーの魔術でのんびりと運ばれた。流石は冒険者。

これくらいは掠り傷ぐらいの感覚にしか思ってないのだろう。
……でも、俺もそっちの方がよかった。終始ジェットコースター気分を味わうよりかは。バリー曰く、止血用の魔術は知らないとか。
まあ、そんな我儘を言っている暇もなく、俺は急患扱いですぐさま手術台に乗せられ、止血に縫合といった治療（驚くべきことに局部麻酔といった代物まであり、この世界の医療技術はそれなりに進歩していることを知った）を受け、終わってからベッドに転がされた俺は、麻酔の残滓でも残っていたのか、それとも単に疲労のせいか、少しの間だけ目を閉じた。
目を覚ました頃にはとうの昔に日は沈んでいて、まん丸お月様が海に己を映してナルシズムに浸っていた。この診療所は海沿いに建設された物件で、半開きの窓からは水平線が臨めた。隣のベッドではラウルさんが俺と同じミイラ状態で、優雅にいびきをかいていた。俺は包帯や当て布の下で悲鳴をあげる傷口や、添え木などであまり自由のきかない身体を動かして、どうにか上体を起こせた。発狂しそうな激痛を堪えて、胸にかかった首飾りを衣服の上から握る。
イリアのもとに帰ろう、と。
そう念じた瞬間、世界が歪曲し始め、何だか遊園地のコーヒーカップのフルスロットルを一時間ぶっ通しでトライしたような感覚が俺を支配し、ゲロる前に気づいた時には、俺は自分のベットの上で診療所にいた時のままの姿勢で、目の前の分厚い魔導書を開いているイリアとの対面を果たしていた。
「おかえり」
「ただいま」
「あらあら帰りが遅いと思ったら、まあまあ随分と男前になっちゃって」
「だろ？」
「私、怒ってるのよ？」
「ごめんなさい」
そして俺はおずおずと、これから僅かな期間だけ入院生活を送る

ことの趣意を伝えた。イリアは、「治療なら、ここでも出来るじゃない。それに入院するよりか、数倍早く治してあげるわよ」と頬を膨らませた。

「いやさ、これからしばらく説教受けなきゃいけない相手が出来ちゃって」

クリスさんの厳しい顔を思い浮かべて苦笑する。

「……ふうん」

イリアは納得仕切れないように唇を可愛らしく尖らせた後、何やら棚をごそごそと漁り始め、何やら粉末の入った小瓶を俺に手渡した。

「痛み止めと、治癒促進の薬。二日に分けて飲んでね」

「……うん。ありがと」

「帰ってきたら、私からも説教だからね」

「楽しみにしてる」

「あと」

むぎゅ。

と。

イリアが俺の首に手を回した。

少し傷に響いたが、別段呻く程でもない。

「傷だらけね」

「別に、大したことないよ」

「痛い？」

「さあ。どうだろう」

「そう。私は、痛いわ」

「……ごめん」

「謝って欲しいわけじゃないの」

「……その、ごめん」

俺は馬鹿だから、同じ言葉しか繰り返せなかった。

俺は叱られた子供のように、ごめんなさい、としか。

まったく。どちらが子供か、分かりゃしないんだから。

「それじゃあ、いってらっしゃい」
イリアが耳元で囁く。
「ああ、いってきます」
俺はイリアに囁き返して、そのまま診療所のベッドに戻った。

第三十三話　苦労はしたが、努力はしてない（前書き）

「ああ、またか、って思うのね。うん、これで何回目なんだろうって。君に会うのもこれで何百回目なんだろうって。この前の人生もなかなか見ものだったけど、正直、正気を保っていられるほど自分は強くないからね。ああ、でも生きるのってけっこう好きなんだ。だから、苦労はしてないよ。まあ、努力もしてないけど。そんなんだけど、きっと自分の物語は終わることはないんだろうなあ、って。身に染みて感じる訳よ。だって、『宴は終わるが、無くならない』って、それは君が言ったことじゃないか」

第三十三話　苦労はしたが、努力はしてない

「お食事持ってきあしたー」
入院生活も本日で三日目。ラウルさんは今朝方に俺より早く退院してしまったので（恐るべき回復力、というよりかは完治し切れてないのに退院してしまった感があるような気もするが）、只今この病室には俺一人。ベッドが他にあと三つ空きがあるのだが、誰かが次に入院してくる気配はない。
ここの医師の腕がいいのか、それともイリアから貰った薬が効いているのか、怪我の治り具合は至って良好。
「残さず食べてくぁさいねー」
深夜のレジ店員のような、やる気の欠片を一切感じさせない何故だが懐かしい感慨を受ける声の調子の看護婦さんが、ベッドに添えつけられた食膳台の上に今日のメニューを置く。
よく病院食はゲロ不味いとの偏見があるようだが、別にそんなことはない。
ライ麦パン。ミルク。野菜スープ。林檎が半分。あと焼き魚。
バランスは、取れているのだろう、きっと。
俺はいただきまするとと手を合わせてから、はたと気づいた。
「……あれ、いつかの受付嬢さんじゃないですか？」
がらがらと食事を運ぶ用の台車を押していく彼女に、声を掛ける。
俺とイリアが魔物の素材を換金しに行った時に、受付を担当していた人が、ナースをやっていた。
驚きである。
「ちっちっちぃー」

彼女は俺に背中を向けたまま、舌を鳴らしたリズムで人差し指を振った。
「今のアチキは、純白の白衣に身を包んだ看護師さんですのれー、受付嬢じゃにゃーのです」
ちっちっちぃー、と振り返りつつ、またも舌を鳴らす彼女。
「なんで、あなたがここに？」
しかも看護婦で。
「婦、じゃなくて、師、ね」
と彼女はさも大事なことのように前置きしてから、
「まあ、ギルドの受付嬢だけやって食っていけるほど、世の中甘くないんれすわー」
ひまーな時にここの手伝いしてるすよー、と彼女はこちらに近付いてきて、俺の顔を覗き込んだ。
「えーと、これで会うのは六度目かな？」
「いや、いやいやいや二度目でしょ」
換金しに行った日と、現在とで二回目。彼女の存在は今日初めて知ったし、どこかですれ違うといったこともなかったはず。容姿で気づかずとも、声に特徴があり過ぎるので、必ず気づくはずだ。
「あーはいはい、そう言えばそぉっしたー」
「……」
彼女も、その事実を認めた。
だが……なんだこの人。
変なボケはやめて欲しい。
「あ、あの看護婦さん」
「婦じゃねえよ、師、だってつってんだろ覚えろよカス」
「す、すいません……」
何かキレたよ。メッチャ恐い。俺は反省しつつも続けた。
「じゃ、じゃあまた間違えるとあれなんで、名前教えてくださいよ、名前」
「あらぁ、人に名を尋ねる時は、まず自分の中二ネームを教えるの

が礼儀って教えられませんれしたー？」
「なにその罰ゲーム」
「ちなみにアチキは、『交叉点（クロスフェードアウト）』とか、『共通背景（エキストラパラレル）』だとか、ああ、あと『汚染通告（ペイントペイン）』なんて二つ名が……」
「いや、あんたのレパートリー聞いてない」
自分で晒しちゃったよこの人。
恥ずかしいどころか、むしろ清々しい。
「んまあ、アッチの名前なんて知たって仕方ないよ。君の中でテケトーにナースAとでも名づけてくらさいな」
「いやいや、こんだけキャラ濃く喋っといて、名無しってのはちょっと……それになんて呼べば」
「だーかーら、ナースAでいいっしょー？　それにアチキはこれ以上、君の物語に踏み込むことは憚れるんすよぉ。だって名を明かした時点でアチキは目次の登場人物一覧に乗ることになるわけだしぃ、引きずり込まれるのはまっぴら御免被るでぇござる。百害あって一利なし……もしくは、百骸（ひゃくがい）あって一理なしってねー。つまり、そゆことなんよぉ？」
やばい。俺、この人の言ってることがさっぱり解らない。何一つ理解出来ない。意味が分からない。いや、そもそも意味なんてないのかもしれないが。
「そんじゃ、ハガミ……じゃなかった鯨木澪士くん、食べ終わった頃にまた来るかんねー、ごゆっくりぃ」
今度こそ、ナース服の彼女は……命名、ナースさんは食膳を載せたカートを押して、病室を出て行った。
「……」
俺は再び手を合わせ、昼食にありついた。

「レイシくん、本当に、ありがとう。妹を、助けてくれて」
「レヴェッカさん……その台詞、昨日も言いましたよ」
「それでも、言い足りないくらいよ」
「……、……！」
「ほら、ヴァネッサもそう言ってる」
午後に、レヴェッカさんとヴァネッサの二人がお見舞いに来てくれた。見舞いの品のバナナ（この世界にもあったのか）を貰いうけ、もしゃもしゃと貪りつつ、俺は二人とゆるい歓談を交わしていた。
「店の方は大丈夫なんですか？」
「お父さんがやってくれてる。昼はそんな忙しくないから大丈夫よ」
「そうですか。なら、ギルドの方はどうです？　何か変化は」
「……そうね。聞いた話だと、あのバルゴっていう人の処分が決まったそうよ」
レヴェッカさんの話す所によると、バルゴさんはギルドからの除名を言い渡され、この国の首都の方の牢獄に移送され、彼の共犯者達も似たり寄ったりな懲戒らしい。あの四天王の人達も同様。
「一度は、死刑にしろだなんて意見もあったんだけど、ラウルさん達が……」
どうやらラウルさんらが判決に対して減刑を申し出たらしい。怪我もまだ完治していないというのに、あれだけ早く退院したがっていた理由が今明らかになった。病人は法廷には出られないからか。
ヴァネッサさんにそのことについて訊いてみると、「すごく、複雑ね」と曖昧に視線を逸らした。
自らの理想の為に、大事な妹を危険に晒したバルゴさんを、ヴァネッサさんは俺以上に許せていないのだろう。しかし、そんな彼を

擁護するのは、紛れもない、妹を救ってくれた者の一人であるラウルさんなのだから、これは複雑にならない方がおかしい。

「その人のことは、許せない。でも、ラウルさんがあそこまで言う以上、私も気持ちをきりかえて、信じてみるしかないんだと思う」

更生を。

贖罪を。

信じてみるしかないのだと、彼女は言う。

「……♪」

ヴァネッサに至っては、もうさほど気にしている風でもなく、お兄ちゃんが助けに来てくれたからいいんだよ♪　とさっきから俺の膝元でごろごろしている。

少し傷に響くのだが、ヴァネッサの楽しそうにしているのを邪魔したくはなかったので、我慢する。

「こら！　ヴァネッサ！　レイシくんはまだ重症なんだから、はしゃいじゃダメでしょう！」

妹の素行を諫める姉。ヴァネッサは、ぶぅーと不満気ながらも俺から離れた。

そう言えばなのだが、ヴァネッサが捕まった時にその証拠として髪を一束切られた訳だが、今のヴァネッサは、前のような姉とお揃いの長髪は見る影もなく、毛先が内側に跳ねたボブカットな感じで仕上がっていた。まあ、それはそれでとてもキューティクルで、大変可愛らしいので問題はない。俺が、短いのも可愛いね、と褒めたら、ヴァネッサは顔を朱く染めつつも自分の髪を弄りながら、はにかんだ。

明日も来るね、とヴァネッサが目で俺に言い残して、そんな妹をレヴェッカさんは困った風に見つめて微笑んでいた。そうしてマランンディ姉妹と俺が別れを告げた後――――にゃんにゃん――――バリーの野郎が訪ねて来た。

「やっほーっス、レイシー、お見舞いに来たっすよー」

俺は少しきょどりつつも、バリーの顔にバナナの皮をお見舞いする。

「うひゃっ!?　な、何するっスか!」

「の、ノリ?」

「ノリ!?　俺ってばいつもノリなんかでこんな扱いされてるんスか!」

酷いっス!　あんまりっス!　とっスっスっスっ五月蝿いバリー。っつうか本当に煩いのでもう一発バナナの皮を投げつけるが、二度目は喰らわんとばかりにかわされ、バナナ皮はあえなく床に落ちた。バリーは落ちたバナナの皮を小さい旋風を起こして浮かせ、ゴミ箱にシュートする。パコン、とうまい具合にゴミ箱の中に入った。ナイスシュート。

「……っと、レイシ、朗報っスよ。今日はクリスさん来られないみたいっス。何でも、バルゴさんの処分が確定してから、ようやくギルド内もバタバタしてきちゃって、多分、明日も来れそうにないかなーって感じっス」

「やほーい……って浮かれてる場合でもないか。お前は、ギルドに戻らなくていいのか?」

「俺はちょっとだけ休憩をもらったんス。だからすぐに戻るっスよ。……それでも、やっぱバルゴさんの抜けた穴はデカイっスからね。ギルドの混乱ぶりがいつ治まるかはわかんねえっスけど」

バリーは項垂れつつも嘆息した。

まがりなりにもギルドを担っていた支柱の一つがムショ送りとなっては、ギルドも蜂の巣騒ぎであろう。

だからこそ、抜けた穴を埋める為に、クリスさんや、まだ怪我の治りきっていないバルゴさんまでもが身を粉々にして動いているというのに、自分だけのんびり療養中というのは、幾分申し訳ない気もするのだが。

「ああ、でもクリスティーナさん、『うむ。明日は絶対説教に行ってやるから安心しろ。前日言い足らなかった分もまとめて説教してやるからな』って言ってたスけど」

バリーが、クリスさんの口調をマネながら言った。しかも何気によく特徴を捉えている。

「……」

それは――それはそれは楽しみである。

今の俺に必要なことは。

誰かに怒られることなのだから。

無性に怒られたい気分になったことってあるだろ？

俺は、そういう傾向になる場合が人一倍多いのだ。

それは、自身が愚かなこともまた、人一倍自覚しているからか。

「んじゃ、俺はそろそろ戻るっス」

トレードマークの白いベレー帽を被り位置を直しながら、バリーが帰還宣言をした。

「ああ、クリスさん達によろしく」

俺がそう返して、バリーは病室から去っていった。

「……」

おほん、と一つ咳払いをしてから、辺りに誰もいないことを確認して。

俺は自分の布団を捲り上げた。

「……理由を訊きたいのだが、ルイ」

「……にゃは」

俺の腰にへばりつくような形で布団の中に潜んでいたルイは、気

まずそうに耳を垂れ下げた。

第三十四話　関係ない、なんて関係ない（前書き）

「例えるなら、『絶対なんか、絶対にない』ってのと同じ理屈な訳だ。つまりはこういうことだろう？　なあ、蟋蟀（こおろぎ）？」
「急に何の話だよ、？？？さん（すがる）」

「ふふふ、それこそ『関係ない』話だよ、きっと」

第三十四話　関係ない、なんて関係ない

バリーが俺のもとを訪れる前に、『猫耳魔女っ子るいタン』こと少年ルイが窓の外からひょいっと入室していた。教会から奪還したヴァネッサのことを頼んでから、初めての対面である。

「よう兄ちゃん、来たぜ」

「ちゃんと正規のルートから入ってこい」

あとここ二階。

俺のツッコミなんか聞いてる素振りも見せないで、ルイは俺のベッドの脚を蹴った。何すんだよ、と抗議すると、なんか不名誉な名で呼ばれた気がする、と訳の分からないこと言った。

「なんだよ、もっと早く顔出してくれればいいのに」

「群れるのは嫌いでね」

だから兄ちゃんが一人になるまで待ってたんだ、と軽く肩を竦めた。

「このシャイボーイめ」

「違うっつーの」

ルイはさりげなく俺に贈呈された見舞い品の中から林檎を一つ抜き取り、シャクリ、と噛り付く。

「まぁったくよ、兄ちゃんはホント、バカだよなぁ」

「いきなりそこからスタートかよ」

「おうよ、バカバカ大バカ。救いようのねえバカだ。」

「そんなバカバカ言うなって」
「いーや、言うぜ。兄ちゃんは真性のバカだ。神聖なるバカとも言ってもいい。釣バカや親バカをも恐れをなす正真正銘、キングオブバカだ。むしろバカバカ言ってるこっちがバカらしくなってくるようなバカだぜ。いやいや惚れ惚れしちゃうくらいのバカだね」
「そんなに言われると……流石に凹むな」
「おう！　へこめへこめ。陥没しちまえ」
何故だろう、ルイは意地悪く笑っているように見えるのに、とても怒っているみたいにも感じられる。不満でもぶつけるみたいに、綺麗に食べ終わった林檎の芯を窓の外へ放り投げる。行儀が悪い。
「ル、ルイ、もしかして怒ってる？」
ぺろぺろと自分の指を舐めていたルイが、キッ、と眉を吊り上げて、
「ああん？　もう一度言ってみな兄ちゃん。オレが怒ってるだって？　冗談じゃない。たかが敵陣に単独で突っ込んでいって、案の定ボコボコの死に体で帰ってくるような奴に、オレがわざわざ腹を立てるような義理なんざねえよ」
やっぱり怒っているようにしか思えないルイは、俺の肩をばしばしと小突く。すこぶる痛い。そこはかとなく痛い。
「だいたい兄ちゃんは……」
と。
ぴくん、とルイの猫耳が何かを感じとったように反応したかと思うと、ルイはキョロキョロと目を騒がせてから、思い立ったかのように俺の毛布の中にごそごそと潜り込んできた。
「お、おい」
と俺が戸惑う声も無視して、ルイは完全に布団の内部へと身を隠した。
「やっほーっス、レイシーお見舞いに来たっスよー」
ちょうどその時、バリーの野郎が顔を覗かせた。

バリーがいなくなった後。
ルイはもそもそとベッドの上から這い出ると、決まり悪く俺から視線を遠ざけた。
「いったい何だったんだよ、今のは」
「い、いや……オレにもわかんねえんだけど、どうにも、さっきの奴っていうか、あのベレーの兄ちゃんが、苦手なんだよ」
「苦手？」
「いや、顔は合わせたけど、喋ったことはないんだ。でも、なんか、な。身体が反応するっていうか……」
「ふーん」
「語尾キャラだし」
「そこは言ってやるな」
あいつだってがんばってんだ。元々キャラ薄いから。語尾で特徴でもつけないと、『誰？』状態になっちゃうんだよ。
「だからでもないんだけど、何か、会いたくないんだ……」
「このシャイボーイめ」
「だから違ぇーっての」
ルイ自身、何でこんな行動に出たのかまったく理解していないようだった。
「ま、可愛いから許す」
「嫌な許され方だ」
「じゃ、ルイだから許す」

「嫌味な許され方だ」
「ワガママだなあ」
それから少しの雑談と世間話をして、市場で鉄などの貴金属の価値が跳ね上がっており、それを買い占めている商人が多いとの情報を聞いた。武器の値段も上昇しているとのこと。
「もしかしたら、近々戦争でもおっぱじめるのかもな」とルイはジョークみたいな口調で呟いた。「まあ、この国は交易国だから、戦争の火種なんてこれっぽちもないし、商売だけしてりゃそれで満足してる国だ。そんな心配はいらないと思うけどな」
「ふうん」
俺は小さく相槌を打つだけだった。
水平線に二つの夕日が浮かび、室内が濃い蜜色に満ちる頃になって、ルイが「気が向いたらまた来るぜー」とまたも窓から退出していった。だから、ここ二階。
ポツン、と俺は再び一人になった。
ふと、寂寥感に包まれる。
一人、か。
否。
「……何です？」
病室の入り口の扉から、顔だけを出現させて、によによとこちらを覗いている自称『共通背景（エキストラパラレル）』やら『交叉点（クロスフェードアウト）』こと看護師Aさんが、いた。
いつから、いた？
「さっきの子は誰ぃ？」
「……単なる、知り合いですよ」
「へへえ、可愛い娘（こ）やん。今度紹介してーな」
「ナースさん、字が絶対的に間違ってる」
「このショタコンめ」
「違うっつの」
奇しくもルイと同じ台詞を吐くことになった。

「うーん、そういや……現在ここは他に患者さんいないし、澪士くん一人で寂しいやねー」
「別に、そんなことは……」
「もし良かったら、夜はお姉さんが添い寝してあげようか？」
「いらん」
「抱き枕でもおっけーよん」
「死ね」
うけけけけけけけけ、と憎たらしく笑いながら立ち去っていくナースさん。
一人やることがない俺は、半ば自棄になって毛布に包まり、就寝することに決めた。
おやすみ、自分。
また明日。

第三十四話　関係ない、なんて関係ない（後書き）

？？＝ジガバチの古名。

とあるお知り合いを見習い、久しぶりに連続投稿というものにチャレンジ。
果たして、効果はどれほどに？
それにしてもナースさん謎ですね。仙人みたいなギャルに続く、意味不明キャラがまた現れました。作者にもなんか謎です。
それヵら総計二万ユニーク突破！　読者のみんな様ありがとうございます！

アンケート是非ともお願いします！

麗氏「誰？」
作者「蝉だよぉ！」
令姉「つーか今更だけど、俺の名前表記がデタラメすぎんだろ。ちゃんと変換しろこの駄作者」
作者「誰？」
レイシ「澪士だよぉ！」

追記、みんな様～、みてみんで「魔王の息子」と検索なされると、作者の黒歴史がご覧になられますよ～。是非笑ってクラさいｗ

第三十五話　生きることは簡単だ、生き残ることは難関だ

昔から、自分はよく入院する人間でした。
原因という原因の例をあげるなら、事故に遭ったり、事件に遇ったり、『名探偵』と会ったり、殺戮嗜好な後輩と逢ったり、蟲の人達なんかにも出遭ったりなんかもして。
その度にいつも死にそうな、否、一々死んでいくような思いをして、これまで生きてきた訳だが。
実際、自分が何故生きているのか、生き残っているのか、分からない。
そして俺は、自分の代わりに死んでいった者達の顔をよく思い出す。
彼らだって、自ら好き好んで死んでいった訳ではない。彼らには彼らの人生があり、家族や友人や恋人がいたはずなのに、俺なんかよりも、遥かにずっと生きていく価値が、意味があっただろうに。
中にはそうではない者もいたが。
何はともあれ、みんな、みんな、死んで逝った。
いや。
いやいや、なんておこがましい。
『死んで逝った』、なんて他人事のように、よくもまあ平然自若と言えるものだ。
結局、みんな俺が殺していったようなものじゃないか。
ああ、これも違う。もっと率直に言い直そう。
全て、俺が殺してきたんじゃないか。
彼も。
彼女も。
あの子もその子もこの子も。

ああ、なんて気持ち悪い。
何より。
何よりも。
自らが殺していった彼らのことで、涙一つ、感情一つさえ、まともに動かせない自分は、なんてなんて気持ち悪い生き物（にんげん）なのでしょうか。
『人間失敗』とは、よく言ったものである。
……さて。
閑話休題。
とまあ、そんな前書きみたいな仕様もない吐露は、心のオモチャ箱に一旦はしまいこんで。
入院生活も本日で九日目。
加えて、今日をもって退院日である。
この診療所の医師は基本的な医療技術だけではなく、治癒の魔術まで扱えていたので、怪我の治りようは恐ろしいまでに迅速だった。
医師曰く、君の回復力もなかなかに驚異的だよ、とのとこ。
そして、この九日間、見舞い客も、俺なんかの為にわざわざ時間を割いてまで毎日のように来てくれた。
クリスさんの説教やら説法やらも毎日の如く享受した。まさか夢の中まで説教三昧になるとは予想もしていなかったが。
そういえば、イリアの奴も頻繁に顔を見せていた。
ルイと同じく、決まって人がいない頃合を狙って。
来るたんびに機嫌良さそうに林檎の皮をナイフで剥いていたが、何でだろう。無理矢理に、あーんとか強制させられたのだが、何でだろう。まあ、俺もイリアの嬉しそうな顔が見れて何よりなのだけれど。
「いやはや、もお退院でぃすか。早いもんれすねー」
「またアンタか、ナースさん」
「最後の出演くらい、アチキで飾らしてくらさいよー」
何を抜け抜けと言ってやがりますか、このナースは。

「ぶっちゃけ、アンタとの会話だけで単行本一、二冊出版出来ちゃうぐらいだったんですよ、この九日間」
まったくもって、濃過ぎる入院生活であった。無論、俺のツッコミスキルが格段にレベルアップしたのは言うまでもない。洞窟の盗賊なんか放っておいて、魔王のとこまで直行出来ちゃう自信がある。
「そんなこと言ってー。本当は寂しいくせにぃ」
「いいえまったく」
「またまたー」
「いえマジで」
「マタマタ？」
「それ亀や」
「たまたまー！」
「たまたま言うなしっ！」
最低だこの人。
「ふっ……今のはボケが薄かったアチキが悪ぅござんした」
「反省するとこそこかよ」
もう色々と駄目だこの人。
「でもでもぉー。澪士くんは、アチキの美貌にメロメロでしょーん？」
「う、それは……」
確かに、このナースさん、顔とスタイルだけは無駄に良いから……って、俺ってば別にメロメロなんかじゃねーしっ。入院中、鼻の下なんか一度も伸ばしたことなんかねーしっ。ナースさんの均衡美の取れたヒップの曲線なんて目で追ってねーしっ！
本当だよ、千曲！
信じてね、イリア！
……え、あれ、イリア？　何でここでイリアの名前が。
「美人ナースのメロメロパ～ンチ！」
ぺちん、と。
唐突にも、ナースさんの黄金の左腕が、俺の何の変哲もない右頬

に埋め込まれた。
「……」
……え、何これ、突っ込んだ方がいいの？　それともメロメロ～ンってボケ倒した方がいいの？　俺は妹のメロンパンより、姉のロールパンナ派なのでってそんなことはひたすらにどうでもいい。
どうする。どうするの俺。脳内の俺が選択肢が書かれたカードを広げて、検討している。
まあ、とりあえず。
「……め、メロメロ～ン」
「……」
ナースさんは押し黙り、自らが放った左腕を静かに引き戻した。
「……」
「……」
全身凍傷でも患ってしまいそうな程に冷ややかな視線を俺に注いで、深々と溜息を吐いたかと思うと、そのまま窓際へと赴き、ナース服のポケットからこげ茶色の枯れ萎んだ花弁ようなものが詰まった小瓶と、正方形の紙片を取り出し、その紙の上に小瓶の中身を少量乗せ、端っこをくるくると巻いていき、あらまビックリ、即席の手作り煙草の出来上がりだった。
パチン、と指を鳴らして火を灯し（魔術だろうか）、海のようにおだやかに吸い、空のようにのんびりと吐いた。
すぅぅーはぁ――――……と、紫煙をうんざりするくらい怠惰に、吐き出した後には、噛み潰すような舌打ちも聞こえた。
チッ、って。
「そんなにっ！？」
俺のツッコミスキルのレベルが疑われた。

「え、この会話まだ続くの？」
「続くんれすねーこれがー」
只今俺は、身の回りの手荷物をまとめていた最中であった。
「ナースさん、仕事は？」
「君を落とすこと」
「……」
エーコレナンテエロゲー？
しかも俺が攻略対象とか。
「ふぅ……思ったとおり、九日間だけじゃ無理があったにゃー。やっぱ君の方から初期段階でアチキのルートを選択してくれないとー。コミュＭＡＸなんて全然間に合わないれすわー」
「……」
相変わらず、彼女の言っていることが今の俺には理解出来ないことあんいんすとーるである。
「まったく、最後の最後で変なことばかり言わんでくださいよ」
もしどこかに死亡フラグが隠れていたとしても、全然分かりゃしない。
「かしこまりましたかしこー」
かしこかしこー、とおちゃらけるナースさん。なんか、すげーイ

ラッとくる。
「ま、攻略うんぬんは冗談だとして」
「ほっほぉ、それは残念至極♪」
「あらん？　冗談じゃない方がいいなら……」
「冗談でお願いします」
本気でお願いします！
ほら、そこでナースさん、人差し指を口に当てて、ちぇーって顔しない。心が揺れちゃうでしょうが！！
というかさ、俺ってば攻略寸前!?
危ねー。超危ねえよ、俺。
「ああ、そうそう」
とナースさんが頭の右斜め上に電球でも具現化させたみたいに、ぽん、と手を打ち、どこからか果物が山盛りにされたバスケット（マジでどっから出した）を俺に差し出した。
「ちょっと遅めの見舞い品？」
「え、誰からです？」
「さあ？　受付にポツンと置いてあったのらー。ここで入院してるのって君だけだし、多分、澪士くん宛てだと思うんらけどぉ？」
「そう、ですか」
バスケットを受けとって改めて、誰からだろう、と思案する。知り合いからだったら、自分に一声あってよさそうなものだし、手紙やメモらしきものも見当たらない。ふーむ。
「とりあえずは、ありがたく受け取っておきますけど」
「んまあ、君の知り合いからだったら、きっとその内分かるって」
「それも、そうですね」
俺は謎の見舞い品のことについては、一先ずは蚊帳の外に置いておくとして、深くは考えないことにした。
きっと、すぐに誰が犯人か分かるだろう、と。探偵小説のような台詞を心中で呟いてから。
まあ。

探偵なんて糞喰らえだけどね、と思い直した。

多少の着替えぐらいが主な手荷物を持つ俺を、ナースさんは診療所の出入り口の所まで見送りに来てくれた。

「んじゃまぁ、退院おめでとございーす」

「何だかんだで、ナースさんにはお世話になりましたよね」

「下の世話もね」

「それはない」

さりげなく、ありもしない事実を捏造しないで貰いたい。

「にひひひ……それとね、これ」

退院祝いでもないんだけど、とナースさんは前置きして、ポッケから何かを取り出し、俺の手に握らせた。

「……ブローチ？」

俺の手の平に納まっていたのは、白い十字を模ったブローチだった。

「そ、手作りだぁぴょん」

「器用、なんですね」

語尾のことは当然の如く無視する。

「ふっふー、約束だったからね」

「え？」

約束？

「んーんー、気にすんなー。独りごとー」

うはははは、と明らか笑って誤魔化そうとしているナースさん。

まあ、今更ながら、この人のミステリアス加減については、あえて言及するつもりなんて皆無だが。

例えばさあ、とそこで、ナースさんが語り始めた。

「例えばさあ、君がこのブローチを懐（ふところ）にしまっておくとするじゃん？　そんでいつか君の敵が、矢とかで君の胸を射るわけよ。でも、その時このブローチが君の身代わりになって、九死に一生を得るぅーみたいな？」

みたいな？　とナースさんはもう一度小首を傾げる。

俺は一瞬だけポカーンとしていたが、すぐに可笑しさが腹の底から込み上げてきて、大いに笑った。

映画などで、よく使われる手法だ。というか、むしろ古典的とも言える。

こいつが身代わりになってくれたのさ！　ってね。

久しぶりに心の底から愉快になった俺は、いいですねぇそれ、最高ですよ、としばらく腹を抱えていた。

「だったら、いつも肌身離さず常備しておきますよ」

「是非とも、そうしてちょうだいな」

俺はまだ笑いを噛み締めていたので、その次に続けたナースさんの言葉をうまく聞き取ることが出来なかった。

「《贖罪（しょくざい）の忌子（いみご）》、か」

「え、なんて？」

「独り言よん。気にしなーい」

「まったく……最後まで分かんない人だなあ」

俺はついでに苦笑して、ナースさんに、俺の担当医だった先生にもよろしく、と言った。生憎、先生は出張診療中で留守なのであった。

「うん、澪士くん。君に精一杯の息災と、ささやかな祝福を」

「はは、何ですそれ？」
「お別れの言葉よ」
「……まあ、お別れっちゃお別れですけど、またギルドの方で顔を合わすかもしれないじゃないですか。ここは『さようなら』よりも、『またね』ですよ。シーユーアゲインです」
めっちゃ陳腐ですけどね、と俺は頬を掻いた。
「……ふふ、そうね」
ナースさんは俯きながら笑って、
「じゃ、『またね』。澪士くん」
「ええ、『またね』ナースさん」
そうやって、俺らは別れを告げて、俺は診療所を去っていき、ナースさんは診療所に戻っていった。
後日、俺は愕然と知ることになるのだが、ナースさんは、診療所にもギルドの方にも急な辞職届けを残していって、この街からも姿を消していた。まるで、彼女の存在自体が夢か幻だったかのように、忽然と。どうしてかは知らない。理由はあったのかもしれない。意味はなかったのかもしれない。結局、俺は彼女のことなんて一つたりとして理解していなかったのだから。そんなことは知る由もない。もしかしたら、知らないままの方がいいのかもしれない。ただ俺は、彼女のいなくなった事実に驚愕とショックを隠し切れずにいて、さながら形見か何かのように託されたこのブローチだけが、彼女が現実にここにいた証を示していて、何故だが、それが俺をとても切ない気持ちにさせた。
何でだろうか。
もしかしたら、俺は彼女の名を、本当は知っているんじゃないのか。
ふと訳もなく、そう思った。

第三十五話　生きることは簡単だ、生き残ることは難関だ（後書き）

マタマタ＝カメ目ヘビクビガメ科　南アメリカ原産。

第三十六話　何故ベストを尽くさないといけないのか

サラサ＝ラサニールのパーソナリティ及びアイデンティティーの一つに『引き篭もり』というキーワードが浮上する。

しかし、偏に『引き篭もり』と言っても、そのレベルの違いというか、ステージの格差というものがある。軽度なのか、重症なのか、末期なのか、といった具合に。

ジャンプやサンデーを買いに、外へ出ることはできるぐらいの引き篭もりなのか。

郵便や宅配の応答だけは出来るくらいの引き篭もりなのか。

自室から一歩も出たくない。自分には二次元があるから大丈夫！と胸を張れるくらいの引き篭もりなのか。

まあ、これは一般的な例で言えばであって、他にも対人恐怖症なのか、そうでないのか、といった細かい分類が可能だが、とりとめもない上にややこしくなるので、線引きはここらで一旦終了とする。

詰まる所のサラサのヒッキーレベルは、『やや重症傾向に属するタイプの人間』、という診断結果が下される。やや重症、というのも、何だか日本語らしい曖昧な表現で大変恐縮に思うのだが、彼女は基本、図書館からは一歩たりとも外には出ない。しかし、必要とあらば普通に外出できるくらいには、まだ腐りきってはいなかった。何が腐っているのかは諸君らで検討してみてくれ。

「よ、よし……い、行くわよ」

「かしこまりまして、お嬢様」

執事のラインデルが恭しく頭を垂れ、図書館の裏口の扉を開ける。

すぐ外には屋根つきの二頭引き(キャリッジ)の馬車が用意されていた。
久方ぶりの外出であるので、いつものシックなドレス調の服装ではなく、動きやすさを重視したワンピースタイプの明るい色のロングスカートと、括(くび)れまでしかない丈の上品なカーディガン、黒いロングブーツはそのままで……といっても、さらにその上から外套を被ってしまったので、そのいつもと雰囲気の違う彼女を拝むことは叶わなかったが。
馬車は、貴族が使うような無駄に装飾の施されたゴテゴテしたものではなく、一般に遍(あまね)く利用される何の変哲もない仕様で、その馬車にサラサは足を掛け、スムーズに乗り込む。御者台にはラインデルがスタンバって、馬の手綱を握っていた。
「それでは、参ります」
ラインデルが告げると、二頭の引き馬がブルルと鼻息を荒くして、馬車はゆっくりと動き出した。
ガタゴトガタゴト、とサラサの臀部に直接的に振動が伝達する。痔になったらどうしよう、とかそんなハシタナイ心配など、彼女は微塵も抱いてはいなかった。馬車内でサラサは、あえての平民風の装いをした自分にドギマギ……もとい、これから会う人物がどういう反応をするのかということにドキドキしながら、果実の盛り合わせたバスケットを膝の上で抱えなおした。
「こ、ここ？」

「左様でございます」
「そ、そう。じゃ、じゃあ、あたし一人で行って来るから、じぃはここで待ってて」
「このじぃ、いつまでもお嬢様のお帰りを心よりお待ちしております」
ラインデルが、恭しく頭を垂れた。
ドキをムネムネさせ、馬車にはドナドナ揺られて半刻。サラサが到着したのはとある街の南方にある診療所。潮風と波の音がサラサを狙い澄ましたかのように、さっきからひっきりなしに飛来してくる。
まるで警告でもしてくるかのように。
サラサは外套のフードを深く被りなおした。ヒッキーたるサラサには、軽い対人恐怖症、というよりも極端な人見知り、と言い直した方がいいのだろうか。必要以上に自分の姿を晒したくはないのだった。そしてサラサはこのセレンという街を実質統治するラサニール家の人間。自分に対する批評風評は十分に聞き及んでいる。中には誹謗中傷に近いものまであるのも熟知していた。だから、対人恐怖や人見知りと言うよりも、もっと正確に言い表すなら。
人間不信。
これが、一番近いのではないだろうか。
サラサ自身もそのことを薄々自覚していたし、自認していた。初対面の者と出会うと、まず自分にたいする評価が、印象が、いったいどういう風に映っているのか、狂いたくなるくらいに気になってしまう。その果てには待ち構えたような被害妄想の螺旋。自己嫌悪の連鎖。
妄想症（パラノイア）。
現代精神医学の病名が、ここ異世界でも通じるのかは知らないが、彼女の症状に名前を付けてやるなら、この呼称であろう。
しかしながら、こういった類の病気は何も特異なことではない。
年頃になった少年少女らが抱えうるある種の通過儀礼であり、所謂（いわゆる）、

誰もが一度は通る道といったものであって、まったくもって特別なことではないのだ。

そう、誰にだって起こりうることなのだから。

「……うぅっ」

診療所の敷地内に入りこんだはいいもの、サラサはさっそくも尻込みしていた。そわそわと辺りを見回し、うろうろと行ったり来たりを繰りえして、建物の中に入れないでいた。傍目から見て不審者と間違われてもおかしくはない。

理由としては、彼の病室がどこにあるかをラインデルに聞き忘れてたことだった。そうなると必然、建物内の看護師か誰かに、彼の病室を尋ねなくてはいけない。誰かと顔を合わすのは嫌だ。かといって、あれだけ啖呵を切っておきながら、今更ラインデルの所に戻るのも、何だか負けた気がして大変憚れる。しかし、他人と会うのは絶対避けたい。もし、自分の素性がバレ、自身がサラサ＝ラサニールという人間であること知れたら、また、あの哀れみにも似た嘲笑が浮かぶに違いないのだ。

ラサニール家の恥部と。

面汚しの恥さらしだと。

嘲われるに、決まっているのだ。

――――――という。

被害妄想。

それもかなり典型的な。

彼女は、そういった病を患っていたのだ。

「うー……」

まあ、妄想症（パラノイア）などといった中身の薄い疾患以上に、もっと明確で、致命的な、激しくも狂おしい、果てしなく重い病魔にサラサが冒されているということは、わざわざ説明する必要もないであろう。

あわよくば盲目にまでなってしまうという、「こ」から始まる恐

ろしい病。
名称まではあえて明かさないが。
まあ、名称なんて、所詮名称でしかないのだから、気にすることでもないだろう。
サラサはウロウロというよりも、オロオロしている内に診療所の裏手にまで来てしまっていた。ちょうどそこからは、幸運にも格病室の窓が面していた、サラサはもしかしたらと、葉を茂らせたアモーという木の陰に隠れ、こっそりと格病室の窓を窺ってみた。
「あ……」
そして。
いた。
二階の右から二番目の窓に、彼の姿があった。
相も変わらずの鴉の濡れ羽のような黒髪に、黒い瞳。ここらの国一帯では不吉の象徴として忌避されるその容姿。おそらく、彼自身はそこらの常識の無さ加減から、極東の出身だと思われるのだが、詳しいことは知らない。身の上話は彼はあまりしたがらないのだ。
「レイシ……」
思わず、彼の名を呟く。
よし、部屋のありかは覚えた。人目につかぬよう、さっと彼の部屋に辿り着いてしまえば大丈夫だろう、とサラサが顔を綻ばせた時に、彼女は気づいてしまった。
知るべくして、知ってしまった。
知らなくてよかったことを、突きつけられてしまった。
「……え」
彼は、自分の知らない誰かと、楽しそうに談笑していた。

第三十六話　何故ベストを尽くさないといけないのか（後書き）

アモー＝スペイン語で恋。

恋は落ちるものなのか、落とされるものなのか。落ちていたのを拾うのが恋なのか。作者には分かりません。

せんでーん。

作者の新連載！　『蟲塚』を掲載いたしました。

ぜんわ予約で掲載いたしましたので、毎日更新です。

第一章　綴れ刺せ蟋蟀　全六部構成。

マエガキとかでちょこちょこ出ていた蟲っぽい人たちのほのぼの日常を描いた作品！　どうぞ覗いてってくらさい。

第三十七話　木は森の中、失敗は大失敗の中に隠せ（前書き）

「初めまして。今日から隣に住むことになります。これ、引越し蕎麦」

「……」

「あの、神支那（かみしな）さん？」

「え？　あ、ああ、ううん違うの。ごめんね」

「はあ……。ところで、もう一方の隣人の方っていつ戻るか分かります？　っていうか、このアパートの住人、神支那さん以外に全然見当たらないんですけど」

「ああ、そうね。でも、あんま気にしなくてもいいかもよ？　ここの住人って、あたしもあんまり見かけたことないから」

「へえ……そう、なんですか」

「うん、そうなの」

「……じゃ、じゃあ、俺まだやることあるんで。失礼します」

「……ビックリした。何であの子、あんなに澪士くんに似てるんだろ」

第三十七話　木は森の中、失敗は大失敗の中に隠せ

夕日が沈みかけ、辺りに茜色を撒き散らす頃。
診療所より少し離れた場所に駐車していたラインデルの下に、サラサが戻って来た。
「お帰りなさいませ」
「……うん」
「随分と、長居をしていたようで」
「う、うん。話が、弾んじゃってね」
嘘だった。
目眩がする程に嘘だった。
「待たせて悪かったわね」
「滅相もございません」
私（わたくし）、いつまでも、と申し上げた次第でございますから、とラインデルは平淡な口調で言った。
「それでは、参りましょうか。風が強くなってきました故、お身体に障ります」
「ええ……」
開け放たれた馬車のドアを、執事の手を取りつつ、サラサは力なく足を掛けた。

途方もない嘘吐きだと、誰かが罵っても、今の自分に言い返せる言葉は無い。

結局、彼との面会は果たせなかった。

自分が知らない誰かと談笑する彼。

自分以外の誰かと歓談する彼。

知りたくはなかった。

だが、何となくは覚悟していた。彼には彼の関係がある。外の世界がある。内に閉じこもっている自分とは違って。しかし、何だと言うのだろう、彼の交友関係は。女性の比率が異様に高いのは気のせいか。どうか気のせいであって欲しいとサラサは強く思う。

弓矢を携えた長いポニーテールの女。やけに大きい剣を背負った長髪の女。ベレー帽を被った可愛い顔の女。あと、アレはなんだ、あの紅い髪の無駄に胸のデカイ女は。

思いっきしクソ鼻の下伸ばしやがって。

何だ、胸か？　デカイ乳がそんなにいいのか？

恐らくデカ乳の妹だと思われる朱色の髪をした少女にも、同じくデレデレとした顔しやがって。締りがないったらありゃしない。

唯一の男は、二対の剣をぶら提げた、無精髭の者だけであった。

そして、何より。

見舞い客が去ってからも、彼は回診に来たと思われる診療所の看護師（腹の立つくらいに美人だった）とよもやま話を興じ始め、何だかんだで、その看護師との雑談時間が一番長かったように思える。

何故、日が暮れても喋り続けているのだ、あの二人は。おかげで、自分が彼の部屋に訪れる最後の余地もタイミングも、全て失ってしまったではないか。

鼬（いたち）の最後っ屁、という訳ではないが、せめて見舞いの品だけは置いて帰ろうと、誰もいない瞬間を見計らって、入り口の正面にある受付にフルーツを詰め込んだバスケットを残して、とぼとぼと執事のラインデルが待つ馬車まで、逃げるように引き返した。無性に情

けなくなって、涙が出そうだった。
苦しい。
胸が、こんなにも痛んで、苦しいと思う。
どうして、そんなに楽しそうな顔をするのだろう、彼は。
自分以外の誰かと、楽しそうに。
楽しそうに。
微妙な乗り心地の馬車の中で、サラサは昨夜から悩み抜いた末に選んだワンピースを見下ろした。そして、蛹(さなぎ)みたいに外套で自分自身を包(くる)んで、ぎゅっと固く目蓋を閉じた。

「退院おめでとうー！」
パン！　パン！　と熱のない光が文字通り目の前で弾けた。目がチカチカとするのが治まってから、久方ぶりに帰ってきた家の中は、米国にも負けて劣らずのホームパーティーっぷりに変貌を遂げていた。
食卓の上に並んだご馳走の品々。
所々に飾り付けされた室内。

「な、なんすかいったい」
「ふっふー。今日はレイシの退院祝いなの」
「聞いてないよー」
「言ってないものー」
えへん、と胸を張るイリア。
俺はすぐに、ははーんと納得した。
入院中、度々お見舞いに訪れたイリアが、俺の退院日が近づいていくごとに、どこかウキウキとしていた節があったが、これで判明した。全ては、今日この日の為か。
「そんな、気を遣わなくても良かったのに」
「私がやりたかったの！」
さっさと席に着くー、とイリアがテーブルを指差し、俺は、はいはいと大人しく椅子に腰を下ろし、イリアから果実酒の入った杯を受け取った。アセロラ色の液体が、銀製のゴブレットに並々と波打っていた。
「えー、それでは、レイシの退院を祝いまして、乾杯の音頭を取らせていただきます」
「いよっ、イリア」
俺も調子に乗って合いの手を入れる。
「おほん、というわけで……」
「うん？」
イリアが少しだけ間を空けて、いつものあの言葉を、言う。
「おかえり、レイシ」
「ただいま、イリア」
俺ら薄く微笑み合い、互いにゴブレットを差し出して、
「「乾杯」」
カチン、と小さく音を鳴らした。

正直に言ってしまえば、明日も明日でもう一つ、退院祝いの宴が用意されていたりした。場所は勿論、『マランディの酒場』でだ。ギルドの混乱ぶりがようやく落ち着きを取り戻して、俺とラウルさん（今更な感じもするが）の退院祝いを主な名目として、混乱の沈静化に八面六臂の活躍を見せたギルドの関係者達の慰労会も兼ねてのことであった。総勢二十名前後の人間（獣人の方もいたけど）が、立食パーティー形式で、夜の黙が訪れてからも、そんなものは知らぬとばかりに夜通しどんちゃん騒ぎを続けていた。

まあ、俺は日が沈んでしばらくしてから、お先に失礼させて貰ったけど。

当然、不平顰蹙の雨嵐を喰らったのは言うまでもない。ガイルさんに脅迫じみた感じで引き止められたけど、レヴェッカさんがどうにかして俺を逃がしてくれた。

しかし、俺と同じく病み上がりなはずのラウルさんが、一番へべれけに酔い潰れたのは印象的だった。酒は飲んでも、酒には呑まれない彼が泥酔とは、なんと珍しい、と俺は思った。聞き違いでなければ、『バルゴの、やろ……う……』と最後にムニャムニャと呟いていた、気がする。

その翌日のこと。

朝一番に『マランディの酒場』に寄ってみれば、ああ、然もありなん。

案の定と言えば案の定。

予想通りと言えば予定調和。

酒場は見るも無残な、物言う屍の巣窟と成り果てていた。

「あ、頭、割れそう」「み、水ぅ……」「お、おんどぅる……」と呻き声や唸り声やら、何かの幻想にとり憑かれた人まで、そこら中

あちこちに転がっていた。
「よ、妖精さんが……妖精さんから要請が……」
「バリー……」
店内に入ってみれば、酒樽に凭れかかるように伸びていたバリーがいた。妖精さん、妖精さん、としきりに呟いてはうなされていた。
「おい、バリー起きろ」
歩み寄り、ゆっさゆっさとバリーの肩を荒っぽく揺らした。
「うぅ……妖精さん？」
力一杯、バリーの頬を張り飛ばしてやった。
「い、い痛い、っス」
紅葉の咲いた左頬をバリーが涙目でさする。
「よし、目ぇ覚めたか？　じゃあ、さっさと立って店の後片付け手伝え。レヴェッカさんとヴァネッサだけじゃ大変だろうからな」
「……ういっス」
バリーはガックリと頷いて、自分の有り余る誠心誠意を俺に示してくれた。
「それより、ラウルさんやクリスさんとかは？　それにアンジェリカさんもいないな」
「ホストのラウルさんが先に潰れっちゃったから、アンジェリカさんが肩を貸して送ってったっス。クリスさんは、初期の段階で既に寝ちゃってたスから、今は二階のレヴェッカさんとヴァネッサちゃんの部屋で、一緒に布団の中じゃないスか？」
「で、お前は何で今まで残ってたんだ？」
「うぁ……レイシとラウルさん二人の主役が消えちゃったら、ここの収拾は誰がつけるんスか。他の二人は帰っちゃうし、クリスさんはアレはアレでお酒に弱いし、俺が一人残ってがんばってたんスよぉ……」
「そうかそうか、がんばった。殴って悪かったな」
よしよし、と俺はバリーの肩を叩き、その功績と功労を労った。
バリーも、おぅぇ、と顔を青くして「ちょ、レイシ、揺らさない

で、は、吐くっス」と嬉し涙まで流していた。
しかし酒臭い。
そこはかとなく酒臭い。

『お酒はね〜、辛いからこそ飲むのよお。辛いことを忘れる為に飲むのよね。でもね〜、段々と飲み慣れてくると、お酒を飲んでること自体が辛くなってくるのねー。でもそれってさあ、辛いから飲んでるのに、飲む度に辛くなってくるって、あれ？　あたしは辛くなる為に飲んでることになるのかな？　なーんだ、結局、あたしは辛いままなんじゃない』

ふと、いつか千五百先輩に付き合わされて、お得意のおでん屋の屋台に連れてかれた時のことを思い出した。二回目の留年がめでたく決定してから、すっかり落ち込んでいる彼女を、俺が励ますという形で、不本意ながら奢らされたという、是非もないエピソードだ。
俺がそんな彼女の台詞に、それなのに何で、千五百先輩は今も酒を飲んでいるんですか？　と尋ねると、彼女は貫禄溢れる赤ら顔で、グラスに注がれた日本酒（おでん屋の親父が手馴れた様子で注いでいた）を仰いで飲み干し、

『辛いことに変わりないんだったら、あたしは逃げないよ。辛いことも全部、酒と一緒に飲み尽くしてやるの』

親父！　もう一杯！　と彼女はコップを突き出し、おでん屋の親父も、あいよ！　と異様にノリが良かった。
親父ェ……いくら彼女が二十歳過ぎてるからって、あまりアルコールを勧めないで欲しかった。
何だかんだで、それは俺にも当然のように廻ってくるんだから。
下戸なのに、俺。
――――って、何でこんな前のことを思い返しているんだか。

それにしても、懐かしいな、千五百先輩。今も元気にやってるかな。想像するに、一人寂しく晩酌でもやっているのかな。誰か彼女に付き合ってやってあげてくれ。

「ほら、立てるか」

「ムリ、っス」

「ったく、しょうがないな」

ほれ、と俺が手を差し伸べると、何故か一瞬、逡巡するような素振りをバリーはしたが、すぐに俺のを手を握ってきた。

「っ！」

「おおう！？」

握ったはいいが、バリーは急に俺の手を跳ね除けるような立ち上がり方をして、驚いたように呆然として、フラフラとふらついてから、ぺちゃん、と尻餅を着いた。

「な、何だよ、どうしたバリー？」

「……い、いや、何でもねっス。は、はは、まだ、酔いが覚めてないのかな」

「なあ、気分が優れないんだったら、まだ休んでてもいいぞ？」

「大丈夫っスよ。ほら、何とかこの通り立てるっスから。あはは、顔でも、洗ってくるっス」

バリーは、未だに覚束ない足取りで、店の外へ行ってしまった。井戸のある場所まで向かったのだろうが、あんな調子で少し不安だ。

と、そこへ背後から、

「あら、レイシくん」

レヴェッカさんが、二階の住宅ルームから、階段を下りてやってきた。

「おはようございます」

「おはよう……ってまー、これは酷いわね」

レヴェッカさんが、酒場の店内を見渡して言った。多分、外の方も覗けば、溜息のミルフィーユが吐き出されるに違いない。

「やっぱり、私も最後まで起きてたほうがよかったかなあ。あーあ

ー、もうっ。やんなっちゃう……でさあ、レイシくん？」
　レヴェッカさんが上目遣いで、俺をチラ見する。俺は腰に手を当てて、天井を見上げて、軽く鼻から息を吐いた。
「まあ、とりあえずは立てる人から順番にお帰り願いますか。その後から、改めて片付けに入りましょう」
「ごめんね、こんな朝早くに来てもらったのに、いきなり頼みごとしちゃって」
「いえ、俺も初めからそのつもりで来た訳ですし、問題ないですよ」
「本当、ごめんね」
「いえいえ」
　そう謙遜的に言い合いながらも、俺とレヴェッカさんは店内に横たわる人達をズルズルと引き摺り、とりあえずは店外に放り出し（女性がレヴェッカさん担当、男性担当は俺）、意識のある順から覚醒してもらい、各自で帰還してくれるようお願いしてから、めいめいの掃除に取り掛かった。皿洗い、吐瀉物の処理、クリスさんに酔い覚ましの薬湯を処方、途中から参戦したバリーとヴァネッサにも協力を得て……まあ、そんな訳で。
　とうとうその日の午前中は、昨日の宴会の後始末で終わってしまった。
　ふむ。
　図書館にも行く予定だったのだが。
　サラサに会うのは、昼飯食い終わってからにしよう。

第三十七話　木は森の中、失敗は大失敗の中に隠せ（後書き）

神支那千五百（かみしなちいほ）。自分でも思う。変な名前。

？状態の人は十八話のアトガキを見よう！

あと、ベレー帽の可愛い顔した女……？　サラサ、それちゃう男や。バリーもバリーで、どんな悪夢にうなされているんだ。妖精さーん。

ということで、一週間ぶりの更新です。「？以下」の更新や「蟲塚」の新連載で精魂尽きかけた蝉です。でも、ふっかーつ。

クリスマスーが、ちーかーい。予定なーんてなーいーよー♪

イエー♪

作者は五歳の頃にサンタさんを殺されました。紅く赤ーく染め上げられました。

我が家では、クリスマスにプレゼントは付き物ではありません。幼い時分より、ケーキの食べられる日という認識だけでした。

クリスマスに、また更新する予定なので、お楽しみに。

ではでは、待て次回。

追記。お気に入り３００件突破ウィリィいいいいいいいいい！

おまけに３０万ＰＶありがとござーす！

第三十八話　何か試してみようって時にはどうしたって危険が伴うんだ

仮に世界を創ったとされる神様に、「どーしてこんな世界を作ったのー？」と訊いてみたとして、答えはきっと。

「なんとなく」

だとしたら、たった七日間だけで世界を創った理由もきっと、『なんとなく』なんだろうと俺は推測する。

もしも、俺が神様だったら、世界を七日間だけで創造するような愚考や愚行だって冒さないだろう。もっと綿密な計画を立て、もっと緻密な企画を立ち上げて、もっともっとステキな、素晴らしい世界を創造するだろう。俺が敬愛しているバンドが謳い叫んでいるように。

それで。

俺みたいな人間なんかを、絶対に生み出さないだろう。

俺みたいな存在なんかを、確実に生かさないだろう。

まあ、あくまで仮定の話なのだけれど。

「ちわー」

俺はラサニール記念図書館の入り口を開け、一応は来訪の意を伝えた。

右も左も本で視界の埋まった道を進む。左右にそびえる本棚の威圧感と、本で溢れるこの場所特有の匂いが身を包む。インクと、少し埃っぽい紙の臭い。でも、決して不快ではない。むしろ落ち着く感じさえする。

「サラサー？」

一番奥の半円卓まで辿り着き、開口一番に彼女の名を呼んでみる。
何故って、サラサの姿が見当たらなかったからだ。
んー？　と俺は自分の感性赴くままに卓を回って、内側への進入を試みたら、果たしてそこにサラサはいた。
只今、防災訓練の実演中なのか、サラサは自分の上半身を、机の下に突っ込んでいた。しかし、下半身までは容量オーバーなご様子で、頭隠して尻隠さず状態のサラサ。可愛らしく臀部だけをこちらに突き出していた。
しばらく様子を見ていたが、一向に動く気配すらない。
「……」
何だろう、非常に声をかけずらい。
あのナースさんによる地獄のツッコミ合宿の夏を乗り越えた俺ではあるが、今回のような事態に相応しいリアクションが一切思いつかない。試しに例として挙げるなら、『やあ、サラサ。良いケツしてるね』普通過ぎるな。『ヘイ！　ユーは何をしているんだい？』何か違うな。『そんな君のカワイイお尻にサクセスッ！』間違ってもこれじゃないな。
ふーむ。
俺は一頻り悩み抜いた末に、とりあえずは。
サラサの尻を撫でてみた。
「ひ、いい、いいいやあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」
サラサのブーツの硬質なかかと部分が、何とも見事に俺の顎へとクリーンヒットした。サラブレットの後ろ足で蹴られたみたいに、俺はサラサの脚によって顎を砕かれた。逆視点からの風景。そのまま勢いに乗って仰向けに倒れていく俺の世界は、走馬灯のようにスローモーションで流れていった。
サラサ、お前のキックは、世界を狙えるぜ。
がはぁっ、と俺は紙ヒコーキのように遠のく意識に手を振って、まだ手に残っているサラサの尻の感触に何故だが妙な感慨深さを抱

きながらも、まこと情けないことに、俺は完全に気を失っていった。

「あああ、ああ……あ？」

御居処を舐めるように伝わった厭らしい感触に驚愕混乱の極みを見せたサラサは、ようやく平生（いつも）の状態に戻り、恐る恐るとにかくは机の下から上半身抜き取ろうとし、

「……だっ！」

途中、誤って頭を引き出し部分にぶつけた。

すこぶる痛かった。

「うぅっ……もうっ」

涙目になって後頭部を押さえながらも、何とか這い出たサラサは、自分のすぐ背後で、静かな最期を終えていた澪士を発見した。

「レ、レイシ……？」

自分の臀部を撫で回した犯人が彼ということは言い逃れも出来ない程に一目瞭然なのは事実だが、しかしこの状況、どうやって収拾をつければよいのか、サラサにはさっぱり分からなかった。結果的に自分の足がクリティカルヒットし、彼を気絶させてしまったのもまた事実であったからだ。

ひとまずは、現在のこの状況に至るまでの推移だが、サラサは、彼の来訪を告げる一声が聞こえた瞬間、あわわわ、とパニックに陥りながらも、どういった訳か、半円卓の下に潜り込んでしまった。

だって、どんな顔して会えばいいのか、分からないから。
自分は、どんな態度で彼に臨めばいいというのだろう。
必然的に、彼が話していた相手のことが、気になってしまう。
彼の心中が、知りたくて堪らなくなる。
故に、自分の身を隠さずにはいられなかった。
こんな顔をした自分を、彼に見られたくはなかった。
傍目から見て、馬鹿な行いだということは重々に承知の上であったが。
しかし、それらの結果が、まさかこんな事態に繋がるとは、とても複雑な気分である。
「レイシ、レイシってば、ちょっと」
天井を見上げたままの彼のもとに駆け寄り、肩を叩いて呼び起こしてみるが、彼は白目を向いたまま微動だにしなかった。
「え、ちょっと、ねえ、嘘でしょ……レイシ、ねえってば」
ゆさゆさ、と肩を揺らし、ぺちぺち、と頬を叩いてみる。
しかして、反応はなし。
え。
まさか。
死んでる?
死んじゃった?
あたしが、殺しちゃった?
えー。
「ウ、ソ」
サラサは崩れ落ちるように膝を突き、わなわなと震える手で、再度彼の顔面に往復ビンタの嵐を浴びせた。
起きてよ、起きてよ、ねえ、起きてよ、起きて起きて起きてってば、と涙ながらに訴えかけながら、彼に覆い被さるように、腕を振り続けた。
十分後。
「……ぅっ」

「……！」

あまりのビンタの応酬に、流石に澪士も軽く呻きを上げた。

全身の嫌な緊張による強張りが、吐息と共に抜けていくのを、サラサは感じた。

それも、彼の声にならない程に小さな、しかし確かなその呟きを聞くまでは。

「……ち、く……ま……」

「……」

女の名前だ。

あまり聞き慣れない音の響きではあったが。

サラサは女の直感的に、そう確信した。

果てしなく白い空間。左右上下三百六十度全方位見渡しても、一面の白だけが、視界を支配していた。どっちが天井でどっちが地面なのかまったく判断しずらいというのに、俺は一人無機質なパイプ椅子に座っていた。

まるで、尋問を受ける容疑者のように。

まるで、自らの死を待つ死刑囚のように。

ひたすらに凪いだ心地で、俺はただ座っていた。声もなく。いや、そもそも言葉という概念すら曖昧な感覚だった。

ふと気づけば、目の前に俺と同じく、椅子に腰掛けている者がいた。

俺と同じく、というか。

見間違いでなければ、それはどうも俺自身のようだった。

『やあ』

もしかしたら鏡か何かではないかという淡い期待抱いていたのだが、希望は綺麗さっぱりに打ち砕かれてしまった。《ソイツ》は、ニコニコと気持ち悪く目を細めながら、俺に話しかける。

『気分はどうだい？』

お前、誰だよ。

『見ての通り、ぼくは君だよ。君以外の――鯨木澪士（いさなぎれいし）以外の何者でもない。知ってるだろう、相棒？』

千年パズルを組み立てた覚えはないんだがな。

『いや、君は知っているはずさ。何てったって、君は、ぼくの生き残りでしかないんだから』

生き残り？

『そうさ。君はぼくの生き残り。今まで犠牲にしてきた君自身の死にぞこない。人間は誰でも、日々、自分自身を殺していきながら生きていくのさ』

なんだ。要するにお前は俺の残りカスってことか。

『理解が早くてけっこう。でも、残りカスってのはいただけないね』

とっても心外だよ、と《ソイツ》は言う。

どうでもいいけど、お前は何でここにいる。目的はなんだ。

『別に。単に、君とお話をしにきただけだよ』

話？　お前に話すことなんて何もない。どうせお前は俺自身なんだろ？　ならこんなものは、ただの自問自答以下の何ものでもない。

『釣れないなあ。昔はよく鏡に向かって喚いていたじゃないか。コタエロコタエロ、ナゼダレモコタエナイ、って。当然じゃないか。君の問いに答えられるのは、結局、ぼくしか……』

うるさい、うるさいうるさい、黙れ。そして消え失せろ。

『……ふん。少し前にも警告として語りかけたつもりなんだけどね。君は無意識的に忘れちゃうから……』

黙れと言っている。消え去れ。殺すぞ。

『……もう、仕方ないな。それじゃあ、ぼく以外の誰かにご登場願おうか』

《ソイツ》は椅子に深く腰を落ち着けたまま、パチンと指を鳴らした。

すると、白に染まった世界は一瞬にして暗転、展開。突然、昼と夜が引っ繰り返ったように、それか部屋の明かりのスイッチを切り替えたかのように、忽然と深い暗闇の世界に姿を変えた。ぱっ、と何処からかスポットライトの明かりが差し込んで、その照らされた舞台に、見覚えのある人影が現れた。

なんで、このヒトが。

『ボクのは周囲に異常を撒き散らすタイプらしいけど、君のはなかなかどうして、どうやら異質を引き寄せる体質らしいね』

『名探偵（バッドネーム）』。澱川影踏（よどみがわかげふみ）。

俺が瞳孔を極小にすぼめていると、次々に闇の中で照明が射していく。

『ぶはははははははは！　澪士ぃ！　相変わらずぶっ壊れてっかあ？』

『……嫌だね。きみには……本当に、生きるという……意味が、ない』

『壊し屋』。瑠璃（るり）さんと藍（あい）さん。

『始末に負えないことってのが、俺は嫌いだ。だがそれ以上に、始末に終えない人間ってのが一番嫌いなんだ。つまり、君のことだよ』

『始末屋』。宵闇の『夜鷹（ナイトホーク）』。

『けらけらけらけらけら！　きみは！　まったく！　オカしいね！』

『笑味期限（スマイルリミット）』。蟲塚蛄螻（むしづかかつろう）。

『良い景色だろ、ここからの眺めは』

アキラ。
『あたし、好きです、澪士さん。だから、いっしょ、もっといたいです』
ジェウ。
『澪士ごめんね、ごめんね。こんなことしたお姉ちゃんを、許してね』
薊姉(あざみ)ちゃん。
『心配するな、大丈夫だ。俺らは絶対幸せになるんだ。そうそう不幸なんてのは、続きゃあしないんだからよ』
紫苑(しおん)兄ちゃん。
……あーあーあーあーあーあーあ。
あっあーあああああ、あああああああああああああああーあー何で何で何でこんなものを見せるんですか。どうして嫌なものばかり俺に見せ付けるのですか。どうして苦しいものばかり俺に押し付けるのですか。しかも後半から死人だらけじゃないか。見たくない。聞きたくない。自分が殺してきた者達の顔や、声なんて、もう二度と耳に入れたくはないし、眼球に映したくもない。
『でも、それが君の人生でしょう?』
俺の顔で笑い、俺の声で囁き、俺自身に語りかける俺は、先刻言った通りに、やはり俺以外の何者でもなかった。
周りの照明が全て消えて、再び俺と、俺自身による自問自答(ひとりごと)が始まる。半径一メートルの足場を作る光の下での一人語り。
『君は、死んでいった人達のことを、自分で殺しただなんて思ってるけど、それは、すごく傲慢な考えだと思うよ』
違う。俺が、殺したんだよ。
『違わないね。君は詰まるところ、要因(ファクター)でしかなく、引き鉄(トリガー)でしかなかった訳だよ。スイッチを押したのも、サイコロを振ったのも、所詮(しょせん)は彼らの意思だったのさ。例え君がいくら罪深い存在であろうと、罰を受けるべきではない。傷はいくつ負ったとしても、十字架を背負い込む必要は、どこにもないと思うよ』

お前に、何が分かる。

『そりゃ分かるさぁ。だって君はぼくだもの』

そういや、そうだったな。

『君はそうやって、過去に失ってきた人達を盾にしてさ、逃げてるだけなんだよ。免罪符が欲しいかい？　赦(ゆる)しが欲しいのかい？　そうじゃないだろ。君は、そんなものは少しも必要としていない。君は、女々しくも贖罪を謳いながら、断罪を待ち焦がれているんだ。早く、楽になりたいんだろう？　楽になって、生きたいんだろう？　人間を、始めたいんだろう？　君の願望の行き着く果ての正体が、それさ。なんて、ちんけでちっぽけな欲望だ。まさしく人間失敗の名に相応しい、不器用な望みだね。可笑しくて反吐(へど)が出る』

……。

『……ふん、まあいいや。せっかくだし、最後に君が一番会いたいと思う人物に会わせてあげるよ。さあ、誰がいい？　誰でもいいよ。君が一番会いたい人は誰？』

……千曲(ちくま)。

『やっぱり、彼女にかい？　けどそれは、君が最も再会したい相手にして、最も対面したくない人物のはずだ。それでも、いいのかい？』

……千曲に、会いたい。会いたいんだ。今までずっと、千曲の顔を見たいと、会って話がしたいと願ってきた。

『そう……それが例え、実際にここにはいない幻想幻夢だとしても、これは君の中で創られた歴とした真実だ。確実としたリアリティを持った彼女であり、鳴神千曲本人だと思って間違いない。故に、安心して臨むといい。ではでは、さあさあ、愛しの彼女のご登場だ。時間は限られているから、話は手短にね』

《ソイツ》は、それだけ言い残して、またもう一度パチンと指を鳴らして、スポットライトと共に溶暗(フェードアウト)した。俺は座っていたパイプ椅子から立ち上がってから、しばらく目を瞑って、その時を待った。

そして。

『澪士』
聞き慣れた――だが、久しく聞いていないあいつの声が、俺の背中に突き刺さった。
ゆっくりと眼球の仕切りを取っ払うと、辺り一面は、最初にいたあの空白と余白だけが独裁を強いる空間に、俺と千曲は向かい合っていた。
『久しぶりね』
『うん、久しぶり』
俺もようやく、この世界で口火を切った。
『元気？』
『うん』
『そう。ならいいの』
『……でも俺は、千曲にずっと会いたかったよ』
『私も、多分、澪士に会いたかった』
『多分ってなんだよ』
『澪士も、そうなんじゃない？　本当に、私に会いたかった？』
『……たぶん』
『やっぱりだ。澪士は、私との《約束》を気にしてるわけだ。楔か鎖のように感じてるわけだ』
『そうじゃないよ。決して、そんなんじゃないよ。いや、実際そうなんだけど。お、俺は、お前との約束を、守れそうにないから、だから』
『別に、気にしなくてもいいのに』
『けど、それじゃあ……』
『いいのよ、本当に。だってあなたは、私のモノでしょう？　ねえ、そうでしょう』
『あ……』
『《鯨木澪士は、鳴神千曲をいついかなる時でも、裏切らず、見縊らず、無上の親愛の証と、無償の真実とを明かし、平伏し、服従し、遍く御身の絶対となり、奢らず、怒らず、数多の弊害と障害の助け

となりて、殉ずるはその意思にのみ、儀となすもその御心のみ、我が身は契約と誓約をここに掲げ、等しく頭を垂れる者なり》……って、覚えてる？　これが私とあなたの《約束》。この契りが千切られるなんてことは、断じてない。よって、何も心配することはないの。あなたは私のモノなんだから』

『……ああ、そうだな』

『そう、澪士は、私のモノ。仮にどんなことがあったとしても、私以外の誰かのモノになんて、絶対にならない。保証するわ。何なら保障してあげてもいい。鯨木澪士という人間は、鳴神千曲という存在から、決して逃げることも離れることも、解放されることもない』

『ああ確かに……確かにその通りだ。俺は、一生千曲のモノなんだ』

いったい。

俺は、こんなことを千曲と話したかったのだろうか。

「レイシぃ……」

脳と意識の覚醒がしてくるにつれて、瞳をうるうると潤ませるサラサの顔が近くにあった。

「サラサ……なに、泣いてるの？」

酷く頭の重くなるような夢を見ていた気がする。しかしどうにも夢の内容があやふやにしか覚えていない。そしてどういうわけか俺は、サラサに馬のりされていた。腹の上で目元を擦る彼女は、泣いてなんかないわよっ、と荒っぽく俺の胸を殴った。

「……あれ？　サラサがいるってことは、ここは図書館？　俺ってば、いつからここにいたんだっけ？」

前後関係の記憶が不確かだ。おまけに顎が死ぬほど痛むのは何故

であろうか。まさか割れているのではないだろうか、と不安になる。
「え？　レイシ……もしかして、覚えてないの……？」
「ああ、うん。ちょっとここに来るまでの記憶がぼやけちゃってて……。うーん、なんか馬に蹴られたみたいな……」
「誰が馬ですって！」
キッ、とサラサが目尻を吊り上げた。
「へ？　別に誰もサラサのことなんて言ってないよ？」
なんでサラサがそこで反応するの？
「なっ……あたしに、あ、あんだけのことしといて――っ！」
「は？　え？　俺なんかサラサにしたっけ？」
サラサラさーん、目が恐いよお。そんな見下ろして睨まないで。
というか、え？　俺なんかしたの？　しちゃったの？　えーちょっとそれって記憶が飛んだのと何か関係があるのかな。
「ねえ、俺はサラサに何をしたの？」
「それは――――」
途端に、カアッと耳まで真っ赤に染まりあがったサラサは、、ぐっと唇を噛むように黙り込んでしまった。疑問符で頭の中がいっぱいな俺は、みたびに及んでサラサに問いただそうとしたが、だがその前にひとつやっておかなければならないことを思い出した。
「ねえ、サラサ」
「な……なに」
「そろそろ俺の上からどいてくんない？」
サラサは一瞬、こちらが何を言っているのか分からないような表情をしたが、すぐに悲鳴でもあげるかのような勢いで、俺の上からスプートニクの如く飛び退いてから、俺をまたも睨みつけてきた。
なんで俺が睨まれなきゃいけないのだ。
サラサ一人分の重量感から解放された俺は、そこで『解放』という言葉に、ふとした思い付き――でもないのだが、いや、前々からサラサに言おうか言うまいか迷っていたのだが、今、何となくその決心がついた。その理由は、どこからともなく湧いて出た、変な確

信と妙な自信が俺の背中を押したからだった。
「サラサさぁ、少し提案があるんだけど」
「て、提案……？」
まだ警戒気味のサラサは、じりじりと距離感を量るよう猫のように、恨みがましい上目遣いで俺を見た。そんな毛を逆立てる座敷猫をあやすように、俺は、恐くなーい恐くなーいとナウシカを見習って、軽く笑いかけてから、
「この図書館をさ、もっと開放してみない？」

第三十八話　何か試してみようって時にはどうしたって危険が伴うんだ（後書き

どうも蝉です。
冒頭でぴーんと来た方は、残念ながら作者と音楽の趣味が同じです。
えー今日は、クリスマスＤＥＡＴＨ(死)ね！
特に何のイベントもない作者。強いて言えば、ケーキ作りぐらいですか。ホイップと飾り付け担当な作者です。

色々と前の話とかに加筆修正しました。
なんか読んでて、あるぇ？　これなんか矛盾してね？　オカシクね？　前の話と繋がりなくね？　つか作者いい加減じゃね？　とか盛大に思ったりすることでしょうが、そこは前の話で修正いたしましたので、納得のいかない場合は、読み直しておくほかありませんので、ご容赦を。
再度お詫び申し上げます、蝉でした。

第三十九話　大切なのは、自分のしたいことを自分で知ってるってことだよ

「『矢尻に仕込む猛毒百選』って、どこにあるか分かる？」
「あ、はい。それはこっちの書棚に……」
サラサはパタパタと忙しなく動き回り、今日も相変わらずのショッキングピンクのポニーテールを揺らすアンジェリカさんの注文に応えていた。
「わあ、魔導書（グリモワール）の類（たぐい）も充実してるんスね。あ、『ボールフォーカスの呪術大全』の模写本まである……ってことは、『創生の断章』……まであっちゃったり何かしちゃったりするっスか？」
「ええ、それなら確か、一番奥の方にあったような……」
少々興奮気味のバリーの要望にも、サラサは甲斐甲斐しくも応えていた。
「うむ、あの『世界の食材探求』シリーズの第一巻はあるか？」
「こ、こちらです、どうぞ」
半円卓の受付カウンターの後ろにある書棚から、一冊手に取り、身の丈もある大剣を背負うクリスさんに手渡す。
「おれは普段本なんて読まねーんだが、戦闘で味方の攻撃の巻き添えを喰らわないようにする為の指南書、みたいなやつとかってあるか？」
「あ、はい。ありますよ」
「あるのかよ……」
「えと、『ごめんじゃねーよっ！』っていうタイトルで、味方の放った矢に当たったり、敵と勘違いされて身内に刺されたりした、男の手記です」

「な、なんだこの親近感は……他人とは思えんなこの著者」
「ああ、そう言えば、この著者、先月仲間が発動した魔術に巻き込まれて、お亡くなりましたよ」
「悲しいなぁおいぃっ！」
四人は同じ読者用の机に大人しく座って、さっそくといった感じで読書に勤しみ始める『コーレア』の面々。
致死毒の欄でニヤニヤが治まらないらしいアンジェリカさん。純粋に怖い。
子供のようなキラキラした顔で読むのはバリー。お隣と比べて、お前だけ異様に眩しいよ。
ページを捲るごとに唾を飲み込む音がするのはきっとクリスさん。そんな真顔で涎を垂らされてもシュールなだけですから。
それに対して、目尻に涙を溜めながら、震える手でページを捲るラウルさん。「お分かる、分かるぞ、その気持ちっ！」と号泣しそうな勢いで読み進めていた。
「ほほお……やるなサラサ」
チーム『コーレア』の面々を相手に、よくぞここまで適切な対応を見せたものである。引きこもり兼人見知りのサラサにしては、上出来も上出来、花丸百点を与えても過不足ないくらいだ。
一週間、きっちりみっちりとレファレンスから練習した甲斐があったというものだ。
傍目から見るに、これぞ、司書さんたる本来の姿である。
それから。館内ではお静かに、が鉄則な図書館であるが故に、酒場のような荒くれたノリは到底出来るはずもなく、歓談よりも閑談といった感じで、サラサも勿論一緒に加わって、俺達は慎ましやかな談笑に花を咲かせた。途中、相変わらずの長身痩躯のラインデルさんが、ティーセット一式を乗せた台車を押して現れ、全員に紅茶を差し入れに、淹れてくれたりした。
そしていつの間にか、気づくと日は最も高く昇り、腹の虫が勇み足で踊り出す頃になって、俺を含め、『コーレア』の四人もそろそ

ろお暇することになった。
「うむ、なかなか興味深い内容だった。礼を言おう、ラサニールのご令嬢」
「私もなかなかに勉強になったわ。また、来させて貰うわね」
「うぅ……まだ読みたいのがけっこうあったんスけど、俺もまた来てもいいスか？」
「うっ……う、チクショウ、まだ目から汁が溢れてきやがる。ありがとな、ラサニールのお嬢さん。おれ、活字でこんな感動したのは初めてだったぜ」
読んだ本をサラサに返却しつつ、口々に彼らは言った。
「あ、いえ、そんな。あ、はい、是非とも、また、来てください」
少しうわずった声だったが、しかし、はっきりとした口調でそう返した。
「じゃあ、レイシ、先にレヴェッカのとこで待ってるからな」
出入り口まで向かうラウルさんが、振り向き様に言って、俺は「はい」とだけ頷いた。
他の三人も一様にその場から出入り口にまで向かった。
「なるべく早く来るのよー」
とアンジェリカさんが最後に言い残し、バタン、とあの重苦しい扉の閉まる音が響いた。
「……レイシ」
「ん、なに？」
「皆さんは、お帰りになった、の？」
「ああ、帰ったね」
俺がそう答えると、サラサは目眩でも起こしたみたいに、額に手を当て、倒れた。おい、海外のホームドラマならまだしも、リアルでこんな倒れ方をしたの初めて見たぞ。
と、ツッコミを入れている暇もなく、俺はサラサの背中に手を回し、間一髪、彼女を抱き止めた。
「……ありがと」

「どういたしまして……って、大丈夫かよ？」
「ああ、うん。すごく、緊張した」
「うん、お疲れサマ」
「……ねえ、あたし、ちゃんと出来てた？　なんか、失敗してなかった？　恥かしいこととか、してなかった……？」
「全然。まったく問題なし。というか、花丸百点のオール５あげてもいいくらい。サラサは、よくやった」
「そ、そう？　本当？　あたし、ちゃんと、出来たの？」
サラサは、信じられないといった風にもごもごと何かを呟いてから、急に思い出したように赤くなり、機敏な動きで俺の腕から離れた。
「あれ、もう立って平気なのか？」
俺は気を遣って声を掛けるが、
「う、うん！　大丈夫よ、大丈夫、問題ないわ。うん、いたって平気よ。そ、それよりほら、皆さんを待たせちゃ悪いわ。さっさと追いかけなさいよ」
「でも、サラサ」
「も、もう！　あたしが言ってるんだから、そうしなさいよ。それに、じぃだっているんだから心配ないわよ」
「え」
俺は間の抜けた声を出してから、気づいた。いつの間にか、ラインデルさんが影のようにすぅとサラサの背後に出現していて、「ここに」と右手を胸にあて、軽く頭を下げて会釈した。
というか、ラインデルさん。いつからそこに？　確か紅茶を淹れ直しにこの場から離れたはずだったが、いつ戻ってきたんですか。せめて足音ぐらいは――いや、最低でも気配ぐらいは出してください。恐いじゃないですか。
「ね？」
「え、あ、うん……」
サラサがそこまで言うなら、と俺はラウルさん達を追いかけるこ

とにした。
気丈に笑おうとするサラサのことが、少し気掛かりだったが、そこは長年仕えているベテランの執事さんに任せることにした。
「じゃあ、サラサ。また明日顔出すから」
「ええ、わかったわ」
最後にそれだけ言葉を交わして、俺は図書館を去った。

夏休みになると、俺はよく弟妹達を近くの図書館に連れて行った。
クーラーが隅々まできいた館内に一歩足を踏み入れると、瞬時に汗が引いていく、あのオアシスに着いたような感覚を、今でも鮮明に覚えている。騒がしい弟妹達をどうにか大人しくさせ、みんな一緒に一つの机を占領して、夏休みの宿題にとりかかったものである。
厳粛で寛大。静かに騒がしく。わくわくして落ち着く。知識と物語の空間。
俺の図書館に対するイメージ。
それに比べてサラサが自称管理人であるこの図書館。
閉鎖的で内向的。外部からのものに対しての拒絶感が滲み出て、溢れる蔵書はその為の城壁。まるで殻のよう。ならば彼女はまだ生まれてもない雛鳥。ここは、一人の少女によって閉ざされていた。
それは彼女自身が停滞を選択したから、この場所も始まりを知らないのだ。
だから、俺は一つの綻びを作った。
別に自分の理想を押し付けたかったわけではない。彼女の為――
――否、これも何だか言い訳がましいか。自身の行為を他人のせいにしてはいけない。では、虚飾も虚言も交えずにはっきりと言って

しまえば、これもまた大きなお世話で、余計なお節介以外の何ものでもないのだろう。

それでも、俺はサラサにもっと『外側』に対して、興味や関心が湧いてくれればいいと思ったし、何だかんだで、サラサを他の人に紹介したいという思いも、どこかにあったのかもしれない。

何より、俺が好きな場所に、俺が好きな人達が一緒にいたら、これ以上に楽しいことなどありはしないだろう、だなんて。

なーんちゃって。

やっぱり、これは単なる自分の我儘に過ぎないのかもしれなかった。

一度だけ、こんなことはやはり出過ぎたマネなのではないだろうかと、ラインデルさんに相談を持ちかけてみたのだが、

『私は、貴方とお嬢様の親交は、とても素晴らしいことであると思います。お嬢様はあのご様子ですし、他人との関わり合いを持つことは大変稀でございます故、お嬢様と貴方の交流を、そこはかとなく貴重なものであると思っております。ですが、レイシ様。私は、決して貴方が善人であるから、お嬢様との交友を支持しているわけではございません。むしろ、貴方は善人といった風ではございませんでしょう？　無論、悪人然としていらっしゃるわけでもございませんが。レイシ様。ここで一つ失礼を承知で、正直に申し上げておきますと、私は貴方から血の臭気しか感じられません。有体に言えば、ふと戦慄すら覚える時もございます。深く、暗く、淀み、濁り、自らの生に疑問を抱いている、そういう者の目を、貴方はしていらっしゃる。私も経験上そういう者の見るのは初めてではございません。しかし、少なくとも貴方は他人の痛みを知っておいでだ。いや、貴方は他人の痛みを背負い込む癖がおありのようだ。傷だらけのそのお姿を見て、おおよそ検討はつきます。貴方は、優しいお方だ。だからこそ、私は貴方をお嬢様の……いやはや。老年となりますと話が長くなっていけません。それにまだ、レイシ様の問題の解決には至ってませんでしたな。はい。率直な意見を言わせて貰いま

すと、先程申した通り、私は貴方とお嬢様の蜜月……おっと口が滑りました。交友に至りましては全面的な賛成を表明をいたしております。ですから、そもそも私などが口を挟むのは野暮というものでございまして、しかしながら、あえて一言申し上げさせてもらいますと……』

執事さんはそこで一つ咳払いをしてから、あまりに自然な動作で、俺の耳元に顔を近づけて、

『他人に判断任せるようなら、最初っからするもんじゃねぇよ、若造。後悔なんざ、あとで好きなだけ出来んだろ？　だったら手前の好きなようにやりやがれ』

で、ございます。

と野太い声で囁いてから、すっと俺から離れて、あくまで紳士的な微笑みで、俺に薄く笑いかけた。

俺は色んな意味で呆然――というか、慄然すらして、しばらく硬直したままだった。絵的に表すなら、立つんだジョーの如く俺は燃え尽きたように真っ白だったに違いない。本当、色が抜け落ちたみたいに何も考えられなかったくらいだった。うああ恐いよー。マジあの人恐いよー。

と、ラインデルさんの恫喝によるガグブル状態から、どうにか回復した俺が、次に話を持ちかけたのはチーム『コーレア』のクリスさん、ラウルさん、アンジェリカさん、バリーの四人だった。この世界での交友関係に限界がある俺にとっては、最後の頼みとも言える存在。

ぶっちゃけ、暇そうにしている知人が彼ら以外に思いつかなかったのだ。

マランディ姉妹はいつも忙しそうだし。でも機会があったら、いつかサラサを紹介してみたと思う。

そして、俺が件の内容を話すと、彼らは、俺がこの街を統治する

ラサニール家の者と面識があることにまず驚いていた。
『っていうか、あそこ図書館だったのか？』とそこから訊いてきたラウルさん。
『図書館の存在自体は知ってたっスけど、なんか近寄りがたいというか……』
『中に悪魔が住み着いてるって、聞いたことあるわよ』
『まあ、そういったホラや噂も含めて、この街では暗黙の了解として、あまり立ち入ってはいけない場所とされているのだ。そう言えば、前に一度だけ、肝試しとして一人踏み込んでいった輩がいたのだが、何やら中でその例の悪魔を目撃し、顔面蒼白で逃げ帰ってきたとか……』
……その悪魔さんとやらになんとなーく心当たりのある俺は、ライインデルさんぇ……と心中ボソリと呟いた。あの人（？）、気配も足音もなく決まって背後から現れるからなあ。薄暗い館内で、あの人（仮）といきなり遭遇したら、そりゃ悪魔と見間違えてもおかしくはない。その肝試しを無謀にも挑戦した彼に深く同情する。
「あ、レイシ、その肉いらないんだったら貰うっスよ」
と、ふとこれまでの回想から我にかえってみたら、バリーが俺の目の前にあったステーキを手掴みでかっさらっていた。
「待てバリー、それはおれがレイシから貰おうと……」
「早いもん勝ちっスよ。ラウルさんだっていつも言ってるじゃないスか」
そう言って、ペロリと自分の指を舐めるバリー。
現在、『マランディの酒場』で俺らは円形の大テーブルを囲うように座り、次から次へと運ばれてくる料理に舌なめずりをしつつも、牽制と争奪を繰り返す不毛な争い（ふーどばとる）を繰り広げていた（この場合、本来の意味とは以下略）。当然、平和主義な俺は参戦なんてもっての他である。
基本的に、こういった場所での食事は、手掴みで食べるのが主流らしく、一応、この酒場では木製のスプーンや切り分けようのナイ

フやらを頼めば貸して貰えるらしいが、チーム『コーレア』の場合、きちんとフォークとナイフを使うのが女性陣。ナイフだけの使用が男性陣という構成になっていた。ちなみに汁物だけは、皆さん器に口を付けて飲み干します。ん、俺？　勿論、ナイフもスプーンもフォークも全て使います。

「よぉし、バリー。あとで覚えてろよ」

恨めしそうに笑いながら、腰の双剣に手を置くラウルさん。

そういえばなのだが、『コーレア』面々も含め、冒険者というのは食事中でも自分の装備を脱がないのだなあ、と改めて思った。クリスさんに至っては鎧が普段着みたいな感じだし。職業柄というか、いつでも臨戦態勢をとらなければいけないのですよーという意味合いでもあるのだろうか。

「うっさいわよラウル。そういうあんたも、後で矢じりに塗る毒の実験台になってもらうんだから、覚悟しときなさいよ」

アンジェリカさんが、手に持ったフォークでラウルさんをグサリと突き刺すマネをする。

「ちょ、うぇえ!?　何でいつもいつもおればっかなんだよ！」

「仕方ないじゃない。バリーじゃ身体がもたないだろうし、クリスにはそもそも毒なんて効かないし、適度に耐久があって、適度に苦しんでくれるラウルが一番参考になるのよ」

「最悪だ！」

横暴だ！　差別だ！　と唾を飛ばすラウルさんを、アンジェリカさんは鬱陶しそうに一瞥してから、突然人が悪くなったような――否、悪人のような笑みを作って、

「いいの、ラウル？　そんな態度とって。此間（こないだ）、のこと暴露（バラ）すわよ？」

サー、という効果音が聞こえるぐらいに、ラウルさんは真っ青な顔をして、「き、汚ねえぞ！　今度は恐喝か！」と明らか動揺した風にアンジェリカさんに人差し指を突きつけた。

「唾飛ばして喋ってるあんたの方がよっぽど汚いわよ」

「アンジェリカてめぇ……おれに何か恨みでも」
「ありまくりよ」
「な、何だよ！　あるならあるでハッキリ言えよ」
「さぁて。自分の胸に短剣でも刺してみてよぉく考えてみれば？」
「おまっ、死ねってか！？」
勝ち誇ったように、小悪魔というか、魔王的な笑顔のアンジェリカさんと、ぐぬぬぬ、と歯軋りせんばかりの様子なラウルさんを交互に見比べてみて、俺は隣に座るバリーに耳打ちする。
「なあ、バリー。もしかしてなんだけどさ、アンジェリカさんって、ラウルさんのこと好きなのか？」
バリーは、カッと目を見開いて、心底呆れたようにしげしげと俺を見つめた。
「うはぁ、レイシそれって今更過ぎっスよ。んなもん見てりゃ分かるじゃないスか」
「え、マジでか」
「多分、今まで気づかなかったのレイシぐらいっスよ」
「いや、まさかそんなことは……」
「だって、ヴァネッサちゃんだって知ってるっスよ」
「えー」
「あのクリスティーナさんだって」
「うぇえ！　それはショックだ」
がびーんと俺が卓上に頭を抱えていたら、クリスさんが「ぅむ？はんか呼んらか？」とサザエさんのオープニングの歌詞に登場するドラ猫の如く口にお魚を咥えていて、「「なんでもねっスー」」と俺らが口を揃えて誤魔化すと、「ほうか」と頷きつつ、バリバリッシュと頭の方から咀嚼していった。
「はーい、メインデッシュいくよー」
「……、……！」
レヴェッカさんとヴァネッサが二人がかりで運んできた大皿には、普通ではあり得ないサイズのローストチキンが、スパイシーな香り

と湯気を立ち上らせていた。すげえな。普通の三、四倍の大きさはあると思われる。一応、形的には鳥っぽいけど、いったいどんな鳥だったんだろう。

「待ってたぜぇ！」「わ、美味しそう」「うむ、来たな」「ウマそうっスね！」と食欲の塊でしかない彼らは一様に歓喜していた。そういう俺も俺で、彼らの勢いに圧倒されて、まともに食事をとっていなかったりしてたので、ここら辺でいい加減に胃に何か収めておかなければいけない、と俺は切に思った。

重量感溢れる音で、スペースを空けたテーブルの真ん中に置かれたチキン。俺はさっそく一番美味しそうなヒレの部分に、自前の銀製のテーブルナイフ（一番切り分けやすいので、食事時にはいつも所持している）を刺し込もうとして、

「……！？」

ラウルさんのナイフ（エッジのある戦闘用）の刃が俺の手の甲を掠めて、ヒレの肉に刺さっていた。

「おうっと、悪いなレイシ。でもよ、籠手（ガントレット）無しでメインデッシュに手を伸ばそうたぁいい度胸だぜ？」

「そうよレイシ、間違ってあなたの手が先に切り分けられちゃうわよ？」

そんな二人の発言に、ダラダラと冷や汗の止まらない俺は、そのまますごすごと手を引っ込めた。というか食事中でも、装備を解かないのはそんな理由だったのか。この調子だと、このローストチキンも俺はろくにありつけられそうになかった。

ふーむ。

あとでレヴェッカさんに、別個で何か適当に見繕って貰おうかな。

俺は手元の銀製スプーンの鈍い光沢を眺めながら、そう思ったていた時、不意に、クリスさんが口を開いた。

「ぅむ、そう言えば」

天気の話でもするかのような、まるで何でもない世間話でもするかのように。

「何やら戦争が始まったらしいな」
それは実際、くだらない世間話だった。

第三十九話　大切なのは、自分のしたいことを自分で知ってるってことだよ（後

インフル絶好調な蝉です☆
きゃ覇☆もう、死にそう♪

そんな訳でお待たせしまして、第三十九話でした。
活動報告にて、没シーン晒してます。

第四十話　生きるっていうことは平和な事じゃないんですよ

みゃう、みゃう、と海猫が港を我がもの顔で、うるさく頭上を通り過ぎていく。固く舗装された石質の地面を、先程から何人もの人が往来を繰り返していた。

麗らかな午後のひと時。

港には、ちゃぷちゃぷと波に抱かれて、数え切れないくらいの船が停泊していた。大中小を含め、豪華なものから質素なものまで千差万別であった。とりわけその中でも、異彩を放っていたのは、高さは十五メートル。全長九十メートルはあろうかと思われる巨大な船舶。現在、帆は畳まれているが、太いマストの柱が三本ある。目立った装飾はほとんど施されておらず、化粧っけのない無骨なスタイルだったが、思わず憧憬の念を抱いてしまうような力強さがあった。

「東のイベリタがこしらえた、大陸屈指の大型商船、マイダンズプラヤー号。あっちの言葉で『乙女の祈り』って意味らしい。洒落がきいてるだろ？　船と船乗りを守護する女神『アンピトリテ』のことを指してるのさ」

道の端に積まれた誰の物とも知れない角材に寄りかかる俺の右斜め上で、同じく角材の上に寝そべっているルイからの解説。

俺は脇に抱えた紙袋の中から、先程露店で買った色づきのいい真っ赤な林檎を一つ取り出して、水々しいその赤い皮に、シャクッとそのまま歯を突きたてる。

「あの商船が、いったい何をここまで積んできたか。兄ちゃんは何だか分かるか？」

シュタ、と角材の上から俺の隣に降り立ったルイは、チラッと物欲しそうな流し目をよこして、俺は一口だけ齧ったその林檎をルイに黙って渡した。

「ほら、あれだよ」

ルイは、しゃくりと齧りつきながら、前方を指差した。

マイダンズプラヤー号に立て掛けられた、大きく頑丈そうな板を足掛かりに、屈強な男達（中にはちらほらと子供の姿もあった）が働き蟻よろしく積荷を降ろす作業に精を出していた。

木箱にきっちりと詰め込まれた剣の柄。整頓された盾の列。揺れるたびに響く重量感ある鎧の音。

しばらくして、その積荷を搭載した大型の馬車が、ぱかぱかと四頭の馬が蹄の音を響かせて、俺らの二人の目の前を横切っていった。きっと街の検問所を抜けたところで隊商を組むのだろう。

「分かるだろ？　戦争の為の武器さ。北西から南下してきたブルートアイゼン。それに立ち向かうは我らが同盟国、お隣のイベリタだ。まあ、リブラルもリブラルで戦うちゃ戦うけど、交易国の名は伊達じゃねえんだぜ。特に首都の中央軍なんざ、城内に猫が入り込んだだけで大騒ぎだ。弱小も弱小。雑魚の集まりさ。戦力の見込みなんてのはねえな。んまぁ、この国はイベリタをはじめ、他にも小国だが軍事力だけはあるヘッジホッグ。大陸有数の魔術師師団を抱える魔術国家、カトレイなんかの三国に守られてる。そしてここリブラルは、言わばその三国の大事な『畑』なんだよ。で、その大事な畑を奪われない為に……っておい、兄ちゃん、途中からなに当たり前のようにオレの耳を弄ってんだ！」

「はっ！？　つい」

「つい、じゃねえ！」

ぎろりと睨みつけるルイは、ほにほにの魔の手から懸命に逃れようとするが、対する俺は無性にイジワルしたいという気持ちがむくむくと湧き起こった。それは何故か。はい、俺が変態だからでございまぁす。

「オラオラオラここがええのんかぁ？　ええんやろ？　ええんやろあぁあん？　うりうり」
「うあ――ちょ、そこは、わ、ね、ね根元はやめろぉぉぅ……」
テクニシャンな俺の手つきに、へなへなと足元から崩れ始めたルイ。
ルイは可愛いなあ、お持ち帰りしたいなあ、と犯罪的なぐへへ顔になっているであろう自分は、誰かにお巡りさんを特殊召喚されてもなんら文句は言えない。そうなったら大人しく、諸手を挙げて逮捕（サレンダー）されよう。
戦争。
そんなたった二文字の言葉に、ゆとりな俺は、具体的なイメージを持たない。新聞やニュースとかで見る、外国の戦争風景。迷彩柄の兵士達が、銃を持って壁越しに、パラララと軽快に撃つ音は、何よりも重い命の鼓動に似ている。喪服を着込み、棺桶に凭れかかる号泣する女性。いくつもの十字架。子供の遺影を抱えて、悲しみにくれる母親。いくつもの墓標。
俺は、そんな光景をテレビ越しでしか知らない。
何人もの死を――屍を踏み越えてきた俺だが。
戦争だけは、一つたりとて知りえない。
どんなものなのか、どういったものなのか。
昨日、クリスさん達と酒場で昼食をとった時のやりとりを思い出す。

「戦争、ですか」
俺は普段言い慣れない言葉を使うように、クリスさんに聞き返し

た。
「うむ。最近北で勢力を拡大しつつあるブルートアイゼンが、こちらに向かって南下してきたのだ」
「あ、それ、おれも聞いたぜ。都に向かう隊商の護衛として、ギルドで何十人も借り出されてるって」
ラウルさんがローストチキンの俺が欲しかったヒレの部分を咀嚼しながら、口を挟んできた。
「急な物価な値上がりも、その戦争の前触れだったわけね。ということは、もうけっこう前から戦争の兆しはあったのかしらん」
つまらなそうに肉を食べやすく分割しているアンジェリカさんが、言った。
「んじゃ、その内自分らにもお役が回ってくるっスかね～？」
「うむ。その可能性は大いにあるな」
「え？　お役ってなんですか？」
クリスさんが大仰に頷いているところに、俺はその疑問を口にした。
「無論、兵役のことだよ、少年」
「へいえき」
それもまた、異国の言葉のように、多少の違和感をもって俺は呟いた。
「うむ。我々、冒険者ギルドも、一応はこの国と連携しているからな。要請があれば、否が応でも出兵しなくてはいかんさ」
「そう、なんです、か」
「……少年。勘違いしてもらっては困るが、我々は戦う人種だ。何も相手がいつも魔物や人外ばかりだとは限らない。人間、他の種族相手でも、我らは同じく剣を振るって戦う。例え相手が女であろうと、年端もいかぬ子供であろうと、家族がいようと、恋人がいようと、守るべきものがあろうと、誇りや矜持があろうと、いざ戦いとなれば、そんなものはまったく意味を成さない。戦場に立てば、区別差別の境界なく、我々は等しく皆、兵士だ。互いの生命を奪い合

う、野蛮な獣と一緒だ」

我々は、戦うことしか知らない人種だ。

そういった生き物なのだ。

クリスさんは、厳しい視線で、俺にそう語った。

はい、知らずとも分かってましたよ。怖気づいて、半分しか殺すことの出来ない中途半端な俺と違って、あなた方は、『殺せる人間』なのだということを。はい、十二分に分かっておりましたとも。

人を殺すことは悪いことですか。

なんて。大人を困らすだけの意地の悪い空っぽな質問を、俺は前に一度だけ受けたことがある。『殺戮嗜好』こと、後輩の各務奈直（かがみななお）にだ。

あの時、各務は俺に決してその質問の正解を求めていたわけではない。ただ、俺がどういう反応を示すか、それを見極めたかっただけなのだ。

法律。倫理。道徳。秩序。常識。人としての良心。それともただの相互利益に基づいたシニカルな論理。どれをとっても俺自身が出した答えではない。どれもこれも頷けるが、納得し切れない。自分の中の明確な『答え』が、その時必要だった。

それで俺が導き出した『答え』は――

『誰かを殺すってのは、いなくなっちゃう、ってことだ。俺は、お前やみんながいなくなっちまうのは、嫌だ』

もっと一緒にいたいから。もっと笑って、バカやって、面白可笑しく過ごしたいから。そんで、各務が誰かを殺すってんなら、俺は止めるよ。全力でお前を阻止してやる。モチ、俺を殺しに来るんだったらいつでも来い。それも全身全霊で止めてやる。じゃないと俺が死ぬからな。それでも、やっぱり、誰かが傷ついたり悲しむのは、もう嫌なんだよな……って、これじゃあ駄目か？

各務は、こもったような笑い方をしながら俯いて、『まったく。

先輩には敵いませんねぇ』と呆れた口調で、腹を抱えて笑った。
俺の解答に、各務は愉快な話でも聞いたみたいに嬉々として笑っていたが、俺は結局、殺人を『悪』だとは言い切れていなかったのだ。確固たる意思で、殺しを悪だとは言及していなかったのだ。その箇所だけ、うまく逃げるように、触れていなかった。正直、曖昧に誤魔化した。
まったくどこまで、中途半端なのだろうか、と俺は生涯で通算何千回目になるであろう自己嫌悪に陥った。
と、まあ。
閑話休題。
いやはや、まったくもって便利な言葉であるなあ。多様し過ぎないように注意しなければ――ってことで。
閑話休題。
ってあ～さっそく使っちゃった。そんなお茶目な俺に乾杯。
「レイシ、なに無言でコップをかざしてるンスか？」
バリーが、はっ、と気づいたように気を遣って、俺が差し出したコップに水を注いでくれた。
「まあ、クリスが一人戦争に加われば一騎当千で圧勝だと思うがなぁ」
ラウルさんがげらげらと肩を揺らしながら言った。
「うむ？　流石に個人部隊（ワンマンアーミー）では、一個大隊相手にするので精々だよ。私なんかが一人参戦したところで、ほとんど戦況は変わらんよ」
クリスさんが冗談なのか真面目なのか判断しづらい口調で言った。
「い、一個大隊……」
俺は引きつった笑みで、大隊って何人ぐらいだろう、と考える。分隊、小隊、中隊の複数だから……六百人ないし八百人くらい？
うわーこえー。あなた本当にその戦闘力は何なんですか、いったい。スカウターで測っていいですかこのヤロー。
俺は一回だけ嘆息して、静かに食事を続けることにした。

以上、回想終了。
視点を、現在の穏やかな港の昼下がりに戻してみる。
「なあ、ルイ」
「……なんだよ」
「そう警戒すんなって。さっきのは悪かったよ」
可愛いなあもう、と俺がにへらーと反省の欠片もしてない様子に、ルイは拗ねたように、もう二度とあんな醜態を晒すものかと絶えず自分の耳をガードしていた。顔面の筋肉が緩みっぱなしのにへら顔で俺は、
「ルイをさ、連れてきたい場所があるんだ」
変な所じゃないよな、と目で訴えるルイの額を、ツン、と人差し指で押しやった。

図書館へと続く街道を歩く。その距離が短くなっていく内にルイの顔色が変わっていったのを、残念ながら俺は微塵も気づけずにいた。
そして、図書館前。
「こ、ここは……」
「そ、ラサニール記念図書館だよ。知ってるだろ？」
「な、なんでこんな所なんかに……」

「中に入ろうぜ」
俺はルイの手を取り、入り口まで進もうとするが、ルイは足で踏ん張って抵抗した。
「ん、どした？　ルイ？」
「……」
ルイは俯いたように押し黙って、図書館への進入を拒否していた。
俺はしばらく考えてみて、はは－んと頷いてから、納得した。
図書館に出没する悪魔の噂。
ルイも思いのほか子供っぽいとこもあるんだな、と俺は内心で微笑んだ。
まさか噂を完全に信じているわけでもあるまいが、しかし、怖気づいてしまうのもやむを得ないことだろう。そういうことならっ、と俺はルイの背後に回り、無理矢理背中を押して図書館へ入館した。
「怖かったら、俺の後ろにいてもいいんだぜ？」
にししし、と悪戯っぽく笑ってみたが、予想外に、ルイは俺の背後につき、背中の裾を掴んだ。
「ルイ……？」
「……」
何か本当に恐怖に値するものでもいるかのように、ルイは少し青褪めていた。俺はどうしたもんかと怪訝にルイを見ていたが、結局、かまわず歩を進めることにした。
両隣の本棚が、いつもより凄みのある圧迫感を醸し出していた。まるで本の庭園を荒らす侵入者に、出て行けと言わんばかりに。その本に彩られた道を直進していって、最後に辿り着く、サラサがいつも座って待つ、ドーナツを半分に切ったかのような机がある。以前、俺に向かって投げられた金属製のペン立てもちょこんと影を作っていた。
「サラサー？　来たよー」
俺が一声掛けると、それに反応して、嬉しそうな調子の甲高い声が返ってきた。

「あら、いらっしゃい、レイシ」
前の書棚の隅から何冊かの本を抱えたサラサが姿を現した。書棚整理の途中だろうか。ルイが俺の服の裾を強く握り締めた。
「ちょうどよかった。実はレイシに前から薦めてみたかった本が……あら、そちらは……？」
サラサが呟くとルイはビクリと身体を震わせて、おずおずと俺の影から一歩前に出た。
途端、サラサの表情が硬直した。
ルイも、酷く緊張した面持ちでサラサを見つめていた。
空気も、空間も、一定の時間を止めたように、芯まで凍りついたようだった。
俺は何が何だかまったく分からず、二人を交互に見比べる。
最初に口火を切ったのはサラサだった。
「どういう、つもり？」
俺は、最初の頃に会ったサラサを思い出した。横柄で、尊大。極小の矜持で、被害妄想を振り回す、高圧的な物言い。今のサラサは、あの頃の彼女に戻っていた。
「……お、オレ……いやぼ、ぼくは！」
額から頬を伝うように、一滴の汗が流れ落ちていった。

「姉さんっ……ぼくはっ！」

カーンッ、と鼓膜を突くような音がして、中の羽ペンやらを撒き散らしながら、ルイの足元にあのペン立てが転がった。実際に当たりはしなかったようだが、ルイは怯えたように一歩下がった。
「お前にっ！　お前のような者に姉などと呼ばれる義理はないっ！」
これでもかというくらいに、サラサは眉根を険しくさせ、歯軋りの音が聞こえるくらいに顔を歪めて、憎悪を孕んだ怒声で、
「二度とその顔を見せるなと言ったはずだ！　出て行けっ！　そして二度とあたしの前に現れるな！　下賤な汚らわしいこの、このっ

……」

そしてその言葉を――

「この獣がっ！」

その叫びが、スタートの合図でもあるかのように、ルイは堰を切ったように駆け出した。一目散に出口まで。

「ルイっ！？」

俺の静止の声も届かず、ルイの背中はあっという間に見えなくなった。

前方に視界を戻せば、サラサは荒い息で呼吸を繰り返していた。と、こちらの視線に気づいたのか、場違いなくらいにはにかんだ笑顔で、

「あ、ああごめんね。なんか取り乱しちゃって。まったく、どっから迷い込んだんだろうね、あの獣人。本とか汚れてなければいいんだけど。あはは、やだあたしったら、あんな大声出しちゃって、恥ずかしい。忘れてね、お願いよ。あははは、本当、獣人なんて臭いし汚くて仕方がな……」

俺はサラサの頬を張り飛ばした。

掠れた肉を打つ音が、館内に響き渡った。再び、空気が停滞を始める。

赤く紅葉が色づいた頬に手を当て、サラサは訳が分からないといった感じの表情をして、定まらない瞳孔で俺を見た。

俺はきつく彼女を睨みつけ、諭すでもなく、説くわけでもなく、ただ一方的に言い放つように。

「暴力は、いけないと思う。でも、俺は今、サラサを打(ぶ)たなければならないと思った。サラサの頬を叩く必要があると感じた。その理由は、サラサ自身で考えろ。冷静に、落ち着いて。自身の言動からよく考えてみるんだ」

それだけ言い残して、俺はルイの後を追うことに決めた。その為

に、サラサを背にして、出入り口まで走り出した。サラサはまだ呆然と、色の無い瞳で俺のことを見据えていた。
それを無視して、走るギアを一段階上げた。
今は、これでいい。
いずれ、また向かい合って対話に、望んで臨もう。
現在の最優先事項は、ルイを追うこと。
ああ、もう。せっかく順調に全てが回り始めていたのに。
何かを試してみようって時にはどうしたって危険が伴うことは、重々承知していたはずなのに。糞っ。
行き先も、行き着く果ても、どこにも見えやしない。
外に出て、午後の日の明るさが、妙に目に染みた。

第四十話　生きるっていうことは平和な事じゃないんですよ（後書き）

アンピトリテ＝ギリシャ神話。ネプチューンの妻。海の守り神。
ブルートアイゼン＝鉄血
ヘッジホッグ＝ハリネズミ
カトレイ＝カトレア　花言葉は魔力、魔性の

というわけで第四十話。いえーやっとこさ第九話の伏線回収（実はあった）。いやいや長かった。アトガキにて第三十９話の没ネタ晒してます。あと格ゲーのキャラバトンなるものも。
感想待ってますー。

第四十一話　神、空にしろしめす。なべて世はこともなし（前書き）

「おかえり、ご主人～」
「黙れ。猫が喋るな」
「ふーん？　そういう人間の法律があるのかよ？　生憎猫には関係ない……ニャ！」
「わざとらしく語尾をつけるな。法律とかじゃない。人間界の常識で、猫が喋ったらオカシイって言ってんだ」
「それこそ関係ないって。人間様の常識やらでアタシを縛るなんて、それこそ猫の尊厳を侵害してる……ニャ！」
「だから語尾を……もういいや。せめて、俺以外の前で喋ってくれるなよ」
「ニャハハハ。猫にものを頼むたぁ、ご主人も相当ヤキが回ったと御察しすんぜ～。そんなのは『猫の額にある物を鼠が窺う』ようなものさぁ」
「『猫かぶり』は、得意だろ？」
「今夜のごはんは、カツオ節四割り増しでお願いする……ニャン」
「その内首に鈴でもつけてやるからな」
「望むところだにゃ」

第四十一話　神、空にしろしめす。なべて世はこともなし

もしかしたら、と思った。
彼と一緒なら、もしかしたら何かが変わるかと思った。
それはまあ、甘い幻想だったわけだが。
本当に甘い。喉が焼けつき、爛れてしまうほどに甘ったるい考えだった。
思い上がるな。
心のどこかで、自らを諭し、責め立てる自分がいる。

――――この獣が！

あの人の言葉が、まだ体内で疼くように残響している。そう、その通り。自分は所詮、下賤な民。貧民層の住人。薄汚い獣人でしかない。あの人とは立つ位置も、見える世界もまったく違う。
妾腹の子である自分などとは、遠く及ばない存在なのだ。
よくある話だ。
貴族の当主が、自分の所帯を持っているにも関わらず、使用人に過ぎなかった一人の女中と恋に落ちた。加えて、その女中が知らずの内に子を身籠っていたとしたら、なお笑える。
よくある話だ。
ルイの母は、当初ラサニール家の一使用人として雇われていた。
それが、いつの間にか、既に既婚者であったラサニール家の当主と恋仲になり、ルイを身籠った。その事実を知った当主の妻は、怒り狂い、半ば発狂したとまで噂され、ルイの母をすぐさまクビにして、

屋敷から追い出した。その時の彼女に残ったのは、少ない手荷物と、口止め料としての手切れ金。そして腹に宿った小さな生命だけだった。

ルイは、自分がラサニール家の妾腹の子であるということを早い内から知っていた。必然、噂というものは本人の意図とは無関係に脈絡もなく流れてくるものであり、そして何より、ルイの母親自身も、その事実を認めていた。

母さんは、恨んでないの？　とルイは母に尋ねた。

だが母は、何も恨んでいないと言った。

屋敷を追い出され、多少のはした金だけを与えられて、こんな貧民窟での生活を強いられたというのに、怨恨の欠片も抱いていないと。

過ちを犯し、間違いを犯したのも自分だから。

こうなって然るべき業を、自ら背負ったのだと。

しかし、何よりも。

――私はルイに会えたから、もうそれ以上は何も望まないわ。

お金も自由も怨嗟の感情も、何もいらない。あなたに出会えたことで、全てが帳消しなのよ。本当、お釣りがくるくらいに、ね。

誰よりも何よりも美しい自慢の母は、そう言って儚げに微笑んだ。

ルイはその時の母の言葉を思い出して、不意に涙ぐんでしまった。

どことも知れぬ人気のない街道の隅で、目元を拭う。

一度だけ、ルイはサラサに会いに行ったことがあった。

腹違いとは言え、自分の姉に会いたいと思う気持ちはごく自然なものだった。ルイが、母親を失って間もない頃であった。

サラサ＝ラサニールは、ルイの母親がラサニールの屋敷から追い出された後、何故かラサニールの管理下にあった図書館に一人引きこもっているらしかった。ルイは、勇気を振り絞って面会に行った。

少なからずも、自分と繋がっている人物に一目相見（まみ）えたかった。自分は決して孤独ではないと、期待してみたかった。

結果、拒絶された。

否、拒絶なんて生易しいものではなかった。明確な嫌悪と、明白な憎悪。

あらん限りの罵詈雑言で、彼女はルイに怒りのたけをぶつけた。

あの女と同じ顔。忌々しい。よくもここに顔が出せたものだ。身の程知らずめ。汚らわしい獣人が。よくもあたしの家族を。許さない。絶対に許さない。お前の。お前の母親のせいで。あのアバズレ売女せいで。あたしの全てが台無しだ。出ていけ。ここはお前のような薄汚い獣人がいるべき場所ではない。去れ。そして二度とあたしの前にその顔を見せるな。消え失せろ。

明らかな怨嗟と怨恨の炎を、彼女は胸の内に激しく燃え滾らせていた。

ルイは先程と寸分違わず同じように、図書館から一目散に逃げ出した。

「……」

とぼとぼと、夕日が長く寂しい影を伸ばす街道をルイは歩いていた。どこへ行くでもなく、ただ無意識に任せるまま。もはやここがどこなのかすらルイには分からなかった。今はもう、ショックで何も考えられなかった。

「やあ」

それはあまりに突然だった。

「……？」

ルイは足を止め、急に声をかけてきたその人物に目をやる。その人物が、少し見知った者であることに気づくと、ルイは本能的に警戒態勢に入った。どうして、こいつがここに……？

「そういえば最近思い出したんだけど、君ってさ、前に俺の財布スッたことあるよね？　ほら、お仲間と一緒に」

ぞわあああと一気に虫唾と鳥肌が背筋を駆け抜けた。その声は、聞き覚えのある――いや、忘れるわけがない。その生気の薄く、人間味のない、人を人とは思わない残虐さを孕んだ、情け容赦の無い無慈悲な声音。

「まあ、いいや。過去のことは水に流そう」
その代わり、頼みごと一つがあるんだ、と彼はニッコリと即席で作ったような笑みを向けた。ルイは、だんだんと顔を青ざめさせながら、一歩引いた。
まさか。嘘だろ。
これは、やばい。
逃げなきゃ。
《コイツ》は、ヤバイ。
だが、ガタガタと足が震え、まるで爪先から根っこが生えたかのように、己の意志とは裏腹に、まったく身体が言うことを聞かなかった。動け、動け、と念ずるも効果は皆無で、額からは度を越した焦燥感からか、ねっとりとした脂汗の玉を浮き上がらせた。
「けど、その前に」
神様にお祈りは済ましたか？
と、言って。
ルイは恐怖に目を見開いて、彼を凝視した。

無闇やたらと言って差し支えないくらいに走り出したはいいもの、そろそろ足に蓄積した乳酸に、足腰の筋肉が悲鳴を上げ始めている。おお、大腿四頭筋よ。貴様の限界はその程度か。

と言いつつも、実際にその程度なのだからやむを得ない。むしろ三十分間フルスロットルで駆けずり回った自分の肉体に、ここは賛美賞賛を送るべきであろう。

俺は息を切らしながらヘロヘロと道端でガードレールの役割を果たしている石質の縁に凭れかかって、休憩。そういや、ここっていつかルイに街を案内された際に、最後に紹介されたあの高台だった。胸の高さまである煉瓦造りの縁の向こう側には、セレンの街並みが臨め、様々な形の屋根が波を打っているように並んでいた。そしてやはり、ここからの夕焼けの景色は素晴らしかった。ああ、絶景かな絶景かな。

「……はーあ」

結局、ルイは見つけられなかった。

おまけに、頭に血がのぼっちゃって、勢いでサラサに平手打ちしちゃうし。

何やってんだろ、俺。

無意識に、胸に西日を浴びて煌く十字の形を模したブローチに、手で触れてみる。

あの謎キャラ過ぎるナースさんに貰ったブローチ。

一応、毎日肌身離さず身につけてはいるのだが、ナースさんが想定するような事態には残念ながらまだ至っていない。いや、起きて欲しくないんだけどね。

まさに忽然と姿を消した彼女のことについては、何かと引っ掛かることも多々あるのだが、まあ、風か何かの自然現象だと思えば、不思議と全て納得出来た。

彼女は、そういう存在だったのだ。

にしても、ナースさんの二つ名についてだが、改めて思い返すと、どっかで聞いたことあるようなないような。んー気のせいか。

ふと、何気なく周りを見渡す。

日暮れも近いせいか、人影はあまり見られなかったが、反対側の歩道に飴細工の屋台があった。焦げたカラメルのような甘く、香ば

しい匂いが風に乗って流れてくる。屋台の前には数人の子供達が列を作っていて、騒がしかった。

穏やかな、夕暮れ時の光景だった。

その空気が、一瞬だけ揺れた。

まるで絶壁の断崖に一人立たされたみたいに、尻の穴が原形をなくすほどに窄んでいくような感覚。足元から電流みたく貫いていくような寒気。

「……何です？　ラインデルさん」

俺は縁に凭れ込んで前方を見据えたまま、振り向かずに言う。間違ってたら恥ずかしい。でも妙な確信をもって俺はそう言えた。

「レイシ様に、お話がございます」

姿勢を反転してみれば、予期したとおり、背後には胸に手をあて、軽く会釈しているラインデルさんがいた。

「話？　なんですか？　俺を殺しにきたという話ですか？　いいですよ。約束したとおり、俺はあなたに殺される権利がある。あなたの大事なお嬢様に手を上げ、泣かしてしまったんだから。どうぞ、お好きに。何てったって、俺はあなたにまったく勝てる気がしないですから。でもどうか、痛みは一瞬で頼みますよ」

諸手を挙げて降参の意思を表明する俺に、ラインデルさんは静かに首を振った。

「貴方は、間違ったことは何一つなされておりません。あの場合、貴方の行動はむしろ正しいものだった」

「……」

「私がここに馳せ参じたのは、貴方にお嬢様と、あの少年……ルイ＝セルカークレックスのことについてでございます」

「……ルイがサラサに言っていた、『姉さん』って。どういうことなんだ？」

「それも含め全て、お話いたします」

ラインデルさんは悲しそうに目を伏せて、語り始めた。

獣が二匹、ベッドの上で互いに絡み合っている。
驚かせようとして潜り込んだ父の寝室のクローゼットの中で、訳の分からない恐ろしさに震えながらも、サラサはそう思った。
その一方の獣が、自分の父であると気づくに、随分と時間がかかった。果てしなく怖かった。何かいけないものを見たのだと思った。甲高く部屋に響き渡る悲鳴のような女の声。それが、いつも自分に声をかけてくれる気のいい獣人のメイドのものだと分かると、途端に吐き気すら込み上げてきた。
あの獣人のメイドが、父を獣に仕立て上げてしまったのだ。
まだ幼かったサラサは、クローゼットの隙間から覗ける、二人の行為の終始を見届けた。その光景は、サラサの心の奥底で根深く消えない《シコリ》として残った。父親に対する嫌悪感も、日に日に増して根強いものとなっていった。
しばらくして母が、父とメイドのその行為と関係について、知ることになった。母は狂ったように――いや、事実、気が触れたのだろう、とサラサは思う。あの有様は。どう前向きな表現をしても、正常を失っているとしか言いようがなかった。
母は、嫉妬深い人だった。
何せ、獣人のメイドを強制的に辞職させてからも、ふと思い出したように、他のまったく関係のないメイドに『どうしてあの人を奪

ったの！』と叫び散らしながら掴みかかるあの有様は、何をどうしようともフォローのしようがなく、確実に、常軌を逸していた。

元々母は、弱い人でもあった。

だから、自分の信じてきたものに確証がなくなると、人間的に駄目になったのだ。

父も父で、そんな心の病んだ母を屋敷から一歩も出さず、半ば幽閉するように離れの一角に隔離した。歳の離れた兄と姉も、それぞれ遠方に嫁ぎにいったり、独立していたりしていて、本家のことなどまったく興味がないようにみえた。

家族が、壊れ始めた。

いや、壊されたとも言えるが。父親に抱く途方もない嫌悪感は身体にまで影響を及ぼしていた。父親の顔を見るだけで、あの時の映像（ビジョン）がフラッシュバックで蘇り、胃の中がぐるぐると回り始め、ついには父親の目の前で惜しげもなく嘔吐してしまったほどだった。

どちらにしろ、こんな家、もう一秒たりとも居たくなかった。

だから、立てこもる為の根城が必要だった。それが、父が酔狂で建設した図書館。ほとんど管理もなされていない上に、妙な噂も囁かれていて誰も近寄らなかった。基本的に本を読むことはは好きだったので、自分にとってこの上なく最適な場所であった。

そして気づけば、図書館に身を置いてから、もう五年の歳月が過ぎていた。本家の様子なんて、執事のラインデルの口からしか伝えられない。曰く、『お母上も、お父上も健やかにお過ごしでございます』と。

彼が気を遣っていることは十分に理解している。だが、自分に本当のことが伝わらない。あの家の今が――真実が知らされないということが、サラサにとって、それは何ともやりきれない気持ちにさせた。

無論、あんな崩壊した家のことなど、考えたくもない。狂った母は、娘である自分――いや、娘であるからこそ、真に恐いと思えた。もしやあれは、未来の己の姿ではないかと、脅迫的に想起させる。

実際、思い当たる節はあった。自分の嫉妬深さは母譲りだと。

なんて。

（何を当てこともなく考えているのだろうか、あたしは）

まだ少し微かにヒリヒリと痛む左頬に触れてみる。

サラサは怖かった。

憎悪と共に、サラサはルイに恐怖していた。

ルイの母親のせいで、サラサの家族は崩壊した。厳格にはそうとは言い切れない部分もあるのだが、サラサは偏（ひとえ）にそう思っていた。

そう、思わなければならなかった。

自分の敵を――自分に対する害悪を明確化しなければ、サラサの心はとうの昔にその支柱をポッキリと折られ、跡形もなく消失していただろう。要するに、自らの敵対する幻相（イメージ）を作り上げ、その対象にこそ全ての原因と責任があるのだと迷妄し、精神の安定と安寧とを図る――自己防衛の典型（オーソドックス）。言わば、これもまた現実逃避の一環。

故に、怖かった。

心中に抱えていただけの幻相（イメージ）が、現実に具象化し、再び目の前に現れたことが。親子二代に渡って、今度は自分と彼の関係を壊しにきたのだと。

しかし、それは事実、起こってしまった。

彼との関係は、塵も残さず終わってしまった。壊れてしまった。

赤みのさす頬の痛みが、それを実在のものとして自分に突きつけている。

（あたしは、何を間違えたのだろうか）

ぐっと下唇を噛む。

（あたしはただ、レイシと一緒にいたかっただけで……）

じわりと、薄い鉄の味が口内に広がる。

彼が外の世界を紹介してくれたことが嬉しかった。彼についての何かを知ることが嬉しかった。自分だって、ずっとこのままでいいとは決して思っていない。彼は自分にとっての新しい風を入れてくれる。この図書館が自分自身の体現なのだとしたら、彼は自分が閉

ざした窓をどんどん開け放ってくれた。最初こそは戸惑い、翻弄されもしたが、今ではそれがとても心地良いものとなっていた。

まあ、現在に至ってみれば、それも全ておじゃんだ。何もかものが滅茶苦茶で、無茶苦茶だ。

彼が自分の暴言に激怒したのは、時間を置いて、冷静になってみてからすぐに理解出来た。種族間差別だ！　とデモの行進（パレード）が発生してもおかしくはないくらいの発言を、自分はした。でも、仕方がなかったのだ。このやり場のない憤りと、やる瀬のない怒りの矛先を、誰かに向けなければ。

あたしは、あたし自身を保てなくなる。

いったい何をしでかすか、分からなくなる。

だって、あの嫉妬狂いの母の血を、一身に引いた娘なのだから。

「……なんだ。一番気が狂（ちが）っていたのは……」

あたしだったか。

か細く、消えてしまいそうな声で呟いた。

本棚に背中を預けて、膝を抱えて座り込む。顔を膝の合間に埋め込む。スカートのフリルがカサカサと煩わしかった。

もう嫌だ。

どうせ奪ってしまうのだったら、初めから与えないで欲しかった。

愚かな期待を抱かせないで欲しかった。

神様はいつだって残酷なものだ。

神、空にしろしめす。なべて世はこともなし。

嘘ばっかりだ。

サラサはぐずぐずと鼻を啜りながら、眼鏡を取り外し、物静かに咽び泣いた。大事な宝物を失くしてしまった子供のように、さめざめと泣きじゃくった。溢れ出てくる涙に辟易としながら、笑いたくなるくらいに歔欷（きょき）へと溺れた。

「また、泣いてるんだ」

……ぁあ。
あああぁ。
何故だろう。どうしてだろう。失っていたと思っていたものが、突然目の前に現れて、困ったような笑顔を向けてくるのは。眼鏡を外したのと、止まらない涙のせいで視界は限りなくぼやけてはいるが、彼の存在ははっきりと分かった。
例えこれが虚像か幻影の何かだとしても、これ以上に歓喜すべき偽りはない。
もう、二度と会ってはくれないかと思っていたのに。
「な……泣いてなんか……ないわ、よ」
いつかのような会話のやりとり。
何一つ、以前と変わらず。
嘘じゃないのだとしたら。
彼はそこにいた。

第四十一話　神、空にしろしめす。なべて世はこともなし（後書き）

セルカークレックス＝アメリカ出身の猫の品種。
タイトルはブラウニングの詩の一節から。けっこうポピュラーなものをチョイス。
しかしなんというモノローグ回……いやあ、精神論は疲れるなあ。
今回のマエガキ……最近ひっそりこっそりと描こうとしているナンチャッテ漫画の設定から、何となく。ネームッテムズイネー。

ってか総合１０００ポイント突破ヒィィィィハァアアアアアアア！！！

読者のみんな様！　ここまで応援していただき、ありがとうございました！
蝉の次回話にご期待ください。

第四十二話　大抵のことは牛乳に相談だ（前書き）

「だから言っただろ、蜉蝣（かげろう）？　裏切りはいつだって突然なんだ」
「てんめー、蚊（ぶん）！　九連宝燈（チュウレンポウトウ）だぁあ！？　ざけんなよ！」
「あーあ、これでまた蚊さんの一人勝だ。蚊さん麻雀強いなー」
「ってか蜉蝣さんも蜉蝣さんで蚊さんとグルになってたんですか？　しかも裏切られてるし……マジウケルんですけどぉ」
「んま、今日の買出し担当は蜉蝣ってことで、よろしこー」
「だああっ！　蚊！　てめぇいつか覚えてろよ！」
「蜉蝣こそ、僕の言葉をよく覚えておくべきだったね」

第四十二話　大抵のことは牛乳に相談だ

優しく、微かに赤みのさした頬に手を伸ばした。抵抗されるかと思ったけど、サラサに大人しくされるがままにされていた。触ると、驚くほどに柔らかい頬の感触が伝わった。親指で軽く目元のしずくを拭って、

「本当だ、泣いてない」

と俺は確かめるように言った。

サラサも、泣き腫らした目で笑った。

膝を着いて屈んでいた俺は、尻餅をついて胡坐をかき、冷たい石床に腰を下ろして、サラサと向き合った。サラサは、恥ずかしそうにキョロキョロと焦点をあちこちに泳がせていた。

「さっきは……殴って悪かった。正直、俺も頭に血がのぼってた」

まず初めに俺は、額を床に着けんばかりの勢いで頭を下げた。

「あ、あたしも……」

サラサはもごもごと口を動かしてから、結局は諦めたように口を噤んだ。

「サラサ。俺はサラサに酷いことをした。だから謝る。でもサラサが謝るべき相手は俺じゃないよ、ルイだ」

サラサは、俺の言葉に暗く視線を落とした。俺は話し続ける。

「君の事情は、大体ラインデルさんから聞いた」

だが、そこに俺は何の同情も共感もしないよ。

サラサは、ビクッと肩を揺らした。

「何一つ、俺は君に同情出来ないし、共感も出来ない。でも、想像

だけなら出来るよ。サラサがサラサの敵を探していたということも。その恐怖心も。そして、どこかで期待している救済的な転機を待ち望んでいることも」

「……」

「それが君の自己防衛に過ぎないことも、精神的な支柱であったことも、おおよそ推測出来る」

「……いったい、何を言っているの……レイシは」

「サラサのこと」

「あたしの？　何を？　あたしの何を知っててそんな口が利けるの？」

「知らないよ」

サラサは呆気にとられたように瞠目し、歯軋りでもしてるかのような表情で俺を見据えた。

「知らないよ、サラサのことなんか。分からないし、理解出来ない。言っただろ？　これはあくまで俺の想像。無知蒙昧な戯言の一人語りでしかない。誇大妄想もいいところの、ただの独り言の羅列に過ぎないよ」

「……なに、ソレ。ふざけないでよ」

「ふざけてるのは、サラサの方だよ。じゃあさ、二つばかし訊くけど、君はさ、いったい何と戦っているの？　君の敵はいったいどこにいるの？」

サラサは、うなだれるように低く呻いた。

――君はさ、いったい何と戦っているの？

――君の敵はいったいどこにいるの？

そんなもの、こっちのほうが知りたかった。

敵はいったいどこだ？　あたしは何と戦っている？

誰でもいいから、教えてくれ。

嗚咽が、懲りることを知らずにまた込み上げてきた。情けない。

もう何が悲しいんだか、全然分からない。誰か助けてよ。救ってよ。

怖いよ。気持ち悪いよ。悲しいよ。酷いよ。もうどうでもいいよ。

何もかもが、どうでもいい。

そこで不意に。

ぽんっ。

と。

意外と大きな手が、頭の上に置かれた。荒々しくも、丁寧に、壊れ物を扱うような慎重な手つきで、サラサラと、髪の毛を撫でていく。

呆然として顔を上げると、彼の顔が間近にあった。夜闇に紛れてしまうような漆黒の髪。深い湖の底のように、吸い込まれそうな暗い瞳。全てがこの手に収まりそうなほどに、近かった。

その薄く開かれた口から、吐息のように零れる言葉に、あたしは。

「サラサが戦っているんだったら、俺もそばで戦うよ。それでサラサを守るよ。サラサの敵なら、俺の敵でもあるんだ。大丈夫。俺がそばにいる。サラサと一緒に、最後の最後まで戦ってやんよ」

……何故ですか？

何故、彼は笑っていられるのですか？　何故、笑いながらそんなことが言えるのですか？　何故、彼は平気な顔で、他人の傷まで背

負おうとするのですか？
　オカシイんじゃないですか？
　サラサが誰に問うでもなく茫然自失としていると、図書館の入り口付近で激しい物音がした。二人は互いに一度顔を見合わせてから、物音の正体を確かめに行くことにした。
　果たして入り口の重苦しい扉を突き破るように開け放って、力尽きたようにその身を投げ出していたのは、血塗れのルイだった。

　くすぶった、嫌な臭いがした。
　しかし、今そんなことはどうでもよかった。
「ルイっ！」
　俺は慌てて玄関前でうつ伏せで倒れているルイに駆け寄った。ルイは消え入りそうな声で何事かを唸ってから、後は事切れたように意識を失った。
「ルイ！　おい、ルイ！」
「レイシ様、失礼を」
　まったくどこから出現したんだか、神出鬼没なラインデルさんが俺の脇からいきなりニョキッと生えてきて、ルイの身体を見分し始めた。
「……はい、今のところ、これといって命に別状はなさそうで

す。出血は多少ありますが、傷自体は深いものではありません。ですが、背中の火傷……いや、これが火傷と呼べるのか分かりませんが」

ラインデルさんは、俺がルイの身体を見やすい位置にずれてくれた。俺は幾分平静を取り戻してから、改めてルイの身体を上から下まで目線をスライドさせた。

「……っ」

ラインデルさんの言った通り、出血自体にはそんな酷いものではないようだった。しかし、背中の火傷は……否、これは、ただの火傷とは到底言えるものではなかった。背中の部分だけ服が焼け焦げ、惜しげもなく肩甲骨から腰の辺りまでのルイの素肌が晒されていた。だが重要なのは、その健康的な肌に、まるで一文字一文字烙印を押していったかのように、火傷で黒く変色した皮膚が文字の配列を作っていたことだ。全てを読め解けば『あの崩落した教会に、一人で来い』とのことだった。

「……」

「……レイシ様、これは……」

「ラインデルさん。ルイを、頼みます」

サラサには、俺がどこに行くかは黙っていてください、とボソリと付け加えて。俺は後ろを振り向き、途方にくれて困惑しているサラサに一瞥し、

「サラサも、ルイを頼むよ」

母親から突き放されたみたいな切ない表情をサラサはして、涙目で俺を見返した。俺はあえてその視線を無視し、開いてる扉から図書館を飛び出した。

あなたは、どこにいくの、レイシ。
いったい、何をどうしろというの、レイシ。
あたしはこの子を拒絶したのよ？　その拒絶したあたしに、今更この子を受け入れろとでもいうの？　何という無茶を吹っかけてくれるの。あたしは、この期に及んで、この子にどんな顔で向き合えばいいというの？
「お嬢様、治療の為、彼を一度移動させたいのですが、お嬢様のベッドをお貸しいただいてもよろしいでしょうか？」
忠実なる執事は、ルイをお姫様抱っこで担ぎ上げ、言った。
「……好きにして」
「ありがとうございます」
ラインデルはそのままルイを抱いて、歩き出す。
本当は、全部分かっているくせに。
それでも素知らぬ振りをして、じぃは、ズルイ。
もしかしたら、自分にとって一番残酷なのは、矛盾を暴き、現実というナイフで突き刺してくるレイシではなく、自分の従僕である、長身痩躯で口数の少ないじぃではないかと、サラサはラインデルの背中を睨みつけながら思った。

外は、もう盛大に夜の帳（とばり）がおりていた。月明かりだけが、その場をぼんやりと照らしていた。日が落ちても光が溢れる元の世界と比べて、この世界に来てからは、夜の暗闇は随分と身近なものになった。だから、なかなかに夜目は利くようになった。

ふと、月が暗雲に隠れて、ゆらゆらと霞む朧月になった。

「……さーて、これからどうなる」

俺はあのバルゴさん達の騒動で半ば倒壊しかけている教会の前に、僅かに息を弾ませながらも、着いた。視点を上に向ければ、屋根が所々焼失しており、バリーが吹っ飛ばした壁の穴もそのままになっていた。

わざわざ、ルイをあんなにしてまで、俺を呼び出すってことは。どうやら俺をとことん怒らせたいらしい。冷静さを失わせ、トチ狂った状態での会見をご所望らしい。

だが、そんな見え透いた手にわざわざ乗っかってやる必要性は塵ほどもなかったし、何より、そこまで俺は優しくない。

優しくなってやる、義理もない。

ルイを傷つけたことは絶対に許さない。何かなんでも首根っこ引っ張って地べたに身体が半分埋め込ませるぐらいに詫びを入れさせてやる。

意気込んで、俺はボロボロの教会の大きな扉を押して、突入した。

とまあ、ここで与太話の一つでも挟んでみるとするなら、人間誰しも後先考えずに行動に移ってしまうことが少なからずあるもので。前述にて、自分はいかに冷静かと豪語していたにも関わらず、まことに自家撞着の極みであるのだが、やはりどこかで冷静さを欠いていた部分があったと思うのだ。トサカにキてたんだよね。故に、最

初の前提から、俺はもっと考えておくべきだったんだ。
最悪の前提を。
俺自身の本質という前提を。
そして、教会内に入ってみて。
逃げたくなった。
――――臭気。
臭気が、臭気臭気臭気血の臭いが。トイレに設置する消臭剤も顔負けな、濃い血の臭気がいたします。嫌です嫌です。もう嫌だ。逃げたいです。後悔の波が押し寄せてきました。あははは。思い出します思い出します。初めてナイフを振りかざした日のことを。死んだジェウを抱きしめた日のことを。血だらけの紫苑兄ちゃんに抱きしめられた日のことも。薊姉ちゃんに首を絞められた日のことのも。懐かしい本当に懐かしい、気分です。イヒッ。最悪の気分です。最高です。最高に最悪の心地です。ああ、苦い珈琲が飲みたいな。関係ないけど。
「ああ、やっと来たっスか」
ムカつくくらいに聞き覚えのある口調。バリーが、奥の祭壇で片膝を立てて、座っていた。
「いやあ、でも丁度良かったかもっスね。こっちも大方落ち着いたところだったっスから」
祭壇から降りて、カツカツとブーツの音を鳴らして、ある程度の距離まで近付いてくる。
その時、今まで雲に陰っていたのが晴れたのか、月光が、教会内部を淡く、仄かに照らし出す。
けれども、それで十分だった。
自身の二つのサーベルが無造作に腹部から生えていえて、掻っ捌かれた腹からは、ぐちゃぐちゃのブルストやらソーセージやらを、まさに出血大サービスで披露してくれちゃったりしているラウルさん。どろりと中身の大半が露出しているせいか、くびれがさらに引き締まったを演出していた。今後のダイエット界にもたらす斬新的

なアイディアだと思われる。
　次いですぐ近くに転がっているのはアンジェリカさんで、これは何と上半身と下半身が見事に泣き別れしていて、怪談のテケテケを連想される。あと顔の半分が溶けたキャラメルの如くドロドロと焼け爛れていて、彼女の綺麗な顔がこれから拝めなくなるのだと思うと、残念至極な思いだった。
　少し離れた位置では、クリスさんが四肢を残らず分断されていて、クリスマスによく食べられる、人型のジンジャークッキーを想起させた。俺ってば、アレ、両手足を先に折ってから食べる癖があって、それが今のクリスさんと瓜二つだったのだ。加えて、クリスさん自慢の武器である『ジュワユーズ』が、持ち主であるクリスさんの背中を貫いて、地面に串刺しにしていた。
　立ち込める腐った鉄のような悪臭が、鼻腔を蹂躙するように駆け巡り、思わず胃の中身が逆流しそうだった。いやん。
　何ですか？　何ですか、これは？
　久しく見慣れた光景だなと思いつつも、脳内キャパはメモリーオーバーを迎えて、エラーの告知が壊れたように頭の中を埋め尽くしていた。何も考えられない。考えたくない……というか、いやいや、どう考えても死体です。ありがとうございました。またのご利用お待ちしていなかったよ。もう何回目だと思ってんだ。ああ、うんざりだよ。温い臓物の香りも、冷たい死の感触も。二度と会いたくはなかったよ。畜生。救いはどこにある？　はい、ホロコーストにてお待ちです。俺は人間です。いいえ嘘です。プリクラで撮った正義をべたべたとあちこちに貼り付けて満足するような人間になるなって幼稚園の先生から教えられなかったのか。あはん？　アガペーはまだですか。願うは圧倒的カタルシスで、求むは善意的なサイケデリックなのだ。まったく、神の国が堕ちてきそうな心持。ウサちゃんはあの時バラバラに切り裂かれたんだよ。あれは俺自身だったんだ。そうさ喪服で祝え。花束でぶん殴れ。困ったら牛乳に相談しろ。
　Zから始まるアルファベットのような、違和感の連鎖。

雄を捕食する雌蟷螂（めすかまきり）のような、嫌悪感の螺旋。
「……」
意味のない情報と思想の奔流が終わりを告げ、俺はその瞬間から、思考することを停止した。
「あは」
ぴちゃりっ、ぴちゃりっ、と血溜まりの中を踊るように跳ねて、バリーは悪戯が成功した幼子のような無邪気な笑みで、言った。
「びっくりしたっスかぁ？」
目ん玉飛び出た。

第四十二話　大抵のことは牛乳に相談だ（後書き）

デデーン。

第四十三話　嘘は言ってません、本当のことを言わなかっただけです

「びっくりしたっスか？」
トレードマークのベレー帽を被り直し、バリーはワキワキといった感じで、再度訊いてきた。
「びっく……り、した」
俺は何とかその言葉だけを返せた。脳内の意思を言語化するのってこんなに難しかったっけかな。言葉を失うとはまさにこのこと。
「あは！　あはははははははは！」
返り血で染まった顔のまま、さも愉快そうに笑うバリー。屈託なく腹を抱えていたと思ったら、おもむろに背中に手を回すと、ゴソゴソと何かを取り出して……。
「みなさーん！　もういいですよー！」
と、後ろを振り返って、高らかに叫んだ。
へ？
「……うおおぉぉ！　グロイってレベルじゃねえぞこりゃ。腸が超はみ出してやがる！」と腹から露出した小腸を弄ぶように摘み上げるラウルさん。
「ラウル……それ最高につまんない」仰向けに寝転がりながら、アンジェリカさんはべりべりと顔の焼け爛れた部分を日焼けした浅黒い肌のように剥がしていった。
「うむ。これが本当の手も足も出ない、だな」クリスさんに至っては、両手足を失っているにも関わらず、何の問題もなく起き上がった。
というか、浮かんでいた。

アンジェリカさんも同様に上半身だけの状態で浮遊していた。
服に隠れて断面図を拝むことはなかったが、二人に出血している様子はなかった。
「せーの……」
バリーが他の三人と顔を見合わせた。一度ニヤリと口元を吊り上げ、チーム『コーレア』は声を揃えて、

「「「「ドッキリ大成功！！」」」」

バリーが高らかに掲げるそれ……プラカードにもでかでかと『ドッキリ大成功！』と書かれていた。パクパクとひたすらに酸素を求める金魚のように、俺は二の句を継げずにいた。
「な、なな……え、これ……は？　え、え？」
思考が状況に間に合っていない。遅れたダイヤグラムの予定を合わすように、俺は必死で脳内神経の全勢力と、シナプス伝達とをフル稼動で働かせ、現在の展開に追いつこうとした。
「ドッキリっスよ、レイシ。全部嘘っぱちっス」
「ク、クリスさん、アンジェリカさんが、う、浮いて……テケテケ……」
「ああ、これは単なる『幻視（ビジョン）』の魔術っスよ」
そう言ってバリーは、パチンと指を鳴らした。するとクリスさんの両手足が――アンジェリカさんからは下半身が、写真を現像していくように、見る見るうちに、うっすらと浮かび上がってきて、よく目を凝らしてみれば、次のコンマでは二人の欠落した四肢が復活していた。視界の隅では、アンジェリカさんの下半身だと思っていたのは、ただの廃材木に変わっていた。
「周囲の温度に、光の屈折と乱反射を応用して、少しの間だけ、幻を見せる魔術っス」

「で、でも、血が……血の臭いが……」
「これは豚の血だよ、少年」
「ついでにおれの腸も豚のな。うっはあ！　今更ながら臭え臭え」
「はあー……お風呂入りたい」
クリスさんは口に手をあてて苦笑し、ラウルさんは腹部からブラブラと揺れるソーセージの原料の取り外しにかかっている。アンジェリカさんだけ、うんざりしたように嘆息していた。
「……そ、そうだ！　ルイ！　ルイのあの火傷は」
「ルイくんには、俺からお願いして、一芝居打ってもらったんス」
その調子じゃ、ルイくんも名演技だったみたいっスね、とバリーはプラカードで自分の肩を軽く叩いた。
「え……、え？　嘘？　何、はぁ？　ちょ、ちょっと待って待って……！？」
混乱の極致に到達した脳味噌を一端フリーズ。シリアスからの脱出完了。
えと、つまり、そういうこと？
「うむ。そういうことだ」
「そういうことだな」
「そういうことね」
「そういうことっス」
何だ。なんだなんだなんだなーんだ。そういうことか。クリスさん達は死んでない。全て冗談。総じてお芝居。俺に一杯食わす為の茶番劇。みんなみんな生きている。クリスさんだってラウルさんだってアンジェリカさんだってバリーだって、誰一人死んでない。あは、あははは。そうだよ。そうだよ。まさかいきなりこんな急展開なんて誰も予想だにしていなかったに違いないし、望んでもいなかったはずだ。はは、は。いったい俺は何を勘違いしていたんだろう。ここは俺の世界ではないんだ。俺の最悪がこの世界にも影響するわけがないんだ。はっ！　ざまあ！　何が警告だ！　ふんっ、『名探偵（バッドネーム）』、アンタの予測もここまで通用はしなかったようだな。結局誰

も死ななかった。そして、俺はこうして！　生きている！

それから。

生臭いことこの上ない『コーレア』の面々が、身体に浴びた血を落としたいとのことで、街の中央にある大浴場に向かうことにした。今回、海外のドッキリテレビ並みにエグイ悪戯を成功させたチーム『コーレア』だが、その悪戯のどこに真意があったのかは知らない。でも俺はどうでもよかった。俺はまだこの世界で生きていける。その事実が確かめられただけで、十分過ぎるほどに十全だった。やっぱり物語の最後は、めでたしで締めなくてはならない。俺は狂ったように笑いながら。クリスさんは「うむうむ」と何かに頷きながら。ラウルさんは臓物の臭いに顔をしかめながら。アンジェリカさんも同じく文句を垂れながら。バリーはベレー帽の調子を確かめながら。

俺達は湯屋までの道のりを、通行人に奇異の目で見られながら、歩き続けたのであった……ちゃんちゃん♪

なんてことは起こるはずもなく。

「ギャハ　ハハハハハハ
ハ　ハ　ハ
ハハ　ハハハハハハハハハハハハハハ
ハ　ハ　ハハハハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハハハ　ハハハハ　ハハハハ　ハハハ
ハハハハ！」

葡萄酒の樽を引っくり返したような地面の上で、手で目を覆いながら、品の欠片もない呵々大笑を繰り返すバリー。足元にはクリスさんだった物や、ラウルさんだった塊や、アンジェリカさんだった

元が、無造作に転がっている。誰も、生きていない。息をしていない。

「そうだよレイシ！　その顔が見たかった！」

ギャハハハハハ！　と狂気じみた笑みで、バリーは言った。

「絶望と失望とが入り混じり、驚愕に染まり尽くした顔！　希（のぞみ）も祈りもまるごと踏みにじられたようなその表情！　最高だ！　最高にハッピーだぜレイシいいいい！」

「……語尾は、やっぱキャラづけだったんだな」

クリスさん達のことについてはひとまず思考に入れないことにした俺は、この場の空気とはまるでそぐわない、まったく関係ないこと――つまり、バリーのキャラ崩壊について着目することにしてみた。

「んあ？　なんだよ。もう冷静モードかよ、ツマンネーなおい。スカしたお前の動揺した姿をもっと見物したかったのによー。あーあーツマンネツマンネー」

バリーは興が冷めたかのように、唇を尖らせた。ぶーぶーとブーイングまでやっている。ブー太郎かお前は。

「完璧キャラが壊れてんな」

「俺はどっちかってーと、役者よりも監督の方が性に合ってんだよ」

「なるほど、それは言えてる」

ここまでの舞台と、演出を築き上げたのには感服の至りである。ブラヴォーと賞賛の拍手を送りたい。ぱちぱち。

「チッ……気に食わねえな、その態度」

「……クリスさんも言ってただろ、常に磐石と冷静であれ、って」

本当のところは、思考回路と感情回路が見事にブッた切れているだけなんだけど。一見、冷静沈着なように見えるが、現在の俺は、感情で思考出来ない状態だ。もし必要とあれば、道行く人々を次々と虐殺出来る自信があるくらいだ。だから、今の俺に誰も話しかけないほうが良い。うっかり殺しちゃうかもしれないから。

「とりあえず、説明を求めてもいいのかな？」

順繰り一から説明していただきたい。ほら、トークタイムやるからさっさと喋れよ。

「しょうがねえなー。ま、一応は説明しといてやるかな。ほら、よく言う『冥土の土産に教えてやろう』ってやつだ」

「自ら死亡フラグ吐いてんじゃねーよ」

いったい何様なのかは知らないが、バリーは傲慢無礼な物言いで、トレードマークだったベレー帽を取ると、空中へ放り投げた。白いベレーは虚空に一瞬浮いたかと思うと、すぐに紅く火がついて、そのまま塵と化し、風の流れに乗って姿を消した。

「俺は……いや、我らは」

バリーが口を開くと同時に、どこからともなくぞろぞろと黒いの連中が現れ始めた。皆一様にして、どす黒いマントで身を包み、頭部は全てフードで隠れていて表情はよく見えない。俺がグリンダさんから貰ったこの豪奢な黒いフレアコートに比べ、彼らのマントには何の装飾も見受けられない為、無個性で、体格にもそう特徴もなく、バリーを中心とした大きな黒い塊のように思えた。

「我らは『邪教（サバクラク）』――『忠実なる神の贄（サクリファ）』」

バリーは前髪をかきあげ、二ヒィと満足そうに口端を持ち上げ、

「魔王再臨を願う者なり！」

高らかにそう叫んだ。

第四十三話　嘘は言ってません、本当のことを言わなかっただけです（後書き）

伏線回収その一。『邪教』。

Q嘘吐きは誰？　A作者。

バリーだけ監督の名前だったのは、ちょっとした伏線。裏で手を引いてたんですよーみたいな。ああ、色々とごめんなさい。

第四十四話　ハードルは高ければ高いほど、潜りやすい

「魔王……？」

俺が訝しげに聞き返すと、バリーはせせら笑うように答えた。

「そう。我らは邪教集団。魔王復活の為、健気に、謙虚にをモットーに日夜あくせく活動している、平和第一の宗教組織です」

あなたも是非、我らが神に忠誠を誓ってはいかが？　とキャッチフレーズのように言ってのけるバリーは、手を差し伸べて勧誘のポーズ（？）をとった。俺は唾を吐き捨て、その誘いを拒絶する。バリーは残念そうなフリをして肩を竦めた。

「……で、その邪教さんやらが、いったい何の目的でこんなことをした？」

クリスさん、アンジェリカさん、ラウルさんの三人を殺害し、ルイにあんな凝った招待状を持たせて、いったい何のつもりなのだ。

「だからさ、言っただろ？　我らが望みはただ一つ。それは魔王の復活であり、その後の世界を我らの《神》が支配し、今一度、我らの時代を創ること」

「それとこれの何の関係があるって言ってんだよ」

「一から解説しないと駄目か？　メンドイなあ。つまりさ、我らの神を復活させる為には、生贄が必要なわけ。分かる？　い、け、に、え。それもただの生贄じゃ駄目だ。豊潤な闇の魔力を持つ者じゃなければいけない。我らの神はグルメなんだよ。それで、我らは日々、闇の魔力を潜在的に抱える者を探すのだ。そんでその際に確認するのが、髪色と、瞳の色だ。魔力の性質は、その者の外部に自然と現れる傾向がある。故に、お前だレイシ」

すぅ、と俺を指差して、
「その漆黒の髪と、瞳！　我が魔王の贄とするに相応しい」
俺は再び動揺の渦に投げ込まれ、その騒擾が溢れ出るのを抑えるように、俺は少しだけ口元を押さえた。一気に雪崩れ込んできた情報の量に、正直、戸惑いを隠せない。だって、そうだろ？　最初の頃、イリアは俺に髪色と瞳の色を誤魔化してくれるような魔術を施してくれたはずだ。なのに、それが見破られた？　何故だ。分からない。俺は交差する記憶と情報の整理にてんてこ舞い。
「はっ、訳が分からないって顔してんなあ、レイシ。じゃあ、教えてやんよ」
はっとしてバリーの方を見つめると、先程までの彼の相違点に気づいた。
歯が、ギザギサを帯び、目が、怪しく深紅に煌々と光り、耳も、鋭利なほどに尖っていた。イメチェンどころの騒ぎではない。もうお前誰だよ。キャラ崩壊というか、作画崩壊レベルだよ。
「これだよ、これ」
バリーは手に握り締めていたソレを、俺に見せつけた。暗がりでよく分からない。何か、細い、糸の束ような、ソレ。
「お前の黒い髪の毛だよ、レイシ。分かるか？　これは前にここで一戦やらかした時に偶然見つけたものだ。あの時、あの場で、黒髪の奴なんて一人もいやしなかった。だから俺は不思議に思ったんだ。でもなあ、気づいちまったんだよ。お前のな、その髪色と瞳の色。どうにもこうにも《認識》出来ないってことにさ。どうだい！？
俺は《認識》出来ないということを、《認識》しちまったのさあ」
俺は、嘘だろ……と頭を掻き毟った。確かに、本体から切り取られた髪の毛自体は、認識拒否の対象ではないことは理解可能な領域だ。しかし、認識出来ないことを認識することなんて。どうにも矛盾が発生するはずだ。しかし、その疑問にはバリーがあっさりと答えてくれた。
「でもぶっちゃけ、今でもお前の髪色が何色だなんて認識出来ちゃ

いねーよ？」
「は……？」
「けど、お前にかかったその魔術も、『認識出来ないということを認識した』っていう前提条件があれば、こうやって――」
『解析開始（アナライズ）』。
とバリーが呟いてからすぐに、周りにいた黒マントの連中がざわっと揺れた。
「ほぅら、見事なまでの黒で、クロだ」
犯人扱いは止めて欲しいところだが、どうやら察するに、イリアがかけた魔術の効果が消えてしまったらしい。
「……それで、俺をどうするつもりだ」
「連行する。生憎、行き先は刑務所じゃなくて、『贄の祭壇』だけどな」
俺は。
そこで高らかに爆笑してやった。
意図的に、意識的に、感情とはなんら関係なく。抱腹絶倒の限りを尽くしたやった。
「なにが、そんなに可笑しいんだ？」
少々顔に青筋がビキビキと浮き始めているバリーが、問う。
「バリー……いやお前らは、明らかな勘違いをしている」
「勘違い……？」
バリーは訝しげに呟き返した。
「俺は単なる一般人だ。魔術も何も使えない、暴力だけがとりえの冴えないガキだ。そんな俺が闇の魔力ぅ？　面白過ぎて笑えない冗談だ。アメリカンジョークも真っ青だろうよ。なら、ここで一つ俺の秘密を明かすけどな、あの『転移』とかいう瞬間移動の魔術だけど、あれ、俺が使えてるんじゃなくて、ほらこの……ん、ほれ。このペンダントの恩恵なんだよ。俺が習得しているわけじゃない。バルゴさん辺りはなんか勘違いしてたけど。まったくもって俺は、何の変哲もないただの普通人なんだよ」

今度は反対に、バリーの方が腹を抱える番だった。
「ギャハッ、ギャハハギャッハハハハハ！　なんだなんだそんなことかよ。ビビらすんじゃねーよおい。んなもん初期の頃からとっくに知ってたわボケ。俺がさあ、お前を贄に選んだのは、単に髪色と瞳だけじゃねえよ。別に髪色と瞳が黒いからって、そいつの魔力の本質が闇とは限んねぇからな。だから俺達は、予め（あらかじめ）とある選定試験を行う。それがなんだか分かるか？」
「……」
俺が黙止を貫いていると、バリーは先刻やった、手を差し伸べるような勧誘のポーズの構えをとった。
「握手だよ、握手」
ニヤリ、と禍々しく微笑んで、
「なぁに。簡単な魔力探査さ。ある程度の鍛錬を積めば、才能のある奴なら大抵使うことが出来る術だ。それでレイシ、覚えてるか。バルゴ達の一件が終わり、酒場で飲み明かした翌日のこと。お前は俺を起き上がらせる為に手を貸してくれたよな。その時さ。俺がお前を選んだのは……」
バリーはそこで自分を抱き締めるように両肩を掴み、ぞくぞくと震え上がるように興奮した様子で、素晴らしい！　とつんざくような声で吼えた。
「なんて素晴らしい魔力なんだろうかって思ったよ！　油断していたらこちらが逆に飲み込まれると思ったほどだ！　何故自分の容姿に精神干渉系の魔術を施しているのか。最初は、容姿が容姿だけに過去に酷いことでもあったのだろうかと考えてみたのだが、いやはや早計だと思い知らされた！　これは、隠さずを得られないものだ。隠し通さなきゃいけないものであると。ああ、増援が到着するまでこんなにじれったく思ったことはなかったほどだ！　なあ、レイシ。お前は自身の潜在的な力に気づいていないのか？　だとしたら滑稽だな。お前自身は魔術が使えないと言っていたが、ならばお前に魔術を――――いや、庇護と守護を授けてくれた奴は、もっと滑稽で、

報われないな。何せ、これからお前は俺らに囚われ、我らが神の贄として捧げられるんだからな」

不運だなー、不憫だなーと嘲うバリーを、俺は強く睨みつけるだけしか叶わなかった。

「……少、年」

と。

今までバリーの足下で、反応がないただの屍のような役を演じていたクリスさんが、四肢を残らず分断しているにも関わらず、頭だけを動かして、俺を見据えた。わー不便そうだな、と俺は思ってもいないことを思ってみたりした。

「に、げ……ろ、少年」

「あ～もうクリスティーナさんったら、まーだ生きてたんですか？　本当、化物みたいな人ですね、あんたって人は。というか、あんたを仕留める為だけにこっちはいったい人員を何人割かれたと……もとい、裂かれたと思ってるですか。この化物が」

バリーが忌々しそうにクリスさんを見下し、背中に突き刺さっていた『ジュワユーズ』をゲームのコントローラーにあるカーソルのようにぐりぐりと掻き回してから、ズボッと勢いよく引き抜く。

「ああ、そういやまだ説明し切れてなかったけな。今回、レイシを手に入れるついでに、コイツらを始末した理由――――それは偏(ひとえ)に、この大剣が目的だったからだ。ってかおい知ってたか？　これ実は『聖剣』なんだぜ？　選ばれし者だけが使用することを許される……聖剣『ジュワユーズ』。元は北の大国が、古来より所有していたものらしいけど、何故だかこの化物が所持していた。理由は知らんが、まあ、どうでもいい。あとはあれ、アンジェリカ自慢の『パラドックスアポロン』。一応は『ハイバーン＝ネグラント』が遺(のこ)したオリジナルの一つだから、これも一緒に回収しようかと思ってたんだけど、戦闘中につい壊しちゃったんだよなあ。あーあ、まったく勿体無いことしたなあ」

至極残念そうに肩を落とすバリーだったが、その手に掴んだ『ジ

ユワユーズ』の切っ先を、天にへと向ける。
「少年……早、く……にげ、ろ。レイ、シ……君には、まだ……」
おそらくクリスさんにとって最期の言葉であったであろう呟きは、そこでバッサリと途切れた。バリーが、掲げた大剣をクリスさんの首に振り下ろしたからだった。石床を激しく叩き砕く音。蹴ったサッカーボールのようにクリスさんの首が、鮮血を撒き散らしながら、俺の傍らまでコロコロと転がってきた。只今、ゼロに等しく感情が完全に欠落している俺は、その光景をまるで映画のワンシーンでも鑑賞するかのように、無表情かつ無感動に見送った。
「これでまだ喋れるってんなら、俺は尻尾を巻いて逃げ出すぜ？」
ギャハハハハハ、と大して面白くもない冗談に自画自賛で笑い上げるバリー。ほら、周りの黒マントの人達だって怖いほど無言じゃないか。
俺はバリーの腹が捩れている隙に、クリスさんの頭部を拾い上げる。ボタボタと零れる液体が、服に黒い染みを作る。瞳孔は、悲しそうに見開かれたままだった。俺は静かにクリスさんの目蓋を下ろす。せっかくなので、キスなんかもしてみた。唇同士を重ね、まだ温かに滑る口内にまで舌を這わせてみたりして。猛烈な血の味に、咽かえりそうだった。
別に俺はネクロフィリアのような特殊な性癖は持っていないので、死体なんかに欲情や劣情を催したわけでもないのだけれど、何でだろう。ただ、何となくだ。うん。それしか言えない。しかしどうしても理由が欲しいというなら、ただ最後にクリスさんへお礼とお別れが言いたかっただけなのかもしれない。近くにラウルさんとアンジェリカさんの死骸があったら、俺は均しく彼らにも接吻を捧げていただろう。けれど、いかんせん。手元にはクリスさんの首だけしかなかったので、クリスさんにしか熱いベーゼをあげられなかったのだ。残念無念。
俺の突拍子もない行いに、流石のバリーも笑うのを止めて、若干引き気味の視線を俺に送っていた。うっわーやべー信じらんねーそ

れは流石にマジ引くわー、とでも言いたげな顔だ。
俺はクリスさんの首を丁寧に近くの長椅子に乗せると、愛でるように髪が顔にかからないように、髪型を整えてあげた。
さよなら、クリスさん。
短い間でしたが、お世話になりました。
感情とはいっさら無関係に、日本人気質な礼儀として、クリスさんだったものに微笑みかける。それが終わってから、改めてバリーと向き直った。
「お別れは済んだかよ」
バリーの、気味の悪いものでも扱うような目。ぞくぞくしちゃう。
「まあね」
我儘な望みを言えば、残りの二人にも挨拶したかったんだけど、折悪しく彼らがそこをどいてくれる気配はなかった。
では。
さて。
「ところでさ、バリーは何か忘れてはいやしないか？」
俺はこれ見よがしに胸元の首飾りを見せ付けた。
「俺にはこのペンダントがある。これがある限り、お前らが行動を起こす前に、俺は別の場所に移動する」
勝ち誇って俺が言ってみると、バリーは余裕満面の笑みで、、やってみろよ、と顎でしゃくった。俺はまさかと思いながら、ペンダントを握り、イリアの家を想像する。森と海に挟まれた、あのログハウスを。そして、跳べ！　と念じる。いつもならこれでぐにゃりと世界が捻じ曲がる感覚の後に、イメージした場に立っているはずなのに、しかし、俺は最初と変わらず退廃した教会の中にいた。
「びっくりどっきり種明かしー！　現在この教会には俺以外の魔術が使用できないようにする為の術式がセットされていマース。つまりここは、結界の内部ということなのデース」
そんなわけで一つゲームだ、とバリーは片目を瞑り、人差し指を俺に突きつけた。

「この術式が展開されてんのは、この教会の中だけだ。お前はここから外に出て、『転移』でも何でもして逃げられたらお前の勝ち。それよりも先に俺の魔術がお前を捕らえたら、俺の勝ち。どうだ、楽しそうだろ？」

ちなみに俺は勝てない勝負はしない主義だ、とバリーは偉そうに踏ん反り返った。

俺はケッと鼻で笑い、

「そういう余裕綽々で勝負事を吹っかける奴はな、大抵が負けフラグなんだよ」

「はーん？　せっかく後ろの連中には手出しさせないようにしてあげてたのによぉ？　そういうんだったら別に……」

「待て待て待て待て待て、別に受けないとは言っていないだろ。ゲーム？　いいだろう、受けてたってやる」

「……その瞬時に態度を裏返すスキルには感服だぜ、まったく」

バリーがオーバーな呆れた溜息を吐いている間に、俺は背後の出口までの距離を目視で測る。大体、十メートル前後。ロケットダッシュで飛び出せば、二秒弱で辿り着ける。だがバリーはそれ以上の速さで俺を襲えると言う。ということは、少なくとも二秒以内……つまり、見積もっても一秒ほどの時間で俺を捕まえられるということとか。でも相手がわざわざ与えてくれた千載一遇の機会を、ここで無駄にするわけにはいかない。一か八か、九死に一生か。七転八倒からの七転び八起きで、四苦八苦してでも三十六計逃げる他ないか。

「そんじゃ合図はこれにしよう」

不自然にならないよう、俺は懐から銅貨を一枚取り出すと、軽く指で弾いて、空中でキャッチした。バリーは、いいねえ、と上機嫌だ。狂った快楽主義者（ヘドニスト）め。

「銅貨を投げる。地面に落ちたら、それが合図だ」

「ギャハ、楽しくなってきた」

精々今の内に楽しんでろよカス。

俺はごく自然に必要のないカウントダウンを刻む。

「三……二……一……」

キーン、と親指で天井高く跳ね上がったコイン。バリーが不意にそちらに目を奪われた。

その時、既に俺は走り出していた。

馬鹿め。

ルールなんて知ったこっちゃないのだ。律儀に守りたきゃ勝手に守ってろ。俺は全力でそれを無視する。ハードルは、高ければ高いほどより潜りやすいのだ。常にルールの裏をかけ。純粋に生きるな。皮肉に二ヒれ。

たった一秒の短い時であろうと、そのたった一秒の時間稼ぎが奴にとっては致命的だ。このロスタイムが俺の命運を左右する。ざまあ。お前の攻撃がどんなに速かろうと、俺はもう教会の出入り口の前まで……。

「ギャハハハ」

背中に当たる、バリーの吹き出す声。ぞくり、と嫌な予感がした。

「言っただろ？　俺は、勝てない勝負はしない主義なんだ」

ふと、眼球だけ動かして下を覗くと、踏み締めた地面に怪しく光る複雑な記号の羅列があった。多分、これが術式とやらなんだろう。

なんて暢気に考察している場合でもなく。

「え」

鳩尾に、重い鉄球がめりこんだみたいな、感触。形のない風の塊のようなものが、天晴れなアッパーをボディに決めてくれた。胃液が、喉から込み上げ、惜しげもなく肺の空気と一緒にまとめて吐いた。

「ギャハッ、レイシがまともにルールに従うわけないって信じてたよ。だから、こういった罠も予め用意させてもらった」

バリーは横に一線、手を振ると、目前で開け放たれていた扉が、二つに閉じた。俺は宇宙空間に放り出されたように、息が上手に出来なくて、腹を抱えたままうずくまっていた。

「んじゃな、レイシ。短い付き合いだったぜ」

――――『暴風烈火（フレイムテンペスタ）』。

広げられたバリーの手の平から、螺旋状に炎の渦が生まれる。俺を飲み込まんと舌なめずりでもしているようだ。

「お前は大事な大事な羊ちゃんだ。だから殺しはしねえよ。まあ、生かしもしねえけど」

それって一番エグイやり方じゃないか。俺が最も得意とするやり方なので、十全に熟知している。

顔面が、焙（あぶ）られるような感覚。

紅蓮が、迫ってくる。

第四十四話　ハードルは高ければ高いほど、潜りやすい（後書き）

ちょうど五十話ぴったりで終わらせようと思ってたけど、無理っぽい。

第四十五話　正義の味方に、味方はいらない

まるで何かの生き物のように紅蓮に燃える渦は、俺を丸呑みにせんと肉迫してくる。俺は手で顔面を庇い、目と歯を食いしばる。これから訪れる苦痛に備える為の、悲しいほどに無駄な反抗。

しかし、いくら待ってもその艱難辛苦の痛みの到来はなかった。

「な、なんだこれはあああ！？」

バリーの驚愕する叫び。恐る恐る視界の仕切りを取り除くと、そこには摩訶不思議な光景が広がっていた。薄い光の膜が、俺を覆っていて、バリーの炎を防いでいた。

「ナースさんの……ブローチ……」

いつの間にか、胸元からブローチが外れていて、今や空中に独りでに白く輝きを放ちながら、浮かんでいた。

「糞ッこんなもの――――『解析開始（アナライズ）』！」

バリーは火炎放射を止め、今度は周りに何かの方程式のようなものをホロビジョンみたく展開させた。光る記号の配列が、バリーを中心にして、あちこちにふわふわと漂う。

「なっ……あ、『暗号解析（アナリスコード）』が……解読、不能！？　いや、違う……これは魔術でもなければ、魔法でもない……なんだ、なんなのだいったい！？」

「……グッジョブ、ナースさん」

やってくれましたね、マイエンジェル。想定していたのとは全然違うけど、何はともあれ全力で感謝です。

俺に与えられた恐らく最後のチャンス。この隙に目の前にある教会の扉に体当たり。ただの古臭い木製の扉だが、俺にとっては天国の門。そのまま倒れこむように外に出た。

苦しさもようやく意識の集中が出来るくらいには治まった。

さあ、イメージだ。

「させっか、よおお！！」

背中の方からバリーの怒声が聞こえた。チラッと刹那的に振り返ってみれば、バリーはあの『暗号解析（アナリスコード）』とかいう術を止めて、風と炎の波状攻撃でブローチのA～Tフィールドを必死にぶち抜こうとしていた。

よし、まだ大丈夫。心を静める。イメージだ。焦るな。集中しろ。

俺は気を落ち着け、ここぞとばかりに慎重さを優先させ、『転移（トランゼーション）』を発動させようとした。しかし、俺はどうにも慎重さ、用心深さといった言葉を謳いながら、きっとどこかで気を緩めていたのだろう。あのブローチから発生した聖なるバリアでミラーフォース的なものに、今唯一の安心と信頼を寄せていたのだ。

ピシリ、と。背後を守る壁がひび割れる音。油断したな、と俺を嘲うかのような響き。身体に残像のようなものがまとい始め、今こそ空間を飛び越えようとしていた俺の頬を、一陣の風がそよいだ。小さな亀裂の入ったバリアからの、微かな隙間風。

柔らかく頬を撫でていたはずの微風は、手の平を返したが如く、途端に爪をつき立て、スパッと赤い一線をほっぺたに咲かせた。たったそれだけのことだが。

集中が、途切れた。

だが、いかんせん。俺の術は既に発動していて、中途半端に行った『転移』は、俺をその場から上空十メートルほどの高さに移動させた。

当然、降下する。勿論、地面に叩きつけられる。左右の肺が入れ替わったかと思った。落下地点はまだ教会の敷地内。しかしまあ、よく生きていたものである。受身のとり方は、あの人の名前をちっ

とも覚えようとしない生臭坊主の師匠によって、徹底的に叩き込まれていたので、いたって大事はない。あ、嘘。やっぱある。頭部を守る為に、片腕を一本消費した。百八十度、へそを曲げたかのようにちゃんちゃら可笑しく屈折している。右腕は犠牲になったのだ。なんてふざけている場合でもない。

「……クソッたれ」

でも、大丈夫だ。腕が折れたくらいなんだ。痛くない。痛くないったら痛くないのだ。笑え。痛かったら笑え。痛みを嗤え。クリスさんみたく切り落とされたならまだしも、へし折れたくらいなんだというのだ。そうさ、立て。立ち上がれよ、俺の身体。よーしいいぞ、俺の足。お前はやれば出来る子だと前々から……。

ヒュウンッ、と。

「お？」

すてーん、と俺はあたかも軸足を失ってしまったかのように、前屈みに情けなくも倒れてしまった。あれ、何で、と思う暇もなく、その原因が判明した。何てことはない。前述の比喩の通り、左足の膝から下が綺麗に切断されていたのだ。あらら。俺から勝手に独立しようなんて、いけない左足だ。血が堰を切ったダムのように、溢れる。

「ギャハ……ギャハハ、ざ、ざまああっ」

少し離れた位置に、息を盛んに切らしているバリーの姿があった。あの障壁を打ち破るのに相当の苦労したと思われる。手に持った魔導書が怪しく文字を光らせていた。

「お前の、その『転移（トランゼーション）』の魔術の弱点は、意識の集中が出来なければ正常には発動しないことだ！　足を切り落とした痛みに、お前はもう集中どころか、意識さえまともに操ることは出来まい！」

確かに、俺の脳内はまさに今、『痛み』というキーワードで支配されている。けれど、それと同時に俺の中では、ついに五感と感情を結ぶ回路さえショートしてしまったらしい。通常なら、ここであまりの激痛に叫び悶えることでもしたらいいのだけれど、今の俺は

それを言語化出来ないばかりか、発声で表現すら出来ないでいる。この苦痛に、足が片方切り落とされた事実にも、まったく恐怖や、嫌悪といった感情を抱けないでいる。要するに、『痛み』を外部からの刺激とでしか認識出来ない状態で、限りなく人間味を廃した、合理的なコンピューターに近い脳内構造となりつつあった。相変わらず、思考は情報という形だけの『痛み』でいっぱいだが、それを嫌とも、良いとも思えない。つまり、何がどうとも思えない。ただ、思考思索するには幾らか適さない状態だ、とだけ機械的に考察し、結論づけた。

「これで最後の最後だ。死ねやレイシいいい！」

バリーが、地面すら抉る風の衝撃波を放つ。カマイタチ、と俺は冷静に判断した。衝撃波と言うより、真空波、かな。どうやら、俺の大切な黄金の左を奪い取ったのもあの技か、と事務的に推察。加えて、クリスさんの四肢をプラスチック人形のパーツのようにバラしたのもあれだと断定。

温もりや暖かさの一切を取り除いた、第三フェーズに達した俺ではあるが、やはり生存本能的に、生きてみたいと、思うのだ。

だから、逃げる。

前方三十メートル。視界に映った場所へ、よつんばの姿勢のまま、がむしゃらに『転移』する。目視で確認出来た位置になら、イメージする必要はないから、移動するという意思だけでことは足りる。まさに死に物狂い。俺が先程までいた地点が、風の衝撃と斬撃により、土煙が立ち込める。俺はその粉塵に紛れて、さらに遠くへ跳ぼうとする。

「追え！　回りこめ！　だが手は出すなよ！　奴はもう瀕死だ、確実に生かしたまま捕らえろ！」

バリーが黒マント連中に指示を出し、俺を捕獲しようとする。数は三十ほど。対して俺は一人。彼らは狩人。俺は可愛い獲物。まったくもって冗談じゃない。片足ないからバランスがとれない。不便だ。というかバイバイ、俺の左足。縁が合ったらまた会おう。さー

て、『転移』だ。跳べ。跳ぶ。跳んで。連続投球で、跳び続けた。地べたへ、空中へ、街道へ、屋根の上へ、誤って民家へ。とあるお宅のガラスの窓に突っ込んだ。柔らかな絨毯の上でローリング。ご婦人の悲鳴。毎度お騒がせしてます。すぐさま反対側の窓からダイブ。そして、『転移』。街の屋根から屋根へと飛び移る。月が、不気味なほどに明るい。視線の下では、日が沈んでからが本番の酒場や売春宿なんかの灯りが街道を照らす。あ、『マランディの酒場』が眼下を通り過ぎた。やばいな。もっと遠くへ離れなきゃ。次に飛び移る屋根が見えた。今度はあそこへ。と、その地点に黒服の奴らが回りこんでいた。俺は舌打ちをして、急遽、路線変更。視界の隅にギリギリ映った三角屋根へと移動する。何だか、片足だけで着地するのも疲れてきたな。いや、これは？　身体全体がダルくなってきた。むう、出血し過ぎた。血が足りない。そろそろ左脚の止血をしたいのだけれど、今は逃走することだけに専念しなければならない。だから、もうちょっとだけがんばって、俺の身体。ドバドバと絶好調に流血している左足も、どうかお願い。

「……っ！」

　足場とする建築物の屋根が途絶えた、と思ったらそこは、いつかの昼下がりにルイと戯れた、あの大広場だった。中心にある巨大な噴水が、寂しげに水を躍らせていた。足場、足場、とどうにか、大広場の一番端に、遠く時計塔らしきシルエットが目視出来た。早く、地表に落ちる前に、今度は、あそこへ。

　しかし、俺がそこへ辿り着くことはなかった。あれー？　と疑問符を掲げた時には、既に殺人的に固い石畳の地面に、滑稽な大の字を描いていた。

「……な、なんで……」

「魔力切れだってのヴァーカ。ようやく大人しくなりやがったなこの野郎」

　手下と共に、俺に追いついてきたバリーが、静かに俺の前に着地した。

魔力切れ。そうか、単に出血とかの問題でもなかったわけだ。あ。やべー、気づいたら身体がすっかり動かないや。自由がきくのは、口と、眼球の動きだけ。それと、落下した衝撃で、後頭部が割れたらしい。ドロリとした血液が、うなじから伝わる。

「鬼ごっこは、これで終わりだ、レイシ」

バリーは、もう笑わない。冷酷だけを表情に浮かべて、俺を見下ろす。

「……なあ、バリー。一つ、聞いていいか」

「駄目だ。お前の口八丁は、危険だ」

「まあ、そう言うなよ……お前はさ、後悔とか、本当にしてないのか？　『コーレア』にいたお前は……例え偽りの仮面を被っていたとしても、心底、楽しそうに見えたのは、俺の目玉が腐ってるからか？　ほんの少しも、名残惜しい気はしなかったのか？　俺の勘違いじゃなかったとしたら……」

「おい、こいつを縛れ」

「……最後まで聞けって。だからさ、お前の本当の気持ちを教えてくれよ。それが聞けたら、俺は満足なんだ」

「……」

「なあ。バリー」

「……『コーレア』は、俺がこの街で活動する為の隠れ蓑だったに過ぎない。半年前、とある一件で偶然スカウトされ、入隊した。ギルドの上層部のチームと組めるのは、色々と都合がいいと思ったからだ。理想の為なら、例え仲間だったとしても切り捨てる。そこに私情や事情は挟まない」

「……そっか」

やっぱり、『仲間』だと、思ってたんだ。なら、いいや。お前が役者を演じ続けていたに過ぎなかったのだとしても、あの一緒に送った日々が、嘘でないのなら。

俺は、十分に満足だ。

チーム『コーレア』と共に過ごした期間は、二ヶ月にも満たない

短いものだったけど、それでも楽しかった。クリスさんには説教され、ラウルさんには色々と励まして貰い、アンジェリカさんには愚痴と晩酌を強制され、バリーお前にも――――。

「最後にさ、頼みがあるんだ。遺言を……言いたいんだ」

「…………」

「いいだろ？　後生の願いだ。格好良くさ、サイゴを飾らせてくれよ」

「…………いいだろう」

バリーは頷くと、さっさとやれとばかりに顎でしゃくる。

俺は夜空を見上げながら、二回だけ深呼吸。意識が遠のく前に、さっさと終わらせてしまおう。正義の味方に、味方はいらない。それ故に、俺は正義の味方（ヒーロー）には到底なれなかった。まあ、向いてもいなかったけれど。それでも正直、不安は残る。だが、彼女の言葉を信じてみようと思う。

さあ、叫べ。

「『イリアちゃん超可愛い』――――――――――――――――――――――――――！！」

『起動呪文（オープンスペル）』、承認。

突如として降り注ぐ雷光と、轟音。周囲に閃光を放ちながら、一人の少女が舞い降りた。宵闇と似た濃紺の長髪。滑らかにはためくローブからは、白く細い裸足の素足が覗いていた。振り向き様の流し目を俺にくれる。

「まったく帰りが遅いと思ってら、何やってるの、レイシ？」

「……はは」

絶対来ると信じてたよ、ヒーロー。

「それとそこっ、噴水の隅でこそこそしているグリンダ。隠れてないで出てきなさい」

イリアは噴水に視線だけを向けて、言い放つ。すると、グリンダさんの姿がおずおずと現れた。まさしく絵に描いたような魔女っぽい出で立ち。先っぽがくたびれたトンガリ帽子。胸部が大きく開いた黒のノースリーブと、肩を剥き出しにした白いオーバーコートを

羽織い、腿まで覆うゴツゴツとしたロングブーツにミニスカとを完備した甘美。ブロンドの金髪は、今日も優雅に波を打っていた。

「あ、あはは～バレてたのねー」

「この街で起きてることで、あんたが知らないわけないでしょ」

「……え、えへへ、ごめんね、レイシくんー。私が出てっても、どうにかなりそうな数じゃなかったしー。黙って静観してたのー」

許してね～、と手をすり合わせて謝罪をするグリンダさん。ああ、惜しいな。あともうちょっとだけ近づいてくれたら、スカートの中身が拝めるのに。

「新手だと……いったい何者だ」

バリーが、この上なく顔を歪めた。

イリアは面倒臭そうに黙っていたが、

「私は一応、こういう者なんだけどねー」

とグリンダさんだけは、手首に装着したブレスレットを見せ付けた。十字架を逆さまにしたものが付属された、銀色のチェーン。

「ギャ、ギャハハハハ……そうか、そういうことか。裏切りの逆十字……神に下った『教会』の犬めがあああああ！」

「狼になってお腹を空かせるより、犬になってご飯貰えた方が楽ですものー」

鼻息を荒くさせて喚くバリーに対して、しれっとした態度のグリンダさん。

「――総員、放てえええええ！」

明らかに冷静さを捨てたバリーの怒号。そして黒マント全員からの火炎球が、俺ら三人を囲んだ。

「五月蝿いわね」

イリアがチラリと煩わしそうに一瞥した。それだけで、俺らに放たれた諸々の攻撃は、全て弾けたように消え失せた。

「グリンダ。一応、誰も来ないように結界張っといて」

「もう張ってるー」

そしてイリアがタンッと足でタップを踏んだかと思うと、月光に

照らされ伸びたイリアの小さな影が、揺らめくように肥大し、それは次第に三次元へと具象化した。現実へと形を成した陰影は、何十本とある触手へと変わり、黒マントの彼らへと襲い掛かる。

慈悲も、容赦も、同情するほどに絶無だった。

悲鳴と絶命が木霊する惨状。影は、剣、槌、槍などの様々な凶器の形態をとり、次々と彼らを屠っていく。抵抗する暇もなく。いや、必死の抵抗を努力した者も、あえなく均等に貫き、切り裂き、押し潰し、喰らっていく。まさしく、血の雨が降るようだった。

「糞がッ――――！」

唯一、バリーだけが回避と逃亡の末に暴風と豪炎の障壁で防いでいたが、それも時間の問題で、空しく防御壁は突き崩された。

「あ、『解析開始（アナライズ）』――ッ！」

がむしゃらにバリーが片手を前に出す。影はバリーの手に衝突し、消滅していくように分解されていくが、

「こ、この魔力は――――演算が、間に合わ……っ！？」

ついには影の勢いがバリーを押し切った。無数に細く分裂した影は、グサグサとバリーの身体中を貫き、裁縫道具の中にある針山を連想させる体をなした。影に縫われたバリーはそのまま、いつか俺がやられたように、無理矢理キリストの如く磔（はりつけ）にされた。ゲボォと血の塊を吐くバリーに、イリアはゆっくりと近づいてく。三十人近くいたバリーの部下は、全員残らずイリアの手によって皆殺しにされていて、石畳が、綺麗に紅く染まっていた。

「邪教……こんなところにもいたのね。グリンダ、これは『教会』に所属するあなたの怠慢よ」

「もー悪かったわよー。《神に誓って》もう二度とこんなヘマしないってばー」

と言いつつも、グリンダさんは俺のもとに寄ってくると、何と治療に取り掛かり始めた。彼女は淡く両の手を光らすと、俺の半分にカットされた左脚にかざした。驚くべきことに、彼女の掌（てのひら）が左脚にかざされた途端、出血がぴたりと止まった。と同時に、『痛み』と

いう大量の感覚情報も、俺の脳内からすっきりと霧散し、幾らかまともに考えることが可能になった。

「……お、お前は、ま、まさか……」

「もう、喋らなくていいわ」

イリアが、バリーの頬に手を伸ばした――――瞬間には、バリーの下顎が丸ごと焼失していた。ショベルカーに抉られた砂山のような、バリーの顔は、まるで原形が保たれていなかった。焼け焦げたような臭い湯気がバリーの削りとられた部分からジュウウウッと音を立てていた。昔、保険の教科書で見た、人体の断面図の一節みたいだった。

「さっきの『暗号解析（アナリスコード）』で、私の何が分かったかは知らないけど、あなたに、もう用はないわ」

ガタガタと震える瞳から、一対の涙が落ちた。もはや上半分だけとなった顔のバリーからは、うまくその心境を窺うことは難しい。あまりの恐怖からだと考るのが普通だろうが、しかし、バリーの震える瞳は、どこか無上の歓喜に満ちているようにも見えた。

「フゴォォッ、フガゴォオッ」

バリーは、舌を含んだ下顎ごと消失しているというのに、イリアに何かを訴えようとしている。

「何を言っているのか、分からないわ」

イリアが影を操り、バリーを地に膝を着けさせると、そっと頭に手を置いた。その様は、幼い姫に忠誠を誓う臣下のようでもあった。

しかし、その一瞬だけで、バリーの身体は衣服だけを残して灰と化した。所在無さげなバリーの服が、脱力したように萎（しぼ）み、人型を作っている灰燼も、それが本当にバリーだったものなのか、疑わしくなってきたくらいだった。

「……ふーん。流石のイリアの手にかかれば、あっけないものねー。そういやレイシくんの魔力の本質が闇とか言ってたけど、そんなの当たり前なのにねー。だって、レイシくんはイリアの……」

「グリンダ」

イリアが、咎めるように鋭くグリンダさんの名を呼ぶ。
「……おっとーこれはお喋りだったかしらー」
おほほほー、と俺の方をチラ見してから、口に手を当て笑うマネをするグリンダさん。いやあ、それにしても、けしからんおっぱいですな。だが残念ながら、俺はどちらかと言えば貧乳好きなので、グリンダさんはタイプではないのです、と現在の状況とまったく関係ないことに思いを巡らせてみたり。
「レイシ」
イリアが、急に気が抜けたかのように、フラフラとした覚束ない足取りで、俺が力なく倒れているところまで近寄ってきた。
「イリア、フラフラしてるけど、大丈夫か」
「ちょっと、疲れただけよ……というか、今そんなことが言える状態？　大丈夫か、はこっちの台詞よ」
「はは、確かに」
「まったくよもう……けど、生きててよかった」
「イリアのおかげだ。でもまさか、本当に飛んでくるとは思わなかった」
「レイシもレイシでよく覚えてたわね。冗談だと思ってた？」
「半分、ね」
「それでも、よく唱えてくれたわ。緊急用の、『強制召喚術式（ダイレクトサモン）』。あなたにもしもの時の為にと思って、仕込んどいて正解だったわ」
「だが、『起動呪文（アクセスワード）』についてはどうかと思うぞ？」
あら、素敵な響きじゃない？　とイリアは俺に顔を近づけた。
「痛む？」
「……いや、グリンダさんのおかげで、痛みはない」
「……そう」
イリアが、改めて俺の折れたままの腕と、分断された左脚を覗き込む。別にイリアが痛いわけでもないだろうに、イリアは激痛に苦悶するように顔をしかめた。
「私は、痛いわ」

「……ごめん」
「……別に、謝って欲しいわけじゃないの」
いつかのやりとりのような再現を、俺達は繰り返した。
イリアに、無用な殺戮を押し付けてしまった俺は、とことん人間として終わってしまったのだろう。自らの生存を優先させてしまったが為に、意地汚く生にしがみついてしまったが故に、今回も多くの命を犠牲にした。ここで感情という要素がなくて、良かった。今はただ、その現実だけを無味無臭なデータとして受け止められる。だが、反動がどう出るか心配だな。
なんて。
俺は情けないほどに子供のようで。
イリアは優しいくらいに大人だった。
どっちが子供か分かりゃしないのなら、いい加減にはっきりしたらどうかと、俺は非常に不甲斐なくなって、不意に涙腺が緩んでしまった。勘違いしないで欲しいのだが、これも無論、感情とは無関係だ。今の俺は、嬉しいとも悲しいとも感じない、果てしなくロボットに等しいハートを所有している。だから、電池が切れそうな機械が求めることはただ一つ。新しいエネルギーの供給か、次回の起動までひっそりと休んで充電することだ。
そういうわけで、俺は眠る。
そして次に目を開ける頃には、世界が変わらずに廻っていることをひたすらに祈ろう。イリアから乱暴に起こしてもらおう。全てが全て、悪夢だったのだと願うことにしよう。
それじゃあ、おやすみ。
良い夢を。

第四十五話　正義の味方に、味方はいらない（後書き）

Q『魔王の息子』ってどんな話？
Aイメージしろ

Qタイトルの魔王の息子っていつ出てくるの？
Aイメージしろ

Q多くの読者から読み難い、読み辛い、読めない、とかって批評があるけど、そこんとこ作者はどう思ってんの？
Aイメージしろ。

Qああ分かった！　作者はきっと馬鹿なんだね！
Aお前の勝手なイメージを押し付けるな！

どうも、蝉です。
なんというイリア無双。グリンダさん再登場。バリーよ、さらば。
というわけで、第四十五話でした。色々な伏線を回収した回になりました。加えて、新たな伏線を貼り付けた回でもあります。
イリアちゃん超可愛いー。
→をタイトルにしようかなと思ったくらいです。まさかの第八話のあれがフラグだったとは作者にも予測不能でした。

長いね！　うん、長い。八千文字超えたしね。もうちょっと何とか出来なかったのか、と試行錯誤してみて、大幅に削った部分もあったのだけれど、この調子で。
関係ないですが、この話を執筆中、ずっとマキシムザホルモン聴いてました。テンション上げる為に。

次回予告。
次回、サラサの章の終わりです。エピローグ的に終わろうかと。
その後のレイシの状態については……イメージしろ！
では、また次話にて。

感想絶賛お待ちしております。

第四十六話　弱さを認められる強さ

「彼、気を失ったわ」

血と肉が散乱するこの悲惨な現状の中、安らかに目蓋を下ろした澪士の顔を覗き込んだグリンダが、言う。

「グリンダ、多分まだ何人か息があると思うから、死ぬ前に引き出せるだけ情報引き出してちょうだい」

イリアは視線を倒れたままの澪士からグリンダに向けて、命令口調で言う。「人遣いあらいー」と文句を垂れながら、グリンダは手近にいた、今にも事切れそうな呼吸をしている男の眉間に、手を当てた。

しばらくして。

「……えー！？　ちょっと、あらあら何なにぃー！　やだ嘘でしょー！」

「どうしたの？」

「――――『恐慌』の魔王が、なんか復活しちゃったってー」

イリアが、驚きに目を見開く。

「あ、でもでもー。まだ完全じゃないらしいわよー。わーどうしようかなー。今からでも魔王側に寝返ろうかなー」

うーん、しきりに唸って悩んでいるグリンダを尻目に、イリアは眉根に溝を作り、不快そうに自らの推察を反芻させる。

「そう……『転生』の為の依代（よりしろ）がついに完成したってわけね……それを生成する為にいったいどれだけの犠牲を……いえ、それよりも奴らは今、魔王に与える餌を集めているってところかしら……だとしたら、邪教の活動も次第に表舞台に顔を出してくる――――

まさか、ブルートアイゼン側に邪教が暗躍しているってあの噂……
……いずれにせよ、由々しき事態だわ」
イリアは煩悶するように唇を噛んだ。これが業というものか、と。
「ねーねーイリアー、私どうしようかなー。司教階級の首をいくつかお土産にすれば魔王側に入れてくれるかなー？」
イリアの重苦しい空気とは打って変わって、グリンダは呆れるほどにお気楽な調子だった。
「グリンダぁ？」
ギロリ、とイリアはグリンダを冷たく睨みつける。
「う……じょ、冗談よ、冗談。や、やーね、そんな怖い目しないでよー」
豊満に尽きるグラマラスなボディーを持ち、大人の魅力を存分に振りまくグリンダが、見ため十歳前後の幼い少女であるイリアに圧倒されている図は、何ともちぐはぐな印象だった。
「……まあいいわ。それと、グリンダ。今回他に被害者はいた？」
「ああ、そうそう。言うの忘れてたわー。クリスティーナ＝レイブンハート。ラウル＝ラルクス。アンジェリカ＝デルターの三人が死んだわ。私が察したときには、もう殺されてた」
「ああやっぱり、『コーレア』のメンバーも、か……まさか、Sランカーたる彼女までもがね……これも《最強のジレンマ》、か」
最強とは常に孤高であらねばならない、とイリアは偏（ひとえ）にそう思っている。守るべき物、守りたい者、その他諸々を抱えた時、突き詰めた強さとは、一周回って最弱へと変貌する。
クリスティーナ＝レイブンハート。彼女は間違いなく最強であった。セレン――否、このリブラル国随一の強者であっただろう。しかし、最強が故に内包してしまった矛盾。その弱さ。彼女の場合、それが『仲間（コーレア）』だった。コーレアの信条は、信頼と結束。すなわち、それこそがクリスの弱点だった。クリスが事あるごとに冷静さを謳っていたのは、まさしくそれが彼女に一番欠落していたものだった

からだ。だからこそ、彼女は周りの者に諭すのと同時に、自分自身にも言い聞かせていた言葉だったのだ。

信頼と結束。仲間というファクター。それが突き崩された時、コーレアも同じく崩壊したのだろう。裏切られたという動揺。思考の追いつかない焦燥。いくらクリスが最強を誇るSランカーだとしても、指で突かれれば、ドミノのようにあっけない。もしもバリーが正面から挑んでいたら、クリスは決して敗北の二文字は刻まなかったはずだ。力の差は、歴然とクリスの方が勝っていたのだ。

最強のジレンマ。

イリアが哀れみを込めて呟いたのは、つまりそういうことだった。

「でもさー、今回の件は流石に酷いわよー？　どうすんのイリアー？」

「この街全体に精神干渉でもかければいいじゃない、っていっても、支配人（ギルドマスター）辺りには多分機能しないだろうから、そこは私が話を通しておくわ」

「えーでもそれってけっこう協定違反じゃー」

「そのことも含めて、私が話しとく」

そこで不意にイリアは、最初から澪士自身にではなく、協定や条約を無視してでも、街全体に精神干渉を施行していれば良かったのではないか、という考えに至り、そしてすぐに首を振った。街単位で及ぶ規模の魔術となれば、必ずどこかにボロが出て、情報が漏洩する。だとしたら、どちらにせよ澪士は今宵のような悲劇に辿り着く因果や運命であったとでも言うのだろうか。

「……違う」

断じて違う。

自分がもっと気をつけれいれば。舞い降りたひと時の平穏に気を緩め、油断などしていなければ。これは、自分の失態で、失敗だ。邪教の真意や、その目的。曖昧に伏せておかないで、包み隠さず全てを伝えておけばよかったのだ。己の過去も、含めて全部。ああ、そうすれば、そうすれば、そうすれば……。

なんて、後悔はいつだって残酷に遅いものだ。あったかもしれない『もしも』の仮定ほど、虚しいものはない。

ぐっと拳を握るイリアは、唇を噛む力をより一層に強めた。

「私も『教会』からはお咎め受けたくないしー、この一件の隠蔽には賛成だけどー、この死体の山とかはどうするー？」

グリンダは、辺り一面に拡散する血溜まりと肉塊を指差す。まだ軽く息のある者もいるが、もはや等しくただの肉切れとして見做されているようだった。

「塵は塵に、灰は灰に」

イリアはそう言って、片方の手の平にソフトボールサイズの炎を灯す。

「そうでしょ？」

炎の明かりに不気味な陰りを演出したイリアが、驚くほどに平淡な声音を出した。

「それもそうねー」

同じくグリンダも、両手に揺らめく火炎を生じさせた。

敵はいったいどこにいて。

自分は今まで何と闘っていた？

サラサは絶えず解答の出ない自問をひたすらに繰り返していた。

ひたすらに、飽きもせず。

図書館の二階の角にある、サラサの部屋。一応は貴族らしい豪奢な内装と、それなりの広さ。天蓋つきの大きなベッドに、ルイの矮躯が小さく横たわっている。その傍らで、サラサは猫足の椅子に腰を下ろし、ルイの寝顔を見つめていた。

ルイは上半身の服を脱がされ、グルグルと胴体全てにわたって包帯が巻かれていた。この処置はラインデルの手によるもので、何故だがその治療の過程は自分には見せてくれなかったが。

「マリー……あなたの子は、恐ろしいほどあなたにそっくりね」

勢い余ってつい絞め殺したくなる――――なんて考えは、今更沸き起こるはずもなかったが。

マリー＝セルカークレックス。ルイの母親の名であり、サラサが幼い頃、最も親しくしていたメイドの名でもある。

敵。

家族が崩壊した原因。自分が現在の状況に陥ってしまった要因。サラサはずっと彼女のことを敵として認識してきた。

「……でも、マリー。あなたはもうこの世には、いないのね」

先程、ラインデルからその事実が伝えられ、サラサは自分が酷いショックを受けていることに気づいた。敵。彼女は敵。自分を苦しめ、母を狂わせ、父を罪を背負わせた、敵。

しかし、彼女自身は、果たしてそのようなことを望んでいたのだろうか。いや、違う。彼女はそんなことなど微塵も願ってはいなかっただろうし、求めてすらいなかっただろう。彼女には敵意も悪意も害意も邪意もなかった。ただ純粋な好意と懇意をもって、かつてのサラサに接してくれた。サラサもマリーが好きだった。

だから、裏切られたという思いも、一際鋭くサラサの心を抉った。憎かったのではない。本当は悲しかった。

絶望と失望が一緒くたになって襲いかかり、サラサの心を貪ろうとした。従ってサラサは、悲壮に暮れる自分を見捨て、憎悪に燃える自己を選んだ。悲しみを怒りに、転換させた。折れそうな心の支柱を奮え立たせるように。

憎しみは無かったが、憎むことにした。
悲しかったが、怒ることにした。
全ては、か弱い少女の自己防衛に過ぎなかったのだ。
（……ああ、そうか）
敵なんて最初からいなくて。
あたしはただ、戦わずに逃げていただけだったんだ。
悲痛に落ちていくのは、何が何でも避けたかった。それは、母親のように気が触れていくことを、何よりも怖れたから。近い未来の自身の姿を、震えが止まらぬほどに恐怖したからだ。
しかし実際は、幼子の地団駄にも及ばない、闘争からの逃走。
「……くだらないわね」
手品のタネを知ってしまうような、あっけなさ。箱を開けたら、何てことない。貧弱で脆弱な、くだらない妄想に身をやつした自分の姿が、そこにはあった。
「人間的に弱いのは、あたしも母様と同じってことね……」
ただ、ベクトルの向きが違ったというだけ。本質はまったく変わらない。澪士の言った言葉が思い出される。

――――君はくだらない臆病者で、あられもない自虐者だ。

まさしく、その通りである。
（レイシ。あなたは、いったいどこいったの。この子の怪我と関係がるところにいるの？　危険な、ところにいるとでもいうの）
ねえ、レイシ。
「……ぅうっ」
苦しげに呻く、ルイの声。ベッドの上で悶えるように身体を少しくねらせてから、ルイは薄っすらと目を覚ました。ぼやけた瞳で、ぼぅと周囲に視線だけを巡らして、そばで膝に手を置いて緊張するように座っているサラサと目が合う。
ルイは何度かぱちぱちと瞬きをして、鏡を始めて見た猫のように

不思議そうな顔をした。だが次第に驚愕していって、目を見張っていく。

「あっ、ああぅっ……ああ」

慌てて上半身を起こし、背中の傷に障ったのか、苦悶の表情を浮かべるルイ。

「だ、駄目よ、まだ寝てな、きゃ」

たどたどしい言い方で、サラサはルイを再び寝台に寝かせた。

しばし、気まずい雰囲気が互いの間に流れる。

正直、混乱している。どう接していいのか分からない。自分は、この子を拒絶した。それがこの期に及んで、優しくしようなどと、おこがましいにも程がある。

ルイも具合が悪そうに目線をあちこちに移動させながら、口を閉ざしている。

自分がやるべきことは、初めから一つと決まっていた。

「……ご、ご、ご」

サラサは迷いを捨て去り、その言葉を喉からだそうとした。言えるだろうか。大丈夫だろうか。否、既に、決めたのだ。

もう、逃げはしないと。

「――ご、ごめんなさい」

サラサは頭を下げた。ルイはまたも驚嘆した顔で、サラサを見返した。

「……あなたに、酷いことを言った。酷いことも、した。許して欲しいとまでは、望まない。あたしを、恨んでくれてもいい。憎んでくれたっていい。あたしは、ずっとあなたにそれと同じことをしていた。いえ、思い込もうとしていた。あなたが悪いわけでもないのに、あたしはあなたを悪役にしてきた。愚かなことだったと思う。自分でもどうしようもないほどに――――」

サラサはそこで言葉を切る。ぎゅっと力を込めた膝の上に置いた手の甲に、ぽたぽたと、涙が落ちていた。淀まず濁らずスムーズに話せていたのとは裏腹に、サラサの顔はぐしゃぐしゃに泣き崩れて

いた。ごめんなさい、ごめんなさい、と嗚咽を零すサラサは眼鏡を取り外して、堰を切った涙の奔流を精一杯に塞き止めようとしていた。

「……だから、だからっ、ま、まだあなたが、あたしのことをっ、あ……《姉》と呼んでくれたら、あたしは……」

「姉さん」

サラサは、思わず声を失ってルイを見た。知らぬうちに、ルイの頬にも一筋の雫が伝っていた。

「許して、貰えるのなら」

ああ。

どうして。

許して貰うのは、自分の方だというのに。

ああ、これで救われたとでもいうのか。救い難い、この愚かな自分が。

ついに嗚咽は本格的に止まらなくなり、泣き声は、恥も外聞もなく部屋中に反響した。困ったな。もしかしたら、周辺近所にも届いていたかもしれない。情けないな、《弟(ルイ)》が見ているというのに。もっとしっかりしなきゃいけないのに。まったく。女々しいったらありゃしない。せめて涙ぐらい抑えられたらいいのだけれど。

本当、困った。

ぱちり、と目蓋を開ける。寝覚めはよく、意識が覚醒してくるのを待つ必要もなかった。見知った天井。上体をむくりと持ち上げる。住み慣れたイリアの家。ほぼ四角形に近い一部屋。丸太を積み上げたような壁。その半分が、天井まで届く古めかしい書棚で埋め尽くされている。テーブルと二脚の無骨な木製の椅子。釣り下がるランプは一つ。しかし窓からは目に痛い眩しい朝の光が差し込んでいたので、ランプの出番はない。隣のベッドに視線を移せば、イリアが規則正しい寝息を立てていた。

俺はぼんやりと情報の整理に励む。その道程で、膝から下をカッティングされていたはずの左足が、元通り存在していることに気づく。見事に折れていたはずの右腕も、多少の違和感と痛みはあるが、おおむね完治していた。

「……」

ようやく今までの記憶をあまねく全てにわたって整頓した俺は、目やにを一度こすってから、静かに深呼吸を一つ。

そして、緩やかに発狂した。

第四十六話　弱さを認められる強さ（後書き）

キレイはキタナイ。強いは弱い。
クリスの、最強が故の弱さ。サラサの、弱さ故の愚かしさ。
人間が抱えうるべき『弱さ』の部分。突き詰めれば逆にそれは強さともとらえられ、その反対もまたしかり。つまりは表裏一体の存在であります。今回は、そんなお話でした。今回のタイトルも、妙に捻くれたものではなく、あえてまっすぐなものにしてみました。
さて次話、今度は主人公澪士の《弱さ》について、話を進めていきます。

というわけで、蝉です。
サラサの章、これにて終幕でございます。
そして次回、最終章。イリアのお話です。澪士、崩壊。

批評酷評ゼヒトモカモーンなので、感想お待ちしております。

やらしい宣伝。作者のもう一方の作品、『ウソイカ』もよろしくです。

ちなみに、ルイと、ルイの母親の元ネタ。
ルイ１３世⇒の母親が、マリー・ド・メディシス。

第四十七話　一＋一が、必ずしも二になるとは限らない

――――あの惨劇から、かれこれ一ヶ月が経とうとしていた。

季節は知らぬ間に秋へと踏み込み、吹き荒ぶ潮風にも、若干肌を刺すような寒さが伴っていた。

鬱蒼とした『背徳の森』をバックに控え、波が届かない程度の高所と距離を置いた場所に、ポツンと存在する丸太組みの小さな家。時折、上空から浮き島が覆い被さるような影を落とすが、天気は果てしなく快晴であった。突き抜けるような青空に、さんさんと輝く二つの太陽。異国情緒溢れるログハウスの軒先には、連なる洗濯物の群れが気持ち良さそうにはためいていた。その中で際立って大きく波を打つシーツを干し終わったイリアは、徒労の息を吐き、満足げに一回頷いてから、洗濯物籠を抱えて家に戻ろうとした。磨耗した銅製のドアノブを回し、中へと入る。それなりに広く、仕切りのない一部屋。イリアは籠を玄関脇に置き、部屋の隅にある二つの寝台に視線を向ける。その一方のベッドには、澪士が毛布に包まりながら、クリスの所有物であった大剣――――『ジュワユーズ』を抱いていた。

「レイシぃー、お腹すいたー？　もうお昼にする？」

がりっ、がりっ、がりっ。

「スープなら、もう大丈夫よね？」

ガリッ、ガリッ、ガリッ、ガリッ。

「そろそろ形のある食べ物も、口に入れたほうがいいんじゃないかしら？」

ガリッ、ガリッ、がぎっ、ジュギッ、ががりっ、ガリッ。

「レイシー？」

ガリッ、がりっ、ガリッ、がりっ、ガリッ、がりっ、がりがりがり……グジュッ。

澪士は、噛んでいた親指を口から離す。ずっと噛み続けていたからか、爪が半月の部分まで深くひび割れていた。澪士は、幾ばくか動きを停止させていたが、再びスイッチを押されてたみたいに、親指の咀嚼作業に戻った。爪などは既にボロボロの状態だが、それでもかまわず爪の裏側の肉ごと歯を突きたてる。滴る血が、先ほどからひっきりなしに澪士が着用している寝巻きに赤黒い染みの斑点を描いていた。

「もう、また包帯ほどいて……」

イリアはベッドの下に転がっている赤と白のコントラストが鮮やかな包帯を拾い上げ、ローブの袖にしまうと、そのまま真新しい包帯を袖から取り出した。それを甲斐甲斐しく、澪士の親指に巻きつける。澪士は奇妙なものでも見るような目で、イリアになすがままにされていた。

「痒くたって、外しちゃ駄目よ」

「……」

「スープ、飲める？」

澪士はしばらくぼぅと惚けてから、何とかコクリと首をもたげ、肯定の意思を示す。まるで錆びて動きの悪くなったブリキ人形のような動作であった。

あの事件から、二日間ずっと意識を失っていた澪士だったが、二日ぶりに目覚めたと思ったら、奈落の底に突き落とされたかのように絶叫し、イリアでさえ手が付けられないくらいに暴れ回り、翌日になってようやく落ち着きを取り戻したのだった。何とか言語が通じるようになった澪士は、液状のものを酷く恐れた。その為、飲料も含め食事さえ一切受け付けなかったくらいだ。何でも、水などの液体は全て赤く見え、固形の食べ物は人肉にしか思えないのだという。自分にカニバリズムを強制するのか、と澪士は訳の分からないことをイリアに吼えた。しかし唯一、不幸中の幸いとして、レタス

やキャベツといった野菜の薄っぺらい葉の部分だけは抵抗があまりなかったようで、毎日虫のようにもしゃもしゃと食んでいた。そしてこれは勿論のことであるが、水浴びや顔を洗う為の水でさえ拒絶する生活が続いたせいで、目元は死人のように落ち窪み、まるで瞳は白内障のそれのように濁り、頬は削げ、吹き出物が蔓延り、ひげはだらしなく伸び放題のままで、頭のフケも身動きする度にパラパラと舞っていた。

少なくとも身体の方はイリアが濡らした布で介護よろしく拭いていたりした。

最近になって、どうにかこうにか水への幻覚が薄れてきたのか、具を除いた汁物を飲めるまでには回復していて、洗顔も何とか様になってきた状態だった。

「剣は、いい加減おいといたらどう？」

「……」

澪士は黙ったまま、鞘に収まった『ジュワユーズ』をしんどそうに抱えて立ち上がった。推定十キロはくだらない重量があるはずなのだが、澪士は頑なに手放そうとしなかった。あの一件で、『コーレア』の三人を街の外にひっそりと埋葬したイリアが、とりあえずは回収しておいたものである。抜け殻のように生気の薄れた澪士に与えてみると、しげしげと眺めましてから、愛おしそうに抱きしめ、以来ずっと離さないままなのである。どうやらその大剣自体をクリス本人であると思っている節があるらしく、たまに『ジュワユーズ』に向かってブツブツと一人で会話をしている様子が窺えた。

「今日はいい天気ね」

二人は食卓に着いた。震える手で木のスプーンを握り、澪士はスープに口に運ぶ。

「少し、森に散歩でもしにいかない？　家に閉じこもったままじゃいけないし」

口内に含んだスープを嚥下するまでに随分と時間を要した澪士は、無事にスープを胃に収めたことにほっとしたのか、さらに匙を懸命

に動かそうとするが、
「あらあら」
ブルブルと痙攣する手から、ぽろっとスプーンが滑り落ちた。イリアが澪士の変わりに拾うと、
「あんま、無理しないでね。辛いようだったら、レタスとかもあるから」
ね？　とイリアが微笑みかけると、澪士もゆっくりと目を細めた。
その日は、嫌味なほどに雲一つない晴天だった。

ヘイブラザー。突然だが問題だ。
現在、この家の中には俺を含めて、いったい何人の人が居るでしょうか。
ヒントその一。まず俺が『ジュワユーズ』を抱いてベッドの上にいる。ヒントその二。イリアはセレンまで食料の調達に赴いていて、ここには居ない。もう分かったよな？　答えは十一人だ。ね、簡単だったっしょ？
そいつらは、能面のような色の無い表情で俺を囲み、ひたすらに無言で俺のことをじぃっと見据えていた。暇だし、せっかくなので、一人一人に話しかけてみる。
「やあ、栞原（しおりはら）。君に会うのも何だか随分と久しぶりだ」

栞原は、肩に垂れ下がるようなおさげをした、セーラー服の女の子。中学時代に、俺との『約束』で亡くなった哀れな少女。

「ジェウ……そんな目で俺を見るなよ」

ジェウは、短い髪をした八歳くらいの女の子。あの時のまま、水玉のワンピースを着ている。俺の『過失』で死なせてしまった可愛い妹。

「アキラ、お前までいるのか」

窮屈そうな詰襟を着込んだ、精悍な顔立ちの少年。アキラは俺に語った『夢』を実現させて、死んだ。何とも可愛そうな弟。

「薊姉ちゃんも、紫苑兄ちゃんも、お元気そうでなにより」

今はもう同い年くらいになってしまったが、薊姉ちゃんは相変わらず腰にまで達する長髪をだらりとリングの貞子みたいに垂らしていて、紫苑兄ちゃんは生きていた頃と同様に、金髪メッシュと、右耳だけに三連ピアスをぶらさげていた。

『鯨木澪士』という人間自体が原因で、お互いを殺し合った二人。

「わーお……『コーレア』ご一行までお揃いですか」

ラウルさん、アンジェリカさん、バリー、クリスさんの四人。まあ、クリスさんに至ってはいつだって隣にいるようなものだけど。他の者達と比べて、クリスさんだけは時々俺と喋ってくれる。まったく優しいなあ、クリスさんは。

「そんで――――よう、俺」

俺が声をかけると、《ソイツ》は能面だった表情から、ニィィィと口元だけを横に広げた。

「やあ、ぼく」

もう一人の俺は何故か自分だけ、正面にあるイリアのベッドに足を組んで、尊大な態度で座っていた。

「……今日はまた随分な大所帯じゃないか。今度は栞原まで連れてきやがって。それに『コーレア』のメンバーも……まったく、お前はいったい何がしたい」

過去に死んでいった者達からの視姦を享受する日々を送っている

昨今。しかしいつもは一人か二人の割合のはずなのに、今日に限っては『お前』も含めて十人とか。マジウケル。マジシニタイ。
「君がやっとこ、ぼくとちゃんと向き合ってくれた。それが、何よりもぼくは嬉しいんだ」
「何が目的かと聞いている」
「君を嗤いきた」
「死にたいのか」
「はっ！　それは君のほうだろ？」
　くくっはははは、と見下したようにソイツは、ムカつくくらいに俺の目で、口で、声で、飽きることなく嘲笑を繰り返した。
「だからさ、警告はしたじゃないか。君はそれを無視した。これは完全な自業自得の結末なんだよ」
「……」
「……さて、どうだい？　ここにいる者らをその目で見て。いったいどんな気持ちかな？」
「……」
「くくくふふっ、恐い目だ。人殺しのような目だ。そうだろうね、いい気分じゃないだろうさ。自分が関わったせいで、もしくは自分自身が原因で死んでいった者達に、再会するというのは。果てしなく最悪な心地だろうね。しかもここにいるのは、君が憎からず好意を抱いていた人達ばかりだ。ははっ、知ってるよね？　むしろこれは知らなきゃ可笑しいよね？　君の周りで命を散らしていくのは、少なからず君が好意を寄せた人間ばかりだっていうことにさ。薊姉ちゃんと紫苑兄ちゃんは、鯨木澪士という人間を愛したが故に、お互いを屠り合った。特に栞原相心（しおりはらあいこ）なんかは、君のことを《好き》だとさえ言ってくれた。君も彼女のことは、けっこう好きだったんじゃないのかな。なあ、そうだろ？　でもまあ、その割には随分とあっさり死んじゃったけどね」
「うる、さっい」
「ほら、新たに加わった『コーレア』の面々を見なよ。この憐憫（れんびん）に

満ちた視線を。彼らは君の容姿なんかのおかげで命を落とした。レッツイメージ。想定してみなよ。もし君の髪と瞳が黒じゃなくて、闇の魔力とかいうくだらないものがなかったら、バリーは自分の使命を果たすことはなかったんだ。ほら、彼も言っただろう。彼らを殺害したのは、君を捕獲する為の『ついで』だって。だから、君が『コーレア』の四人に会わなければ、彼らはずっとあの関係を維持出来てたんだ。彼らの均衡を壊し、彼らの命を終わらせたのも、全部君のせいなんだよ」

「俺の、せいじゃない。みんな、勝手に死んでいったんだ」

「あれ？　あれれー？　おいおい。いつもの『俺が殺したんだー』説はどこへ消えたんだ？　あははっ、ついに開き直ったってのか？　自責で悲劇の主人公役に飽きたら、今度は逆ギレかい？　ズルイね。なんてズルくて、卑怯な奴なんだ君は。我ながら惚れ惚れするくらいの気持ち悪さだ。反吐が出るよ」

「黙れ。もう、うんざりだ」

「くははははは！　それじゃあオマケにもう一つ話題を提供しようか。鳴神千曲。では、どうして彼女はまだ生きているのか。君と最も深く、長い関係であるはずの彼女が死去していない理由。なぁに、単純なことさ。要は逆転の発想。君が好意を抱いた人間が死んでいくというなら、その正反対のこともまた言えるはずさ。つまり、君は彼女のことを……」

――――おい、やめろ。言うな。それ以上、言うな。黙れ、黙れ黙れ黙れ。殺されたいのか。早く口を閉ざせ。後悔するぞ。分かっているのか。駄目だ。言っては駄目だ。おい、やめっ。

まんま俺の姿かたちをとったソイツは、俺が必死になって訴えた抑止も懇願も度外視して、迷いも惑いもなく、決して言ってはならない禁断を言い放つ。

「本当は、殺したいほど憎んでいるからじゃないのかな」

俺は『ジュワユーズ』をまっすぐ振り下ろした。

イリアが買い物袋を膨らませて我が家の前に空から降り立った時、ちょうど激しい物音がして、家の窓の一つが無惨にも砕け散った。

「レイシ！？」

イリアが果物やパンなどが詰まった袋を放り捨てて家のドアを開けると、そこには、鞘に仕舞われた大剣を滅茶苦茶に振り回して、喚き叫んでいる澪士の姿があった。

「死ね！　死ね死ねッ死ね死ねえぇエエえエえぇェぇぇエえええ！　腸（はらわた）ブチまけろ！　脳髄破裂しろ！　どうだオラ、こ、このっ、残りカス風情が、でけぇ口叩いてんじゃねえぞ！　俺は、生涯誰一人として《愛した》ことも《憎んだ》なんてこともない！　他人に余

計な感情を持ったことなんてないんだよ！　ただ、そういう風な人間を演じてきただけだ！　ああ、そうさ！　人間のフリをしてきただけなんだよ！　人間の、失敗なんだよ！　はっ！　何が好意だ、何が憎悪だ！　アイツらは勝手に近寄ってきて、勝手に骸を晒してっただけだ！　俺のせいじゃない、断じて俺の責任なんかじゃっ――――あぁ、あああっ、あああああぁぁあっ！　糞がっ、畜生なんだその目はああ！？　死人が当然のように湧いてんじゃねえぞ！　消え失せろこの亡霊共（しにぞこない）がぁ！　お前らに恨まれる筋合いなんてねえ！　《あっち》に帰れえっ！」

誰も居ない空間に向かって、フラフラと覚束ない足取りで剣を振い、それと同時に唾や涎なんかも辺りに飛散する。瞳孔は完全に開きっぱなしで、見方によっては前衛的な創作ダンスに評価出来なくもない。

イリアは数瞬だけ呆然と立ち尽くしていたが、すぐさま我に返って澪士を止めようとした。

「レイシ！　レイシもうやめて！」

隙を突いて澪士の腰に跳び付くイリアだったが、

「イリア！？　イリアぁ！　おお、偉大なる大魔術師よ！　崇高たる我が救い人にして、可憐なる幼き賢女よ！　アハハハハ聞いてくれ、聞いてくれ！　俺は、たった今自分自身を殺したんだ！　ぐちゃぐちゃの挽肉にしてやっちゃった！　これでもうあの偽者は二度と出てこないはずだ。それからバリーの脳髄を叩き割ったところなんだよ。クリスさん達の仇をうったんだ。なあ、すごいだろ？　褒めてくれよ。俺もは強いん、だ。だから、弱虫じゃないんだよ？」

ケタケタケタケタケタと抱腹絶倒する澪士に、抱きついたままのイリアは目に涙を浮かべて、ゆっくり言い聞かせるように、そっと囁いた。

「レイシ……誰も、いないわ。ここに、あなたを害する者は誰もいない」

「……いな、い？」

ぷっつりと、電源が切られたかのように、澪士はダラリと両手を下げ、『ジュワユーズ』を手から滑らせた。ゴドン、と重たい音が家中に響いた。

「ここには私と、あなただけなの。それ以外に誰もいないし、何もない」

「誰も……何も？」

「そう……私と、あなただけ」

ぺたん、と力なく膝を着いた澪士は、そのまま頭部をイリアの胸に埋めた。イリアも、慈母のように憂いた表情で、優しく澪士を包むように手を回した。

「……俺は、独りだ」

「違う、私がいる」

「……独りだよ」

一＋一は、必ずしも二じゃないんだ、と澪士は虚ろげに呟いた。暮れなずむ夕日に染まりつつある室内。粉砕されたイリアのベッドや、引っくり返された棚からは、勢い余って飛び出した瓶が、その薬草やら植物の種子やらの中身を撒き散らして、ただのガラス片へと成り果てていた。

割られた窓からは冷たい夕風が侵入し、イリアの紺色の髪を無造作に撫でた。差し込む茜色が、澪士に歪んだ影を浮かび上がらせていた。

普段は滅多に気にならない波の音がやけに耳につくな、とイリアはぼんやりと思った。

第四十七話　一＋一が、必ずしも二になるとは限らない（後書き）

ちょびっと、文学的なものを意識して書いた。
最終章、突入です。予告通り、澪士が壊れました。壊れました。大事なこｒｙ。
感想ぜひぜひお待ちしております！

第四十八話　いまの自分には、幸福も不幸もありません

麗らかな午後を迎えて、イリアが気分転換にセレンへ買い物に行こうと提案してきた。俺としては、人が集まる場所に勧んで出向きたいとは思わない。もしかしたら街中で、またパニックを起こすのではないかという危惧もあるし、サラサやルイ、何よりレヴェッカさんやヴァネッサに、どんな顔して会えばいいのか分からなかったからだ。でも、イリアがせっかく気を遣ってくれた申し出を無下に断るのは、大変気が引けるのも正直なところだった。なので、俺はイリアのお買い物計画に賛成の意思を表明した。

途端、イリアは目の中の星をぱぁっと輝かせて、

「じゃあ！　というわけで、まずレイシには身なりをちゃんとして貰います！」

「――――!?」

イリアはそう言って、俺が着用していた浅黄色の麻の平服を無理矢理に魔術でひん?き、すっぽんぽーんと俺は裸一貫にされてしまった。いやぁーっ!?　と俺は乙女の如く悲鳴を上げ、乳首隠してナニ隠さずな状態のまま、イリアの魔術により外に放り出された――と思ったら、玄関前でブヨブヨと空中に浮かぶ巨大なシャボン玉のような――――水の塊に飛び込んだのだった。

あばばばばば……とまさしく洗濯機に直接ダイブしたかのような仕打ちに、半ば溺れかけた俺は、文字通り揉まれるように洗浄された。その後、髭を切れ味の良いナイフで強制的に剃られ、花の香油らしいオイルを全身に塗られてから、どうにかこうにかクリーニングは終了した。

「ひ、酷すぎるよ、イリア」

とりあえず、涙目になりながらも、抗議の声をあげてみるが。
「時には荒療治も必要なのよ」
いつまでも甘えてなんかいないでよ、とイリアは濡れた俺の髪をタオルでわしわしと拭いていたりした。いや、自分で拭けるんだけれども。
いやはや、甘いのはいったいどっちだか。
キレイにリフレッシュの限りを尽くした俺は、久々に黒のフレアコートに袖を通した。しばらく肌から離れていたせいか、多少違和感じみたものがあった。少し前は、この服を見る度にあの場面のフラッシュバックが起きたものだが、最近もう大丈夫そうで、安心した。
俺が『転移』を行う為に、長らく棚に放置しっぱなしだった首飾りを手に取ろうとしたら、イリアにすかさず強く止められた。
曰く、心がまだ不安定なときに魔術を行使するのは大変危険であるとのこと。それこそ、失敗でもしたら身体の中身が裏返しの靴下のようになってしまうとか。なので、今日はイリアに直接魔術をかけて貰って、俺自身にも負担が最も軽い『浮遊（フロート）』――つまり、移動手段はフライトでゴーということになった。
「イリアが付いてるとは言え、やっぱ空を飛ぶってなんか恐いな」
「あら、慣れればけっこう気持良いものよ？」
イリアは悪戯っぽく相好を崩し、俺はげんなりと苦笑いを返した。

無事にセレンへと辿り着いた俺ら二人。イリアはけろっとしていたが、俺はまた頬が少しこけたかもしれない。
「……ふうん」

なんとなしに、意味も無く声に出して頷いてみる。
久しく訪れていなかったセレンは、気味の悪いくらいに平生通りだった。一ヶ月前の血みどろの悲劇と惨劇が、あたかも嘘だったかのように、セレンの喧騒は、依然として変調の欠片も見受けられなかった。いや、強いて言えば、その騒がしさの質や色が、ある一つの事柄に染まっていたことだろうか。
「カトレイの首都が、制圧されただと……」
「あの大陸最強の魔術師師団が……？　いや、まさか、なんかの冗談だろ？」
「イベリタとヘッジホッグが何とか持ち堪えているらしいが、それも時間の問題らしい」
カラフルな配置で野菜を売っている露店の店主が、客の中年のオヤジと驚愕といった感じで話し合っているのが聞こえた。
「前衛からの報告では、一般兵と共に、魔術が一切通用しない『泥人形（ゴーレム）』を併用しているとか……」
「……いや、魔術の効かない『泥人形』だなんて、あり得ない。そもそも『泥人形』を軍用レベルまでに生産出来ることが、まず信じられないのだ。やはり、それは誤報か何かなのではないか？」
「だが実際問題、カトレイは陥落したのだぞ。魔術国家であるカトレイが陥落したということは、やはりそういうことなのではないか？　それに、件の『泥人形』。ブルートアイゼンが『禁術』に手を出したとの噂もある」
「しかし、それなら……」
「では、何故……」
と道の端で、魔術師っぽい格好の青年二人が、深刻な表情で熱烈とした討論を繰り広げていた。
「……イリア、なんか、やばそうな感じなのか、な？」
俺が街に漂う異様な雰囲気に戸惑いつつ、のこのこと歩きながらイリアに意見を仰いでみるが、イリアは立ち止まり、ごく冷めた口調で、反対に聞き返してきた。

「レイシ、私達が今日ここに来た理由は？」
「へ？　あ、えと、買い物？」
「いぐざくとりぃっ！」
「何そのキャラ！？」
ビシィッ、と人差し指を俺に突きつけるイリアの突然のキャラ転換に、ついいつもの調子で突っ込みを入れてしまったが、イリアは不機嫌そうに眉を逆八の字にして、俺に言った。
「あのね、レイシ。今日はレイシに楽しんでもらうために来たの。決してあなたを暗い気持ちにさせるために来たわけじゃない。分かる？　あなたがそんな顔してちゃ駄目なのよ。もっと笑って、もっと楽しんでもらいたいの。ふんっ、戦争が何よ。んなもんどうせ国がどうにかしてくれわよ。だから、あなたが心配することも、不安になるなんてことも、全然ない」
もう一度説明する必要はあるかしら？　とイリアは俺を上目遣いで睨みつける。俺は肩を揺らして苦笑し、イリアの頭を撫でた。
「そうだな。ありがと、イリア」
「もう、本当に分かったの？」
「オーケーオーケー、もーまんたい、だ」
「えくせれんとぅっ！」
「……」
だからなに、そのキャラ。
で、再び歩き出した俺らだが、イリアが不意に立ち止まって、
「あ、ちょっとあの店でヤボ用があるんだけど、ここで少し待っててくれる？　すぐ戻ってくるから」
イリアは、とある路地裏ぞいに面した店の一角を指差した。グリンダさんの店ほどではないが、不気味に古臭く、窓がスモークガラスのようにホコリで曇っていて、店内の様子が窺えない。一も二もなく怪しいのは明確だ。
「ああ、うん。いってらー」
イリアは軽く手を振りながら俺から離れ、そのとある店舗の入り

口へと消えてった。何となく気になって看板の文字を見てみようとしたが、看板自体も酷く年期が入っているせいか、掠れていてよく読み取れなかった。なので、路地裏の方へもう一歩踏み出してみようとしたその時、

「号外ー！　号外だよー！」

と、道に馬車がないのをいいことに、街道の真ん中を突っ切って、ハンチング帽を被った一人の少年がチラシらしきもので溢れたショルダーバックを吊り下げ、花吹雪のようにバックの中身をあちこちに撒き散らしていた。その場に人々は、地面に落ちた紙を各々に拾い上げ、皆一様に表情をより陰鬱なものに変え、低く呻き声をあげている者もいた。

俺も足元に舞ってきたチラシを手に取ろうとしたら、ふと目の前が陰った。

「ああ！　やっぱりいつかの兄ちゃんじゃねえか！」

ハンチングキャップの鍔を握り、先程まで号外とやらをダイナミックに配っていた少年がいた。

「おいおい、しばらく見ねえと思ったら、かははっ、何だよその死人みてーにとぼけた顔は？　んんっ？　まさか忘れちまったのかい。ほれほれ、おれだよ、おれ」

そこでようやく俺の脳味噌は必要な記憶の引き出しに辿り着いたようで、目前にいる少年の名前を探し当てた。

「確か、ベック……くんだったっけ」

ヴァネッサの救出時には、諜報係としてよく働いて貰ったりしたっけか。

ベック少年は、愉快そうに呵々と笑った。

「かははは。本日は晴天で何より、ご機嫌いかがってか。まったく、ルイの奴が寂しがってたぜえ。ここんとこ兄ちゃんと会ってないーってな」

「ああ、ちょっと……な……」

俺が誤魔化すように薄く笑うと、ベックはどうでもよさそうに鼻

を鳴らした。
「フーン、まあ、せっかく今日顔出したってんなら、あいつに会ってやってくれよ。さぞ喜ぶだろうからな。ラサニール家の令嬢とも一緒によ」
「……え」
俺はびっくりしてベックを見返す。
「え？　ありゃ、なんだなんだ知らなかったのか？　ルイは、アンタに仲をとりもって貰ったって聞いてたんだがな……まあ、知らなかったんなら教えとくがよ。ルイの奴、前々から噂があった腹違いの姉貴と、なんか懇意になったんだってよー。いやぁ、驚きだよな。ルイは、そこら辺とんと喋っちゃくれないしなー、うん」
「……そっか」
サラサ、ルイと仲直り出来たんだ。
よかった。
けっこうあの二人の関係ついては心配していたのだけれど、いつの間にか何とかなっていたようで、俺としても大いに安心した。
久しぶりに、じわっと心が暖かくなった。
「んじゃよ、ほれ。兄ちゃんもこの号外読んどけよ。前線からの速報だ。このご時勢だし。嫌でも情勢について知っとかなきゃ、明日だって生きていけるのか分かんねえぜ？」
俺が手に持ったビラを指して、ベックは忠告する。
「それに今じゃあ、冒険者ギルドだって、傭兵組合とさして変わんねえ状況だ。みーんなピリピリしておっかねえったらありゃしない。ギルドトップのチーム……『コーレア』だって、戦地に赴いたまま音沙汰なしだ。この戦争、本格的にやばい方向に転がり始めてんだ。兄ちゃんもぼやぼやしてんなよ。そんじゃな、おれまだビラ配りの仕事残ってっから」
と、背を向けて走り出そうとするベックを、俺は慌てて呼び止める。何だよー、ベックは少々迷惑そうに振り返った。だが、その時の俺のあまりに呆然自失とした顔を見て、ベックは多分、さぞ不思

議に思ったことだろう。
「『コーレア』が、戦地に……？」
「んあ？　なんだなんだ、兄ちゃんってばそんなことも知らなかったのか？　流石にそれは世間知らず過ぎだろ」
やれやれと言わんばかりにベックは頭を掻き、その広くこの街に認識された事実を、俺に語る。
「他の冒険者達も含めて、チーム『コーレア』も戦場に出兵していったぜ」

「お待たせー」
建物の壁に背中を預けてぼんやりとしていた俺のもとに、イリアがぱたぱたと息を弾ませて戻って来た。ヤボ用とやらが済んだのであろう。
「それじゃあ、どこにいきましょうか？　どこかのお店で紅茶でも一杯飲んでいく？　それか港の市場でも見にいく？　あはは、それともグリンダの所へ冷やかしにでもいく？　ねえ、レイ、シ……？」
イリアはそこで俺の暗い面持ちに気づいたようだった。
「……イリア。クリスさん達が戦争にいったって、どういうことだよ」
「っ……」
ばつが悪そうに俺から視線をそらすイリア。
「なあ、イリア」
「……丸く治めるためには、時には偽るという手段も必要にな

ってくる。つまり、そういうことよ」
「そういうことってなんだよ？　ちゃんと言ってくれなきゃ分かんないよ」
「……街全体にグリンダと一緒に精神干渉をかけたの。邪教の存在も、『コーレア』の全滅も、無かったことにした。彼女らは戦地に赴き、そして消息を絶った。そういう、シナリオなの」
「なんだって……そんなこと」
「街に無用な混乱を招きたくなかった。今だって戦争のことで緊張の糸が張られているっていうのに、邪教が現れたなんて騒がれたら、それこそ収拾がつかなくなる。ねえ分かってちょうだいよ、レイシ。仕方がなかったの」
仕方がない。
人が死んだって仕方がない。虚構を振りまいても仕方がない。自分が原因だって仕方がない。世の中、仕方がないことだらけだ。だとしたら、世界はなんて殺伐としていて、人間の精神以上にどこまでも荒野なのだろうか。
言い訳や屁理屈の理論武装をしたって、自分が守られているわけでもないし、救われてもいない。イリアの慰めも、俺にとっては突き刺さる矢も同然で、あなたのせいではない、という生優しい言葉も一々俺の心を残酷に抉っていくナイフとさして変わらない。
仕方がないからって、俺への罪が消えるわけではないのだから。
「ね、ねえ、レイシ……」
イリアが、俺の顔に触れようと手を伸ばす。俺は振り払うように背を向け、
「……悪い、イリア。少し一人にさせてくれないか」
そうやって俺が立ち去ろうとすると、イリアがついっ、と右の袖口を掴んできた。
「レ、イシ……」
「……頼むよ」
俺が再度そう言い聞かせると、イリアは口惜しそうに大人しく掴

んでいた手を、ゆっくりと離した。
「……ま、街の外壁の検問所でま、待ってるから」
「うん」
イリアは、濃緑色に染まったローブの裾をぎゅっと両手で握りしめ、深い渓谷のようなしわを作っていた。悲嘆を浮かべるように面立ちを歪ませて。俺はそのまま振り返らずに、歩を進めた。てくてくと足を動かす。後方から、待ってるから！　とイリアが一回だけ叫んだのが聞こえた。
俺は振り返らなかった。

第四十八話　いまの自分には、幸福も不幸もありません（後書き）

第四十九話　詐欺が笑えば嘘が泣く（前書き）

「最近になって、よく彼の夢を見るよ」
「どんな？」
「彼が、とってもとっても苦しんでいる様子が、克明に映し出されるんだ」
「百鬼くんさぁ、澪士が苦しんでいたのはいつものことだったじゃない」
「……千曲くん。君もさ、何だか妙に丸くなったよね。角が取れたというか。あとそれに、『百鬼紅夜（なぎりこうや）』って名前は何年も前に捨てたよ」
「羨ましい限りね。私はこの世に生まれた瞬間から、『鳴神』っていう名に縛られているっていうのに」
「皮肉かい？」
「いえ、自嘲よ」

第四十九話　詐欺が笑えば嘘が泣く

俺という人間のことを正確に表現した呼称と言えば『人間失敗』という記号が最も妥当であろう。名付け親である後輩の各務（かがみ）には賞賛と拍手を贈呈したいと思う。だが、新たに加えられた要素についてはもはや自嘲の念すら沸いてこない。嘘吐きだけならいざしらず、詐欺師と成り果てた、今の俺にとっては。

「歴代の独裁者達を、俺はもう嗤えない」

この街にいる全ての人に、俺は偽りを強いた。何十人も死に追いやった咎を、俺は背負ってすらいなかったのだ。卑怯者とすら、誰も罵ってくれない、薄気味悪さ。しかし、生きる価値も、生きている意味も見失った自分がこうして息をしている理由。それは偏に幼少の頃から続く、とある《呪い》のせいなのかもしれない。そのままの意味で、俺を苦しめる為だけに存在する《呪い》。この忌々しい鎖が無ければ、俺はもっと早くに自由になれて、何もかもから解放されたはずだったのに。いったいどこの誰が、いつ何の為に刻みつけたものかは知らないが、この呪詛を施した人物を、俺は八つ裂きにしたくらいに恨（うら）んでいて、怨（うら）んでいて、憾（うら）んでいて、果てしない憎悪を抱いていて。

それなのに、俺は――――

「……あ」

フラフラと彷徨っていた俺は、気づくと『マランディの酒場』の前に辿り着いていた。しばし中に入るか否か迷い、思案していたが、入り口からもの凄い勢いで駆け寄ってきたヴァネッサに目敏く捕まり、あれよあれよと連行されてしまった。

「……！！　……っ？　……！」

「あ、ああ、うん。久しぶりヴァネッサ。え、どうしてたかって？　えーと、そう、ちょっとね、人前に顔出せる状態じゃてさ。ああ、今は元気だよ。うん、問題ない。ありがと」

手を引っ張られて、店内に連れ込まれた俺は、ヴァネッサの喜色満面の笑みに、角膜に痛いくらいの眩しさを感じていた。ヴァネッサの肩先まで伸びた朱色の髪が、嬉しそうにサラサラと揺れる。

微妙な時間帯だからか、店の中に他の客の姿はなかった。

「え？　あら、あらあら！　レイシくんじゃない！　どうしたの？　最近とんと見ないと思ったら」

正面のカウンターで、レヴェッカさんが食器を拭いていた。ゆったりと広がるような紅色の長髪が、今日も今日で見事に艶やかで、強調するように大きく開かれた胸元も同様に、また違う意味で眩しかった。

「ご無沙汰してます、レヴェッカさん」

「ううん、まあいいわ。ほら、さっさと座りなさいな」

レヴェッカさんに促されて、カウンター席に腰を下ろす。ヴァネッサも俺の隣に座った。頬は興奮気味に朱く染まっていた。

「で、何か食べる？　ちょうどおやつ時だけど」

「え、いや、腹はそんなに……」

「若い子が何いってんのさ。さあ、すぐなにか作ってあげるから待っててね」

俺の意見はすぐさま却下され、レヴェッカさんは奥の厨房に消えていった。

「……あはは、むりやりだよね、君のお姉さんは」

ヴァネッサは申し訳なさそうに、クスクスと笑った。

「で、どうだったかな？　前にレイシくんが要望してくれた通りに作ってみたんだけど。実は、他の客にもけっこう人気でね。ご本家のレイシくんからの感想を是非ともいただきたいんだけど？」

　目の前のその料理――――ケチャップライスの代わりに、ご飯を塩気の強い煮詰めたトマトスープで、水っぽさを極力除いたリゾット風に仕上げ、皿に盛り付けてから、半熟の卵で袋とじした赤と黄色の色合いが食欲をそそる――――つまりはオムライスなわけだが、それを俺は半分ほど平らげて、一旦匙を置いた。レヴェッカさんは緊張した面持ちで俺の反応を窺った。

「ん――――」

「んー……？」

「――――んまいですっ！」

　久々に味わった故郷の味に感激しつつも、俺はレヴェッカさんに拍手喝采を送った。

「はあ、口にあってよかった」

　ほっと息を吐くレヴェッカさんは、ふと気づいたように、カウンター越しで俺の唇の端を指でなぞり――――

「あはは、レイシくんったら口元汚れすぎだって」

　そのままなぞった指を口にくわえて、悪戯っぽく微笑むレヴェッカさん。やべ。不覚にもキュンときちゃった……あ、痛い。痛いよヴァネッサ。そんな叩かないで。

「ふふ……なんか、クリスさん達のことで落ち込んでるんじゃないかなあって心配してたんだけど、その調子じゃあ大丈夫そうね」

　かちゃり、と木製のスプーンを動かしていた手を止める。口に含んだトマトの酸味が、鉄の味に変わった気がした。

「クリスさん達も、きっと大丈夫よね。消息不明って聞いたけど、あの人達は強いし、きっと帰ってくる。ねえ、レイシくんもそう思うでしょ？」

「……ええ、その通りです」

「早く、連絡がつけばいいんだけど」
「そう、ですね」
俺は再びオムライスを食べる作業に戻る。オムライスの味は、ほとんどしていなかった。鉄に似た味覚さえ、とうの昔に消え失せていた。泥を噛んでいるような、感覚。それでも、匙で黄色い卵の膜を無茶苦茶に突き破り、赤い中身をグチャグチャにすくいとり、口に運ぶ。吐き気がした。だが飲み込んだ。繰り返し。繰り返し。
「ごち、そうさま……」
ようやく食べ終わり、合掌する。
「ふふ、やっぱり変わった挨拶よねそれ……ってあれ、レイシくん？　え、もう帰っちゃうの？」
「……！？　……！」
席を外し、立ち去ろうとする俺を、レヴェッカさんは驚いた声で、ヴァネッサは悲しそうな顔で呼び止めた。
「……はい、少し急用を思い出しまして。オムライス、美味しかったです。ヴァネッサも、じゃあね」
逃げるように入り口のウェスタンゲートを押しのけていく俺を、二人はそれ以上引き止めはしなかった。それは俺としても大いに助かる。
何せ、あの姉妹が気持ち悪いくらいに薊(あざみ)姉ちゃんとジェウの姿に重なって見えて、今の俺には三分だって耐えられそうになかったから。
過去に死なせてきた者達を恐怖のあまり、死にぞこないの亡霊共

と罵った愚かな俺であるが、本当は自分こそが死にぞこないで、生きぞこないだということは十分過ぎるほどに理解していた。いつかラインデルさんが言ったように、俺は自分が生きているということに疑問を抱いている。解答が出せないでいる。いや、答えらしき答えならとっくの昔に既存しているのだけれど。それは前述した通り、件の《呪い》のことである。

「……んまあ、今更考えてもどうにもならないんだけどね」

その呪詛に打ち勝てない脆弱な自分も、原因といっちゃあ原因であるのだ。

脆弱。

弱い、自分。

クスス。

誰かが笑った気がした。

付近に視線を向けてみても、誰一人として俺なんかには目もくれない。もしかしたら、港湾に巣食う浮浪者か乞食だとでも思っているのかもしれない。皆自身ことで精一杯のようだった。船から荷を降ろすのに汗をかく船乗り達。怒号を飛ばす船長らしき屈強な男が、何やら商人風の優男と口論している。水揚げの際にでもこぼれたのか、地表で干からびる一匹の魚を数羽の海鳥が集団で啄ばんでいた。俺はその様子を何となく観察する。その中の一羽が、おもむろに魚の目玉をつついた。またつつく。そしてついにくちばしが眼球を貫いた。潰された眼球からは、何やら緑色の液体が涙のように溢れ出た。それを美味しそうに海鳥が貪る。魚でも涙を流すのか、と俺はぼんやり思った。

「まったく、ようやく見っけた」

「……あ、ルイじゃん」

「何がルイじゃんだこのヤロゥ」

人様の邪魔にならないよう、道端のとある段差に腰を落ち着けていた俺であるが、その背後からルイが段差の一番上で俺のこと見下ろしながら、ご機嫌斜めに眉を吊り上げて仁王立ちしていた。

「なんで、ここんとこ来なかったんだ？」
「よく、俺がここにいるって分かったな」
「ベックのアホに、兄ちゃんが来てるって聞いたんだよ……って、質問に答えろよ」
ルイはプンスカと湯気を立てて、俺の隣にドカッと荒っぽく座った。
「別に。ただ、外に出るのが恐ろしくてね」
「なんだそりゃ」
理解不能といった感じで眉を寄せて、ルイは呆れたように溜息を吐く。
「まあ、兄ちゃんが変なのは今に始まったことじゃねえけどよ」
「言ってくれるね」
「そうだよ。こちとら言いたいことが山ほどあるんだ。兄ちゃんってば、聞いてくれるよな？」
「……いいよ」
俺が首を縦に振ると、ルイは嬉々として語りだした。サラサが『弟』として自分に接してくれること。サラサを『姉』と呼んでもいいこと。毎日のようにサラサのもとに赴き、色々な話をすること。よく俺のことが話題としてあがること。あと、非常に珍しくも、図書館の利用者が訪れたこと。ルイの知り合いの女の子で、絵本を一冊借りていったこと。その時のサラサは、自分より遥かに小さい少女相手にあたふたと緊張していたこと。この調子で、図書館がもっと明るくなればいいなと、ルイは楽しそうに笑った。
「仲良く、やってるんだ」
「おかげさまで。というか、これも兄ちゃんのおかげなんだぜ？」
「いや、違うさ。それは」
ルイとサラサが互いを理解しようと歩み始めたのは、あくまで二人の覚悟からなのだ。俺は外から野次馬のように囃し立てただけで、何もしていない。
何も、出来ないのだから。

それからもうしばらくの間、ルイと談笑を交わし、最後にルイから「近いうちに姉さんとも会ってくれよ」と言い渡された。
か細く、曖昧に、ぼやかして。
俺は微笑みながら頷いた。
水平線に大分傾いてきた二つの太陽を眺め、俺の中で、イリアに謝らなきゃ、という思いが強く胸を締め付けた。早く、謝って、俺が悪かったと。
仕方がない、とイリアは言ったが、実際は俺が起こした不祥事を荒だてずに済ませてくれただけだというのに。それを、俺は意地を張る子供のように突っぱねて、まったく莫迦みたいだ。
「ああ、そうだ。さっさとイリアに謝って……帰ろう。うん。家に、帰ろう」
そんで今日の晩御飯は、俺が美味いオムライスを作ってやるのだ。

時を少し遡り、澪士がイリアに一人にさせてくれと別れた場面から。
イリアは澪士の背中に、待ってるから！　と負け惜しみのように声をぶつけ、彼が視界の隅に消えていくのを立ち尽くしたまま見送っていた。

「……何やってんだかなぁ、私は」

手で顔面を半分覆い隠し、うなだれるように呟く。彼の心境をもう少し考慮する必要があったことに激しく後悔する。もしや、自分の中で何かが麻痺しているのではないかと勘ぐってみるが、すぐに諦めた。

既に、自分は森羅万象全ての物事に鈍感だ。他人の心も茫洋としてでしか感じられない。この手で掴む物の感触さえ確かではなかった。

一度何もかもを失って、投げ出して、逃げ出して、行き着いた果てが現在の自分であり、過去の残像なのだ。そこに自己憐憫はない。ただの自己嫌悪と諦観主義が横たわるだけだ。

と、唐突にも。

「――――っ！」

ドクンッ、と身体を突き破るかのように心臓が脈を打つ。

まただ。また、例の発作である。

一ヶ月前から、妙に立ち眩みに似た症状が突発的に発症し、先日はついに倒れてしまったほどだ。あの場にレイシがいなくて心底良かった、とイリアは思う。余計な心配は、かけたくなかった。

暴れるような酷い動悸を強引に抑えつけ、イリアは建物の壁伝いにどうにか人目のない裏路地まで足を動かす。暗い影に紛れるようにイリアは肩膝を着いた。

「う、ぁ――はっ、がはっ、は」

口に手を当て、胃から迫り上がるような咳を何度か繰り返す。ふと治まったかと思い、手を離してみれば、そこには鮮やかな赤色の光景が広がっていた。手首から先が薔薇のような深紅で染まっていた。

「……ふふっ」

イリアは自嘲気味に吐血で汚れた口元で笑う。

口際を乱暴に拭い、ローブの袖から、先刻に澪士を待たせて買ってきた小瓶を取り出した。強い鎮痛剤である液体が入った小瓶の蓋

を指で弾き、呷るように飲み干す。薬を専門として扱うあの店の主人とは懇意の仲で、融通を利かせて取り寄せている高価な薬液なのだが、もはやそんなに効果は無いのかもしれない、とイリアは空になった瓶を地面に投げやりに叩きつける。瓶は粉々に砕け、単なるガラス片として辺りに散らばった。

「まったく……これも業かしらね」

時間も、もうあまり残されてはいないらしい。

第四十九話　詐欺が笑えば嘘が泣く（後書き）

タイトルのネタ切れ。ついあらすじから持ってきてしまった。
感想待っております。

第五十話　生マレテキテゴメンナサイ

セレン中央部特化役職協会。通称『冒険者ギルド』と言われている建物の最上階。地上二十メートル以上あるところに位置する、ほぼ全面がガラス張りの部屋。この場合、社長室とでも呼べば分かりやすいだろうか。入り口から見て、来客用のソファがローテーブルを挟むように二つ。その奥には山積みの書類で埋もれた業務机。一部天井にまで届きそうな書類の山の向こう側からは、常にカリカリカリカリとペンを走らす音が規則正しく響いていた。

「まったくあなたも多忙よねー、『支配人（ギルドマスター）』」

いきなり、部屋中に反響する間延びした女の声。まさしく神出鬼没といった具合に、今まで誰も座っていなかったソファに、ブロンドの魔女が我がもの顔でくつろいでいた。

「戦争の経費に、人材の派遣。他のギルドとの連携。もしかしたら、この国の王よりも忙しかったりしてー」

その魔女――――グリンダ＝ジェラリッティは、ほくそ笑むように『支配人』なる人物に流し目で視線を向けた。しかし、そこにあるのは卓上にそびえ立った壁を築く書類の山々。突然グリンダが部屋に出現しても、ペン先がかき鳴らす軽快な音調だけは、相変わらず一定のリズムを刻んでいた。まるで、最初から彼女の来訪を予期していたようでもある。

「それよりどう？　戦況は？」

ヒラリ、と紙の山脈の先から、一枚の紙片が飛んできた。グリンダは頭上に舞ってきたそれを器用にキャッチし、書かれていた文面に黙読する。

「……ブルートアイゼンはカトレイを陥落後、リブラル国境付近まで侵軍し、ヘッジホッグの『鉄騎隊（アイアンサイズ）』はおおよそ全滅状態。残され

たリブラルとイベリタの連合軍も苦戦を強いられている……ってー、これ五日前の記事じゃなーい」

グリンダが不平を漏らすのを待っていたかのように、再びヒラリと紙切れがグリンダの手元まで宙を渡ってきた。どうやらまた戦況の記事のようだった。グリンダはまず日付を確認する。どうやら明日一般に発行するものらしく、日付が次の日のものとなっていた。何はともあれ最新号に変わりはない。同じくこれにも目を通す。

「……え、敵兵の『泥人形（ゴーレム）』が暴走!?　その為ブルートアイゼン側は混乱、壊滅、撤退……ふーん、へぇーなるほどねー……ん？」

ふと記事の隅に目を向けてみると、『お前が知っていることを全て聞かせろ』という殴り書きがメモされていた。

「んー言っておくけどさー、私もそんなこの戦争に通じてるわけじゃないのよねー。『教会』はいつだって秘匿主義だしー。んまー、でも。この号外に乗ってる情報を見る限り、あらかたの推測は立つわねー」

もったいぶらずにさっさと話せ、とペンを走らすリズムが、イラついたような調子に変わる。

「もーそんなカリカリしないでよー。じゃー言っちゃうけどさー。少し前に私が侵入を許してしまった邪教の使徒のこと。ほら、魔術師達の間で話題になってるでしょー？　例の『禁術』の噂。あれ、十中八九その噂通りだと思うわー。魔王復活の研究仮定で生まれた副産物。邪教はそれをブルートアイゼンに売りつけて、自分達の体の良い温床を得たのよー。けーど、その『泥人形（ゴーレム）』が、ちょっと問題過ぎたわねー。いや、単なる『泥人形』じゃない。おそらく、人の魂を核とした、量産型の『戦闘奴隷（グラディアトル）』よ」

広く総じて言う『泥人形（ゴーレム）』とは、魔術師の術式と命令により形をなしたただの土くれである。場合によっては木や岩などを用いる場合もあるが、構成する素材が自然物であるからして、物理攻撃や魔術による攻撃もすべからく有効である。

しかしながら、グリンダが言った『戦闘奴隷（グラディアトル）』とは、彼女の推論を主軸とする限り、生きた人の魂をそのまま動力源として使用している可能性があった。普通、魔術師が生成し、操作出来る『泥人形』の数は精々一、二体が限界である。しかし、ブルートアイゼンが使っている『泥人形』が人の魂を核としているのなら、ほとんど外部からの魔力供給は必要とせず、命令一つで従う強靭かつ従順な木偶の完成及び、量産が実現出来る。ブルートアイゼンの思惑は、そこら辺の歩兵――――否、もしかしたら何ら関与していない一般人さえも巻き込んで、その魂を『戦闘奴隷』の核として改造するという計画。まさに人道を外れ、倫理道徳を笑って踏み潰すかのような所業である。偏（ひとえ）に禁忌として何百年も前に封印された分野であるが、今回邪教が『転生』（これも同じ禁術であるが）の術を突き詰めていくプロセスから偶発的に――――いや、これはもはや必然的に生み出されたものだろうと予測出来る。その技術をブルートアイゼンに提供し、邪教は絶好の隠れ蓑を手に入れる。いわゆる相互利益の関係。

「でもねー、禁術はやっぱり禁術なのよー。そもそも魂とか何やらってのは人ごときが簡単に扱えるものでもないのよねー。だから、この記事にある暴走だって別に驚くことでもないのよー。なるべくしてなった、って感じかしらー」

なるほど、と静かに納得したかのようなペンの音差し。カリカリカリリ。

「……でさー、私が今一番気になってるのはさー、この最後の文面。暴走したこの『戦闘奴隷（グラディアトル）』が、リブラル西南地域の国境越えてきたってことよ」

リブラル西南地域の国境――――それはすなわち『背徳の森』のことを意味さす。

その時、紙束の反対側から空っぽの手だけが伸びてきて、ひらひらと踊るように揺れた。

「ん？　ああ、使い魔で既に連絡済ってわけね……んまー、イリア

のことだから心配はないと思うけど。けど彼女、もうそんな長くないわよ」

カリカリカリカリカッ――と、そこで初めて『支配人』の筆が止まった。公私を含めた文書の城で表情どころか姿さえも窺えないが、グリンダは彼の心情を何となく察することが出来た。

少なからず、自分も似たような心境であったからであろう。

「それと、あなたが『コーレア』の穴埋めにバルゴ＝フェリギオス一派を都から釈放するって話も聞いたわよー。それは、本当なのかしらー？」

グリンダの問いに対して肯定するかのように、コツコツコツ、と指で机を叩く三拍子が単調に響いた。

「ふーん。まーそれも一つの手よねー。あの一件で、彼らを失ったのは私の責任でもあるわけだしー。あなたに異存を唱える気は別にないわよー」

そう言うと、グリンダはおもむろにソファから立ち上がり、『支配人』に別れを告げる。

「んじゃー、次に『教会』から何か連絡か指図があったら報告しにくるわねー」

それだけを言い残し、グリンダは光と影の境に紛れていくように、現れた時と同様、忽然と姿を消していった。

冒険者ギルド最上階に位置するほぼ全面がガラス張りのこの部屋で、ただ、カリカリとひたすらに筆記作業に没頭する音色だけが、変わらぬ旋律を紡ぎ続けていた。

カリカリカリカリカリカリ――――

朝日が眩しく差し込み、止むを得ず気だるい頭をもたげながらも目を覚ます。隣に視線を移すと、レイシがベッドの上で膝を抱えていた。

「おはよう、レイシ」

「オハヨウ」

鸚鵡返しのような拙い口調で返事をするレイシ。自分よりも随分と早い起床を――――いや、目の下に浮かぶクマを見る限り、どうやら昨夜から一睡もしていないのだろう。

三日前からどうにもまたこの状態がぶり返してきて、イリアは途方に暮れていた。レイシが壊した家具や小物の類は魔術で修復できるし、何とでもなる。だが、レイシの崩壊寸前の心は、修復も治癒も何もしてやれない。イリアはそんな自分が酷く情けなくて、胸が張り裂けそうなほど悔しかった。いっそのこと、完膚なきまでに壊してしまえば、彼は救われるのではないだろうか、という悪魔の甘言が心を惑わすが、何をバカな、とイリアはすぐさまかぶり振った。愚考を犯すな、とイリアは自身に言い聞かせる。最善の道を探すのだ。

それまでは、彼をただ見守ってやるしかない。そう決めたではないか、と景気づけにパチンと頬に張り手をかます。

そしてまずは朝食作りだ、とイリアは行動を開始した。

またか、と俺は日が昇ってまだ間もないというのに心の底からうんざりする。寝巻きのまま、ベッドで何時間も放心していたのが悪かったのだろうか。

これで何度目の幻覚になるのかな、とベッドに腰かけた俺は死んだ目で正面を見据えた。けれど、と俺は思い直す。彼女との対話は、俺としても本望であったし、それに今日こそあの言葉の続きを聞けるのではないか、と期待している部分もいかんせんどこかにあった。

「少年、君が抱えうる失敗とは何だ」

「……」

「君が背負い込む矛盾とは何だ」

「……」

「君が刻みつけた傷とは何だ」

俺は、答えない。

クリスさんは、見下げたような蔑視を絶えず俺に向けてくる。うわーお。ゾクゾクするねぇ。

「少年。出来ることなら、私は君のことを救いたかった」

「それは――――強者だけが言える特権ですね」

実際にクリスさんはすこぶる強者の部類だったから、彼女がその言葉を口にすることはいたって間違ってはいない。

「だが、君は救われることを望んではいなかった。君はただ、破滅と破綻を求めていただけだった」

「そんな俺にだって、最初は希望なんてものを抱いていたものですよ」

まあ、結局跡形も無く打ち砕かれましたけどね、と俺は苦笑してから、

「クリスさん。俺はあなたが好きでした」

何となく告白してみて、

「加えて、それ以上にあなたのことは大嫌いでした」

すんなり二秒後には拒絶してみた。

「正しいことを正しいこととして行えるあなたが嫌いでした。自分は間違っていないと胸を張れるあなたが不愉快でした。分かった風な口を利いて道理を豪語してくるあなたが邪魔でした。他人からの信頼と信用にも動じずに応えられるあなたが目障りでした。けど……だからこそ、そんなあなたに縋りたくなるほどに憧れました。あなたは人の鏡でした。おおよそ正解に近い生き方を示してくました。あなたは俺の憧れでした。それ故に、俺はあなたを――いや、あなた達を憎みました。死んでくれて清々している気持ちも、本当はどこかにあるくらいなんです」

韜晦せず、後悔もせず、俺は胸襟を開いて自分の中身を曝け出す。

クリスさんは冷めた表情で押し黙っていた。

「ねえ、クリスさん。あなたはあの時、俺になんて言おうとしたんですか？」

――――レイ、シ……君には、まだ……

クリスさんの、最期。バリーに妨害されて最後まで聞けなかったクリスさんの遺言。でも、正直言えば俺はそんなことは割とどうでもよかった。これは一種の儀式だ。いつもなら、この台詞を吐けば、クリスさんは悲しそうな顔をしながら、すぅと溶けるように消滅していくのだけれど、今回だけは事情が違った。

「『君にはまだ、生き続ける意味がある』、だよ……あはっ、泣ける台詞だね」

クリスさんは――――違う、ソイツは、クリスさんだった仮面の皮をブチリッブチッと手で剥いだ。ルパン三世の変装マスクみたいに、クリスさんの顔面の皮膚を引き裂いて出てきたのは、何を隠そう俺自身の顔だった。いやあ、いつ見ても気持ち悪い限りである。

「やあ、ぼく」

「よう、俺」

もはやお茶の間の定番と成り果ててしまった挨拶を交わす。俺は傍らの『ジュワユーズ』の柄を握り締める。

「そろそろ、君の答えを聞きたいんだ」
「お前は俺に何か質問をしたか？」
「ぼくの正体だよ」
「んなもん、初めから知ってたさ」
「だったら君は、最初から知ってて見て見ぬフリをしてたのかい？　無視して知らないフリをしてたっていうのかい？　卑劣だね。君は自分に卑怯で、何よりも自身に残酷だ。ぼくは、とてもとても悲しいよ。で、何か言うことはあるかい？」
「消え失せろ」
「認めろよ。君は弱い」
「違う、俺は、お前を切り捨てた。弱くなんか、ないんだ」
「君は弱いよ」
　ブンブンと頭部を振って全力で否定するのだが、どういうわけか、俺はそっとソイツに抱きしめられた。気色悪い。放せよ。離れろよ。俺が必死に抵抗しても、ソイツの腕の力は鋼鉄みたいに固くて、もがいてももがいても解かれる気配はなかった。俺は観念して、ぐったりとなすがままにされた。
　ソイツは、俺の耳元で、静かに抑揚なく説き始めた。
「君は昔、『悲しい』とか『苦しい』とかの感情の器官を、己が『弱さ』として分断させた。つまりぼくは、君の『弱さ』の体現。君が切り捨てた君自身の残像。分かるかい？　君が悲しくても涙を流せなくなったのは、過去に君がぼくを置いてけぼりにしたからさ。それで、ぼくは君の中で独り泣いていたんだ。分かるかい？　例え『弱さ』の具現化たるぼくを切り離したとしても、君が強くなれるわけじゃない。弱いからこそ、強くなれる。なのに君は自己の『弱さ』を捨てた。それで強くもなければ弱くもなくなった君は、誰よりも、何よりも脆くなった」
「……疲れたんだ。誰かの為に悲しむのも、苦しむのも、疲れた。疲れたんだよ。嫌なんだよ。俺の好きな人達が死んでいって、俺は弱いから何も出来なくて、何一つ動けなくて……

仕方がなかった。お前がいるせいで、俺は、こんなにも辛い思いしなくちゃいけないなんて――耐えられるわけがないだろぅ……堪え切れるわけがないじゃないか」

「元の世界までは、それで良かったのかもしれない。あっちには彼女がいた。鳴神千曲（なるかみちくま）という支柱が存在していた。しかしどうだい。この異世界で、君は何かもを失った。けれども、君は歓喜した。そうじゃないのかい。嬉しかったんだろう？　やり直せると、淡い夢を見たんだろう？」

「……嬉しかった、です。そう。ああ、やり直せると思ったんだ。この世界では失敗しないように、努力した。これでも、精一杯に。だけど、俺はこの世界でも同じ間違いを犯した。失敗、したんだ。改めて、自分の本質を思い知らされた……どこに行っても、どこまでも俺は俺なんだ、って……」

「だったら、いいじゃないか。十分過ぎるほど君は一人でがんばった。いま一度、ぼくを受け入れればいいだけのことじゃないか」

「……い、嫌だ」

「駄々を捏ねたってしょうがないよ。君の精神はとっくに限界が来てるんだ。放っておけば、君は確実に廃人だ」

「は、廃人、は、ははは、むしろ、それでいい。何も感じない、ただの人形でいい。辛い思いをしてまで、生きていたくなんか、ないっ」

「……それじゃぁ、耳を澄ましてごらん。ほら、聞こえるだろ？　君の中の《呪い》が」

「――聞きたくない、き、きき聞きたくなんかないっ！　叫び声なんて聞こえない！」

頭の裏で、反響する誰かの叫び。幼い頃から、俺を苦しめ、縛り続ける戒め。

「がんばったね。疲れただろう。だから、もうお休み」

ソイツのあくまでも穏やかな声を終止符に、ぐるりと俺は俺でなくなった。総じてミキサーに押し込められたように、俺という自我

も、ぼくという概念も、等しく遍く融解していき、境界をなくしていき、夢心地のような生温い感覚に堕ちていく。

そして――――

「あ」

果たして、いったい自分は誰なのだろう。

今日も晴れ渡るように天気が良いので、いつもと同じように洗濯物を干して、それが終わると籠を持って家の中に戻った。

「レイシ？」

イリアは不審げな声で同居人に声をかけた。

レイシが、窓際で両膝を着き、反り返るような姿勢で手で顔を覆い、さめざめと咽び泣いていたからだ。

イリアは慌ててレイシのもとに駆け寄り、どうしたの？　と肩に手を置いた。

「あっ、ぁ……うぅ……うっうぅイリア、イリア、イリア、イリア、イリア」

「……」

誰だこれは、と思った。

いったい目の前にいるこの少年は誰なのだ。盛大に晴れた目元。涙で崩れた泣き顔。弱々しく眉を下げるその様は、イサナギレイシという人間の面影を微塵も残していなかった。

「ああ聞いてくれ、イリア。どうか、ぼくの罪を聞いてくれ」

彼の告白が始まる。

「昔、ぼくが不注意にも目を離したせいで、妹が死にました。ぼく

が引き鉄となって、兄と姉が互いを殺し合いました。その引き鉄に指をかけたのも、きっとぼくだったんです。俺を好きだと言ってくれた女の子がいました。絶対死なないからって指切りしたけど、やっぱり彼女も死にました」

押せば簡単に折れてしまいそうなほどに脆弱で、触れるのさえ躊躇ってしまうほど儚げに懺悔するその様を目にし、イリアは訳の分からない吐き気を覚えた。

「悲しむことに疲れました。苦しむことに嫌気がさしました。全てが厭でした。生きたくありませんでした。だから死のうと思いました。でも自殺しようとすると、決まって頭蓋の裏側で誰かが叫ぶんです。『生きて欲しい。いき続けて欲しい』――――って、心臓を締めつけるんです。あと一歩のところで、あと数センチのところで、俺はいくども生と死の狭間を彷徨い続けました。何度も何度も死のうとして、失敗しました。そのたびにぼくの中で何かが磨り減っていきました。自分が何故生きているのか、本当に奇妙でした。ですから、イリア。ぼくから一生のお願いです。俺から後生の頼みです。どうか、どうか、どうかどうかどうか――――自分を殺してください」

レイシはイリアの手をきつく握り、文字通り縋るように懇願した。

「今更自分で死ぬ勇気なんてありません。イリアに息の根を止めてもらえるなら、これほど幸せことはありません。だから、殺してよ。君になら、殺されてもいい。どうせ、君に救われた命なんだから。イリアの好きにして――――」

ッパァン――――と乾いた音が木霊した。

自分は呆然として、熱くなった頬に触れてみる。痛みはありませ

んでした。ただ、熱かったです。
「私が言えることはねっ、レイシ。今のあなたが、とてつもなく醜いということよっ……」
そう言い切ると、イリアは拳をぎゅっと固めて、背を向けてドアを開け放ち、外へと飛び出していきました。自分は考えていました。イリアがどうして平手打ちをしてきたのか。自分は分かりませんでした。イリアが何故、あんな大粒の涙を浮かべていたのか。
ギィ、と軋む開放された扉を見つめ、それから後ろの窓に目を移動させてみる。ガラスに薄っすらと映った、自身の姿。
「なるほど」
確かに、これは醜い。

というわけで近くの砂浜に来てみました。はて、いったいどうわけなのでしょう。深くは追求しないでいただくとありがたい。
白い砂浜は、サラサラとした感触で、太陽の熱を孕んでいて温かいです。寄せては引いていく白波が、自分に届きそうで届かない辺りまで殺到してきます。別に波が押し寄せて来ようと構いやしないんですけどね。そういえば一度もイリアとは海水浴しなかったな、と悔いるようにぼんやり思います。こんなに良好なビーチがあるのに、少しもったいない気がしました。
「醜い」
何となく、彼女の言葉を反芻してみます。いやはや、これほどまでな的確な表現が他にありましょうか。あははは。『人間失敗』という呼称以来の驚きです。奇しくも千曲と寸分違わぬ発言をこの世界でも聞けるとは思わなんだ。

それにしても、現在の自分は果たして『俺』なのか、『ぼく』なのか、未だにはっきりとはしません。もしかしたら、そのどちらでもないのかもしれません。故に、仮に一人称は『自分』としていますが。何だか使い勝手が悪そうです。

それはそうと、自分が言うところの『自分』。つまり、この鯨木澪士という人間について、改めて思考を働かせてみます。自己考察。波の音と、茫洋と広がる水平線を臨みながら、イリアの『醜い』というワードを深く吟味していこうと思います。自分はどうにも思考を重ね、己の真実の答えに辿り着かねばならないようです。その先に待っている結果の為にも。要するにこれはある種の儀式のようなものでしょうか。

閑話休題。

さて、正直に言いますと、自分は他人の心が分かりませんでした。他人という存在が、非常に理解に苦しみました。それ故に、自分は知ったかぶりで、見知ったようなフリをして、何もかも悟ったようなフリをして、他人に恐怖し、理解したような気でいたのです。ですが、フリはフリですので、いずれはボロが出ます。

自分は《異形》だったのです。

それを認めたくなかったからこそ、自分は他者を理解しようと励みました。行動と思考パターンを想定し、そこから導き出される解答に独り満足気に頷いていたものです。しかし、結局は理解していたつもりですから、必ずいつかは軋轢や不和が起こりました。そのことから、自分は他者との関わりを極力避けるようになりました。

とどのつまり、所詮自分は羊の群れに迷い込んだ狼のようなものだったのです。それも羊に踏み殺されしまうのではないかと常時ビクビクとしている肝の小さいな狼です。懸命に羊毛の皮を被り、異端視されることに怯え、迫害されること恐れました。ならば、自分に出来ることは虚勢を張ることぐらいしかありませんでした。異端視されること何よりも怖がった臆病な自分は、矛盾するようですが、自ら異端者に名乗りを上げました。暴力を振るい、輪から外れ、誰

もが自分に対し、忌避の念を抱くよう差し向けました。自分もがんばって恐い狼を演じようと思いました。

唯一心を許せたのは、衣食住を共にする孤児院の家族だけでした。あそこは、自分と同じ異形が集まる場所でしたので、少なくとも孤独は感じずには済みました。

けれど、前と変わらず他人のことなんてまるで理解不能でしたので、とりあえず人間の真似事から始めることにしました。家族や仲間が傷つけられたら、報復する。ほら、他人想いの優しい人間みたいでしょ。ぶっちゃけ映画の見過ぎだったのかもしれません。そんな勘違いをしたままこれまで生きてきたわけですから、自分という人間がかくも愚劣かつ愚鈍なことがお分かりでしょう。ちなみにここまでは、自分が十二歳までのお話です。

その内、自分の周りで人がどんどん死ぬようになりました。

最初こそ悲愴と悲痛に泣き叫んだものでしたが、次第に自分はその感情を『弱さ』として切り離すようになりました。その因果からこのような現状と成り果てたのですから、なんとも奇怪なものです。

自分の周囲から人死にが出て、まったくどうすればいいか分からなくてすこぶる戸惑いました。生きることが辛かったです。ありていに言えば生きたくありませんでした。でも死ぬことは例の《呪い》によって、ことごとく失敗に終わりました。いやはや、我ながらろくでもない人生です。

しょうがないので、出来るだけ無感動に無感情に無表情に無抵抗に生きてみようと思いました。適度に他者を思い遣り、適当に刺激的な日常を謳歌し、惰性と打算に満ちた人生を自堕落に歩もうと思いました。自分は根っからの演者でもあったのです。滑稽で、くだらない道化なのでした。お笑いです。生きる価値なんてゼロに等しい。否、むしろ今ならマイナスにすらなっていることでしょう。

自分は生きることを許されない人間でした。生まれてきてはいけない人間なのでした。いやいや、というか人間ですらありませんでした。ひたすらに猿真似を繰り返す、人という生き物に憧憬を抱い

た《異形》で、《怪物》で、《化物》だったのです。
ですから、あえてこの言葉を口にします。
「『生まれてきてごめんなさい』」
なーんて、この有名過ぎて陳腐過ぎる台詞でさえも、今の自分なら惜しむことも、恥ずかしげもなく高らかに言えることが出来ます。
それでは、そろそろ頃合でしょうか。模範解答も出たことですし。
自分は一歩ずつ海に向かって踏み出します。水平線の彼方へさあ逝くぞ、みたいな。あは。思ったより冷たいんですね。膝まで水に浸かり、次は腿、腰、腹、胸、といった具合にちゃぷちゃぷと順調に沈んでいきます。ぶはっ。海水が口内にも入ってきました。やっぱ塩辛いですね。
お約束というか、案の定、頭の中で『生きて欲しい』――――という呪いが絶賛絶叫していますが、残念ながら自分には関係ありません。自分は『俺』でも『ぼく』でもないわけですから、意識を集中させ、気にせず無視して、じっと我慢すればどうってことありません。
「……はっ、あは、は！」
今度こそ、さよならが出来るのでしょうか。
今度こそ、終わりに出来るでしょうか。
今度こそ――――ごきげんよう。

第五十話　生マレテキテゴメンナサイ（後書き）

個人的に『支配人』は好き。

第五十一話　たとえ明日、世界が滅亡しようとも今日私はリンゴの木を植える

「２２世紀の彼の偉大なる耳のない青猫は言った。何故、目は前に付いているのか？　と」
「進化の過程でそうなったのさー」
「……前向きに進んで行く為、だってさ」
「んじゃあ魚類はどうなる？　あいつらは横についてるぜー」
「お前バカだなー。あいつらは、人間みたいに、まず悩まない」

第五十一話　たとえ明日、世界が滅亡しようとも今日私はリンゴの木を植える

――――――殺してください。

あの、汚濁を覗き込んだような、深淵の一端を垣間見たような、およそ人間とも、意思を持った生物とも思えない、光のない混濁しきった瞳。

見ていられなくて、見ていたくなんかなくて、あの場に一秒たりともいたくなくて、彼から離れたくて、吐き気がして、そんな自分に嫌悪して、そして自分でも訳が分からなくて、耐えられなくて、感情に任せるまま彼を殴り、行く先も決めずに飛び出した。

もう全てが限界だったのだ。

だが、次第に冷静になっていくのと同時に、激しい後悔が身を襲った。

「私は、なんてことを……」

彼のことを、醜いと。

醜い、などと。

海沿いの崖を気が済むまで走ってきたわけだが、森は予期していた通り恐いくらいに静かだった。『支配人（ギルドマスター）』から連絡があった通りである。

「……戻らなきゃ」

イリアは淡い桜色の唇を噛み締めながら、とぼとぼと踵を返した。

我が家へ戻ってみれば、見事なまでにもぬけのからだった。

彼の姿は、ない。

「……」

果てしなく嫌な予感がした。

つぅっと一滴の汗を垂らし、イリアはまたも裸足で駆け出した。
どうやら森へは行っていないようでとりあえずは安心する。
頭が、さきほどから異様に重い。手足の感覚も妙に薄くなっている気がした。それでも、イリアはレイシの行方を追う。
早く、手遅れになる前に。
そして自分は、声帯の許す限り、我を忘れて叫ぶことになる。狼の遠吠えより悲痛に、猫が餌をねだるなで声よりも痛切に。恥も外聞もなく、感情を剥き出しに、感傷を曝け出して。
私は叫ぶのだ。

――――ふうん？　何か聞こえましたか？　いやいや気のせい気のせい森の精。波浪に任せて流れていくのと共に、ゆっくりゆっくり沈下していきます。ゆらゆらと水面が日光を浴びて、幻想的な模様を遂げていました。そういえば、自分は幼い頃プールの底に寝転がって、よくこんな光景を眺めたものです。しかし、ここは母なる海です。海の底は驚くほど深いのです。ほら、まだまだ自分は沈んでいきます。このまま死んでいきます……ん、ん？　また何か聞こえましたか？　いったいさっきから何なのでしょう。誰ですか、自

分の名前を呼ぶのは。あまりにうるさくて、落ち着いて逝けやしない。まったく、仕方ないから少しだけ海面へと顔を覗かせてみます。

「レイシの馬鹿アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァァァ―――――――ッ！！」

…………なんだ、イリアか。いきなり馬鹿呼ばわりとは酷いものです。いたく傷つきました。ま、傷つく心なんて今更持ってないんですけどー？

イリアは泣き叫びながら、懸命にこちらへと向かってきます。浜の砂を巻き上げ、ぱしゃぱしゃと小波を蹴り、またも自分を馬鹿だのアホだの大声をあげました。ええ、そりゃもう必死に。でも自分は遠目にチラリと一瞥しただけで、あとは再び身体の力を抜いて沈没していこうと思いました。独りで寂しい晩年を迎えようとしていたのですが、なるほど、考えてみればこれは何とも幸福なことです。イリアに最期を看取ってもらうなんて、自分はなんて果報者なのでしょう。さて、自分は目を閉じ、しばし黙想してから、最後にもう一回だけあの小さな恩人を拝み、網膜に焼き付けようと目蓋を開けました。

イリアはがぼがぼと血反吐を吐いていました。

「……あ、あ……えっ？　イリ、ア？」

思考が追いつきません。

それで自分は……いや、俺は目を疑った。鮮やかな赤で染まったイリアは、ぷっつりと電池が切れたみたいにあっけなく倒れていった。

え？　イリア？　何で？　どうして、そうなる。ちょっと、待てよ！　おい、何でだ。君は、死ぬのか？　君も、俺を置いて逝ってしまうというのか。それは、駄目だ。それはなしだろ。やめろよ。やめてくれよ。そんなの反則だろ。どうすればいいって、俺は、ぼくは、自分はぼくは俺は俺ぼくぼく自分俺自分ぼく俺は――――――

「君を失ってまで、死にたくなんかない！」

俺は初めて、自ら生きるという意志に従った。

やれやれ、情けない限りだ。僅かに感じる彼の魔力――――つまり、自分と同じ魔力の波長をたよりに、彼を探し当てたはいいもの、こんなところで力尽きてしまうとは。身体が何一つ言うことをきかない。指一本でさえ満足に動かせない。早く、急いで彼を止めなければならないのに。まだ、間に合う。時間はある。ならば、即急に彼のもとへ。手遅れではないのだ。あの時と違って。急げ！　この肉体が朽ちてもいい。滅んだってかまわない。

この期に及んで私は。

彼を失ってまで、生きたくなどない。

イリアは掠れゆく意識の中で、困惑と、悲痛に満ちたレイシの顔と、力強い腕に抱えられたような気がした。

「ねえ、ねえ！　イリア！　イリア！　起きてよ！　イリアってばぁっ！」

波に体躯を預けるずぶ濡れのイリアを抱き上げ、俺は何度も彼女に呼びかける。イリアはおぼろげな視線をこちらに向けるだけで、意識もほとんどないようだった。濡れねずみは俺も同じ条件なんだけど、イリアはガタガタと身体を震わせていた。

「イリア、イリア！　しっかりしろよ！　死んじゃ嫌だよ！　死なないでよ！」

何ともまあ、我ながら得手勝手もここに極めりって感じである。さっきまでの自殺志願者（スーサイド）っぷりはどこぞへと消えたか。死んじゃ嫌ぁ？　ふざけてろ。お前が他人のことをとやかく言う資格はない。何をほざいているかと思う。お前のせいで、彼女はこうなったんだ。まったく、分かっているのか？

ああ、十全に分かっているさ。俺はイリアに言われたとおりの大馬鹿で、死にたがりで、自己本位でしか物事を考えられない最低野郎で、イリアの気持ちなんかいっさら鑑(かんが)みなくて、本当、救済の余地もない真性のバカなのだと思う。

イリアに救ってもらったこの命を。

イリアに助けてもらったこの生を。

俺は、まったく何ということをしようとしていたのだろう。生きる意味？　生きる価値？　それは生きるという――――生かされているという恩恵と幸福に気づかない愚か者の戯言だ。そんなガラクタのようなものがなくては生きられないなら、さっさとどこか人気のない所で首でも吊っていればいいのだ。

では、俺はいったい何に縛られていたというのだろう。《呪い》？　否。あれは俺を束縛する為の鎖ではなく、俺に残った唯一の人間らしさである手綱だったのではないか？　誰の慟哭なのかは分からない。誰の懇願なのかも知らない。だが、自分がこれまで死なずに済んでいたのは、この声のおかげだったんじゃないのか。俺は、この声に生かされてきたんじゃないのか！

死ぬのが恐いのは当たり前だ。それを俺は失敗だとか、呪いのせいだとか、冥々に誤魔化して、曖昧にぼやかして、不幸な自殺志願者を気取っていただけだった。

そうすれば、死んでいった者達の罪滅ぼしになると、無知にも妄信していた。俺が苦しめば、彼らは救われるのだと、無恥にも盲信していたのだ。

単に俺は悲劇を語り、自己陶酔に溺れた、ケツの青いただのガキだったのだ。虚構に満ちたフリをした、倨傲なだけの俗物であり、傲岸不遜も甚だしい。まさに正真正銘の痴れ者であった。歩んできた道を振り返ることしか出来ない無能で、中途半端なニヒリズムを掲げる、実にくだらない人間であったのだ。

「イリアぁ、しっかりしてくれよ……」

子犬の鳴き声よりも頼りなさげに、俺は言う。

運んでいる途中、一度だけイリアは激しく咳き込み、俺の顔面に喀血がもろに跳ね返った。そのイリアの薄い血の味が、俺の心をさらなる焦燥へと急き立てた。

ようやく家にまで辿り着き、イリアをお姫様抱っこから状態から、ベッドへと寝かせた。身体を冷やすのは良くないと思い、着ていた暗褐色のローブは下着ごと全て脱がした。白く、穢れのない柔らかな肌。全体的に丸みを帯びた平坦な肢体に、清潔な肌着と簡易服に着替えさせる。濡れた髪も乾いた布で丁寧に水分を取り除いた。

「はっ、ぁ……はぁ……はぁっ」

イリアは苦しそうに喘ぎ、おでこに玉のような脂汗を浮かべていた。

俺は絞った手ぬぐいで逐一イリアが掻いた汗を拭き取るが、それでもイリアの容態は一向に良くならない。顔色もどんどん悪くなっていった。

俺は一時的にイリアから離れ、部屋中を引っくり返し始めた。薬、薬、と低く呟きながらそれらしいものを捜索するが見つからず、薬草の棚も覗いてみたが、どういうわけか、役に立ちそうなものはなかった。止むを得ず俺は書棚の方を漁り始め、薬草についての本を手に取り、パラッパラッと焦りに苛立ちながらページを捲る。冷え性、寒気……違う。お通じ、便秘……全然違う。鎮痛、回復補助、およそあらゆる症状の緩和、リセリナの花……これだ！　この花なら前に見かけたことがある。少なくとも、ないよりかはマシだろう。

「レ……イ、シ……」

そこで、イリアが意識を取り戻した。消え入りそうな声量で、俺を呼ぶ。俺はイリアに駆け寄り、宙へと差し出された震える手を優しく握る。

「……イリア、ごめん。謝って、許してもらえるとは思ってないし、謝って済む問題じゃないことも理解している。でも、俺……バカだから、謝ることしか出来ないんだ」

――――だから……ごめんな、イリア。

「レイ、シ」
イリアは歓喜と感激を柔和な微笑みで表現し、暖かな涙を流した。
俺はイリアの手を一瞬ぎゅっと固く力を入れてから、そっと手を放し、立ち上がった。イリアは不安そうに、どこへいくの？　と訊いた。
「森に。ちょっと薬草とってくるよ」
「っ！　いっては、ダメ……！」
「……心配しなくても大丈夫だよ。もう死のうなんて微塵も考えちゃいないさ。すぐに、戻ってくるから」
イリアはなおも、行かないで、ここにいて、と切実な表情で言ったが、俺は聞く耳を持たず、『背徳の森』へと一直線に突っ走っていった。家を出る前、あの『転移』のネックレスを持っていこうと思ったが、俺が家の中をガサ入れの如く散らかしてしまったので、どこかにいってしまったらしい。探している暇も惜しかったので、首飾りは諦めた。そもそも今の俺があのアイテムを使えるかどうかも怪しいものだ。
あるいは、俺はそこで少し落ち着いてみて、冷静さを奪還してみる必要があったのかもしれない。初めて実感出来た生きるという心地を獲得した俺には、世界がいつもより何十倍にも開けていたのと同時に、イリアの為にと、狂騒したような焦心に駆られて、目の前が見えていなかったのかもしれない。灯台下暗し。近くて見えぬは睫毛。遠きを知りて近きを知らず。恋は盲目。ん、これはちょっと意味に誤りが……まあ、いいか。大体似たようなもんだし。
ともかく、俺は気づくべきだったのだ。森の中にへと至り、普段とは明らかに異なる森の空気と、雰囲気に。鳥の鳴き声がしなかったことも。妖精たちや、他の生き物達の気配がしなかったことも。
昔からお馴染みの、あの感覚を。
死の足音を。
殺意の奔流を。
感極まり、高揚としていた俺は、見事なまでに見落としていたの

だ。

どうにもこうにも、である。

第五十二話　世の中、生温かい嘘と冷たい真実だけ

この森についての説明の需要は少ないかと思うが、一応簡略的に述べておくとするなら。

木。木。木。なだらかな形状の土地に沿って、ひたすらに木しかなかった。ああ、たまに移動している泉とかもあるけど、遭遇することは滅多にない。彼女は可愛いくらいにシャイなのだ。時折、森の変なお姉さんに見つかって、無理矢理お茶会に攫われ……誘われたり、ついでにこれはイリアから教わったことなのだが、森に住む妖精達と仲良くしておくと、道に迷ったとき帰路を指し示してくれたりするので、他にも色々と便利である。あと危険な魔物と出合った時の対処法や、逃走ルートなども完璧に熟知しているので、イリアにはとても及ばないだろうが、俺も俺でこの森のことは大分詳しくなっていたりした。レンジャー稼業で食っていけそうである。

「……あった！」

思ったよりも、随分と森の奥へと来てしまった。だが、目的のリセリナの白い花を発見したので、ひとまずはホッと肩の荷を降ろしたように息を吐いた俺なのであった。

根っ子ごと、花自体をあまり傷つけないように掘り起こす。

これがあれば、多少はイリアの苦痛も和らいでくれるだろうか。

そう彼女のことを一心に想い憂いていると、不意に。

「え？」

足元が重く揺れるぐらいの、地響き。

そして、唐突の。

「ヒひいィィイいいィ非ィイギギ疑義リい理ィィいいイ嗚呼アあ
あァぁァァぁあアアあ〝あ〝あ〝あ〝アア〝ア〝ア〝アア〝
ア〝ア〝あ〝あ〝あ〝ア〝アア〝ア〝ア〝ア〝アア〝ア〝ア亜
ァァ亜ァ嗚呼嗚呼嗚呼あああああァァア！」

それは、『背徳の森』全域に響き渡るような、咆哮。まるで、身を裂かれる千辛万苦に悶え、のた打ち回るかのような、悲しい慟哭にも思えた。

この森の生物のソレとは、まったく異物。獣とも、鳥とも、蟲とも、無論魚のものでもない。というか魚は鳴かない。

いや、そもそもこれは生物なのか。

「なんだ、アレ……？」

前方の木々が前触れもなくなぎ倒され、俺の残念な脳細胞の底力を総勢力で挑んでみても、到底理解に至ることはないのだろうなあ、とつい観念してしまうような、『ソレ』が現れた。うん、なんか、『ソレ』としか言えない。

異容で、かつ異様なまでの巨躯。ルックスはとりあえず人に近い。しかし、あくまで人型というだけだ。長い腕に、重機のハンマーみたいなゴツイ拳を地面に垂らして、ゴリラを連想させる動きでこちらにドシドシと近づいてくる。その肌は紫色に濁っていて、隆々たる筋肉を有し、太い血管が脈を打っていた。所々に機械的な箇所も見られ、甲冑で覆われた頭部にはザクかドムみたいな、何かのチューブらしきものも刺さっていた。

どことなくバイオハザードに出てきそうなキャラだなぁ、と俺は率直な感想を漏らす。

「無限ランチャーも、ビームサーベルも生憎持ち合わせてないんすけどぉ」

そんなつまらないことを言っている場合でもなく、これは逃げなきゃヤバイ。ただちに逃走手段をとらないと、大いにヤヴァイ。

俺でもこんなハッキリと分かるほどの感覚は、経験したことがなかった。

身の毛がよだつような殺伐とした殺意。

総身が粟立つような寒々とした殺気。

兎にも角にも、脱兎の如く、俺は駆け出した。

何だあれ何だあれ何だあれ何だあれ何あれれれれれ何アレ、と俺は終始足を懸命に動かしながらも思考していた。

純粋な恐怖。

単純に畏怖。

「――来るなよ……来んなっ……来るなしっ！　だからぁ来るなってつってんだろがあああああああ！！」

パニックってる、俺。完全に、我を忘れていた。

奴が、追ってくる。なるほど。ストーキングですか？　訴えますよ。警察呼びますよ。一々グロテスクなんですよ、あなた。

そいつは俺のことを恐ろしい速さのゴリラウォークで追跡してくる。糞やっぱネックレス持ってくれれば良かったなあああと悔やんでいる俺に向かって、パカァと開いた口から、嫌な予感しかしない光線を放ってきた。

「は？」

俺の数十センチ横で、閃光のような爆発が起きた。四散した石やら木片やらと一緒に、俺はゴミみたいにわけもなく爆風で吹っ飛ばされる。その弾みで腰を思いっきり打ち付け、眼球の中で星がキラめいた。駆け巡る激痛が俺の頭をさらに活性化させる。

ビーム。ほほう、ストーカーの次はビームときましたか。どうや

ら横文字が大変お好きならしい。クソッたれだぜファッキン。
「つーかさ、何？　あんたら双子？」
ふと気づいて見てみれば、ソイツは二体にまで増えていた。さきほどのビーム騒ぎを聞きつけてきたのか、爆破で粉砕された木々を踏みつけて、のそりと出現してきた。
いえいえ、お呼びしてませんって。
パカァッ。
と。
「ちょっ」
毛穴がオールグリーンで開放されて、俺はとっさの機転と、本能に従い獣じみたアクションで、今の地点から離れる。二秒後、そこには凄まじい爆風と共に巨大なクレーターが出来上がっていた。やめろよ。俺は将来立派なミステリーサークルになるって決めてるんだ（？）。
俺は再び走り出す。立ち止まったら、死ぬ。確実に、俺は殺される。畜生め。まったくいつもこれだよ。俺が求めたり望んだりすることは、いつだって全部裏目に出ちまうんだ。表と言えば、裏が出る。あちらが立てば、こちらが立たぬ。生きようと思えば、いきなり殺される。
「神様に見放された男……っていう、映画のタイトルで一本取れそ、うおおおおおおおおおおおぉぉぉ！？」
空気が破裂したみたいな音がしたと思ったら、奴らの片方が、荒っぽく俺の頭上で腕を横薙ぎに振り回したところだった。すれすれでどうにか当たらなかったが、巻き添えを喰らった樹木が割り箸の如くバキバキィッと粉砕されていった。
まさに、死に物狂いで俺は逃げる。逃げる逃げる逃げまくる。その間に窪みに引っ掛かったり、木の枝で二の腕を裂いたり、奴らが吐き出してくるリアル破壊光線をよけたり（反動で一回ぐらい動けなくなればいいのに）、もはや俺はどこへ向かって走っているのか分からなくなってしまった。

で。

「まーさーかの、三つ子ちゃ～ん？」

よもや三体目にまで、ばったり邂逅する始末。

ひー、ふー、三つ巴？

突然前方に出現した三体目に虚を突かれ、ついに俺は捕まってしまった。俺の身長ぐらいあるデカさの手に捉えられ、玩具みたいに圧縮される。メシッメシィッと骨の軋む音が聞こえた。

「が、が、はっ、ぎ、ぎがああああ……」

残量僅かになって、無理にギュウギュウと搾り出されていく歯磨き粉のように、内臓が押し潰されていく苦痛に意識がぶっ飛んでいってしまいそうな中、俺は家に残してきたイリアのことを想った。

ごめん、イリア。すぐ、戻るって言ったのに。約束、守れそうにないっぽい。

あ、中身、出る。

俺がそう覚悟を決めた刹那。

「ウゴごがあ戯後ッぉおお後後あ語おオオオオぁぁぉォォァアアア嗚呼アアッッッ！！」

俺を人形のように掴んでいた奴の腕が、根元からブッツリと両断されていた。

炎のようにゆらめく、漆黒の刃によって。

奴の自慢の握力に解放された俺は、ぐるぐると焦点が定まらないまま、どうやら誰かの腕の中にいて、フワリと地面に着地していた。

誰？

身長は俺よりもずっと高い。不謹慎だが胸の膨らみをどさくさに紛れて確認しちゃっていたので相手が女性ということが分かった。

しかし、この状況で都合よく助太刀に来る人物なんて――――まさ

か、森のお姉さん!?　と一瞬驚いて目を疑ったが、よくよく観察してみれば、その背の高い女の人は紺色の髪を腰まで伸ばしていて、足首まで隠れるような暗褐色のローブをまとっていた。あの変人森ガールの出立ちとは全然別物であった。

「すぐ、終わるから。ここで、じっとしてて」

彼女は、そう言い残すと、俺を庇うように徒党を組んだ奴らの前に立ち塞がった。

奴らは例の生き物とは大分かけ離れた耳の痛くなる咆号を喚き散らしながら、その女の人に向かって突進していった。俺は何が何だかで、言葉を失っていたが、

「……哀れな魂。今、楽にしてあげる」

すう、と浅く息を吸い込み。

彼女は。

「――――Ｗｉｒ　ｓｅｔｚｅｎ　ｕｎｓ　ｍｉｔ　Ｔｒ?ｎｅｎ　ｎｉｅｄｅｒ　ｕｎｄ　ｒｕｆｅｎ　ｄｉｒ　ｉｍ　Ｇｒａｂｅ　ｚｕ‥（我らは涙流して跪き、塚に眠る汝に呼びかける）」

――――歌っていた。

「Ｒｕｈｅ　ｓａｎｆｔｅ，　ｓａｎｆｔｅ　ｒｕｈ，！Ｒｕｈｔ，　ｉｈｒ　ａｕｓｇｅｓｏｇｎｅｎ　Ｇｌｉｅｄｅｒ！Ｒｕｈｅｔ　ｓａｎｆｔｅ，　ｒｕｈｅｔ　ｗｏｈｌ！（眠れ安らかに、安らかに眠れ。疲れ果てた四肢を休めよ。眠れ安らかに、安らかに眠れ）」

幽玄なまでに透きとおった声。目前に迫る敵も、虚ろな背景と化し、もはや完全にこの場は、彼女ただ一人の為だけに用意されたステージへと変貌していた。

「Euer Grab und Leichenstein soll dem ?ngstlichen Gewissen ein bequemes Ruhekissen und der Seelen Ruhstatt sein. H?chst vern?gt, schlummern da die Augen ein.（汝の眠る御墓は迷える心を安らかに支え、魂に急速の地を与える。至上なる安堵に包まれ、まどろみの中、瞳を閉じていく）」

小鳥が囀るような心地良い響き。されど、地鳴りのような荒々しさと凶暴さを孕んだ、天使でさえも戦慄するような旋律。この歌声が聴けたなら、鼓膜など破れてしまってもかまわないとまで、俺は思っていた。それだけ、俺は彼女に魅せられていたのだ。

あくまでも単調な独唱（アリア）でありながら、それは壮大な聖譚曲（オラトリオ）でもあり、交声曲（カンタータ）のように優雅でもあり、遁走曲（フーガ）かのように愉快でもあり、何層にも何層にも重奏されたかのような響きを錯覚させ、俺は自分が立っている場所が奇妙に歪んでいくのを感じた。

彼女は、詩歌にピリオドを打ち、片手をすぅと天に向かって伸ばすと、高らかに声を張り上げた。

「――――我は命ず。君臨せよ、天の意思、救済せよ！　抗うこな

き王の剣（つるぎ）！」

突如として、空が割れ、大地が震えた。

「『堕ちたる（メサイア）は神の国』」

裂けた天空から落ちてきた一本の光の柱。

全てを飲み込み、全てを無にへと還す、殲滅の導き。巻き起こった旋風を腕を前にしてで庇い、目の眩むような白の世界に、俺は立ってなどいられるはずもなかった。

数十秒ほど、そうしていただろうか。強烈な風圧と、刺すような

眩しさが消え、俺は恐る恐る目を開ける。
「これ、は……」
ざっと半径五十メートル。底の窺えない巨大な《穴》が、前方で口を開けていた。穴の周囲の木々も、根こそぎ無くなっていた。あの魔物（？）らの姿も、存在ごと消滅させられたようだった。視界に広がるのは、最奥の森にて不自然に広がる更地と、地底深くまで続く大きな空洞である。
その巨大な洞の前で佇む、一人の――――少女。
さっきまでいた妙齢の女性の影は、ない。
「……イリア」
なんとなく、そんな気がしていた。
いや、最初から知っていたのかもしれない。
イリアは、振り向き様に青白い顔で微笑み、
「レイシ……お願いなんだけど」
これ以上、私、動けないっぽから、と弱々しく呟いて、膝を着く。
俺は、間一髪彼女を受け止めた。
その拍子に、ちゃっかり懐にしまっておいたリセリナの花が、自己表明するかのごとく、豊潤な芳香を振りまく。
それは、イリアと同じ、優しく甘い香りだった。

イリアを負ぶさり、自分も随分とボロボロなていで、なんとか家路にへと着く。イリアは力なく俺に体を預けていた。イリアを寝台に運ぶまで、俺達の間で会話はなかった。
俺はベッドに椅子を寄せて、イリアの様子を窺った。つい、やく

たいもない後悔が吐き出される。
「また、君に迷惑をかけた……無理をさせてしまった」
君の話を、もっとしっかり聞いていれば、こんな事態には至らなかったはずだ。
「別に、いいのよ。あなたが、生きててくれたら。それに無理も何も、正直、私もそう長くないの」
「君は、死ぬのかい？」
「もともと、生きているのかさえ怪しいわ、私は。内臓が、もうまともに機能していないのよ」
イリアは疲れたように苦笑した。
「……レイシ、もしかしたら、あなたは私の正体を、既に知っているんじゃないかしら？」
ふと、思いついたようにイリアは言う。
「知ってて、今まで何も訊かずに接してくれてたのかしら」
「……だったら、訊いてもいいのか？」
イリアのことを。
小さく首肯して、イリアは俺の反応を待った。
ここできて、俺は確かめてしまうのか。わざと、知らないフリをしてきた俺が。
イリアの過去になんて、興味はなかった。
なんて嘘。
少なくとも関心はあった。だからこそ、俺は変わらないイリアとの日々を選んだのだ。
確かめてしまえば、何かが壊れてしまうような気がした。
でも、意を決めて、俺はここで言葉を紡ぐ。
ひとえに、彼女との強固な繋がりを信じてみたかったなのかもしれない。
「最初の疑問は……そう、イリア。君は、浜に打ち上げられている俺を発見したって言ったよね。けど、思ったんだ。遥か高い標高から海に落ちた衝撃。次いでそのまま海岸に座礁するまでの過程で、

果たして人間の生存確率はどれくらいかって、ね」

――――もしかして俺は、その時ほとんど死んでいたんじゃないかな。

「では何故に、俺はこうして生きているのか。もしかしたら、現在の君の状態と、何か関係があるんじゃないかって」

イリアは、軽く目を閉じ、静寂を保っていた。

俺は話を続ける。

「それと、『レイルフォード＝ヴィン＝クロノーベル』、『ロラン＝シューレヴィッヒ＝クロノーベル』……ほら、覚えてる？前に一度だけ、俺がイリアの日課についてった日のこと」

岬に二つ並んだ無骨な墓石。そこに刻まれた、二つの名。哀愁に満ちた、イリアの瞳。この墓標に記された名前の人物を、自分の大切だった人達、とイリアは称した。

「明らか、この二つの名前は男のものだと思った。大切だった人――――俺は、すぐに家族のことだって分かった」

勘、なんだけどねと俺は前置きしてから、

「だとしたら、この二人はイリアの兄なのか、弟なのか、父親なのか……」

そんな証拠も確証もない、感性の赴（おもむ）くままにひらめいたいい加減な推理は、見事的中することになる。

「無性に気になってね、図書館でさ、調べたんだよ。その名前を。半分冗談、半分諦めた調子で、適当に」

そしたら、あった。
レイルフォード＝ヴィン＝クロノーベル。
ロラン＝シューレヴィッヒ＝クロノーベル。
「レイルフォードは、君の息子の名前。ロランは、君の夫だった者の名前だ」
とある書物に書き記されたその事実を何度も吟味し、自分の中で《見なかったこと》として、厳重に封印した。
だが、俺はずっと胸の内に秘めていた、確信的で、ほぼ確定的な推測を、迷いも惑いも捨て去り、彼女に告げる。
「『闇魔界の冥王』、『恐怖の絶対者』……そして、『最果ての魔女』。イリア……君の本当の名は、『イリアーデ＝フォン＝クロノーベル』」
俺が考える通りなら、イリア、君の正体は――――
「歴代最後にして、最強を誇った魔なる王――――『終端』の、魔王だ」

イリアは儚げな笑みを浮かべて、物静かに頷いた。

第五十二話　世の中、生温かい嘘と冷たい真実だけ（後書き）

……森のお姉さん？　作者にも謎。
三女さん可愛いなあ三女さん。

さて、こんな種明かしですが、読者の皆様なら大体予想がついていたりしたのではないでしょうか。たいして面白味のないネタでしたが。

作中の《詩歌魔法》……さて、何の曲か分かったらすごいです。
ヒント　マタイ。ぜひ、聴いてみて下さい。
しかし、長かった。このシーンを思い浮かべたのが去年の七月ごろだったから、約半年ちょい……むしろこれを書くためだけに半年を費やしたようなもんだし。うん。長かったな。

誤字脱字あったらすいません。感想待ってます。

ｗｅｂ拍手とりつけました。コメントくださった方には、活動報告にて返信させていただきます。お気軽にクリックしてください。

第五十三話　同情するよ、容赦はしないけど

「勇者というものは、こんなものなのか」
時の魔王、イリアーデ＝フォン＝クロノーベルは深く失望したように嘆息する。イリアーデの前に呻きを上げ、倒れ伏すは彼の勇者一行。何とか立とうとする、まだ少年の面影を残す若い勇者。怯え泣く魔術師姉妹。絶望の色に染まった槍使いの青年。それらを眺めて、一言。
「実に、つまらん」
イリアーデは玉座で頬杖をつきながら、再度落胆の溜息を吐いた。彼らがこの場に足を踏み入れてきてから、イリアーデはただの一度も玉座から立ち上がることはなかった。いやむしろ、挙動という挙動すらもとっていなかったように思える。
「おのれぇ……魔王っ……！」
イリアーデは見下げ果てたかのように、勇者の負け犬の遠吠えを聞き流していると、入り口の扉から一人の騎士が躍り出てきた。
援軍か！　と勇者一行が目に希望の光を一瞬宿したが、騎士の男は瀕死の体で、かつ蒼白になった顔で、言った。
「ゆ、勇者殿！　て、敵が！　斬り倒したはずの敵兵がよみがっぎゃあああああああ！！」
騎士の背中を、巨大な斧が堅固な鎧ごと斬り潰した。背後にはメイド服の女が、ウフッ、と口に手を当てて微笑んでいた。
「ごくろう」
イリアーデが労うと、メイドは優雅にスカートの裾を摘まみ、恭しく礼をしてから、霧のように消えていった。
「ど、どういうことだ？　俺達は城内の兵を倒してここまで……」

「たわけが。あれは我が作った幻だ。城内おろか、城下の民を含め、とうの昔に皆非難させておるわ。現在この城には、我一人しかおらん」

イリアーデは仕方なしと言わんばかりに説明してやる。

「ば、バカな！　確かに俺は斬った手応えを感じた。実体のある『幻視（ヴィジョン）』などありえるはずが」

「たわけ、と言っているだろうに。いつ我が『幻視』などという子供騙しを使ったと言った？　我が用いたのは魔術ではなく《魔法》――――つまりあれは『幻視（ヴィジョン）』ではない。『幻影（ファントム）』だ」

「なっ……！？」

「もっと砕いて言ってやろうか？　魔術の領域を超えた《魔法》でなら、実体のある幻を作るのも朝飯前ということだ」

まあ、時間的には今はランチと言うべきか、とイリアーデは哄笑した。せめてもの面白味を無理に楽しむかのように。実際そんな笑えるほど面白くもなかったが。

「勇者よ、分かるか？　これが力の差というものであり、覆せぬ天秤の傾きだ。はっ、勇ましき者とは何とも大仰なことだ。貴様のはただの蛮行に過ぎん。その愚かな勇ましさ故に、貴様を信じて付き従ってきた数百の兵は、無惨にも命を落とした。貴様は勇者でも何でもない。ただの愚者であり、弱者だ」

実はまだ城壁の外には、千人近い本隊が控えていることを、イリアーデは寸分漏らさず把握していた。そちらの方へは優秀な部下達が向かっており、今頃、阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっているだろうとなあとイリアーデは、憐憫にも似た思いが心中をよぎる。では、今回の犠牲者の数は千と数百。まったく、これ以上墓穴をどこに掘れというのか。

「……お、おのれえええええええええええっ！！」

勇者アルムは、怒りと憤りに身を任せ、剣を持ち直し、再び魔王イリアーデへと突っ込んでいく。仲間の魔術師二人が制止を叫んだが、彼の耳には到底届くことはなかった

「たわけ、というのがまだ分からぬか」
苛立った声音で、イリアーデは、ターンッ、と座ったままの姿勢でタップを踏む。王の間に反響する音に応じて、イリアーデの影が触手状に伸び、目にも止まらぬ速さでアルムを拘束しようと迫った――が、アルムはその攻撃を掻い潜り、イリアーデが座す玉座まで剣先を伸ばそうとする。
しかし。
「ふん、鼬の最後っ屁にもならぬ」
アルムが振り下ろした剣尖は、半円状に展開された不可視の障壁によって弾かれていた。呆気にとられているアルムを、イリアーデは腕の一振りで、瞬時にアルムを影で束縛する。
「……よいか若造。その血気盛んな様は、食って寝ることしか知らぬ豚よりも格段に劣る。『若気の至り』と言ってしまえば簡単だが、その為に犠牲となった者達の命が報われんな。国王か、宰相か、いったい誰に唆されたかは知らんが、偏に貴様の愚かさが原因でもある」
イリアーデは直接アルムから剣を奪い取ると、
「ふんっ――単に手の込んだ儀式礼装をしただけの剣が、『聖剣』だと？　笑わせる。我に傷を付けたかったらネーブルランドの『ジュワユーズ』でも持ってくるがいい。こんな鈍、いくらあった所で、無意味にもほどがある」
魔王イリアーデは刀身を鷲掴みにし、あっけなく握り潰した。ウェルテール王国で代々受け継がれてきた聖剣は、『終端』の魔王の前では鉄屑にも等しかった。勇者アルムは、聖剣の無惨な最期を見て、うなだれるように今度こそ戦意を失った。
「せめてもの情けだ。貴様ら四人だけは殺さずに逃がしてやろう。どこぞへと好きに行くがいい」
自国へと帰り、負け犬だと多くの者から怨まれ、憎まれ、罵られようと。途中、どこかで野たれ死のうと。
「貴様らの勝手だ」

イリアーデは、言い放つ。しかし、そこで。

「やれやれ、勇者というのも存外役に立ちはしませんな」

イリアーデ、の声ではない。王の間の隅から、忽然と姿を現した、白髪の男。

「セルグス――――最後まで、信じたくはなかったが、やはり、お前の手引きか」

セルグスと呼ばれた初老の紳士染みた男は、「さようで」と恭しく頷いた。年輪を思わせる深い皺が顔に寄っているが、すらっとした長身痩躯で、肩幅が広く、床にまで着く夜色のマントを纏っていた。

「今回の騒動は、全てお前の仕業で、間違いはないか」

「さようで」

セグルスは重ねて、肯定を繰り返した。

「……先代の頃より、お前には長らく世話になった。今の我…私があるのは、セグルス――お前のおかげとも言っていい」

それが何故、とイリアーデは悲しげに、けれども冷徹さを孕んだ声で、訴える。

「お嬢様。いえ、イリアーデ様。前々から申し上げていました通りでございます。先の王、『恐慌』のイデリオス様とあなた様は、酷く違いすぎた。異なりすぎたのでございますよ、イリアーデ様」

セグルスは疲れ果てたような目で、淡々と話し始めた。

「恐怖ではなく調和でもった統治。話し合いでの平和……どれもこれも『恐慌』の時代とは、相違があり過ぎるのでございますよ。温く、甘く、何よりこの腑抜けた空気が、わたしには耐えられないのでございます。抗う者に下すは慈悲ではなく、容赦のない鉄槌なのです。ですが、あなたはこうして慈悲をかける。わたしからも言い

たい。先代の背中を一心に見てきたあなた様が、何故に、この愚かな人間らに容赦をかけるのか」

「セグルス……力で抑えたり、恐れで統べるやり方も、もう旧いのだ。『恐慌』の時代は終わった。無益な争いは避け、今は誰もが手を取り合って生きていかねばならない」

「それは、理想でございます」

とセグルスは一瞬口を噤み、

「……わたしは、怖いのでございますよ。時代に取り残されるのが。歴史に置いていかれるのが。わたしは……」

「もう、よい。お前の処罰はより厳格なものとする。覚悟は、出来ているのだろうな」

「覚悟――――覚悟ならないこともありませんが、しかし、わたしは諦めたなどとは、一言も申しておりませぬが？」

「何だと？」

セルグスは不気味にほくそ笑むと、腕を盛大に振り上げて、自らのマントをはためかせた。波を打つマントの影から、突如として顔を覗かせたのは。

「母さん！」

「レイ、ル！？」

レイルフォード＝ヴィン＝クロノーベル。

漆黒の髪。瞳の色は闇に染まったかのような黒。まだ七つにも満たない小さな身体で、懸命に母を呼ぶ。数年前、不治の病にて亡くなった夫。ロラン＝シューレヴィッヒ＝クロノーベルの生き写しのようなその姿。何から何まで愛して止まない、最愛の息子。

今は亡き夫の、忘れ形見。

腹を痛めて、産んだ我が子。

唯一無二の、何よりも愛しい存在。

「ど、どうしてレイルがここに……まさか、セグルス！　貴様

――ラフェルとアルベルトはどうした！」
「邪魔だったので殺しましたが、何か？」
しれっと平然に言い放つ臣下を、イリアーデはわなわなと震える拳をそのままに、勢いよく立ち上がった。
「セグルス。よもやここまでするとはな。ただで済むと思うな！」
イリアーデは自らの魔力を解き放ち、激昂をあらわにしてセグルスを睨みつける。その殺気。そのプレッシャー。もし常人がこの場にいたら、もはや立っているどころか、呼吸すらまともに行えなかったであろう。だが、老獪さと老練さを具現化したかのようなセグルスの立ち振る舞いは、依然として変わらず、ただ人質としてレイルフォードの肩を掴み、自由を奪っていた。
「セグルスよ、まさか私に敵うとでも思っているのか？」
「滅相もございませんよ、イリアーデ様。それ故に、こうしてご子息様を人質にしているのでございますから」
あくまでも淡白な物言いを続けるセグルス。
「ね、ねえ、セグルス。いったい何なの？　ラフェルは？　アルベルトはどうしたの？　セグルス、答えてよ」
レイルフォードは、不安げにセグルスの見上げるが、
「ご安心ください、レイル様。すぐに、ことは終わります」
「レイル！　今すぐその男から離れて！」
母親の叫びは空しくも響く。レイルフォードは、セグルスが掴む手により動きを封じられていた。
「セグルス、い、痛いよ。離して……か、母さん」
「さて、どうしますかな、魔王閣下。良い返事が貰えれば、互いにとっても僥倖でございますが」
「……や、やめてくれ。地位が欲しいなら、好きなだけくれてやる。この国が欲しいなら、勝手に持っていけ！　だが、その子だけは、レイルだけは、どうか、頼む。返してくれっ」
イリアーデは泣き崩れそうな顔で、懇願する。この国の民を、未来を、なげうってまで、魔王は自らの子を選択した。それはあまり

に浅はかな、愚劣極まりない行為だったかもしれない。しかし、イリアーデは魔王であると同時に、一人の母でもあった。子供を盾にとられれば、それはあまりに弱く、脆い。例え最強を誇る魔王であったとしても、我が子を前にすれば、普通で、平凡なただの母親にすぎなかった。

「そのお答えが聞けて、歓喜の至りでございます。すなわち、現在をもって王位は継承され、わたしめが魔王となりました。それに、異存はございませんね？」

「いい、それでいいから！　早くっ――早くレイルを！」

「分かりました」

「セグルス。なんで、母さんが泣いているの？　どういう、ことなの？」

純粋無垢な瞳で、戸惑った声で尋ねるが、

「さあ、レイル様。イリアーデ様が、お待ちになっております」

イリアーデの必死の嘆願に、セグルスはレイルフォードの肩から手を離した。レイルフォードは未だに困惑げな視線をセグルスとイリアーデの間で泳がせていたが、すぐに母親のもとへと駆け寄ろうとして、

「さようなら、坊ちゃま」

その小さな背中を、刀身が吸い込まれるように刺し貫いた。

時間が、息を止めたかのようにイリアーデは思えた。

レイルフォードの胸から生える、鈍い光沢のサーベル。心臓ごと、確かに貫き通していた。

「か、母さ……ん」

セグルスが、突き刺したサーベルをレイルフォードから乱暴に引き抜く。レイルフォードは、吹き出す鮮血を周りに撒き散らしなが

ら、ゆっくりと固い床に倒れていった。冷たい石床に広がる、鮮烈な血溜まり。言わずもがな即死だった。

「　　！！」

声にならない叫びをあげながら、イリアーデは血溜まりの中心にいる息子の所にまで、文字通り飛んでいった。命絶えた子供の亡骸を抱き上げ、ひたすらに名前を呼び続ける。もう二度と光を映すことのない虚ろな瞳。未だに胸の穴から源泉のように溢れ続ける赤い液体。解答はとっくに彼女の中で出ているだろうに、それでも、イリアーデは度を失いながらも、息子の名を叫ばずにはいられなかった。

精一杯に抱きしめ、既に息子の心臓の鼓動がないのだと知る。

悲鳴。

絶叫。

慟哭。

咆哮。

そんな言葉では表現しきれないほどに、イリアーデは喉が裂けんばかりの声を張り上げた。そこに魔王としての威厳や尊厳などはなく、ただ、我が子を失った一人の哀れな母親の姿があった。

「ふん。人間のような劣等種との間に出来た子など、存在してはいけなかったのですよ。あなたが、あの黒髪の人間と結ばれたことがそもそもの間違いだったのです。穢れた血は、絶たねばなりません」

歪んだ思想も、また然り。

と、セグルスはマントの内から新たにもう一本のサーベルを取り出し、イリアーデの魔術から解放されたアルムの前に放り投げる。

「勇者よ、イリアーデが我を失っている今が機会だ。魔王の首を獲れ」

アルムは、足元に転がってきた剣を呆然と見下ろし、やがて、ふるふると力なく頭を横に振った。
「――ッ最後まで役に立たぬ駒が！」
盛大に舌打ちを響かせてから、セグルスは両手を合わせた。そして禍々しい魔力を帯びる黒い球体を生み出し、頭上でバルーンのように膨張させる。
「さらばです、お嬢様。すぐに、ご子息と一緒の場所へと送ってさしあげます」
ニヤリ、と口の端を持ち上げ、勝ち誇ったように笑うセグルスは、膨らんだ漆黒の球を弾丸のように放つ。イリアーデは、変わらず息子の屍を抱いたまま、嗚咽を繰り返していて、周囲の状況など、まるで視界に入っていない様子だった。
イリアーデに、確実とした死が、訪れようとする、が。
ふと、空気が怯えたように震えた。
耳が痛くなるような静寂が、唐突にこの場を支配する。
イリアーデの嗚咽も、いつの間にか終わりを告げていた。

「死なせはしない」

部屋全域に展開される魔方陣。浮き上がり、あちこちにへと飛び交う魔語の奔流。魔方陣は怪しく発光し、部屋どころか、城全体が地鳴りのように揺れていた。
「こ、この術式は――まさか！？　や、やめろ！　お前はこの城を、

いや、この国ごと滅ぼす気か！？」
死なせはしない。
決して、死なせなどさせるものか。
それが、イリアーデの願い。その為になら、世界の法則や秩序も捻じ曲げ、引っ繰り返すことだって構わない。
自らの命だって、喜んで差し出そう。
世界が壊れたって、どうでもいい。
この子のいない、世界など。
私は。

「……その後、どうなったの」
イリアがとつとつと、もしくはぽつぽつと語る彼女の過去に耳を澄ませながら、俺はその先を促す。
「私が発動しようとしたのは、『蘇生』の《魔法》。もともと、《魔法》というのは、魔術の枠組みから大きく外れたイレギュラーな存在なの。その中でも、ことさら特に禁忌として扱われているのが、

『蘇生』。死んだ者を、生き返らせる魔法。でも、私は、失敗した。結果から述べれば、『蘇生』の魔法は発動しなかった。本来、成功出来るものでもなかったのだけれど。それで、施行に失敗した膨大な魔法の反動は、城を含め、私が治めていた国さえも飲み込んで、消滅させた。当然、私の肉体も跡形もなく消し飛んで、ついでに魂の半分を、世界に抉り取られた。禁忌を犯そうとした、代償なのでしょうね。この身体に再生するまで五年もかかったわ。あれは、可笑しかったわね。目覚めてみれば、城も国も全て滅んでいたんですもの。瓦礫と、更地しかなかった。私は何もかも失ったのだと知って、ホント、可笑しかった」

クスクス、とベッドの上で小さく笑うイリアを見て、俺は心臓が突き刺されたような痛みを感じた。まるで、イリアの息子――レイルフォードの霊がイリアの回想から飛び出してきて、俺に乗り移ったみたいに。

まさに、胸に風穴を開けられたような心地だった。

「それから、私はその地から逃げるように歩き続けた。力も、完全に戻ってなかったしね。低級の魔物でさえ、あの時の私には脅威だった。だから、数年前、遥か南、このリブラルにやってきたの。旧い知り合いの、グリンダを頼ってね。それ以来、私はここでいずれ訪れる自分の死を待とうと思った。魔力の大半は回復したけど、持っていかれた魂の半分は、どうしようもなかったから、ね。どことなく、死期が近いってことは分かってた」

魂の半分を持っていかれたとは、いったいどういった感覚なのだろう。しかし、その謎を解明する前に、明らかにしとかなきゃいけない事実確認があった。

「君が、俺を最初に見つけた時、俺は、ほとんど死んでいたんだよな？」

「そう、ね。ほぼ、生きているとは言えない状態だったわ」

俺の言葉に、イリアは首肯した。

では、何故。俺がこうして生きている理由。

正直なところ、なんとなく察しがついている部分もあるのだが。
だが、やはり、イリアに口から直接確かめなければならなかった。
だから、尋ねてみる。
「なら俺は、どうして今生きている？」
「私の魂をあげたから」
イリアは、そう事も無げに言ってのける。
俺はイリアの言葉の意味を口の中で何度か吟味してから、再度訊いてみた。
「魂を、あげた？　そういったモノは、あげたり交換したり出来るものなのか？　何より、イリアは既に魂を半分なくして……」
イリアは、平然として微笑み、俺の顔を優しく見つめた。
「言い方が、少し突飛過ぎたかしらね。私は、自分の残りの魂（いのち）を対価に、あなたを瀕死の状態から救い出した。息があるうちは、いくらでもやりようがあるからね。ただ、それだけのことよ」
死期が早まることも、寿命が縮まることも、承知の上で。
ただそれだけ、って。
そんなのってないだろ。
「……それじゃあ、俺は、イリアの」
「レイシが邪教に襲われた原因の一端は、私にもあるの。私の、闇の本質。レイシの魂の半分は、私のだから。故に、あなたにも闇の魔力が備わっているわけ」
「何でだよ……そんなのってないじゃないか、イリア。俺のせいで、イリア、君は」
「私も、ゼロに等しい魂の欠片と魔力だけで、よくここまでもったと思う。実際、不思議だわ。今こうしてあなたと会話出来るだけの時間があるだなんて、奇跡としか思えない」
「何で、何でなんだよ、イリア。なあ、何で」
「レイシ、私は、充分に生きたわ。いえ、長く生き過ぎたのね、きっと。だから、涙を拭いて、レイシ。そして、もうおやすみなさい。私も、今日は疲れた」

そう言って、イリアはまどろむように目蓋をおろした。
俺は、荒っぽく服の袖で目元を擦った。
どうしたものか、涙は一向に止める気配をみせなかった。

第五十三話　同情するよ、容赦はしないけど　（後書き）

総合ユニーク数四万越えありがとうございます。ＰＶはあとちょいで五十万。

第五十四話　もう、失敗など恐れはしない

誰かの幸福が、また誰かの不幸の上になりたっているのと同じように、俺達は皆、他者の犠牲によって存在している。それはあまりに当たり前のこと過ぎて、殊更違和感を抱くことも、別段意識することもなく、日々日常を謳歌しようとする。その当然であったはずの日常が、宣告もなく唐突に瓦解すると、俺達は決まって、『ああ、何で自分だけがこんな目に』と理不尽な現実に憤慨する。

単に、お鉢が回ってきただけだというのに。犠牲になるのは、まっぴら御免被るというのが正直なところ。つまり、被害者になるくらいになら、加害者のままでいたいというのが、人間の本音である。誰だって、痛い思いも、辛い思いもしたくない。それは、至極普通のことである。

でも俺は。

誰かが犠牲になるくらいだったら、死んだ方がマシだった。

誰かが苦痛に悶え続け、もしくは死に絶えていくくらいだったら、生きていくことに何の価値も見出せなかった。呼吸をしているのが間違っている気がした。生きていること自体が誤りだと思った。けれども、誰も俺を死なせてはくれなかったし、何よりも、俺は俺自身を情けなくも殺せずにいた。不憫で、不便な構造をしていると、我ながら思う。

死にたがりの生きぞこない。

だが、今ここにある、俺のちっぽけな魂の半分はイリアのものだと。俺の卑小な生命は、イリアの犠牲でなりたっているのだと。そんなのって。

「そんなのって……ないじゃないか」

俺は通算何度目かになる言葉を吐き出す。
何で君まで、俺なんかを生かそうとするんだ。生きて欲しいだなんて、笑って言うんだ。俺にとっては、その一言ほど残酷なものはないというのに。
「うっ……う……」
寝台で、イリアが苦しそうにうなされていた。あれから、イリアは潮が引いていくように、ほのかな寝息を立て始めたが、俺はベッドの傍らに椅子を持ってきて、ひたすらにイリアの寝顔を見守るばかりだった。かれこれ数時間が経とうとしており、外では夜の帳（とばり）が降り、おぼろげな月光だけが家の中を淡く照らしている。もうおやすみなさい、とイリアには言われたが、こんな状況ですやすやと眠れるわけもなかった。
俺はイリアの顔を覗きこみ、その手を握った。
「……、れ、レイ……レイ……」
イリアは、誰かの名前をか細く唱えていた。最初は俺のことを呼んでいるのかと思ったが、どうやら違うようだった。
イリアは。
「レイ、ル……レイルフォード……」
レイルフォード。イリアの、最愛の息子。失った、もう二度と戻っては来ない者の名。
俺は握った小さな手にぎゅっと力を込めた。
「ここにいます。俺は、ここにいます」
「あ、あぁ……レ、イル」
イリアは、薄っすらと目を開けた。窓から差し込む神秘的な月明かりが、俺達を優しく包む。そのせいか、この場に満ちる空気が、何か特別なものに変わったのだと分かった。
レイル、レイル、レイル。
繰り返し、繰り返し、イリアは我が子の名前を連呼した。ぼんやりとした虚ろげな瞳は俺を映しているようで、そうではない。俺の姿を通して、遥かどこか、悠久の果てを見据えているようだった。

「……レイル。あぁ、あ、ごめんなさい……あなたを、生かしてあげられなくて」

微かに震えた唇から漏れ出る言葉は、今は亡き者に対する後悔と赦罪だった。

「……俺は、あなたから生を受け、この世に生まれた。息を吸った。地面に立てた。そして何よりも、あなたに――――出会えた。ただ、それだけで俺は嬉しかった」

おそらく俺も、自分自身ではなくなっていた。処世術のような、ありきたりの演技をしているわけでもなかった。本当に、レイルフォードの意識が俺の身体に乗り移ったかのような錯覚を――否、錯覚や幻想の類だったとしても、今ここにいる俺は違えようもなく、イリアの息子。レイルフォード＝ヴィン＝クロノーベルだった。

「でも、私は……もっと、たくさんのことを、あなたに教えたかった。伝えたかった。ごめんなさい。こんな、情けない母で。私は、あなたに生きて欲しくて……その為に、全てを失った。なんにも、取り返せなかった。ごめんなさい……私が、魔王だったから。弱かったから、何も守れなかった」

どうか、こんな哀れな私を許してね――とイリアは堰が切れたように、ぽろぽろとに溢れ出る涙で頬を濡らした。俺の手の甲にも、枯れ地を潤す慈雨のように、ぽたぽたと雫が落ちた。

「――違う。それは、違います。だって、俺は」

そっと囁くような声量で、しかし、はっきりと俺は――――

「魔王（あなた）の息子で、俺は幸せでした」

イリアが、驚きに目を見開き、言葉を失った。

どっちか子供かなんて、初めて会った時から分かっていた。

どこからどう見ても幼い少女でしかないイリアに対して、ルイやヴァネッサのように、単なる年下相手として接してこなかった理由。実際、無意識的な何かだったとしか言いようがない。隠れた潜在意

識が、自分でもまったく気づかない内に、イリアを見たことも聞いたこともない母の面影とダブらせていたのだ。

孤児である俺にとって、『親』という単語ほど希薄なものはない。だからこそ、なのかもしれないが。

俺にとってのイリアは、命の恩人で、この世界での救いで、もはや家族でもあって。そう、温かくて、慈愛に溢れた、母のような。

つまりは、そういうことなのだろう。

「あぁあ……レイ、ル。ありがとう、私は、私は……うん。ありがとう……」

ありがとう、レイシ。

指を絡めた手から、はっとして彼女の顔に視線を移すと、イリアは上体を起こし、絶えず涙を流しながらも、儚げに微笑んでいた。その瞬間、フッ、と肩が急に軽くなったような気がして、俺はレイルフォードから鯨木澪士に戻ったのだと思った。

「……ごめなさい、レイシ。こんな、茶番に付き合ってくれて」

「茶番だなんて、そうじゃないよ」

「あのね、レイシ。私、ようやく――いえ、最初から分かってた。私は、あなたを救いたかったんじゃない。私が、ただ救われたかっただけなんだって。過去の償いをしたかっただけ。あなたで、清算したいだけだった。すごく、ズルイよね。卑怯だよね、私。許してだなんて、言える義理じゃないのにね」

「……そんなの、関係ないじゃないかっ。俺は、イリアに助けられたんだ。イリアから、この命を貰ったんだよ！　救うとか救わないとか、そんなの関係ないんだよ！」

「……ねえ、レイシは私と過ごしてて、楽しかった？　少しでも、幸せだったかしら？」

「なに、言ってんだよっ。んなもん当たり前だろが。俺はイリアと過ごせて、し、幸せだったに、決まっ、てんじゃん……かよっ！」

最後の方は、嗚咽のせいで声が喉につっかえた。もどかしい。

「そう。なら、よかった」

そう小さく呟き、ゆっくりと俺から手を離すイリア。煩わしそうに、ごしごしと目元を擦ってから、

「レイシ、こっちきて」

小さく猫のように手招きし、互いの鼻頭がぶつかってしまいそうなほどに俺はイリアに近づいた。イリアがそう指示したからだ。

「なに、イリア」

「そのまま、じっとしてて……」

コツン、とイリアは互いの額を合わせると、俺の胸にそっと指を置き、微かに唇を震わせた。

「《血は、流れ受け継がれし　肉は、朽ちて在り続け　祖の意思は、古よりここに至れ》」

――途端、イリアの指先が輝きを帯びだした。心地良い温もりと共に、その光は波紋を打つかのように広がり、俺の中で膨大な何かが浸透し、満ち足りていくような、不思議な感覚がした。

「イリア、これは？」

イリアは力尽きたように、音も無く再び寝台へと身を沈めた。

「私の使う、最後の魔法。魔王が、次の世代に力を受け渡す時に使う、儀式。レイシの魂は、半分私のだから、施行することが出来たの。ほら、これからレイシは一人で意思疎通の魔術をしていかなくちゃいけないし、それに他にも色々と必要になってくるものだと思うから……だから、受け取ってよ。私が出来るのは、精々これくらいだもの」

「――そんなもの、いいんだよ！　イリア、ただ、俺は」

「……ふふ。男の子が、泣いちゃダメじゃない」

男の子は、強くなくちゃ、イリアは俺の頭を撫でた。愛おしそうに。慈しむように。優しく、柔らかに。そのまま両の手で祈るように、俺はイリアの手を握り締め、誓う。

決して破られることのない誓いを立てる。

「ああ、分かったよ。強く……強く、なるから。魔王（イリア）の息子の名に恥じないくらい、強くなるから。もう、泣かないから」

迷いを捨てて。惑いも棄てて。涙を拭いて。諦観を追い出し。虚構も放り出し。苦痛に屈しず。困難に折れず。正義ではなく覚悟を。大儀ではなく己が意思を。逃げることなく立ち向かい。臆することなく突き進み。前を見つめ。後ろは振り返らず。生を迎え。死を受け入れ。理屈を無視し。道理を切り崩し。飽きることなく宴を始めろ。

もう、失敗など恐れはしない。

「……それでこそ、私の息子（レイシ）。私の、自慢の息子。どうか、強く生きてちょうだい。あなたの幸せを、いつだって願ってる」

「はい……母さん」

イリアは俺を救いたかったわけではなく、自分が救われたかっただけだと言ったが、だとしたら果たして、俺はイリアの救いになったのだろうか。

救いなんかに、なれたのだろうか。

「ねえ、イリア」

イリア――――ねえ、イリア。

「……なあ、イリアってば」

ねえ、答えてよ。

東の夜空が次第に白み始め、朝焼けの光が世界を新たな息吹で満たす頃。

イリアは、静かに息を引きとった。

第五十四話　もう、失敗など恐れはしない（後書き）

次回、最終話。
と、エピローグ。
同時更新の予定です。

最終話　バイバイさよなら御機嫌よう（前書き）

「彼の勇ましき者はかく語りき」
「其の魔なる王はかく語りき」
「屈辱と交わり後悔を孕め」
「矛盾を抱え、最悪を産み堕とせ」
「撃鉄を起こせ、されど詰める弾はどこぞ？」
「血刀を振るえ、されど収める鞘はいずこ？」
「なれば狂逆と暴虐の詩（うた）を謳（うた）え」
「ならば凶逆と忘却の謡（うた）を詠（うた）え」
「苦肉を嘲り、自虐を嗤え」
「皮肉を蔑み、諧謔を見下せ」
「我らの宴は始まった」
「我らが宴は始まった」
「拮抗する世界の意思は逆らうことなく混ざり合い」
「相対する人の意志も欲望のままに雑じり合う」
「いつか訪れる失楽園がため」
「破壊と再生の輪廻がため」

「「我らは永久（とわ）に永劫を待とう」」

「救われない救済者から」
「救いのない救世主へ」

「「しからば、真実の物語たらんことを」」

最終話　バイバイさよなら御機嫌よう

ブルートアイゼン撤退。リブラル、イベリタ、ヘッジホッグ、カトレイの同盟国は、ブルートアイゼンと停戦条約を結び、一ヶ月にも満たない短い戦争の幕は降りた。

戦争終結という吉報がリブラル国にもたらされ、武器や防具といった商品を扱っていた商人や職人などの一部を除き、おおよそ全ての国民が歓喜と安心に満たされていた。当然、戦時中に友や家族を失った者は多いだろう。しかし、今はただ、亡き者達の追悼よりも、戦争が終わったのだという事実に喜びの声をあげ、戦場で散った英雄達の冥福を祈るばかりだった。

そして、ここセレンもまたちょっとしたお祭りムードになっており、あちこちで宴会などが催されている始末だった。

無論、『マランディの酒場』も例外ではない。けれど午後を過ぎた辺りになっても、店の中はがらんどうで、唯一、レヴェッカとヴァネッサの姉妹がいそいそと動き回っていた。

「あ、ヴァネッサ、そこのイスも外に出しちゃって」

姉がテーブルの位置を確かめながら、妹に指示を出す。妹はコクリと頷き、椅子を抱え外に出て行った。

「まったく、父さんも買出しに行ってから遅いわね。どこで道草くってんだか」

レヴェッカは燃えるように広がる紅い髪を揺らし、ぶつぶつと呟いた。

『マランディの酒場』では只今、日が傾くのを合図に開始する本格的な宴会の準備でてんてこ舞いだった。父親のガイルには、その為

の追加食材を大量に頼んでおいたのだが、まだ帰路には至っていない。どうせ、途中で一杯ひっかけているに違いない、とレヴェッカは嘆息した。

「もう、こんなんで間に合うのかな。なんだか心配になってきた」

と、何故に自分がそんなに杞憂しているのか、今頃になって気づく。いつもの調子で、『コーレア』のメンバーが訪れるものだと想定していたからだ。

冒険者ギルドからは、依然として行方不明、生存不詳の通達があるばかりで、ギルド全体も、既に『そういうことである』との認識をしつつあった。

「まだ、慣れてないんだなあ、私ってば」

表情を曇らせ、苦笑するようにレヴェッカは言う。どうにもこうにも、彼らが死んだのだという実感が持てずにいた。いつも通り、『コーレア』の四人ががやがやと騒がしくも来訪し、次々に料理を注文していくような。

ほらこんな感じに、まずそうやって初めにクリスさんの大剣が目に入ってきて、それで――――

「クリス……さ、ん？」

身の丈ほどもある、巨大な大剣を背負った人影が、入り口のゲートを押して入ってきた。腰には巾着のようにくっついたヴァネッサがじゃれている。

「どうも、レヴェッカさん」

その人物は、嬉々として抱きついてくるヴァネッサの頭を撫でながら、言った。

「……れ、レイシくん？」

レヴェッカは、相対した人物が本当に鯨木澪士本人であるか確証が持てずにいた。膝まで覆い隠す黒褐色の綺麗な布地のローブをまとい、片方の肩には皮製の背嚢を背負っていて、正面のローブの隙間からは、ナイフや試験管のような細長いガラス容器を収められたベルトポーチが二重に巻かれているのが覗けた。そう、一言で表す

なら。
旅装束。
だが別に、何も普段と身なりが違うからといって、彼だという確信がもてなかったわけではない。いや、それもまあ要因の一つではあるのだが、レヴェッカが一等感じた平生のレイシとの相違点は――そう、雰囲気。大変曖昧で胡散臭い表現になってしまうのだが、そうとしか言いようがなかった。
もしくは、何かが吹っ切れたような。これから死にに行く兵士のようでもあり、生きる希望を諦めない戦士のようでもある、そんな雰囲気。
「ど、どうしたの、その格好？」
レヴェッカは心中戸惑いながらも、問いかける。
「これから、しばし旅に出るんで。お別れを言いにきたんです」
今まではしゃいでいたヴァネッサが、澪士の言葉を聞いてビクッとして硬直した。
「た、旅って……そんな、急に」
「すみません。どうしても、今すぐ発たなきゃいけないんです」
「……だ、だって、まだリュシオール銀貨が、二枚分も……清算、しきってないじゃない」
レヴェッカは、語尾を震わせて澪士を見つめるが、澪士は困ったように笑って、すみません、と再度詫びた。
「それじゃあ、約束します。いつになるか分かりませんが、またここに戻ってくると。その時は、たらふく食べさせてください」
「ほ、本当？　約束だからね、絶対だよ」
「はい」
澪士は頷き、先程から固まったまま動かないヴァネッサと視線を合わすように屈みこんで向き合った。
「ヴァネッサ、ごめんね。俺、これから多分、すごく遠いところに行くことになると思う。ヴァネッサとは、会えなくなる。勿論、それは俺だって悲しいし、寂しいよ。でも、仕方がないことなんだ。

だから、ごめんね、ヴァネッサ」
　諭すような口調で澪士は言うが、ヴァネッサは目に涙を浮かべながら、澪士の袖をぎゅっと掴み、いやいやと首を振る。いかないでよ、ここにいてよ、という彼女の精一杯の意思表明に、澪士は眉を八の字にした微笑みで、優しくヴァネッサの指を解いた。
「ごめんね」
　重ねてその言葉を言い、立ち上がる。
「それでは、レヴェッカさん。ガイルさんにも、よろしく言っといてください。……じゃあね、ヴァネッサ」
　店の外へ出て行こうとする澪士を、ヴァネッサは、ハッとして必死に追いかけた。
「……ッ、……ッ！　……ッ！」
　ヴァネッサは店先まで走りだしてから立ち止まり、声なき叫びをあげる。ヴァネッサの数メートル前で、澪士は振り返らずに歩みを止めた。
　声が、届いたわけではない。そもそも、彼女には声なんて代物は有していないのだから。しかし、彼はしっかりと彼女の言葉を受け止めていた。
「――俺も大好きだよ、ヴァネッサ。君が大きくなったら、逆に俺の方から口説きにいっちゃうかもね。立派なレディーになりな。大丈夫、きっとまた会えるよ」
　だから、バイバイ。
　澪士はヴァネッサに背中を見せたまま片手を振り、再び歩き出した。次第に遠くなっていく彼の後ろ姿を眺めながら、ヴァネッサはその場にしゃがみこんで、今度こそ咽び泣き始め、今しがた彼に伝えた言葉を喉が枯れるまで声を張り続けた。中から遅れて出てきた姉のレヴェッカがなだめるのも聞かずに、何度も何度も。
　お兄ちゃん。

次に会ったときは、私をお嫁さんにしてくれますか。
大好きだよ、お兄ちゃん。

「へえー、旅かぁ。いいわね、そういうの。あたしも人生で一度くらいはしてみたいものだわ。それで？　いつくらいに戻ってくるの？　来月？　まさか、来年になるとか言わないわよね」
いつものようにサラサは図書館にて書庫整理に明け暮れながら、澪士が口にする内容にさして驚くこともなく、その詳細を訊いた。
「いや、分からない。何年後かもしれない、何十年後かもしれない。もしかしたら、この街にはもう帰って来られないかもしれない」
「ふうん」
サラサは軽く相槌を打ってから、バサバサ、と抱えていた数冊の本を落とした。今聞いた言葉が信じられない、という風にしばらく放心してから、下に落とした本をそのままにして、半月上の司書机に寄りかかっている澪士につかつかと近づいた。
「それって、何の冗談？」
「いや、冗談じゃないよ」
「嘘でしょ？」
「嘘でもない」
いつものような、ふざけた態度ではなかった。いや、既に自分は分かっていたのかもしれない。その出で立ちや、明らかに違う異様な雰囲気から。それ故に、わざと目を逸らすような対応をとっていたのかもしれなかった。

「いったい、どうしたのよ。そんなの、レイシらしくない」
「確かに、俺らしくないかもな」
澪士は耳の裏を掻きながら、苦笑した。サラサは、誤魔化さないでよ、とばかりに睨みつける。
「例えばさ、サラサは自分が生きる目的って何だか分かる？」
「……なによ。やぶからぼうに」
「いや、そんな難しく考えなくてもいいんだ。ただ、美味しいものを食べたいとか、楽しいことをしたいとか、誰かと一緒にいたいとか、幸せになりたい、とか。結局のところ、生きるっていうのはさ、そういった簡単な感情や思考の積み重ねなんだよ。俺はさ、長らくそういう単純なことがのみ込めずにいたんだ。人間として、色々なものが欠落していたから。けどさ、そんな俺でもようやく、明確な目的を持てたんだ。生きる目標を見つけたんだよ」
「……それが、その旅だとでもいうの？　分からない。レイシ、全然分からないわ」
「別に、理解しなくてもいいんだよ。どうせ、俺は君の前から消えるんだから」
そう言い捨てて、澪士はこの場から立ち去ろうとする。サラサも出口まで見送るつもりなのか、黙って後をついてった。
「それじゃ、サラサ。今まで、イジワルばっかしてごめんな」
外との境界である扉のノブに手を掛けたまま、澪士は振り向き様に言う。
「……」
サラサは視線を下に落とし、押し黙っていた。少しの間を置いてから、澪士は続ける。
「会ったばかりの頃さ、俺ってばサラサのことは好きじゃないなんて言ったけど、あれ嘘な。俺、本当はサラサのことけっこう好きだよ」
変わらず口を閉ざしたままのサラサに、澪士はもう一度だけ、さよなら、と別れの言葉を述べ、

「待って！」
と、静止の声をかけられた。
澪士は言われたとおり、ぴたっと動きを止め、ドアノブから手を離し、再びサラサに向き直ってみると、しかしサラサはくるりと踵を返していて、奥に引っ込んでいったかと思ったら、すぐさまに全力疾走で戻ってきた。
「これ！」
そのまま澪士の胸に飛び込むかのような形で、一冊の本をぐいっと押しつけた。
「これ？」
澪士は突き出された本を受け取り、しげしげと眺め回してみる。どうやら年代物らしく、一部のページの皺や染みから、随分と読み込まれたものであるということが分かった。背表紙のタイトルには『光の涙』と金糸で銘打たれていた。どうやら短編集らしい。
「これ……あげる」
「え、くれるの？」
「違う。貸して、あげるの」
サラサは震えそうになる声をどうにか抑えて、
「……貸したからには、絶対に返しに来て。あたしの、一番大切で、お気に入りの本だから」
「でも、俺は……」
「返しに、来て」
「……うん、分かった。いつか絶対、返しに来るよ。約束する」
「ほ、本当よ？　絶対の、絶対によ」
「ああ。絶対の、絶対に」
澪士が繰り返し言うのを聞き、サラサは安心したように顔を綻ばせた。澪士も同様に、彼女と確かめ合わせるかのように薄く口元を引いた。
そこで突拍子もなく、澪士は口をついて話し始めた。
「あのさ、サラサ。今すげー無責任なこと思いついたんだけど、聞

いてくれる？」
「いいわよ。またどうせ、くだらないことなんでしょう？」
「うん、メッチャくだらないこと。サラサってば、すごい読書家だろ？　だから、サラサなら自分でペンをとって物語が書けるんじゃないかって」
「……あたしが、自分で？」
「そう。そんで、サラサの書いた本が大陸中でバカ売れするんだよ。そしたらさ、俺はどこの国の街に行ってもサラサの本を見かけるんだ――で、思うわけよ。ああ、サラサは変わらず元気に過ごしてるんだな、がんばってるんだなぁ、って」
「……ふ、ふふふっ、何、それ。すっごく、くだらない」サラサは心底可笑しそうに口を押さえてまでして笑いを噛みしめてから「でも、悪くないわね」と目に涙を溜めて言い直した。
「だろ？」
と澪士が冗談めかして肩を竦めたのを合図に、二人は再度軽く微笑し合った。
「念を押すけど、その本、必ず返しに来るのよ」
「ああ。約束は、必ず守るよ」
澪士は微苦笑を交えながらも、頷いた。
しかし、そのすぐ後の彼女が起こした行動には、流石の澪士も度肝を抜かれたというか、瞠目（どうもく）せずにはいられなかったのではあるが、とうの本人はと言えば、まさに悪戯が成功した子供のような笑顔で、勝ち誇るのであった。
互いに触れ合う、唇。
たっぷり十秒間、サラサは澪士と口付けを交わしてから、ゆっくりと引き離し、件（くだん）の憎たらしいが憎めないような小悪魔的な笑みで、言い放つ。
返済期限は、あたしの生涯を賭けて。

いつまでも、あなたを待ってる。

図書館に向かう途中だったルイが澪士と出合ったのは、何だかんだで縁がある、例の見晴らしのいい高台でのことだった。
「よー、兄ちゃん」
「おぉ、ルイか。丁度良かった。探してたんだよ」
前方から、てくてくと澪士が歩いてきた。ルイはそこで、彼の周りに漂う空気が、いつもと違っていることに気づいた。
どこかで見たことあるような大剣を背負っていることや、冒険者のような装いのことも含め、多少不思議に思いつつも、ルイは澪士に近づいた。
「んー、何だよ兄ちゃん、その格好はよ。これから遠出か？　戦争が終わってどこもかしこもお祭り騒ぎだってのに、ギルドの仕事か何かか？」
「まあ、遠出っちゃ遠出かな」
要を得ない口ぶりの澪士に、ふーんとルイは鼻を鳴らした。
「そっか、んじゃあ邪魔しちゃ悪いな。オレはこれから図書館に行くんだけどよ、なんか姉さんに伝えたいこととかあるか？　伝言があんなら引き受けるぜ」
「いや、もう伝えたからいいんだ」
「え？」
「なあ、ルイ。ちゃんと、姉さんを守ってやるんだぞ」
「……何だかよく知んねえけど、そんなん当たり前だろ」

「そっか。なら、いいんだ」
「ったく、おかしな兄ちゃんだな。んまあ、毎度のことだけどよ」
「ははっ……そんじゃ御機嫌よう、ルイ」
「ああ、またな兄ちゃん」
ルイは走り去りながらも手を振り、澪士もまた片手を上げてそれに応えた。
ただ、いつもと相変わりなく。
しかし、それが二人にとっての最も相応しい別れの仕方なのかもしれなかった。

街にあるただ一つの検問所を抜ければ、目の前に広がるは果てのない丘陵（きゅうりょう）。標高の低い山がなだらかに地平線に沿って波のように連なっている。俺は後方にそびえる外壁を見上げる。外と街との境界線。その壁の右側に沿って、てくてくと進んでいく。やがて外壁は段々とカーブを描き、辺りを見回せばいつの間にか林の中に迷い込んでいた。
「ここ、か」
俺はとある一本の大樹の根元に辿り着く。そこだけ、妙に土が膨らんだように盛られていた。この記憶が確かなら、ここにクリスさん、ラウルさん、アンジェリカさんの三人が埋まっているはずだった。
「……」

とりあえず俺は手を合わし、合掌。しばし黙祷なんかを捧げてみたりした。

クリスさん、あなたの『ジュワユーズ』、勝手ながらお借りします。ラウルさんも、アンジェリカさんも、どうか安らかにお眠りください。俺が言うのも何だか変な気もしますが、まあ、ご愛嬌。

鳥の声も聞こえない静寂の中、突然ゆらりと背中で感じられた気配。

合掌の体勢を解き、正面を向いたまま、のんびりと声をかけてみる。

「何か言いたいことでもあるんですか、グリンダさん」

その蜃気楼のようだった気配は俺の呼びかけに反応するかの如く、急に輪郭を帯び始め、間延びした艶かしい声を出した。

「……へー？　その様子だと、やっぱりイリアってば、君に『継承魔法』を使ったみたいねー。まーそりゃバレるかー」

「言いたいことはそれだけですか？」

「いやー、君は死者を弔うのが好きなのかなあってー」

「俺の国じゃあ、習慣みたいなものですがね」

「ふーん、この国ではあんま聞かない習慣だわねー。まーこれは私の価値観でもあるわけだけどー、人って死んだらそれまでだと思わないー？　肉体は所詮、単なる器でしかないわけだしー、魂が無くなったら、それはただの物なのよー。空っぽの器。虚ろな抜け殻。いずれは土に還り、朽ち果てる代物。そんなものに愛着が湧くなんて、そっち方がよっぽどオカシイと思うけどー」

「――流石に二百年以上も生きていると言うことが違いますね、『空間の魔女』さん？」

振り向き様に俺がそう言ってのけると、グリンダさんは一瞬虚を突かれたような顔をしたが、すぐに「なるほどー」と得心いったようだった。

「……あー『継承』っていうのは、記憶も含めて『継承』するってことなのねー……そっかそっかー。レイシくんに私の実年齢が知ら

れちゃったわー」
いやーん、と左右の頬に手を当て、恥ずかしそうに身をよじらせるグリンダさん。しかし俺は一部の訂正と説明を補足する。
「いえ、記憶の方はごく一部ですよ。本質的に受け継がれたのは、この魔力と能力の方みたいです」
ぐーぱー、と掌（てのひら）を開いたり閉じてみたりする。グリンダさんは先っぽがいい具合にくたびれたトンガリ帽子を不意に目深く被りなおすと、ポツリと呟いた。
「……イリアってば、本当に死んじゃったのかー」
「……ええ」
俺は短く頷く。
「あの岬に、埋めたの？」
「はい。やっぱり、あそこが一番かなと」
海に向かって角を伸ばしたような岬に並ぶ二つの墓石に、新たに加わったイリアの墓標。やはり、親子は一緒でなくちゃいけないと思ったからだ。
「今からでも、行ってみますか？」
と、提案してみたのだが、案の定グリンダさんは厳しい語気に変わって、
「言ったでしょ。私は、死体なんかに興味はないの。物言わぬ相手に一方的な感想を抱くのは、傲慢というものよ。つまらない自己満足に浸るくらいだったら、私は死んでいった者達を切り捨てる」
と、あっさりと却下された。
「それは、とても強い生き方ですね」
俺には、到底真似することなど出来ない。
「そんなことよりもねー、私は君がこれからどうするのかに興味があるわー」
ピンッ、と人差し指で帽子のつばを弾いて、顔を上げるグリンダさん。同時に語調も柔らかいものに戻っていた。
自分はこれからどうするのか。

俺は間を空けずに即答する。
「邪教を潰します」
俺の宣言をあらかじめ予想していたかのように、グリンダさんは呆れた風な表情した。
「……レイシくん。君ね、自分が何を言ってるか分かってるー？　いくら君がイリアの力を受け継いだからといって、簡単に対抗出来るような奴らじゃないのよー？　君を襲ったあの一団も、邪教という組織から見れば、氷山の一角ですらない下っ端だしー。私の所属してる『教会』がいったい何年かけてあいつらを……」
「心配に及ばずとも、十全に分かってますよ。イリアの記憶の中に、邪教のことについての情報もありましたから」
邪教の目的。それは、魔王の復活。正確には、先々代である『恐慌』の魔王の再臨である。
「邪教の黒幕は、セグルスという男らしいですね」
セグルス――イリアの息子であるレイルフォードを殺害した、旧保守派の宰相。そいつは、イリアの魔法の暴走に巻き込まれたと見せかけ、実はちゃっかりと生き逃れていた。魔王の政権と体制が崩れたことによって、久しく身を隠していたが、密かに邪教というもの組織していたのである。
再び、魔王が支配する世界を造りあげる為に。
「そこまで分かってるなら――」
グリンダさんが言おうとするのを遮るように、俺は口を開いた。
俺の決意と覚悟を、言った。
「俺は、魔王の息子です」
「……え？」
「だったら、母親の失敗は息子が取り戻すものです」
あっけにとられたように、グリンダさんは言葉を失っていた。俺は気にせず続けた。
「イリアが犯してしまった失敗なら、息子の俺が取り戻すのは当然のことでしょう？」

目を点にして呆然としていたグリンダさんだが、突如として表情を一変させ、愉快そうに腹を抱えて笑い転げた。
「あは、あははっ、ははは息子！　魔王の息子！　いいわねまったく、息子ときたかー！　あははなんだなんだ、君とイリアってそういう関係だったの！　あはは、私はもうね、てっきり……ふふっ、ふふふ、つい無粋なこと考えちゃってたわねー、私ってばー」
なおも抱腹絶倒状態のグリンダさんは、笑い過ぎて出てきた涙を拭ってから、改めて俺と向き直った。
「そっかー、それが君の決心だって言うなら、私も協力しないわけにはいかないわねー」
「協力、ですか？」
俺は訝しげに訊き返した。
「そう怪しまないでよー。単に私の気が変わっただけなんだからー。私はね、裏切りの逆十字による洗礼を得た、『教会』の犬こと『従僕せし異端者（エレシスレセプトゥス）』の一人。そして、『空間の魔女』の異名を持つグリンダ＝ジェラリッティ。これらの肩書きにまとめて誓うわ。私はあなたの味方になりましょう」
「……いいんですか？　俺がやろうとしてることは、荒唐無稽もいいところなんですよ？　勝ち目なんてあるかどうかすら定かじゃない」
「君一人でなら、ね。私は、あなたを『教会』の一員にしたいと思ってるの」
「俺を、『教会』に？」
「心配しないでいいわ。その強大な魔王の力も教会側にしてみれば異端の対象だけれど、私がいる限り、君が害を被ることはない。安心して。私は、レイシくんの味方になるって決めたんだから」
「どうして、そこまで俺に？」
「分からないかなー？　これはね、私の意地なのよー。君が息子だからってイリアの失敗を取り返しにいくんだったら、彼女の古くからの友人である私の立場はなんなのって話ぃー。単純に、私は君に

負けたくないのかもねー」
「それって、先刻の発言と矛盾してません？」
はっきり言って、これは死者に対する生者の得手勝手な自己満足に過ぎないのだ。しかし、グリンダさんは、
「いいえ、レイシくん。私が興味ないって言ったのは、あくまでも死体よ。つまりは物質。けれど、その概念。その遺志。イリアはね、ずっと後悔してたの。逃げたことを。全てを投げ出して、放り出したことを。私だってね、長らくイリアと付き合ってきたわけじゃないんだから。君がやるってんなら、私だってやるに決まってるじゃない」
ビシッと指を突きつけられた俺は、何だか無性に可笑しさが込み上げてきた。詰まる所、グリンダさんって――
「あー、なにニヤニヤしてんのよー」
「別にー何でもねっすー」
グリンダさんの口マネをして返答してみたら、さらに彼女はプンスカと怒ってしまった。
とりあえずは、旅の道連れが一人増えて、どことなくホッと息を吐いている自分がいた。

一陣の風が吹き荒び、どこまでも広がる一面の広野が、狼の毛並みの如く波を打つ。
「やっぱ後ろ髪引かれる感じ？」
「……いいえ、と言えば嘘になりますが」
でも、お別れはちゃんとすませましたから、と俺は遠くでだんだんと小さくなっていくセレンから視線を外し、前を向いた。
広大無辺な草原が続く大地。そこに延々と伸びる踏み固めただけ

の一本道を、俺はグリンダさんと並んで歩んでいた。俺も俺で大した荷物は持っていないのだが、グリンダさんに至っては手ぶらである。そのことについて質問してみたら、『空間の魔女』の名は伊達じゃないわよー、とどこからともなく箒を一本取り出してみせた。そして次々に椅子やらテーブルやらティーカップセットやらも出現させてくれた。わーすげー。今度どうやってるのか教えて貰おう。

「それじゃー、まずは『教会』本部があるサンタマゴリアに向かいましょー。そこで、あなたの存在を正式に認めさせてやるのよー」

さくさくと歩みを進めながら、グリンダさんが説明する。しかし、彼女はだしぬけに話題を転換させた。

「さっきさー、私は自分が野暮な見当違いをしてたことに気づいたわけだけどー。でも改めて考え直してみると、やっぱりイリアから見れば、君は息子というよりも……」

「……何です？」

「――――いや、これもまた野暮ねー、きっと。んまー君の容姿や髪色が、イリアの昔の旦那に似ていようが、そうでなかろうが、どちらにせよ彼女は君を助けたに違いないんだろうからー。うん」

「もう、何ですか。はっきり言ってくださいよ」

一人納得したように頷いているグリンダさんに、俺は抗議の声を出した。

「まぁ結局さー、イリアは君のことを心底愛してたってことよー」

「……」

まったく、どういった反応をとればいいのか正確な判断はつかないが、他人からそんなことを臆面もなく言われると、そうまっすぐに言われると、正直すこぶるこそばゆいし、多少なりとも赤面してしまうのはやむを得ないことだと思う。

「では、魔王の息子殿？」

そんな俺の状況なんて知ってか知らずか、グリンダさんは告げる。

「これから、辛い旅になる。苦しい戦いにもなる。君の目の前には、幾重もの壁が立ち塞がり、幾星霜（いくせいそう）の時が流れるとも知れない。目的

を見失い、もしくは自分さえ見失うかもしれない。君がやろうとしていることは、それだけの苦難と試練が待ち受けているわ。それでも、君はこの茨の道を選ぶのね？　屍の道を、突き進む覚悟があるのね？」

大仰な身振り手振りで、滑稽なほどに芝居がかった語り口で話すグリンダさんだが、その面持ちは真剣そのものだった。俺は後ろに背負った『ジュワユーズ』を抜刀し、剣先を天に向けて、鍔（つば）の部分を顔をに近づけた。いつか本で読んだ、騎士が行う忠誠のポーズの一つである。

「この聖剣『ジュワユーズ』と、俺という存在全てを賭けて、盟約する。魔王の息子として、亡き母の遺志を果たすまで、この膝をつくことはないと」

「――その答えが聞けて、私は満足よー」

グリンダさんは、ケラケラと哄笑するが、俺は自らの挙動に今更ながら気恥ずかしくなった。

まさか、こんな調子がずっと続くのかとこっそり危惧するが、仕方なしとばかりに諦める。道のりは、長いのだ。

――大丈夫かい？

俺の中で、自分が問う。にわかに始まる自問自答。

無論、大丈夫だとも。

そうかい。ならぼくは、期待してもいいんだね。

ああ、任せろ。お前には、今まで苦労を押し付けてばっかだったからな。今度は俺が、がんばる番だ。

頼もしいね。精々、がんばるといいよ。

そうだな。精々、がんばるさ。

「レイシくーん、遅いよー」

少し先で、グリンダさんが不満気に呼んでおり、俺は小走りに足を早めた。グリンダさんが言うように、この道の行く先で、いったいどれだけの苦難と試練が待っているか知らないが、俺はもう迷わない。自分で自分を信じてみようと決めたのだ。本気で、生きる努

力をしてみようと誓ったのだ。そこに後悔はないし、名残惜しさもない。

そんなものは、終わってからいくらでも出来るだろうから。

なあ、イリア？

見守ってくれとは言わないが、せめて、俺のこの不器用な生き様を見届けてくれ。

バカはバカなりに、必死なんだ。故に、これが本当に正解かどうかなんて分からないけど。でも、俺は。

「今、いきます」

魔王の息子として、生きてみようと思うんだ。

最終話　バイバイさよなら御機嫌よう（後書き）

それからエピローグに続く。

エピローグ

年の月日が流れるのは早いものだと、レヴェッカ＝マランディは最近よく実感するようになった。それは鏡を覗くたび、顔に細かい皺が増えているのを一々発見するからだろうか。さて、分からない。

しかし、この歳になってみて昔のことを良く思い出すようになったのは、本格的に自分は歳をとったのだと実感するには十分な判断材料ではないだろうか。特に、まだこの街にチーム『コーレア』がいた頃のこと。そして何より、不思議な出会いと、突然の別れを告げたあの少年。もしかしたら、自分は彼のことが好きだったのかもしれない、と今に至って思ったりする。いつの間にか惹かれ、知らぬうちに恋心を抱いていたのかもしれない。しかして、それは単に、消えていった選択肢の可能性に想いを馳せた、軽い後悔に過ぎないのかもしれなかった。

「別に、あなたとの結婚を悔いてるわけじゃないのよ」

罪悪感からか、現在は隣国へと商船に乗っていった旦那の顔を思い浮かべ、なんとなしに嘯いてみる。彼は、父の紹介で婚約を果たした青年だった。たくましく、なお優しい気性の男で、レヴェッカは彼と結ばれてこの上なく幸せだと思っていた。

レヴェッカは込み上げてきた懐かしさに耐え切れず、化粧机の一番奥の引き出しに手を掛け、そこから二枚の古びたリシュオール銀貨を取り出した。過去に、レイシが清算しきれなかった代金。別に、約束が本気で守られるなどとは思っていなかった。これはこれで、彼との思い出の証なのだ。

と、レヴェッカが懐古の念に浸っていた矢先に、部屋の扉が乱暴

に開けられた。
「ちょ、ちょっとお母さん！　大変よ、大変！」
「大変なんだよぉ！」
今年で二十四と十八を数える娘二人が、慌てた様子で入室してきた。
「いったいそんなに慌ててどうしたのよ、メリッサ、ロゼッタ？」
「食い逃げ！　食い逃げなんだって！」
「食い逃げなんだよぉ！」
自分とよく似た深紅の赤毛を振り回し、熱っぽく話す。
「分かった、分かったから。ちょっと落ち着きなさい」
レヴェッカは興奮気味の二人をどうどうと静めさせ、話を聞こうとした。ふうむ、食い逃げ？　ここら近所の悪ガキ共なら顔が割れているし、犯行に及ぶとも思えない。ならば、流れ者か、あるいは金の無くなった旅人か。いずれにせよ、周辺近所にも協力を仰いで食い逃げ犯を捕まえなければ。
「それじゃあ、食い逃げした人の特徴とかは？　何か覚えてる？」
「えと、うん、子連れだったよ。一人の男と、二人の子供がいた」
長女のメリッサが指をこめかみに当てながら、言う。
「目深に外套を被っててね、男のほうはよく分かんないんだよぉ。でも、二人の子供のうち、一方が男の子で、もう一方が角の生えた女の子だったよぉ」
次女のロゼッタもメリッサと同じ仕草で言った。
「……そう。他に、何かない？」
二人の娘はしきりに呻いたり唸ったりしながら、同時に何かを思い出したのか、姉妹揃って同じポーズをとった。
ぱんっ、と威勢の良い音を奏で。
神に祈りを捧げるかのごとく。
両の手を合わせた、それは――――
「その三人ね、食べる前と食べた後で、こんなポーズをとってね」
「あんま聞かない言葉を言っていたような気がするんだよぉ」

そのポーズは、まさか。加えて、その言葉とは――

「『いただきます』とか」

「『ごちそうさま』だとか」

レヴェッカは、驚きに目を見開いて、しばし茫然自失としてから、ぐるぐると与えられた情報の奔流に混乱していた。まさ、か。本当に？　いや、でも。そんなはずは……しかし、でも。いったいどういうことなのだ。

「……ちなみに、被害総額は？」

レヴェッカがなんとかそこまで声を絞って言うと、二人の娘は再燃したように鼻息を荒くして口々に語りだした。

「それがね聞いてよ、信じられないぐらいの量でね。まったくこっちは大赤字よ」

「うん、ホントすごかったよね。まさか、あれだけ注文しといて食い逃げされるなんて思わなかったんだよぉ」

「うーん、でも合計でいくらだろ？」

「えと、ランデル銅貨が一、二……十二枚と、それからぁ……」

次女のロゼッタが十本の指を使い必死に計算していたが、ようやく解答が導き出せたのか、二本の指を突き出してブイサインを作った。

「わわ、ちょうどリュシオール銀貨二枚分になったんだよぉ！　すごい！　お店潰れるぅ！？」

「きゃあーっ」

娘二人が恐怖と絶望に踊り狂っている中で、レヴェッカは既に耐え切れず爆笑していた。メリッサとロゼッタが「「お母さんが壊れた！？」」と奇異と驚愕の視線で母親を凝視していたが、当のレヴ

ェッカは愉快で愉快で仕方がなかった。
これは、もう確実だろう。
彼は、約束をちゃんと果たしてくれたのだ。ああ、愉快だ。気分がいい。おまけに涙腺まで緩んできてしまった。レヴェッカは思う存分カラカラと笑い続けた。
「で、どうするのお母さん」
「犯人捕まえなきゃだよぉ」
「いえ、いいの。それ、多分私の知り合いだから」
「「え？」」
赤色の姉妹は同時に疑問符を掲げる。
「ただ昔のツケを、払いにきてもらっただけなのよ」
レヴェッカは、目尻に浮かんだ涙を笑いながら拭った。

あぁっ……とヴァネッサは街道で人にぶつかり、抱えていた食材の紙袋を落としてしまった。コロコロと林檎やトマトといった野菜や果物がいくつか転がる。
「大丈夫、ですか？」
ぶつかった相手は申し訳なさそうにしゃがみこんで、ヴァネッサと一緒に地面に逃げた食材を拾い始めた。ヴァネッサは、お気になさらず、といった具合に手をふり、正面で林檎を手に取る相手を見遣る。
ボロボロの使い古されたような年代物のローブを身にまとい、逆光のせいもあってか、フードで隠れた顔はよく窺えなかった。しかし、ヴァネッサはそんなことよりも落ちた食材の回収作業に専念し

ていた。
「はい、これで最後ですね。本当、申し訳ない」
いえ、大丈夫ですよ、とヴァネッサはその人物から林檎を受け取りつつも、首を小さく振った。
こちらがよそ見していただけですから。
「いえいえ、こちらも注意が足りていなくて」
あら、そちらはお子さんですか？　とヴァネッサは正面の人物の傍らにぴったりとくっつく二人の子供に目配せをした。
「ええ、まあそんなもんです」
その格好だと、旅の方かしら？　今日はこの街にお泊りに？　とヴァネッサは小首を傾げる。
「いや、長居をする気はないんです」
そう、ですか。あの、ごめんなさい。失礼ですけど、私たちどこかでお会いになったことありません？
「……さて、どうでしょう」
彼は苦笑したように肩をすくめ、片手を上げて立ち去ろうとする。その仕草がまたどこかで見たことのあるような気がして、ヴァネッサは何かすごく重要なことを忘れているような焦燥感に苛まれた。
とても大事なことのように思えるのに、肝心なところで思い出せずにいる自分が、非常に煩わしい。しかし、この無性に懐かしい気持ちはなんだろう。自分は、いったい何を忘れている？　何を、掴めないでいる？
大切な、想いだったはずなのに。
「それでは」
旅人は幼い二人の付き人を従え、自分の横を通り過ぎる。二人の小さな従者の内、女の子の方には頭部に角が生えており、甘えるように男の腕に縋りついていた。その姿が、幼少の頃の自身と重なる。
重なる？　あ……ああ、そう、そうだ。
私には、大好きだった人がいた。幼いながらも、私は恋というものを知っていた。

あの人は、声なき自分の言葉を、全て理解してくれた。幾度も自分の危機を救ってくれたりもした。何で、今まで忘れていたのだろう。どうして思い出せずにいたのだろう。大好きな、お兄ちゃんだったのに。

――――そこでヴァネッサは、はたと不思議に思った。たった今、自分と話していた彼は、声を持たない自分の言葉を聞き取り、返事をしていた。あまりの自然さから、この事実が発覚するまでに幾許かの時を要したが、考えてみれば、酷く不自然すぎる事象だった。

自然さ故の不自然さ。

彼女がその事柄に思い至った瞬間、ちょうどすれ違いざまの彼の口から漏れた囁き。直接、鼓膜に響いたように、ヴァネッサは確かに聞き逃すことはなかった。

「立派なレディになったな、ヴァネッサ」

彼女がはっとして振り返る頃には、彼らの姿は風のように見失っていた。

ラサニール記念図書館の賑わいは今日も今日とて相変わらず盛況だった。性別や年齢層は老若男女問わずまばらで、調べ物をしにき

た学生やら、絵本の読み聞かせをしている歳の離れた兄妹やら、静かに読書に耽る老紳士やら、皆各々の時間を過ごしていた。昔と比べて、図書館の内装も大きく一新され、利用客のことを第一に考えられた設計となっていた。入り口付近には広いエントランスが設けられ、貸し出しなどの受付もそこに設置されていた。その受付の脇にある廊下の奥には、館長であるサラサ＝ラサニールの部屋がある。

一応は、館長室と称したほうがいいのか。

「これ今月の分の原稿。何か見落としとかがあったら、すぐに連絡ちょうだい」

「は、はい。ラサニール先生にはいつもお世話になっており、恐縮です。締め切りをちゃんと守ってくださる作家さんなんて、今時珍しいですからね。いやはやそれにしても、童話作家として一世を風靡した先生のエッセイは、大変評判がいいですから。我が社としても発行部数がうなぎ上りで、ええ、はい。えーと、今回のはご自身の恋愛経験を語られたとか？」

「まあ、単なる他愛のない昔話よ」

出版社の使いが退出していってから、サラサは疲れたように肩の力を抜き、面談用の革張りのソファに身体を沈めた。

「お疲れ様です、お嬢様」

どこからともなく、ラインデルが影のように姿を現した。だがサラサは一向に驚いた様子もなく、

「……ねえ、じぃ。いい加減その『お嬢様』ってやめてくれない？あたし、もうそんな歳はとっくに過ぎたし、人前でそんな風に呼ばれたら恥ずかしいったらありゃしない」

「申し訳ありません、お嬢様。ですが、私とってサラサお嬢様は、サラサお嬢様であるわけですから」

珍しく、主人の言いつけに反抗的な執事の態度に、サラサは辟易としながらも、

「そういえば……あなたって昔から何一つ変わらないわね」

自分が幼少の頃から世話をしてもらっている訳だが、依然として

この執事の容貌が変化したという印象はさっぱり受けなかった。
「ほっほっほ」
褒めても何も出ませんぞ、とラインデルは言う。くそぉ。こっちは近頃めっきり小皺の数が増加中だというのに。そのヒゲむしってやろうか。
「紅茶をお入れしましょうか？」
「ええ、頼むわ」
恭しく礼をし、ラインデルはすぅと消えていった。しばらくの間、ソファに寝そべり、ぼぉーと天井を仰いでいたサラサだが、突然樫の木の扉を押し開け、部屋に一人の男がずかずかと足音を立てて入室してきた。
「ちょっと、聞いたよ姉さん！　また別の雑誌に仕事入れたんだって！」
「あら、ルイ。ご機嫌よう」
ルイと呼ばれた紳士服に身を包んだ獣人の男は、灰色の髪の合間から突き出た両耳を怒ったようにぴょこぴょこと動かし、
「ご機嫌よう、じゃないよまったく！　いったい、いくつ連載を抱えれば気がすむんだ。ちゃんと身体のことも考えてください。姉さんだって、もう若くないんだから」
若くないんだから、という発言にピクッと眉を上げて反応したサラサは、ゆっくりと身を起こし、ルイをジト目で睨んだ。
「ふんっ、自分だっておっさんのくせに。何よ、あたしより十歳若いだけじゃない」
「そういうことじゃなくて、俺は姉さんのことを心配をして……」
「心配？　心配ですって？　あなたこそ自分の奥さんと子供の方を心配したらどうなの。来月には三人目ですって？　はっ、どうせ独り身のあたしを哀れんでいるんでしょう。この幸せ真っ盛り！　その幸せオーラをあたしに向かって放って楽しい？　ねえ楽しいの？」
「ああ、もう……なんでそっち方面に話題をもってくかな。それは姉さんだって、見合いの誘いぐらい腐るほど来たじゃないか。それ

をこれまで全部突っぱねてきたのは姉さん自身だろ？」

「……」

サラサは口を噤み、誤魔化すように顔を逸らした。

「まったく……姉さんもほとほと一途なんだから」

そんなルイの呟きにサラサは渾身の肘打ちを仕掛けようとしたが、あっさりかわされた。

いい歳して乙女を気取っている自分を、嗤いたければ嗤えばいい。

一途というか、どちらかと言えばもはや意地になっている部分もあるのだが、サラサはこの想いを貫きたいと誓っていた。サラサは、この気持ちに決して嘘はつきたくなかった。あの頃から続く、変わらない彼への恋心を。

あの別れの直前に交わした、益体のない彼の言葉が、自分の人生を決めた。必死で書き綴った物語を何度も何度も出版社に持ち込み、ようやく本になるまで数年。大陸中にその名を轟かす大作家……とまではいかないが、近隣諸国ではそれなりに名を知られた作家になるまで、三十年。

「……三十年、か。そりゃ、あたしも老いてくわけだ」

執事のラインデルに至っては、全然その気配は見られないが。

「そうだよ姉さん。執筆作業もほどほどにしといてさ」

と、ルイが追随するように言った時、ココン、控えめなノックが館長室に響いた。

「誰？」

「あ、フィ、フィオレンティーニです」

「フィオレ？　どうしたの、受付は？」

受付担当を一任しているフィオレンティーニが、おずおずといった具合に扉の隙間からその可愛い顔と短い金髪を覗かせていた。

「あ、あの館長宛に預かり物が」

そう言いながら、彼女はサラサに油紙で包装されたソレを手渡した。

「あら、何かしら？」

また、ファンからの差し入れか何かだろうか。時折、そういうことがままあるのだ。先日だって、六歳の女の子から花束を貰ったばかりだった。サラサとしてもそれは勿論嬉しい限りであるし、何よりの励みにもなる。さて、今度はいったいどんな贈り物かしらん。

サラサはフィオレンティーニから油紙で丁寧に包装された長方形のソレを受け取った刹那――サラサの瞳はわくわくとした好奇心から、ぞくりとした驚愕の色に変わる。

「……え」

どうやら、一冊の本らしいことが分かった。包装越しにでも伝わる古臭さ。所々、大分傷んでいる箇所もあった。無意識に震える手つきで、かさかさと油紙のラッピングを解く。

果たして目に飛び込んできた題目は――――『光の涙』。

サラサは自分の周囲だけ音が消えていくような感覚に陥った。うるさいほどに高鳴る、心臓の鼓動。暴れる動悸。

この本は。

「まさ、か……」

かつて彼に貸し渡した物語。自分と彼との、約束の証。

「こ、この本は……誰が？」

「はあ、なんだか怪しい人でしたよ。黒髪に、黒い瞳、服装まで黒服のまっ黒黒尽くしで、『サラサに渡しといてくれ』って。館長の知り合いですか？」

間違いない、レイシだ。

自分の感情があちこちに拡散し、うまく思考を働かせられないサラサは、うまく二の句が告げずにいた。だが、そこでページの隙間に何かが挟まっているのを発見した。

栞のように挟まれた、封もされていない折り畳まれただけの一通の手紙。

手紙というよりも、もはやメモか走り書きのようなそれをサラサ

は開き、目を通した。
不意に、涙が溢れ、嗚咽が零れた。
「館長！？」
「姉さん！？」
唐突なサラサの挙動に吃驚した二人が駆け寄り、心配そうな声をかける。サラサは、違う、違うの、と首を振った。
「違う、違うのよ……」
彼は、ちゃんと約束を守ってくれたし、果たしもてくれた。これ以上のなにかを求めるなんて、それは我がままが過ぎるというものだろう。
あたしは、満足だ。
もう、何も望みはしない。
待ち続けた甲斐が、あったというものだ。
約束は、果たされたのだから。
――――それでも、言ってやりたい。
「レイシ、あなたって……本当にバカじゃないの……」
あたしだって、今でもあなたのことが……
ヒラリ、とサラサの手から手紙が落ちた。そこに書き綴られた、短い文面。あまりに簡素な一文。

『ごめんね、どうにも会えないんだ。だって俺は、きみをほんとうに好きだから』
『追伸。ルイにもよろしく』
『きみの熱心なファンからより』

何故だろうか。すごく腹が立つのに、それに勝って悲しいなんて。そして、その悲しさ上回るほどに、嬉しい気持ちが込み上げてくるなんて。
こんなにも、満ち足りた幸福を感じるだなんて。
「……ああ、レイ、シ」

後悔は、してないよ。
あなたを愛して心底良かったと、あたしは思うから。
きっと、これからもずっと。

終わる。
追われた末に、終われる。
約束は、果たした。
だから、ここが俺の終着駅。
「マキ、アイギー。二人ともあの岬が見えるかい？　俺が冷たくなったら、どうかあそこに埋めておくれ」
全ては、この地から始まった。ならば、この地で終わるのがベストというものだろう。
ああ、視界が霞む。意識がぼやける。かなり長いこと寝ていないから、非常に眠いんだ。
――――三十年。良い意味でも悪い意味でも、随分と色々なことがあった。たくさんの人達が、笑って、泣いて、苦しみ、傷つき、怒り、嘲り、憎んで、怨んで、去り逝き、訪れ、また消えていった。
数々と散々な出会いと別れを繰り返して、俺はこうして生きられた。
人として、生きられた。

失敗でもなく、異形としてでもなく、
俺は十分に生きられて、存分に死ねる。
鯨木澪士という人間の物語は、ここで最後で最期の幕を閉じる。
終端と終焉に向かい、真実の終結を迎え入れる。
ではでは、さあさあ。
ハローハロー、聞こえますか。誰か聞こえていますか。
俺もすぐそちらにいきます。どうぞ宴でも始めてお待ちください。

――――おかえり。

気のせいかもしれなかったが、誰かが俺に呟いた。
その懐かしい声に、俺はいつものように顔を綻ばせ、言った。

「ただいま」

エピローグ（後書き）

おわり

でも続く。

語られぬ断章　祈りと呪い

その過ち(あやま)を犯してから、彼女はまるで座敷牢に繋がれたような生活を強いられてきた。

私は、ずっと見てきた。それ故に、知っている。

「屋敷に、火の手が回った。時期に、ここにも蟲の者達がくる」

絢爛豪華かつ無駄に広い敷地面積を誇るこの昔ながらの武家屋敷ではあるが、そこは現代のカメラや赤外線レーダーといった防犯システムも取り入れてあった。しかしながら、私の目にはオレンジ色に揺らめく明かりと、銃声、そして絶命の声が聞こえる。

ああ、また何人か死んだ。

「逃げないのか」

私は、死に装束のような白い着物の彼女に問いかける。その腕の中には彼女の最愛の息子が安らかな寝息を立てており、彼女は慈しむように我が子の寝顔を見つめていた。

「逃げません」

何もかも、受け入れたかのような達観した声音で、

「それに、いったいどこに逃げろというのでしょう」

それもそうだ、と私は思い直した。この場所は、屋敷の最奥に位置する。まさしく、袋の鼠だ。加えて、やってくるのは古くよりこの国に住まう蟲の一族だ。悪逆非道、善悪無視の蛮行狼藉は数多(あまた)にのぼり、鬼哭啾々、死屍累々の山は数知れない。あんな奴らから逃げようと思う自体、そもそも愚考というものだろう。

「それに、これは『覇ヶ峰(はがみね)』総家の意思でもあります。ここの拠点

の崩落を最後に、これまでの愚かな争いは幕を閉じます。この、『蟲塚（むしづか）』と『覇ヶ峰』の大乱は終結します。要するに、私らは蜥蜴（とかげ）の尾の役目を引き受けたのです。本体である、『覇ヶ峰』という親を守る為に……ですが、この家の者には不憫なことをしました。彼らは私と違って、知らぬままに犠牲を課せられたのですから」

彼女の異常なほどの落ち着きぶりに、私は底知れない深淵を覗いたかのような錯覚に陥った。

一歩間違えれば――否、一歩間違えなくとも、彼女の冷静さは常人のそれではなかった。

一言で称するなら、狂人か病人のようでもあった。

「でも」

彼女――――覇ヶ峰澪（はがみねみお）は戦慄さえ覚えるような眼力で私を見据えた。

「おひい様、どうかお願いがあります。この子を、どうぞ逃がしてください」

澪、それは――

「私にとって、その願いほど酷なものはないということを、お前は分かっているはずだ」

「それは、十分に承知の上です。ですが、私にはあなた以外に頼れるものがいないのです。おひい様――お願いします。どうかこの不肖な子孫を哀れんでください。愚かな私を救ってください」

「……私は、長らく子孫であるお前達を見守ってきた。だが、《仙》である私は、今を生きるお前達に直接干渉してはいけないのだ。もし干渉すれば、私は《仙》としての役割を放棄したことになる。あわよくば、この存在ごと《世界》に否定されてしまうかもしれない。『巫女』の役目を継いだお前になら、そのことは重々に理解しているはずだ」

「それでも、私はあなたにお頼みする他ありません」

私は、傲慢で強欲なのです、と澪は変わらず視線を外さぬまま、私に再度頭を下げた。

「何卒、お頼み申し上げます。この子を――澪士をどうぞ逃がしてあげてください。この子には、生きて欲しいのです。生き続けて、欲しいのです」

「その祈りは、いつかその子とって《呪い》となるやもしれんぞ」

「……それでも、構いません。覇ヶ峰の因果から、解き放たれるのなら。私は甘んじて澪士の《呪い》となり、一生怨まれ続けましょう」

「それ程に、我が子が愛しいか」

「はい」

「例えそれが、実の兄との間に出来た忌み子であってもか」

「――はい」

「澪、お前が贖罪の日々に身を投じるはめになった原因が、その稚子であってもか」

誰からも祝福されず、どこからも歓迎されず、この世に産み堕とされた《贖罪の忌み子》であってもか。

「私の想いは、決して変わりません。この子に、人生を与えてください。仮に、これから先どれほどの辛いことや苦しいことが待っていたとしても、生きていれば必ず幸せだと感じられる時が訪れます。私は、澪士にそれを知って欲しい。どうか、幸せであって欲しいと願うのです」

――だって、母が子を想うのは当たり前のことですから。

自分だって、まだ二十年かそこらしか生きていないくせに、何だというのだろう、この狂気じみた気迫は。

――まるで、鬼のようではないか。

「母は、子の為になら鬼にさえなれるのですよ」

と、油断していたら不意に思考を読まれてしまった。流石は、覇ヶ峰の『巫女』。我が子孫ながら侮れない。

一本取られたな、と私は澪の鬼気迫る勢いに負けを認め、彼女の

要求を呑んだ。まったく。やれやれ、だ。
澪はほっと安心した顔つきになり、ふと声も立てずに涙ぐんだ。
「……ありがとうございます。ありがとうございます……ます、おひい様」
澪は絶えず頬に涙を流しながら、私に愛しい我が子を抱かせた。
「……澪士、か」
私はその子の名を呟く。覇ヶ峰澪士。《贖罪の忌み子》。この子また、私が守護すべき、呪われた覇ヶ峰の末裔。
「おひい様。どうか、どうか……澪士をお願いします」
なんて……幸福そうな顔をするんだ、この女は。
間もなく自分にも死が降りかかろうとしているこの状況で、なんて綺麗な顔をするのだろう。
私は、これ程までに美しい女を見たことがなかった。
「……御姫様、か。ふん、もう私はそんな身分じゃないよ。そうだね、これで私は晴れて《仙》の位を降格した訳だから、人間だった頃の旧姓でも名乗ろうかね」
既に《仙》でなくなった私は、『おひい様』ではなく、ただの『堺崎仙女』という不確で曖昧な存在でしかなかった
仙人の成りそこない。または、成れの果てとでもいうのか。
いずれにせよ。
「澪、お前の祈りは、私がしかと聞き届けた。私はこの子に人生を与え、あらゆる災厄から守る盾となろう」
「はい。澪士を、よろしく頼みます」
澪は両手をつき、深々と畳の上でひざまずいた。その間にも視界の端では障子に映った炎の影が爆発音と共に揺らめき、襖の向こう側からは、人々の阿鼻叫喚がだんだんと近くなっていた。
「さらばだ、澪」
「はい」
けれど終わりに一度だけ、彼女は息子の頭から頬を優しく撫で、
「どうか、強く生きてちょうだい――澪士」

まだ一歳にも満たない幼い我が子に、澪はその額に軽く口づけをした。

私は、軽く肩を竦めて、

「まったく、お前はいい女だよ」

あやうく惚れてしまいそうだ。

その時に微笑んだ彼女の顔が、私が記憶する澪の最後の姿だった。

「お待ちしておりました」

もはや自分が端座するこの場所も、火の手が伸び、襖や畳の焼け焦げる臭いが鼻を突く。だが、気にすることでもない。あの方に、澪士を預けられた。ならば、もう自分に心残りはない。未練も無念も皆無である。

故に、こうして晴れ晴れしく死に花を咲かせられる。

「覇ヶ峰の巫女……覇ヶ峰澪殿と御見受け致す」

「確かに」

背景に炎を控え、音もなく登場した刺客は思いのほか、礼を弁えた態度だった。顔面の半分に背景と同じ火炎を模した刺青を施し、人を人とは思わない、まさに蟲のような目をした相手であったが、澪は何ら臆せず対面してみせた。

「貴殿のお命、頂戴しに参った」

「ご自由に」
その奇抜な刺青の男は、ゆっくりとした動作で右の空手を持ち上げ、
「これで、我らの戦争は終わる。よって貴殿には蟲塚を代表し、この俺――蟲塚兜（むしづかかぶと）が敬服の意を示そう」
「ご勝手に」
その男――蟲塚兜は静かに腕を振り下ろした。
たったそれだけで、泰然と淑やかに座っていた澪の首が刎ねられた。
頭部の無くなった首からは、噴水のように鮮血が飛び散る。
無造作にコロコロと転がった首は、ただひたすらに穏やかな表情をしていた。　何とも満ち足りた、慈母のような笑顔で。

語られぬ断章　仙人と魔法遣いと世界の終わり

私はやっとの思い出で、どうにかその空間に踏み入ることが出来た。

ガラリ、と何とも昭和臭がする硝子障子を開き、一歩踏み出す。コンクリートの地肌がそのままにされた無骨な床。低い天井。そして次に目がいくのは、縦にきちんと等間隔に設置された本棚。図書館と称すには程遠く、個人経営の本屋にしては僅かに広いといった感じだった。私は一通り観察を終えてから、奥に進んだ。

「ようやく、見つけたっていうか」

もしここが仮に書店だというなら、その男は店の会計的な場所で何やら筆を走らせていた。そこでふとしたように机から顔を上げ、

「おや、これは珍しい来訪だ――だが、招かねざる客でもある」

と、私の存在なんてとっくの昔に知覚していたにも関わらず、今初めて気づいたような反応をした。その人物は、縁のない真面目そうな眼鏡をし、髪はオシャレに撫でつけられ、黒いタートルネックとぴったりとした同じ黒のスラックスという出で立ちだった。一見、どこにでもいそうな面白味のない優男である。しかし、私は警戒の体勢を解かない。

「ふんっ……随分と手の込んだ結界を何層にも張り巡らしてくれるっていうか、もはやここは異界の一種みたいな。固有領域に封陣結鎖（ふうじんけっさ）、おまけに絶界方位（ぜっかいほうい）だって？　マジないわ。ここを探し当てるまでにいったい何年かけさせんだっつーの」

慎重とか用心深いとかいうレベルではない。核シェルターだって

こんな厳重ではないだろう。
「臆病なんだよ、わたしは。何しろ敵が多いものだから」
「その敵の一人に私も加わっていることを忘れるなっていうか」
「ふふっ……しかしながら、ここまで自力で乗り込んできたのは、おそらく君が初めてだよ。いやはや、今更ながら感服の極みだ。君はいったい何者だね」
ぱちぱち、と小さく拍手まで送ってきやがるその男を、私は敵意剥き出しで睨みつけながらも、質問の内容に答えてやる。
「私は、堺崎仙女。仙人の成りそこないであり、成れの果てみたいな」
なるほど、と得心いった風に頷くそいつは、既に苛立ち始めている私に向かって、鑑定するかのような視線を投げかけた。
「――仙人、か。まさか、まだそんな伝説じみた人種がいたことには驚きだが、成りそこない――否、成れの果てだったか？　どちらにしても、人を超越した存在が他者の運命に関わろうなどとは、とんだお笑い種だな。まったくもって、愚かしい限りだ」
くっくっく、と腹の立つ笑い方をするそいつを、私は自分の能力を軽く解き放ちながらも睨みつける。下手に出てりゃ図に乗りやがって。猫かぶりなんぞやめてやる。こっからは本気の全力で臨んでやろうじゃないか。
「戯言は終わりだ、《魔法遣い》。単刀直入に言おう。澪士はどこだ」
「さて、ね」
途端――男の周囲に不可視の圧力を掛けるが、男は至って何でもなさそうに私の能力を相殺していた。
「しらばっくれるなよ。お前が澪士をどこかへ隠したことは調べがついてるんだ。さあ、吐け！　さもなくば、この空間ごとお前を消滅させてやろうかっ！」
私はなおも男に加える圧力を増すが、男はどこふく風で卓上に頬杖をつきながら、

「嘘は、ついてないさ」
「何をぬけぬけと！」
私は一層自らの能力を解放する。
「私は、あの子の母親から託されたんだ！　澪士を頼むと！　あの子を守ってやると！」
ピシリ、とこの空間の悲鳴が聞こえた。
「それ以上は、やめてくれないか。わたしとしても、この場所を作るのに苦労したんだ。今失うのは忍びない」と奴は困ったように嘆息しから「確かに、わたしは彼をこの世界から消した。だが、居場所までは把握していない」
消した、という表現を奴はしたが、私はその言葉の意味が決して『死』を指しているものではないと理解していた。私と澪士には繋がりがある。魂の奥底での絆がある限り、私は澪士の生死を感知出来るようになっていた。従って、澪士がこの世界から気配を消したにもかかわらず、依然として生命の波動を感じられるのは、おそらくどこかの異界に閉じ込められているものだと私は推測する。
「現在彼がどの時間軸で、どこの次元軸にいるかはさっぱり見当がつかない。この世界が彼を連れ戻す可能性を危惧してね、出来るだけ遠くへ《堕とした》から」
「なら、今すぐその異界の扉を開け！」
「不可能だ」
「……どうやら殺されたいらしいな」
「いや、実際問題無理なんだよ。何せ、わたしが彼を《堕とした》のは、そこらにある固有領域などといった程度の低い異界ではない。正真正銘、この世界とはまるっきり違った次元にある、『異世界』さ。無論そうなれば、わたしであっても手の出しようがない」
そいつは信じ難いことに、私の能力を訳もなく弾き返し、固まった筋肉を解すように腕を狭い天井に向かって伸びをした。
「……何故だ」
私は非常に驚愕しながらも、臨戦態勢を崩さずまま、問う。

何故、澪士をこの世界から消したのか、と。

「一言で表すなら、わたしの目的の為、かな」

「目的、だと？」

「そう。わたしのとある目的の為には、鯨木澪士（いさなぎれいし）という『存在』が邪魔だった。しかし、彼をただ殺すだけでは、この世界はすぐに新たな鯨木澪士と同じ役割を負った代理品を用意するだろう。故に、わたしは彼を殺さずにこの世界から消失させねばならなかった」

「……その方法に、聖域の宝具を用いてまでもか」

「ほう……そこまで調べられていたのは流石に瞠目せずにはいられない。そう、つまりは彼自身が、この世界に諦観しなければならない――すなわち、彼が死を本当に覚悟した瞬間が必要だった。その為に、彼が通っていた学校の屋上のフェンスに細工をしたのは言うまでもない。さて、話を戻すが、わたしが散々骨を折って彼を生かしたまま『異世界』に飛ばしたにもかかわらず、世界はたった数ヶ月でその事実に気づき、わずか一年で彼の代理を創ってしまった。まあ――それが偏に峰条真黍という少年なわけだが――しかし、わたしにとってその一年という期間は大いに貴重なものとなった。これから起こる《宴》の下準備は、既に整いつつある」

そこで私は、ようやく今まで自分が対峙していた者の強大さを知った。別に、これといって侮っていたわけではない。むしろ、十分に警戒してさえいた。けれど、やはりどこかで自分の力を過信していた部分もあったのだろう。

だが、これ程までとは――――

「……お前は、いったい何をしでかそうとしている」

私は少々後ずさりながらも、どうにかその言葉だけを呟いた。だが、そいつはちゃんちゃら可笑しそうに肩を揺らし、巨大で、禍々しい魔力をまといながら、ゆっくりとした動作で私と向き合う。

「仙人――堺崎仙女。君もどうか楽しみにしておくがいい。これから巻き起こる全てを」

中指で眼鏡のズレを調整し、レンズを怪しく光らせながら、目の

前の魔法遣いは、愉快げに言った。
「では、遅ればせながら自己紹介をしよう。私の名前はシン。かつてはマーリン、アレイスターなどと名乗っていたこともあるが……」
そして、自身の『目的』を宣告する。
「今はただ、世界の終わりを願う者だ」
――――その男、シンが言った言葉の真実の意味を、後に私は、嫌というほど知ることになる。

語られぬ断章　集う物語達

「ヘイ、爺ちゃん（グランパ）。オレがこれから日本（ジャパン）と戦争（ドンパチ）おっぱじめるってつったらどうする？」

「おい、エディ。例えそれが笑えんジョークか何かだとしても、絶対そんなこと言わんでくれよ。爺ちゃんはもう戦争なんてこりごりだ。お前にも幾度となく話しただろう？　日本のカミカゼは、そりゃあ怖いってもんじゃねえよ。だってよ、ほとんど撃墜されるのも承知で、なおも突っ込んでくるんだぜ？　それでも、その何機かで爺ちゃんが乗ってた戦艦は沈んじまったけどな。まあ、あん時はよく脱出できたと思うよ。うん。今思い出しても小便ちびっちまいそうだ。ニッポンコワイヨー。上層部がさっさと日本に核を落としてくれて心底ホッとしるくらいだ。爺ちゃんはな、もう二度とあんな怖い国とは戦いたくないね」

「でもよ爺ちゃん、オレってば来週からマジで日本と戦争しなくちゃいけなくなってよー」

「……おいおい、ふざけんなよバカ孫。だいたい、てめぇの親父もベトナムで木っ端微塵に吹き飛んだだろうが。まだ分かってねえのかよ。しかも相手がよりもよって日本っておい……糞（シット）！　天国の婆さんも泣いてんぞファッキン」

「……つーかよ、オキヨ婆ちゃんについては、爺ちゃんが無理矢理犯して拉致ってきたようなもんだろうが」

「うるせえ。お前の上司がそんな糞みたいなことやろうとしてんなら、エディ、お前今すぐ部隊抜けろ。そんで爺ちゃんのトウモロコシ畑手伝え。いったい何の為にお前を親日に育てたと思ってやがる」

「いんやぁ、爺ちゃん。オレもさ、日本好きだよ？　ああ大好きさ。フジサン、スシ、ゲイシャ、サムライ、モエ！　みんな愛してんよ。でもさぁ？」

「あぁ？　何だよ」

「大好きなものほど、壊し甲斐があるとは思わねえか。なあ、爺ちゃん？」
「――――チッ、てめえも立派な爺ちゃんの孫だよクソッたれが！」
「あはははは！　楽しみだな、楽しみだな。オレってば爺ちゃんの話ばっかで、実際に行ったことないもんなー」
「おう、もういっそのこと死んでこい！　だが、てめぇよぉ、もしも城とか寺とか文化遺産レベルのもんに一発でも風穴あけてみろ？　爺ちゃんが直接飛んでってお前の身体の風通しをよくしてやる」
「サーイエッサー。了解したであります、元アメリカ海軍大将殿ぉ」
「クソッたれめ！」

「ユーリさん」
「どうした、ターニャ？」
「本当に……良かったのですか？　私を連れ出して。『十二の椅子（ディカーブリストゥール）』は、私達をこのままみすみす逃がしてくれるとは思えません。きっと私だけじゃなく、ユーリーさんも殺されます。今なら私だけが処分を受けて、ユーリさんは助かるかもしれない。まだ、間に合うかもしれません。だから――」
「そこまでだ、ターニャ。僕は、君をあそこから連れ出し、君と一緒にいることを選んだ。そこに、未練も後悔もないよ」
「ユーリ、さん……」
「旧ソ連の遺物なんかに、君を殺させやしない。なぁに大丈夫。うまく逃げ切ってみせるさ」
「……ですが、これからいったいどこへ？」
「うん。とりあえずは、日本（イポーニヤ）に向かおうと思ってる」
「日本？」

「そう。あそこは何かとツテがあるし、それに加え、あの国は色々と複雑に事情が絡み合ってるしね。裏社会最高権力の『覇ヶ峰（はがみね）』、『三界院（さんがいいん）』、『蟲塚（むしづか）』の『後三家（ごさんけ）』を含め、僕らの祖国にも負けて劣らずの闇の根幹が水面下で幅広く根付いている。だから、奴等もすぐには追ってこれないはずだ。その間しばらく身を隠して、次の逃走ルートを――ん、なんだいターニャ？」

「……ります」

「うん？」

「ま、守ります。わ、私が、ユーリさんを守ってみせます。仮に相手がカーチャでも、オリガでも、ナターシェンカでも、イヴァンコフでも、私は、ユーリさんを守ります。あなたの為に、銃をとります。例えそれがかつての仲間であったとしても、ユーリさんを傷つけるのであれば、私は容赦しません。私は……」

「それ以上は、言わなくていい。ターニャいいかい？　君はもう、普通の女の子なんだ。君は決して人殺しの『人形（クークラ）』でも、替えのきく『入れ子人形（マトリョーシカ）』でもない。だからその腰にあるモノを、こっちによこしなさい」

「だ、だめです！　これがなきゃ、私は……！」

「ターニャ。ここは既にモスクワではない。そんな物騒なモノは、必要ない」

「で、ですが」

「ターニャ」

「……分かりました（ムニェパニャートナ）」

「よし、偉いぞ。それでこそ僕の可愛い天使（モーイミーリィアーンギェル）。それじゃあ、日本に着いたらまず美味しいものでも食べよう。あの国はね、なかなか変わった食文化なんだが、非常に美味しいものばかりでね。ほら、ターニャもスゥシぐらい聞いたことがあるだろ？　僕はあれに目がなくてね。モスクワのインチキ臭いスゥシじゃやっぱ駄目だ。そもそも何故スゥシ屋に焼き鳥のメニューにあるんだ。それで、ターニャには是非とも本物を味わってもらいたいんだが……どうだろうか？」

「それは、すっごく楽しみです」
「ははは。単純にさ、少しスリリングな旅行のようなものだと気楽に構えていればいいんだ。ほらそう思うと、何だか楽しくなってこないか、なあターニャ？」
「Да（ダー）！　ユーリさん」

「……むぅ」
「なんだよ、箒。先週から何だかおかしいぞ」
「いやの、司（つかさ）。最近、妙な気配ばかり満ちておってのー。妖共（あやかし）もいつもより騒いでおる」
「そしてごく自然な動作でぼくの頭の上に乗るな。前が見えん」
「むぅ、仕方ないの。ならば肩車で我慢してやる。ふふふっ、感謝しろ、司。八百万（やおよろず）の神々の中でもかなりの高位存在であるこの『箒神（ほうきがみ）』を肩車できるなんて、そう滅多にありゃせんぞ」
「仕方ないはこっちの台詞だ。見た目は幼女、中身は年増のくせに……あ、い痛っ、地味に痛っ！　だから痛いってば！　下駄で顔を蹴るでないわ！」
「ふんっ、お前には神に対する尊厳というものがない」
「だったらもっと神様らしくしやがれ」
「むぅ！？」
「今度はいったい何だ」
「……なるほどな」
「いや、一人で納得するなし」
「……司、ちぃとばかし面倒なことになったぞ」
「ん、また憑きもの関係か？　こないだの犬神みたいな」
「いーんや、もっと果てしなくごたごたした面倒事よ。おそらく、これまでの小妖怪程度の話ではない。古今東西の魑魅魍魎が集まっ

て妖怪大戦争をおっぱじめるくらいの規模の話じゃ」
「……お前がそんだけ言うんなら、相当なことだろうな。つーか、それじゃあ、ぼくの出番なくね」
「いや、既にわしらもその枠組みの中に盛り込まれているらしい」
「は？　どういうことだよそれ」
「わしにもまだ全容は分からん。しかし、今の内に手駒は揃えておいたほうがよさそうじゃな。おい司、あの『鏡宮（かがみや）』の小娘と連絡は取れるか。それからあの『夜鷹（よたか）』の小僧にもじゃ」
「へ、あ？　鏡宮有栖（かがみやありす）さん？　んー取れるっちゃ取れるけど、正直あの人とは会いたくないんだけどなあ。あと『夜鷹』さんの方もどうだろ」
「司よ、悪いことは言わん。早めに、そやつら身内側に引き込んでおいたほうがよいぞ」
「なあ、箒。さっきから本当何なんだよ。妖怪大戦争が何とかって」
「いや、それはただの比喩じゃ。実際は、もっと複雑怪奇で五里霧中じゃ。正確なことは何一つ把握できん。しかしの、これだけは言える」
「……何だよ」
「世界の終わりが、やって来るぞ」

「帰ってくるよ」
「戻ってくるの」
「んあ？　何だ、《森の仔》か。どうした、また森のお告げか？　いったい何が来るって？」
「魔王の息子だよ」
「贖罪の忌み子なの」

「はぁん？　誰だそりゃ。そんな奴、追放目録に載ってけか？　それとも監視対象の中にいたかな？」
「いずれ世界は終焉を迎える」
「やがて世界は終端に向かう」
「……おいおい、随分と平和じゃねえなそりゃ。『魔術師協会』の伝令役である俺としては、いささか気が重いぜ。まったく、『元老院』になんて報告すりゃいいんだ？　いっそのこと来島（くるしま）に全部押し付けるか」
「裏方と役者は揃いつつあるよ」
「舞台と演出も整いつつあるの」
「なあ、遥（はるか）ちゃんに彼方（かなた）くんよぉ、どうかこの頭の悪いおっちゃんでも分かるように説明してくれないか」
「人間の意思は屈強であり、脆弱」
「世界の意思は絶対であり、矛盾」
「移りゆく時は彷徨い続け」
「流れゆく人に宿命付ける」
「偽善者は犠牲者へと」
「救済者は救世主へと」
「「永久は永劫を喰らい、永遠は永世を産む」」
「嘘吐き、嘯き」
「微笑み、嘲り」
「我らはただ史実を語るだけ」
「我らはただ事実を記すだけ」
「楽園の果実は紅く熟し」
「腐り落ちてはまた実る」

「「願わくば、どうか真実の物語たらんことを」」

「……いや、いやいやいや、だからもっと分かりやすく言ってくれって――ああぁ～消えちまったよ。さて、どうすんの

よこれ。どうすんのよ、俺？」

語られぬ断章　集う物語達（後書き）

たまには会話オンリーです。

……いったい、何なんでしょうかこのジャンル。魔術と科学が交叉するどころの話じゃないですねもはや。

個人的には遥、彼方の双子がお気に入り。

語られぬ断章　昔話と『百万回生きた猫』

天を覆う暗雲。天に舞う幾百の龍。天をも貫く『恐慌』の巨躯。
振り下ろされる腕は地鳴りと地割れを引き起こし、全身のあちこちに小さく穿(うが)たれた孔(あな)から放たれる無数の熱光線は、拡散と爆発を幾度となく繰り返した。
『恐慌』が身動きする度に、足元の山脈が地形を変える。あてもなく広がる荒野は、誰もが口にする世界の果(グラウンドゼロ)てそのものだった。
あるいは、終末とも言うべきか。
どこぞで天使が喇叭でも吹き鳴らしているかもしれない。
そんな現実味が徹底的に廃された目の前の光景に、縮れた茶髪をした、まだ二十代前後と思われる男はポツリと心中の本音を漏らす。
「なあ……カルネイロ。教えてくれ。これは何だ？　どうして空には伝説級の龍が群れ単位で飛んでいて、おまけに『恐慌』の魔王ってのはあんなにデカいんだ？　どうして頭が雲に隠れて見えねえんだ？　なあ、教えてくれよ。これは夢か？　俺は今寝てんのか？」
茫然自失と口をついて喋るナチュラルパーマの青年は、隣で同じく我を失っている、とぐろを巻いた羊のような角を生やす少年を小突いた。
「……例えこれが夢だったとしても、僕だってこんな悪夢は見たことないよ。というか、僕はそもそも非戦闘員なんだ。まずここにいること自体間違ってるんだよ。それに比べてルイド、君はどちらかと言えば特攻隊長だろ。君の爆弾でなんとかしてよ」
羊角の少年は眠たそうな目で隣を睨むが、ルイドと呼ばれた青年はその茶色の天然パーマを狂ったように振りかざして、
「ふざけんな！　あんな山よりデケェ相手をどうフッ飛ばせばいいんだよ。火薬の量も規模も全然足りやしねえ。ひたすらにダルイな

チクショウ」

と、絶望に染まった愚痴を吐いていたルイドのもとに、神に仕える修道女――らしき二人が怒号と共に駆けてきた。

「おいこらそこの羊と天パー！　なにのんびりと観戦なんかしてやがる！　お前ら何しにここに来やがった！　ここは闘技場でも何でもねえぞ！　戦え！　死ぬまで戦え！　でなきゃ死ね！　すぐ死ね！　今ここで死ね！」

「そうよぉ。アレ倒さなきゃさ、なんかこの世界終わっちゃうっぽいし。とりあえずは戦わなきゃ駄目だって」

修道女、と称すにはいささか格好が自由過ぎる二人だった。一方はそうでもないが、片方の彼女は修道服をワイルドに色々な箇所をクールビズにカットし、ミニスカート、ノースリーブという装いだった。隣と比べて慎ましやかな雰囲気は絶無であり、そして決定的なのは、彼女達が所持している、その無骨かつ洗練された武器。

回転式連発拳銃（リボルバー）二丁。

大口径施条銃（マスケット）一挺。

修道女に鉄砲の組み合わせとはこれいかに。

「……『硝煙行軍（ガンパレード）』に、『弾幕行進（ブレットマーチ）』か。うるせえな、お前らだってアレ見てみろよ。あんなバケモンに俺ら如きが敵うはずねえだろうが」

ふと、耳をつんざく咆哮が空に鳴り響いた――と思ったら、『恐慌』の巨大な手が、その一振りで何匹かの龍を引き裂いたところだった。龍は叩（はた）かれた子蝿のように、遠くで力なく墜落していった。

「……ほらみろ。伝説の龍の一族だって、あの様だ。俺たち虫けらがいくら動いたって、あっけなく踏み潰されるだけなんだよ」

その無気力な発言に、『硝煙行軍（ガンパレード）』は自らのリボルバーをルイドのこめかみに押し当てた。

「てめぇ、それ以上情けねえ虚言吐いてみろ。そのスカスカなスポンジ脳味噌に通気孔開けてやる。戦う意思がないなら、ここにお前の存在価値はねえ。いっそのこと手前の爆弾で独りでに自爆してろ。

そんな勇気もないんだったら、あたいがこの場で蜂の巣にしてやる」
がちり、と『硝煙行軍』が引き鉄に手を掛けようとしたその時、
横でずっと静観していたカルネイロが口を開いた。
「……え、それは……はい、了解しました。緊急です、グリンダさんから伝令がきた。あのデカブツの右足関節を集中的に攻撃してくれって。頭部の方は今、『聖龍』率いる龍達と、《彼》が」
――『堕ちたる(メサイア)は神の国』――
カルネイロが続きを述べようとしたその刹那――――突如として視界が激しい閃光により白く染まり、低く轟く爆発音がした次のコンマには、遥か空高くまでそびえていた『恐慌』の身体が、大きく傾いていた。
「う、嘘、だろ……今の、まさかアイツが？」
ルイドが信じられないと言った口調で呟いた瞬間、遅れてやってきた衝撃波が身を襲った。
一頻り続いた砂塵の嵐を耐え抜いた後、『硝煙行軍』は笑うように声を張り上げた。
「ははっ、どうだ！　てめぇもその腐った眼球でしかと見たか！　ああ、恐えよ。あたいらだって尻尾撒きたくなるくらい恐えよ。けどな、それでもアイツは必死に戦ってんだよ！　力の差とかそんなんで言ってんじゃねえ。勝てるかも分からねえ。死ぬかもしれねえ。でもな、アイツはな、あそこで戦ってんだよ！　今でもアイツの『詩歌魔法(キルヒェンリート)』が聞こえてんだろが！　なのにそこで蛆虫みてぇに蠢いているてめぇは何だ？　本当にただの虫けらか？！」
「……」
「ふんっ、だったらずっとそこで蛆虫ごっこやってな。あたいらは征くよ。あいつを――レイシの野郎を、一人で戦わせるわけにはいかないからな」
そう言い残し、『硝煙行軍(ガンパレード)』は『弾幕行進(ブレットマーチ)』と連れ立って、その

場から離れていった。
「……ルイド、僕も征くよ。そろそろ非戦闘員とか何とかって駄々こねてる場合でもないからね」
傍らで静かに一部始終を見届けていたカルネイロも、そっと立ち上がり、詠唱を始めながら歩き始める。
「『幻夢礼装（アナムネシス）』の第一拘束から第四拘束までの解除の許可及び、全開門（かんもん）の解放を容認――」

《これより、幻想を開始する》

そう彼が詠唱を唱え終わった頃には、くるくるとした可愛らしい角の少年の姿は既になく、肥大化した闇の塊が蝙蝠のよな黒い翼を広げ、まるで一つの弾丸のように凄まじい勢いで飛び立っていった。
ただ一人、その場に残された彼は、
「……何やってだろな、俺」
ルイドは腰のベルトポーチから卵のような楕円形のものを取り出し、強く握り締める。そして次に手の平を開いた頃には、その楕円形の物体は四つに増え、指と指の間にしっかりと器用に収まっていた。
「クソッ、ダルイ。限りなくダルイぜこりゃ」
確か、右足関節だったか、とルイドは薄く笑って、どうにでもなれと叫びながら一直線に走り出した。
「クソッ！　クソックソッ！　上等だっての『恐慌』が！　この俺、ルイド＝シュワルツが直々に華々しく優雅に最高に爆ぜてやろうじゃねえかこのクソッたれがあああああああ！」
青年の雄叫びは、力強く戦場に木霊した。

～15年後～

「ふーん、これが君の作った箱庭ってわけか。なっかなか素敵な街じゃん。たった二十年かそこらで栄えたものとは思えないわねーっていうかこのティラミスうまっー！　この世界でケーキなんて甘味を食べられるなんて感激やねー。あと何十年か待たなきゃ駄目だと思ってたよ。アチキは今猛烈に感動してるでやんす」

最近ようやく改装オープンしたカフェ『フロライン』にて、俺と彼女は試作段階から研究に研究を重ねた末に造り上げたケーキの品々をほのぼのとフォークで突きあっていた。

「気に入っていただけて何よりです、ナースさん」

俺は目の前でケーキに夢中な、侮りがたいその人物を見据え、続ける。

「まずは、あの時あなたから貰ったブローチの件について礼を言います。あのブローチのおかげで、俺は今こうしてここにいるわけですから」

「いんや、いいのいいのー。アチキは単に君との約束を守っただけなんだから」

おぼろげながらも、脳裏に思い浮かぶ幼少の頃の記憶。そう、確かに俺はこの人と約束を交わした。

まったくもって、忘れていたけど。

「あのブローチに施されていた仕掛け。今になって考えば、あれは魔術や魔法でもありませんでしたよね。いったい何だったんですか、あれは？」

「科学だよ」

ナースさんは単純な数式を解いていくような淡々とした声音で答

えた。
「このファンタジックな世界にはまだあまりない概念だけど、アチキが生きてきた数多（あまた）の世界のテクノロジーや理論を総決算して独自に編み出したモノっす。ほら、かの有名なアーサー・C・クラーク曰く――」
「十分に発達した技術は魔法と見分けがつかない、でしたっけ」
「んまぁ、そゆこと」
ナースさんはそう頷きながら、ティラミスのスポンジ層とザバイオーネクリーム層の絶妙な絡みを堪能し、口ん中がロンバルティア同盟や！　と訳の分からない絶賛の仕方をした。
「しかし、あなたを探し当てるまでに十五年。結局は、あなたの方から出向いて貰う形になったわけですが」
彼女は次にこの店自慢のモンブランを切り崩しながら、ふふふっ、と薄く笑った。
「そりゃ、こうもしつこく口説かれちゃぁね。アチキも折れないわけにはいかないって」
「粘着系男子は嫌いですか？」
「んにゃー、嫌いでもないよ。アチキみたいに時間の感覚がほとんどないような奴にとっちゃね。むしろそっち方がありがたい」
それに、君と再会するのもこれで七度目（・・・）だしね、とナースさんはボソリと蛇足のように付け足した。
「一度目の俺は、どんな感じでした？」
と、俺は興味本位で尋ねてみる。
「んぅー……ちょっと待って思い出すから。何せ、もう体感年数にしてみればウン億年（・・・・）も前のことだしさ……あ、ああ、そうそう。君は確か、廃れた港町で絵を描いていた」
「幸せそうでしたか？」
「そこそこにね。というかさ、そもそも君が生存している世界っていうのは決定的に少ないんだよ。アチキが思うに、君はどうやらそう運命付けられたある種の《特異点》らしいやね。まあ、『交叉点』

であるアチキが言うのも何だけど」
「……その他の俺はどうでした？」
「んー？　ん！　おお、話してたらだんだん思い出してきた。えと確か、二度目の君はとある呪われた家系の跡取り息子で、三度目は指名手配の脱獄囚だった気がする」
「……どれもロクでもない人生ばっかですね。それで、四度目の俺は？」
先を促してみると、ナースさんは照れくさそうにはにかんでから、
「アチキの恋人」
でへへへ、と彼女は軽く頬を染めながら頭をかいた。
「それは――光栄ですね」
無論、俺自身にそんな記憶は一切ないので、何だかまるで自分の二次創作でも聞いているかのような心地だった。それにしても、この人が恋人って、何をどう道を踏み外したのだ、俺。
「まあ、不幸なことに交通事故で早死にしたけど」
「結局ロクでもないじゃないですか」
「しょうがないからアチキも自殺したけど」
「しょうがないの使い所が違う！」
つーか後追い自殺かよ！　やめてよ、愛が重いよ！　前述の言葉は取り消します。俺ってばそんなに愛されたのね。ナースさんに愛されてとことん幸せ者じゃないかこの野郎。
「んでー、次に私が五度目の再会を果たしのが、前の世界。君は長野の孤児院で、鯨木澪士という名前で生活を送っていた。そして六度目。どうやらこの世界での君は死んでいるか生まれてこなかったかの理由で存在せず、代わりに前の世界と同一の君がいた。アチキとしても、このパターンは初めてだったから当初は随分と驚いたけどねん」
そう言って音も立てず上品に紅茶をすするナースさん。
俺は少し合間をあけてから、唐突に話題を変えてみた。
「ナースさん。実は最近になって、ようやくあなたの名前を思い出

したんですよ」
　すると彼女は興味深そうに俺の顔を覗きこみ、へえー？　と相槌を打った。
「名前なんてアチキにとっちゃぁ、あってないようなもんだし、意味もほとんど皆無だけどね」
「では、俺にとって意味があるものにしましょうか、ナースさん――いえ、この世界では、『大賢者（ヴァイナモイネン）』のハイバーン＝ネグラントとでしたっけ。それともあるいは、『交叉点（クロスフェードアウト）』、『共通背景（エキストラバラレル）』、『汚染（ペイン）通告（トペイン）』、それら三つの呼称でも構いませんが、しかし、俺はあえてあなたをこう呼びましょう」
『百万回生きた猫（ミリオンアライブ）』の恋坂焦（こいさかこがれ）、と。
　もぐもぐと順調にモンブランを減らしていく彼女は、一息入れるように紅茶を飲むと、意味深な流し目を俺によこした。
「……でも、あなたがどうしてそういった存在であるのか、依然として謎のままですけど」
　そう俺が軽く肩の力を抜くと、反対に彼女はティースプーンを弄びながら、
「んにゃ、それについては簡単なことだって。もう《数え切れないぐらい前のアチキ》は、世界とか運命とか、そういうものに逆らってみたかったのさ。因果不文律を超越し、亜空間法則を捻じ曲げる、そんな存在に憧れた。詰まるところ、《神様》ってものになりたかったのかもね。その結果、アチキは自分がいた世界を丸ごと消滅させ、並列世界の自分にまでその報復を課しちゃったってわけ。君の言う『百万回生きた猫（ミリオンアライブ）』っていうのは言いえて妙だよ。その通り、アチキは死んでも死んだことにはならない、そういう本質を抱えちまった、あまねく森羅万象からのはぐれ者なのさぁ」
　平淡かつ単調に、彼女は自身の種明かしをした。俺はしばらく自分が頼んだ珈琲の湯気を眺めてから、言った。

「では、そんなあなたに、一つ質問があります」
「まあ、ケーキも美味しかったしね。アチキが答えられる範囲なら、お姉さんに何でも訊いてみぃ？　あ、ちなみにアチキのスリーサイズは秘密ねっ」
「興味ないです」
「持てよ」
「……改めて訊きますけど」
「はいはい、何ざんしょ」
強制的にシリアスな空気に持ち込んだ俺は、一呼吸置いてから彼女を見据える。今回俺が、この人物を呼んだ理由と、目的。
その真意。

「『百万回生きた猫（ミリオンアライブ）』のあなたなら、俺が元の世界に帰れる方法を知っているんじゃないですか？」

しばしの沈黙と静寂。
ふと横を、忙しそうにウェイトレスが通り過ぎていった。
壁に掛かった柱時計が三時の告知を店内に響かせる。
そこで、彼女は。
「……紅茶のおかわりは頼めるかな？」
ニコっと相好を崩し、微かに空のカップを傾けた。
「よろこんで」
俺は快く了承した。

第一話　家庭を治めるより、一つの国を統治するほうが容易である

気がついてみれば、それなりに長い年月が経っていたってよくあることだと思うのだけれど、実際それはただ自分が惰性に時間を過ごしていたという何よりの証拠であって、それほど褒められたものでもない。

まあ、十分に充実した常日頃を送っている点に関してはなんら問題はない。毎日が怠惰で成り立っているにしても、今の自分が満足しているのなら、それが真の幸福というものではないだろうか。

詰まるところ、本当の幸せというものは、そういった変わりのない、代わりのないダラダラとした平和な日常なのではないかと、俺はここまで生存してきて、ふと益体もなく思ってみたりする――――と、そこまで思考して、やはり俺も歳をとったなと改めて感じた。見た目の年齢があの頃から一切の時を止めているので、鏡をじっくり覗き込んでも全然実感が湧いてこないので困っていたのだが、なるほど、実感という代物は決して外部から与えられるものではなく、内部により構成されるものであると、俺はまた新たに賢くなった。

「主（あるじ）、朝です。ご起床ください」

嫌です、と俺はふかふかの毛布に包（くる）まり、徹底抗戦を決意した。

「止むを得ません。それでは剥がさせてもらいます」

この毛布を剥がされてなるものか、と俺は必死に身構えたが、

「――皮を」

と低く呟いた彼女の声で、我が最終防衛ラインはあえなく崩れ去り、俺は天蓋つきの寝台から飛び起きた。

「朝から物騒な目覚ましをありがとう、シュネー。それとおはよう」

俺は傍らで佇む、黒を基調とし、レースとフリルがふんだんにあしらわれたメイド服の彼女に挨拶する。雪のように白い肌。林檎のような赤い瞳。両手には純白の長手袋を装着しており、髪型は一言で言うと市松人形のようで、絹糸のような細い長髪は腰まで垂らし、前髪は几帳面に切り揃えられていた。

「おはようございます、主。朝食は既に用意してあります。それから着替えはここに」

「ああ、サンキュ」

俺はシュネーから差し出された下着と、一見、チャイナ服とアオザイの中間ようなデザインの服を受け取る。いつだったか試しにオーダーメイドで作らせて以来、ゆったりとしたシルクの肌触りが心地良く、もっぱら普段着として活躍している。今日の柄は黒の無地に、ツタのような模様が白で描かれていた。

「今日こそ、私めが着替えのお手伝いを……」

「いや、いい」

俺が即座に断るとシュネーは、そうですか、と大人しく引き下がった。

俺は寝巻きとして活用している藍色の着流しの帯を解こうとして、先程からしつこく絡みついてくる視線に気づく。

シュネーがひたすらに俺を凝視していた。

「……いや、見られてると非常に着替えにくいんだけど」

シュネーは引き下がっただけで、退室はしてくれなかったらしい。

「いえいえ、どうかお気になさらず。ささ、どうぞ脱いじゃってください」

「じゃあ、せめて後ろ向いててくれないか」

「御意に」

くるっとパニエで膨らんだスカートの裾をはためかせ、素直に回れ右をしたシュネーを見届け、俺は再び脱衣を試みるが、

「……チラ見してんじゃねえよ」

シュネーはしれっとしたすまし顔で、こちらにチラチラと眼球だ

けを動かしていた。
「なら、ガン見ならよいと」
「うん、とりあえず前提条件から覆(くつがえ)そうか。こっちに目を向けるなと言っている」
だが、シュネーは意外なことに反駁した。
「主こそなんですか、それではまるで、私が主の朝の生着替えシーンを観賞するのを生き甲斐にしている淫乱な痴女みたいに聞こえますが、まったくもって心外の境地です。エデ様ならいざ知らず、主は私をそんなに主の着替えシーンで生唾を垂らすような淫女に仕立て上げたいのですか」
どこかの誰かさんみたいな無表情で、ぷりぷりと憤るシュネー。
悪かったよ、と俺も少し言い過ぎたかなという感じもあるので、こちらの非を認めて頭を下げたが、すぐに後悔した。
「着替えなどではなくて、私はただ単純に主(あるじ)の裸が見たいだけなのです」
「二秒やるかさっさと出てけ」
俺の寝覚めは、大体いつもこんな感じ。

朝っぱらからあんな面白くもないショートコントを繰り広げたことで今の俺のライフはゼロに近かった。まあ、元々低血圧気味の俺は倦怠感を引きずりながら無駄に長い廊下を歩き、等間隔で設けられた窓から差し込む朝日に目を細めながら、やっとのこと俺はダイニングルームに辿り着く。両開き扉を押して入ると、そこには三人の人物が、静かに縦長のテーブルの席に腰を落ち着けていた。三人の前には既に湯気が立ち上るスープやパンの類が用意されており、

どうやら俺が来るまで食べるのは控えておいてくれたらしい。
三人が同時に俺の来訪を視認して、順々に口を開いた。

「おはようございます、父上」
「おはようございますわ、父様」
「おはよ、パパ」

「おはよう。ユートに、エデ、それにシャン。悪いな、待たせて」
まず初めに俺が詫びを入れると、
「父上の為でしたら、私にとって永久もまた単なる一時に過ぎません」
黒髪を素敵に撫でつけた長男のユートが、俺の感性では到底理解出来ない詩的な返事をし、長女のエデも負けじとその黒い瞳を光らせて発言しようとするが、
「わ、わたくしだって父様の為でしたら……」
「パパ、はやく食べよ」
とその続きを三女のシャンの舌によってばっさりと遮られてしまった。憎々しげにエデは妹を睨むが、シャンはシャンで目の前の朝食だけに神経を集中させており、姉の眼力など食欲に比べればどうでもいいといった風だった。
今日も変わらず元気そうな我が子達の様子を微笑ましい思いで見つめながら、俺は席に着く。
「それでは遅くなったが、今朝のうまき糧(かて)を食すとしよう――いただきます」
「「「いただきます」」」
俺と三人の愛しい子供達は、両の手を合わせ、目前に並ぶ命の犠牲と今日も相変わらずいい仕事をしたシェフのテオドールに感謝を述べた。

俺が現在根城にしている……んまあ、リアルに城なんだけどさ。名前はつけたことないから、とりあえずはイサナギ城でいいのかな。うん、ダサ。でも他国からはこっそり魔城とかって呼ばれているらしい。社交界や外交関係とかは全て『智将』とかに一任しているので、そこら辺はよく知らないのだけれど。

外観を分かりやすく表現するなら、屋根などを除いて全体的に白く塗装され、イメージ的には外装に凝った都心のラブホテルのようにも見えなくもない……いや、俺にもう一度描写のチャンスを。

そんなデカイものでなくていいし、内装も外装も豪華でなくていいと建設時に俺は散々注文したのだが、何だかんだで五階にまで建築されてしまった（おまけに物見やぐらの塔まで添えつけられた）。およそ六角形になるように周囲を城壁で囲まれ、俺の趣味が爆発した中庭や、武器庫、官僚達が寝起きする居館（パラス）や、近衛兵団（このえへいだん）の兵舎なんかもあり、中央にある広場や、隅の武道場では、日々我が国の精鋭たる兵達が阿鼻叫喚の訓練に励んでいる。それもこれも、『軍神』による恐怖のしごきのせいなのだが。

何はともあれ。

今年で築二十年ぐらいを迎えるこの城の中で、俺の惰性化した日常は始まる。前述の通りなら、これはこれで幸せというものなのだろうけど。

「レイシ様！　聞いていますか！？」

「え？　全然」

「何をそんなさも当然のような顔をして言っているのですか！　もっとシャキッとしてください。あなたはこの国の王なんですよ」

『軍神』の名で恐れられる、近衛兵団総隊長のアイギー＝オーガスタスは、ドサッと俺の作業机に紙の束を置いた。昨年度の国家予算案や、新たに永住した人民のリスト。先週スーが壊した城壁の修

理費。その他諸々俺のサインが必要な書類がエトセトラエトセトラ。
「自国と地獄って何か似てるよね」
「くだらないこと言ってないで、早くこの書類全てに目を通してください」
「自分の部隊の訓練はいいのか、アイギー」
「あなたがもっと真面目に仕事してくれれば、私はすぐにでも自分の職務に戻りますよ」
あちこちに跳ね返った赤褐色のロングヘアーから、ちょこんとと伸びる二つの角。見るもの全てを射抜くかのような三白眼。けれどそれに反して、可愛らしい八重歯が口元からはみ出している。俺はそれらを何となく眺めながら、この膨大な量の職務から逃亡する為の手段を練っていた。
「なんですか、レイシ様。私の顔に何かついてますか？」
「ん？　いや今日も可愛いな、アイギー」
まあ、軍服のようなダークスーツとネクタイに、ぴったりとしたパンツにゴツゴツとしたロングブーツといった装いは、どちらかというと、カッコイイとか凛々しいとかの表現のほうが正しいのだろうけど。
「な、なな何をいきなりっ……！？」
思いのほか、アイギーが俺のからかいに可笑しいほどあたふたとしていると、そこへグッドタイミングなことに見慣れた白い頭が視界に映った。
「レイシ様ぁ、文が届いてますよ」
王立魔術師小隊総司令である、『智将』とも名高いマキ＝ヴィハベーストが、短めの白髪頭を揺らしながら、俺の職務室に入室してきた。
「おー誰から？」
「あー……こないだの茶会の幹事であるキルリエ公爵からと、その令嬢からです」
「読みあげて」

いいんすかー？　とマキはぼやきつつも公爵の方の封蝋を器用に開けて、
「えー……先日の我が招きに応じ、貴殿の到来をまずは真に喜び……」
「一行で要約して」
「つまり、自分の娘を嫁にやるから金よこせと書いてあります」
俺の無茶振りに普段通りマキは十全に応えてくれた。
それにしてもびっくりするくらい簡潔である。分かりやすいことこの上ない。
「キルリエの令嬢……確か、名前はクレアちゃんだったかな。そっちの内容は？」
そう俺が言うと、流石にマキも呆れたように嘆息して、
「んまぁ、ここまで来たら読みますけど……えー……ああ、なるほど。レイシ様、こっちは普通に恋文っぽいんですけど」
手紙の扱いに困ったような苦笑を漏らした。
「ふーん、分かった。じゃあマキ、返事を代筆してくれるか。伯爵には、さっさと歯磨いて糞して隠居しろ狸ジジィっていう旨を。クレア嬢には、また一緒にお茶しようねーって感じでヨロシク」
ヒラヒラと俺が手を振ると、マキはほとほと疲れたように溜息を吐いた。
「もう、あんたって人は……いいです。分かりましたよ」
そして、ふと俺の隣にいるアイギーに目線を移すと、盛大な舌打を鳴らした。
「おやおや、鬼軍曹のアイギー殿が職務怠慢ですかな？　油売ってねえで自分んとこの職場にさっさと戻ったらいかがですかな？」
あぁあっ？　と反対にアイギーも青筋を浮かべてマキにガンを飛ばした。
「これはこれは、白髪モヤシのマキ総司令ではないか。どうした、手紙なんぞ届けて？　郵便家業にでも転職したのか？」
「はぁあ？」

「おぉう？」
テメやんのかオラ？　やんぞゴラぁ？　やってやろうかおお？
おおやったるわボケぇ、という意味合いの応酬をしばらく二人は繰り返し、頃合を見計らって俺は仲裁を試みて、二人が放つ火花の消火にあたった。
そんな矢先に、エデがひょっこりと尋ねてきた。
「父様、何かわたくしにお手伝い出来る事は……」
キッ、とエデは目敏くもマキが持っている手紙の存在に気づいた。
「マキさん、失礼しますわ」
そう前置きして、エデはマキから封書――クレア嬢の方をひったくると、たった一瞥しただけで事情を理解したらしく、マキに向かってにこやかに微笑んだ。
「マキさん、この手紙の代筆、わたくしが請け負いますわ」
嫌な予感しかしないといったような顔で、マキは不安そうに尋ねる。
「あの、エデ様？　いったいどんな返事を書くつもりで……？」
「そんなの決まってるじゃありませんこと？　二度とこのメス豚が父様に近づかないよう、警告というの名の怪文書を……」
だあああ！　とマキは慌ててエデの手から封書を奪い取った。
「あのですねエデ様、先々月にあなたの手紙のせいで隣国と戦争になりかけたのをお忘れですか」
「だって、それはあの国の姫（ブタ）とか言う女が父様にすり寄ってきたから……」
「仮にも一国の姫をブタ呼ばわりしないでください。あの時、俺がどんだけ調停とゴマすりに骨を折ったことか……」
マキは過去の苦労を思い浮かべ固く拳を握りつつも、俺にまた一通の書簡を差し出した。
「え、まだあんの？」
「はい、これが最後で、グラニエ辺境領主のルナール公からです。こちらは、自分で読まれたほうがよろしいかと」

んー、と俺はマキと違って封蝋を無造作に引き剥がし、中身の文面を黙読する。
「ふうん……よし、エデ、出かける準備だ」
「は、はい！」
「なりません！」
颯爽と立ち去ろうとした俺の首根っこを、すかさずアイギーが掴んだ。くそぅ、俺は猫か。いつの間にか俺と同じ身長になりやがって。マキに至っては俺より高いぞ。いったいどういうことだ！？
はい、年月のせいです。
「まったくどこへ行かれるつもりですか」
「ルナールが俺に来てほしいって言ってんだよ」
アイギーにルナールからの手紙を突きつけ、どうにか掴んだ手を放して貰う。
「だったら、誰か使いの者を送ればいいでしょう。あなたが直接行く必要はありません。ルナール公にもそう伝えておけば問題はないでしょう。あなたはあなたの仕事をしてください」
ちぇー、と俺は素直にアイギーの言葉に従い、
「分かったよ、まったく。俺は俺の仕事をします。使者についてはまたマキ辺りに――――と見せかけダッシュ！」
アイギーがほっと安心した隙を突いて、俺はどこぞのアイシールドみたく彼女の横を駆け抜けた。背後には俺の行動をちゃんと予期していたエデが、タイミングぴったりに追随してきた。さすが俺の娘。よく分かってらっしゃる。
レイシ様！？　と後方からアイギーの怒鳴る声が聞こえたが、俺は無論聞こえないフリをした。

「ちょ、レイシ様!?　おい、マキ！　お前分かってただろ。なのに何故止めなかった！」
その場にまんまと取り残されたアイギーは、長年の付き合いである同僚のマキを責め立てる。しかし、マキはそれこそ愚問であるという風に肩を竦め、
「アイギー、お前だって昔から知ってんだろ？　あの人を縛るなんてことは出来ない。止めたきゃ勝手に止めにいきな。俺は知らん」
軽く悪態を吐き、アイギーは無駄だと知りながらもレイシの背中を追うことにした。

「ユート！　シャン！」
エル――と言いかけて、ああ今はいないんだったと思い直しつつ、俺は城内を駆けずり回りながら、子供達の名前を叫んだ。
「ここに」
「呼んだ、パパ？」
十秒後。訳もなければ、どこからともなくユートの長身痩躯とシャンの短身矮躯が姿を現し、俺の後に追従した。
「これからルナールの城に行く。急げ、アイギーが追ってくるぞ」
この一言だけで二人は事の大部分を納得したらしく、黙って頷いた。俺は走っていた廊下の角の窓を開き、そこから外へ出て、屋根伝いに中央の広場に飛び降りた。高さは約十メートル前後。だが、難なく俺を含めた全員が地上にスタッと軽やかに舞い降りた。
「きゃっ！」
突然空から人が降ってきたせいで、ちょうどモップとバケツを持って移動中だった、メイドの一人であるサンが悲鳴を上げた。
「……な、なんだレイシ様達でしたか。もう、脅かさないでくださ

いよ」
　豊かな金髪の三つ編みと、クリクリとした大きな翡翠の瞳を瞬きさせて、サンは動悸を抑えるように胸に手をあて、はーと息を吐いた。サンはシュネーと異なって、いつも簡素なフレアスカートにベストを羽織り、白いショートエプロンという格好だった。彼女も俺と同じく、服装は動きやすさ重視の人間なので、何かと気があったりする。
「サン、丁度良かった。すぐに馬車の用意をしてくれないか」
「馬車、ですか？」
「ああ、大至急だ。早くしないとコワーイ鬼が来る」
「ああ、またアイギーさんから逃げてるんですね」
　では、すぐに手配してきますから、と苦笑混じりで、モップとバケツを抱え、サンは小走りに城の裏手に回っていった。
「……それで、父様。ルナール公はいったい何と？　また減税の話でしょうか」
　走ってきたせいで乱れたのか、自分の長髪の毛先を整えながら、エデがおもむろに訊いてきた。
「いや、詳しいことは書かれていないんだが、どうやら大事な話らしい。手紙にもどうぞご内密にってあったしな」
「それは少し臭いますが、父上？」
　俺より頭一つ分でかいユートが、父親の俺とはまったくもって似ても似つかない秀麗な顔立ちで言う。定期的に招かれる他国のパーティーなんかには、面倒臭がりな俺の代理で必ずユートを派遣しているのだが、ユート宛のラブレターや見合いの誘いやらがその度に山の如く届くので、多少難儀している。
「あっちに着いたら、ごはん出るかな」
　ミディアムボブの栗毛を弄りながら、シャンはひたすらに食事の心配をしていた。シャンの身長は、俺の胸に届くか届かないか程度で、兄妹の中でも一番低い。しかし、食欲だけに関して言えば随一だった。

「んまあ、到着したら全部分かるさ」
ついでに、オラもなんだかワクワクしてきたぞ。

アイギーが城の正面玄関を飛び出し、中央広場に辿り着いた頃には、既に澪士達の影はなかった。
「ああ、サン！　レイシ様達は……」
近くで城門がある方向に手を振っているサンに、アイギーは詰め寄った。
「はあ、もう行ってしまわれたが」
その返答にアイギーは、がっくりと脱力したように項垂れた。
「……ああ、何で誰もあの方を止めてくれないんだ」
嘆くようにアイギーは呟くが、そばでモップを肩に担ぐサンはくすくすと口に手を当てて微かに笑った。
「まあ、レイシ様ですから」
「……それも、そうだな」
レイシ様だからな、とついにはアイギーも諦めたように苦笑いし、どうかお気をつけて、とサンに倣って、視界の遠くに消えていく馬車のシルエットに向かって敬礼した。

『ティルナノーグ』。
どうやら俺が治めているらしい国の名称。まあ、国といってもちょっとした領地に城と街があって、その外壁の向こう側には、大陸

有数の『魔術学校（アカデミア）』を数年前に建造した、ここ二十年でそこそこの繁栄を維持し続けている極小国である。地形としてはなだらかな平地が広がっているかと思いきや、頂上が白く染まったアルプス並みの山脈が周囲に連なり、おかげで雪解け水などが豊富で、水不足に困ったことはこれまで一度もない。加えて、ここから四ビットほど東に進んだところには巨大な塩湖があり、塩不足にも悩まされたこともなかった。まさに《楽園（ティルナノーグ）》の名に相応しいこの土地は、とある《怪物（プティモンストル）》によって永いこと守られていた。

だから、こんな至れり尽くせりな土地を手に入れた初期の頃は、幾度となく他の近隣諸国に攻め入れられたり、侵略されたりもしたが、現在はなんとなく緩い平穏が続いている。というか、逆に返り討ちにして、いくつかの国を滅亡に追い込んだこともあるくらいだった。そんな挙句の果てに、俺につけられたのが『畏憚』という称号。

『恐慌』、『終端』に続き、『畏憚』の魔王である。

一部では《異形》の領主とも囁かれている始末で、俺としては呼称なんてどうでもいいのであるが、一応は自分でも『魔王の息子』とか堂々と宣言しちゃっているので、旧魔王体制の時代の人達（もっとも魔族とか亜人とか色々な種族がいる）が徐々に集まってきて、一時は俺もバリバリの仕事人間だったのだが、近年になって次第に落ち着いてきてから、俺は何とも無気力な人間に戻ってしまった。燃え尽き症候群（バーンアウト）とでもいうのだろうか。

いずれにせよ、この俺こと鯨木澪士は、相も変わらず魔王としての日常をチンタラと謳歌しているということでひとつ。

「おー見張りごくろー」

街中でも一般に普及している二頭立ての馬車の窓から俺が首を出して、外壁の検問所で見張りに従事する兵士二人に、通り過ぎざま労いの声をかける。

レ、レイシ様！？　と二人は仰天したような声を出した。

さーて、ルナールの城には昼を少し過ぎたあたりに着くだろうと、

御者台を任したユートに、それまで頼んだーと手を合わせた。
「このユート、命に替えましても父上を無事送迎いたしてみせます」
うん、別に命に替えなくてもいいよーと俺は亀みたいに伸ばしていた頭を中に引っ込め、席に腰を下ろした。
馬車内では向かい合う形で席があるわけだが、どうしだか我が愛娘二人は、俺を挟んで両側に居座っていた。正面の席はガラ空きである。右を向くとエデがそわそわと頬を上気させて、左を見るとシャンがポケットから召喚した棒キャンディーを感情に乏しい表情で口にくわえていた。
「ねえ、狭くない？」
「い、いえ。わたくしは別に……」
もじもじと頬に手を添えて、しおらしく答えるエデ。
シャンはどうだろうかと左側を窺ってみれば、
「……パパも、舐める？」
何故だか、チロチロと舌を這わしていた棒キャンディーを俺に恵んでくれた。
シャンが他人に食べ物を施すなんてことは滅多にないので、俺はせっかくだからと、ありがたく口内にキャンディーを含むと、シャンは嬉しそうにはにかんだ。シャンの笑顔というのもまた大変まれだったので、俺は何だか一石二鳥で得した気分になった。
それとは裏腹に、エデの顔が世紀末覇者と差し支えなくらいに恐ろしいものとなっていたのだが、理由を訊いてもエデは妹を忌々しそうにねめつけながら、何でもありませんわ、と言葉を濁すばかりだった。
うーん……エデもキャンディー欲しかったのかな？
娘の心情をイマイチ察することが出来ない、俺はまるで駄目なお父さんであった。
略して――――

第一話　家庭を治めるより、一つの国を統治するほうが容易である（後書き）

マダオである。

どうも、蝉です。

鯨木澪士、四児の父。もう一人はいずれ。

第二話　たかだか林檎の木が一本生えただけの楽園

俺の予測通り、グラニエ辺境領主、ルナール＝ヴィッド＝グラニエが住まう城に辿り着いたのは、昼を少し過ぎた頃であった。

ここグラニエは辺境と呼ばれるだけあって、城の後方には手付かずの深い森林を控えており、かといって特に肥沃という訳でもなければ、ここに至るまでの道のりも、特に石畳のような補強もなく、途中行く手を阻む倒木（ユートが吹っ飛ばした）などもあったりして、何かと色々荒れ果てていた。しかし、逆にこんな辺ぴな場所だからこそ、今まで目立った外敵からの侵略もなく、のどかに農耕だけで生き残ってきたのだとも言えるだろう。

とういうか、むしろここの領主が代々ヘタレだったからという理由の方が強いのかもしれない。

「こ、これはこれは、レイシ様。ず、随分と、お早いおつきで……え、ええ。お待ちしておりましたとも」

ルナール公は俺達一行を城門の前まで直々（じきじき）に迎えて、ヘコヘコと頭を下げた。

刈り上げた金髪の、ひょろひょろとした体つきの青年だった。他人に媚をワゴンセールで売り捌くようなへらへらとした締りのない顔。一応は貴族らしい上品な服装はしているが、それらを除けば、誰もこんなモヤシが貴族の領主だとは分かるまい。

そして彼の傍らには、クールビューティーをそのまま体現したかのような、秘書であるエレイナの姿もあった。定期的に眼鏡のズレを直す仕草にはただならない何かを感じる。隣にいるルナールよりも、秘書の彼女の方が数段頼りになりそうなのは言うまでもない。

まあ、実際ルナールもエレイナがいなかったら、一人じゃ何も出来ないだろうけど。

「うぃーす、ルナール。来てやったぞー」

「あ、はい。すいません。急にお呼びだてしてしまって。あ、ご子息様達もお出でになられたのですね。……あれ、えーと、エル様はどうなされたので？」

馬車を下男の人に預けたユート達が最後に馬車から降り立ったところで、ルナールが訊いた。

「エルはちょっとな、隣国までお使いに行ってる」

王室まで密書を届けに、とまでは言わなかったが。

「そう、でしたか。で、では、どうぞ部屋のほうまで。あ、昼食がまだでしたら……えと、エレイナ？」

「既に用意できております」

ルナールが不安げに横を窺うと、エレイナが凛とした声で答えた。

「だ、そうですので」

その言葉で、三女のシャンが嬉しそうに唇を舐めた。道すがらポケットに貯蓄していたお菓子やら何やらを食していたにも関わらず、シャンの胃の収容スペースはまだまだ空きがあるらしい。別腹というやつだろうか。

俺達はルナールとエレイナの後に従い、城の中に案内されていった。

城、といっても俺が住んでいる魔城（何だかんだいって、一番しっくりくる呼称）よりも二回りぐらい規模が小さく、正確には城壁の中にある屋敷という表現のほうが正しいかもしれない。地形的には小丘の上に建っており、城下の村々を見下ろす形となっている。まあルナール自身は、村人から見下（みくだ）されているのかもしれないが。

民に舐められている領主っていうのも、あんまり聞かないな。

先代である父親を二年前に亡くし、他に兄弟もなく、若くして領主の地位を受け継いだルナール。

それは、かつての自分の境遇と似てなくもない。

「……ふーん、この肉、やわらかくて美味いな」
正直、塩気が物足りない感じもするが。
招かれたランチにて、目の前に並ぶ食事の数々を味わいながら、俺は下座に座るルナールを見た。
「はい、裏手の森で放牧している豚でして、お気に召していただいて何よりです」
ルナールはホッとしたように息を吐き、そのすぐ横では、やはり秘書のエレイナがぴったりと寄り添うように立っている。時折、主に何かを耳打ちしている様子が見られた。
ふと、我が子達の食事風景も眺めてみる。
長男のユートはキレのいい動きで粛々とナイフとフォークを操り、先程俺が褒めた豚肉のローストを丁寧に切り分け、口に運んでいた。いやはや、親の欲目を抜いても、我ながら自分の子供だとは思えないほどの秀麗さである。ちょっと憎らしい。
長女のエデも、女性らしい上品な動作で葡萄酒が注がれた杯を優雅に傾けていた。俺の視線に気づくと、恥ずかしそうに頬を赤らめて目を伏せた。エデもエデで、どうして俺の子供なのにこんな美人さんなのだろうと常々思う。いや、欲目とかないよ、ホント。
最後にシャンへ目を向けると、彼女はひたすらに食欲を満たすことだけに夢中だった。しばらく観察していたが、一向に手と顎の動きが止まる瞬間は訪れなかった。最低限のテーブルマナーは守られてはいるが、今度、落ち着きというものを教えなければならない。まぁでも、うん、シャンも可愛いよ。
念を押して言っておくが、俺は断じて親バカではない。
「あ、あの、レイシ様」
「ん？」
バケットに似たパンを千切って口内に放り込んでいたら、ルナールがおずおずといった具合に口を開いた。
「食事が終わりましたら、わたしの部屋に一度来て頂けませんでしょうか。そこで、今日の用件をお話したいのですが……」

ユートとエデとシャンが同時にチラッと俺に目配せをした。俺は、大丈夫だとの旨を子供達にアイコンタクトで返信した。
「ああ、分かった」
エレイナが、自分の主人にまたも何かを囁いていた。

「んで、大事な話ってのは？」
食後。ルナールに通された客間は、対談用のソファが二つと、その合間にローテーブルが挟まれているだけの相変わらず質素な部屋で、絵画や装飾なんかの類もなく、なかなかに好感が持てた。自己顕示の塊で、自己謙抑の欠片もない無知傲慢な成金趣味の貴族なんかに比べれば、ルナールのほうがよっぽど好ましい。
まあルナールから言わせれば、この家で一番良い部屋がこの客間らしいけれども。
「え、いや、そのです、ね」
「減税の話だったらもう聞き飽きたぞ。凶作の年はとっくに過ぎただろうが。あんまりくどいようだと、お前の眉毛全部燃やすよ？」
「ひぃ」
「ルナール様、お気を確かに」
軽口のつもりで言ったのだが、案の定ルナールはソファに腰を下ろしたままのけぞり、背後に付き従うエレイナにしっかりとフォローされていた。
「え、エレイナぁ……わ、わたしの眉毛が」
「大丈夫です、ルナール様。あなたはやれば出来る子です」
「うぅっ、けど、やっぱこの人すごい怖いよ」
「そこは、がんばってください」
「で、でも」

「がんばれ」
「……うん、わたし、がんばるよ」
……なんだろうか、このやり取りは。ワザとなのか？　コソコソと話してはいるつもりなのだろうが、はっきりとまる聞こえである。まさか、こちらに聞こえていないとでも思っているのだろうか。俺もここではあえて空気を読んで何も突っ込まなかったが。
「じ、実はですね、レイシ様。先日、隣国のイズニィルからの使者がこの地に参りまして……」
「イズニィル？」
確か、『ティルナノーグ』を立ち上げた当時、一番最初に不干渉条約を持ち込んだ中立国であったか。あの頃、どこもかしこもあの土地の侵略と略奪しか考えていなかったにもかかわらず、その国だけは自国の精神を曲げず、あくまでも中立を貫いていた。その時の俺は、快くイズニィルと互いの国に対する不干渉条約を結んだが、現在に至っては、こっそり細々と交易をしていたりもする。
「その安全第一、平和一番な永久中立国が、どうかしたのか」
「えと、ですね。これは大変言いにくいのですが……」
ごにょごにょと言葉尻を濁しているルナールに、俺は早くも苛立ちを覚えながら、彼の回答を辛抱強く待っていると、突然。
「――――なんだ？」
巨大な――否、多勢の軍団。魔術師が、百……いや、ただの騎兵もいる……ふむ、ここからだと明確ではないが、数は千人未満ほどだろうか。
ルナールは俺の様子から何かを悟ったようで、切羽詰った風にソファから立ち上がり、
「え、う、嘘だ。まだ、約束の期限は一週間もあるじゃないか！？」
「期限？　おい、ルナールそれはいったい……」
俺がこのモヤシに詳しい事情を聞き出そうとした時、客間の扉を乱暴に押し開けてシャンが飛び込んできた。
「パパ、こっち来て」

シャンは俺を急かすように手を引き、振り返るとルナールも後に続いたので、俺はシャンの導きになすがままにされた。

「ほっほー、こりゃぁ壮観だわ」

シャンに腕を引っ張られて到達したのは、屋敷正面の三階に位置するバルコニーだった。そこからの景色は城壁を乗り越え、城下の村々を飛び越え、遥か先の地平線まで広く臨めた。

そう、平地が続く地平線に沿って布陣を敷く、幾百の兵まで賢覧（けんらん）出来たのであった。

「ルナール、あれ、何？」

「……」

ルナールは茫然自失と混乱錯綜が完全に掛け合わさった状態で、まともに口が利けるようでもなく、俺は嘆息を一つしてからお隣の秘書さんに視線を移して、説明を求めてみる。

エレイナも疲れたように軽く溜息を吐き、眼鏡のズレを一度中指で調整してから、話し始めた。

「先日、イズニィルから使者がここに訪れまして、一通の書状を残していかれました。内容は――要約すると、『邪悪なる魔王に加担する愚かな領主よ、考えを改めるのであれば我が国の傘下に入り、魔王の討伐に協力せよ。さもなくば、問答無用で攻め入るぞい』……とのことです」

「……へえ」

最後の『ぞい』がめっちゃ気になる俺。

「確かに、あの軍旗はイズニィルのものですわ。どうやら、前衛に魔術師部隊が百二十、後衛に騎兵部隊が七百五十四――といった具

合でしょうか」
　いつもは俺と同じ黒曜石のような目を、今は紅玉のように煌々と怪しく緋色に光らせているエデが、バルコニーから身を乗り出して、相手側の情報を知らせてくれた。ここから相手側の戦陣とは、目測で測っても二ビットは優に離れているのだが、エデは難なくその距離を目視だけで埋めることが可能だった。
　それが、エデの特色にして特有能力――――『魔眼（まがん）』。
　しかし、これは能力というよりも、ただの付随効果に過ぎなかったりするのだが。
「どれ、俺にも見せて」
　俺も興味が『ぞい』からイズニィル軍の方に移行したので、背後から抱きつくような体勢でエデの両目を右手で覆い、感覚の共有を試みた。
「え、えぇ！？　あ、あぁっ、と、父様ぁっ、そ、そんな――」
　エデがうねうねと悶え喘いでいるのも気にせず、俺は相手陣の構成をエデの目を通じで確認していた。白い着衣（おそらく礼装の一種だと思われる）で統一されたのが、魔術師の先陣。その後ろで馬に騎乗している本隊。
「なるほどなー」
　その中で、とある人物の存在を発見してから、俺はエデから腕をどけ、身体を離した。その際に何故だか、エデは深紅に染まった頬と緋色の『魔眼』を婀娜（あだ）っぽく潤ませ、非常に名残惜しそうな表情で俺を見つめていた。
　すると、反対側からバギィッと石質の物体が砕けるような物音がし、見てみると、ユートがバルコニーの手すりを寿司のシャリの如く握力だけで握り潰していて、シャンに至っては不機嫌の境地のような顔でギリギリと歯軋りをしていた。
「おのれ、エデ。父上に、父上にあんな……」
「エデ姉ぇ……必死で痔になれ」
　さて、何を言っているんだろうか、この子達は。

んまあ、そんなことよりも。
「ルナール、そのイズニィルから書状。その文の差出人は、いったい誰だったのかなー？」
ビクッ、とルナールの肩が揺れた。俺は愉快な気持ちになるのを抑えらず、つい口元を歪めてしまう。
「正解は、イズニィルの『姫巫女（ひめみこ）』だな？」
「……」
ルナールは押し黙っていたが、沈黙は肯定だと俺は受け取る。
「これは、本格的に面白可笑しくなってきたな」
くつくつと俺が一人笑いをしていると、シャンがおもむろに袖口を掴み、
「パパ、イズニィルの『姫巫女』って？」
「おお、シャン。よくぞ訊いてくれた」
俺は何とか笑みを噛み殺し、その場の全員に聞こえるような弾んだ声で言った。
「イズニィルの『姫巫女』――世界の神判者であり、調停役である『四柱』の一人。そして何より――伝説の『精霊魔法』の使い手さ」
ルナールは、ただ怯えたように頭を抱えていた。

第三話　飛行機で行けるパラダイス

その青髪の少女――エリアス＝アーク＝イズニィルは焦燥にも似た思いで眼前に映る景色を眺めていた。

彼女の後方には数百の騎兵隊が控え、その誰もが勇壮かつ勇敢な猛者たるオーラを放ち、その面構えも精悍そのものであった。次いで前衛には、百人前後の魔術師部隊が陣営を構えている。魔術国家として名高いカトレイに次いで、その人数の多さを誇る自慢の部隊である。長らく中立国として、その信念を曲げずに貫いてきたからこそ、自国の軍事力は常に他国にも引けをとらないものを維持してきた。

その誇り高き我らが軍を目にすれば、いくら魔王の庇護下にいようとも、すぐさま降伏の意を示すかと思っていたのだが。

「グラニエの領主からは、まだ返事が来ないのですか」

鼻息を荒くした白馬にまたがったエリアスは、隣に付き従う騎兵団隊長の男に声を荒げる。

「はっ、未だ先方からの使者は来ておりません」

その回答に、エリアスはなおも苛立ちを募らせた。後ろで結い上げた長い群青の髪を揺らし、その瑠璃色の瞳で、少し先にそびえる城壁を睨んだ。目視で確認する限り、煉瓦を積み上げただけの酷く脆そうな壁だった。そして城下にぽつぽつと点在する家々も、どこか貧相なものばかりで、進軍すれば半刻も掛からぬうちに制圧出来そうな感じだった。威勢と威服を意識付ける為にも、王である父の反対を押し切って国軍をここまで引っ張ってきたエリアスであった

が、ここまでする必要はなかったかもしれない、と軽く後悔をしながら嘆息した。

「もう、待つことにも飽きました。返事がないということは、つまりそれが先方の答えということです。このまま、軍を進めます。ジョエル、全軍に進行の令を」

「はっ」

ジョエルと呼ばれた騎兵団隊長は恭しく頭を垂れ、兵達に進軍せよとの号令を叫ぼうとしたその時――

「ぜ、前方！　城壁付近で多数の魔方陣を確認っ！」

身軽な兵装をした偵察兵が震える声を張り上げた。

「何事ですか！」

エリアスは言いながらも、目の前で起こっている光景を瞬時に理解した。

小高い丘の上に建っている城壁を平面的に覆い尽くすように、何重、何層もの巨大な紅い魔方陣が、無数に無秩序に展開されていく。

「なっ、なんですかアレは」

しかしながら、アリエスには分かっていた。あの数多の魔方陣は、こちらを殲滅せんとする砲門であることを。

そして実際その通り、一瞬強く緋色に発光をしたと思った次のコンマには、複雑な図式が円形に組み込まれたそれらの砲口が、慈悲も容赦もない一斉射撃を開始していた。

換算すれば一分にも満たない僅かな間、エデの魔眼によって展開させた術式からによる狂乱射攻撃は惜しげもなく続いた。着弾地点ではもうもうと砂埃が立ちこめ、相手側の現状が見えなくなる。頃合を見計らって、俺はエデに声を掛ける。

「撃ちかたやめーい。ごくろぉー、エデ」
「はい、父様」
一度目蓋を下ろして、視界を埋め尽くしていた魔方陣を全て閉じると、エデは俺にそわそわと目配せをしながら向き直った。俺はその意図を即座に察し、よくできましたーとエデの頭に手を置き、ポンポンと撫で回して、仲睦まじい親子の団欒を演じていると、
「何やっちゃってんだアンタはぁぁあああああああああああああああ!?」
ルナールがブチ切れていた。
「なにいきなり攻撃してんですか!? なにいきなり攻撃してんですか!?」
なるほど、近年稀に見るキレようである。ここまで取り乱しているルナールというのも何だか珍しい。カメラがあったら写真にして記録しておきたいぐらいであった。
「ルナール様、お気を確かに」
どーどー、と自分の主人を慣れた調子で落ち着かせ、その後は某ムツゴロウ氏のように、よーしよしと背中をさすって慰めていた。
「うぅう、もう駄目だ。終わりだ。父さん、わたしにはやっぱり領主という椅子は荷が重すぎたようです」
「まあ、気にすんなよ。明日は明日の風が吹くって、多分」
俺も何だか無性にルナールが可哀想になったので、バシバシと肩を叩いて元気付けようとしたのだが、ルナールはより一層落ち込んでいく様子だった。あら、お大事に。
「レイシ様……あなたは、いったい何を考えているのですか?」
ルナールが絶望しきった目で、俺を恨めし気に見上げた。
「んにゃ、ルナール。俺はお前ほど考えちゃいねーよ。ただ、逃げ道を全て潰しただけさ。この意味、お前になら分かるだろ? なあ、ルナールくん?」

「……」

ルナールのその『表情』を俺は満足気に見届けてから、子供達の方を振り返った。そこではユート&シャン対エデの構図で、睨み合いによる冷戦が勃発していた。いや、地味にシャンが姉に向かってローキックを繰り出していた。姉も負けじと肘打ちで応戦している。

「ほれ三人とも、じゃれてる場合じゃないぞ」

父の号令に、ビシッと素直に姿勢を正した三人の子供達。俺はニヤリと口端を持ち上げながら、静かに正面を指差した。

「見ろ、あれを」

俺が突きつけた人差し指の先には、砂塵や土煙が次第に流されていき、先刻と変わらぬ陣形を大挙として敷く、イズニィル軍が姿を現した。

「エデの砲撃を喰らって隊形一つ崩さないとは、これぞ敬服の至り！　ちなみにエデ、相手側の被害は？」

「はい、見たところ死者どころか、負傷した者もいないようです。完璧に、わたくしの攻撃を受け切ったようですわ。このエデ、父様の前でとんだ失態を晒してしまい……」

「いや、いいんだよエデ。単にアレは、相手の力を測るための威嚇射撃みたいなものだったんだから。その点に関して言えばエデ、お前はよくやった」

「は、はいっ！」

エデがこの上なく嬉しそうに頬を上気させているとは裏腹に、ユートはチッと軽く舌打ちし、シャンは無表情でギリッと歯の根を鳴らした。

「さて、子供達よ。これからすることは分かっているな？」

俺が腕を広げて子供達に問うと、兄妹三人は一瞬互いに顔を見合わせてから、ビックリするくらいそっくりな微笑を浮かべ、声を揃えて答えた。

「はい、父上」

「モチだよ、パパ」

「熟知しておりますわ、父様」
よろしい、と俺は開いていた腕を閉じ、顔の前でパチンッと景気づけのように手を鳴らした。そしてそのまま二、三回ほど擦り合わせる。
はてさて、皆様お待ちかね。最近は使うことが滅多になかったので、自分でもほとんど忘れかけていたけれども、最初の一発はビシッと決めてやろう。決め台詞の一つくらい、華麗に無様に吐いてやろうか。
ではでは、さあさあ。

「うちゃげでも始めようか」

噛んじゃった。

「ひ、姫様！　ご無事でございますか！？」
臣下の一人がエリアスに駆け寄るが、エリアスは厳しい声音で叱咤した。
「うろたえるでない！　私なら無事です」
幾千もの魔力の砲弾が飛来してきたにもかかわらず、魔術師部隊

は隊列を少しも乱さぬまま、冷静に防御魔術を発動し、おおよそ全ての攻撃を耐え切ったのであった。

「ジョエル、兵の被害は」

一応は確認の為か、エリアスは報告を受けて戻ってきたジョエルに尋ねた。

「はい、負傷者はゼロ。皆無でございます。ここに揃う者は皆、厳しい訓練を積んできた精鋭達ばかりございます。あの程度の攻撃で、我らに傷を負わせようなど、笑止もいいところかと」

「前置きはいい。負傷者はいないのですね。ならば、よいのです」

エリアスはほっと息を吐き、その透きとおったマリンブルーの瞳を閉じた。

勇ましくも軍を率いてきたはいいものの、彼女が実際にこうして戦場に立つのは、これが初めてのことだった。つまり、これが彼女の初陣であり、最初の戦争だった。

先代の姫巫女――つまりは祖母のエリアン＝アーク＝イズニィルが三年前に亡くなってから、自動的にこの『精霊』の力を継承したエリアスは、ただひたすらに精霊の力を扱えるよう、丹念に鍛錬に重ねてきた。

世界の神判者であり、調停役。

『四柱』としてのお役目。

それは、世界の平和と安寧を担うこと。

エリアスは若さのせいもあってか、身に滾(たぎ)るその使命感に燃えていた。

そして、時折王宮に訪れる各国の重鎮や官僚らが漏らす、魔王についての噂――というよりも、不評や悪評といった根も葉もないものばかりであったが、エリアスはそれらの風聞を耳にし、愕然と言葉を失った。

その件の魔王が統治する『ティルナノーグ』という国では、大陸中で奴隷を買占めては、劣悪な生活を強制し、専門の機関で戦闘訓練を積ませてからは、武器を持たせ、自国を守るための奴隷兵団を

組織しているのだとか。最低限の食事と、限度を超えた過酷な兵役のせいで、命を落としていく者も少なくないようだが、奴隷なので代わりはいくらでもいるということらしい。どれもこれも、魔王が全て指示していることだという。おまけに、王宮の地下では数々の怪しい魔術研究や人体実験が繰り返され、そこにも連れて来られた奴隷達が犠牲になっているというのだ。

エリアスは憤慨した。

このようなことが、許されてあって良いのだろうかと。

祖母である先代の姫巫女と、父である国王は、今の魔王が『ティルナノーグ』という国を立ち上げた当初、まっさきに自国の信念である絶対中立主義を掲げ、『ティルナノーグ』との不干渉条約を結んだ。当時は、どこの国も自国の勇者を立てて、魔王討伐に勇みこんで名乗りを上げていたにもかかわらず、誰一人として魔王を打ち滅ぼせた者はいなかった。むしろ、返り討ちに遭い、いくつか滅亡に追い込まれた国もあるくらいだった。

そして、エリアスは偏(ひとえ)にこう思う。祖母と父は、自国の信条を守ったわけではない。二人は初めから魔王の強大さを知っていたのだ。故に、二人が選んだのは決して中正の立場などではなく、単なる保身に過ぎなかったのだ、と。

だが、私は違う。

姫巫女という、王と同格、もしくはそれ以上の地位を受け継いだ自分は、先代のように自己本位な選択はしない。

苦しんでいる者がいれば救おう

飢えている者がいれば恵もう。

寒さに震えているのであれば招き入れよう。

この力はいったい何の為にあるのか、エリアスは考えた。そして、考えたすえに辿り着いた結論は、極自然で簡単なものだった。

大勢の人を、この手で幸せにする為なのだと。

ならば、諸悪の根源である魔王を討ち取るのは、神判者である『四柱』の自分が負うべき当然の義務ではないかと。

彼女は、若かったのだ。

（気ヲツケテ、エリアス。強イ、力ヲ感ジマス）

ふと、パートナーである水霊（ウィンディーネ）が脳内で警告するように囁いた。

「おそらく、先程の攻撃をしてきた者でしょうね……」

エリアスがウィンディーネの忠告にそう呟き返すと、腹心のジョエルが怒りを露にした様子で、

「おのれぇ、グラニエの『狐』めが。当主が代替わりしたとは聞いていたが、その狡猾さは相も変わらずということか」

「ジョエル、グラニエは軍を有していないとのことでしたが？」

「ええ、その通りです。よくて警備兵が精々でしょう。斥候からの報告では、城壁にも見張り兵らしき姿はないとのことです」

「……では、やはり腕の立つ魔術師を何人か雇ったというところでしょうか。しかし、魔術師の傭兵を雇うような資金なんて、一介の田舎領主が持ち合わせているとは、少し考えにくいですが」

一般の傭兵を雇う程度であったなら何も不思議ではないが、魔術を扱う者を手駒にするとなれば、それ相応の大金が必要となる。冒険者ギルドのように、正式な手順を踏んで雇用するとなれば話は別だが、ただ個人の為だけの戦力として雇うことは、協定や条約などでギルドが禁止している。よって、個人的に雇うことが出来るのは必然的にフリーの魔術師だけに限定される。しかし、どこのギルドにも所属していない一匹狼スタイルの魔術師というのは、偏屈で頑固といった変わり者が多く、例え大量の金貨を積まれてたとしても、素直に従うとは到底思えなかった。

「しかも、あれだけの魔術を扱える者を身内に置くなんて……いったいどういうことなのでしょうか」

「案外本物の身内だったりしてね」

そんな話は聞いたことがない。グラニエの家系はほぼ断絶しかけているとさえ言われているのだ。仮にいたとしても、魔術というのは血筋というものがる。グラニエ家はこれまで魔術師を輩出したという記録は確かなかったはずだ。

いずれにせよ。

「これは、グラニエから私共に対する宣戦布告として受け取りました。弁明も釈明もありません。ジョエル！　改めて全軍に進行命令を」

はっ、とエリアスの命令を受託したジョエルが去っていく。エリアスは高鳴る心臓の鼓動をどうにかして抑えながら、表情を険しくてこれから制圧すべき対象をじっと見据えた。

正直、本当の戦闘に至るとは想定していなかった。無論、全然していなかったというわけではないが、これだけの軍勢だ。グラニエの領主も二言返事で降参を認めるものと確信していた。だから、現実にこれから兵士達が剣を振るうのかと思うと、この緊張を隠しきれない。それは、実戦経験のまったくない、先月十七を迎えたばかりの少女にとっては、致し方ないことだった。

惚れ惚れするような色合いの長いポニーテールを揺らし、力強く宣言する。

「全軍、突撃します！」

「えーマジでー？」

「当たり前です。こうなってしまったからには、仕方ありません。ですが、あまり村の方には被害は出したくありません。大人しく投降するのであれば、住民には一切の手出しは……」

「ああ、それなら大丈夫。前もって村人には全員城内に非難させておいたから。思いっきりガンガン攻めてこー」

「なるほど。それならば安心ですね――――って……さっきからいったい誰ですかあなたは？」

ハッとしてエリアスは、馬上からいつの間にかそこに存在していた少年を、驚きと共に見下ろした。年の頃は自分とそう大差はない。漆黒の髪に、闇を湛えたような黒い瞳を無気力そうにこちらへ向けて、何が面白いのかニヤついた笑みを貼り付けていた。

少年は一度肩を竦めて、

「なぁに、通りすがりの魔王さ――って言いたいところだけど、さ

っきの羞恥からまだ回復しきってなくてね。まあ、そんなことより、もうすぐここに俺の子供達が来ると思うから、姫巫女さん、どうか相手してやってくれよ。エデもユートもシャンもまだ遊び盛りでね、シャンに至ってはまだ食べ盛りで困るけど。んま、そんなわけで一つよろしく頼むわ」

そんじゃにぃー、と妙な出で立ちをした黒髪の少年は、無邪気に腕を振りながら立ち去っていった。

「……な、なんだったのでしょう」

終始エリアスは困惑気味なまま呆然自失としていたが、それもすぐに驚天動地へと変わった。

先陣を切って進軍を開始していた魔術師部隊が、まるで嵐にでもあったかのように、ゴミの如く吹き飛ばされていた。

＞ｉ２０８１７―２０８８＜

第三話　飛行機で行けるパラダイス（後書き）

闇ノ気配ヲ感ジマス……ッエーイ☆

ということで、蝉です。
また証拠にもなく自作の糞絵を載せちゃってスン←マセーン→（。∀。）！！！
タイトルは、「受け継がれるアホ毛」か「俺の子供がこんなに美形なわけがない」のどっちかで悩みます。はい、どうでもいいです。

注意※　蝉の作画はすこぶる安定していないので、今後のせる度に骨格とか目の形とかが変わる危険性が大いにあります。サーセン。
あとこの三人の服装はめっちゃテキトウです。ドレスなんか描けるはずがない。
なんとなくシャンの服が魔法少女っぽいのは何故だ……。
あと、挿絵のほかにラクガキ四コマ的な何かも考えているのですが、さて、これ以上の蝉の暴走を止められるのは読者様だけですので、どうぞ感想お待ちしております。

ただの愚痴。レイヤーとかクリッピングとか訳分かんないです。画像の合成がうまく出来ない蝉。画力と色塗りのセンスが欲しいー。

第四話　理想高き共産主義の行方

時を少し遡って、俺が台本の台詞を噛んだ場面から。
「宴を始めようか！」
鯨木澪士の特殊効果発動！　『自分の恥ずかしい失敗を当然のように無かったことにする』。説明しよう。つまりはこの効果で先程の自分の噛んだ事実を揉み消し、もう一度だけ決め台詞を叫ぶことが出来るのだ！
「父上、噛みましたね」
「けれど、そんな父様も素敵ですわっ」
「パパ、かっわいーっ」
残念！　愛しい我が子達にこの効果は通用しなかったようだ。ついでに俺は子供達からのダイレクトアタックで、合計三千ポイントのダメージを受ける。ピピピピピピ、と俺のライフポイントがその数値だけ削られた。なんだか立ち直れそうになかった俺は、がくりと両手と膝を地面に着いた。わおっ、おーてぃーえる。
「レイシ様……さっきのはいささか締まらないというか」
「私も同意見です」
「お前らも追い討ちかけてんじゃねえよおおぉっ！」
ルナールとエレイナの同時追加攻撃によって、俺のライフポイントは完全に零となった。クソォ、なんだよなんだよ、どこのバーサーカーソウルだよ。俺のライフは既にゼロだっつーのこの虫野郎！
――――さて。
「……と、まあ、ギャグシーンはこれくらいにしておいて」

そう前置きしてから、俺はおーてぃーえるの姿勢から何事も無かったかのように立ち上がる。正面前方でずらりと並ぶ軍勢をしばし眺めてから、改めて子供達の方に向き直った。

「では、愛すべき息子に、娘達よ。イズニィルからはるばるおいでになったお客人だ。丁寧かつ丁重にもてなしてあげなさい」

三人は各々に悪魔のように邪悪な――否、天使のように無邪気な笑みを浮かべて、

「《腕》が鳴りますな」と両手を組んでポキリと指関節の音を鳴らすユート。

「《目》に物見させてあげますわ」と再び怪しい緋色に目を輝かせるエデ。

「開いた《口》が塞がらなくさせて、あげるよ」と愉快気に唇を舐めるシャン。

その返答に、俺も満足気に頷いた。

「よろしい。なら、思う存分暴れ回り、気が済むまで踏み荒らし、その《楽園》の名に恥じぬ活躍と奮闘を期待している」

ユートピア。

エデン。

シャングリラ。

「さあ、征ってこい！」

俺の掛け声と共に、三人の姿は一瞬にして音もなく消失した。

そんで俺は、

「……んーとまあ、子供が征くっていうのに、親である俺が征かないっていうのは何だか失礼だし、な。俺も一応先方に挨拶だけしてくっか」

というわけでルナールは留守番頼むなー、と俺は振り向き様に、ここの領主へと手を振った。

「え、ちょっ、レイシ様！？」

ルナールの面白いくらいにうろたえた声が追いかけてきたが、その時既に俺はバルコニーの手すりから飛び立っていた。

鯨木澪士（いさなぎれいし）には、《実際に血の繋がった》子供が四人ほど存在する。それら四人の子供達には、とある特殊な性質と能力が受け継がれていた。例えば長女のエデン＝クロノーベルが有す『魔眼』がその一つである。

そして長男、ユートピア＝クロノーベルにも、ある特別な力をその身に宿していた。

「『空想に酔い痴れし無何有郷（ドグマティック ユートピア）』――限定解除」

城壁のやぐらを足場にして、ユートはさらに空高く舞い上がり、その能力をより自身の制御下に置く為、小さく『起動呪文（オープンスペル）』を口にした。

その呟きに呼応して、ユートが着用していたスーツの肘部分までが勢い良く破裂した。

手の甲に刻まれた六芒星――そこから根を伸ばすように施された魔語と幾何学模様の術式が、怪しい深紅に光を放っていた。

それこそがユートの持つ能力――――『魔手』。

まるで大砲から発射された一つの砲弾のように、たった一歩の跳躍だけでイズニィル軍との距離を詰めたユートは、悠然と静かに前衛の魔術師部隊の真ん中に降り立った。

「！」

おそらく、その場にいたイズニィルの魔術師達は等しく同じ思いを抱き、同様のリアクションを取ったであろう。驚愕と呆然。いきなり部隊の中央に眉目秀麗な美青年が降ってきたのだからそれも止むを得ないことだと思う。故に、どのような反応を示せばいいのか即座には判断がつかぬ状態。ユートもそれを知ってか、あくまでも

紳士的な態度を崩さず、
「失礼ながら、私の手であなた方を蹂躙させて貰いますが、異存などはございませんか？」
いえ、ただ聞いてみただけです――と、さっそく有無を言わせずにユートは『魔手』を上空に振りかざし、
「イズニィルの魔術師の手腕はいかほどか、どうか私にお見せください」
ユートがそう言い切った瞬間、周りを取り囲んでいた魔術師達が、まるで嵐にでもあったかのように、ゴミの如く吹き飛ばされた。

「あらやだ、兄様ったらもう始めてますわ」
エデも少し遅れて、既に戦闘が始まっている平野に辿り着いた。
無数の火炎球や光弾が飛び交う喧騒の中で、一人の黒髪の美丈夫が踊るように大勢の兵士達を翻弄していた。大勢に手無し、とはよくいったものだが、案外そうでもないのかもしれない。
「まったく、成果を上げて父様に褒めて貰おうだなんて……絶対にさせませんわっ！　『追放されし神の園（エンドオブエデン）』――限定解除！」
エデが鋭く唱えた途端、彼女の両目に複雑な魔語をまとった六芒星が浮かび上がり、また一段と鮮やかな真紅に輝かせる。
「ふん、わたくしだって負けませんことよ」
エデン＝クロノーベルは自分がいかに目立つかということと、兄の活躍をいかに邪魔するかということを同時進行で画策しながら、目の前で展開されている狂騒の中に飛び込んでいった。

「ちょぉ……ユート兄もエデ姉も速いよー」
一斉に出発したにも関わらず、一人出遅れた末っ子のシャンは、もたもたと兄達の後を追っていた。
いや、もたもたという表現もいささか語弊があるかもしれない。それはあくまでも、この兄妹の中でモタモタとしているということであり、実際は彼女も瞬発的に脚部へと魔力を集中させ、超人的な飛躍を見せていたのだが、いかんせん、シャンは他の兄妹達と比べて、自身の内包魔力の扱いが下手だった。
「あぁ……魔力使ったからお腹すいてきた」
別段、空腹を覚えるほどの魔力消費はしていないはずだったし、昼食も先刻終えたばかりであるというのに、シャンの胃袋は早くも音をあげていた。
ユートやエデと比べて跳躍を三、四回に分けてから、スタンッと戦場に舞い降りたシャンであったが、飢餓感を悲痛に訴える腹部によって、その様子は、週明けの一時限目にいきなり体育をやらされる生徒の如く、ぐったりとしたものだった。
「うぃ……『遥か喪失の地平線（デスペレートシャングリラ）』――限定解除……んぁっ」
ふと真横に飛来してきた光弾を《パクッ》と食いつくように口の中に収め、もごもごと咀嚼してから、《ゴクリ》と嚥下した。
それから、けぽっと一度溜まった息を吐いてから、
「味は良くないけど、まあ空きっ腹よりかはマシかな」
そんな感想を漏らしてから、んべぇーと六芒星が描かれた紅色の舌を悪戯っぽく突き出した。
シャングリラ＝クロノーベルが受け継ぎし異形の能力――――『魔食』。
「さて、あたしの舌を唸らせてくれる相手は、いるのかなぁ？」

それはまるで、今まさに獲物に襲い掛からんと舌なめずりをする獣のようだったが、シャンは至って幼気（いたいけ）に微笑んだ。

「い、いったい何が」

イズニィルの姫巫女、エリアスは酷く狼狽を露にした。いったい、何が起こっているというのだ。我が国の誇る魔術師の精鋭達が、いとも簡単にああも蹂躙されていくなど、エリアスにはにわかに信じられなかった。

相手は、たった一人の青年だというのに。

「……あ、増えてる」

よくよく見ればもう一人、十代後半ぐらいの美しい少女が、その青年と同じ黒髪に真っ赤な瞳を輝かせて、魔術師達を翻弄させていた。

二人の攻撃方法はそれぞれ最初から一貫しており、青年の方は、大地に手を着き、周辺の地面を盛り上がらせてから、それを巨大な手にへと形成し、まるで自身の両手のように操り、殴る、はたく、デコピン――等の動きで魔術師達を面白いように蹴散らしていた。おそらく『土壌隆起（グランドプロージョン）』の応用技だと思われるが、あれほどまでに自由度の高い魔術操作を、エリアスは祖母と自分以外にこれまで見たことがなかった。

反対に少女の方は、その紅玉のような両目から、一言で表すならレーザーのような細い光りの直線を絶え間なく連続で放射し、魔術師達も必死に魔力障壁を展開しているが、あえなく力負けして派手な爆発と爆煙を巻き起こしていた。

「姫様っ、御退陣を！　ここは私どもの騎馬隊が――」

ようやく事態の状況を飲み込んだジョエルが、彼女の身の安全を第一に申し出るが、
「なりません！」
エリアスは鋭い声で拒絶した。
「ジョエル、騎馬隊は全軍後退させなさい！　私が直接出ます！」
「姫様っ、何をおっしゃいますか!?　それこそなりません。おそらく、あれは先刻の砲撃を行ったグラニエの刺客。相手の力が未知数の上、何より姫様に危険が――」
「ジョエル、もう一度言います。騎馬隊を全軍後退させなさい。私は、まだこの『精霊魔法』を完全に扱えているとは言えません。故に、後ろの騎馬隊にも被害が及ぶとも限らない。だから、下がれと言っているのです」
「ですがっ！」
「ジョエル、私は、この力はいったい何の為にあるのか、今までずっと考えてきました。それは、より多くの民を救い、幸福へと導くこと。彼ら兵士達も、立派なイズニィルの民です。私は、姫巫女として彼らを守る義務があります」
そう言い残し、エリアスは馬の腹を蹴り、颯爽と駆けて行った。
姫様っ！　と必死に叫ぶジョエルの声も空しく。

「……赤子の手を捻るよりも容易く、脆弱」
「本当、目も当てられませんわ」
と、辺りに一面に広がる惨状を前にし、ユートとエデが心底拍子抜けしたように同じ動作で肩を竦めた。

ユートの施行した魔術によって、おおよそ以前とは比べる必要もないほど地形を変えてしまった草原に、魔術師達の呻き声だけが不気味に木霊していた。
だがそこへ、唐突にも響き渡る勇ましい怒号。
「ウィンディーネェェぇえええええええええええっ！！」
幾十もの水弾が突如として二人に降り注ぐ――だがエデとユートは瞬時に後ろに距離をとってかわした。
「……ほお、やっとマシな相手が出てきたか」
「そのようですわね、兄様」
二人は兄妹揃って似通った微笑を浮かべ、眼前に颯爽と現れた、その少女と対面した。
一際目を惹く結い上げた群青の髪。ラピスラズリを想起させる透き通った瞳。いくらか幼さを残す顔立ちとは裏腹に、鎧に身を包み、悠然と白馬に跨るその姿は、思わず見惚れてしまうほど凛々しく、意識しなくても見蕩れてしまうほどの美貌だった。
「イズニィルの姫巫女の名に懸けて、これ以上、我が国の民を傷つけはしません！」
手綱を操りながら、高らかに声を張り上げる少女。その勇姿に、今まで地に伏していた何十もの魔術師達が戦意を取り戻し、よろよろと立ち上がった。それらの流れの中で二人も同時に名乗りをあげる。
「私の名はユートピア」
「わたくしはエデン」
「ではその腕前、どうかご拝見願いたく」
「そしてどうぞ、わたくし共を瞠目させてくださいまし」
ユートは胸に手を当てて会釈し、エデはスカートの裾を摘まんで、殿勤に礼を返した。これも総じて父親から受けた教えの通りである。
例え相手が敵や仇であったとしても、礼儀を尽くさねばならない

壊す時も礼を欠かず、潰す時も礼を忘れず。
失礼のないよう、殺してあげなさい、と。

「動ける者は隊列を組み、『重奏詠唱（カンタータ）』――――『集団合唱（コーアグルッペ）』を！時間は私が稼ぎます！」

エリアスの指示がその場に鋭く響き渡り、迅速な動きで三十人ほどの魔術師達が一箇所に集まり、両手を宙にかざすと低く詠唱を開始した。

エリアスはそれを見届けてから、ようやく二人の敵と相対した。改めて観察すれば、やはり若い。自分と同じか、少し上ぐらいか。しかし、見た目など魔術師にとってはあまり意味をなさない。上級の魔術師ならば、普通に延命の術を心得ているだろうし、場合によっては美醜を操る魔術もあると聞く。

「……私は、イズニィルの姫巫女、エリアス＝アーク＝イズニィル！　そちらはグラニエからの刺客と見て相違いないですか？」

エリアスが白馬から降り立ち、勇ましくも叫ぶ。だが、対する二人は一瞬キョトンと互いに顔を見合わせ、その直後にはいかにもな悪人らしい笑みを返した。

「ならば、私の国の民を傷つけた報い、しかと受けて貰います！」

今こそ、この力振るう時。

ウィンディーネ、とエリアスは小さく呼びかけ、数年前に自身の相棒となった精霊の力を借り、手の平に水の塊を生み出す。
「――はぁっ！」
手中に生まれたソフトボールサイズの水の塊を、まるでマシンガンの如く連続で掃射した。エデとユートは軽快にその弾幕をかわし続けるが、その水弾一つ一つが地面を深く抉り、近くにあった身の丈もある岩をも軽く蜂の巣状態に変貌させていた。
エリアスは水弾の速射が当たらないとみるや、今度は水の形態を蛇に変化させた。元素系魔術を扱う場合、こういった他の生物のイメージを取ることによって、その施行精度を高める効果があるのだ。そしてエリアスは、相手に絡みつき、拘束せよという命令式を与え、相対する二人に差し向けた。
いくつもの頭に枝分かれした水蛇は、牙を剥き出しにして二人に襲い掛かる。二人はここで初めて真剣な顔つきになり、最初はうまく避けていたかと思われたが、やがて水蛇の一匹が青年の足に喰らいついた。不意をつかれたユートはそのまま何匹もの蛇にがんじがらめに巻きつかれる。
「わー兄様危なーいー」
そこでエデがわざとらしい棒読みで言いながら、両目を紅く光らせた。
「エデ、貴様何をっ！」
ユートの慌てた声を無視し、エデが人差し指と中指を立てたピースサインを片目に宛がうと、ユートに絡み付いた水蛇達の身体に、小さな魔方陣が次々と浮かび上がった。何気に二つほど、ユートの顔面にも生じている。
「『視認炸爆（レーザーポイント）』！」
エデが鋭くそう叫ぶと、浮かび上がった魔方陣は一瞬の閃光と共に大爆発を引き起こした。耳をつんざくような爆音が辺りに轟き、

大量の水蒸気が視界を覆うように立ち込める。
「おほほほほほっ兄様、長い付き合いでしたわ！　あとのことは――特に父様のことは全てわたくしにお任せくださいませ」
おーっほほほほほ、とのけぞって高笑いをする隙だらけのエデを、エリアスは見逃しはしなかった。
「仲間割れか――けれど、どちらにしろ好都合です！」
エリアスは分散していた水蛇を一つに集合させ、巨大な竜の頭部を模る。敵を呑み込み、一切の自由を許すなという完全に容赦を排した術式を付加し、エリアスは未だ哄笑を繰り返すエデに向かって突撃させた。
「おっほほほほ――おぼぉっ！？」
居丈高な笑いもそれまでで、エデは大口を開けた、手足のない巨大な水の竜によって丸呑みにされた。がぼがぼ、とエデは竜の身体の中であられもなくもがいている。
「……ふ、ふ、ふっふふはははははは！　妹よ！　この兄が今助けてやろう！」
風に乗って水蒸気と爆煙が去り、その中からどうやら生きていたらしいユートが、空中に浮遊しながら姿を現した。所々、服が破けたり裂けていたりしたが、そんなことも今は気にせず、ユートは極悪に口端を吊り上げる。
「『分身魔球（ナックル）』」
そう低く唱えると、ユートの両手にポワンと黒い球体が生まれ、それを頭上で一つに重ね合わせた後――
「ちょっ、に、兄様！？　や、やめっ、ご、ごめっ、ごめんなさ」
大きく振りかぶって、投げた。
水竜の身体から必死に顔を出して弁明しようとしたエデの声も虚しく、ユートが投球した『分身魔球』はその名の通り、瞬時にその身を何十にも分裂させて、エデを呑み込んだ水竜に直撃し、炸裂し、爆炎を巻き起こすという見事な演出を決めた。エデの悲鳴が僅かに聞こえたかもしれないが、それも途中で途絶えた。

「エデよ、父上のことは私に任せて、お前は静かに逝くがいい」
ふっ、とユートは軽く鼻で笑い、ゆっくりと地上に降り立つと、突如としてその地面に魔方陣が出現し、前置きもなく爆裂するが、ユートは間一髪のところでバックステップを踏み、どうにか避けていた。
「……じょぉぉぉぉとぅぉぉおおですわ兄様ぁあああっ！　今日こそその息の根を止めてさしあげましてよぉおお！？」
砂塵と煙の間からぬらーりと現れたエデは、憎悪のこもった瞳で兄を凝視する。兄のユートも挑発するように妹を睨み返した。
エリアスはそれら一連の流れを目にし、
「兄妹喧嘩……？」
呆然としながらも、ポツリと呟くのであった。

「姫様！　砲撃用意整いました！」
何だかんだでピンピンとしていた少女と、どうやら彼女の兄らしい青年とが、取っ組み合いのガチな殴り合いを繰り広げている。そんな光景をポカーンとして呆気にとられつつ眺めていると、魔術師部隊の一人が『集団合唱』の完成を報告しにきた。
えーと、これは好機とみていいのかな、とエリアスは数瞬迷ったが、とりあえずは撃っておくことにした。
エリアスは、あまり空気を読まない性格だった。
いや、読めない性質と言った方が正確かもしれない。
「各員目標に狙いを定め――」
エリアスの指揮の下、Ｕの字を描くように並んだ数十人の魔術師達が掲げる両腕から、白い光が中央に集中していき、やがてその眩

い光はあらゆる物を射ぬかんとする、絶対の矢へと昇華する。

『流転（パンタレイ）こそ万物の全て』

その破邪絶滅なる強大な一本の矢は、愚かにもこちらの攻撃に気づかないでいる二人を対象に照準を合わせ――

「放てっ！」

エリアスの号令で、解き放たれる。

勝った、とエリアスは思った。この距離なら、既にかわすことも不可能だ。防御をするにしても、何十人分もの魔力を結集させて発動させるこの『流転（パンタレイ）こそ万物の全て』を防ぐことなど、到底敵うはずもない。

この勝負、貰った。

だが、その確信もすぐにあっけなく崩れ去った。

「え」

存在する全てを滅却せんとする巨大な光線は、目標である二人の前に立ちはだかった、一人の小さな少女によって食い止められていた。

否――というよりも、実際に食べられていた。

まるで渦潮か何かのように、少女の口を中心にして等しく吸い込まれ、消えていく。すっかり全部が彼女の胃の中にへと収まると、

「ごちそうさまー」

げふぅ、と可愛らしい栗毛の少女は満足そうに手を合わせ、

「味は悪くなかったけど、まだまだ品と格が足りない、かな」

なかなかに手厳しい評価を告げて、

「それじゃあ、あなた達も《味わってみたら》？」

ぱかぁっと恥じらいもなく開口したと思ったら、先程平らげたはずの『流転こそ万物の全て』をにべもなく吐き出した。

視界が、白に染まる。

第四話　理想高き共産主義の行方（後書き）

喧嘩するほど仲がナントカ。

えーなんか合間合間に二人称？っぽいのが入ってすみません。戦闘描写がまったく苦手な蝉です。

一応2～4までのサブタイは子供たちの本名を示唆していたのですが、まあ、面白味もないネタです。というか、サブタイの格言シリーズはしばらくお休みします。
原因、ネタ切れ。べ、べつに一々タイトルを考えるのがいい加減面倒臭くなったわけじゃないんだからねっ。
ああ、でも時折入れるようにしますので。

あと今日の元ネタ。
パンタレイ　ソクラテスの言葉。意味は、万物は流転する。
エリアス＝アーク……アクエリアス……。
ギャグです。いや、色んな意味で。

第五話　イライラとカルシウム不足の因果関係は特に解明はされていない

鼓膜を突き破るような轟音の後――一面を覆う白い靄が晴れ、その中からは、シャンの吐き返した『流転（パンタレイ）こそ万物の全て』を受け切ったエリアスが肩で息をしながらも立っていた。

ふーん、とシャンは少し関心した風に眉を上げてから、

「あたしの魔力もちょびっつ練りこんどいたのに、まだダウンしてないなんて、ね。ちょっと驚き」

僅かに肩を竦めてから、シャンは背後で未だに殴り合いのデスマッチを続けている兄と姉の様子を振り返り見る。それから呆れたように長い溜息を漏らした。

「やだね、ユート兄もエデ姉も。喧嘩したってお腹空くだけなのに」

メキャッ、と生々しい音を響かせて、ユートの右ストレートが決まったらしいエデが、ズザザザッと足元まで転がってきた。聞こえもしない勝利のゴングを鳴らしているユートが、高らかに右腕を空に突き上げている。

「兄に！　敵う妹などいない！」

ふはははははは！　と完勝の余韻に浸っている兄と、地面で頬を赤黒く腫らしながら目を回している姉とを見比べて、シャンは再度嘆息せざるを得ない。

二人とも、子供なんだから。

と。

「こちらを無視しないでいただきたいものですね！」

エリアスが水を槍の形態に変化させ、それを勢い良く投擲してきた。

ヘキサグラムの刻印が浮かぶ真っ赤な舌を突き出し、シャンは『魔食』を発動させる。エリアスがスローイングした水の槍は、直撃

する前にその形状を元の何の変哲もない水に崩され、まるで排水溝か何かのようにシャンの口内に吸い込まれていく。
「……うぃ。こうも無味無臭ばっかだと流石に飽きがくるね」
水太りは気にしないんだけど、と自称美食家なシャンは言った。
「残念ながら、その要望にはお応え出来ませんね」
台詞そのものには余裕をチラつかせていたが、表情までは誤魔化し切れなかったようで、エリアスは眉根を寄せて顔を険しくさせていた。
かーわいっ、とシャンは自分のあどけない容貌とは反対に、そんなエリアスの虚勢を張る姿を微笑ましく思った。
せっかくだし、喰い殺してあげようかな、とも。
緊迫した睨み合いがしばし二人の間で交わされていたが、そんなものなどおかまいなしに、バッサリと緊張の糸を切って現れたのは、
「いやどーもー、うちの子達がお世話になってますー」
自分が何よりも愛してならない、この世でただ一人の父だった。

子供の喧嘩に親が割って入るっていうのは大変いかがなものかと俺も常々思うのだけれど、なかなかどうしてイズニィルの姫巫女さんもかなりの力量をお持ちのようで、普段は食べることしか興味を示さない三女のシャンが、あんなにも楽しそうにしているところを見ると、これ以上戦闘を続行させたらシャンも本気になってしまいそうだし、そこは親である俺の出番ということで、子供の暴走に歯止めを掛けなくてはと判断した次第であった。
戦場を開催するにしても、殺戮現場を演出する気はさらさらないのである。
「パパ」

手を振りながら近寄っていくと、シャンも嬉しそうに俺の胸に飛び込んできた。おーよしよし。

「怪我はないか、シャン？」

艶やかな栗毛のミディアムボブを撫でつつも訊くと、シャンは俺の胸に顔を埋めながら、ううん、と首を振った。

「それよりあたし、お腹すいた。帰ったらオートミールが食べたい」

「ああ、テオドールに言って作って貰おうな」

「あと、具がたっぷりのトルティリャも、パパが作ったピーマンの肉詰めも、深く出汁のとれたブイヤベースも、それとデザートにはミントの効いたババロアもいいな。食後には紅茶とマカロンで乾杯するの」

「はいはい、俺も厨房に立って作ってやるから。全部、帰ったらな」

「うん」

最後に一度だけわしわしと強く愛撫してから、俺はシャンとくっついていた身体を離した。

「と、父様ぁ……」

「おお……どうしたんだエデ」

ふと視線を感じて後ろを向いてみると、何だか全体的にボロボロなエデが幽鬼のように立っていた。蒼く腫れ上がった頬は徐々に元の肌色に回復しつつあるが、目元は僅かに涙ぐんでいた。

「父様、に、兄様が～」

「違います、父上。初めに手を出したのはエデです」

ずいっとエデの横から這い出たユートも、あちらこちらに服が裂けていたり破けていたりして、もの凄く前衛的なファッションにも表現できなくもないが、正直どこぞのホームレスのようにしか思えなかった。

まあ、見た限り大体の事情を何となく察した俺は、二人を問い詰める。

「あーあーまったくお前らは。はい、最初に突っかかったのはどっち？」

ビシッと互いに互いを指差す二人。毎度のことなので俺は仕方なしとばかりに、とりゃっと二人の額に軽くチョップを叩きこむ。
「はーい、これで喧嘩両成敗。兄妹仲良く、な？」
無理矢理に握手させるような小学校の教師みたいなことはさせなかったが、二人は渋々といった感じに頷いて、「父上がそうおっしゃるなら……」「わかりましたわ……」と声を揃えた。
うむ、といつかのクリスさんみたいに鼻を鳴らしてから、ようやく俺は先方と向き直った。
イズニィルの姫巫女――エリアス＝アーク＝イズニィル。どうやら俺が我が子達との会話が一段落するまで待っていてくれたらしい。仮面ライダーの変身を一々待ってくれる怪人並みに律儀なものである。
「いやぁ、すみませんなー姫巫女さん。手のかかる子達だったでしょう」
そう俺が大声で呼びかけると、姫巫女さんは警戒心旺盛な様子で返した。
「あなたの、子供？　まだ所帯を持つような年齢には見えませんが。それにしても、随分と溺愛していらしてるようですね」
「目に入れても痛くないというやつでね。口を極めても言い表せないほど愛しておりますとも」
「……」
清々しいくらいに俺が子供達への愛を語ると、彼女はさらに顔を険しくさせた。俺はニヤニヤと愛想笑いを貼り付けながら、
「どうでしょうか、姫巫女さん。今度は子供達ではなく、俺があなたのお相手を致しましょう」
俺が手を差し伸べてそう提案すると、エリアスはキッと二段階ぐらい眼力を鋭くさせた。俺は気にせずそのまま続ける。
「なに、簡単なことです。子供達に手出しはさせない。俺とあなたの一対一のサシで、ということ。この勝負であなたが勝てば、俺らはすごすごと尻尾を巻いて退散しましょう。その代わり、あなたが

負ければそっちが大人しく投降すること」
さて、どうでしょうか？　と俺は他意なく笑いかける。彼女はしばらく思案顔で黙っていたが、
「いいでしょう、その勝負受けて立ちます！」
と雄々しくも宣言した。
ヒューッカッコイイィー、と俺は危うく惚れちまいそうだった。
いや、冗談でね。

唐突に姿を出したその男――否、少年をエリアスは警戒を解かぬまま見据える。まさか、急に現れていきなり去っていた、先程の少年だったとは。何やら、例の三人と和気藹々な空気を醸し出しているが、断片的に「パパ」「父様」「父上」だとかの単語が聞こえてくる。まさか、あの少年が？　とエリアスは首を傾げる。『流転（パ）こそ万物の全て（ンタレイ）』を飲みこんだあの栗毛の少女よりかは年上だが、明らか他の二人よりかは幼く思える。
しかしまあ、容姿については二の次だ。あの驚異的な実力を誇る三人の父ということは、やはり、あの少年も侮れない。脳内で囁くウィンディーネも十分に気をつけろとの警告をしていた。
「と、ここでもう一つ提言をよろしいかな。ただタイマンを張るっていうのも面白味に欠ける。だから、ハンディをあげましょう」
「ハンディ……？」
鴉の濡羽のような黒髪をかきあげ、少年はこの場の雰囲気とはまったくそぐわない、歳相応の少年らしい笑みを返した。
「世界の調和を担う『四柱』の一人であり、四精霊の一角である水霊（ウィンディーネ）を従えた、伝説の『精霊魔法』の使い手。エリアス＝アーク＝イ

ズニィル。別に君を卑下しようとも、見下しているわけでもないんだけど、俺はこれから『火炎球（ファイヤーボール）』だけで君と渡り合おうと思う」

最初、いったい彼が何を言っているのか分からなかった。

元素魔術において、各属性には相性というものがある。火は水で消され、水は土によって塞き止められる――――といった具合に、分かりやすく例えるなら陰陽道の『五行』がそれである。もう一歩踏み込んで説明すれば、相手の力を生み出す関係を『相生』と言い、逆に相手の力を奪う関係を『相剋』と言う。まあ、これらの陰陽道やとどのつまりの風水学が、この世界にも通用するかは定かでないが、既に似たような理論が古くから実在していた。

火は水によって消される。こんなのは学を持たない乞食だって当たり前に知っている常識。魔術においても、その相互関係については自明の理。

だが、彼はあえてその条件下で戦うとのたまっている。しかも、魔術師にとって基本中の基本である技の、『火炎球』だけでだと？

何を前提に置こうと、嘗められているとしか思えなかった。

「その申し出……私も随分な過小評価を貰ったものですね」

箱入り娘特有の無駄に高いだけのプライドを傷つけられたことによって、エリアスはふつふつとした激しい怒りを意思表明する。

「このような侮辱は生まれて初めてです！　あなたは敵として、一切の容赦は――」

そこで、エリアスは言葉を切った。いや、切らざるを得なかったというべきか。

「粋がってんじゃねえよ小娘風情が」

少年は、とっくに笑うのを止めていた。

「――ったく、こんな毛も生えてなさそうなケツの青い小娘がイズニィルの姫巫女だって？　はっ、笑わすんじゃねえよファッキン。一時の情熱と世間知らずの空っぽな頭で、まさかここまで軍隊を引

っ張ってきたっていうのか？　ふざけるのも大概にしとけよ。代替わりしたってそれなりに教育と教養ってもんがあるだろうが。なのに、なんだこのじゃじゃ馬ポニーテールは。先代のあのバアさんはいったい自分の孫娘に何を教え込んだっていうんだ？　生理の迎え方か？　つーかまず年上に対しての礼儀ってもんがなってねぇだろうがよ。あぁあ？　初夜も済ましてねえクソガキがよお。そもそも半世紀も歳上の大先輩に対して敬いってもんがねえよなぁ？　こちとらわざわざ手加減してやるって言ってんだよ。素直に受け取ればいいものを何が侮辱だ。これだから箱入り娘ってのはムカつくんだよなぁあ。あーあープライドばっかバカにみたいに肥大化したお嬢様がよぉおおっ」

ブッ壊してブッ潰したくブッ殺したくなるわぁー、と少年は狂ったように腹を抱えながら、ぶはははははは！　と呵々大笑をした。いや、あくまで笑っているのは声だけであり、表情は寒気がするほどに冷ややかなものだった。行為と状態があまりにちぐはぐに違い過ぎて、エリアスはここで初めて目の前の人物に底知れぬ恐怖を覚えた。

より正しく言い表すならば、ぞっとするほどの気持ち悪さを感じた。

バラバラにした人体を、またもう一度歪に組み合わせたかのような。

なんとも言い難い、不安定さと違和感の連鎖。

矛盾と真理の狭間を垣間見ているような。

そう、まるで《畏憚》そのものを前にしているような戦慄。

「姫巫女さんな、それじゃあいったいどっちが驕っていたかきっちりかっちり教えてやんよ」

授業料はいらねえからよ、と少年は周囲に火炎の球体をいくつかまとわせ、寒気のするような歪んだ笑顔でこちらに肉迫してきた。

うっわーやべーよちょっと瑠璃（るり）さん憑依しちゃってたわ、と大人気ない自分に少し反省。大槌を振り回し、ついでに人のことも振り回し続ける彼女の笑い声を思い出し、大いに苦笑する。とっくに還暦を越えている俺ではあるが、未だにこうやって現世のことを懐かしむことがままある。んー、どちらかと言えば歳をとるほうがそういった心境になりやすいのかな、と益体もないことを考えつつも、俺は彼女に向かっていく。反省はしたが、後悔はしていないということで、このハイなテンションはそのまま維持しようと思った。

引くに引けないという手前もあるけど。

俺自身、《こういうタイプ》の子って、無性に虐めたくなるんだよね。

虐めっ子設定、復活。

手の平で、炎の塊を握り締める。魔術の施行者である俺には、なんら温度は感じない。その質感を確かめながら、狐火の如く周囲に何個もの火の玉を灯す。

「まさかまさかのまさかさぁああっ？　属性の相性が勝負の決め手だとか思ってないよなあ！」

そして、続々と遠慮もなく俺はエリアスに『火炎球』を打ち込む。

「くっ――！」

しかし、難なく水の膜を前面に張って攻撃をしのぐエリアス。炎が防御膜に当たるたびに、ジュワジュワと音を立ててただの水蒸気にへと成り果てていく。俺は馬鹿の一つ覚えのように合間を入れず攻撃を重ねていった。次第にエリアスも、度重なる『火炎球』の雨霰を鬱陶しく思ったのか、振り払うように攻めに転じた。

「私こそ、どちらが驕慢なのはハッキリさせてあげます！」

「生意気ほざいてんじゃねえぞ小娘ぇえ！」

俺は片方の手の内で極小に圧縮した『火炎球』を直接エリアスに叩き込んだ。反対にエリアスも瀑布のような激しい水の膜で対抗する。その内俺の方が押され始めて、結局は弾き飛ばされた。やはり属性同士の勝ち負けもあるのだろうが、彼女自身の実力も大分恐れ入るものがある。

スーやフィリ以外に、俺がこうもあっさりと力負けするなんて、軽く驚嘆であった。

俺はくるっと一回転を決めてから地表に着地する。

「やるじゃん、お姫様」

「どういたしまして」

互いにニヤリと笑い合う。そうして本格的に興が乗ってきた俺は、ふわりと上空高くに舞い上がる。エリアスは不審げに厳戒態勢を解かぬまま、俺の挙動を黙って見つめていた。いやあ、それにしてもいい眺めだね。

上から他人を見下ろすっていうのはさ。

「さーて、姫巫女さんよ。もうちょっと俺も君と遊んでたかったけど、どうやら子供達が退屈しだしてきてね。シャンに至っては空腹まで訴えてきてる始末だ。だから早くもここいらで、終いにしようか」

三十メートルほどの高さにまで浮遊してから、俺は視線をエリアスから子供達に移す。邪魔にならないよう気を遣ってくれたのか、かなり隅の方で三人は行儀良く膝を抱えて座りながら観戦していた。こっそり影で小さく手を振ると、三人は大手を振って応えてくれた。お父さんがんばってるよー。

「まあ、そういうわけだから」

天に向かって拳を開き、俺は『火炎球』を生み出す。

規格外の魔力量を注ぎ込んだ、半径五十メートル程度の灼熱の塊を。

「な、なっ」

エリアスは瞠目のあまり二の句が継げずにいた。ふと何気なく空中に漂いだしたかと思ったら、次の瞬間には巨大な炎を出現させていた。

「だ、騙したのですね！　『火炎球（ファイヤーボール）』以外の魔術は使わないって――」

憤怒を露にしてエリアスは声を張り上げるが、空に浮かぶ少年は、裂けているのではと思うくらいに口端を極悪に吊り上げ、嗜虐的に目を細め、狂気じみた調子の声で返答した。

「いんやぁ？　これも単なる『火炎球』だよ。ただ、内包する魔力の量が倍になっただけの話しさ。んー名称が気に入らないんだったら、適当に君の中で『堕する死滅の太陽（メテオオブサンデス）』とでも呼べばいいよ。あ、でもそれだと『火炎球（ファイヤーボール）』の本質意義が変容しちゃうな。まあ、いずれにせよ俺がこの一撃を『火炎球』だと認識する限り、この魔術の根源は変わらないというわけで。まあ、姫巫女さん。見れば分かるとおり、このサイズの規模だ。君がこの攻撃を耐え切れなかったら、周りの兵みんな死んじゃうよ？　どうやら後退させたらしい騎馬隊の皆様も余裕で巻き込んで、こんがり焼けました～の消し炭だよ？　さあ、さあ、精々がんばって――」

君にとっての大切を守ってみろよ。

黒髪の少年が、そう言って、放つ、猛火と熱気。紅蓮に、埋め尽くされる視界。刻々と迫ってくる、焦熱地獄。

周辺の景色がスローモーションで流れていく。自分の内部の時間が、奇妙に捩れていくのをエリアスは肌で感じた。魔術師部隊の何人かが、自分の名を叫んでいる。その中には、腹心であるジョエルの姿もあった。ああ、まったく。下がっていろとあれだけ言い付けておいたのに。

あの悪魔からの攻撃を防がなければ。
今ここで自分がやらなければ、みんな、死ぬ。
しかしながら、自分だけには水霊による絶対の加護があるので、いくらかの深手は負ったとしても、死ぬことだけは免れるやもしれなかった、
私だけは、助かって。
他の者は、死ぬ。
――いったい何を考えているのだろうか、私は。
あの少年は、自分をケツの青いガキだの、じゃじゃ馬だの、処女だの何だのと言いたい放題罵ってくれたが、自分は、果たして本当にそうなのだろうか（いや、処女うんぬんについては事実であるのだけれど）。
『四柱』。そのお役目以上に、自分は世界を知りたかった。自分が守るべき、愛すべき世界をもっと知りたかった。色々な見識を持ち、様々な価値観が欲しかった。故に、これまで勉学も人一倍積んできたし、魔術の訓練も怠らなかった。
エリアスの母は、彼女が産まれたと同時にこの世を去った。故に、エリアスは先代である祖母の背中を見て育ってきた。老齢ながらも、決して腰は曲げることなく背筋を伸ばし、いつだって凛として、厳格さと優しさの両方を兼ね備えた人物。エリアスにとっては憧憬の対象であり、理想の存在でもあった。
先代のように、私も、立派な――――立派な？
何に、なりたかったというのだろう。
ただ、祖母のようでありたいと思った。
ただ、それだけで。
ああ、そうか――――私は。
「ウィィンッディィィィネェエェェえぇぇえええええええええええええええ！！」

最大級、最上級の水の防御壁を即座に創り上げる。中心に渦を巻くようにして円形に展開したその巨大な盾で、迫り来る死滅の太陽を受け止め、ふんばった。

ありったけの魔力を、あるだけの余力を、底が尽くまで放出する。それでも、この烈火の勢いは止まることを知らず押し寄せてくる。

ウィンディーネ、どうか耐えてくれ。

私も、がんばるから。

「《清き静寂の流れよ、蒼き爪の守護となりて、我が身降りかかる災禍を打ち払え》！」

新たに、追加詠唱による術式付加を施す。両手を伸ばした先で拡張した渦潮の障壁がその激しさを増したが、燃え盛る火炎の猛攻は一向に衰えた気配を見せなかった。

強くなりたい。

幾多の災厄や戦火から、自国を守り抜いた先代のように。

祖母のようになりたいと、ひたすらに憧れた。

国を、民を、喘ぎ苦しむ全ての人々を救えるだけの強さを欲した――――と思う時点で、やはり傲慢が過ぎたのは自分の方だったらしい。何が、力だ。何が、救うだ。無理矢理に引き連れてきた仲間でさえ、自分は窮地に追い込んでいるではないか。命の危機に晒しているではないか。

「はあああああああっ！」

だったなら、せめてこの場にいる者だけでも、守ってやろうじゃないか。

この命に代えてでも、文字通り死守してやろうじゃないか。

今まで言葉の意味も十分に理解せぬまま履き違えてきた自分が出来ることと言えば、精々このくらいなのだ。

精々、自分にとっての大切を守る程度なのだ。

永遠とも刹那とも判断がつかない時が過ぎ、一進一退の攻防戦のすえ、エリアスはどうにかその一撃を踏みこたえた。大量の水蒸気が濃霧のように立ちこめ、一面が驚きの白さで染まっていた。全身

に鉛がこびりついたかのようにダルい。ぜえぜえと荒い息遣いで酸素を求めるが、呼吸すらもまともにするのが億劫だった。魔力が、まったくと断言していいほど残っていない。残量皆無が故か、ウィンディーネも自らの存在を具現化出来ずにいた。エリアス自身も、こうして立っているのが不思議なくらいだった。指の一本ですら、ろくに動かせない。本当、あの『火炎球』は信じられないくらいにデタラメだった。無茶苦茶過ぎると言ってもいい。どんだけの魔力を詰め込めばあんな威力になるというのだろうか。何十――否、何百人の魔術師が集まったって足りないかもしれない。

でも、堪え切った。

私は、耐え抜いたのだ。

相手だって、あんな大規模な魔術を行ったのだ。あの少年もこれ以上の攻撃は出来ないはずで――――

「……そ、んな」

突き抜けるような大空に輪を描く七つの赤い太陽。いや、本物の太陽ならもっと遥か高くに二つほど並んでいる。よって、この目に映るあの灼熱の絶望は、逃げようもない現実であることは間違いない。

円状に並ぶ目の眩むような業火の真ん中で、黒点のような人影が陽炎に揺らめいていた。

「おかわりは如何かな？」

拍手喝采を求めるかのように両手を広げ、少年は自分を俯瞰していた。

第六話　これは《怪物》ですか？　いいえ《異形》です

「降参するかーい？」
俺が彼女に届くような大声で訊くと――いや、訊くまでもなくエリアスは明らかに戦意を喪失していた。
これまでかな、と俺は虐めっ子モードを終了する。指を鳴らし、周りに浮かべていた巨大な火の玉を消失させ、ゆっくりと彼女の前に舞い降りた。
「お見事な戦いぶりでした、父上」
「流石ですわ、父様」
「おつかれ、パパ」
地面に足を着けると同時に、背後から父を労う子供達の声がした。俺は振り返らぬまま片手を上げてそれに応え、目の前でペタンと力なく座り込んでいるエリアスに視線を向けた。
「大人しく投降するかい、姫巫女さん？」
エリアスと目線を合わせるようにしゃがみこむと、彼女は恐怖と屈辱と、ほんの僅かな虚勢という名のスパイスがきいた表情で、俺を視線で殺すような勢いで睨みつけた。なるほど、顔色も最悪だ。
「この、怪物め……」
それが彼女なりの降伏宣言だと受け取るが、俺は一つ訂正せねばならないことがあった。
「いんやぁ違うね。俺は、単なる《異形》だよ。《怪物》の枠は既に”あの娘”が予約済みなんだ」
訝しむようにエリアスは眉間に深い溝を作ったが、俺はクスクスと含み笑いをして彼女の疑問には答えてやらなかった。
「ユート、エリアス嬢を回復してやってくれ。どうにも一人じゃ立てないぐらいに魔力を消費しているらしい」

エリアスは驚きに目を見開いて俺を凝視するが、それに関しては、気障ったらしくウィンクを返答代わりに投げかけておいた。キラッ。

「よろしいのですか、父上。もしもの場合を考えましても」

その『もしも』のことを危惧するユートは、ひそひそと俺に耳打ちをしてくるが、

「なーに大丈夫だよ。彼女自身も自分で負けを認めたんだ。心配なら『魔力拘束（バインドプロテクト）』でも掛けとけばいい。でも、出来ればそういうのはあまりして欲しくないな」

ほら、一応女の子なんだし、と俺はユートの肩をポンと叩いた。

ユートは少々釈然としない感じで頷きながらも、エリアスに近づいた。

「これは、父上からの御慈悲で施すもの。万が一そちらが父上に再び手を上げようとするなら、その前に貴様の首を圧し折る。妙な気は起こさないことだ」

「……」

ユートの警告に押し黙るエリアス。ゆっくりとした動作でユートが『魔手』を彼女にかざすと、その両手から淡い光が音もなく溢れ始める。

「ま、魔力が……あなた、神職者（プリースト）なの？」

エリアスがまたも信じられないという風に呟くが、ユートは嘲るように鼻を鳴らした。

「ふん、浅はかだな。治癒や回復系の術が神職者だけの特権だとは思わないことだ」

カップヌードルが一つ出来上がるぐらいの時間で、ユートによる『治癒』の魔術は終わった。その頃にはエリアスもいくらか蹌踉としながらも何とか立ち上がっていた。血色の悪いやつれた顔も、多少なりとも健康的な赤みを取り戻していた。

「ど、どういうつもりですか」

よろよろと覚束ない足取りながらも、エリアスは凛とした声音で俺に問いかけた。しかし、俺はその質問に対してはあえて黙殺し、

代わりに長女のエデに尋ねる。
「エデ、今の戦いでの死者は？」
「はい、皆無ですわ。多少なりとも負傷者はいますが、見た限り致命傷を負った者や瀕死の者も見受けられません」
「うん、上出来」
エリアスが唖然と二の句が告げないでいるのを傍目に、俺は高らかに声を張り上げた。
「今この場にいるイズニィルのみなさぁあああん！　おたくらの姫さんこっちで預かるからよろしこぉおおっ！　そんでさっさと自国に戻って反省会でもやってちょーだい！　ああ、あと二度とこの地に足を踏み入れんなよー。次攻め込んできたら母国ごと滅ぼすからなー？　はーいということで解散する前に姫巫女さんから一言ありますのでどうぞー」
ほいっ、と俺がエリアスにマイクを差し向けるマネをすると、彼女は幾許か逡巡するような仕草をしてから、俺と同じく辺りに響き渡るような鋭い声で、
「皆――――ごめんなさい、捕まりました」
はい、捕まえました。

「三分間だけ待ってやろー」
エリアスが軍の隊長格らしき人物達と話し合うだけの時間を与えてやって、ようやく審議が落ち着いてから、彼女を正式（？）にお預かりすることになりました。いや、隊長さんらも絶望的な顔色でうじうじと渋っていたが、そこは委員長っぽい雰囲気のエリアスが責任感溢れる声で一喝し、その場を治めたのであった。
「あなた達は、生きてください！」

その鶴の一声で、いかつい強面のおっさんらが口々に「姫様っ…」と声を震わせ、中には涙を見せる者までいた。

「……」

悪役気取るのも何だか疲れてきたな。

そうして俺ら一行がグラニエ城に帰還すると、いち早く城門のを潜ったところで出迎えてくれたのは領主のルナールだった。傍らにはやはり秘書然としたエレイナの姿もあった。

「れれ、レレレイシ様、ご、ご無事で何よりです――って、そちらはま、まさか……？」

お出かけですかー？　と箒を振り回す人の口癖みたいに俺を名を呼ぶルナール。

「うぬ、イズニィルの姫巫女さんなのだ」

ひぃっ、と芝生のような金髪をした青年は短い悲鳴を上げ、俺にあわあわと挙動不審気に詰め寄ってくる。

「な、な、何で連れて来ちゃったんですか！」

「えーだって、仮にも侵略してきたんだよ？　人質とって脅すぐらいのことしなきゃだしー」

数字の3のように唇を尖らせて言う俺に対して、ルナールはさらに絶望的な表情をする。

「ああ、また戦争が……わたしは、争いごとなんてまっぴら御免なのに」

「それはそうとルナール、ちょっといいか？」

俺はそう前置きしてから、ぐいっとここの領主の胸倉を掴み上げ、完全に宙に浮かせた状態で締め上げる。秘書のエレイナが眼鏡の奥の瞳を驚きに窄めるが、俺は不敵な笑みを彼女に向けて、

「そう慌てんなよ、エレイナ。何もとって食おうってんじゃない。ちょっとこのヘタレに訊きたいことがあるだけだ」

だから、袖の中に隠してあるナイフはそのまま閉まっておけよ、と親切心から忠告する。

「エ、エレイナ、わたしは、大丈夫だから」

そう苦しげに漏らす主人の言い付けに従い、エレイナは低く落とした腰を元に戻した。しかし、その獲物を射抜くような眼力だけは維持し続けていた。

俺は軽く苦笑してから、ルナールを静かに地表にそっと降ろした。涙目で咽るルナールに今度は俺の方から顔を近づけて、

「ルナールさぁ、お前、俺を嵌めようとしたな？」

ピクリ、とルナールの咽いでいた息遣いが消えた。

「お前はさ、最初イズニィルの軍が来た時、言ったよな？『約束の期限は一週間もあるじゃないか！？』ってよ。ありゃー、嘘だな？」

絶えず沈黙を守る青年の肩に手を置き、ニタァと笑いかける。

「さっき道すがら姫巫女さんに聞いたけど、ここグラニエの侵攻については事前に使者からの宣告があったにも関わらず、お前はわざと無視して先方への返事は書かなかった。期限はちゃんと守られていた――っていうか、期限を破ったのがルナール、お前の方なんだよ。そして今日、痺れを切らして攻め入ってくるイズニィル軍のことについて、お前は全部知っていた。知っていて、『どうかご内密に』という条件をわざわざ添えつけてまで、俺を呼びつけた。はっ！　世界を守る『四柱』の一人になら、俺を仕留められるとでも思ったか？　俺の仕事からの逃走癖を熟知しているお前なら、俺単独か、少なくとも子供達の誰かを連れてくるのは予想の範疇内だったんだろうが、それでも、どうにかなると思ってたのか？　お前としては同士討ちしてくれれば理想だったんだろうけど、俺も姫巫女も、おまけに相手側の兵士は一人だって死んじゃいねぇ。こんな軽いイザコザ程度だったら相手に賄賂掴ませれば何とでもなる。いったい

どんな展開を期待していたんだか知らないけど……まあ、考えようによっちゃあ色々と思いつくが、しかし、お前がおおよそ望んだであろう結末は、残念ながら訪れなかった。はっはー。いやいやぁ、それにしてもつくづくお前ってやつは――」

――――甘えよ。

まだ三十にも満たない若き領主は、ただ物静かに俺の言葉に耳を澄まして、怯え震えるでもなく、開き直り逆上するでもなく、ただ一切の挙動を停止していた。

「お前の親父……ヴォルペにも昔は随分と煮え湯を飲まされたもんだが、やっぱり血は争えないな。お前にもしっかりとグラニエの『狐』たる血が受け継がれてるわけだ。ははっ、どうなんだよ。狡猾で腹の黒いグラニエの『狐（ルナール）』くぅうんよぉぉおー？」

半ば脅迫じみてルナールににじり寄ってみるが、当の本人はと言えば、

「えへっ」

まるで、悪戯のバレた子供のようにはにかんでいた。

ってか、『えへっ』じゃねーよ。

「……何だかんだで、お前も相当食えない奴だな」

「やだなーちょっとしたサプライズじゃないですかぁ、そう目くじら立てないでくださいよ。それに喰えない奴って、レイシ様だけには言われたくないです」

へらへらと相好を崩しながら、心外だと言わんばかりに肩を竦めるルナールに、俺は精一杯恐い顔を演出して、最後に一つだけ警告してやる。

「ルナール、今回の件についてはこれ以上の追求はしない。普通は打ち首獄門もやぶさかじゃあないが、飼い犬の他愛もない悪戯だと思って不問にしといてやる。どうして俺がこんなに寛大なのか――分かるか？」

「レイシ様がお優しいからでは？」
「使えるからだよ」
一瞬だけ台詞を区切って、俺は続ける。
「それはな、お前が使える奴だからだ。有能で、優秀だからだ。それ以上に、俺がお前を生かし続けている理由はない。お前の親父が幾度となく俺を死地に追い込み、窮地に立たせたとしても、最終的に身内として引き込んだのはな、アイツがすげー使える奴だったからに他ならない。ヴォルペが行った密談や各国への根回しおかげで、『ティルナノーグ』が無用な争いを避けられた数は両手の指じゃ足りないぐらいだ。その情報網やコネを継承したお前も随分と良い仕事をしてくれる。けどな、勘違いするなよ。俺一人が被る程度の災厄だったらいい。だが、もしも俺の国の民を一人だって傷つけてみろ」
どんな手段を用いてでも、お前の皮を残らず剥ぎにいってやる。
人差し指を相手の胸に押し付け、狩人のように猟銃で撃つマネをする。
ばーん。
「肝に銘じておきましょう」
ニコニコと人工的で事務的な笑顔で答えるルナールに、俺は盛大に舌打ちを響かせた。
「精々、演技だったとしても首輪はちゃんと付けておいたほうがいいぜ。俺に毛皮を剥がれて、襟巻きかコートになるくらいならな」
そう吐き捨てて子供達のもとに引き返そうとしたら、背中にルナールの愉快気に弾んだ声がぶつかった。
「レイシ様、違いますよ」
俺は振り向かずに立ち止まった。そのまま何も言わずに先を促す。
きっとルナールは、『超』が付くほどにお人好しそうな顔を、さらに喜色満面の笑みで染めているに違いない。

「わたしは、グラニエの『狐』です。決して飼い犬ように忠実などではありません。わたしは、ズル賢い『狐』なんですから。そしてお言葉を返すようですが、レイシ様も、どうか狐に《抓まれる》ことのないようお気をつけください。剥いでいたのが自身の皮だったなんてことは、ままあることですから」

化かし合いなら、わたしの領分です、と僅かに合間を挟んでから、

「――ですが、やはりあなたの方が何枚も上手のようですね。加えてこの一件での借りも大きい。いやはや、これは葡萄が酸っぱかったのではなく、わたしのツメが甘かったようです」

「いや、お前の爪は十分に鋭かったよ」

「それは勿体無きお言葉、恐悦至極でございます」

おどけたように、ルナールは丁寧にかしこまった言葉遣いで応答した。俺は鼻で笑い飛ばす。

「はっ……それじゃあ、次はどんな風に俺を楽しませてくれるのか、期待してるぜ？」

そしておそらく、無邪気に残虐そうで、底が窺えないほどの腹黒い笑みを、周りに気づかれないよう忍ばせているに間違いなくて、親子二代にわたって、俺をハラハラドキドキさせてくれるに相違ないのだろう。

これだから、見た目ヘタレそうな奴は嫌なんだ。

見るも無惨にボロボロな格好のユートとエデが、グリンダさん直伝の固有領域空間に収容していた予備の衣服に着替え終わり、その後どうしたかというと、説明するまでもなく帰宅である。どうやら

イズニィル軍も、エリアスの説得によりご帰還なさったようだし、俺達もお家に帰ろうということである。

「い、いったい、私をどうするというのですか」

無論、エリアス嬢もお持ち帰りである。

「とりあえずは、俺達と一緒に来て貰おうかな」

後々のことは保留ということで、と俺はエリアスに告げる。エリアスはこの上なく不安と緊張と警戒色とが入り混じった険しい表情で、キッと俺を睨めつけた。やれやれ、必要以上に怯えさせ過ぎちゃったかな、と俺は頭を掻く。

下男の一人が預けていた馬車を城門まで運んできて、どうにもギスギスした雰囲気のまま乗り込むことにする。レディファーストということで、俺はすこぶる紳士的にエリアスを先に搭乗させてから、ふと子供達が後ろで三つ巴のように向かい合っているのが見えた。

じりじりと三人の間で緊迫した時が流れる。お互いに据わった目で、高く拳を振り上げたかと思ったら、

「「「ジャーンケンポンッ！」」」

ユートとシャンがグー、エデは何故だか田舎チョキ（手を拳銃みたな形にしたやつ）。とにかくも勝敗は決し、エデが深く項垂れるように肩を落とした。見事勝利を上げた二人は嬉々として俺のもとに寄ってきた。

「帰りの手綱は、エデ姉が握ってくれるって」

シャンが言うには、エリアスと俺が同じ馬車内にいさせることはユート的には非常に心配らしく、帰りの送迎では、自分が父の護衛をしようと名乗り出たところ、当然御者台はもぬけの殻になり、今度は誰が馬を操るのかという結論に至って、先程のジャンケンで白黒つけるということになったらしい。

見るからに落ち込んだ様子で青い息を吐いているエデに、

「悪いな、エデ。どうか頼むよ」

と、俺からも手を合わせて頼み込んだら、途端に目を輝かせて「こ、このエデ、命に代えましても父様を無事送り届けしますわ！」

と意気込んでいた。
別に命には代えなくていいよー、と俺は残り二人の子供達と共に馬車にへと乗り込んだ。
遠く視界の隅では、見送りのつもりなのか、ルナールとエレイナが寄り添うように並んで、暢気に手を振っていた。俺は馬車の扉から身体を半分出して、ビシッと中指を立ててやる。
何か、いい嫌がらせの方法はないだろうか、と俺は顎に手を添えてニヤつきながら、意地の悪いの算段を企てるのだった。

ガタガタ。
今一度ここまでの騒動の大まかな粗筋を順番に辿ってみようと思う。俺達がルナールが治めるグラニエに赴くと、そこには隣国のイズニィルの軍隊が文字通り陣取っていた。それはルナールの野郎がうまいこと俺とエリアスを鉢合わせさせて、互いに殺しあって欲しかったのだろうが、何だかんだで阻止。
ゴトゴト。
二年前にヴォルペの野郎がくたばってから、グラニエの監視はほとんど行っていなかったのだが、これは考えを改めて何人かルナールに見張り置いたほうがいいかもしれない。まったく、人手不足のこんなご時勢に余計な人員割きやがって。それでも、ルナールが企んでいたこととはいったい何であったのだろうか。考えようによっては幾通りもパターンは予測出来るが、アイツの腹の底を本当に窺うことは今はまだ難しい。何とも真っ黒で真っ暗だから見えもしないのだが、それよりも熟考すべき最優先事項はこの姫巫女の存在ではないだろうか。マキとアイギーに何て言おう。

ドナドナ――は、少し違うか。
あまり整備されていない田舎道ゆえか、石や窪んだ箇所などで一々ケツに響く振動を残していく。首都（ちなみに首都自体の名前もティルナノーグである）に戻るにつれ道もちゃんと舗装されていくのだが、その前に痔になったらどうしてくれる。
「……」
「……」
「……」
「……」
それにしても、空気が重い。
ボクシングで例えるならスーパーヘビー級である。
俺の両隣に座るシャンとユートが、目の前のエリアスを牽制するように視線を向けていることもそうだが、エリアスもエリアスでその綺麗な青い双眸で睨み返しているのも原因だろう。その膝に置いた手が微妙に震えており、ギュッと服の裾を掴んでいる。あら、可愛らしい。
そうではなくて、いい加減この場を和まそうと、俺は口火を切った。
「暇になった時恒例のリズム４ゲエエエム！　イエーヒューッ！」
俺がいきなりトチ狂ったような盛り上がりを演じると、エリアスは「は？」と言うように口を半開きにしてポカンとしていた。そんなことは気にせず俺は勝手に話を進める。
「えー、ユートはユーで、シャンはそのままシャン。で、俺はレイで、エリアス嬢はエリね」
「ほう、父上。このユート、全力で参らせてもらいます」
「あたしも負けないかんねー」
「え、あの、えと、は？」
おろおろと一人だけ事態を把握出来ていないエリアス。俺は口で説明するよりも実際にやってみた方が早いと思い、さっそくゲームの開始の宣言をする。

「んじゃいくぜ……レイから始まるリズムに合わせてっ――」

どうにか日が完全に沈没する前に、根城である『ティルナノーグ』の外壁が見えてきた。エデはホッとしつつも、手綱で馬の尻を鞭打つ。

天辺がおよそ一年中白く染まったそびえる山脈があると思ったら、その麓はなだらかな丘陵地帯が広がっており、土壌も非常に豊かで、地形的にも住みやすく、澪士達がここに住居を――もとい国を建ててから早くも二十年近くになろうとしている。

エデがたくましく揺れる馬の尻の観賞に辟易として、暇潰しに周囲の景色に視線を巡らした。東の空の濃い紫が、西の空の茜色を刻々と侵食している。ティルナノーグの街壁にも、ポツポツとランタンの灯が点き始めた。そこからさらに焦点を右にずらしてみると、遥か遠くに『魔術学校』の小さなシルエットが見えた。『魔術学校（アカデミア）』――とは言っても、魔術だけを専門に教育しているわけでもなく、他にも多種多様なカリキュラムやコースが用意してある。数年前、レイシ自らが発案した大型教育機関の設立案。ティルナノーグの街中にも幾つか寺子屋のような場所はあるが、増える人口や子供の数に伴って、それ相応の教育施設が必要だと熱弁豪語し、僅か一ヶ月という急ピッチで建設してしまったものである。ここからでは小人の家のようにしか認識出来ないが、実際は自分が衣食住を過ごす『魔城』よりも規模のデカイものだと分かる。ちなみに全寮制で、各国からの留学生の受け入れもしており、現在では約八百人前後の生徒が学び競っているのだとか。

まあ、自分にはあまり関係のないことだ、とエデは再び正面に向

き直り、今度は自分がこの世で何よりも愛する父親のことを考えながら、外壁に灯る淡い光を目指した。

馬車の中という四角く切り取られた狭い空間内は近年稀にみる盛り上がりようで白熱していた。

「ユーユーユーユー――エリちぇけ」

「よＹＯチェケラッチョッ――レイ２」

「――レイレイ――シャンちぇけ」

「シャンシャ……あ」

「はいシャン、アウトー」

間違えたシャンを俺は指差し、ユートにはやっておしまい！　とアイコンタクトする。シャンは青褪めた顔とは反対に既にほんのりと朱に色づいている額を素早く両手でガードした。

「ちょ、やだ、ユート兄のデコピンってホント洒落にならな痛ぁあっ！」

必死の防御も空しくシャンの額に無慈悲かつ無理矢理にデコピンを決めたユート。ベシンッ、と小気味のいい音が響き、うぅうぅ……とシャンは涙目でおでこを押さえていた。

その様子を俺は悪いと思いながらも笑ってしまい、最初ガチガチに固まって警戒していたエリアスも、今ではクスクスと手を口に当てて小さく笑うまでには、緊張による強張りは解かれたものと俺は判断する。ちなみに俺以外の三人のデコには鮮やかな薄紅色で彩られていた（ユートのデコピンはシャンが担当）。

ガゴン、と馬車の止まる気配がしてからしばらくして、

「父様、着きましたわ」

エデが扉を開けて到着を知らせた。
「ああ、ご苦労様、エデ」
俺が微笑みかけながら労いの声を掛けると、エデはもじもじと俯いて、
「こ、この程度のこと、父様の為でしたらわたくしはっ――」
「あー着いた着いたーお腹すいたー」
「父上、どうぞお先にお降りください」
シャンが姉を押し退けて外に飛び出し、ユートが俺に道を譲って降ろさせてくれた。
「んー、やっぱ我が家が一番だわぁ。なあ、エデ？」
ぐぅーん、と座りっぱなしだった筋肉を解すように伸びをして、エデに同意を求める。
「え、あ……はい、そう、ですわね」
何故か歯切れ悪く返事をするエデに、俺は頭上に？マークを浮かべて首を捻った。うーむ、やっぱり御者を頼んだから疲れてしまったのだろうか。
「こ、ここは……？」
最後に降り立ったエリアスが面食らったように、呆然として言葉を失っていた。まあ、彼女の気持ちも分からないでもない。馬車から身を外に出してみれば、そこには三百六十度城壁に囲まれた、度肝を抜くような高さの建造物（実際には四十メートルもないのだが、初見ならばそれなりの迫力というものがある）がこちらを睥睨しているのだから。
「エリアス嬢」
我が城を驚嘆するように見上げているエリアスを、俺は呼びかける。ビクッ、とエリアスは小動物を連想させるような反応でこちらを見返した。
「ようこそ、我が城へ――そして我が国、ティルナノーグへ」
「……ティル、ナノーグ……」
段々と驚愕に目を見開いて絶句するエリアスに、ああ、俺は納得

し、改めて居住まいを正した。
「そういや、ちゃんと自己紹介とかしてなかったけな。では、非礼失礼を詫びまして、恥を忍んで名乗らせてもらいましょう」
胸に手を添え礼儀正しく会釈してから、俺は堂々と自分の名を告げる。
「俺の名は、鯨木澪士。先代が魔王、イリアーデ＝フォン＝クロノーベルが息子であり、正式名称で言うなら、レイシ＝イサナギ＝クロノーベル――」
一応、魔王とかやってます。

第六話　これは《怪物》ですか？　いいえ《異形》です（後書き）

魔術学校（アカデミア）　いつかやりたい　学園編　いつになるかは　作者も知らず　ｂｙ蝉

ルナール＝フランス語で狐。
ヴォルペ＝も、イタリア語で狐。
手の届かない葡萄は、甘い幻想を抱くより、酸っぱいものとして侮蔑するべきか。
と、母親が宝くじをかってきた今日この頃。

ということでお待たせしました第六話です。そして毎度のことながら冒頭で自分の糞絵を貼り付けちゃってスンマセーン。
っていうか、リズム４ゲーム懐かしいですね。こないだ友人と何故かそれで盛り上がってしまいました。
ああ、ああ、そしてようやく城に帰ってこれた。日常が、ようやく日常が書ける。
警告としては、キャラがメッチャ多くなると思います……そうしたら登場人物一覧でも作ります。

では、証拠にもなく再び自らのラクガキを載せました。気分がすぐれなかったら是非ともスルーしてくれなー。

澪士たちが去っていった後、グラニエの領主ルナールと、その臣下エレイナとのやりとり。

＞ｉ２２２４４―２０８８＜

ルナールはやれば出来る子。おそまつさま。

第七話　放浪魔王の息子

『軍神』の名を界隈に知らしめる、魔王の右腕ことアイギー＝オーガスタスは、今朝、自らの主人であり、上司であり、王である澪士が投げ出した仕事のしわ寄せをもろに受けていた。同じ条件下で言うなら『智将』ことマキ＝ヴィハーベストもアイギーと同等の境遇であったが、この二人が互いに自身の不遇を嘆き、慰め合うようなことは、天地がひっくり返っても決して起こりえることはないだろう。

それは長年仕えてきた澪士の性格や本質を十分に理解しているが故に、諦観観念を催しているせいもあったが、単純にこの二人の仲が犬猿さえも敬遠するほどにいがみ合っているということが主な理由だった。

アイギーとマキの不仲については城中どころか城下でさえも広く知れ渡っている周知の事実であり、長い目で見れば、羞恥の史実とさえ言えるべき事柄であった。

魔王の右腕を自負するアイギーと、同じく左腕としての存在であるマキ。この二人の間柄について今は分からずとも、今後嫌でも知って貰う機会は数多にあると思うので、ここいら辺で割愛。

いずれにせよ、自身の仕事部屋で卓上に詰まれた書類の山を相手にアイギーは黙々と作業を進めていた。

赤い絨毯が敷かれた十五畳程の部屋で、右側の壁には本や書類を納める為の大きな書棚が占領しており、反対側の壁には斧や槍、剣や盾といった武器などが飾られ、見目麗しい二十代の女性が居座る

内装としてはいささか無骨が過ぎる気がした。
率直に表すなら、単に色気がないとも言える。
澪士がアイギーの婚期について、密かに杞憂しているのも分からないでもない。これでは言い寄る男も自発的に去っていってしまうことだろう。
「うぅーん……」
羽ペンを置き、アイギーは跳ね返った赤褐色の長髪を気だるげに揺らして、椅子に座ったまま伸びをし、凝り固まった筋肉を伸縮させ、ついでに首を捻ってポキポキと子気味のいい音を鳴らす。
鬼族（オーガ）特有の、額から斜め上にニョキッと生えた双の角を軽く手で触れ、ぽつりと呟く。
「……そろそろ、帰ってくる頃か」
そのまま反り返るようにして、ぐらぐらと椅子を後ろの二つの支点だけでバランスを取りながら、頭を背後の窓へと向ける。逢魔ヶ時は終息を迎え、外の景色は、月と星だけが光を放って自己主張を繰り返す世界にへと既に移り変わっていた。
夕餉の時間まであと少しだったので、キリのいいところまで職務を続けようとしたアイギーだったが、コンコン、と控えめなノック音が室内に木霊した。
「誰だ？」
「ロ、ロートです」
アイギーが入室してもいいとの応答をとると、静かに出入り口の扉からおどおどと身体を半分だけ覗かせて、赤いフードを被った少女が現れた。
歳の頃は十三か十四ほどで、赤毛の長い前髪せいで目元は完全に覆われ、その顔立ちはあまりよく分からない。そして何よりも着目すべきは彼女がすっぽりと頭に装着している真っ赤なフードで、別に衣服と連動している物ではなく、それ単体として独立しており、おまけにビーグル犬を想起させる垂れた耳のようなタブが側面に付いてあった。加えてそれは頭部だけではなく、まるでケープのよう

に肩先までをも保護し、胸元でちょこんと可愛らしく皮ひもで蝶々結びの形に留められている。それ以外の服装は、半袖膝丈の赤いフレアスカートに、フリルのついた白いエプロンを装着していた。

蛇足としてもう一つ付け加えるなら、シュネー、サン、ロート。この城でメイドとして働いているのは以上の三名だけであり、他に女中や下男といった召使は存在しない。一応、料理番としてシェフのテオドールもいるが、この巨大な城の掃除やその他諸々の雑務は全て彼女達の仕事だった。

人呼んで、メイド三人衆である。

「あ、あの、えと」

パクパクと空気を求める金魚のように、もたもたと二の句が告げないロート。

何でもアガリ症と赤面症の二つの症状を同時に患っているらしく、人前に顔を出すのは極力避けるというような傾向があった。

単純に言えば、ただのシャイな恥ずかしがり屋である。

「なんだ、ロート。私に何か用があるんじゃないのか？」

毎度のことながら、アイギーはロートのコミュニケーション能力の低さに少々辟易としつつも、辛抱強く相手の波長に合わせてみる。それでロートもようやく落ち着きを取り戻し、再度改めて口を開く。

「レ、レイシ様が、お戻りになられました」

そうか、とアイギーは、これから自分の主人に怒鳴りつけてやる内容を脳内で作成しながら、弾みをつけて腰を上げた。

アイギーの仕事部屋から正反対に遠く距離を置いた場所に位置するのは、『智将』の異名をとるマキ＝ヴィハーベストの職務室であ

る。アイギーのような殺伐とした内装とは違って、滑らかな木目調の床に、様々な花を模ったお洒落な絨毯を広げ、窓に備え付けられたカーテンや、訪問客用の丸いテーブルや猫足の椅子、資料棚や趣のある暖炉、それら一つ一つが上品でインテリジェンスな雰囲気を醸し出している。そして部屋の奥の机で多数の書面と睨み合いをしていたマキは、一息吐くように目頭を揉み、椅子の背もたれに深々と寄りかかった。

「あー……って、もうこんな時間か。レイシ様も、そろそろ帰ってくるか頃合か」

と、壁に掛かった柱時計を確認しながら、奇しくもアイギーと似たような発言を零し、何気なく窓の外を見遣る。

ちょうどその時、パカパカ、という馬の蹄と、車輪を引きずる音がして、案の定その通りだったか、とマキは真っ白に染まった髪をくしゃくしゃと撫でつけた。

っしょ、とマキは勢いをつけて腰を浮かし、仕方なく主人の出迎えに行くことにした。

「まったく、うちの王様ときたら……」

辛辣な嫌味の一つでも頭の隅でこっそりと考えながら。

――どうしてこうなった。

というか、これはいったい何の悪夢だ。

彼らは、ただ雇われただけの魔術師かと思っていた。あの気弱そうなグラニエの領主との関係性はいささか不可解であったが、とり

あえず自分は彼らのアジト的な場所に連行されているものだと勝手に判断していた。いや、憶測についてはちゃんと的を射ている。実際、自分が連れてこられたのは彼らの根城であったわけなのだから。単にその規模と場合が変わっただけの話なのだ。

魔王。

今、この目の前にいる黒髪の少年は自らを魔王と称したか。

世界的な宗教組織である『教会』と敵対し、その巨大で強大な組織に唯一打ち勝ったとされる、《畏憚》の魔王。

ティルナノーグ。この名称にも酷く聞き覚えがある――というよりも、自分が軍を率いて攻め入ったのが、そのティルナノーグという国の辺境に位置し、イズニィルの国境近くにあるグラニエであったのだから。

この少年が、魔王？

ならばここは、ティルナノーグの王都？

淡く包み込む宵闇にそそり立つシンプルながらも追求した建築美を窺わせる城――これが噂に聞くティルナノーグの『魔城』であるというのか。

「ハハッ」

そんなわけがあるか。

そんな荒唐無稽で突拍子もない馬鹿な話があってたまるか。

まさか、一国の王たる存在がろくな護衛もつけずにあんな辺鄙で田舎臭い場所（グラニエ）にいたこと自体がまず信じられないし、そもそも王が玉座につかず、王都を離れるだなんて聞いたことがない。そうだ、その通りだ。ここまでの道中でこの少年の本質は大体把握した。無気力で、無感情で、貼り付けた笑みは道化か演者のように薄っぺらく、深淵を湛えたような黒き双眸は、不思議とこちらを不快かつ不安定にさせる冷たさを宿しており、中身の伴わない言葉だけをスラスラと吐く、まるで狂言回しのような振る舞い。

だから全て、この少年の戯言だ。

こちらを驚かせて愉悦に浸ろうとしているだけなのだ。

そうだ、そうに違いない。ははははっ。

突如として与えられた膨大な情報量に、エリアスの脳内キャパは限界を抱え、半ばショートした思考回路のまま、ついには事実の拒絶といった、現実逃避という手段をとっていた。俗っぽい表現をお望みなら、軽くアホの子になっていたと言っても過言ではない。そんなつむじの辺りからお花が一輪咲き誇っているエリアスの幻想を、あっけなく打ち砕いたのは、城の玄関から悠然と現れた、側頭部から二本の小さな角を生やす女性の鋭い一声であった。

「王よ！　仕事ほったらかしてよくも逃げ出してくれましたね！」

くらり、とエリアスは途方もない目眩を覚えた。

真っ白に燃え尽きたボクサー選手のように硬直しているエリアスを眺めていたら、城の入り口からドシドシと邉然に近づいてくる軍神の姿に、俺は飛びっきり爽やかなスマイルで対応した。

「ただいま、アイギー」

「おかえりなさい、王よ。今の私がそんな安っぽい微笑みで誤魔化されるとでもお思いですか？」

「えー誤魔化されてくれよ。こっちもこっちでけっこう大変だったんだから」

「その口が何をほざきますか。溜まった分の仕事はきっちりやってもらいます。まったく、今夜は寝かせませんからね」

「わお、大胆発言。惚れていいかい？」

「あなたが職務を真っ当に果たしてくれるならお好きにどうぞ」

「はん、お前も言うようになったじゃねえか」

「長年あなたの傍にいるわけでもありませんよ。レイシ様が、例え

どんな言動や行動をとったとしても狼狽えるこのないようにいつも心がけていますから」

はあ、とアイギーは重い溜息を吐いてから、ぼんやりと固まっているエリアスの存在に気づいたようだった。

「あの、レイシ様、後ろの方はどなたですか？」

「ああ、うん、イズニィルの姫巫女。とりあえず、お客人」

「はあ、そうですか。それでは、もうこんな時間帯ですし、お泊りになられるなら部屋と食事の用意をしなければなりませんね。それにこんなところで立ち往生も失礼ですから、早急に城内に案内しなければですね」

あれ、思いのほか普通の反応だ、と俺がアイギーのリアクションの素っ気なさに多少の肩透かしを喰らいつつも、アイギーの意見には賛成だったので、さっそくエリアスを城の中に連れて行く。未だに呆然と灰になっているエリアスの為に、俺が彼女のエスコートに名乗りを上げようとしたら、先にエデとユートが間に入って、どうかその役目は自分達に任せてくれと言った。

「父上がお手を煩わせる必要はございません」

「そうですわ。父様にこんな小娘……ではなくて、こんな濡れ女の面倒をみることなんてないですわ」

エデ、それわざわざ言い直す必要あった？

と、そんな娘のお茶目っぷりを愛しく思いながら、二人の気遣いにありがたく頷いておく。

「エデ姉もユート兄もポイント稼ぎごくろーさん……けっ」

いつの間にか俺の真後ろに移動していたシャンが、何ごとかボソリと呟いた気がしたが、うまく聞き取れなかった。

そんなわけで俺達一行がぞろぞろと城内に行進していき、両開きのデカイ玄関の扉を潜って、正面の広いエントランスにへと足を踏み入れる。そこは体育館のように高い天井が見下ろす吹き抜けとなっており、ダンスパーティーが開けるほど余裕を持たせたホールのような空間で、壁にはキャットウォークのような通路や階段がぐる

りと蔓延っている。最後尾のユートがバタン、と出入り口の厳しい扉を閉じた。
　すると、先頭をきっていたアイギーが突然くるりと血走った目で振り返り、
「イズニィルの姫巫女ぉぉおぉおおおぉぉぉおおおお！？」
　エコーをきかせた叫びがエントランス内に反響する。
　どうやら時間差ツッコミらしかった。

「どうしてこうなっってしまったんですかっ！」
「どうしてこうならざるを得なかったんですかあっ！」
　前者はアイギー、後者はマキの発言である。俺は自分の職務室で二人に恐い顔で詰め寄られ、容疑者の如く過激に尋問されていた。あのーカツ丼は出ますかー。
「実はかくかくしかじか四角いムーブだったのですよ」
　俺は肩を窄めながらきっぱりとその一言で事情を察してくれるよう祈ってみながら口を開くが、
「訳の分からんこといってないで、ちゃんと答えてください」
　白髪頭をぽりぽりと掻きながらマキが語気を強めて言う。あれ、おかしいな。『実はかくかくしかじかで』『えーそうだったんですか』って流れで、普通ならこの一言で事のあらましが説明できるはずなのに。うむ、この状況下でありもしないご都合主義に頼った縋った俺が愚かだったということか。いやはや、反省しなければ――――とか内心で思ってみたりするけれど、元々俺の半生が反省だけ

で構成されているようなものであるからして、現在でのこの心境だって途方もない今更感が津波のように押し寄せてくるわけではあるが。

「はいはい、分かりましたよ」

それでは、一から十まで面倒臭がらず、語っていくことにしましょうか。

なに、夕餉までには間に合わせるようにするさ。

第七話　放浪魔王の息子（後書き）

感想待ってます。

第八話　ＧＯ　ＦＵＣＫ

澪士がマキとアイギーにこれまでのあらましを滔々と説明している頃、一方のエリアスはメイド三人衆の一角であるシュネーに導かれ、風呂場にへと案内されていた。とりあえずは戦場帰りということで、汗でも流しておいで、と澪士が言い、その道中までをシュネーに託したのであった。

「あ、あの、ここが……？」

「はい。お風呂、にてございます」

感情に乏しい能面のような顔で淡々と答えるシュネー。白絹のロンググローブで包まれた腕を、バスガイドのようにそちらへ差し向ける。彼女らの目の前には二つの入り口があり、それぞれ青と赤の暖簾が吊り下がっていた。エリアスにとってはまったく見慣れない文字であったが、湯気を模ったマークの上に、赤が『女』、青が『男』と銘打たれていた。

「では、こちらへ」

スタスタと先を行く暗褐色の切り揃えた長髪のメイドの後を、エリアスは慌てて追いかけた。

赤い方の暖簾を潜り、その奥の横開きの仕切りを通ると、そこはかなりの奥行きがある空間であった。四角い箱が縦に三つ積んだような棚が列を作っており、ツヤツヤとした床は防水性の高い漆塗りの光沢を放っている。加えて天井には煌々と明かりを灯す――蛍光灯に酷似したものが備え付けられていた。

エリアスは好奇心から、独りでに輝く天井に張り付いた蛍光灯（仮）を指差して、
「あの、天井で光っているアレは何ですか？」
「……ああ、アレはガラス製の筒に主（あるじ）が『明光（ライト）』の術式を半永久的に施したものです。壁際にあるスイッチを操ることによって、誰にでもオンオフ可能です」
抑揚もなく解説するシュネーに対して、エリアスは思わず感嘆の声を漏らす。このような利便性のある魔術を私生活レベルにまで応用できるだなんて、軽いカルチャーショックにも似たものをエリアスは受けた。
「では、こちらの棚に衣服をお脱ぎください。着替えの方は失礼ながら、こちらで勝手に用意させていただきます」
よくよく確かめてみれば、裾や踝といった部分がほつれていたり汚れていたり焼き焦げていたりして、総じて全体的にみれば薄汚れている感は否めなかったので、エリアスは言われるまま素直に服を脱ぎ、髪留めも外して結っていたポニーテールをハラリと降ろした。
「ほぉー……それなりに引き締まったプロポーション。張りのある瑞々（みずみず）しい肌。鮮やかなコバルトブルーの髪のコントラストもまた麗しい。そして着目すべきは何ともいいおっぱいですね。ありがとうございます」
何故か礼を言われた。
幼い頃より着替えや湯浴みを召使に任せているという典型的な貴族暮らしをしていたエリアスにとって、他者に自分の裸体を見られるということはそんなに抵抗はないが、そう殊更口に出して描写されると妙に面映い気持ちになった。
「さあ参りましょうか、イズニィル様」
と、知らぬ間に彼女も自らのメイド服の脱衣を完了しており、晒された白雪のような美しい素肌に、程好い大きさの胸の膨らみをタオルで覆いながら、自分を手招きしていた。
そうして何故だか、例の白い長手袋は身に着けたままだった。

――――あのメイドも、一緒に入るのでしょうか？

はて、とエリアスは訝しげに首を捻った。てっきり彼女は自分の湯浴みを手伝ってくれる湯女か何かだと思っていたのだが、違うのか？

そこでエリアスが根本的に見当違いをしていたことは、ここ――『ティルナノーグ』が自分の国と同じ価値観があるものと思い込んでいたことだ。

ガラガラ、とガラス張りの戸を横にスライドさせる。

「……わあぁ」

カポーン、と謎の効果音が聞こえてくるような、そこはまさに大浴場だった。

足の裏から伝わるザラザラと気持ちの良い岩肌のようなタイル床（滑り止めの役目もかなっているのだろう）に、直接そこへ穿たれたような広々とした湯船。生温かい湯気が視界の大半を奪っていた。

普段自分が利用している風呂とは明らかに違う規模の大きさに、エリアスが目を奪われていると、シュネーの呼び声が聞こえた。

「イズニィル様、こちらへ」

「え、あ、はい」

自分の挙動に少々赤面しながらも、エリアスはシュネーのもとに向かい、彼女の指示に従い木製の小さな椅子に座った。

「ぅわぁん、グリリン！　目に染みたあ！」

「もー、スーったら少しはじっとしてなさいよー」

少し離れたところで、豊かなブロンドを垂らしたグラマーな美女と、キャラメルのような色合いの髪をした幼い少女が、互いに背中の流しっこしていた。

このデカイ浴室は共同用なのか、とエリアスが意外そうに眺めていたら、シュネーの機械的な宣告が鼓膜を揺らした。

「それでは、ご自分で身体をお洗いになってください」

「え」

何とも間の抜けた声を出したエリアスの前には、壁に沿ってズラリと設けられた蛇口と、そこから根を分けるように繋がる、何やら如雨露（じょうろ）の先端部分が装着された不可思議なホースが伸びており、足元には木桶に溜まった水がちゃぷんと波を打っている。

「え、えと……あのどうしろと？」

おろおろと戸惑うエリアスに対し、シュネーは流し目だけを倦怠気味に投げかけて、

「王族の方なら、蛇口の使い方ぐらいお分かりになるでしょう？捻ればお湯が出ます。シャワーの方をお使いになるときは、根元部分のボタンを押せばシャワーに切り替わる仕様になっております」

さも猿でも知っているかのような当たり前の常識を語るように、シュネーは素っ気なく言い渡して、エリアスはさらにも増して困惑した。

無論、蛇口や水道などの仕組みは知っている。特にイズニィルは水霊を代々従わせているだけに、川や地下水といった水資源が豊富で、水道技術に関しては随一の技術レベルを誇っている。だが、その技術は一部の権力者や貴族だけしか使用しておらず、一般庶民には酷く馴染みの浅いものであった（まあ、各家庭に一つずつ井戸が掘られている環境なので、わざわざ設置する必要もないわけであるが）。だが、一応は王族である自分も蛇口の扱い方ぐらいは勿論のこと熟知しているが、蛇口からお湯が出るだなんて聞いたことがない。なんだろうか、壁の向こう側に巨大な釜でもあって、ぐつぐつとお湯が煮えたぎり、健気にスタンバっているとでも言うのだろうか。

さして口に出して問いかけたわけでもないのだが、その狼狽した表情から察したのか、シュネーは仕方なしとばかりに語り始める。

「この浴場でのお湯はすべて温泉です。ここから少し先にある施設で温度を調節してからこちらに引いています。だから、壁の向こう側に煮えたぎった大釜なんてものはありませんよ」

カアアアッ、と内心を見透かされたことに対する羞恥で顔面から火を吹いているエリアスに構わず、シュネーは淡々と続ける。

「それと、私はメイドですが、決してあなた様に従っているわけではありません。ですから、湯女のような真似事をするつもりはありませんし、ご自分の身体ぐらいご自分で洗ってください。まさか、大便をした後のケツも召使に拭かせているわけじゃありませんでしょう？」

一国の姫君に向かって、サラリととんでもないことを平気の平左で言ってのけるシュネーに対して、エリアスは何も言い返せない自分を情けなく思い、眼前にある蛇口を恨めし気に睨みつけながら、恐る恐る取っ手を回した。

温泉――――確か極東の方で豊富に湧いているらしいとの噂を耳に挟んだことはあるが、まさか隣国のティルナノーグでお目にかかろうとは。

「あ、上から来ます。お気をつけください」

シュネーの前置き通り、根元のボタンが既に押されていた状態だったが為、ぶわっ、と突然エリアスの頭上から熱い湯が降りかかってきた。

「ぁあっつ！？」

「たまに温度が安定しないことがありますが、数秒待てば適温になります」

シュネーが言ったとおり、数秒後には地肌に心地良い温度になった。

それからシュネーに、石鹸のご使用方法はご存知ですか？　と尋ねられ、流石のエリアスも憤りを露にした。

石鹸――動物性油脂に水酸化ナトリウムを加えて、煮沸、攪拌し、さらに食塩を混ぜてから香料などを練りこんで精製する洗剤――という詳しい情報まではエリアスの与り知らぬところだったが、王族でも滅多に使うことのない嗜好品であるということは認識していた。それ故、憤怒を抱くと共に驚きを隠せずにいた。よもや、一介の女

中にまでこんな贅沢品を使わせるなんて。

――――ティルナノーグという国は、それだけ裕福ということなのでしょうか。

何はともあれ、どうにか身体の洗浄が終わり、イメージ的には『不自然な濃い湯気』が要所要所で女性のウィークポイントをガードしている中、ようやく湯船に浸かる段階にまで到達したエリアスは、その何とも言えぬ快適さに、ほぅっと吐息が漏れた。ここまでの徒労やストレスが瞬く間にじわじわと湯に融解されていくような気がした。

隣に視線を移すと、シュネーもまた同じようにあらゆる疲労から解き放たれたような表情で湯船に沈んでいた。タオルで自身の髪をターバンのようにまとめているのは何となく理解できるのだが、未だその長手袋を着用しているのかが、非常に不可解である。

「そういえば、あなたは私が姫巫女だと知っても、あまり驚かなかったですね」

先程、玄関先で角の生えた女性が、驚愕のあまり奇声じみた叫びを上げていたのを、エリアスは思い出す。

だから、このメイドの泰然自若とした様子に、エリアスは疑問を覚えずにはいられない。

普通、自分の立場や地位を知れば、当然それなりの反応があるものと想定していたのだが、このメイドは反応どころか大したリアクションもろくに見せず、むしろこちらに興味すら抱いていないような節もあった。ただ、あの魔王に指示されたから仕方なく従っているだけとしか思えなかったのだ。

シュネーは目を瞑ったまま、

「そのご質問に明確な回答を提示するのであれば、私は一言、『前例がないわけではない』とだけお答えしましょう」

「それは、いったいどういう……？」

エリアスがその言葉の意味を詳しく掘り下げようとした時――

「ざっぱーん！！」

そんな自発的な擬音語を浴場内に残響させて、いきなり一人の幼い少女が勢いよくダイブしてきた。その際に発生した荒波がこちらにも否応なく伝播する。

「やめなさい、スー。今日はお客人もいるのだから」

シュネーの諌める声に、幼女は「うぁーい」と返事をした。

「あらー、じゃあこの娘がイズニィルの姫巫女さんかしらー？」

続けて背後から、間延びした婀娜っぽい響きが追随してきた。

「うふふ、初めましてー姫巫女さん。私はグリンダ＝ジェラリッティ。よろしくねー」

「……は、初めまして」

常に細められている柔和な目元。同姓の自分でもそそられるような艶かしく肉欲的な肢体や、たわわに実る豊満な双丘に、エリアスは自分の身体と彼女のを見比べて大変複雑な心境に陥った。

それなりに、自分『の』には自信があったのだけれど。

「お客？　お客なのかお前！」

随分と失礼な口ぶりで問い掛けるのはスーと呼ばれた幼女で、興味津々にキラキラと目を輝かせて、エリアスにずいっと顔を寄せた。

「あの、ええ、まあ」

自分としては客というよりも、まだ人質として捕まっているとしか感じられなかったのだが、こう純粋無垢そうな少女に詰め寄られて、自身の黒い本音を言えるはずもなかった。

「そうなのかー。じゃあお前、名前はなんなのだ？　スーはな、スーなのだ」

「……エ、エリアスです」

エリアスがつい敬語のまま言うと、スーは花が咲いたような朗らかな笑顔で、

「そうなのか、エリアスなのだな。じゃあ、エリエリなのだー！」

「え、エリエリ……？」

スーのノリに呆気にとられて流されっぱなしのエリアスと、わはーわはー、と喜色満面なスーとの遣り取りに、シュネーとグリンダは苦笑しながら見守っていた。

十分に極楽気分を堪能したエリアスとシュネーは、残りの二人を残して先にあがることにした。

「あの、さっきの質問の答えは、いったい……？」

そこでエリアスは、シュネーに先刻聞きそびれた回答の真意を尋ねた。

前例がないわけではない、とはいったいどういうことなのか。

皺一つない見るからに上等そうな造りのワイシャツの前ボタンをぷちぷちと閉じていたシュネーは、一度憂い気に目線を虚空に漂わせてから、至ってマイペースに自分の着替えを続行させつつも、口を開く。

「……例えば、イズニィル様。もし、あなた様を暗殺しようとする輩がいたとします。そして実際にあなた様のお命を狙って襲い掛かってきました。その時、あなた様はどうしますか？」

「それは……えと、無論、抵抗します」

「いいでしょう。そして、抵抗の果てに何とかその暗殺者を捕らえたとします。さて、今度はどうしますか？」

「……私の命であれば、それは王族を殺そうとしたことになりますから、反逆罪で即死刑になるのでしょうか」

「そう、その通り。通常は、それが当然の報いというものでしょう。ですが、私の主はその暗殺者を平気で身内に引き込んで、挙句の果

てに飼い慣らしてしまうほどの能天気さと甘さ、そして器の大きさを持ち合わせております。この城に住まう者は大抵がその口です。それにひきかえ、少なくともイズニィル様は人の形をしていらっしゃる時点で――いえ、はっきりと申し上げますと、まだ『人外』じゃないだけマシな方でございますよ」

イズニィル様も、早く着替え終わりませんとせっかく温まったお身体を冷やしますよ、とだけシュネーは言い残して、後はひたすらに黙っていた。

エリアスも、渡された真新しい白いブラウスの袖に腕を通した。

「湯加減はどうだったかな？」

「……良かった、です」

「それはなにより」

シュネーの手引きによってこの部屋に通されたエリアスは、パリッと糊のきいたブラウスに、エッジのレースをアクセントに置いたアイスベージュのツイードジャケットに身を包んでいた。多分、これはサンの趣味であろうなと勝手に予測。

アイギーとマキとの審議の結果（半分以上は俺への愚痴と説教で構成されていたけど）、一応相手はイズニィルの姫巫女という高貴で高位な身分のお方。食事に関しては、まさかいつものように大食堂でワイワイ騒ぐわけにもいかず、一番上等な客間を開放し、急ピッチで三ツ星レストラン級のセッティングを行った。

中央に据えた長方形の食卓には染み一つない純白のクロステーブルが掛かり、ライトグリーンのサラサラヘアーを揺らす伊達男が、その上に音もなく静かに料理の品々を展示していた。

何を隠そう、彼がこの城の厨房の全てをつかさどっている、シェフのテオドールである。

ちょうどテオドールが俺の前に前菜のサラダを置いた際に、今日の献立を訊く。

「テオ、今日は何を？」

「ウィ、ムッシューレイシ。テレーニャさん経由で、はるばるイベリタから海の幸が届きまして――それとカルネイロさんから羊を一匹譲ってもらったばっかりですから、今宵はそれらのフルコースをご用意しました。急な来客と聞きまして、少しばかりメニューを豪華なものに変更しましたが、そこはまあ、ぼくなりの見栄ということでお一つ」

悪戯っぽく片目を閉じる仕草も一々男性にしてはあまりに色っぽく、ついテオになら抱かれてもいいとさえ思ってしまう。

テオドール＝エスコフィエ、今年で四十四歳。されどその色気衰えることを知らず。コックコートに身を包むその体躯は、スラリとした理想的な体型で、ひとたび柔和な微笑みを湛えようものなら、うら若き女性陣からは嬌声が飛び交い、妙齢のご婦人方に至ってはあっさりと瞬殺されること請け合いである。

「なるほど。あの関西女からの差し入れか。そりゃ、取引した相手の商人が哀れだな」

「そうですね」

ひとしきりテオドールと苦笑しあってから、エリアスに視線を向ける。

「さあ、エリアス嬢。いつまでも突っ立ってないでお座りよ」

俺が促すと、エリアスはおずおずと下座に腰を下ろした。そう言えば補足し忘れていたのだが、現在、長方形の短い一辺の方に位置する俺の左右斜めには、しかめっ面のアイギーと、すまし顔のマキがそれぞれ座っていて、右側のアイギーの隣にはユート、エデ、シャンが連続して席に着いており、左側のマキの横には、いつの間にかいたグリンダさんが腰を落ち着けていた。

静々と精錬された動きでテオドールが、エリアスの前にも料理の皿を陳列した。シュネー以外のメイド――詰まるところサンとロートの姿が見えないが、おそらく大食堂の方で他の武官や文官達相手に給仕をしているのだろう。そういや、今日のあっちのメニューはカツ丼のAセットだった気がする。ああ、カツ丼も良かったなぁ、と軽く後悔。

「では、みんな揃ったところで、いただくとしましょう」

いただきます、とエリアスを除いた全員が合掌し、声を揃えた。

一人だけエリアスは目を白黒とさせていた。

おいしい。

素直に美味だと思う。

少々塩気が強い気もするが、それもまた味わえば奥深く、その香りたつ湯気だけで舌鼓を打ってしまうようなシチューや、それに使われた羊肉はまったく筋っぽくなく、舌の上で転がしている内に溶けていくようだった。千切る必要のないほどにふんわりとした生地の白パン（ヴァイスベック）は、ほのかな蜂蜜の甘い味がした。真っ赤に茹で上がったロブスターと貝類の盛り付けは、それ自体が一つの芸術品のようで、ナイフとフォークを介入させるのはいささか惜しいとさえ感じたほどだ。デザートに出てきた品々に関しては、エリアスも今まで見たこともないようなものばかりで、思わず童心にかえったように目を輝かせてしまった。

「ティラミスっていうんだけどね、それ」

はっ、としてエリアスは、上座でニコニコと相好を崩しているレイシを見遣る。キラキラと目の中の星を光らせていた自分をまんま

と見透かされたようで、恥じ入るようにエリアスは身を小さくした。
でも、このクッキー層とスポンジ層、それにほろ苦い褐色の粉末がかかったクリームの層が舌の上で絶妙に絡み合って、なんというか、やばい。
最近王宮で食したアイスクリームというものも絶品であったが、このティラミスという代物は、口に含んだ瞬間、脳髄に電撃が走ったような衝撃を与えてくれた。
世界には、こんなにも美味いものが存在したのか、とエリアスは動揺を抑えきれない。ここに至るまで色々と刺激的な事実に直面し過ぎて、何だか人格形成や思想構造に問題が生じそうであった。
例えば、このお菓子の為になら自国を傾けてもいい、とか。
――――なんて、冗談。
しかし、こんな贅沢で豪華な食事を貰えるなら、しばらくの間は囚われたままでもいいかな、とか心の隅で考えてしまうエリアスだった。
エリアス＝アーク＝イズニィル。一国を代表する姫巫女でも、中身はまだ花も恥らう十七の乙女である。
「エリアス嬢」
『畏憚』の魔王が、自分の名を呼ぶ。
「ディナーが終わり次第、俺の部屋に来て欲しいんだけど」
ついフォークを前歯で食んだ状態のまま、コクリとエリアスは頷いた。

第九話　あの日見た森ガールの名前を俺はまだ知らない

「かけなよ」

夕食が終わった後、訪問客用の応接室にエリアスを招き、向かい合った二つのソファの一つを指し示す。天井に吊るされたシャンデリアが仄明るく室内を照らし、曖昧な淡い影が奇妙に捩れたような雰囲気を醸し出していた。

エリアスは少し強張った顔でじっと固まっていたが、やがて静かな足取りでソファに腰を下ろした。

ソファ同士の合間には円形のローテーブルを挟んでおり、俺とエリアスはしばし沈黙を貫きながら、視線を交叉させる。お互いに相手の品定めをするかの如く、じっくりと絡みつくかのような睨み合いを俺達は飽きもせずに続けた。

「……くはっ」

やっぱりか勿論のこと、最初に音を上げて口火を切ったのは俺だった。唐突に緊張の糸を切断されたエリアスはホッとしたような、狼狽したような複雑な吐息を溢した。

「いや、ごめんね。せっかく来てもらったのにお茶の一つも出さないで」

そう言って俺は立ち上がり、後方にある棚に向かい、そこにあらかじめ用意してあったサイフォンから、褐色の液体をカップにへと注ぐ。砂糖の入った磁器に、謎の白い液体が波を打つミルクピッチャーとを盆に載せ、ソファとソファの中間にある丸テーブルに並べる。

「……なんですか、この黒い水は……？」

エリアスが怪訝そうに問いかける。

「珈琲というやつでね。数年前に南東のとある村でようやく探し当てたものなんだ。その村では滋養効果のある秘薬として飲まれてたものでさ、苗木と種を譲ってもらうのに随分と苦労したよ。いやは

や、一生分の土下座をあそこで使い果たしたと言っても過言じゃないね」

最終的には村長が哀れみのこもった目で俺を見ていたことは、今でも良い思い出である。

「……」

エリアスは、じぃーと色々な角度からコーヒーカップを眺めましたり、匂いを嗅いだりしながら、うーん、と一人検討していた。

いや、もしかしたら脳内で水霊と審議中だったりするのかもしれない。

「毒なんか入れてないよ」

じとー、と疑わしげに俺を一瞥するエリアス。だが、最後には意を決したのか、恐る恐るといった具合にカップを手に取り、そして勢いに任せるまま口内に含んで――――

「ぶっ！？」

霧吹きの如く盛大に噴出した。

「に、にがっ……この、やはり毒を！」

涙目で咽ながらも、エリアスはキッと鋭い眼光で俺を射抜いた。

「いや、入れてねーっての」

ちょうど彼女の真正面にいた俺は見事なまでに被害者で、懐からハンカチを取り出して、珈琲色で着色された顔面を拭う。あー、あとで風呂入ろ。

「そういう味なの。苦手ならそこに砂糖とミルクがあるからお好きにどーぞ」

だが、もどかしそうに顔をしかめて口をモゴモゴとしているエリアスは、絶えず俺に恨めしげな目線を送っている。仕方なく俺は嘆息交じりに、自分のカップに小匙二杯の砂糖と、ミルクピッチャーの中身半分の量を注ぎ足し、コーヒースプーンでくるくると回転させから、優雅に飲んでみせるという演出兼お手本を見せた。

どや？　という風に鼻を鳴らして、軽く挑発もしてみる。

それでもまだ猜疑的な態度を崩さないエリアスであったが、やが

て俺の真似をして、砂糖瓶から四匙分の砂糖と、ミルクを底が尽くまで投入し、程好くかき混ぜてから、改めて怖々といった感じにゆっくりと口をつけた。

「あ……」

彼女にしても、詠嘆の声が漏れたのは無意識以外の何ものでもなかったであろう。だから、俺はそんなエリアスの可愛い反応を見届けた後で、クスリと薄く笑った。

「気に入っていただけたようで、何より」

「……」

一瞬、ムッと反抗するようにエリアスは眉根を寄せたが、結局は何も言い返さずに、チビチビと大人しく珈琲を啜る作業に戻った。

その様子をしばらく微笑ましい思いで見つめてから、俺は口を開く。

「さて……とりあえずは落ち着いたところで、改めて名乗らせて貰おうか。俺の名は、レイシ＝イサナギ＝クロノーベル。形式的で言うなら、この名称で通ってる。ちなみに他は『レイ氏』、『レイっち』、『サボり魔』、『シゴトシロ』、『ユウキュウヨコセ』などなど……とある関西女からは『バ閣下』とすら呼ばれているけど。まあ、好きに呼んでくれていいよ、エリアス嬢」

「……私は、エリアス＝アーク＝イズニィル。イズニィルの姫巫女、です。呼び方は何でも構いませんが、その『嬢』って付けるのやめてもらえませんか」

何だか馬鹿にされている気がします、とエリアスは殊更強く述べた。

「おーけー。エリアス嬢――じゃなくて、エリアス。じゃあ。これからはお互いフェアということで、対等にいこう」

俺は諸手を挙げてその意思表明をするが、エリアスはこれといった反応を返してくれなかった。ちょっと寂しい俺。

オホン、と咳払いをしつつも、俺は気を取り直して目の前のエリアスに臨む。

対等と表明したからには、既に遠慮も謙遜も取っ払って、前置きなんかも必要はない。
だから。
「さあ、エリアス。君はなんで俺の国に攻めてきたのかな？」
開口一番、ド直球に俺は事の真意を問いただした。

『こーひー』なるものの未知なる味に舌を鳴らしつつも、エリアスは相手の雰囲気に呑まれることのないよう自然と襟を正した。
最初は文化や価値観の違いから、目に新しいものばかりでつい自分の立場を忘れがちであったが。
決して、見失ってはならない。
ここは、ティルナノーグ。
自分は姫巫女で、捕らわれの身。
対峙する少年は、『畏憚』の魔王。裏でどんな悪逆非道で鬼畜外道なことをやっているか分かりゃしないのだから。
それ故に、自分がこの国に攻め入った理由。王である父の反対を押し切って、一軍を率いてまで進軍した訳。
「私は、あなたの国の噂を色々と聞いています。各地で奴隷を買い占めては、随分と不当な扱いで酷使しているだとか、感情を灯さぬ戦闘員に仕立て上げ、戦場に送り込んでいだとか、果ては城の地下で怪しげな魔術研究や人体実験の犠牲にしているとか……他にも、各国に手練の間者を送り込み、密かにその国の要人を暗殺しようと企んでいるだとか――」
エリアスが語った世評については、まだまだその全容の極一部に過ぎず、さらに深く掘り下げていけば、真偽の程はともかく、ある

ことないことの流言飛語が絶え間なく溢れ続けることだろう。
「それらの風聞を、君は信じているのかい？」
ティルナノーグの王にしてみれば、これらの雑言に対して激怒の一つをしてもおかしくはなかったはずだが、魔王はむしろ愉快そうにニヤつき、一度足を組み直してから、エリアスに尋ねる。
「一から十まで、本気にしているわけではありません。ですが……」
エリアスが言おうとしたその先を、魔王が自分の台詞で遮った。
「火の無いところに煙は立たぬ、だろ？　まあ、噂というものは本来、尾ひれ背びれがついて然るべきもの。だが、その本質に変わりはない、と」
味噌で煮ようが塩で焼こうが、鯖は鯖――ってね、と魔王は何だか殴りたくなるような腹の立つ顔をした。
「だが……尾ひれを切り落とし、背びれを取り除けば、果たしてそこに残ったものはいったいなんだろうな？」
それは、こっちが聞きたい。
「……でもまさか、たかがそんな確証もないゴシップ程度でウチに攻め込んできたんじゃないよな？　軍隊引き連れてきた理由にしては、あまりにも弱すぎる。ということは、まだ俺に伏せている事情がある。そうだろ？」
「……」
まさにその通りであったが、エリアスは口を噤んだままであった。例えこの事実を告げたとして、相手の反応がどうでるか不明慮な以上、踏ん切りがつかないのであった。何といっても、この少年の思惑がまったくと言っていいほど読み取れない。どんな発言がスイッチとなって、景気よく自分の首が飛ぶやもしれないのだ。
いつの間にか、エリアスは自分でも注意していたにもかかわらず、魔王のペースに乗せられて、呑まれていた。
極度に課せられた緊張が、四肢の筋肉をきつく締め上げる。太腿の上で握りしめた両手が、じわりと湿り気を帯びた。
「……そ、ダンマリ。なら少し、社会のお勉強でもしようか」

はっ、としてエリアスは面を上げた。黒髪の少年は「シュネー、よろしく」と短く命令すると、背後から前髪ぱっつんの見覚えのあるメイドが、ガラガラと車輪のついたボードを押して入室してきた。

「では、エリアス。しばし俺の頭の悪い講義でも聞いて――あ、違った」

魔王はソファから跳ねるように起立すると、どこからか取り出した白墨を片手に、用意された黒板の前に立って、

「どうぞ、お聴き願いたく候（そうろう）」

と、つい殴殺の限りを尽くしたくなるような笑みで言った。

部屋の隅で静かに待機をしているシュネーに、ごくろうさん、と手を振ってから、俺は久しぶりに教鞭を執る。

「それではまず、国家とはなんでしょうか。はい、出席番号四番のエリアス！」

しゅ、出席番号……？　と俺のいきなりの無茶振りで戸惑うエリアス。

「じゃあ問題を変えようか。国家と認められるために必要な三要素とは？」

その問い掛けには、すぐに彼女も模範解答を提示した。

「えと、領域に、国民、それから主権でしょうか」

「正解。ここにはないけどヒトシくん人形をあげよう。では続いて、国家の役割とはなんぞや？」

俺が黒板に『国家』と書き記しながらそう出題すると、エリアスは意外にも合間を空けずに即答した。

「それは、国民の幸せを担うことではないしょうか」

幸せ。

その優等生じみた返答に、俺は刹那的に呼吸が停止するが、すぐに何事もなかったかのように持ち直す。

「……うん、概ね模範的な解答だ。アリストテレス曰く、『人間とは社会的動物である』のとおりに、俺らヒトという生き物は、社会的な営みの中で生きる生命体だ。村であれ、町であれ、国であれ、少なくとも俺らは何らかの組織に属して生活している。まあ、例外もあるちゃあるが、今は三角コーナーにでも置いておこう」

……アリストテレス？　と首を捻っているエリアスを気にせず、俺は細々と板書しながら話を進める。

「んで、話題を国家の方向に戻すけど、いったいどのような国家が良い国家足りえるか。その答えは単純明瞭。それは秩序と法律に人々が服し、理性的な人々が理性的に日々を送ることが出来る――それが本当に理想的な国家の姿だ。けれど、周りを見渡してみれば封建制度が主流の国家ばかり。議会制を導入している国も、大陸規模で数えればまだ少数派でしかない。別に封建制度自体を否定するわけじゃないけれど、俺は基本的に『貴族』ってやつが嫌いでね、一方的に貧民層ばかりが搾取されるっていうのはどうにも気に食わない――とは言いつつ、『貴族』という存在もまた全否定するわけでもない。どんな組織体系であっても、偉い立場という存在は必要不可欠だ。だから、支配的位置にいる裕福層が独裁的に貧困層を支配するのではなく、むしろ指導的な役目を負えば、その国家は末永く平和に安定したものになる、というのが俺の主張。まあ、これもアリストテレスでいう『中間の国制』になるわけだけど。しかし、現実問題そんな展望は悲しいかな訪れていない。封建に浸りきった貴族や王族が農奴を使役し、国家の一部分だけが繁栄しているという現状。それに逆らえば国賊として処刑されるという、ある意味での恐怖政治――」

だから俺は国を創った。
自由であると、平等であると、誰もが好きに叫べる居場所を用意した。
この『楽園（ティルナノーグ）』を建国したのだ。
「自慢じゃないが何とも光栄なことに、俺は過去にさる猫耳少年からキングオブバカとすら宣言された奴でね、オツムが極めて残念なんだ。だからこれは、俺なりに国家の成り立ちを理解しようとした結果なんだが、国とはすなわち、一つの会社であると俺は簡単に噛み砕いているよ」
「会社、ですか？」
エリアスは小首を傾げて、いまいちピンとこないでいるらしかった。
「そう。俺は国を造るというよりも、一つの会社を興すノリで行動した。例えばこう想像してみてくれ。会社を経営する為には社員と、それから顧客が必要だ。けれどもこの場合、社員と顧客はイコールの関係で結ばれているわけで、身内である社員も立派な顧客であるということ。要するに、顧客でもある社員が、社員でもある顧客の為に運営する会社。えーと、民主主義って何となく分かるかな？そして実質的に会社を廻しているのが社員である以上、主権は社員兼顧客である国民の物であり、社長――つまりは王であるこの俺は中心的な核でしかない。まあ、何だかんだで『王』とは名乗っているが、俺的にはみんなの代表ぐらいとしてでしか捉えていない。要はお飾りでしかないんだよ、俺は」
黒板の端っこに恐い顔をした部下二人の落書きをしながら、だらだらと講習は続く。
「確か、イズニィルは半分共産主義に近いような国家体制をとっていたっけ？　詳しく知らないけど。でも、近隣諸国と比べれば大分マシな方だよ。少なくとも、国民が飢えないように政治をしている点に関して言えばね」
尊敬に値するよ、と俺は重要なポイントや単語を殴り書きしなが

ら、エリアスの方に視線を向ける。
　居眠りをしているかどうかをチェックするつもりだったのだが（寝てたらチョークを投擲するつもりだった）、意外なことに、エリアスは俺の講義に抗議するでもなく、真面目に傾聴していた。ふむふむ、と興味深そうに頷くその様は、まんま受講生のようであった。
　そんな対応をとられたら、講師側の俺のテンションも必然的に上昇するというもので、思わず語る口調にも熱が入るのは致し方がないことだと思う。
「んじゃ、次は国家とも関係の深い『宗教』について訊いてみようか。はい、エリアス。この大陸で一番信仰されている宗教といえば？」
「それは、サンタマゴリア帝国発祥の『世界宗教』では」
「はい、ファイナルアンサーを告げるまでもなく正解です。神の御遣い『シュテンベルグ』を信仰対象とする、今この世で最もナウい宗教です。各国に修道院を設け、日夜慈善活動に精を出しており、通称『教会』としてよく知られていますね。補足すると、サンタマゴリア帝国では祭政一致体制をとって、王権神授を唱えたアホ臭い絶対王政を布いています。簡単に言えば、皇帝が教皇を兼ねていると理解してくれればそれで一向に構わない。と、ちなみに我がティルナノーグは、その『教会』とこれまでに血で血を洗い、血で地を潤すような悲惨暗澹たる戦争を幾度も繰り返してきました」
　もっと付け加えるとするなら、その戦争は未だに継続中であって、現在は『教会』も表立った動きは見せず、ただ鳴りをひそめている状態で、そうなるとこちらも手の出しようがない。
　あくまでも、俺達は防衛戦という体裁を崩してはいけないからだ。わざわざ無駄な犠牲や争いを生むことは、俺の信念に反するし、望むところでもない。
「一応お宅の国も、『世界宗教』の一員なんだろ？」
「ええ、それは無論。でも、そこまで信心深いというわけではありません。ただ、彼等の布教活動を認証しているだけというもので」

「んま、下手に喧嘩売ることもないからな。その選択が無難だろね。というか、イズニィル国内じゃ『姫巫女』の君がもはや信仰の対象なんじゃないかな？　文字通り偶像崇拝（アイドル）という意味合いで」
「……確かに、そういうのが完全にないとは断言できませんね」
照れ臭そうな笑みを浮かべるエリアスに、俺は畳みかけるように質問を浴びせる。
「そこでだ、エリアス。一昔前に、このティルナノーグが周囲の国々から侵略されたのは、さていったい何故でしょう」
「そ、それは……」
エリアスは罰が悪そうに言いよどむ。
それは、俺を殺すためであることの他に理由はない。
だが、もっと深く突っ込んでいけば、少々ややこしい諸事情が絡み合ってくる。
「正解を言ってしまえば、それは『教会』が各国に脅しをかけていたからだよ」
キョトン、と目を瞬かせる生徒の反応に、俺は殊更詳しく解説する。
「『教会』はな、俺達みたいな危険思想を排除しようとしたんだよ。封建社会で構築されたこの世界の崩壊を喰い止めるべく、『教会』と、それに加担した諸国がな――――勿論、肥沃なこの土地や資源を狙ってのこともあったんだろうが、奴らの真意を代弁すればそういうことだ。魔王討伐、世界に平穏と安寧を、と高らかに謳い上げながらも、腹の内では自身の欲望と保身とエゴがぐつぐつ煮えたぎっているわけですよ。現在、この国ではあらゆる宗教の自由を認めているし、当たり前だけど、文化摩擦からのイザコザも日常茶飯事だ。しかし、それはそれで仕方ないことだと思う。なにせこの国にはまだ《歴史》というものがない。故に議会を設立し、随時国民からの声を集めて、少しでもより良い国造りを目指している。それからご覧の通り、ティルナノーグはまだ都市国家の域は出ていない。とりあえずは支配下においてる諸侯に関しては、いくらかの税金だ

け納めてもらって、後は自由放任を言い渡してある。自分の身の回りだけでも大変なのに、よそさまのことなんて構ってらんないからな。このことから分かる通り、俺だって手当たりしだいの手探り状態で、身悶え息絶えで四苦八苦しているわけ……さて、この辺でそろそろ君の本音を聞きたいところなんだけど、どうだろうか？」

チラリ、と流し目で俺は彼女を流し見るが、

「……」

ふう、と俺は軽く青色の息を吐く。こちらの本心を腹を割って晒せば、彼女の胸襟も自ずと開くものだと踏んでいたのだけれど、そう思い通りになるわけもないか。

ですから終わりに蛇足として、悪足掻き代わりの無駄話でも聞いてもらいましょうか。

「じゃあ、もう一つおまけに、君が伝えてくれた噂話がどこまでが本当なのか教えてあげるよ。その通り、俺は奴隷商から奴隷達をまとめて買い占めることがある。その後の彼らが辿る筋道――――それはこのティルナノーグの国民になってもらうことだ」

「え……」

驚愕を顔に貼り付けて、エリアスは開いた口が塞がらないようであった。

まあ、当然のリアクションだろう。

「しかしながら、無理に連れ去られてきた者も多い。その場合は、故郷のまできっちりと護衛をつけて送り届けているよ。それ以外の者達には、この国で戸籍を作り、職を探して、みっちりと働いて貰う。成人以下の子供については、ここからちょっと離れた『魔術学校』で教養を積んで貰う道も用意してある。そうすれば、この城で武官や文官として雇い入れることも将来的には可能だし、実際にこの城で職員として働いている者の大半は貧民層や奴隷からの出身だったりするしな。ああ、あとそれから地下で行われている怪しげな魔術研究や、非道な人体実験っていうのに関しては、流布している噂とあまり遜色ないと思うよ」

地下に引きこもってばっかのアキナスとピノの両者を思い浮かべ、俺はうーんと額に指を添えながら唸った。

「あまり遜色ない、とはいったいどういう意味ですか？」

あまり、の部分にアクセントをつけるエリアスの声に、俺は引き攣った苦笑を返さざるを得ない。

「どちらにしたって、その噂で犠牲になっている実験体っていうのは、多分、俺のことだからさ」

実に、興味深い講話を聴いた。

彼自身、キングオブバカとは自称しているはものの、それは謙遜卑下以外の何ものでもないだろう。

実際に、この飄々とした少年はかなりの切れ者だと、エリアスは心中で断言する。しかし、彼はそれをわざと茶化すような態度で誤魔化している風もある。

喰えない相手だ、とエリアスは改めて実感する。雲みたいにフワフワと掴みどころのない人物であると。

それでも、やはりここまで如実に感じてきたことだが、彼からは一切の悪意というものが見受けられない。捕虜である自分に対して、この来賓のような待遇もそうであるし、百聞は一見にしかずとはよく言ったものだが、これ程までに魔王のイメージが崩壊すると、逆に肩透かしを食らったような気分だった。

ならば、伝えてみる価値はあるのだろうか。

あの出来事を。

「話して、くれないか？」

魔王は、再度言葉を重ねる。
「……分かり、ました。お話します」
まるでラピスラズリがはめ込まれたような美しい青色の双眸を一度閉じてから、エリアスは覚悟を決めた。
「先月、私の国である村が謎の襲撃に遭いました。死者は数十。辛うじて生き残った者はほんの僅か。村はほぼ再起不能なまでに壊滅しました」
エリアスはいくらかの緊張を孕みつつも、しかと魔王のことを見据えて、言い放つ。
「生存者の証言で、その村を襲った者達は、自ら魔王の配下であると明言したそうなのです」
ふと気づけば、消灯の時間が刻々と迫っており、俺はエリアスの美容と健康を死守する為にも、早々に床に就いたらどうかと彼女に勧めた。
今までずっと入り口付近で甲斐甲斐しくも待機していてくれたシュネーの方を向き、
「シュネー、彼女を寝室まで案内してやって」
エリアス用に宛がわれた部屋までのガイドを依頼した。
「主(あるじ)はどうなさいますか」
シュネーは静々と音もなく近づいてくると、耳元で俺の予定を訊いてきた。
「このまま食器を片付けてから、俺も自室に戻るよ」

「さようで。では、今宵の夜伽は主の部屋ということでよろしいですか？」
　ブフッ、と最後にコーヒーカップに口をつけていたエリアスが華麗に吹き出した（一度目と比べて非常に小規模だったので二次被害は被らずに済んだ）。
　これもまた毎度のことなので、俺は極めて冷静にシュネーの発言に対処する。
「大変よろしくねーよ。あのね、シュネーちゃん。お客人がいる前でそういう妄想発言は大いに自重しようね――はい、そこのエリアスも顔を赤くしない。鵜呑みにしない。真に受けない。本気にしない」
　真っ赤に染めた顔を恥ずかしげに俯かせるエリアスに向かって、俺はビシッと指差さす。
「ならせめてお休みのチューを」
「するか！」
　俺は半ば強制的に二人を部屋から追い出した。

　てくてく、と黙したままシュネーの背中を眺めながら歩くエリアスは、そんな重苦しい静寂の中でも、今の時まで魔王と相対していたというプレッシャーから解放され、シュワシュワと音を立てる炭酸のように、身体の強張りが抜けていく気の弛みを痛感していた。
「我が主は、愉快な方でしょう」
　だから、唐突に声を掛けられたことにビクッと心臓が跳ね上がったことは言うまでもなく内緒だ。
　二人は立ち止まることも、位置関係も変動することなく、歩き続

けたまま会話を交える。
「え、ええ……掴みどころのない人でしたけど」
つい口が滑って本音が出てしまうが、
「それは、そうでしょうとも」
コツコツとブーツの音を鳴らしながら、シュネーは同意を返して、
「誰だって、あの方を理解することなんて出来ないのですから」
存外、冷たい虚無感を漂わせた言葉を紡いだシュネーに、エリアスは知らずの内に唇を閉ざした。
「……だからこそ、私はあの方に仕えているのですけれど」
フフフッ、とシュネーは薄気味悪く肩を揺らした。
前を歩くメイドの表情は窺えなかったが、何となく彼女が物寂しそうに見えたのは、きっと気のせいではないだろうなと何となくエリアスは思った。

『……その情報は、俺にとっても初耳だ。俺は君の国の村を襲撃した覚えはないし、部下に命令した記憶もない。悪いけど、こればかりは信じてもらう他ないよ。それが原因で君がグラニエに侵攻したってんなら、そちらの動機は把握した。君には最初からティルナノーグに攻め込むべき大義名分があったわけだ。でもティルナノーグ側にしてみれば、それは誤解やとばっちりでしかならないんだよ。再度確認の意図も込めて言明しておくけど、”我らティルナノーグは貴殿の国に襲撃を企て、それを実行したという事実は断じて存在

し得ない”　――――すまないが、今はただそうとだけしか言えない』

エリアスに告げた真実に、俺は否定だけを言い渡して、この問題については夜も遅いということで明日に持ち越したわけだが。

はてさて。

「勘に頼ってみれば、『教会』の仕業として考えるのが妥当なのかな……」

ふむ、と俺は一人になった室内で、カチャカチャとカップや砂糖瓶を片付けながら、乏しい脳味噌で思考を働かす。天井のシャンデリアに灯る明かりも既に消していて、窓から差し込む淡い月光だけが唯一の光源だった。

ぼんやりと、先程までのエリアスとの問答を振り返ってみる。

国家の役割とは何か、と俺は彼女に問いかけた。彼女は迷うこともなく即座に答えた。

――――それは、国民の幸せを担うことではないでしょうか。

「……幸せ……」

誰かの幸福。

誰かにとっての幸せ。

グッと、手に持ったカップに力が入る。

ギリッと、堪えるように歯軋りをする。

「笑わせる」

パキンッ――とあっけなくカップは俺の手の中で単なる欠片に成り果て、そのまま重力に従属してパラパラと床に自由落下していった。どうやら破片で切ってしまったらしく、ヌメリと赤く濡れた掌も、ジュクジュクと気持ちの悪い効果音と共に再生していく。流れた血液も驚くべき速さで干上がり、あっという間に気化していった。

その光景を見届けた後、突然、非常に悪質な目眩が襲い掛かり、

足取りが急激に覚束なくなる。
何とか壁に背を預けて、ずるずると尻餅を着くが、ズキリと心臓の辺りにも鈍痛が伴ってきた。顔半分を右手で覆い、それらの症状が落ち着くのをひたすらに待つ。
だが、この身中で疼く痛みは、決して消え去ることはないのだと、いかんせん俺は知っている。
「……辛いよ」
イリア。
まるで母を求めて囀る雛鳥のように、俺はやるせない気持ちで呻いた。

翌朝。
まさにアルプスのような巨峰が連立する山間から、二つの太陽がチラリズムで覗く頃。ぐるりと堅固な外壁で囲われたティルナノーグの都市全体を俯瞰するようなとある崖の上で、三つの人影が泰然と《存在》していた。
「へえー、なかなか良い街じゃない。魔都だの魔城だのって聞いて

たから、いったいどんなものかと思ってたけど、案外そうでもなかったわねん」

のほほん、とした女性の感心したような声音が、影の一つから発せられた。

「カッハハハ！　まあ、何にしたってオレ様は楽しみでしょうがないけどな。復活した『恐慌』をブッ倒して、さらには『教会』を打ち負かしたっていう今期の魔王に会うってのはよ。なあ、アイオロス？」

「どうでもいい……さっさとエリアスを連れ出して、とっとと僕は帰りたいよ……ふぅ」

残り二つ影からは、ノリノリな調子の声と、倦怠感マックスな溜息が差し交わされた。

「うふふ、さーて、レイシくんは元気にしてるかなぁ？」

「あん？　ミエリッキ。お前、魔王と面識あんのか？」

「それは、僕も初めて聞いたよ……ふぅ」

「んー、昔ちょっと『背徳の森』でね。北が寒くなってきたから南方で過ごそうと思ってたら、偶然ね。あの時は彼もまだ普通の人間っぽかったけど、いやはや、ヒトっていうのはしみじみと恐ろしいわね。いったいどんな風に化けるか分かったもんじゃない」

ミエリッキと呼ばれた彼女の意見に、残り二人の影も賛同するように頷いた。

「とかまあ、年寄りじみた話題は切り上げて、わたし達『四柱（エレメンタルフォー）』は、囚われのエリアスちゃんを助けにいかなくちゃ。魔王に捕まったお姫様を救う――うふふっ、何だかお伽噺みたい」

「……んま、《伝説》そのものである僕達が言える義理でもないけどね……はぁ」

「とりあえずオレ様は、その魔王と一発バトれば何でもいいけどな！」

燃えるぜー！　と一人メラメラと瞳の中の炎を激しくさせる揺らめく影。

否、どちらかと言えばもはや陽炎。

「ちょっとぉ、イグニスはまた勝手に暴れたりしないでよねっ。先週、わたしの森を一部更地にしてくれたのを、まさかもう忘れたんじゃないでしょうね？」

ミエリッキは片方の眉を持ち上げ、ジト目でイグニスを睨みつけるが、やがて視線を正面に広がるティルナノーグの街並みの風景に戻した。

そして、溌剌とした一声を木霊させる。

「さぁて、レイシくん。森のお姉さんがやって来たぞぉー！」

第十話　花咲く頭部

＞ｉ２３２４３―２０８８＜

ある日、森の中、お姉さんに、出遭った。
と、別に某童謡をもじったわけでもないのだが、過去に俺は『背徳の森』で妖精たちと共に移動する泉を追いかけて遊んでいたら、必然か偶然かはともかく、どうにもこうにも彼女との邂逅を果たしてしまったことがある。
妖精たちは彼女のことを、『王だ、王だ』、『王様だ、森の王だ』と恭しくも囁いていたが、俺にとっては頭部にお花畑を乗せた変なお姉さんくらいにしか見てなかった。
そして実際、彼女は変人であった。
『あら、人間。ちょうどよかった、これから一緒にお茶なんかどうかしら？』
『いえ、イリアから知らない人にホイホイついていくなって言われてるんで』
『そう、今日は良い紅茶の葉があってね……』
『そうですか。では、遅くなるとイリアが心配するんでこれで』
『まあまあ、そんなに喜んでくれるとわたしも嬉しいわぁ。じゃあ、こっちいらっしゃい。もう準備の方は出来ているの』
『あの、耳の穴に花の種子でも詰まっているんですか？』
『え？　ああ、うふふ、綺麗でしょこれ。頭の花は季節に合わせて色々と変えているのよ』
『はあ、言葉が全然通じないと』
『残念ながら、お菓子は木の実か果実ぐらいしかないのだけど、勘

弁してね。わたしも久しぶりにこの森に来たから、どうにも勝手が分からなくて』

『なるほど。何はともあれ俺は失礼します』

何だこの人マジやばい的な雰囲気を本能単位で感じ取った俺は、早くも最終手段である逃走を行使しようとしたら、突如として地面から生えてきたツルにがんじがらめの簀巻きにされ、身動きを封じられた。

『どうしたの？　お茶会はこっちよ？』

ウフフフフフフ、とお上品に口元に手を添えて微笑むお姉さんに、俺は『空戯一座（うつろぎいちざ）』や『禍淵一派（まがふちいっぱ）』などの殺し屋集団を相手取った以来の圧倒的恐怖を味わったのであった。

それ以降、森に足を踏み込むたびに件のお茶会に誘われ――もとい攫われるようになり、世間話から同僚の愚痴に至るまで、まったくもって遠慮の限りを尽くしたい経験を幾度となく味わったのであった。

いや、まあ、それだけの話なんだけどね。

加えて何故俺がいきなりこんな昔話をしたかっていうと、今後の展開をご覧になれば嫌でも分かって貰えると思うし、これ以上の説明は蛇足というか、無粋なものになるので大いに割愛。しかし、最後に一つだけ言い残していくとするなら。

俺は何故だか、その森のお姉さんとの再会を成し遂げてしまったりするのであった。

「おはようございます、主（あるじ）。今日の天気は掃き溜めのように爽やかですよ。きっと何か狂気で驚喜なことが巻き起こるに違いありません。さあ、とっととご起床なさいませんと、このシュネーめが剥がしに参りますよ」

いつも通りに、低血圧気味の俺は布団に包まって朝の光を憎んだ。目覚まし役のシュネーのテンションも今朝も今朝で絶好調なことは説明するまでもない。いや、シュネーにしてみれば無表情がデフォルメみたいなもんだし、存外、他人から見れば彼女の機嫌の良し悪しなんて判断がつき難いのかもしれない。

まあ、俺からしてみればシュネーみたいなタイプは、むしろ分かり易いくらいなのだけれど。

閑話休題。

「……あと五時間」

「それでは昼になってしまいます」

「やだ、起きたくない。学校行きたくない」

「何を寝ぼけてらっしゃいますか。『魔術学校（アカデミア）』の理事長は主自身でしょうに。それとも、どこか体調でもすぐれませんか？」

「体調……うん、そうお腹が痛い。痛くて堪らない。だからもう少し寝かせて」

「腹痛……つまりは陣痛ですか。なるほど、ついに私の子を孕んだというわけですね」

「どうしてそうなった！？」

ガバッ、とつい布団を跳ね除けてまでシュネーにツッコミを入れてしまう。はっとして俺が気づく頃には、シュネーは計画通りと言わんばかりにほくそ笑んでいた。

「おはようございます、主」

「……ああ、おはよう、シュネー」

嵌められた、と俺が鬱々と後悔している間にも、シュネーはカー

テンを解放し、目に痛い日光を部屋に充満させる。うおっまぶしっ。
「とっくに皆様も朝餉の方に着いておいでです。主もさっさと済ましてください。食器が片付きませんから」
「はいはい、すんません」
嫌々ながらも俺は寝台から降りて、しゅるりと寝巻きにしている藍色の着流しの帯を解く。上半身だけ脱ぎかけた辺りで、俺の脳味噌はようやく活性化してきたらしく、室内にまだ侍女がいることを危うく忘れるところだった。
「シュネー、昨日みたいなくだりはいらないから素直に出ていくように」
「かしこまりまして」
チッ、と軽い舌打ちが聞こえたのは気のせいであったか。何にせよシュネーは言いつけどおりにすごすごと退出していった。
やれやれ、と俺は一息吐いてから、改めて寝巻きの脱衣にとりかかる。
と、首筋がチクチクするような目線を感じて――
「覗いてんじゃねえよ！」
大人しく退場したかと思われていたシュネーは、ちゃっかり扉の隙間から顔半分を垣間見せていた。
家政婦は見ていたのだった。
この場合、家政婦が犯人であることは言うまでもないわけだが。
それにしたって気が狂うくらいに、いつも通りの朝だった。

「おはようございます、父上」

「今朝のご機嫌麗しゅうですわ、父様」
「おっはー、パパ」
シュネーを伴ってダイニングに到着すると、エデとユートとシャンの三人は長机の定位置に腰を下ろしていた。赤いフードが特徴的なロートがいそいそと朝食の皿を並べているところをみると、昨日のように他の皆を待たせるような事態はどうにか避けることが出来たらしい。あとエリアスも何気にちょこんと着席しており、シェフのテオドールと何やら談笑していた。
「あれ、そういやマキとアイギーは？」
ちょうど横を通りかかったロートに、姿の見えない部下二人のことを尋ねてみるが、
「あ、え、えと……既にマキさんもアイギーさんも、一時間ほど前に朝食をお済みになられて、職務の方にあたっていますが……」
「ああ……はい、そうすか」
いやはや、仕事熱心な部下二人のおかげで、俺はこうしてゆっくりと朝飯をいただけるわけですね。ホント申し訳ないことこの上ない。加えて現在ではエリアスという他国のお姫様を預かっている始末だし、イズニィルとの交渉やら外交やらで大いに多忙な状況であることは自明の理。いやね、仕事増やしてサーセン、と俺は脳内でマキとアイギーにローリング土下座を繰り返した。
「わっはー、レイシはオネボーさんなのだぁ」
視界の隅で、キャラメルのような色合いの髪を腰まで垂らした、外見九、十歳くらいの少女が、俺を指差して「やーい」と笑っていた。
うるせー、と俺は舌を出しながら席にへと着く。ちなみに配置関係は、俺が長方形でいう短い方に腰を落ち着け、その右斜めにスー、左斜めには子供達がユート、エデ、シャンの順に座っている。
「むぅーなんだその態度は。昨日はスーに内緒でおでかけしたくせにぃい」
「内緒、っていうか、スーは寝てただろうが――ここ一週間」

そう反駁してみるが、スーは案の定唇を尖らせて、
「起こしてくれればスーは起きたのだ！　それを怠ったレイシに非があるとスーは断言するのだ」
ぷくーと紅色の頬を膨らませるスーを俺は精一杯に宥めながら、今度埋め合わせしてあげるからという条件で手を打った。
「本当だな？　絶対の絶対なのだぞぉ」
念を押して言ってくるスーの頭部を撫でながら、はいはいと俺は承諾した。
わはーい、と諸手を挙げて喜ぶスーを俺は何となく見つめてみる。
スーフェミオット。
いかなる種族にも属さない、あらゆる分類の枠組みから外れた少女。
永きに亘ってこの土地に在り続けてきた絶対。誰にも干渉されることもなく、何からにも支配されることのない存在。
そんな彼女を俺は、侮蔑と敬愛と哀れみと親しみと多少の同属嫌悪と同族恋慕をもって。
《怪物（プティモンストル）》と呼ぶ。

「んー？　なんなのだレイシ？　スーの顔に何かついているのか？」
「んにゃ別に……シコタホア！！」
「もにゅぱー！！」
イッエーイ、とノリノリでハイタッチを交わす俺ら二人。《異形》と《怪物》の間だけに通じる謎言語である。
遠くでエリアスがギョッとした目を向けているとは反対に、三人の子供達からは、うっとりと蕩（とろ）けたような視線を投げかけられた。
「ミステリアスな父上も、また可憐……」と物憂げ。
「父様ったら、カワイ過ぎるにも程がありますわっ」とくねくね。
「スーはいいなぁ、パパと謎会話できて……」と指をくわえ。
そんな各々の反応に対して、俺は頭上に疑問符を出現させながら、

次に斜め前にエリアスを見遣った。
「よお、昨夜は眠れたかい？」
ぎこちない笑みを浮かべながら、エリアスは「ええ」と頷いた。
「それは重畳。イズニィルとの折衝が終わるまで、君の身柄はもうしばらくこの城で預かることになると思うから、早く慣れることに越したことはない」
と言っている間に、テーブルにはイングリッシュブレックファースト的な品々が並んでいた。クロワッサンやベーグルなどのパン類が詰まれたバスケットや、ベーコンエッグとサラダのバランスが取れたコンビに、朝のカフェオレは俺的には必須である。
「では、ぼくは一度厨房に戻りますので。どうぞごゆっくりと、ムッシュー」
去り際にテオが、黄緑色の短髪を寄せて俺に耳打ちをちした。俺はごくろうさんとだけ労いの声をかけた。
「オルヴォワール」
薄っすらと微笑みを湛えながら軽く会釈をし、無駄のない動きで華麗に退室していくその後姿は、うっかり彼になら抱かれてもいいとさえ思ってしまうほどの、ある種の色気を放っていた。
テオドール＝エスコフィエ。とても四十代とは思えない不思議。
ウホッ、なんて今日もイイ男、である。
「さて、今朝のうまき糧をいただくとしようか。いただきま――」
俺がいつもの調子で手を合わせようとした時――――
「おぉ、美味いなこのパン。んま、オレ様から言わせれば、まだ火加減がなっちゃいねえがな」
「ふぅん……この飲み物、確か南東で飲んだことがあったような……コーヒー、だったけ？　でもこっちの方が甘くて好みかな」
「なにアンタ達勝手に食べてるのよ。わたしにも少しよこしなさいよ」

まさしく忽然と、《それら》は存在していた。
俺だって、あまりにも突拍子過ぎて、この状況下において完全な置いてきぼりを食らっていた。
行儀悪くテーブルに腰かけてベーグルを貪り、炎のように逆立った髪型を振り回す男。
灰色の髪に、ノースリーブの涼しげな風体をした線の細い男。
そして、彼女。
若葉を連想させるエメラルドグリーンの豊かな長髪。頭部に色取り取りの花飾りを装着し、ゆったりとしたワンピースタイプのドレスを身にまとい、スーパーサイヤ人かの如くツンツンに尖った赤髪の男とパンの籠を奪い合う姿は見違えようもなく、あの時の――
「イグニスさんに、アイオロスさん!?　それからミエリッキさんまで!?」
ガタッ、と椅子を倒す勢いで立ち上がって叫んだのはエリアスで、名指しされた三人は一瞬動きを静止し、それから食卓に無断で乗り上げていたツンツン頭と森ガールは気を取り直すように床へと降り立った。
「うふふ、やっほー、エリアスちゃん」
「ふぅ……助けにきたよ、エリアス」
「まったく、新しい『水君』は世話が焼けるぜ」
エリアスにへと三者三様に挨拶を返していくが、緑髪の彼女だけは俺の方を振り返り、朗らかに破顔する。
「それと、おっひさーレイシくん。元気にしてたかしらん?」
狂気で驚喜なこと――という寝起きに聞いたシュネーの言葉を思い出す。
なるほど、約半世紀ぶりの彼女との再会は、まさに驚き狂うに値するべき事柄だった。
出来れば、二度と遭いたくはなかったのだけれど。

『四柱（エレメンタルフォー）』についての詳しい説明をここでしないわけにはいかないと俺は思うのだが、悪いが異存は認めないのであしからず。

その名の通り『四柱』とは、古くより《世界》から認定された言わば審判者であり、神により遣わされたこの世の調停役なのである。

『四柱』と名乗っているからには、言わずもがな四人戦隊であり、それぞれに『火霊（サラマンダー）』『水霊（ウィンディーネ）』『地霊（ノーム）』『風霊（シルフ）』という、世界を構成する『第一物質（プリママテリア）』を象徴した神格クラスの精霊である『四精霊』を従え、もしくはその身に宿しているのだとか。

俗に畏敬の念を込めて『森王』、『風帝』、『水君』、『焔皇』という呼称をされることもしばしば。

例えば古代の伝記などによると、山を切り崩し、森を焼き払ってまで国を興したどこぞの王様が、『四柱』の一角である『森王』の怒りをかって、天変地異のフルコースを堪能させられ、一夜にしてその国は滅んだとか何とか。

要するに、神様代行みたいなことをやっている人達です。

はい、この一言に尽きます。

「にしてもよ、ここの料理ってばどれもこれもクソうめぇな。やっべー、ここに永住しちまいそう」

「イグニス……それで君の家の火山が噴火したら大気にも影響出るんだからやめてよね……ふぅ。あ、そこの赤フードのメイドさん、このカフェオレってやつおかわり」

「あらぁ、このサラダ美味しいわね。え、なに？　レイシくんが中庭で育ててんの？」

「ええ……まあ……」

何故か『四柱』の方々と朝食を共にしているこの現状。

とりあえずは、これ以上のカオス具合を回避すべく、スーや子供

達には一旦退散して貰うことにした。しかしスーはともかく、愛すべき我が子達は最後まで非常に渋って、説き伏せるまでに幾許かの時間を割いた。曰く、『父上にもしものことがありましたらっ！』『父様だけを残していくなんて、わたくしは出来ませんわ！』『やだーパパといるー！』とのこと。ああもう可愛いなこんチクショウ！　でも仮にこの子達を同席させたら、十中八九修羅場か戦場か殺戮現場になってしまう危険性がある故、どうしてもご退場願う他ないのである。

いずれにせよ、俺は生来の親バカ根性（なんかもう否定するのも疲れたので、親バカについては自他共に認めることにした）を封印し、なるべく混乱の肥大化の可能性を秘める危険因子の除外に成功したのであった。

だから現在この部屋にいるのは、メイドのシュネーとロート。エリアスを含めた『四柱』の四人。そして俺を数えた計七名である。

「へー。ここいらの地域ってあまり来たことがないんだけど、なかなかいい土地なのね。ねえ、レイシくん。ここら辺の森にわたしの別荘作っていい？」

「やめてください、お姉さん――じゃなくて、ミエリッキさんでしたか」

何気にここで初めてあなたの名前知ったんですが。

「ミエリンって呼んでね」

「年増の戯言だ。気にすんじゃねーぞ、魔王」

遠くで先程からイグニスと呼ばれていた『焔皇』がオートミールを啜りながら言ってきた。ミエリッキさんは柔和な笑顔だけを保ったまま、

「イグニスぅう？　あなたが住んでる火山。今すぐ樹海にするわよ？」

「ひぃー恐ぇー恐ぇー」

と『焔皇』は肩を窄めながら、クロワッサンに齧りついた。

「……で、どうなのレイシくん？　作っていい？　そんで夏頃にな

ったら遊びにきていい？　勿論いいよね？」
「や、あの、ちょっとそういうウチでは管轄外っていうか――てか、ちかっ、近い！　近いですお姉さん！」
先刻までスーがいた右斜めの席にミエリッキさんは座っていて、身体を半分こちらに傾けては、クエッションマークを掲げるたびにどんどん迫ってくるのだ。
「うふふ、相変わらず可愛いなあレイシくんは」
「やめとけやめとけ。そんなババア住まわせたら、一週間も経たないうちにここら一帯ジャングルになるぞ。それに……」
またも口を挟んできた『焔皇』であったが、その台詞の先は『森王』の無言の微笑みによって強制終了させた。
「聞いておきますが、あなた方はいったい何用でここにいるんですか？」
まさか、わざわざ朝食をトゥギャザーする為に訪れたわけでもあるまい。
「そんなの、エリアスが魔王に捕まったって《風の噂》で聞いたからね。仕方なく助けに決まっているじゃないか……ふぅ」
『風帝』が決まり文句のように嘆息をもらして、呟いた。
というか、風の噂って――あーはい、さいですか。
「でもお姫様を救い出すにしては、随分とのんびりし過ぎやしませんかね」
苦笑を含んだ声で俺は皮肉を返すが、
「そんなに切迫した様子でもなかったから、ね」
まさにどこ吹く風といった具合に、『風帝』は物静かにカフェオレに口をつけた。先程から何杯もおかわりをしているが、大分お気に召したとお見受けする。
チラリと俺はエリアスの方を窺ってみるが、彼女は彼女で顔を俯かせたままだった。別に事態の収拾を期待して視線を投擲したわけでなかったが、何だかなぁ。君の先輩達でしょ、どうにかしてよ。
「んま、オレ様はよっ」

と、急に立ち上がったと思った『焔皇』が、消えた。
「『畏憚』の異名を知らしめるお前ぇと、一戦交えればそれでいいんだがな！」
この眼球が捉えたありのままを描写すれば、『焔皇』はまるで陽炎のように身体を揺らめかせながら、俺の真正面の――つまりはテーブルの上にしゃがみ込んだ体勢で出現したのであった。まったく、行儀が悪いとかいう問題以前の問題である。
『焔皇』はズイッと顔を近づけて、挑発的な笑みを浮かべる。
「なぁ、どうだよ『畏憚』？　オレ様は強い奴が好きだ。オレ様を楽しませてくれる奴が大好きだ。見た感じ、お前ぇもそういう口だろ？　それでも今のオレ様には、同僚であり後輩であり仲間であるエリアスを救出しなくてはならないという大義名分がある。普段、滅多なことではヒトに対しての干渉を許されていない『四柱』たるオレ様にとっては、この機会を逃すわけにはいかねえんだよ」
だから闘え、とイグニスは言う。
俺は。
「だが断る」
と、きっぱりとその申し出を却下した。
「エリアスを救出する為という大義名分、とあなたは言いましたが、俺は別にどっちでもいいんです。彼女を連れ出したいならどうか勝手にしてください。俺はそこまでエリアスを引き止める義理も理由もないんですから。ただ、イズニィルとのこれ以上の争いやイザコザを避けるべく、彼女を人質にとったに過ぎないんですよ。故に彼女を助け出すってならどうぞご自由に。俺は決して止めませんよ」
ふと気づくと、エリアスが何か物言いたげな表情をしていたが、俺はあえて自分の意見だけをまかり通す。
「エリアス。君も、その後の面倒臭い雑多なアレコレは君自身が自国に戻って何とかしてくれよ。こちらもなるべく穏便に事を終わらせたいんだ。優秀な部下二人が、過労死する前にね」
そう淡々と告げてから、目の前でヤンキーの如くうんこ座りをし

ているイグニスへと改めて向き直る。
「お分かりいただけましたか。ならば早いことお引取りしてもらい――」
「あ〝あ〝あ〝あぁぁあん？」
と、不意に俺の科白は、顔面におびただしい数の青筋を浮かべたイグニスの不快極まった声音によって遮られた。
「テメーの事情なんて最初(はな)っからどうでもいいんだよ。こっちは久々に暴れ回ることが出来ればそれで上々。そっちにヤル気がないんだったら、そうさせるまでの話だっ――」
言い切ると同時に振り上げた拳は、途端に灼熱の火炎をまとい始めた。
そして、もう片方の手で俺の胸元を掴み上げる。
「これでもそのスカした顔を保ってられっかなあああ!!」
今にも迫りくる高温の一撃をじっと見据えながら、俺は一人ホッと安心の息を吐いていた。
もしこの場にユートとエデとシャンの三人が残っていたならば、俺を守る為にその『能力(ちから)』を完全解放させていただろう。
そうしたら恐らく、この国は半日も経たずして滅亡していた違いないだろうから。

第十話　花咲く頭部（後書き）

神話学によると、森羅万象の構成する地水火風のうち、地と水は女性、火と風は男性を表わすようです。母なる大地とか、母なる海とかいうみたいに。

では、また次回（オルヴォワール）

第十一話　さよならイサナギ先生

『四柱（エレメンタルフォー）』の一人であるエリアスについては、他の『四柱』とは少し事情が違ったりする。通常、『四精霊』との契約が結ばれた瞬間から、その者には遥かなる延命と、強大な力が約束される。しかしその代償として、この世界の意思というものに従わなければならないという制約が付与される。

イズニィル初代女王にして、開祖のクヴェレ＝イズニィルは『水霊（ウィンディーネ）』の選定を受け、契約を交わしたわけだが、それは断じて彼女個人が結んだというものではなかった。

それは未来永劫その血が途絶えうるまで、彼女の子孫らに至るまでの契約であったのだ。無論、その規定は彼女自身が選んだことである。何故なら、それは約束された不老長寿を拒むがための条件であったからだ。クヴェレは頑なにヒトとしての生を望み、死を願った。生まれてくる子孫たちにその役目を押し付けてまでも、彼女はヒトとしての人生を渇望した。

それは必ずしも間違った選択ではなかっただろう。現にエリアスはいつだったか、『焔皇』のイグニスからこんな話を聞かされたことがある。

『いいか、エリアス。生きるっているのはな、二百年辺りを過ぎた辺りで大半は飽きてくるもんだ。実際オレ様なんかは、存在していること自体が嫌で嫌で仕方がない。今年でいったい何千歳になるかはオレ様自身もとっくに覚えちゃいねえがな、お前の先祖――クヴェレはすげー賢かったな。きっと今のオレ様みたいな結末になることをしっかりと予期していたんだな。だからよぅ、オレ様は待ってるんだよ。オレ様を圧倒的力で凌駕し、ぶっ殺してくれる奴をな。

とか結局、オレ様を殺したって、また新しい『オレ様』が生まれるだけなんだが……んま、ミエリッキやアイオロスに頼めばてっとり早いんだが、当然のように『四柱』同士での潰し合いは出来ない。ムカつくことに、そういう仕様になってやがる。だからオレ様はお前ぇが羨ましいんだぜ？　いや、むしろ恨めしいぐらいだ。少なくとも、お前はヒトとしての人生を許されている。四柱の中での実力は最下位だが、それでもまったくもって妬ましい限りだぜ』

そんなイグニスの哀愁漂う諦観じみた呟きに、当時のエリアスはいまいちピンとこなかったが、どうやら自分は優遇された立場にいるらしいということは理解できた。

ヒトが我が物顔でこの世を横行するようになってから、神は精霊達だけで自然を操るはいささか荷が重過ぎると判断し、ヒトと精霊を結合させた『四柱』を創ったとされる。

つまり『四柱』とはヒトと自然との中間を繋ぐ媒介であり、世界の代弁者なのである。

補足として付け加えるなら、それ以来国として栄えたイズニィルが代々中立主義を謳うのは、『四柱』の一人を抱えているが故の政策なのである。神の代理人である彼らは、決して個人の私利私欲の為に精霊の力を使うことの出来ない仕組みとなっていた。そしてエリアスがティルナノーグに侵攻出来たのは、偏にエリアスが民のことを想っていたからに他ならない。そもそもエリアスには侵略なんてことは微塵も考えておらず、最低限ティルナノーグ側に忠告と警告の意思表明を示したかっただけに過ぎなかったのだ。

いずれにせよ。

定められた摂理（ルール）。

決められた秩序（オーダー）。

それら遍く全てが、この世に蔓延る《世界意思》という絶対不変の法則であった。

「エリアス。君もその後の面倒臭いアレコレは君自身が自国に戻っ

て何とかしてくれよ。こちらもなるべく穏便に事を終わらせたいんだ。優秀な部下二人が過労死する前に、ね」

「……」

澪士から袖にされたような口調で言い渡されて、エリアスはいきなり冷水を浴びせかけられたかのような心地がした。

所詮自分の存在意義は、人質としての価値でしかない。

そんなことは言われなくとも十全に自覚していた。故に、この期に及んでその事実を突きつけられたところでなんら痛くも痒くもありはしなかったのだが、どうしてだか彼の口から素気無くも通告された途端、不思議と胸に穴が抉じ開けられたかのような気がしたのだ。

果たしてその心情に対して明確な理屈をつけられることはなかった。

今は、まだ――――

「あ〝あ〝あ〝あぁぁあん？」

とイグニスの憤怒を孕んだ濁声で、エリアスは我を取り戻した。見ると、イグニスが魔王の胸元を締め上げ、燃え上がる拳を勢いよく振り上げていた。

「これでもそのスカした顔保ってられっかなああっ！」

イグニスが『精霊魔法』を施行出来るのは、自分というファクターが存在するからであり、要するにこの争いは自身が原因であると言っても過言ではない。『精霊魔法』とは『魔法』というカテゴリに分類される通り、元素魔術のようなチンケなものではなく、詰まるところ自然そのものを操る魔法。すなわち森羅万象の『現象』をつかさどる術なのだ。

――止めなければ！

イグニスの張り上げた声とほぼ同時にエリアスは椅子を蹴っていた。『四柱』の中でも随一の実力と火力を誇る『焔皇』が、『畏憚』

と闘う――――その先の展開を想像してエリアスはゾッと冷や汗が噴き出した。この城がどうなるといった規模の話ではない。ここら一帯の土地を文字通り火の海に変えてしまう。

と――――耳を塞ぎたくなるようなもの凄い音。

宙にへと舞い、床にへと落下していく食器の類。

一瞬、何が起こっているのか分からなかった。

そんなエリアスが数秒後に認識できた目の前の光景とは――

「我が主にそのような暑苦しい拳を向けるとは――くたばる覚悟は既に用意出来ておいでですね」

「レ、レイシ様、こ、殺しちゃいますか？」

先刻まで給仕に従事していたメイド二人が、卓上で皿や食べ物を悲惨に飛散させながら、イグニスの両腕をそれぞれに絡めひしゃげていた。

テーブルの上でうつ伏せにされ、自由を奪われたイグニス。

「シュネー、ロート、二人ともやめろ。お前らが敵う相手じゃない」

イグニスの手から解放された魔王は再び椅子に沈み込みながら、強張った表情で諌めるが、二人のメイドは一向にイグニスから離れる気配はなかった。

だが、テーブルクロスのシワに押し付けられたイグニスは、耳まで裂けたような笑みを作り、

「……カハッ、カハハハハハハッ！　イイッ！　イイ兵士の目をしてやがる！　獲物を貪る獣の目だ！　佇まいからただのメイドじゃねえなとは思ってたが、カハハハッ！　いいぜいいぜ、やっぱそうこなくちゃなあぁあああっ！」

ハイテンションに『焔皇』がまたも叫んだ――と思った次の刹那には、状況は大きく二転三転していた。

イグニスの身体から突如として迸る焔。その前にいち早く危険を察知していたメイド二人が驚いたように飛び退き、魔王も何やら短

く詠唱を終え、そのまま両手を前にかざし――
「……オフォゴッ……」
結果的に現状を説明すれば、『焔皇』は胴回りサイズの鋭い木の幹によって串刺しにされ、宙に浮いていた。
「イグニスぅ？　そろそろ他人の庭で暴れるのもいい加減にしなさい、っていうか死になさい」
不機嫌さを声音に潜ませて、『森王』は静かに言い放った。

ミエリッキさんが突き出した右手は、肘から先が紛うことなく樹木のそれとなっており、先端が杭のように尖っていた。
まさかそれが『焔皇』の胸を刺し貫こうとは、俺も予想だにしていなかったが。
「て、テメ……上等だこのクソババア！　やっぱこないだの山火事まだ根に持ってやがったな！」
深々と貫通している割には、体液などの流出は見受けられなかった。『四柱』というのは血がかよっていないのだろうか、と俺は暢気に考えたりする。
「さぁ、何のことかしらね。例えあなたの管理不足のせいでわたしの森の一部がハゲになったって、別にわたしは微塵にまったくこれっぽっちの欠片も気にしちゃいないわよぉ」
「そ、そりゃ絶対気にして……」
「だーかーら、してないって言ってるでしょー」
とミエリッキさんが声に出すのと同じくして、『焔皇』の胸から生える木の槍から、蔦と蔓が大量に生い茂り、それらは瞬く間に『

焔皇』の身体全体を覆い始めた。
「なっ、糞がっ…ぐぉらぁっ……消し炭確定だぜこっのクソアマぁああ！　ぜってぇ後でテメェん家燃やすかんな！　頭ン中までお花畑のくせしやがってふざけんじゃ――」
『焔皇』が最後まで言い終わらないうちに、彼は完全に蔦の塊へと成り果てた。ミエリッキさんが腕を元のサイズに戻すと、蔦と蔓の球体は、ゴドンと鈍い音を立てて床に転がった。
束の間、辺りを包む静寂。
俺は、事前に距離をとっていたシュネーとロートに目を向ける。
「……シュネー、『毒手』は発動してないな？」
常時両の手に装着している純白のロンググローブに、いつも通りの無表情で手を掛けているシュネーを見遣り、俺は確認の意味も込めて問いかける。シュネーは一度戦闘姿勢を解き、しゃんと背筋を伸ばしてから「……はい」とだけ短く頷いた。
今度はロートも、早くその牙をしまいなさい」
「ロートも、早くその牙をしまいなさい」
低く腰を落とし、牙を剥いて軽く唸りを上げているロートに、俺は命令する。長い前髪のせいで彼女の顔はうまく窺えなかったが、赤いフードの隙間からチラリと覗いたロートの瞳孔は完璧に開かれていて、確実に据わっていた。
数刻が過ぎても反応のないロートに、俺は重ねて厳しく言いつけた。
さらには、彼女の真名を用いてまでも。
「血に飢えたか、『赤頭巾（ロートケープヒェン）』。俺は鞘を収めろと言っている」
「……はい、レイシ様」
か細く彼女は返事をし、恥じるようにフードを深く被り直した。
「はあぁー……まったくなんだいこの空気は？　誰か窓開けて風通しよくしてくれよ」

と、今まで我知らずを保持していた『風帝』が、コーヒーカップに口をつけながら気だるそうに呟いた。
「ごめんなさいね、レイシくん。うちの熱血バカが失礼しちゃって」
ミエリッキさんが、元々は『焔皇』だったはずの蔓の大玉に腰を下ろしながら、申し訳なさそうに侘びた。
「いえ、こちらにさしたる被害はありませんでしたし、大丈夫ですよ。というか、彼はいいんですか？」
俺はミエリッキさんが座席にしている蔦の集合体を手で指すが、
「ん？　ああ、いいのいいの。このアイビーの耐火性と耐熱性はバッチリだし、いくらイグニスでもしばらくは身動きとれないはずよ。だから安心してね」
「えと、そういうことじゃなくて……」
「しかしそうねぇ。ここでお喋りの続きってのもアレだし、いったん場所変えましょうか」
「……」
相変わらず人の話を全然に聞いちゃいない――それが森のお姉さんクオリティであった。
けれど、彼女の意見にも一理あったので、とりあえず俺らは部屋を移動することになった。
「シュネー、ロート。ここの後片付けは頼んだぞ」
シュネーと、どうやらいくらかは落ち着いたらしいロートが恭しくも頭を下げた。
「エリアスちゃん、何しているの？」
先程からずっと立ち尽くしていたままのエリアスにミエリッキさんが声を掛けると、彼女は慌てたように小走りで追いかけてきた。
もはや原形が何だったのかすら思い出せない、『焔皇』だったはずの蔦の塊魂は、『風帝』が軽々しく風で浮遊させて持ち運んだ。
それでもお約束というか、部屋の入り口で引っ掛かったのは言うまでもない。

俺は適当に空いていた客間に『四柱』一行をお通しした。
「……と、いうことなんですよ」
さっそく俺は、ここまでの経緯と事情を彼らに詳説する。
「なるほどねぇ、エリアスちゃんの国が襲撃を受けたと……それも犯行声明が魔王の配下ときたか。それでエリアスちゃんは軍を率いてまで進軍したわけね。うん、大体の事情は把握したけど、それでレイシくんの方は納得してるの？」
設置されてあったソファへと我先に滑り込んでいたミエリッキさんは、神妙に訊きかえしてきた。それにしても自由過ぎるなこの人。
是非とも俺も見習いたいものである。
「納得も何も、俺はイズニィルに攻め入った覚えなんてありませんし、完全に濡れ衣なんですよ。ですが、こちらには自らの潔癖を示せる証拠が何一つとして持ちえていない。俺がシロだということは、エリアス自身に信じてもらうしか方法がないんですよ」
「ふぅ……ということらしいけど、エリアス、君はどう思っているんだい？」
開け放った窓の縁に腰かけながら、『風帝』は優雅に髪を風になびかせていた。傍らには件の『焔皇』だった蔦の結合物がフワフワと浮遊している。玄関の軒先に飾れば意外と風流かもしれない、と俺は何気なく思った。
「私は……」
エリアスはもごもごと言いよどんでから、チラチラと俺に視線を投げかけた。捨てられた子犬のような切なさを秘めた、青く澄んだ双眸。
その意図がうまく読み取れず、俺は頭上に疑問符を掲げる。その

ままエリアスはしょんぼりと顔を俯かせてから、ボソリと。
「……私は、信じてもいいと、思います」
「！」
ようやくその言葉をエリアスの口から聞いて、俺は知らずのうちに彼女の手を取っていた。ぎゅっと包み込むように握り締め、ついでにぶんぶんと上下にシェイクする。
「ありがとうっ、エリアス」
他人から信頼を得るという難しさを何よりも熟知している俺は、嬉しさのあまり彼女をその勢いのままハグしてしまいそうになったが、やはりそこは年長者としての理性が働いたおかげで、どうにか自制が利いたのであった。
容姿うんぬんはともかく、久々に歳も考えずにはしゃいだ俺だった。

結局のところ、エリアスが澪士に一応の信用を置いた明確な理由は定かではない。可能性として例を挙げれば、澪士のアホっぽい無邪気さからか、意外にキレ者だという側面からか、滅茶苦茶な物言いや破天荒な挙動からか、それとも彼を信望する周囲の人々を見たからか――どちらにせよ、エリアス自身にもよく分からずにいた。前述のどれか一つかもしれないし、どれでもないのかもしれない。もしくはまた別の根拠があるのかもしれない。
あるいはもっと本能に近いような、情動的な判断だったのやもしれない。
ひょっとすると、それは何か別の感情からの――――。

いずれにしても、これ以上の議論を続けたって、本人すら分からない事柄をえっちらおっちらと掘り下げたって栓のないことである。

その後の流れについては、大雑把な要点だけを述べ、残りは全て省略させて貰うが、どうかあしからず。

一応は無事一件落着（？）ということで、エリアスの身柄は『四柱』が引き取るということになり、彼女を母国まで責任を持って送り届けるという運びになった。

「君の国にチョッカイをだして、挙句に俺の肩書きを名乗ってる犯人のことだが、俺も俺なりに独自のルートで探ってみるよ。何か判明したら必ず君に報告する。それ以外にも何か困ったことがあったら、いつでも連絡してくれ。イズニィルとティルナノーグは表面上であはあるが、互いに不可侵条約を結んだ仲だ。君が起こした行動も、俺はなんら気にしちゃいない。だからまだ条約のアレコレは継続中だ。ということだ、エリアス」

また社会のお勉強でもしたくなったら、好きに来ていいからな、と澪士はエリアスの頭をわしわしと荒っぽく撫でた。はわわっ、エリアスは狼狽しつつも、その洗礼を大人しく受け入れていた。心なしか、エリアスの両頬が熟れていたように上気していたことを、『森王』は目敏くも見逃さなかった。帰国の道中でエリアスを弄るネタを見事に獲得したミエリッキは、終始愉快そうにニヤニヤと顔を綻ばせていた。

かくして、澪士が彼らを見送りに城門の前まで到着した時、『風帝』のアイオロスが運搬していた蔦の塊から焦げ臭い煙が立ち込めた。これまで何の反応も示さず、蔦によって閉じ込められていたイグニスが、まるで卵から孵った雛鳥の如く復活を果たしたのだった。

「うがあああああああああああ！　やっと出てこれたぞクソッたれ！　あ〝あ〝あぁあ！？　どこだここぁ！？　あぁ！　いたな魔王！　闘え！　オレ様と闘え！　今すぐ闘え！」

『森王』と『風帝』がタッグを組んで『焔皇』を八つ裂きにした。

もはや自主規制とモザイクの限りを尽くさねばならないほどにイグ

ニスは物言わぬただの肉塊にへと成り果て、再びアイオロスによって運送されることになった。

呆然とする澪士とは違って、エリアスにとっては毎度同じみな光景であるのか、これといって特に驚いた様子はなかった。

「ああ、大丈夫、大丈夫。どうせすぐに再生するし、わたし達二人も本気でやってるわけじゃないから。普段は『四柱』同士の殺し合いなんて許されてないんだけど、この程度のじゃれあいだったら世界も許可してんのよ」

うふふふふふ、と不気味な笑みを漏らすミエリッキに、澪士がブルッと背筋を凍らせていると、エリアスが澪士のもとにもじもじと近寄ってきた。

「……この度は……大変お騒がせしました」

「おう。言ったろ、エリアス。俺は全然気にしちゃいんよ」

「で、ですが……」

「はい、この件はこれでお終い。今回の騒動はどちらに非があったというわけでもない。また両国での会合を設ける機会があるかもしれないし、そんときにまた互いのわだかまりを解けばいいさ」

「はい……それでは、”水面にたゆたう恩恵を”」

イズニィル式の別れの挨拶を口早に告げると、エリアスはそそくさと澪士の前から去っていった。

しかして、最終的にエリアスが澪士に向けていたのは、どこか寂寞とした面差しだった。心残りというわけでも、名残惜しいというわけでもないが。

何となく、残念そうに表情を曇らすのであった。

『四柱』の四人が視界の隅に消えていったところで、俺は踵を返して城に戻った。魔王と『四柱』全員が面会を果たすという何気に有史以来の大事件を密かに終焉にへと導いたわけではあるが、正直、肩の荷が全て下りたとは到底思えなかった。

嵐の前兆というか、風雲急を警告されているような、嫌な予感のオンパレードというか、とにかく、心中を虫唾の走る気持ち悪い何かがザワザワと蠢くのだ。

これは始まりでしかない、と耳元で常に囁かれているような感覚。

「あら、レイシ様。またサボりですか」

のこのこと廊下を進んでいると、モップとバケツを担いだメイドのサンとばったり行き会った。金髪の太い三つ編みに、綺麗な翡翠を思わせる瞳。シュネーのようなフリルやレースをあしらったメイド服ではなく、町娘のような簡素なツーピースを着込んだシンプルな出で立ちに、今日に至っては三角巾まで被っていた。

「いやいや、この国の存亡をかけた大立ち回りを演じてたんだって」

ホント、マジだって。

「はいはい、そりゃお疲れさまでした」

子供の戯言をあしらうように、サンは明らか心のこもってない声で労いを呟いた。んー本当なのになぁ。

それから他愛のない会話を交わしながら俺達が連れ添って歩いていると、今度は突き当たりの角でシュネーと出くわした。

「――主。ちょうど探していたところでした。あの、彼らは……」

彼ら、とはもちろん『四柱』のことであろう。

「ああ、帰ったよ」

「お帰りに、なられた？　では、マキ様やアイギー様にはそのようにお伝えすればよろしいですか」

「あ、やべ」

マキとアイギーに諸々の出来事を伝達し忘れていた。僅か数時間にも満たない事柄であったが、その濃密さと重大性は二人にしてみれば卒倒ものであることは自明の理。ああ、二人の発狂する顔が目

に浮かぶ。
「おおぅ……またドヤされる……ってあれ、シュネー。ロートはどうしてる？」
あの暴風が吹き荒れたような惨状の後片付けをシュネーとロートに依頼したわけではあるが、一時的ではあれ、自身の本質を曝け出したロートのことだ。今頃部屋に篭城でもして、布団に包まりながら震えているのが容易に想像出来たりする。
「はぁ、彼女なら只今絶賛自室に閉じこもっておりますが」
やはり、案の定というわけであった。
「まあ、そろそろ満月にもなるしな……『人狼（ヴェアウルフ）』にゃキツイ時期か」
俺がそう言うと、シュネーもしみじみと同意するように頷いた。
「ええ、そうですね。私も排卵の日が近くなると大変気分が落ち着かなくなり……」
「おいシュネー、黙れ」
「ああ、そういや近々わたしもエックスデーだわ」
「サン！　お前まで同調するな！」
信じてたのに！　サン、お前だけは染まらずにいてくれると信じてたのに！　もうあとの純情キャラはロートしか残っていないじゃないかどうしてくれるんだ!?
「ですが、主。遅かれ早かれロートも私の毒牙に――もとい、『毒手』にかける予定なのですが」
「やめろ、オイやめろっ」
お願いだから、百円あげるから、服だって脱ぐから、焼き土下座でも何でもするからやめてください。
あと人のモノローグを勝手に読まないで。
「近い将来、メイド三人衆の頭文字に『淫乱』の二文字が刻まれることでしょう。主もどうかお楽しみに」
「楽しみでない！　テレビの前のチビッ子も誰だってわくわくしてない！」
お母さんといっしょ出来ないよ。むしろ有害電波として苦情が殺

到してくるわ。まったく、ＮＨＫは何をやっているんだ。たまに見せるお前らの本気はどこへいった。さあ、とっととこの歩く下ネタ劇場を外に摘まみ出せ！

「……ふむ」

――――さて。

ギャグパートもしっかり堪能したし、早々に気持ちを切り替えていきましょうか。

「……とかまぁ、シュネー。マキとアイギーには『問題ない』とだけ伝えておいてくれ」

俺は二人の間を通り過ぎながら、同時に彼女達にもあらかじめ告知しておく。

動乱と狂騒の前奏曲。

その始まりの予兆を。

「もしかしたら、いつかお前達にも戦場へと駆りだしてしまう時がくるかもしれない。無論、そんな展開になんて絶対にさせやしないが、少なくとも覚悟だけはしておいてくれ」

『白雪姫（シュネーウィットンヘン）』。

『灰かぶり（サンドリヨン）』。

ところが俺の重苦しい宣告とは反対に、二人のメイドは揃って――まさか、あのシュネーまでもが心底可笑しそうにクスクスと笑っていたのだった。

「笑わせないでくださいよ、レイシ様。いつだってわたし達は、あなたの為に『死ねる』覚悟はあるつもりですよ」

「仮に主が『死ね』と命じるのであれば、私達は喜んでこの命を捧げましょう」

そして、彼女達は晴れ渡ったような笑みを湛えたまま、相伴って口を開いた。

「だから、あんま見縊んないでくださいよっ」
「だから、お舐めになるのも大概にしてくださいませ」
その声を背景に据え置きながら、俺は無言で腹を抱えつつも、自分の職務室の帰路にへとついた。
「……クッ、ククククッハハハ……」
死ぬ？　俺の為に死ぬだって？
この救いようのない自殺志願者共め。

それから、マキとアイギーによる小言と問責の波状攻撃を受け（流し）つつも、その日のノルマをどうにか終わらした俺は、城の東側一階にある大食堂で飯を食い、何故かそこでも他の武官や文官共から『給料上げろ』だの『有休が欲しい』だのと不平不満――というか野次揶揄に近い罵声を浴びせられ、流石の俺も何だかムシャクシャしてしまい、『国王権限でお前ら全員死刑っ！』との怒号で一喝し、彼らを一様にして黙らせた。
そんな真冬の中指のようにささくれた俺がようやく一息吐けたのは言わずもがな風呂場でのことで、全身の疲労が湯に溶け出していくような心地に、四肢の筋肉が徐々に弛緩していくのが分かった。
「ああ……そうか……」
ぶくぶくと口から気泡を立てながら、俺は湯船の底にへと沈没していく。
何だかんだで、生ける伝説である『四柱』を前にして、俺も俺なり緊張し、神経質になっていたのだと、今更になって気づいた。
場の空気にそぐわない妙なことばかし考えていたのも、精神の安

定化を量る自己防衛の一手段だったのかもしれない。
「……何にしても、疲れた」
誰もいない浴場で、俺の情けない吐露は空しくも残響した。

湯上りに軽く火照った身体に、浅黄色の浴衣をパジャマ代わりに着用した俺は、ゾンビ歩行で両手をだらしなく右へ左へと揺らしながら、自室兼寝室にへと辿り着いた。
しかし薄暗い部屋の中で、その身を月明かりで幻想的に照らし、蠱惑的に微笑みながら俺を待ち受けていたのは――――

どうやら俺自身のようだった。

第十一話　さよならイサナギ先生（後書き）

まーただよ。

エリアスの先祖のクヴェレさん。クヴェレはドイツ語で泉とか水源って意味です。一応説明。

キャラの名前に関してこだわりのありすぎる蝉です。メイド三人衆をただのメイド要員だなんて油断しちゃいかんです。ちゃんと主要キャラですよ、彼女たちも。

タイトルのセイスのなさには特に後悔してない。

第十二話　タイトルに意味なんてない

――なんてことはまるでなくて、結局は俺の見間違いであり、思い違いであり、愚にもつかない勘違いであるということは論ずるまでもなく明白であった。

俺は軽く肩を竦めつつも、壁際のスイッチを押して部屋の灯りをつけ、その人物と対面する。

「おかえり、エル」

「ただいま、親父殿」

そこにいたのは俺自身ではなく、等身大の姿見でもなく、正真正銘俺の娘であり、次女のエルが悠然と待ち構えていた。

「いつ帰ってきたんだよ、お前」

「たった今さ。城門も玄関もすっ飛ばして、文字通り親父のもとに直帰してきたんだよ、僕は」

さあ、可愛い愛娘のご帰還だよ、とエルは両手を広げて、

「親父ぃ、ハグしてっ」

「……」

仕方なく、俺は物言わずにエルを抱きしめた。

俺の鎖骨に額が当たる程度の身長。父親の俺にそっくりな髪色と髪型。唯一の相違点はと言えば、うなじから尻尾のように伸びる細長い編みこみヘアーであろうか。黒のハイネックのノースリーブに、これまた夜闇に溶け込むような暗色のベルボトムと、皮製のロングブーツを履いていた。

大体いつも同じような格好をしているのだが、俺的にはエデやシャンみたいにもっと着飾っておめかしをしてもいいのにな、とお節

介ながら思ってみたりする。
　何も一番最初に与えた衣服を、一貫して着用し続けなくてもいいのに、と。
「ムフフフぅ、親父成分……略して親分補給中」
「俺は充電器か」
「でも僕は、ケータイの充電器はさしっぱなしにするタイプだから、いつまでも末永くこうしていたい感じ」
「俺はとってもヤナ感じ」
　頃合を見計らって、俺はマジックテープの如く張り付いたエルをベリベリと引き剥がす。
「親父ぃーいけずぅー」
　家族サービス終了のお知らせする俺に向かって、エルはじたばたと悪足掻きを辛抱強く続けていたが、やがて諦めてくれたのか、渋々と離れてくれた。
「ふんっ、親父には娘に対するイタワリってもんがない」
「では娘よ、お前には父に対して恥じらいってもんがない」
「そこら辺は大丈夫さ。僕の代わりに花が勝手に恥らってくれるから」
「う、うまいだと!?」
　イヤ待て、よくよく考えればそんなにうまくもないぞ。
　何にせよ、座布団十枚には程遠い。
「……ああ、そうだエル。一週間ぶりに帰ってきたんだ。明日にでも挨拶代わりに、アキナスのところで検査してこいよ」
　俺が不意にアキナスの名を口にすると、途端にエルは苦虫を噛み砕いたかのような渋面を作った。
「えーヤダよ、あんなオバサンのとこなんて。明日は一日中親父にベトベターするって決めてんだから」
　口を三角に尖らせて講義するエルに、やれやれと俺は首を振った。
「エル、お前なぁ、自分の母親のことをオバサン呼ばわりするなっていつも耳タコで言ってんだろ」

エルはさらに加えて不機嫌そうに顔をしかめた。
「ふんっ、何さあんな年増女。生みの親ってだけで、『母親』ってわけじゃないだろ。僕には親父だけいればそれでいいの」
お袋なんていなかった、とエルは力強く拳を突き上げた。
何だかなあ、と俺は鬱積した思いで長い息を吐いた。
確かに、アキナスは母親という要素を欠片も持ち合わせてはいない。彼女は子供達を創り出した時点で役目は終えたとばかりに、育児放棄の四文字を大々的に張り出した女だ。エルに限らず、子供達全員が彼女に対してこれといった思い入れが大して無いのは致し方ないことなのかもしれない。
でもそんなのって少し悲しいんじゃないかな、と感じるのはきっと俺だけではないはず。
ない、はずなんだ。
「僕はずっと親父殿とベトベトンするんだー！」
「おい、進化してるぞ」
どれだけベタベタされるんだ、俺は。
まったく、と俺は頭を掻きながら、ハードな親子会話のせいで再び疲労困憊に追い込まれた身体を引きずり、ベッドの端によっこらしょと腰を下ろした。さりげなくエルもちょこんと俺の隣へ寄り添うように座った。
「……そして、何故ひっつく」
「理由はいらない。そこに愛があればこそだよ」
「ちょっと何言ってるか分からないすね」
「相即不離の関係ということで一つ」
「親子関係以下の何ものでもない」
「えへへへへ」
「はにかむな」
「げひひひひ」
「気色悪い笑い方をするな！」
「親父ラビュー」

「ああ、エル。俺もＬｉｋｅしてるぞ」
「そんな親父にストライク」
「空振り三振ベンチに帰れ」
ぐぐぐっ……と唇を突き出して迫ってくるエル。
ぎぎぎっ……と満面の笑みでそれを拒絶する俺。
「頑なだね、親父。娘のフレンチキスぐらい受け止めろよ」
「いや、絶対ディープだろそれ。舌うごめかしてんじゃん」
一進一退の攻防のすえ、どうにかエルとの乖離に成功した俺は、険しい目付きで娘を睨みつけた。
「……な、なんだよ、親父。そんな目で視姦されたら、ぞ、ゾクゾクしちゃうじゃないか」
いやんやん、と身をくねらすエル。俺はもはや冷めた目でしか彼女を見れなかった。あれ、俺の娘ってこんなに痛い子だったけ。
「……何でもいいからさ、エル。さっさと飯喰って風呂入って寝てくれ」
これ以上お前と会話を続けても不毛な時間が過ぎるだけだから、と俺は疲れていたせいか、少々毒気を孕んだ言葉でエルを追い返そうとした。
「……それよりも僕さ、喋りすぎたせいか何だか喉かわいちゃった。親父は？」
何をいきなり言い出すかと思えば、エルは弾みをつけていきなり立ち上がった。
「え？　ああ、うん、そういえば渇いたかも」
俺もエルの応対に振り回されて、少々飲み物が恋しくなっていたのも確か。水差しがそこら辺になかったかな、と俺が周囲をキョロキョロと探索していると、視界の隅でエルが何かごそごそと怪しい身動きをしていた。
「ん、何やってんだエル……あ、それそれ水差し。なんだよお前が持ってたのか……ん？」
黙ったまま、エルは作ったような微笑を浮かべて、その手に持っ

た水差しをゆっくりと引っくり返す。しかし、薬缶を手の平サイズにしたようなその水差しからは、一滴だってその内容物が床に零れることはなかった。

奇怪で意味不明なエルの行動に、俺はただ首を傾げて呆けていた。

もごもご、とエルが顎を動し――

「!?」

――と、認識した瞬間には、既に俺はエルの神速の捨て身タックルによって寝台に押し倒されていて、無理矢理に唇も奪われていた。エルの口内に含まれていた水差しの中身が、強制的に俺の喉の奥にへと流し込まれていく。じゅぽっ、じゃぷ、とかいう淫らでイヤらしい音が何度か響いてから、俺は歯茎や頬の内側をエルの舌によって無差別に蹂躙され、おまけに舌同士をネチャネチャと猥雑にも絡めとられた。永久かと思われたクソ長い濃厚な接吻がようやく終わりを告げ、解放された俺は涙目になって咽かえす。

「グォホッ、オッフェッ……エルっ、テメぇ……コノヤロやりやがったなっ」

娘にのしかかられ、完全にマウントポジションを取られた体勢ながらも、俺はめげずに眼光だけは鋭くさせた。だが、当の本人にはまるで効果はなく、ハアハアと威勢よく鼻息を荒げていた。

「……ッハ、ハァっ、ハア、エロい……エロいよ親父……これはね、僕をこんなにもムラムラさせる親父のエロさがいけないんだかんね。まったくさあ、はだけた浴衣の胸元とか、湯上りの乾ききってない濡れた髪とか、火照った体温とか、何もかもがエロ過ぎるよもう。そんでどれくらいエロいかって言うと、アニメ『学校の怪談』のエンディングくらいセクシィセクシィワーオ」

「比喩が絶望的に分かりにくいわ！　通じる奴にしか通じねえよ！」

よりにもよって俺のトラウマアニメで譬えるなしっ。

「でも、親父のエロさ加減にはもはや脱帽だね。ってかもう犯罪だよ、犯罪。だからさぁ、ねえ？　大人しくこの僕に逮捕されてみない？」

「娘が父親に向かって吐く台詞じゃねえ！」
しかもセンスがオッサン臭い！　そして痛い！
「いや実はさ、親父がハグしてくれた時点で既にアソコが濡れてたっていうか、漏れてたっていうか、失禁寸前だったっていうか……これはもう親父殿が責任とるしかないよね」
「濡れるとか生々しい表現すんな！　あと責任転嫁も甚だしい！」
自己責任で何とかしろ。
「なあ、親父……なあ、スケベしようやあ」
「ひぃぃいいいッキモいぃぃいい！　キモイキモイキモイキモイぃっ！」
その言葉だけでも果てしなく気持ち悪いのに、加えて実の娘に言われているという現実に、俺の心は今にも折れそうになる。
とか割と本気で怯えている間に、エルは俺の下半身に手を伸ばしていた。
「むふっ、むふふふふ、ほらほらぁ……そんなこと言ったって身体は正直な……は……ず？　あ、あれ……え、えぇ～ちょっとちょっとー親父殿ぉ、僕がこんなにも積極的にアピってんのに、下の竿が一向にフニャってんのはいったいどういう了見だい？」
「人の恥部を無許可でまさぐってる奴がほざいてんじゃねえ！」
ぐっと俺は膝をたたみ、渾身の蹴りをエルの土手っ腹に叩き込む。
容赦は皆無。手加減も絶無。ぐぶぉほっ、とエルは野太い声を出し、後ろへ一回転した後、しばし腹の痛みに悶え苦しんでいた。
「ボゥッホッ、グホッ……もう、親父ってば本当いけずだなぁ。近親相姦ぐらい寛容になりなよ。今時兄妹でも珍しくないんだから、父娘でやっても問題ないっしょ」
「むしろ問題しかねーよ」
「えー、手塚治虫だっていっぱい題材にしてたじゃん」
「お前が手塚さん語んじゃねぇよ！？」
俺の記憶で知っているだけだろが！
「そもそも、どこの世界に自分の娘を対象に欲情する父親がいるん

だよ」
仮にいたとしても、そいつはもはや父親ではない。だたの男だ。
「実の父親に劣情を催している娘ならここにいますが」
「じゃあお前もう俺の娘じゃねーよ」
「え？　一人の女として愛してくれるって？」
「なんと都合のいい耳をお持ちで！」
どんな飛躍的な解釈でその結論までに思い至った。
そうしてどうしてだか、エルはもみあげをクルクルと指に巻きつけ、チロッと舌先を覗かせて、悪戯っぽく微笑んだ。

＞i２３７１６―２０８８＜

だ、騙されんぞ。そんな可愛らしい顔したって、俺は断じて誤魔化されたりは、せん……せん、ぞ……クソッ。
「……チッ、この淫猥娘め。こ、今回だけは大目にみてやる。だが次にこんなことしてみろ。本気でお前の勘当を悩むからな」
「あ、悩んでくれるんだ」
ニコニコと屈託のない笑顔で俺を見つめるエルに、俺は乱心したように頭部を掻きむしった。
父親の俺が魔王だというのなら、娘のエルはまさに小悪魔である。

少頃。
「……それで、エルよ。頼んだ『おつかい』はどうなった？」
先程までの他人には絶対に見られたくはない痴情のアレコレに関しては、心のクローゼットの最奥にでも封印しておくことにしよう。

全ては遠い過去の出来事だったのだと、綺麗さっぱり洗い流すことにした俺は、エルに依頼していた重要案件である『おつかい』のことについて尋ねてみた。
「ふふん、ちゃーんと貰ってきたよん。ハーゼルバイスの国王から、お手紙の返事」
ピッ、と手品のように無手の中から一通の封書を出現させ、俺に差し出す。
「む、ごくろう」
ペリッ、と受け取った封筒の封じ蝋を取っ払い、俺はじっと書状の内容を黙読する。
「なるほど、な……やっぱり、そういうことか」
読み終わると同時に、俺は手紙をグシャグシャに丸め、一気に点火させて空中で灰に変えた。
「ねえ親父。その密書って、いったい何が書かれてたの？」
運び届けた僕としては少し気になるんだけど、とエルはベッドの上で俺の枕を抱えて、ゴロゴロと寝転びながら訊いてきた。
「なぁに。ちょっとした、嵐の予報さ」
俺は曖昧に苦笑を返しながら、その続きを述べた。
「それと急ではあるが、外に派遣してる奴らを一度呼び集めなきゃいけなくなった」
「え、それって……」
僅かながらも驚愕といった風に、エルは上体を起こした。
ああ、そうだ、と俺は頷いてから、ニヤリと口端を持ち上げる。
「『救難聖人』、全員召集だ」

ティルナノーグから遥か南西――商業と商人の国、『イベリタ』。
その国の某都市で、イベリタ人によく見られる浅黒い肌を惜しげもなく晒した、露出度の高い服を着込む二十歳前後の女性が、その若々しい美貌と、溌剌とした声を景気よく響かせていた。
「のぉオッちゃん、これは流石に高すぎやで。もっとまけてくれたて罰は当たらんと思うでホンマー。足下見過ぎちゃうの？　ぉお？」
とある屋敷の商談用の一室で、机を挟んで長椅子に座る二人が向かい合っていた。
「せ、せやかてな嬢ちゃん、こっちも商売やさかい……」
「じゃかあしいわボケェ！　おのれの懐具合なんぞ知ったこっちゃあらへんわ。次ガタガタぬかしやがったらシバキたおしたるさかいな」
物騒な口調の彼女――テレーニャ＝セルバンテスが怒鳴り散らす声量に、相対していた商人らしい小太りの中年は、ひぃっ、と短く悲鳴を上げた。テレーニャは軽く舌打ちをしながら、机の上に広げられた商品リストの紙に拳を乱暴に置いた。
「全部、半分の値で手を打ちまひょ」
「そ、そんな殺生なぁ」
「文句があんねんなら正直に言ってみぃ。おたくの商館丸ごと潰すで？」
と、貫禄が滲み出るすさまじい形相で脅しをかけるテレーニャの尻ポケットから、遠距離連絡用スフィアが青く輝きを放ち、光るメッセージを浮き上がらせた。
「んあぁ？　なんやこの忙しい時に……って王様からかいな。

ホンマ空気読まんやっちゃなー……あぁん、戻ってこいやと？　って舐めとんのかあのアホは！　だからバ閣下ちゅーねん！」

テレーニャは不敵な笑みを漏らして、「帰ったらシャレ抜きでどついたるでぇ、レイシぃ」と盛大に椅子を蹴った。

魔術と魔術師達の国――『カトレイ』。

背の高い木々が囲む深い森の奥、数え切れないほどの骸を転がす惨状の中心で、二人の修道女が硝煙に塗れていた。

「三十二、三十三……うしっ、あたいの方が多く仕留めたぜ。ってことで、今日の晩飯はお前持ちだからな、マリナ」

回転式連発拳銃（リボルバー）二丁を両手でくるくると回しながら、色々な箇所をワイルドにカットして、随分と改造を施されたオーダーメイドな修道服を着用しているシスター――『弾幕行進（ガンパレード）』ことアンナ＝シュヴェーゲルは、相方のもう一人に声をかけた。

「えー数は関係ないよ、数は。大物射殺した数ならアタシの方が多いもん。だから晩ご飯は姉さんが奢ってよ」

大口径施条銃（マスケット）一挺を肩に担ぎ、アンナとは違って正統派のシンプルな修道服を身にまとった『硝煙行軍（ブレットマーチ）』ことマリナ＝シュヴェーゲルは、静かに反駁した。

「……はっはー、妹よ。どうやらケツの穴を増やされたいらしいな」

「姉さんこそ、冗談は性格だけにしてよね。さっきも何度か姐さんの流れ弾がこっち飛んできたんだから」

形状的には大型の猿か、もしくはゴリラのような魔物の死体を踏み潰しながら、アンナが喚き散らし、マリナが冷静に反論するというやりとりがしばらく続いた。

「だいたい姉さんはいつもそう。数撃ちゃそのうち当たる戦法。本当それっていい加減にしてほしいのね」
「う、うるせーな。お前だってチンタラ照準なんか合わせてるからあたいがフォローに……んあ？　なんだスフィアが……」
ふと、吊り下げたベルトポーチの一箇所が光だし、アンナは妹との口論を一時中断して、その丸く滑らかな表面に浮き出た文字を目で追った。
「んー、もしかしてレイシさんから？」
勘のいいマリナが姉の肩越しに覗き込んだ。
「お、おう……今すぐ帰ってこい、だと……」
「ふうん、いったい何だろね――ん？　ンフフフー、どうしたのかなぁあ姉さぁん？　そんな嬉しそうにニヤついてえ」
「は、はぁあっ！？　に、ニヤついてなんかっ」
深紅の薔薇のような色合いに両頬を染めたアンナを、マリナは人の悪い顔で見つめた。
「嘘だねぇ、姉さん。そんな赤面で否定したって欠片の説得力ないよ」
「う、ううっせぇっばーか！　クソビッチ死ねばーか！」
血と臓物の臭気が漂う中、二人の修道女は口喧嘩のすえに撃ち合いの第二ラウンドを開始した。

現在は幾十もの貴族領主によってそれぞれに治められている――旧『ブルートアイゼン』帝国領。
そのとある辺境の田舎道にて、一人の大柄な体躯の牧師が手元で

光るスフィアを見据えていた。
「……これもまた、神のお導き」
一度中指で眼鏡のずれを直してから、牧師（クレリック）――アーヴィング＝グラスコーは再び歩き出す。右手に聖書。左手に首からかけたロザリオを手に。
全ては、主のお導きのままに。

ティルナノーグからさらに東北――雪と氷に覆われた国、『ミチノーク』。
とは言いつつも、季節はちょうど春であり、麗らかな日差しの下で雪解け水が大地を隅々まで潤していた。
「……店主、団子をもう一皿頼むでござる」
多くの旅人が往来を繰り返す市場町のさる団子屋で、淡い色合いで構成された団子をもしゃもしゃと咀嚼する彼女――シイナ＝ミクモはのほほんと団子の追加注文をしていた。艶やかな水色の髪を髷のように結い上げて、左目はワングレスの前髪によって隠れている。腰には二本の刀を差し、正面の大通りで行き交う人の波をぼんやりと目に映していた。
「む……茶が、うまい」
ちなみにこの時点で既に澪士からのメッセージをスフィアは受信していたのだが、その事実に彼女が気づくのは、それから二日後のことである。

雲すらも貫く深山幽谷。仙人の一人や二人住居を構えていてもおかしくはないような、中国の三神山にも引けを取らない霧深い神秘的な山並み。どこの国にも属していない、遥か悠久の時を感じさせる風光明媚なその地で、極東地域特有の漆黒の瞳に、烏羽色の髪を後ろで束ねている青年――ヤン＝ハオは眼帯で隠れた隻眼を、手の平で発光するスフィアに向ける。

「レイ氏が召集をかけるとは、これはまた何かの一大事か……いずれにせよ、某（それがし）も早急に参らねば」

手荷物を背負い直し、ヤンハオは目の眩むような高さの渓谷から、助走をつけて真っ逆さまに飛び降りた。

大陸最南端に位置し、温暖な気候に豊かな土壌、加えてあらゆる交易の中継地点でもあるリブラル王国。

そのリブラル王国首都にて、数ある宿場の内、それなりの快適さを誇る宿屋の一室。ワカメのようにぺったりとした髪型の男――ファーブルが、スフィアを握りしめながら、窓際で煙草をふかしている天然パーマの男――ルイド＝エミリオンに旅仕度をするよう急き立てた。

「あぁん？　なんでだよ、ファーブル。まさか旅費がもう底を尽い

たってダリィこと言うんじゃないよな？」
　ルパン体型をそのまま体現したかのような体付きのルイドが、咥えたタバコを携帯灰皿に押しつける。
「……いんや。旅費ならまだオレっち懐にたんまりとあるよ。単に王様から呼び出しくらったってだけの話」
「はぁ？　何で俺達だけ……」
「全員にだよ。『救難聖人』全員に召集がかかった」
　くすんだような灰色を帯びた鬱陶しいほどの量の髪をボリボリと爪を立てながら、ファーブルは淡々と言った。
「……全員召集って、おいおい随分とダリィじゃねえかそりゃ。いったい何だってんだ」
「さてね。理由は特に明記されてなかったけど」
　黙々と荷物をまとめ始めているファーブルとは逆に、ルイドは至極面倒臭そうに寝台にへと倒れこんだ。
「あーなんてクソッたれな展開だなおい」
　ダリィな畜生っ、とルイドは虚空に向かって吐き捨てるようにぼやいた。

第十二話　タイトルに意味なんてない（後書き）

【畏憚の魔王】偏

完

ということで、この章終わりました。お疲れ様です。
では、せっかくなのでちょっとした反省会でも開催しみます。

終わる終わる詐欺を経て、どうにも続いてしまったこの魔王。新しい設定ばっかで資料読み漁って、描写は足りてるのか、キャラは活きているか、誤字脱字はないか、と右往左往してばかりおりました。でも実際書いてみて、本当にこれでいいのか蝉は判断がつきません。やはりそこは読者様が一人一人の意見に頼らざるをえないのですが……。
それにしてもうざったいぐらいキャラ増えましたね。さて、どれか気になる子はいましたでしょうか。

登場人物一覧　8月12日分更新。（前書き）

キャラ数が圧倒的に多くなるので、一応。あとネタバレになりそうなので、多く書きませんんです。すみません。主要な新キャラ出すたびに更新してきます。初見の方はネタバレになるので、みないほうが無難かと。

んー、もっとシンプルにしたほうがいいのかな。

登場人物一覧　8月12日分更新。

【鯨木澪士（いさなぎれいし）】

《異形》。人間失敗。場合都合によって便宜上、レイシ＝イサナギ＝クロノーベルとも名乗る。そしてこの物語の主人公……らしい。イリアと過ごしてきた日々から約半世紀を経て、現在では一国の王。あといつの間にか四児の父。

子供組

【ユート】

長男。『魔手』をその身に宿す。趣味は手芸。父上至上主義。父上とは、親子とか性別の垣根を越えた関係を熱烈所望。

【エデ】

長女。『魔眼』をその身に宿す。専門は視察。ファザコン末期。父様とわたくし以外、出来れば全員死んでくれないかしら。

【エル】

次女。『××』をその身に宿す。特技は歌唱。インセストタブーの筆頭。
親父とは爛れた淫乱生活を送ってみたい。

【シャン】

三女。『魔食』をその身に宿す。一日は五食。エレクトラコンプレックスの象徴。
パパはあたしの嫁。異論は認めない。

部下組

【アイギー＝オーガスタス】

『軍神』。魔王の右腕。近衛兵団総隊長。二十七歳。『狂鬼（ベルセルク）』の一族。癖っ毛な赤褐色の長髪に、軍服姿という凛々しいお方。澪士への愚痴が絶えない。

【マキ＝ヴィハーベスト】

『智将』。魔王の左腕。王立魔術師小隊総司令。二十六歳。白い短髪が特徴。アイギーとは犬猿のトムとジェリー。

メイド組

【シュネー】

『白雪姫（シュネーウィットンヘン）』。『毒手』。唯一メイド服を着用する人物。あざとい。下ネタ担当。魔王の目覚まし係り。両手に身につけている純白のロングローブは、風呂の時でも外さない。

【サン】

『灰かぶり（サンドリヨン）』。金髪の三つ網と翡翠の瞳をしている。メイドという

よりも掃除婦。純粋な攻撃力だけでいうなら最強。所有武器は『鉄(トー)の靴(テンタンツ)』。

【ロート】

『赤頭巾(ロートケープヒェン)』。種族は人狼(ヴェアウルフ)。赤いフードをいつでも常備している。覚醒時には性格が一変する。

その他

【スー】

《怪物》。本名はスーフェミオット。忌避の体現者。とりあえず幼女。澪士と張り合える数少ない存在。

【ピノ】

城の地下で技術開発を担当している少女。モスグリーンの髪に、くすんだ灰色のつなぎを着ている。右腕義手と左脚義足。基本的に引きこもり。「～であります」という軍人みたいな口調をする。何か理由でもあるのかしら。

【クリュー＝サンテムム】

王立魔術師小隊副指令。魔城に咲く一輪の菊の花とは彼女のこと。マキの後輩。現在はマキの代理で、『月刊ティルナノーグ』の編集長を任されている。ピノに作ってもらったカメラやボイスレコーダーを駆使して、色々と自由奔放にリポート&取材中。そして腐ってやがる、遅すぎたんだ。

【フィリ】

白銀の髪と、古臭い言い回しの美幼女。一人称は『我』。スーに続いて、澪士とはガチでタメを張れる数少ない存在。その正体は白聖龍『アトモスフィリオン』。創生の頃より生きる最古の龍。

【トーマ＝アキナス】

『天使博士（ドクターエンジェル）』。ソバージュのかかったくすんだ赤毛に、澪士に負けて劣らずの死んだ目をしている。数少ない眼鏡キャラ。城の地下で魔術研究に没頭するアラサー。ユート、エデ、エル、シャンの『母親』。澪士とは夫婦関係……でもない。合言葉は、アキナスさんマジ天使。作者的には彼女がヒロインでもいいと思ってる。泣きボクロが異様にセクシー。

【グリンダ＝ジェラリッティ】

『空間の魔女』。御歳は二百年ちょい。前章から唯一の引継ぎキャラ。間延びした口調。豊かに波打つブロンド。トンガリ帽子にいかにもな魔女っぽい服装。キャラの中で澪士との付き合いは一番長い。おっぱい要員。

【テレーニャ＝セルバンテス】

『隷属の魔女』。グリンダと同じく、大陸七代魔女の一人。イベリ

タ出身。関西弁。褐色肌に、象牙色の短髪。澪士との関係はボケとツッコミ。自慢のクビレは堂々と晒すべし。

【セシリア＝メイザース】

『書架の魔女』。種族はエルフ。色々と物静かな人。濃緑色の長髪。眼鏡。城にある図書館で司書をしてます。

【アンナ＝シュヴェーゲル】

『弾幕行進（ガンパレード）』。双子姉。ツン……いや、ガンデレ。金髪碧眼。豆腐メンタル。色々と報われない。

【マリナ＝シュヴェーゲル】

『硝煙行軍（ブレットマーチ）』。双子妹。趣味は姉イジリと、姉の恋愛模様を眺めて楽しむこと。腹黒だが、何だかんだいってシスコン。

【テオドール＝エスコフィエ】

ボンジュール。城の厨房をほぼ一人で担う料理長。ライトグリーンの刈り上げ頭。澪士とは、スイーツの共同開発に従事している。城下ではスイーツ専門店の喫茶『フロライン』を経営。色気がぱない。ウホッ、イイ男。

【ルイド＝シュワルツ】

天然茶髪パーマ。テオドールとは同年代。種族は人間。四十代のおっさん。ヒョロッヒョロッのルパン体型。武器は爆弾。趣味は爆弾。特技も爆弾。とにかく爆弾。破壊力だけなら彼の右にでるもの

はいない。口癖は「ダリィ」。

【ヤン＝ハオ】

『龍殺し（ゲオルギウス）』。極東出身。一人称は『某（それがし）』。黒髪黒目。長い髪は後ろで一本にまとめており、右目は眼帯で覆われている。かつては『龍守り（ドラゴンキーパー）』でもあった。物腰は謙虚で紳士的だが、公式ロリコン。

【シイナ＝ミクモ】

侍。三十路手前の二十九歳。北東の『ミチノーク』出身。一人称は『拙者』。女だよ。水色の髪に、氷のような瞳。まげのように髪は結い上げてある。二十年前、ひょんなことから澪士の従者となる。いつぞや前に『氷斬のスイ』って登場したけど、なんか親戚っぽい気がする。

【ファブルート＝デランブル】

『蟲』を扱う『蠱術師（ココペリ）』一族の末裔。その血筋は既に絶えてしまったものとされていた。灰色のワカメ髪。身体に七百八十万種、合計おおよそ五千八百万匹ほどの蟲を飼っている、らしい。

まったく、虫唾が走るさね。

登場人物一覧　8月12日分更新。（後書き）

いつかイラストで相関図描きたい。

第十三話　軍神と智将（前書き）

「おはようこんにちはこんばんは！　繋げてみましてオハコンバンチンハ！　どもどもっ！　初めまして人は初めまして。『月刊ティルナノーグ』の編集部副部長を一任されております、クリュー＝サンテムムです。魔城に咲く一輪の菊の花とは、何を隠そうあたしのことでございますよ。

さあ今月の特集はずばり！　このティルナノーグの王。つまるところレイシ様特集でお送りしたいと思います。実は今月、編集部部長であるところの『智将』なんて大仰な名前で呼ばれてたりするマキ先輩が非常に多忙であるということで、このあたしめにお役が…というかお鉢が回ってきたということなんですが、まあ、好き勝手できるというんで、言葉尻通りに好き勝手やらせて貰いますけど。うっひょひょ。

さて、来年で建国二十年を迎えるこのティルナノーグ。その国の長たるレイシ様。その神秘のベールで包まれた素顔をどんどん晒して暴いて引ん剥いていきましょっいな。それには、まず外堀からザクザクと埋めていかねばなりません。はいはい、記者の七つ道具でありますメモ帳をぺらぺら、と……ほう、今日はちょうどアイギーさんに午後から少しお暇があるということなので、さっそく窺ってみたいと思います。取材とはいついかなる時でも突撃でなければなりません。ぶっちゃけアポとってないんですけど、大丈夫でしょうか？　まあ、なんとかなるかな。いざとなればマキ先輩に全ての責任をなすりつけることにしときましょう。

えーと……あ、そうそう。次回のインタビュー先は、『トーマ＝アキナス』さんを予定しているのですが、正直あたしとしても不安を隠しきれません。あたしが認知している限りの情報では、あのユート様、エデ様、エル様、シャン様の『母親』ということらしいのですがぁ……つまりレイシ様とは夫婦関係……でもないらしいんで

すよ、これが。ふーむ、何だかんだで女性との噂話が絶えない色男ですからね、レイシ様は。きっと複雑な事情がおありなのでしょう。

何にせよ気を取り直して、これからアイギーさんのとこへ直撃でもしにいきますか！」

第十三話　軍神と智将

＞ｉ２４２５２―２０８８＜

『軍神』ことアイギー＝オーガスタスの朝は早い。太陽が顔を覗かせてから一時間もしないうちに起床する。もう何年も前から継続している習慣で、形成された体内時計が否が応でも自分を起こしてくれるのだ。

アイギーは毛布を跳ね除けてベッドから降り、部屋に備え付けられている洗面台で乾いた口内をすすぎ、顔を洗う。そして今日もめげずに鏡と睨めっこしながら自身の癖っ毛と対峙し、悪戦苦闘のすえいつものように諦めて白旗をあげる。これもまた毎日の習慣。負けず嫌いな性分であるが故、飽きもせずに続けているくだらない悪足掻き。

「……はあ」

シュネーやグリンダさんのようなサラサラとした髪質が羨ましい、とアイギーは溜息と共に常々思う。自分もあんな風なストレートヘアーになれたらな、と憧憬の念を抱かざるを得ない。

――髪のキレイな女の子は、好きかな。

とは、いつだったかレイシが漏らしていた言葉だ。いったいどんな場面だったかは覚えていないが、アイギーは密かにそのレイシの発言を胸にしまい、こつこつと髪を伸ばし始めたのだった。

しかし結果はいかんせん。生来の癖毛は肩甲骨に被さる辺りにな

ってから、四方八方に重力への反逆を開始して、もはや自分でも手に負えなくなっていった。

「……枝毛、発見」

もみあげの先端部分が見事に裂けていた。アイギーはさらにも増して憂鬱に気落ちする――――なんてことはしていられない。

ぱんぱんっ、と両手で頬を打ち、気合を注入する。

「さあ、今日もがんばろうか」

こめかみから斜め上に生える二本の角を撫でながら、喝ッ、とアイギーは自分に言い聞かせた。

『智将』ことマキ＝ヴィハーベストの朝の寝覚めは悪い。原因を挙げるとすれば、城全体が消灯した後でも、せっせと自室で残業に身をやつしていたせいであろう。イズニィルとの和合会談を設けるための書状や、その他諸々の文書を仕上げていたのだ。睡眠時間が果てしなく足りない。それでも明日は平等にやってくる。

あー世界よ今すぐ滅びろ、とマキは窓から差し込む朝日を呪いつつも渋々と起き上がる。早々に身支度を済ましてから、部屋を出て今朝の糧を摂取しにいく。

この城での食事について詳しく述べるとするなら、普段は他の武官や文官達と一緒に大食堂を利用しているのだが、朝食だけに限っては専用のダイニングルームが用意されている。最初の頃は三食全てそのダイニングルームで食事を済ましていたマキであったが、現在では魔王や重鎮クラスの人物も含めて、昼食と夕食は一階の大食堂で済ましていた。

他国では決してありえない光景なのであろう。よもや一国の王が、下々の者達とフォークやナイフ、それに談笑を交えている様子とい

うのは。
果たしてマキが向かったその部屋には、既にアイギーの姿があった。
「……よぉ」
と目も合わさずに声を掛ける。
「ああ……」
という何とも素っ気ない挨拶をかわしてから、マキは憮然とした態度で席に着いた。するとすかさず部屋の隅で待機していたシュネーが目の前に料理の品々を並べる。シュネーだけがいるところみると、サンとロートの二人は大食堂の方に回っているのだろう。
いただきます、とマキはパンかごの中からバターロールを一つ掴み、噛りつく。
「シュネー、まだレイシ様は眠ってらっしゃるのか」
「ええ、これから起こしに参りますが」
「そうか、なるたけ早くに頼む」
「はい、熟知しております」
淡々とシュネーは頷き、スカートのフリルをはためかせて静々と退室していった。指示された通りに、澪士の睡眠を妨げに向かったものと思われる。
「……」
「……」
シーン、と室内に満ちる重苦しい沈黙。互いに黙々とパンを千切り、珈琲を飲み干し、ベーコンエッグを引き裂いていく。
しかし、そこでふと思い出したようにマキが白髪の頭を持ち上げた。
「アイギー」
「なんだ」
「今日、俺の部下がお前のとこに行くかもしれないから、よろしく」
「部下？」
「クリューだ」

「……ああ、あの元気っ娘か」
「そう。その元気っ娘が向かうと思うから、適当に相手してやってくれ」
「分かったが……それだけか？」
「ああ、それだけ」
「ふうん」
ごちそうさま、とアイギーは席を立った。

『畏憚』ことこの俺、鯨木澪士の朝は騒がしい。
「おはよっ、親父殿（おやじどの）」
「……」
ぱちり、と両眼の仕切りを取っ払ってみると、娘のエルが当然のように俺の隣で添い寝を果たしていたという、理解不能で予測不可能なワンシーンに自分は直面していた。
「むふふぅ親父、おはようのちゅー……」
とりあえず殴った。
「お、おう……実の娘にも容赦ないぜ親父ぃ……でもそこに痺れる憧れるぅ！」
殴られた鼻頭を押さえながらエルは、俺に向かって笑顔のサムズアップ。
「なあ、俺の記憶が正しければ、昨夜は確かにお前を部屋から追い出した気がするんだが」
最後までイヤイヤと駄々をこねていたエルであったが、きちんと俺は寝室から締め出したはずだ。
「人肌が恋しくて……というか親父のことが愛おしくてね。こっそり潜り込んでおいたのさ！」

「オーケー理由になってない」
「あ、でも、イタズラとか全然しなかったよ（したかったけど）。故に、そんな健気にも悶々と一夜を耐え抜いた娘をむしろ褒めて欲しいね」
「おい、一瞬心の《声》が聞こえたぞ。つーかね、なんでエルは服を着ていないのかな？　お父さんそこだけが不思議」
　そうなのだ。現在のエルは、衣服という人類の偉大な発明を一枚たりとも着用しておらず、生まれたばかりの赤子も同然の格好をしているのであった。どこの裸族だ。何たるキャストオフか。昨日の一件もあるというのに、微塵の反省も感じられない。これはいい加減、親として娘に厳戒な処罰を下さねばならぬと、俺は静かに決断する。
　大した凹凸もない胸元にシーツを寄せて、軽く肩を竦めて笑ってみせたエルは、
「昨夜は、激しかったね……」
　お、や、じ、ど、の――と色っぽく唇に人差し指をあてる。
「……いや、いやいやいやいやいや！　なに無理矢理そういう雰囲気みたいなノリに持ち込もうとしてんの!?　騙されないし流されないし誤魔化されないからな！」
「事実とは、得てしてその場の雰囲気で完成されるものである」
「名言っぽく言っても駄目だから！」
　しかしそこで――ガチャリ、と。
「主（あるじ）、起きてらっしゃいますか――」
　何とも果てしなく間の悪いことに、この城で一、二の面倒臭さを争う人物がご到着しやがった。
「……ワォ」
　おい、シュネー。何が『ワォ』なんだ。
　はい、この状況にですね、と即座に自問自答。
「やっほー、シュネーちん。ついに僕は親父と禁断の一線を越えちゃったんだぜっ」

「お前はちょっと黙ってろなんだぜ！」

俺は自身の『影』を三次元にへと具現化させ、エルの身体全体を包み込むかのように展開させる。俺の『影』で完全な簀巻き状態にされたエルは、くねくねと芋虫の如くもがき、必死の抵抗を試みていたが、俺が般若と化した強面で一睨みすると、怯えたように大人しくなった。

「あ、あのなシュネー、ここは四階だが、これは誤解だ。この淫乱娘との間には何ら疚しいこともヤラシイこともないからなっ。俺は至って穢れを知らない健全健常健康児だし、お前が考えているようなこと決して……あ、えと、シュ、シュネー？」

入り口の前でただ暗く視線を落としている彼女は、右手をギュッと胸の辺りで握り締めていた。

「――――主よ」

と、わなわなと震えた拳を振るい、シュネーは口を開く。

上気した頬で、鼻息を荒くし、近年稀にみるほどに興奮した様子で、声高らかに。

「どうして私めも混ぜてくれなかったのですか！」

彼女の誤解を解消するまでに、計一時間を消費。

次女のお仕置きについては、『庭先に埋める』の刑にて判決が下り、実刑に処すまでに約五分が経過。

いつまで寝ているつもりですか！　とあらぬ非難をマキやアイギーから受けるであろう瞬間まで、あと十分前後と推測。

いつにも増して、いつも通りの朝だなー、と俺が遠い目をするまで、残り十三秒――――

昼少し前。

主君である澪士に問答無用の叱咤を飛ばしてから、アイギーは城の敷地内にある闘技場で近衛兵団隊員の訓練に勤しんでいた。

闘技場――その名の通り、空から覗けば、ほぼ円形に沿った外観をしており、スタンドなどの観客席もあったりして、まんま古代ローマのコロシアムを髣髴とさせた。その中で、おおよそ三百名前後の兵士達が二人組みとなって、互いに両刃の剣を持ち、文字通り鎬を削っての打ち合いをしていた。

とは言いつつも、兵士達が所有している剣の全てには『無刃（ブレイドコーティング）』の魔術が施されており、その刃が実際に肉体を切り裂くようなことはなかったが。

それでも、鍛錬に励む兵士達の眼差しは真剣そのものであり、それもそのはず、例え僅かでも気を緩めて、おざなりな稽古をしようものなら、鬼軍曹ことアイギー＝オーガスタスの怒号がすかさず降り注ぐからである。

その後に待ち受けている残酷なペナルティも、兵士達を恐怖に震え上がらせ、是非もなくヤル気に満ちさせるには十分だった。

「そこぉッ！　何だその打ち合いは！　そんな非力な一撃で戦場に三分も立っていられると思うな！」

ビリビリィッ、と闘技場全体に響き渡るかのような一声。指摘された者は勿論だが、周囲の者達にも電流のように緊張が走り、打ち合いの掛け声や、振り回される剣にもまた一段と勢いが増す。

腕を組みながら兵達の練兵を監督していたアイギーであったが、しばらくして、ふと闘技場の出入り口から、ぞろぞろと五十人前後のローブ姿の一団が入場してきた。

先頭を仕切っていたのは、魔術礼装に身を包んだマキである。デザイン的には、白を基調としたトレンチコートのようで、金色の胡桃ボタンでしっかりと前が留められており、一見暑苦しそうにも思えるが、スラッとした細身のマキは至って涼しそうな顔で着こなし

ていた。
　アイギーは眉をひそめながら、その集団に近づくと、当然の如くマキにガンをたれた。
「これは王立魔術師小隊総司令殿、いったいどのような御用ですかな」
「いやなに、単に闘技場の利用交替をしにきただけですよ、近衛兵団総隊長殿」
「ほお、それはそれは。もうそんな時間になっていましたか、魔術師小隊白髪モヤシ殿」
「ええ、その筋肉質な脳味噌でも、せめて時間ぐらいは気にしてほしいものですな、近衛兵団筋肉バカ殿」
「いやいや、本当に申し訳ない。そうそう交替といえば、お前の額も日に日に後退しているようだが大丈夫か、ハゲ司令」
「テメーに心配されるまでもなく大丈夫だ問題ないってーの。つーかテメェが老けてろよクソ鬼」
「お前が先に禿げろメガネ」
「メガネかけてねーし」
　そんな罵り合いを通過儀礼のように経てから、二人は相互に舌打ちだけを響かせて、すれ違っていく。
「では、各員すみやかに移動しろ。少し休憩を挟んでから、次に城壁に沿ってのジョグを二十周だ」
　アイギーは兵士全員の顔を絶望色に染める号令をかける。うぃーす、へーい、などの返事をしながら、隊員たちは這々の体で亡者のように動き始めた。
「あーあー無駄なしごきで痛めつけちゃってよー。ヘボ教官のせいで下の奴らもカワイソウだなー」
「なん、だと？」
　明らかにアイギーの耳にも聞こえるような声で、マキは言った。
「今時スパルタなんて、やり方が一々古臭ぇんだよ。無理せず楽せず効率的に挑めば、最善最良の結果が得られる。そんな理屈も分か

らねえテメーの頭が哀れだし、それに従っている部下もカワイそうだって言ってんだよ」

ピクピクと引き攣った笑みと青筋とを浮かべアイギーは、帯剣していた二本の内の一本をマキに投げつけた。

パシッ、と眼前にまで投擲されたサーベルを、マキは難なく掴み取る。

「そこまで言うのなら、その最善最良の結果とやらを私に見せてみろ。さあ、鞘を抜け！」

アイギーはもう一本のサーベルを抜刀し、そのまま突きつける。しばし黙考していたマキであったが、おもむろに受け取った剣を近くにいた部下の一人にたくした。

「？　何のつもりだ。はっ、まさか怖気づいて勝負を辞退するなんてことじゃないだろうな？」

「お前程度の相手に得物なんざ必要ねーよ。無手で十分だ」

マキは着ていたコートを脱ぎ捨て、黒のハイネックノースリーブ姿となる。

「ほお？」

上等だ、と言わんばかりにアイギーも締めていたネクタイをしゅるりと取り外し、収めたサーベルを帯刀用のベルトごと、マキと同じく部下に預けた。

ざわざわ、と空気を呼んだ周囲が、端っこに寄って中央に大きな空間を作った。

「ふんっ、魔術もなしに私と渡り合えると思っているのか？」

「はんっ、レイシ様からの免許皆伝なら、テメーよりもずっと早かったぜ？」

そう言ってマキは片足を開き、右手を脇に引いて、左手は前に突き出すような姿勢をとった。

裏八式、柔の型――流の構え。

「いったいいつの話をしている。免許皆伝なら私だってとっくに貰ったわ」

正面を向き、軽くがにまた気味の体勢をとり、浅く息を吐きながら両の拳を腰に添える。
裏八式、剛の型――堅の構え。
「今日こそ決着つけてやるよ、鬼ババア」
「ほざけ白髪ジジイが！」
その台詞をゴングの合図に、二人は激しくぶつかり合った。

一方その頃。
父親の寝室に忍び込み、あまつさえ肉体関係まで迫ったエルは、城の西側にある庭園に埋められていた。ちらほらと自生する樹木や低木にまぎれ、エルは首だけを地上に露出させて、ただひたすらに謝罪と救助を叫んでいた。
「おーい親父ぃー、悪かったよー。娘のちょっとしたお茶目じゃんかー、そんなマジで埋めることないじゃんよー。ちょっとー親父殿ぉー……おーい」
だが、次第に助けと許しを求めるのも何だか飽きてきた。まあ、自身の『能力』を使えば脱出できないこともないが、父親の許可なしにこの『能力』を行使すれば、さらにも加えて大目玉を食らうのは自明の理。兄や姉と違って、基本スペックはそこらの少女とさして変わりのないエルは、さてどうしたものか、と考えを巡らせた。
むーん。
と。
「見慣れた生首が転がっていると思ったら、やはりエルだったか」
「おお、兄貴！」
撫でつけた黒髪に、シックな燕尾服という出で立ちのユートが、

エルの頭部を優雅な足取りで通り過ぎていった。
通り過ぎていった。
「え、ちょっ、スルーですか兄貴！　可愛い妹が絶賛埋まってるというのに普通にスルーですか！　もう少しリアクションが欲しいところですよここ！」
眉をひそめながら振り返ったユートは、至極煩わしそうに戻ってきて、エルの前で耳を傾けるようにしゃがんだ。
「で、何の用だ。私は忙しいのだ」
「そんな邪険にしないでよ兄貴ぃ。僕も困ってるんだ。親父を怒らせちゃってさ、こんな有様で……」
「なるほど、それは完璧完全徹頭徹尾父上を怒らせたお前が悪い」
「僕の言い分は？」
「あるわけないだろ」
「さいですか」
父上の意思は絶対だ、とユートは立ち上がり、これで要は済んだとばかりに退散しようとした。
「あ、兄貴ぃ、そんな助けてくれないのかよー」
「……」
エルの泣き言に、ユートはふとしたように立ち止まり、今一度エルのもとに引き返してきた。
「……あ、あはは！　さっすが長男様だぜぃ。そうだよね、可愛い妹がこんな悲惨な状態だってのに、むざむざと『手』を差し伸べない兄なんているわけがはむがぁっ！？」
ズボッ、とユートはエルの口内に木の枝を勢いよく突っ込んだ。
「エルよ、この私も決して悪魔ではない。父上を怒らせたお前の自業自得の結果であろうが、情け深い兄は、せめてもの慈悲としてこの木の枝をお前に与えよう」
じゃあ、あとは自分でどうにかしろ、とユートは優しい微笑みを湛えながら、颯爽とエルの視界から消えていった。
「――ま、ま、ま待て待て待て待てぇやクソ兄貴ぃぃぃぃぃぃ

いい！　ってかこの構図どっかで見たことあるぞおい！？　ほら、ジャッキーが出てくる映画のやつで！　ほら、あれ、なんだっけ！？」

ああ思い出せないや、とエルはくわえた木の枝をペッと吐き捨てた。

「あ、どもすみません。ウチの司令がなんか、お宅の隊長さんに喧嘩売っちゃたみたいで」「あ、いえいえ、そんなことは……というか、あの二人はどうにも犬猿の仲ですし、まあ、お約束というか、お決まりの展開ですしね」「そうそう。ぶっちゃけマキ司令が隊長の相手をしてくれるから、予定よりもこっちは長めに休憩とれますしね、むしろ感謝してるくらいですもん」「いやぁ、アイギー隊長のシゴキはすさまじいですからね。マキ司令の訓練内容もなかなかハードだと思うのですが、近衛兵団の方々と比べて、魔術師の我々はまったく頭が上がりませんです」「そんなご謙遜を」「いやいや」「わっ、あの一撃をかわしたよマキ指令……」「流石はマキ司令ですね。隊長の動きについていけるなんて……え、今、アイギー隊長の顎にもろ入りましたか？」「うおお、アイギー隊長が押されてるのか……まさか鬼族の身体能力についていけるなんて……」「いえ、マキ司令はちゃっかりと肉体強化の魔術を使ってますよ。見たところ、素早さと動体視力だけのようですが」「あー、駄目だ。あの二人の動き、残像でしか追えないわ」「え、あれ残像だったの？　わー、じゃあぼくなんかその残像すら追えてませんでしたよ」「隊長の攻撃は全てが一撃必殺だから、一発でもマキ司令に入れば即座に勝敗はつく」「でも司令は、アイギー隊長の攻撃を流すようにいな

し続け、反撃の隙を窺う戦法をとっている」「ええ、でも相変わらずいい勝負してますね、あの二人。一進一退って感じで」「息が合ってるというか」「本当は仲いいんじゃないの」「ま、喧嘩するほど何とやらと言いますし」「実際あの二人、この国の建国時代からの付き合いらしいですよ」「ああ、それなら自分も知ってますよ。なんでもその頃からあんな調子だったって」

「「「「へー」」」」

「そーそー、あいつらってば初対面の時から反りが合わなくてなぁ。見ている分には楽しいんだが、この歳になっても俺と同じである意味成長しないよな、マキもアイギーも」

「「「「へー……え？」」」」

「んまぁ、そろそろ止めにはいるかね」

「「「「陛下！？」」」」

そんな隊員達の驚愕する声を背景に、俺はマキとアイギーのもとへ歩き出しながら、パンパンッ、と手を打った。

「はーい、そこまでっ」

瞬間、クロスカウンター寸前のような形で停止した二人の周りで、砂塵と空気圧のようなものが巻き起こる。

「レイシ様、どうしてここに？」

「仕事は全部終わったんすか」

「終わったからここにいんの。うるさいお前らの姿がみえねーからさ、多分ここかなって思って見物しにきたら――なに二人で楽しいことやってんだよ」

ニヤニヤと俺が口元を緩めながら言うと、二人は途端にムキになって、

「違いますよ、レイシ様。この女、何でもかんでも厳しくやりゃあいいと思ってやがって」

「なぁっ！？　先にふっかけてきた奴の言葉がそれか！」

あーはいはい、と俺はマキとアイギーを宥めつつ、こう提案してみる。

「よぉし、ならここは、俺が久々に手解きでもしてやろうじゃないか。そんなに仲良く喧嘩するほどの体力があり余ってんならよ」

何が『ならここは』なのかはさておき。

本心を漏らせば、二人の戦闘を観戦していたら何となく身体がウズウズしてきたのが正直なところ。つまり、俺も身体を動かして息抜きしたいなーというのが本音なのです。

「レイシ様……自分のお歳を考えてください」

「えー、大丈夫ですか。途中で腰とか痛めないでくださいよ？」

「かっちーん」

トサカにきたぜこの野郎。ここできてご老体扱いですか、ざけんなー。

「うぉおしっ、その発言を後悔の大航海に出航させてやんぜ（？）。あーこうなったら本気だすかんね。手加減なんてしてやねー」

と、俺は大人気なくもドス黒いオーラを滲み出しながら、あまねく全身の筋肉を脱力させ、ダラリと両腕を地面に下ろした。『裏八式』という師匠直伝の特異で特殊な武術体系において、滅多なことではあまり用いることのないバトルスタイルを、俺はあえて選択した。

感情が抜け落ち、表情が消えていくのを実感する。それが、この戦闘様式における特徴だった。喜怒哀楽の全てを排他し、感情回路と思考回路のケーブルが自動的に切断されるという、一種の禁じ手である。師匠も、

『その型と構えはあまり多用しないほうがいいよ。その内、オンとオフのスイッチがごちゃごちゃになってくるかもだからね』

といちいち念を押して忠告してきたものだ。

まあ、とにもかくにも。

裏八式、絶の型――無の構え。

「……さぁ……どこからでも、かかってこいよ……」

俺は光を失った死人のような目で、二人を気だるげに見据えた。

「エッルエルにしーてやんよー」

もう長いこと埋没を続けているエルは、大いに暇を持て余していた。けれどもうっかりと退屈に殺されぬよう、自作の替え歌メドレーを熱唱して時間を潰していた。

「おーやーじーの寝巻きをさー、剥いでみーたいとぉー思うーうぅー、アァーア嫌がる親父を犯してみたいっ♪　おーやーじのベッドにさぁ～飛び込んでみたーらぁーそしたらーアアァ、すーべてがうまくいくような気がしてぇっ――――あ、やべ、ちょっと疼いてきちゃった」

無駄に透きとおった美声を披露したエルは、むーん、と身動きの出来ないこの状況を改めてもどかしく思った。しかしてこの次女は、反省という言葉を果たして知っているのだろうか。いや知らない。

それればかりか、もはや次の算段を画策しているくらいであった。

「……あら、見覚えのある生首が歌っていると思ったら、やっぱりエルでしたの」

そこへジョウロを手に持った長女のエデが、不思議そうに首を傾げながら、頭部だけのエルを眺めていた。

「おぉ姉貴！　ちょうどいいところに」

渡りに船と言わんばかりに、すかさずエルは姉を呼び止めた。

「……」

スゥ、とエデは『目』を凝らしながら、静かな足取りで妹に近づいていく。その際、エデの双眸が薄っすらと怪しい光りを宿してい

たことに、残念ながらエルは気づかない。例えそれが、自らの生死を分けるものだったとしても。

「姉貴、お願いだから助けておくれよ。このままじゃ僕、光合成の術を会得しなきゃいけない人生を余儀なくされちゃうよ」

「まあステキ」

「まあステキ、じゃないんだよ！？　言っておくけどさ、今更お上品なのほほんお嬢様キャラ演じたって遅いからね。既に姉貴のイメージ設定は残念お姉さんに決まって――」

「大きくなーれー」

しゃあー、とジョウロの先端を妹に傾けるエデ。降り注いだ水のアーチが、日光に反射して小さな虹を作る。まあステキ。

「――じゃなくて、うおっ、ちょ、やめっ、姉貴やめて！　僕に水をやって育てようとしないで」

必死に首を振って抗議をするエルを、エデは寒気がするほどの無表情で見下ろしていた。

「ふうん……父様の寝室に潜り込むような妹なんて、一生そこで植物達と仲良くしていればよろしいんじゃなくて？」

「……あ、姉貴、なんでそのことを――」

はっ、としてエルが姉を見上げると、二つの紅い瞳がこちらを冷たく睥睨していた。

「このわたくしの『目』で、見透かされないものなんてなくてよ、エル？　あなたの心を覗くなんて造作もないこと。あなたもそれは十全に熟知しているんじゃなくて？　まあ、それにしても随分と大胆なことをやってくれましたわね？　ウフフ、フフッ、父様にき、キ、キ、キスですって……仮に妹でなくても、殺して差し上げたいわ、本当。ええ、まったく……」

煌々と真紅に揺らめく『魔眼』を発動させながらも、エデはあくまでも柔和な笑みを浮かべていた――が、その憤怒に染まる眼力の鋭さは決して隠し切れぬものではなかった。

エルは本格的に生命の危険を感じ、体内の危機管理センターが総

出で警鐘を乱打していた。やばい、やばい。ほのかに香る昼ドラの予感。脳裏を横切る火サスな結末。

つぅーと冷や汗が頬を伝った。

「……わ、わたくしだって、そ、そんなに父様と戯れたこともないのに……わたくしだって、わたくしだってその気になれば、父様を『目』で殺すくらい――な、なのにこの泥棒猫はっ！」

「ひいっ、昼ドラも火サスも勘弁だよぉ！」

悲鳴をあげながら、食いしばるように目を瞑るエルであったが、しばらく経っても何の変化も訪れず、恐る恐る目蓋を持ち上げてみると、エデはぷるぷると震える拳を掲げたまま、微かに目元を潤ませ、ぎゅっと唇を噛み締めて、沸き起こる衝動を自制するかのように固まっていた。

「あ、姉貴……？」

「……くっ」

頭上に振りかざした手をゆっくりと自分の両目にあてがうと、エデはそのまま踵を返し始めた。

「エル、次にわたくしの目を盗んで、父様と事に及ぼうとしたなら――――分かっていますわね？」

「あ、あい……」

ビクビクと姉の顔色を窺いながらも、エルは頷いた。

「……では、わたくしはこれからバラ園の手入れ作業がありますから」

ごきげんよう、と背中を見せたまま、最後にそう言い残してエデは立ち去っていった。

地上に首だけを伸ばすエルだけが、ポツンと一人残された。

第十三話　軍神と智将（後書き）

ついにきたぜ日常偏！
ということで、澪士たちのくだらない日々をしばらくはお送りしたいと思います。炉心融解。

第十四話　相互関係ヒエラルキー

「ぶーんっ」
スーは両腕を翼のように広げて、城内を駆け回っていた。白いフリルのワンピースに身を包んだ矮躯。ボリュームのあるキャラメル色をした長髪を無邪気に揺らして、スーは何か面白いことはないかと気の向くままに探索をしていたのであった。
「およっ？」
そこは、城の一階の西南に位置する宝物庫だった。これまでに様々な理由と因果から集まってしまった、古今東西の名品珍品武器宝具などを一挙に押し込めた場所。中には呪いなどを内包するいわくつきの代物まである為、通常はグリンダの術式結界で厳重に閉ざされているのだが、
「何故、結界が張られてないのだ？」
荘厳さを感じさせる巨大な樫の扉を前に、はて？　とスーは首を傾げた。
ぺた、と扉に触れてみる。
「……ぬ」
無理矢理に結界を破ったような形跡があった。どうやら何か強大な力で、あっさりと『内側から』破壊されたようである。んぅー、とスーは額に指を当てて唸ってみせるが、
「ま、いっか」
《怪物》は考えることを諦めた。

分からないことは分からないのである。ならば、それ以上思考を重ねたって無意味なこと。『下手な考え休むに似たり』をまさに体現したかのような性分の持ち主――それがスーフェミオットなのであった。

まあ、せっかく開錠してあるわけだし、普段はあまり入れない宝物庫ということなので、スーは当然のように扉を開き、すっとその幼く小さな体躯を滑り込ませた。

「潜入成功なのだー」

わはーい、と胸を躍らせて、薄暗い室内にキョロキョロと視線を巡らせてみる。部屋自体はかなりの広さを有していた。天井付近に設置された窓から、か細い光源が降り注いでいる。妖光を放つ水晶に不気味な抽象画、古びた甲冑や、気色の悪い悪魔像といった、多種多様なジャンルの品がゴチャゴチャと犇き合っていた。

「あれは……」

と、スーが興味津々であちこちを物色していたら、ふと部屋の最奥に展示されていた《ソレ》に目が奪われた。

天窓から差し込む日の光を浴びて、それは決して埃に被ることのない、神聖さと威厳を誇っていた。今はただ、息を呑むような静謐さを保って、主人が再び自身の柄を握ってくれることを待つ、忠実な騎士のようでもあった。

その――聖なる剣の名を、スーはゆっくりと呟く。

「ジュ、ワ、ユーズ……」

なんて懐かしいのだ、とスーは思わず目を細めた。

聖剣『ジュワユーズ』――その剣で自分は澪士に何度となく刺され、貫かれ、斬りつけられたことであろう。この身体に、幾度となく剣先を刻まれ、存在そのものを掻き消されたことであろう。

ゾクゾクッ、と不意に性感帯を攻められたかのような衝動が、全身をあまねく支配する。ほんのりと頬を紅く色づかせて、スーは聖剣をうっとりと眺め続けた。

スーは、澪士とのファーストコンタクトをぼんやりと思い出す。

《異形》と《怪物》の邂逅。
それは、《戦争》であった。
スーは何回もレイシに殺された。逆にスーもレイシを何回も殺した。
何度も何度も、飽きるほどに、呆れてくるほどに、自分達はお互いを殺害し、殺戮し続けた。
殺して、屠って、犯して、壊して、肉を切り裂き、骨を磨り潰し、両者の原形など留めず、相手の存在ごと打ち砕いて――――そして確かに、二人は一種の恋愛感情にも似た、表現困難で、理解不能な《絆》を築きあげたのだった。
「んー……」
いや、違う。
《絆》だなんて、そんな純粋で美しいものでも、高尚で高等なものではない。
自分達の間にあるのは、もっと汚くて、穢れてて、醜くて、見苦しくて、決して他人様に語れるようなものでもない。そもそも自分達はヒトではなく、ヒトの形をなしただけの、忌むべき『人外』なのだから。
誰にも理解されず、誰とも和解できない、そんなどうしようもない存在なのだから。
しかしそれが例え、同様同等の存在であるが故の同属嫌悪であれ、同族恋慕であれ、いずれにせよ、自分達は唯一無二の『個』であるしかない。そこに憐憫の余地も、寂寥の余裕もないのだ。
なのに。
「どうしてレイシは、あんなにも淋しがり屋なのだろうなぁ」
自分の生死でさえ、本当はどうでもいいくせに。
他者の生死に関しては、何故あんなにも執拗なこだわりを彼は見せるのだろうか。
そこだけが、自分との決定的な相違。相容れることのない圧倒的なズレ。

だからこその《異形》なのかもしれないが。
ヒトに憧れ、ヒトになりきれなかったヒトの『失敗』なのかもしれないけど。
「虚しいものなのだな……どうにも」
ヒトを憎み、ヒトに憎まれ続けたヒトの『忌避』そのものである《怪物》には、《異形》のことなど到底分かるはずがなかった。
それも《怪物》として、《異形》の彼を理解し過ぎているからこその結論なのである。
「……お前は、どう思うのだ？」
スーは目の前の聖剣にクスリと笑いかける。
勿論のこと、ひたすらに沈黙を維持するジュワユーズからは、何の返答もなかった。

「師匠の俺から一本取ろうなんて、まだまだ修行が足りんよ、二人とも」
俺は戦闘態勢を解除して、「ほーっほほほ」と亀仙人をイメージした声音でマキとアイギーを笑い飛ばしてやった。
「流石っすね、レイシ様……ああ、仕事でもこんくらい鮮やかに取り組んでくれたら……」
「言うな、マキ。それ以上は、言うな」
ゼーハーと息を荒げて膝を着いているアイギーは、地に大の字を描いて同じく虫の息でいるマキに視線を向けた。
「マキ……お前、何回投げられた？」
「あーと、確か……六十九回。お前は？」
「ふんっ、勝ったな。私は六十二回だ」
「何が勝っただよテメッ。つーか、お前は投げられる以前にただの

足払いで弄ばれただろうがよ」
「面白いように投げられてた奴が囀るな」
「っ言いやがったな。こちとらオールナイトで第二ラウンド開催できますが何か？」
「こっちだって、お前を挽肉にする為の体力なら十分に有り余ってるが何か？」
「ぁあっ？　いい加減黙らないと豆ぶつけんぞクソ鬼」
「お前こそそれ以上髪散らかされたくなかったら口を閉じろ。雀られたいか」
　という、相変わらずなマキとアイギーの口論にもそろそろ終止符を打つ為、俺は二人の間に割って入った。まったく、いつまで経っても変わらないなあ、とか苦笑しつつ、俺は二人の成長に口元を綻ばさずにはいられない。
　一本取られるような失態はなかったが、驚異的な再生能力が備わっているとはいえ、まさか肋骨を二本も折られてしまうとは。
　口ではああ言ったものの、修行がまだまだ足りないのは俺の方だったりするわけで。
『まだまだだよ、ミヤザキ君。まだまだ、だ』
　とかって人の名前をろくに覚えようとしない師匠の言葉が鮮明に思い出される。はいはい耳にタコ患うほどに分かってますから、一々出てこないでください。ってかミヤザキって誰だ。
　俺は二人を起き上がらせるため、地面にへたり込んでいる両者に手を差し伸べた。

「いったい、僕はいつまで埋められてればいいんだろ……」

親父のことだから、うっかり僕の存在をそのまま忘却の彼方へと置いてきてしまうかもしれない、とエルは首から下を地中に埋めたまま、不安げに唸ってみた。しかし、そこでエルの脳裏にピキーンと鮮烈な閃光が駆け抜ける。

「――はっ、待てよ、これはもしや新手の放置プレイというやつではないかな！？」

何という前向き思考。ポディシブシンキングのハイエンドだろうか。

ところがこのエルの場合、与えられた無干渉による精神的苦痛を性的快楽に変換するというよりも、完全放置という不安感を長時間熟成させた果てに、ようやく再び父親と逢えるという喜びを、極限にまで増幅させるという意味合いの方が強かった。言い方を変えるならば、飼い主の帰りを待つ犬のような心理状態になっていたとでもいうのだろうか。それもかなり自発的で意図的な。

やヴぇ、なんか興奮してきた。

と、恍惚に緩んだ表情をしていたエルのもとへ、末っ子のシャンがとてとてと歩み寄ってきた。黒地に白いレースをあしらったロングスカートをパニエで膨らませ、レースの刺繍と中央の大きなリボンが特徴のブラウスを着ていた。総じて表現するならば、これぞゴスロリファッションとでもいうのだろうか。遠目からだと等身大のビクスドールがよちよちと動いているようにも見えたであろう。

「おお、シャンちゃーん。ハロハローお元気ぃ？　というか、今日に限って何だか妙に我が兄妹達との再会を果たすね。むー？　なんだいシャン、その手に持っている物は？」

ザクッ、とシャンは返事代わりにここまでズルズルと引きずってきたそれを地面に突き立てた。

「見ての通りスコップだよ、エル姉」

エデ姉に事情を聞かされてね、とシャンは喜怒哀楽に乏しい顔で説明した。

「な、なんと！　つまり僕のことを救出にきたってことかい。いや

ぁ、泣けるね。兄姉達はあんなにも薄情だってのに、下の妹はこんなにも優しく慈悲深いだなんて。うん、やっぱり持つべきものは可愛い妹だよね。ん、でも、親父がせっかくしてくれたこの放置プレイを捨てるのもちょっと惜しいな。えーどうしようかな――――なななになにぶふぉっ、ちょ、まっ、やめて！　シャンちゃん!?　これ以上お姉ちゃんに土を被せるだなんていったいどういうことかな!?」

「え？　埋葬する為に決まってるじゃん」

何を当たり前のことを訊いているの？　と言わんばかりの態度で、シャンは掘った土を淡々とエルに落としていく。

「ま、埋葬!?　ちょっ、僕はまだ死んでないよシャンちゃん」

「じゃあ死ねば？」

「ごめん、その一言でお姉ちゃん泣きそう。な、なんでこんな酷いことすんのさ」

「言ったでしょ、エデ姉から大体の事情は聞いたって。エル姉がパパの唇を強奪したことも、寝室に裸で忍び込んだことも」

ザクッ、とスコップをエルの眼前に刺しこんで、シャンは感情の抜け落ちた瞳で、姉を見据える。

「シャ、シャンちゃん……そ、そのまるでゴミを見るような目はや、やめてよ。姉に向ける目じゃないよそれ……」

違うよエル姉、とシャンは小さく頭を振った。

ような、じゃなくてさ。

「ゴミを見てるんだよ」

「ごめんホント泣いていい!?」

心が今にも折れちゃいそうだよ、とエルは涙目で妹を見上げた。だが、シャンはそこで初めて顔面を険しく歪ませ、エルに向かって唾を吐きかけた。ピチャ、とエルの髪に粘り気のある液体が付着する。

「……シャ、シャンちゃん、いったいどうしたのさ。きみはもうちょっとお淑やかな子じゃなかったかな？」

「ああ、単にキャラ軸が定まってないだけだから安心して」
「お姉ちゃん、シャンの言ってることが何一つ理解出来ないよ」
シャンはすこぶる面倒臭そうに深々と嘆息してから、
「あーあー、エル姉ってなんで未だに生きてんの？　どうして息吸ってんの？　っていうかさ、別にこのままずっと登場しなくてもよかったんじゃないの？　正直さ、エル姉のレゾンデートルってどこにあったの？　エル姉が出しゃばってきたことによって、いったいこの先どう変わるっていうの？　さして変わらないよね？　じゃあさ、エル姉ってはっきり言って無駄だよね、邪魔だよね、蛇足だよね、必要ないよね？　ねえ？　エル姉もそう思うでしょ？」
エルは。
「――ごごごめんなさいごめんなさいごめんなさい調子乗ってました粋がってましたすみませんでした。嬉しかったんです一週間ぶりに親父に会えて本当に本当に嬉しかったんです。嬉しくて嬉しくて仕方がなくて地に足つかずの天にも昇る心地だったんです。裸で抱きつきたくなるほど有頂天だったんです。どうしようもなく嬉しくて狂ってたんです。恐れ多い大胆なことしました申し訳ありませんでした。魔が差したんです悪魔が囁いたんです。もう二度とこんなことしませんから致しませんから。どうか許してください情けをくださいチャンスをくださいってさっきから詫びてんじゃんかよだからそれ以上さらに土をかけんなってつってんだろがよぉぉおぉおおお！？」
ブチギレていた。いつもは父親の澪士に似て飄々としている彼女であったが、やはり自分の生命活動の危機が訪れると、一時の情動に任せてしまうようだった。加えてもう一つの要因を挙げるとすれば、それほどまでにシャンの血も涙もない冷酷さが純粋に恐ろしかったのかもしれない。
姉の言葉を受けて、シャンは一度埋葬作業の手を止め、
「じゃあ、これからパパの半径百メートル圏内に近づかないでくれる？」

と、シャンにとっての精一杯の譲歩を提案したが、
「それは無理」
キッパリとエルは即答を返した。
「そ……ばいばい、エル姉」
シャンはスコップのグリップを再度握り直した。

それからアイギー及び近衛兵団の隊員たちと大食堂で昼飯を済ました俺は、今日の分の仕事は無事終わらせてしまった故、これといってやることもなく、ぶらぶらと城内をうろつき、あの《怪物》たる少女の姿を探していた。
今度埋め合わせしてやるからな、と少し前に約束したばかりなので、ちょうどいい機会だから彼女と少し遊んでやろうと思っていたのだが、いかんせんまったく見当たらず。
スーの捜索を諦めた根性なしの俺は、長女のエデが管理をしている薔薇園で、何故か自然と集まったきた子供達と一緒に、紅茶の味を嗜みつつも暇を潰した。そういや、そろそろエルの奴を発掘しにでもいくかな、と次第に傾いてきた太陽をみて思い立ち、俺はエデとユートとシャンをその場に残して席を外した。その際、シャンの衣服が所々泥で汚れていたのに気づいた。土いじりでもしていたのだろうか。
俺がエルを地中に植えた庭園までのこのこと歩んでいると、向かい側から見覚えのある顔が見えた。
「あれ、フィリじゃん」
よっす、と俺は挨拶代わりに片手をあげる。
「なんだ、お主か」

「なんか最近とんと見かけなかったけど、今までどこいってたん？」
「ぬぅ、宝物庫だ。中にあった宝石の類を見物しておったらの、知らぬうちに閉じ込められておってな。我としたことがとんだ不覚だった。しょうがないから、しばしあの部屋で惰眠を貪っておったのだが、いい加減に外の空気が吸いたくなっての。今日、久々に出てきたというわけだ」
「……あれ、倉庫の結界は？」
「抉じ開けた。だから、『空間の魔女（グリンダ）』に会ったら、すまぬと伝えておいてくれ」
さて、ここまでのフィリとの会話において、いったい『彼女』がどんな身形容姿をしているかご想像がついたであろうか。さあ、それでは答え合わせといこう。
まず最初に、彼女の名はフィリ。本名がすこぶる長いので、一般的にこの愛称で通っている。身長は１３０センチ程度で、薄手のシンプルなワンピースと若菜色のガーディガンを着衣していた。このことから察せられるように、見た目は年端もいかぬ幼い少女である。まさしく白銀と呼んでしかるべき見事な色合いの髪をしており、前髪部分だけはカチューシャで持ち上げていて、額の富士がさらに可愛らしく際立っていた（なお、その広いデコには三角形を重ねたような模様が刻まれていた）。しかしながらその肩甲骨の辺りまで伸びる絹糸の如き白銀は、思わず手にとって触れてみたいという欲求がムクムクと沸き起こってきてしまうほどに美しく、目に眩しかった。
「おい、お主。何を唐突に我の頭を撫でるのか」
しかも油断ならないことに彼女は、俺でも時々ハッとするような美貌を兼ね備えていた。汚れを知らぬキメ細やかな雪肌に、恐ろしく整った綺麗な顔立ち、その未発達な外見とは到底似つかわしくない、まるで数千年の時を刻んだ大樹を前にしたような威圧的な存在感と、老成し、老熟し切ったような雰囲気をまとっていた。
まあ、実際の彼女の年齢を数えてみれば、当然のようにその通り

なのであるが。
「ええい、気安く触るでないわ鬱陶しい！」
本能のままにフィリの髪にへと這わせていた手が、あっさりと彼女に振り払われてしまう。ああ、もうちょっとくらい。俺は眉根を下げて至極残念そうな顔をする。
「そんな切ない表情をしたって無駄ぞ！　この鬼畜変態ロリコンマゾヒストがっ」
「おい紳士が抜けてるぜ紳士が」
「適当に吐いた雑言を否定しないお主が、我は心底恐ろしいぞ」
「えへへ」
「褒めとらんわ」
はあー、と疲れのこもった溜息を一つしてから、フィリは俺の横をさっさと通り抜けていく。まるで変質者の戯言から逃走する小学生の如きスピードで。俺は軽く肩を竦めながらも、彼女の小さな後姿を黙ったまま見届け――――ようと思ったのだが、ふとそこで彼女に伝達しておかねばならない必要事項を思い出した。
「アトモスフィリオン！」
俺が声を掛けると、フィリは不審げに眉をひそめて、横顔だけをこちら向けた。
「……なんだ、改まって」
「外に出てる『救難聖人』全員に、招集をかけた」
「……そうか」
ただ一言、フィリは素っ気無くも頷く。
「『救難聖人』の一人として、一応はお前にも伝えておこうと思ってな」
「ふん……」
煩わしそうに鼻を鳴らしてから、煌びやかな銀髪を揺らしてフィリは悠然と去っていった。

「……はてさて」
俺はインセストタブーな次女の採掘作業にでも向かうとしますか。

おそらくエルを埋めたと思われる地点にまで辿り着くと、そこには巨大な蟻塚のようなものが俺を待ち受けていた。
「そもそも、地形が少し変わってませんか？」
そんな些細なことはさておき、眼前に控える等身大の土塊を観察してみる。ふむ、確かにこの場所に次女を埋め立てた覚えがあるんだけど、気のせいかな。
「……もしかしてさー、エルってばこの中にいたりするー？」
じぃーと耳を傾けてみると、微かにその土砂の内部から助けを求める《声》が聞こえた。なるほど、やっぱりいたのね。
「よーし、今助けたるぞー」
パチン、と指を鳴らして、自身の『影』を具現化し、何本もの触手に分裂させ、目の前の隆起した土壌を引っくり返した。
「お、おや、じ……」
案の定、半泣き状態のエルが姿を現した。さくさくと上半身まで掘り進めたところで、俺はエルを影の触手でズボッと引き抜き、そのまま自らの胸で受け止めた。その頃にはエルもぼろぼろに泣き崩れていて、俺の腕の中で鼻水と涙のダブルコンボで垂れ流しながら、泥土で汚れた身体を擦りつけてきた。
「おおおお、おっおやびおやじゃあじじゃばびびゅひょひーっひーっうぃいぼぼばごわがっだごわがったぼおおおお！」
「おーよしよし分かったから、ここではリントの言葉で話せ」
「……ギ……ギログドビ、ギログドビゴソガセバベダ！　ボパザダ

ダジョ、レチャチャボパザダダジョゴジャジィイイ！」
※訳『……い……妹に、妹に殺されかけた！　怖かったよ、めっちゃ怖かったよ親父ぃいい！』。
「おうおう、シャンにしてやられたか」
「ゲゲルゲゲルグギガガギギバ」
「あ、もうグロンギ語はいいよ」
ひっくひっく、とそれでもエルは嗚咽を止めずに、ぼそぼそと愚痴を漏らし始めた。
「うっ……うっ、世知辛いよぉ、世間の風当たりが厳しいよぅ……ちょっとだけさ、自分の個性を活かした登場の演出を決めただけだってのにさ、こんな扱いだよ……うぅうっ、兄妹の中で人気投票したらさ、確実に僕が一位になる感じの流れじゃんかよ……僕だって、レゾンデートルちゃんとあるもん！　なのにさぁ、なのに……うううっうぅうあぁぁ……」
「うんうん、心配すんな。みんなエルのことが好きだから、もう泣き止めよ」
「あうぅ……ひっく、ほ、本当？」
「おう、マジマジ」
「……お、親父は？　僕のこと好き？　あんなことして、もしかして僕のこと嫌いになっちゃっ、た？　ごめっ、ごめんなさい……もう、二度としないから、親父だけは僕を見放さないで、見捨てないで。お、親父に嫌われたら、ぼ、僕は、僕は僕は……」
見上げてくる視線に応えるように、俺はエルの髪についていた泥を払った。
「何言ってんだよ。俺は、エルを嫌ったりなんかしない。娘を嫌う父親なんて、いるわけないだろ」
「おぅ、うぅっ……ら、ラビューだぜ親父ぃ」
「ああ、俺もライクじゃなくてラブってんよ、エル」
ぐしゃぐしゃに泣き崩れた顔を俺の胸に押しつけ、堰を切ったようにボロボロと涙を溢れさすエル。ああもう、目も当てられない。

よしよーし、と某ムツゴロウ先生を見習い、エルの背中をさすりさながら宥めていた俺ではあるが、不意にその時、俺の中で鳴りをひそめていた意地悪な性根が疼きだした。まさか実の娘に対してもこんな気持ちになるなんて、自分でも非常に予想外ではあったが、まあ、この痴女には色々としてやられたし、別に俺はエルがやらかした所業云々で彼女自身を嫌いになったわけではないが、その所業自体に赦免を与えた覚えはないのだった。

だから、これは俺からのちょっとした仕返しであり、復讐報復以外の意味合いなどは、さっぱり毛ほども皆無なのであるからして。

「エル」

娘の名を呼び、極自然な動作で顔を近づけ、唇を重ねた。

とりあえず俺は殴られた。

第十四話　相互関係ヒエラルキー（後書き）

仮面ライダーならやっぱりクウガが好きだったり。

ロリこんにちわ。もしくはロリこんばんは。蝉です。

どのようにすれば物語が面白くなるか。

構成もキャラも勿論大切ですが、その数ある要素の中でも、蝉が着目したのは、ずばりそれは『幼女』の有無であります。

幼女は理由なく正義であり、法則もなく絶対なのです。

こんな自分を早く誰か捕まえてください。

では。

追伸

総ＰＶ７０万　総ユニーク数６００００越えありがとうございます。

第十五話　地下室の二人（前書き）

「ん、ドアなら開いてるぞ……ってああ、クリューか。そろそろ来る頃だと思ってたよ。マキの奴から話は聞いてる。来月号でレイシ様の特集をやるんだってな？　それで私のとこにインタビューをしにきたんだったか。待ってろ、今茶でも出してやるから……うん？　お構いなく？　まあ気にするな。茶菓子も用意してやるから、好きなだけゆっくりしていけばいい。私もちょうど書類仕事が一段落ついたとこなんだ。それにしても、あの人のことを記事にしたいだなんて、クリューも相当なもの好きだな。けどまあ、君が悪戦苦闘するだろうということは、私の目にもありありと浮かぶよ……ん？　なんだそれは――ほぉ、『ぼいすれこーだー』というのか。『かめら』なら私でも知っているが、それは初めて見るな。ははあ、なるほど、ピノに作ってもらったと……ふむ、これも最近流行の『科学』というやつか。だが、魔術にも精通していない私からすれば、どちらも同じモノのように思えるがな――む、脱線したな。すまない。で、なんで苦労するかって話だったか。そりゃ、あの人を記事にして語ろうだなんて、経典と聖典を同時進行で読み込んでいくようなもの――いや、そんなレベルの話じゃないな。あの人を見るときはな、まず自分自身から見つめ直さなきゃならなくなる。ははっ、意味不明って顔をしてるな。んまぁ、私が答えられる範囲でなら、何でも訊いてくれ。クリュー、君の苦労が少しでも和らいでくれるよう、私も尽力しようじゃないか」

第十五話　地下室の二人

「なっ！？　なっ！？　なっ！？」

エルは混乱している。わけもわからず俺を攻撃していた。

「ちょっ、待って、イタッ、顔はやめてっ、やめっ――だからってボディーを攻めるな！　おぅ、わ、悪かった！　悪かったよ！　仕返しでキスするとかマジ悪かったから、謝る。謝るから！　やっぱ嫌だったよな、ごめんな。マジすみません」

ポカポカと拳を叩きつけていたエルは、そこでいったん動きを止めると、先程までとはまた違った感じの泣きべそで、

「……い、嫌じゃないよ」

と真っ赤に熟れた顔を俯かせながら、ボソリと呟いた。

「嫌じゃないよ……嫌じゃないけど、なんか、なんていうか……こんなの絶対おかしいよ！」

「な、何がおかしいんだってばよ？」

頭を振り乱して言うエルに、俺は少しびびる。なんだ、この昨夜までとのギャップの差は。まさか双ヶ岡（ならびがおか）先輩じゃあるまいし、二重人格設定だなんていう、陳腐で使い古されたオプションでも付け足されていたとでもいうのか。

まったく、キャラ軸が安定してねーなおい。

ホント誰のせいだよ！？

「ぼ、ぼ僕だって、わけが分からないよ！　け、けど、親父はっせせ、攻めに転じちゃだめなの！　僕が攻めで、親父が受けじゃないといけないんだよ！　僕×親父なの分かる！？　親父から接吻とかあ、あああありえないの！」

じゃないと円環の理なんだよ！？　とエルは訳の分からん台詞を太陽に吼えた。多分、自分でも意味が分かってないのだと思う。

「なっ、なんだそりゃ……えーとつまり、父から娘は駄目で、娘から父はいいってのか？」

「そうじゃなくて！　いやそうなんだけど、でも違くて……そうじゃなくて、だって……うぅぅうぅうあああああん！」
エルはそのまま奇声を上げながら、背中を向けて走り出した。
「どこいくんだよー？」
「お風呂ぉおぉぉおー！！」
と去り際に言い残して、エルは瞬く間に見えなくなった。その場に一人残された俺はポリポリと後頭部を掻いて、
「年頃の娘は、よく分からんなぁ」
と、本当ならとっくに定年を迎えているはずの俺は、溜息と共に一人ごちてみるのでした、まる。

時刻は既に逢魔ヶ時。城下の街も含めて、ティルナノーグ全体が夕暮れの紅に満ちる頃。俺は四階の廊下で、窓辺に腰を下ろしながら、外の風景をぼんやりと眺めていた。一年中先端が白く染まっている山脈のふもとに、『魔術学校（アカデミア）』のシルエットが小さく映った。
一応、建設者の俺が理事長ということになっているけど、これといって特に管理しているわけではない。創設時に、教育方針やカリキュラムといった基本的な初期設定だけを俺が決定し、後は全て人任せである。わあ、教育者の風上にもおけない。
「とはいえ、部下達が優秀すぎるのも事実なわけでありまして」
はて、いったい誰に対して言い訳をほざいているのやら、と俺は腹の音が演奏を始めてきたのを感じ、腹ごしらえに一階の大食堂に向かおうとした――――その途中で、

「レ、レイシ様ッ――！？」
ばったりロートとの邂逅を果たした。
「おいっす。ってかなんだよ、その！と？のダブルパンチは。まるで狼にでも出くわしたみたいに」
「……す、すみません」
しゅん、と赤いフードに包まれた頭部を俯けるロート。俺は軽く鼻を鳴らして、
「もしかして、昨日の一件をまだ気にしてんのか？」
『焔皇』のイグニスが燃える拳を俺に放とうとした瞬間、ロートは自身の本性を剥き出しにしてまで、身を挺してかばってくれた。そこに彼女を非難すべき点はないし、無論、同じく割って入ってくれたシュネーも同様にだ。
しかしてロートは終始申し訳なさそうに顔を伏せたままだった。
「あーあ……誇り高き『人狼（ヴェアウルフ）』の生き残りが泣いて呆れるな。そんなちゃっちいことくらいで気に病むなよ」
「すみ、ません……」
「だから、一々謝るなっての」
「……すみません」
はあ、と俺は思わず溜息が漏れてしまった。何とかならんかね、この性格。覚醒している時とは、まったくの正反対なのだけれど。
「……ん？　ロート、どっかに食事でも運んでくのか？」
そこで俺は、彼女が料理の品が搭載されたワゴンを押していることに気づいた。
「え、あ、はい。あの、ピノさんと、アキナスさんに……」
「なーる」
地下室に引きこもってばっかりいる二人の顔を思い浮かべて、俺は頷いて納得する。でも、
「そういやロート。あの二人が地上に出てこないでどれくらいになる？」
「え、はい、えーと、今日で九日目になります。何でも、アキナス

さんは研究の過程でラボを離れられない状態だとか……ピノさんも、今がちょうど最終調整とかで同じく……です、はい」
「そうか……んじゃ、ロート。その食事を運ぶ仕事だが、俺に代わっちゃくれないか」
「え、あの、駄目ですよ、レイシ様にそんな……」
「いいからいいから」
俺はロートから食膳が載った台車を半ば無理矢理に奪い取った。
「俺もさ、あの二人に顔を見にいく口実が欲しいだけなんよ。だからこれも別に気にしなくていいからな」
「あの、えと……はい」
そうして彼女と別れる際に、性根がとことん腐っている俺は、ちょっとした悪戯を閃いた。ん？　ああ、まさかエルにやったみいなセクハラじゃないから安心してくれ。それに、あれは自分の娘限定だからね。
「ロートに朗報」
「はい？」
「お前の愛しの羊くん、近々この城を訪れると思うから、楽しみにしとけよ」
「ふぇっ！？」
カアアアアッ――と面白いように赤面していくロートを背景に、俺はケラケラと笑いながら客室乗務員のごとくワゴンを押していくのだった。

この魔城の地下では、日夜怪しい魔術研究と人体実験が行われて

いる、とかいう風評が出回っているらしいとの情報をエリアスから聞いたばかりではあるが、あながち間違ってもいないというのが俺の見解。

魔術研究と言えば、あの『天使博士（ドクターエンジェル）』の渾名（あだな）を持つトーマ＝アキナスが毎日飽きもせずに年がら年中没頭しているし、人体実験に関しては、俺がよく実験体に召喚されるけど、アイツもアイツで医者という側面もあるから、そういう所から噂の煙が立っているのかもしれない。

後はまぁ、ピノのことかな。

「さて、俺も二人の顔を見るのは一週間ぶりぐらいになるわけでありまして」

この城に唯一あるエレベーターに、カートと共に乗り込み、地下一階へと降っていく。チーン、と到着の合図で狭い箱の中で響き、金網を折り重ねたような仕切りが左右に取り払われた。

まず目に飛び込んできたのは、正方形に開けたロビー的な空間だった。ライトブラウンのふかふかしたカーペットが全面に敷かれていて、中央にはくつろぐ為のシックなソファーが並んでいる。天井には照明が設置されていて、あまり地面の下にいるというイメージが湧かない。そのラウンジにはいくつかの通路が繋がっていて、俺は数秒逡巡したが、西側の通路を選んだ。

他にも何人か職員がいるのだが、誰一人見当たらないところを鑑みると、おそらく全員、食堂の方に出払っているのだろう。

まあ、特定の二人を除いて。

しばらく進んだ先の最奥には、開け放たれたままの扉があった。俺は子連れ狼よろしくチャーンとキッチンワゴンを押し進めて、黙ったまま部屋の中を覗いた。

そこは、まさに工房と称するに相応しい内装だった。どんな用途に使われるのか定かでない機器が所狭しに点在し、パイプやらダクトやらが蔦のように至るところから生えている。

そして、その奥では小さな背中がこちらを歓迎していた。

「あー、ロート殿でありますか？　昼食の皿はそこに一まとめにしておいたでありますー。夕食の分は、そこら辺に置いといて欲しいであります。今ちょっと手が離せそうにないので――」

背を向けた状態でその少女は口を開き、両の手でガチャガチャと奥の作業机で何かを弄っていた。右手にスパナ、左手にはドライバーを持って。

そろり、と俺は彼女の背後にへと近づき、

「ピノ」

と隙だらけな彼女の耳元で、吐息と共に囁いた。

「ひぃ、ひゃっひゃあああああああああああああああ！」

ブオンッ、と俺の眼前でスパナの切っ先が通過した。うおっ、危機一髪。

そのまま振り返り立ち上がった彼女は、ズームレンズのついたゴーグルを外して、素っ頓狂に裏返った声を上げる。

「レ、レレレレレレレレッ――！？」

「お出かけですかー」

「レイシ様ぁっ！？」

あわわわわわ、とピノは栗鼠を思わせるような機敏な動きで慌てふためき、俺を存分に楽しませてくれた。いやぁ、やっぱり予測した以上の反応を見せてくれるなぁピノは。

「なっ、何故このような薄汚い場所にレイシ様が――うぉ、わっ、わわっ、すす少しお待ちくださいであります！　超特急で片付けるでありますゆえ！」

せかせかと動き始めたピノを俺は静止させて、

「んなぁいいから、大人しく座ってろってての」

と、肩に手を置いて強制的に着席させた。

「あ、あの、レイシ様、今日はいったいどうして……？」

「ん、単にお前の顔を見にきただけだよ。それじゃ駄目か？」

「……い、いえ、その、駄目とかじゃなくて、いや、むしろレイシ

様ならいつでも大歓迎でありますが……もうちょっとこう、前置きが欲しいというかなんといか……」

ごにょごにょ……と言葉尻を濁して、下斜め４５度に視線を落としたピノ。俺はそんな彼女の反応に脳内でクエッションマークを誕生させる。

居心地悪そうにキャスターの上でもじもじと身を捩じらすピノは、どうにも落ち着かない様子で四方八方に視線を泳がせていた。久しぶりに対面したせいか、俺は改めて彼女の姿をしみじみと観察してみる。

モスグリーンの短めの髪。くすんだ灰色のつなぎを着用しており、首には先程のゴーグルを下げている。顔立ちはまだ幼い面影を残していて、丸い小鼻が何とも可愛らしかった。残念ながら胸部の膨らみは特に確認できない。

俺はふと、彼女の右腕と左脚部に目がいった。

「ピノ、右手挙げてみろ」

ビクッ、とピノは肩を揺らした。チラッとこちらを見、やがて観念したようにゆっくりとした動作で挙手した。

「……ふうん」

ガシッ、と俺は挙げられた彼女の腕を掴み、幾度かブラブラと左右に振ってみる。ふうん、やっぱりな。

「……あ、あのレイシ様」

恐る恐るといった具合にピノは上目遣いで、こちらの鼻息を窺った。

「よし、ピノ」

俺は有無を言わせぬ口調で、しかし至って柔和な微笑を浮かべて。

「とりあえず服を脱げ」

「ひぁっ！？」

＞ｉ２５５７６―２０８８＜

ピノが甲高い悲鳴を上げた――のと同時に顔面を真っ赤に噴火させて、立ち上がって俺の手を振り払い、よろめくように一歩後ずさった。

「――あ、ああ、あののでありますよレイシ様!?　しょ、小生はこれでも今年で十六になるうら若き乙女でありまして！　そ、その、例えレイシ様の前であっても、素肌を晒せというのはいささか抵抗を覚えるというか、いえ、その小生にも恥じらいというものが――」

身振り手振りで慌てふためくピノに、俺は朗らかに笑いながら、何の躊躇いもなく伝家の宝刀を抜いた。

「お前の下の世話を担当したのは、いったいどこの誰だと思ってるでありますかー」

「ぴゃぁあぁぁあああっ！　昔の話を持ち出すのは卑怯でありますぅ！」

「お前の穴から捻り出された汚物を処理したのは、いったいどこの誰だと思ってやがるでありますかー」

「より具体的に言うなやぁであります！?」

あと言い方マネしないで欲しいでありますっ！　と見事に俺の科白で一刀両断されたピノは、さらにも増して赤面し、もはや涙目になりながらも、こちらを恨めし気に見上げてきた。

「……ったく、今更恥ずかしいも何もねぇだろうがよ。ちょっと前までは、一緒に背中の流しっこしてたじゃん」

「ちょ、ちょっと前って……ご、二年前にはもう小生は女湯の方に入っていたでありますよ！」

「カーッ、これだから思春期はぁ。あーやだやだ、ホント色気づいちゃってまぁ面倒臭いったらありゃしないわー」

「しょ、小生が悪いでありますか!?」

うぅうー……とついには嗚咽まで漏らし始めたピノに、俺は溜息

を一つ吐いてから、彼女の頭部に荒っぽく手を置いた。
「分かったよ、ピノ。それなら、今回は見るだけにしておく。あとの整備は自分で出来るな？」
「は、はい……」
コクン、とピノは安心したように小さく頷いた。
「ん、じゃあ、袖めくれ」
再びピノをキャスターに腰を下ろしてから、自身の右腕の袖をめくった。
果たしてそこに現れたのは――鋼鉄の義手。
普段、手首から上は、人肌を模した特殊なグローブで義手の存在をカモフラージュしているが、そこから下は全て鋼鉄の素肌を晒しており、整備のしやすさを重視した仕様となっている。
俺は肘などの関節部分を何度か屈伸させてから、ネジやらバネやらで犇き合っている内部を点検する。
「次、足」
そう短く指示すると、ピノは左脚の裾をたくし上げた。
やはりそこに顔を出したのは、鋼鉄製の義足。
腕と比べて、あまり複雑な仕組みも部品も用いられてはいないので、脚部に関しては、ざっくりとパーツに不備がないか確認するだけに済ました。
「ピノ」
「な、なんでありますか」
「ばかもの」
ピシッ、とデコピンを不意打ちでお見舞いする。
「あうっ」
と軽く呻きながらも、弾かれた額をさするピノ。それでも、俺は顔を険しくさせて厳しく言いつける。
「――今さっき上腕部分の動きが微妙に変だなって思ってたけど、案の定そうじゃないか。所々、油切れ起こしていた箇所があったぞ。それに中指関節の、三番と八番のスプリングがもう定年を迎えてる

じゃないか。古い部品は逐一新品に取り替えておけって、あれほど口を酸っぱくして……っておい、ピノ。ちゃんと聞いているでありますか？」

「――ふぁ、はい。しっかりと鼓膜に垂れ流しているであります」

「それじゃぁ零れないように気をつけとけ。まったく……機械弄りに夢中になるのもいいけどな、自分の身体をおろそかにしちゃいかんでしょうが」

「ぅう、耳が痛いであります」

叱られた子犬が耳を垂れ下げるかのような仕草でしょんぼりとするピノに、俺はひとしきり苦笑してから、ぽんっと彼女の頭に手を置いた。

「まっ、お前が製作にあたってくれた諸々の技術に関しては、素直にすごいと思うよ」

「そ、そんなこと……ないでありますよ」

ピノの頭部は俺の手によってわしわしと撫で回され、面白いくらいになすがままにされていた。本人はただ気恥ずかしそうに目を伏せていたが、自分の功績なのだから、そんな謙遜しなくてもいいのになと俺は思う。

「いんや、そんなことあるんだよ。俺は本当に、ピノはスゲーって思ってるんだから」

「それは……勿体無きお言葉。小生も鼻が長いであります」

「長くしてどうする」

せめて高くしときなさい、高く。

「んまぁ、要するに俺が言いたいことは、根をつめるのもいいけど、自身をおろそかにするなってこと。分かったか？」

「は、はい！　不肖ピノ、しかとこの肝に銘じたであります」

ビシッと姿勢を正して敬礼をするピノに、俺は「よろしい」と最後にもう一度だけ荒っぽく彼女の頭部を愛撫して――

「んぃっ！？」

そのまま、つむじの部分に接吻するように顔を埋めた。
クンクン、と頭皮の臭いをかぐ。
予想通り、饐えたような汗の臭いに、脂ぎった髪と溜まりに溜まったフケの何とも形容しがたい悪臭が鼻腔を突き抜けた。
魂が抜けたかのような、もしくは石像のように硬直しているピノに、俺は至って真面目な態度で、
「それと、風呂にも定期的に入っておくように」
女の子なんだから、と一応は彼女の保護者として、最善かつ最大限の忠告をしてやった。

「ぅいー……ったく、急になんばしよっとっとね、あの娘は。いきなりスパナで殴りかかってきちゃるに、けったいなことすんでホンマ。俺やなきゃ致命傷やったぞ。あー親ん顔が見でみてぇわ……って、俺がピノの保護者だったぜよぉ」
周囲に誰もいないことをいいことに、俺は津々浦々の方言を滅茶苦茶に乱用しながら、殴打された側頭部を気遣いつつも、料理が載ったキッチンワゴンを押し運んでいた。
「んー、言葉には気をつけたつもりなんだけどなあ。臭いとか、汚いとかのワードは極力避けたし……むぅーん」
奇声を張り上げながら、半狂乱で俺に向かってスパナを振るってくるピノの姿を思い出して、さらにも増して首を捻る俺。
思春期は分からんなぁ、と自分も半世紀前は同じ立場だったはずなのに、ふと訳もなくしみじみとそう思ってしまう。
これも俺が歳をとった証拠なのでしょうか。
ええ、ええ、そうでしょうとも。

と、そんな歳より臭いことを思考しているうちに、アキナスの研究室にへと辿り着いた。天井の照明を反射する大理石の廊下に面した、とある一室。だが俺は、研究室の扉に手を掛ける前に、その隣にある部屋のドアを開けた。長年の勘から、研究室よりもこっちの書斎の方にいそうだなと踏んだからである。

「アキナスいるかー？　俺だー結婚してくれー」

初っ端からそんな突拍子もいない戯言をほざきつつも、俺は彼女に到来の意を伝えた。

果たせるかな、やはりアキナスはこちらの書斎に存在していた。

「……」

しかし、彼女は書類が散らばった机に突っ伏して、静かに熟睡していた。いやはや、寝息すら聞こえない。まさか死んでいるんじゃないだろうな。

「おーい、アキナさーん」

即席のニックネームで呼びかけてみるが、反応はない。俺はワゴンを入り口付近に停車させておいて、彼女にこっそりと近づいた。

その部屋の壁の四方ともが、ぴっちりと書棚で覆われていた。明かりも碌につけていないせいか、どんよりと薄暗い。狭くはないが、殊更そう広くもない空間で、セシリアが管理している図書館ほどではないが、妙な威圧感が全体的に充満していた。その中で、アキナスは挨拶でもするみたいに毛根の生え際をこちらに向けている。そんな風に机上でくたばっている彼女の肩に手を伸ばそうとして、

「――まったく、相変わらず騒がしい奴だな」

むっくり、とアキナスは倦怠感たっぷりに顔を上げる。縁なし眼鏡の奥から覗く生気の薄い双眸が、欠伸と共に俺を見据えた。

トーマ＝アキナス。　大陸にもその名を轟かす、魔術研究の第一人者。

またの名を『天使博士（ドクターエンジェル）』。

「なんだ、起きてたのか」

「君の声で起きたのだよ」

そう言ってボリボリとうざったそうに、自らのソバージュヘアに手櫛を入れる。それから着用していた白衣のポケットからマッチ箱と煙草を一本取り出して、気だるそうに一服し始めた。

「……先程の台詞、もう一度言ってくれないか」

スチャ、と中指で眼鏡のズレを調整しつつも、アキナスは言った。

「え？」

俺が疑問の声をあげるのと、アキナスが視線をそらしたのは同時だった。

「とりあえずは、それで完全に目が覚めそうな気がするんだ」

意図がよく分からなかったが、俺は自分の発言した記憶を遡る。

「えと……『なんだ、起きてたのか』」

「違う、その前だ」

「『おーい、アキナさーん』」

「……もういい」

クハァー……と長い紫煙を吐き出し、俺と負けて劣らずの死んだ目で、しばらく虚空を仰ぎながら、喫煙を続けていた。俺は黙ったまま辛抱強く彼女が吸い終わるのを待った。アキナスは、体内にニコチンが巡っていないと物が考えられないという、どうにも面倒臭い女なのである。

必然的に手持ち無沙汰となった俺は、仕方がないのでアキナスの喫煙風景でも観賞してみる。あまり関係はないが、泣きボクロが異様にセクシーだった。

そこで何となく、十字架を模った首飾りに目を奪われる。

さっさと捨ててしまえばいいものを……毎度のことながら本当に嫌味ったらしいことこの上ない。

「……で、ワタシに何のようかね、イサナギ」

ようやく意識が覚醒したのか、口端に煙草の咥えながら、アキナスは改めて俺に居直った。

「飯だよ。俺が持ってきてやった」

「――ハッ、一国の王ともあろう者がメイドの真似事かね。相変わ

らず愉快なことをしてくれるな、君は。まあしかし、もう昼食か。早いものだな、さっきまで朝食をとっていたような感じも……」

「アキナス、今は夕餉だ」

「――――ふむ、そうだったか？　どうにも地下にいると一日の時間感覚が狂ってしまっていかんな」

　机の隅にある灰皿は、とっくにその内容量を超越しており、吸殻が山のように積み重なっていた。それでもアキナスは容赦なくその山頂に新たな吸殻を差し込む。俺はいつその煙草の残骸たちが雪崩を起こすのではないかと、内心ヒヤヒヤしていた。

「だったら少しは、地上に顔を出してもいいんじゃないか」

「そうもいかんよ。研究が最終段階に移行してね、大詰めなのだよ。故にワタシがここを離れるわけにはいかない。フフッ、それとも何かね？　ワタシに逢えなくて胸を焦がしていたのかな？」

「うん」

「素直過ぎるぞ」

　リアクションに困るだろうが、とアキナスは額に指を当てて軽く唸った。俺は本心から頷いただけなのに、何故だかアキナスを困らせてしまったらしい。

　まあ、確信犯だけどさ。

「ああ、そういや、エルの奴はここに来たか？」

　不意に次女のことを思い出して、せっかくだからアキナスに訊いてみる。

「エルか？　いや、前の検診以来、影すら見ていないが」

「んじゃあ、明日行かせるから診てやってくれ」

「どこか異常でもあったのか？」

「いや、エルにはハーゼルバイスにまで『おつかい』を頼んでてな、昨日戻ってきたばかりなんだ。だからまあ、念のためにな」

「なるほど。いかにもな親バカである君らしい判断だ」とアキナスは呆れるように苦笑した。

「親バカって……お前だって一応はエルの『母親』だろうが」

俺がその単語を口にした途端、アキナスは僅かに目を瞬かせから、やれやれと言わんばかりのオーバーな仕草で一笑に付した。
「は、は、お、や？　おいおい、またその手の話しかい。まったくいい加減に勘弁して欲しいね――――あの四人に、ワタシのことを『母』と呼ばせることも」
「アキナス……」
「アレは、正真正銘君の子だよ。君の血を引いた、君の為だけに生まれた存在だ。アレが生まれた原因は君で、ワタシは所詮、要因でしかないのだよ。ワタシに彼女らの母を名乗るほどの矜持はないし、自覚もない」
しばし互いに視線をぶつけ合ってから、どちらからともなく溜息を漏らした。
「――とかいう一連の流れの遣り取りを、俺達はこれまでに何回繰り返したんだろうな」
「さてね。ワタシは数えることに飽きたよ」
「同感だ」
ジュッ、とマッチを擦る音がして、アキナスはいつの間にか三本目に火を灯していた。
「――では何故、こんな不毛な会話を定期的に混ぜ返す必要がある？　まさか今更になって、家族ごっこでもしたいわけじゃあるまいに」
「そういうんじゃねぇけど……でもせめて、あの子達に優しくは出来ないのか？　仲良くやれとまでは言わないから」
「とは言っても彼らは……特にエルとシャンの二人は、どうしてだかワタシに憎悪の念まで抱いている始末なのだぞ？　それをどうしろと――」
「エレクトラコンプレックス――の、表れだとは思わないか」
アキナスの言葉を遮るように、俺は言った。
「確か……君の言う、娘が母を憎み、父を愛するという無意識下の心理的状況のことか。それが、いったい何だって？」

「つまり、少なからず子供達はお前のことを『母親』だって意識してるっていう証拠ではないかと」
「くだらないね」
アキナスはそう吐き捨ててから、四本目を点火した。空中に漂う煙がふと目に染みる。咽かえりそうなのを必死で堪えた。
「仮にそうだとしても、彼女らは無意識ではなく意識的に――いやむしろ、《意図的に君を愛するよう完成されている》。したがって、自分達以外に君との関係的アイデンティティーを持つ者に対しては、異常なほどの嫉妬を抱くのだよ。第三者でしかないワタシの――つまりは『母』という立場からの介入が心底気に食わないのだろう。それは独占欲というよりも、君への従属性からくる保護欲といった方が正確だろうな」
なにせ彼女らは、君を絶対的な主軸として存在しているのだから、とアキナスは再度その言葉を口にした。
「……」
俺は何かを言おうとして、結局は口を噤んだ。
「いずれにせよ、ワタシは別にどうもしないよ。ワタシは、あの子らを生み出した時点で既に役目を終えている。家族ごっこをしたいのは勝手だがね、決してワタシを巻き込んでくれるな」
嘆息と共に溢れ出す煙に巻かれて、俺はそれ以上の反論を諦めた。
「……んまぁ、お前のその答えも分かってたんだけどな。伊達に二十年以上の付き合いはしてないし」
「……二十四年と六ヶ月と十二日」
ボソッと、アキナスが掠れた声で何事かを呟いた。
「へ？」
「何でもない」
そう言ってアキナスは、犬でも追い払うかのようにシッシッと手を振った。
「用は済んだのなら、さっさと退室していきたまえ。これ以上君との談笑に興じているほど、ワタシも暇じゃないのだよ」

さいですか、と俺はわざとらしく一度肩を竦めてから、言われた通り早々にその場から立ち去ろうとして、

「あ、そうだ」と俺はもう一つの用件を今頃になって思い出し、彼女を振り返った。「外に派遣してた『救難聖人』に、召集をかけた」

「それはまた……全員にか？」

「そ、全員。だから、アキナス。お前もその一人として、近々地上に顔を出さなきゃいけなくなるから、今やってる『研究』とやらも、キリのいいところまで仕上げとけよ」

無茶を言ってくれるね、と彼女が最後の最後に、微かだが口元を綻ばしてくれたのを見届けてから、俺はキッチンワゴンを引き連れ、アキナスの書斎を出ようとして、

「あの台詞は……」

唐突に、アキナスの声が追いかけてきた。

「ぁん？　何か言ったか？」

それはまるで、喉から迫り上がってくる感情を塞き止めるように。

「……いや、何でもない。忘れてくれ」

ふうん、とだけ俺は鼻を鳴らして、これといって別段気にも留めず、そのまま部屋をあとにする。

「ただ――最初の台詞は、出来れば二十年前に言って欲しかったよ、イサナギ」

バタンッ、とドアを閉め切った俺の耳に、その言葉は当然届くはずもなかった。

それから八日後。

アイギーの補佐（っていうか監視）のもと、俺はペンを握り、机に詰まれた書類の山を前に辟易としながら、日々の業務に当たっていた。そんな最中、俺の仕事部屋にノックの音が響き、メイドのシュネーが静々と訪ねてきた。相変わらずの無表情を張りつけたまま、抑揚のない声音で、淡々とその事実を報告する。

「『救難聖人』の方々が、ご到着致しました」

そうか、と俺はアイギーに目配せをしながら、ゆっくりと席から立ち上がった。

第十五話　地下室の二人（後書き）

アキナスさんのラクガキ

＞ｉ２５９１９―２０８８＜

自画自賛みたいだけど、アキナスさんが好きすぎてやばい。彼女の幸せにする為なら主人公なぞ余裕で殺してみせる。

第十六話　『救難聖人』

厳粛な空気が、その部屋には張り詰められていた。
中央に置かれたドーナツ型の円卓には、『救難聖人』の面々が、静かに着席していた。唯一俺の両隣には、マキとアイギーの二人が泰然として控えている。俺は卓上で肘をつき、両手を組んで目を瞑っていた。
「おい王様よぉ、いつになったら会議は始まんだ？　いい加減待ちくたびれたぜダリィ」
声がした方に視線を向けると、ナチュナルパーマのかかった、ボサボサな茶髪の中年男――ルイド＝シュワルツが、苛々したように口火を切った。
「まあ、もうちょっと待ってろよ、ルイド。あと一人、この場に揃ってないだろ」
Oの字を描く机を囲む顔ぶれの中で、ポツンと一箇所だけ空席があった。もうしばらくは待機を強いられるかと思ったが、彼の到着は存外に早かった。
「申し訳ありません。遅くなりました」
噂をすればというか、『救難聖人』の最後のメンバーが入室してきた。
「おせーぞ、テオ」
ルイドは舌打ちを漏らしながら、その妙に色っぽい優男――テオドール＝エスコフィエをなじる。
「いやはや、今朝の仕込みの際に、ちょっとしたトラブルが起きて

しまって……何にしても、本当に申し訳ない」
心底すまなそうに頭を下げるテオドール。今の今まで厨房にでもいたのか、出で立ちがコックコートのままだった。
この城の料理長が席に着いたのを見届けてから、俺は改めて全員の顔をぐるりと見回した。
「では、皆揃ったことだし、『定例会』を始めようか」
そう宣言すると、十四人分の視線がいっせいに俺を射抜いた。一拍の空白を置いてから、俺の舌は軽やかに踊り出す。
「――さて、各国に間者として派遣していた諸君らにはるばると集まってもらったのは他でもない。もったいぶるつもりはないので単刀直入に告げておくが、『教会』が本腰を入れて動き出したことを予め明言しておこう」
『救難聖人』の十四人からは、これといって特筆すべきリアクションはない。皆一様にして重たい沈黙を貫いていた。
俺は努めて固い口調で続ける。
「表向きは教会の一員ではあるが、秘密裏にこちらと繋がっている多種族国家、『ハーゼルバイス』の国王から、教会からの外圧が掛かり始めたとの報告を受けた。曰く、『来る日の聖戦に備えよ』とのことだ。教会との争いが下火になってから、早くも十年。諸君らもここしばらくの諜報活動で、薄々勘付いているだろうが、教会は証拠にもなく第二次の《聖戦》とやらを企てているらしい。あの惨劇を、愚かにも再び繰り返そうとしている。これらのことから、単独行動をしている諸君らの安全を配慮し、一度帰還を強制させてもらった。教会の勢力は幅広く、そして根深い。いつ諸君らが信徒の者達に襲撃されるとも限らない――とは言いつつも、既にこの中で襲われた者もいるのではないか？」
俺がそう問いかけると、司祭服（キャソック）を着込んだ、初老とは思えないほどに大柄な男――アーヴィング＝グラスコーが小さく頷いた。その隣では修道服姿の姉妹が、あれか？　あれかな？　と事実を確かめ合うかのように顔を見合わせていた。

あの三人は何だかんだで目立つ格好だからなぁ、と俺は内心で苦笑する。大衆一般に紛れる分には都合がいいのだけれど、本家である教会側からにすれば、彼らの姿は一目瞭然だろう。

「しかしまあ、ここまでの道中、諸君らが無事で何よりだった。けれども、帰還して早々にこのような定例会を開いたことは、俺としても申し訳なく思ってる。しかしだからこそ、俺は君達に尋ねたい」

教会がのたまう『来る日の聖戦』とやらに、諸君らは何を思うのか。

「さあ答えろよ、聖人共。お前らの真意を」

果たして諸君らは。

「この俺に、いったい何を求める？」

「開幕（うたげ）を」
「調和（うたげ）を」
「破滅（うたげ）を」
「救済（うたげ）を」
「戦慄（うたげ）を」
「罪業（うたげ）を」
「教誨（うたげ）を」
「情愛（うたげ）を」
「夢幻（うたげ）を」
「審判（うたげ）を」
「暴虐（うたげ）を」
「真理（うたげ）を」
「空虚（うたげ）を」
「終焉（うたげ）を」

口々に紡がれたそれらの言葉を胸にしまいこみ、俺は傍に仕える優秀な部下二人にも、同様の問いを投げかけた。

「絶対的な正義をもって、我らに栄光ある勝利を」とアイギー。
「智略謀略張り巡らして、奴らに栄誉ある敗北を」とマキ。
よろしい、と俺は席を蹴って壇上にバンッと両手を着いた。
「上等だ、そして上出来だ！　異端に身を投じた、一片の救いようもねぇ自我論者共（エゴイスト）め。お前らの性根が腐りきってやがることも、概ね正気じゃねえってことも、改めて再確認させてもらった」
他人のことは決して言えないが、揃いも揃って全員が、泣く子も気絶するような悪人面でニヤついていた。ニヒィ、と俺も口端を吊り上げて笑い返す。
「ならば心せよ！　我々は、聖者たる前に生者であらねばならない。例え哀れなる傷者なれど、最後には腹を抱えて笑う勝者であらねばならない。我々は大義は、『生き残る』ことただそれだけである。だが！　殺す為に戦うことは許されない！　死に合う為に争うことも断じて許されない！」
その牙と爪の使い所を、決して違えてはならぬ。
過去に囚われるな。現在（いま）に生きよ。
現在に縛られるな。未来（あす）を見据えろ。
「我々の明日に、確証は足り得ない。約束などもありはしない。しかして恐れるな。かくしてたじろぐな。この俺――《畏憚》の魔王が、先陣を切ってお前らの明日を築いてやる」
さあ、この天下の大博打に乗っかってくる紳士淑女（ジャンキーアンドビッチ）はどこにいる？
〈我ら、御身への忠誠を誓い、等しく傅き、遍く頭を垂れる者〉
〈汝の血で十字を斬り、汝の骨で神の名に背く者〉
〈全てに祝福を与え、この楽園に福音を齎（もたら）せ〉
〈さればこの卑しき肉叢、哀れな魂、御身に畏み（かしこみ）捧げ給う〉

この場にいる全員が、異口同音にその決まり文句を唱えた。
それは、後戻り不可能な契約であり、後悔さえも置き去りにした誓約。
「けっこう。お前らの覚悟、しかとこの俺が受け取った」
では、これにて定例会を閉廷する。
以上、解散。

「あーやっと終わったぜダリィ」「ふぁ、眠い……寝よう」「あ、あのフィリ様、どうもご無沙汰しており……」「ええい、寄るでないわ鬱陶しい」「……ああ、もうすぐ祈りの時間だ。急がねば」「……やはり、ここの気候は最高だな。『蟲』たちも喜んでる」「セシリアー、あとで貴女の図書館にお茶しにいってもいいかしらー？」「あら、いいですね。それでは、お菓子も用意してお待ちしてますよ、グリンダ」「まったく、毎度のことながら、イサナギのあのテンションにも疲れるな。早くどこかで一服したい」「テオドール殿、拙者、空きっ腹でござる」「ええ、そうと思いまして、少し早いですが、昼食の準備は出来てありますよ」「あー、ウチも餓死寸前やでホンマ」「だってさ、姉さん」「……あたいは、別にまだいいけど」
ガヤガヤぞろぞろと会議室を後にする『救難聖人』に少し遅れて俺も退室すると、そこには象牙色の短髪に、褐色肌を惜しげもなく晒した二十代前半ぐらいの女が、仁王立ちで待ち構えていた。
ん、俺のファンかな？　とかいうつまらない戯言はボッシュートにしておいて。

「儲かってまっかー」
出で立ちについて言及するなら、細い足が伸びるローライズに、こげ茶色のブーツ。へその覗く丈の短いシャツの上から、艶やかになめされた皮のベストを羽織っている。むき出しにされた自慢の括れには、それ自体が術式である複雑な模様の刺青が彫られていた。
テレーニャ＝セルバンテス。それが、彼女の名である。
『空間の魔女』の別名を取るグリンダさんや、『書架の魔女』の異名を持つセシリアと同じく、大陸七代魔女の一人に数えられる人物であり、無論彼女にも『隷属の魔女』という二つ名が与えられていた。
「よくもまぁいきなり呼び出してくれたやんか、レイシ。こっちは商売上がったりやでホンマ」
腰に手をあて、やれやれとばかりに文句を垂れるテレーニャ。
「……」
「あん？　なにアホ面で黙っとるんやジブン？　ほれ、ウチがわざわざ商売切り上げてまで来てやったんやで、何か労いの一言でもあってもいいんとちゃう？」
というわけなので。
「ズッパシ」
とりあえずは斬りかかってみた
「ぬっ、ぬぉおおおおおおおお！！　なっ、なんっじゃこりゃあああああああ！？」
前屈みに腹を押さえながら呻きだしたテレーニャは、そのままバタリと倒れ伏す。
無論、血糊などは一滴も存在していない。
「うわあああぁ大丈夫かあああテレーニャぁあぁぁぁあああああ！」
俺も迫真の演技で倒れた彼女を抱き起こした。
「れ、レイシぃ……堪忍なぁ、ウチ、ここで終いやわ……」
「クソゥ、いったい誰がこんなことをおおぉ！？」
「く、黒髪で、アホ毛のある、クソ変態野郎や……あとロリコンや

で」
「言いたい放題言ってくれるじゃねえかテレーニャあああああ！」
「……グフッ、故郷のおっかさんと、旦那を残して、死ぬんか、ウチは……」
「テレーニャあああお前えぇ独身だろがあああ！」
「うっさいわボケ！　旦那はめっちゃイケメンなんや！　そういうことにしとけや！」
「うわあああんテレーニャあああ死ぬなあアア！」
「――ブホァッ、せめて最後に、テオの飯食ってから死にたかったわぁ……」
ガクッ、と彼女の身体から力が抜ける。握っていた手も床にあっけなく落ちた。
「テレーニャあああああああああああああ！」
天井を仰ぎながら、気分的に叫んでみて、
「テレーニャあああああああああー」
俺はテレーニャをお姫様抱っこし、近くの窓を蹴り開ける。
「テレーニャあああああぁぁーー」
ちなみに、ここは城の四階であるが、俺は「そぉいっ」と彼女を窓の外へと勢いよく放り投げた。
そして、お空の青に向って、ビシッと敬礼を送り、最後の慟哭で締める。
「テレーニャあああああああああああああ！」

「何さらしてくれとんじゃワリャァァアアあああああああああぁ――……」

階下から悲鳴じみた怒声が聞こえたような気もしたが、俺は肩を竦めながら窓を閉めた。
「――んぉっ」
驚いたことに、振り向いた先にはまたしても人の姿があって、不

覚にも俺は軽くのけぞる。
「な、なんだよ」
と、ぶっきらぼうな口調でものを言ったのは、ノースリーブのミニスカートという修道服（言わずもがなかなりの改造を施している）に身を包んだ金髪碧眼の麗しき乙女で――――え、とぉ、あれ。
「誰だっけ？」
ズガンッ、と発砲音がして、眉間に鈍い衝撃が駆け抜けた。思わず尻餅を着き、慌てて自分の額を心配してみるが、どうやら穴は開通していないようで安心した。
「祈れ、そして死ねっ！　エィィイイメン！」
銃口を突きつけられた俺は、改めて目の前の修道女を見上げた。綺麗な青い双眸を三角に鋭くし、熟れトマトのように顔を真っ赤にさせて、まるで親の仇か何かのように俺を睨んでいた。
「ちょ、ちょっ待てって！　冗談、冗談だって！　ジョークだよジョーク、オラウータンジョーク！　そんな久しぶりの再会でいきなりキレんなよ」
そんでさっそくとばかりに決め台詞を使って、俺を射殺しようとするな。俺だってまだタナトスの声は聞きたくない。
「む、んぅ……」
彼女も自分の行動を深く恥じ入ったかのように、顔面を薔薇色に染めたまま、右手のリボルバーを下ろした。
「えーと、俺も悪かったから、うん。すまん。けどよ、それにしても本当久方ぶりだな。ははっ、相変わらずの乱射魔（トリガーハッピー）なようで、ある意味安心したよ」
マリナ。
――と俺が口にした瞬間、再び頭蓋に広がる鈍痛。そしてえげつない程に重い一撃。乾いた銃声が、辺りに虚しく残響した。仰向けで大の字を描く俺の視線の先には、わなわなと震える拳銃と、悔しそうに唇を噛む彼女の顔。
「あ――あっ、あたいはアンナだよ！　ち、畜生っ！」

そう投げやりに吐き捨てて、『弾幕行進（ガンパレード）』ことアンナ＝シュヴェーゲルは走り去っていった。その際、目元を僅かに拭っていたように見えたのは、果たして自分の気のせいであったのだろうか。

ふと、視界の隅でマキが「あーあー」という表情を俺に送っていた。へっ、うるせー。

「あーもーレイシさんったらぁ、あんまり姉さんを苛めてやんないでよぉ」

上空からそんな台詞を降らせてきたのは、妹の方のマリナだった。二人は双子なので、まったくと言っていいほど見分けがつかないが、こちらはちゃんとした仕様の修道服を着用していて、慎み深く地肌の露出はほとんどされていない。んー残念。

「悪いな、『硝煙行軍（ブレットマーチ）』。アレだ、好きな子にちょっかい出したくなるガキの心理って分かる？」

「ん～その台詞、直接姉さんに聞かせてやりたいなぁ」

姉と同じく綺麗な長い金髪を波打たせながら、呆れたようにマリナは嘆息する。

「Ｏｈ……どうか言ってくれるな」

「はいはい、分かってるって」

あたしとしてもそっちの方が楽しいしね、とマリナは人が悪い笑みを浮かべた。

「んまっ、レイシさんもレイシさんで適度にデレてあげてよ。うちの姉もとことん素直じゃないから」

「ああ、善処する」

ニヤリ、と俺達は結託した悪党のように微笑み合った。

第十六話　『救難聖人』（後書き）

萎えるから読まないほうがええよ。

今回の元ネタ説明。

アンナとマリナの姉妹。

１８世紀後半、ドイツの魔女裁判で処刑された最後の魔女は、１７７５年に処刑されたアルゴイ地方出身の農婦アンナ・マリア・シュヴェーゲル（シュヴェーゲリン）だと言われてます。

図書館で借りてきた資料によると、そんな感じで書かれています。

ですが、ネットでちょい調べてみると、最近新しい資料が発見されて、彼女は処刑されず、６年後に獄死したということがわかったそうです。

とにもかくにも、魔女として殺された現実の彼女を、この物語では『ガンズウィッチ』な修道女として、双子に分けさせてもらいました。

ええただの皮肉です。

ＷＥＢ拍手……最初のページだけ変えました。

第十七話　王は解き放たれず、そなたにサンは救えない（前書き）

「……あー、あー？　てすてす、ボイスレコーダーのマイクテス。うん、オーケーオーケー問題なしの異常なし。もーまんたいですね……はい！　それでは気を取り直してごきげんよう。魔城に咲く一輪の菊の花とは何を隠そうこのあたし、クリュー＝サンテムムです。さて、これからあたしは、『天使博士（ドクターエンジェル）』ことトーマ＝アキナスさんのとこに突撃インタビューを決行しようとしているのですが、ぶっちゃけ気が重いです。というかあの人、怖いんですよ。いつも地下にこもってて何やってるか分かんないし、あたしもこの城に勤めて一、二年になりますが、あんま見かけたこともないですしね。接点がまるで皆無なんですよ。うぅ……『魔術学校（アカデミア）』卒業してココに就職したはいいけど、なんか周囲とか環境とか、抱いていた理想とチグハグで未だに戸惑うクリューちゃんです……んまっ、マキ先輩と一緒に仕事してる時点であたしの目的は概ね達成されてるんですけどね！」

「何が達成されているのですか？」

「ぬぉおおお！？　って、いきなり横から出てきたのはシュネーさん！？　メイド三人衆の一角であり、魔王の側室とも噂される、あの鉄仮面シュネーさんじゃないですか！」

「解説ご苦労様です。まあ、噂の部分に関して言えば、私が自分で流したもなのですけどね」

「そうなんですか！？　あざとい！　さすがメイドあざとい！」

「そんなことより、クリュー様は城内で独り言の応酬をしながら、いったい何をしていらしたのですか？」

「うぃ、実は来月号の『月刊ティルナノーグ』で、レイシ様特集を組むことになったんですよー。だから、現在色々な方々に取材をしていて……かくかくしかじか」

「……ほぅ、それはなんと超絶にステキなご企画。では、主の『ア

ンナトコロ』や、『コンナコト』があられもなく激写され、さらには克明な文体でありありと表現されるということなのですね？　嗚呼――素晴らしい、そして素晴らしい。これは是非とも買い占めざるを得ません」

「あ、そうだ。せっかくなのでシュネーさんにもインタビューしたいんですけど、いいですかね？」

「勿論、構いませんよ。いえ、むしろ私ほど主に詳しい者はおりませんでしょう――という傲慢な矜持を誇っているくらいですから、何なりとお聞きください」

「では、さっそくなのですが……ズバリ、レイシ様の魅力とは？」

「エロスです」

「は？」

「とにかく主は、存在がエロスなのです。泣かしてやりたい童顔。しゃぶり尽くしたい指。弄（まさぐ）りたい胸。撫で回したい尻。抱きつきたくなるような細い腰。お持ち帰りしたくなるような美脚。いかに語ろうとも、我が主のエロさは到底描写しきれません。クリュー様はご覧になったことはありますか？　主ときたら、湯上りには決まって薄い布地の浴衣だけで、その辺をウロウロと徘徊しているのですよ？　嗚呼、なんてけしからぬことでしょう。トロンとした目元に、胸元は豪快にはだけ、頬は色づいたように上気して――まったく、あれでは襲って犯して穢してくれと自らアピールしているようなものではないですか。私は、いつ誰に主が押し倒されるのではないかと心配で心配で夜も寝られず……というよりも私がその犯人になってしまいそうで、いつもそこはかとない不安を――――と、おや、クリュー様？　はて、まだ話の途中だというのに、いったいどこに行ってしまわれたのでしょう？」

「えーと……とりあえず、レイシ様の貞操がやばい、と。メモメモ

第十七話　王は解き放たれず、そなたにサンは救えない

胡坐をかきながら、マリナが姉の背中を追いかけていく姿を見届けていたら、後ろからウチのシェフに声を掛けられた。
「ボンジュー、ムッシュ。ちょっとよろしいですか？」
「ん、テオか。どうしたん？」
よっこいしょういち、と俺は片膝をついて立ち上がる。正面のテオドールは抱かれてもいいくらいに爽やかな笑顔で、
「今晩の献立のことなのですが、せっかく『救難聖人』のみなさんが久しぶりに集まったのですし、なにか豪勢なものにしようかと考えているのですが」
「ふーん……ならいっそのこと、立食パーティー式にでもするか？」
「なるほど、それは名案ですね。しかし、そうなると肝心の献立を何にするか、ですが……」
テオドールは腕を組んで思案し、俺も首を捻りながら、ぬーんと呻ってみた。
しばらくして、俺の右斜め頭上に電球が灯る。
「北の森の……『ヌシ』なんか、どうだ？」
パチンッ、とテオドールが指を鳴らした。
「流石はムッシュ！　では、さっそく『ヌシ』を主体にしたメニューを考えましょう。ああ、でも、『ヌシ』を狩りにいく役目は、いったい誰が？」
「んー……シュネーにはあまり戦闘はさせたくないし、子供達だと途中で仲間割れ起こすだろうし、まさか『救難聖人』の誰かにやら

せるわけにはいかないから……そうなると、サンとロート辺りが妥当か？」

「ほお、やはりムッシューレイシの采配には脱帽です」

両手を合わせて顔を綻ばすテオドールの脳内では、既にメニューの組み立てがなされているのだろうと俺は予測する。

しかし、ただ一つ。

「……久々に、『赤頭巾（ロートケープヒェン）』の真性が拝めるかな」

それだけが、少し気掛かり。

――というわけで、サンとロートの二人を城の玄関前に呼び出してみた。

「んじゃ、ヌシ狩りはお前達二人に任せるけど、何か異論はあるか？」

とりあえず給料上げてくださーい、とサンがしれっと抜かしやがったが、勿論のこと俺は黙殺する。ロートはもじもじと俯いただけだった。

「せめて特別手当とかはないんですかぁ」

なおも食い下がるサンに、俺は「ねーよ」との一言で、ばっさりと切り捨てた。

むぅー、と頬を膨らますサンは、いつもの町娘のような格好ではなく、金髪の太い三つ編みはそのままに、濃緑色のベレー帽を被り、紺色のタンクトップと、迷彩柄のレギンス、それと両手にはフィンガーグローブという、どこのタスクフォースだと思わず突っ込みたくなるようなファッションセンスを見せ付けていた。

しかして真に注目すべきは、彼女の両脚に装備された、ソレ。

完全に漆黒の光沢に包まれたフォルム。膝辺りまでを覆う具足のように思えるが、靴底部分には小さな車輪がそれぞれ四個ずつ付属されており――ありていに言ってしまえば、ローラースケート以外の何ものでもないわけであるが。

「『鉄の靴（トーテンタンツ）』……やっぱり持ってきたか」

俺の神妙な声音とは裏腹に、サンは至ってマイペースで、

「ええ、教会との戦争時は随分と大活躍でしたけど、それ以降はずっとほったらかしでしたしね。たまには使ってあげないと可哀想かなって」

ふふっ、とサンはふと懐かしむように目を細める。

「いやあ、にしても思い出しますねぇ」

「うん？」

何気なく相槌を打つと、サンは意味ありげな上目遣いを俺に投げかけた。

「あなたと、初めて喧嘩した日のことですよ」

まさか、わたしの『硝子の靴（ルヴェールアンビシオン）』が、ああも呆気なく粉砕されちゃうなんて、まったく予想だにしていなかったですけど。

「なんだよ……昔の話だろ。まさか、まだ根にもってんのかよ」

「いえいえ、そんな滅相もない。それに、今の自分には、シュネーから貰い受けたこの『鉄の靴』がありますしね。第一、わたしの矜持は、あなたに負けた瞬間から、そこらのドブにでも吐き捨てましたよ……けど、ただ――」

そこで言葉を区切り、サンはふと、綺麗に晴れ渡った蒼穹を仰いだ。

「ただ、なんだよ？」

堪え性のない俺は、我慢し切れず彼女に台詞の先を促してしまった。

クスリ、と彼女は小さく微笑んで、

「――ただ、あの時訪れた、あなたと本気の喧嘩は、もう出来ないんだなあって思うと、少し虚しくて」

だったら、わたしは、いっそのことずっとあなたの《敵》のままで良かったのかもしれないなあって。

サンは嘯くように、言った。

それまるで、王子様の到来を待つ、夢見る乙女のそれ。

「……勘弁してくれよ」

お前が敵側のままとか、怖くて想像したくない。

「じゃあ、時々でいいから、わたしと手合わせぐらいしてくださいよ」

「やなこった」

「どうしてもですか？」

「悪いけど、お断り」

「それは残念」

いけずだなあ、と口に手を当てて苦笑を漏らすサン。

俺は何とも言い難い気持ちで、くすくすと相好を崩しているサンを見遣った。

『灰かぶり（サンドリヨン）』。

純粋な攻撃力だけで言うなら、《最強》。

単に『速さ』のみで述べるなら、彼女の右に出る者はいない。

俺にしてみれば彼女は、出来ることなら是非とも戦いたくない相手の一人でもある。

加えて現在のサンは、恋坂焦（こいさかこがれ）――もとい『大賢者（ヴァイナモイネン）』ハイバーン＝ネグラントが遺（のこ）せし四十八が名作の一つである、『鉄の靴』を所持している。言っちゃあなんだが、俺も俺でけっこう歳だし、実際この場でガチンコやってみたとしても、勝負がどう転ぶかは自分にも皆目見当がつかない。

「あ、あの……レイシ様っ」

と、今まで空気に徹していたロートが、渾身の勇気を振り絞ったみたいに裏返った声を響かせた。

「ん、なんだロート？」

俺が視線を向けると、彼女は一瞬身を竦ませたようだったが、

「えと、あの……アタシなんかに、ヌシを捕まえてくるな、なんて、荷が重過ぎるというか、その……」
「無理だってか？」
「あっ、えぁ、その……」
ぎゅぅっとフードの両端を握るロートに、ズイッと俺は顔を近づかせた。
「おい、ロート」
「っひゃぃ！？」
ビクッと肩を揺らした彼女の眼前に、俺は小振りの巾着袋を差し出した。
「ほれ、受け取れ」
「こ、これは……る、『月光石（ルナライト）』……！」
月光石（ルナライト）。その名の通り、月の魔力が宿ると言われている希少価値の高い魔鉱石で、常に淡い光を放っているのが特徴である。ロートは巾着の口から、その石の輝きに魅入られたかの如く、放心したように凝視していた。
「まあ、まず前提から言うとだな、ヌシ探しには、お前の『鼻』が唯一頼りなんだよ。北の森とは言ったって、すこぶる広範囲だ。だから、獲物を見つけ出す為の手立てが最初に必要なわけ。そこで、お前の出番ってわけよ。叶うなら、今夜の宴までには調理をしなくちゃいけないから、なるたけ日が暮れるまでには戻ってきて欲しいんだけど――――ん、ちょっと、ロートや、ちゃんと聞いて――」
「みぃいいなっぎぃってっキタアアァアァあぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあっ――――――――――！！」
気づけば、そこには一匹の『人狼（ヴェオウルフ）』が、高らかに雄叫びを上げていた。

「ウケケケッ、ケケッ！？　ぷげらっアヒャハィイヒャッ！　ウヒョゥッ、アタシの時代キタキタキタ――――――――――！！」

人前では頑なに外すことのなかった真紅のフードを取っ払い、その見事な赤毛をブンブンとパンクロックのように振り乱しているロート。普段は頭巾の下に隠されている両耳も、これまた惜しげもなく披露されていた。

猫耳……じゃなくて、狼耳か？

どちらにせよ、獣耳萌えの俺にはたまらん光景である。うん、そんな俺はきっと病気。

「アヒャヒャウエヒャッ処女は犯せ！　泣く子は殺せ！　野郎共は犬の餌ァアああ！　お待たせしましたみんなのアイドル『赤頭巾』ちゃんだぜファァアアック！」

ヒャッハー！　とイイ感じにトリップしちまってるロートを尻目に、俺とサンはこっそりと話し合いの席を設けていた。

「……ねえ、レイシ様。やっぱりあの状態のロートとバディ組む自信ないですよ、わたし」

「だってしょうがねーじゃん。節電モードのロートじゃ、正直使いものになんねーし」

「でもぉー」

「ギャップ萌えだ、ギャップ萌え」

「いやいやいやいや、ギャップって問題じゃないでしょアレは、もはや」

ひそひそと審議中だった俺らの背後から、トチ狂った調子の声が降りかかった。

「あぁあん？　なにコソコソしてんだテメェら。行くんだろ、狩？　ならさっさとしやがれファッキンビッチが」

「あ、あのさ、ロート……」
　今度は俺の方が勇気を振り絞って口を開いてみると、
「んだぁこのチンカスがぁ！？　こちとら馬鹿みたいに戻ってきたキチガイ共のために骨折ってやろうってんだありがたく思いやがれ犯すぞゴラぁ！　ケツ穴に蝋燭ブチ込まれたくなきゃ余計な口出しすんじゃねぇ早漏野郎が！　ってか、テメェ女みてーな情けねぇ顔しやがって、黄金水ブッかけて泣かしてやろうかかあ゛あ゛ぁん！？」
　規制音ちゃんと仕事してください。放送コードに引っ掛かりっぱなしである。言論の自由がいつでも保証されていると思ったら大間違だぞ。
　あと女みたいな顔とか言うな！
「えーとさ、時間のことなんだけど、日暮れまでには戻ってきて欲しいなあって……」
「二時間だ」
　ロートは耳まで裂けたかのような笑みで、Ｖサインを俺に突きつける。
「二時間あれば余裕で戻ってきてやる。それまでテメェは全裸で待機だ！　あとそのまま血尿が出るまで絶頂でもしてやがれ！」
ＷＲＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ！！　とロートは奇声を張り上げながら、もの凄い速さで走り去っていった。その際に、バサッと空から赤い頭巾が俺の顔面に覆い被さった。
「あっ、待ってよロートぉ」
　ギュルルルルルッと靴底の車輪を起動させ、サンは慌てたようにロートの背中を追いかけていった。
　ポツーン、と一人その場に残された俺はというと、
「……ぬーん」
　一抹の不安を拭いきれないでいたのでした。まる。

自分に誇れるものはあるか？　と訊かれれば、サンは声を高らかにして即座にこう答える。

誰をも追い越し、誰にも追いつけぬ速さをもたらしてくれる、この両脚と。

そして、生まれて初めて自分を抜き去ってくれた《異形》の彼に、思う存分敗北を喫したことであると。

――まあ、わたしの勝手な想いでしかないんだけど、ね。

「チンタラしてんじゃねぇぞ×××軍隊崩れがっ！　ぐずぐずしてっとテメェの×××に一升瓶を×××××して×××××すんぞオラァ！」

今回ばかりは、規制音もしっかりと己が役目を果たしてくれたようであった。涙が出るほどに今更である。

城と街を囲う巨大で堅牢な外壁を越えて、サンとロートのペアは山脈の麓に広がる奥深い森の中枢を、もの凄いスピードで駆け抜けていた。その森は典型的な落葉広葉樹林で、中には齢何百年とも知れない大樹も存在しており、上空を見上げれば、幾千の枝葉によって完成された天井が、キラキラと輝く木漏れ日を降らしていた。。既に王都とは大分距離を置いており、中級の魔物も大手を振って徘徊しているような危険地域でもあった。

「もーしょうがないなぁ――――『第一初速（ファーストギア）』」

サンが『起動呪文（オープンスペル）』を呟くと、キュィィィィインと『鉄の靴（トーテンタンツ）』がモーター音をかき鳴らし、彼女のスピードがぐんと跳ね上がる。

『鉄の靴』。

古くよりその名を馳せる七人の魔女。

世界の真理を悟った三賢人。

それらを遥かに凌駕する存在――『大賢者（ヴァイナモイネン）』。

しかして、もう百年近く前に消息を絶ったとされる『大賢者』ハイバーン＝ネグラントは、その生涯の中でどういった気まぐれか、大陸中のあちこちに計四十八の名器名作を遺していた（この数については、ハイバーン自身が行方を眩ます以前の手記で明らかにしている）。

ところが、それらどれにしたって素材や仕組みは理解不能。その技術に関しても解明不可能。未知数ばかりのブラックボックス。ある種のオーバーテクノロジーがふんだんに盛り込まれたそれらは、現在でも学者達にとって永遠の研究対象である。

いずれにせよ、その内の一つが、サンの所有する『鉄の靴（トーテンタンツ）』であった。

使用者の魔力を動力源として稼動し、絶叫レベルの機動力をその者に与える。だが、この『鉄の靴』の本質は決してそこではない。

「近い、近いぜ！　肉の匂いだ！　ハッ、野郎ぉこっちに気づいて逃げるどころか、わざわざ向ってきやがった！　いいぜぇ、どっちが狩る側かきっちりと躾けてやる！」

と、ロートは牙を剥き出しにして、鼻をひくつかせた。

サン自身は魔力探知や、勿論のことロートのような鼻の良さも持ち合わせていないので、その標的を視認しない限りはどうしようもないのであるが――

「！」

それもどうやら時間の問題。

突如として、真横の木々をなぎ倒して現れた白い壁。

サンはぶつかりそうになる前に急遽方向転換し、近くの樹枝を足場に飛び移った。

「来たかオッコトヌシ！」

心躍るように叫びながら、ロートは低く腰を落とし、戦闘体勢に入った。対する相手も、威嚇するように鋭く咆哮を上げた。

見た目から言えば、馬鹿みたいにデカい猪。全長はゆうに十メー

トル前後はあるだろうか。正しくは『戦猪（ヒルディスヴィーニ）』という名称があるのだが、数年前、澪士が初めてこの魔物を目撃したとき『オッコトヌシや！　オッコトヌシ様や！』と連呼した為、いつの間にかその名が定着してしまったという経緯を持つ。

しかして、その巨体から丁寧に切り分けられた霜降りは、一度舌の上で確かめてみれば病みつきになること絶対である。

「おうおうおうっ、いい具合に肥えてんじゃねぇか豚公が！　今すぐこのロートちゃんがミンチにしてやん――」

彼女の口上はそこで途切れ、代わりにヌシの突進により、あえなく吹き飛ばされてしまった。

「あちゃー」

眼前で起きている凄惨な光景に、サンは思わず目を覆いたくなった。

不意を衝かれたロートが、ボロ雑巾の体で地面に転がったのをヌシは決して見逃さず、止めとばかりにその太い前足で、ロートの細い矮躯を幾度となく踏み潰していた。巨大かつ硬質なその蹄で、ロートの身体は何度も何度もぐちゃぐちゃにプレスされていく。無論、彼女の原形などは欠片も残っておらず、何とも愉快な挽肉にへと成り果てていた。

「あーあ、どっちがミンチにされちゃってるのよ、あの狼ちゃんは……ったくもぉ、仕方ないな――」

――――『第二変速（セカンドアクセル）』。

そう呟くと同時に、サンの身体が、薄っすらと残像を伴い始めた。

「父様っ、これなんてどうでしょうか？」

僅かに頬を染めつつも、長女のエデがパーティードレスの裾をお

淑やかに摘まみ上げる。
「おお、エデ、そなたは美しい」
「キャッ、父様ったら」
「パパ、ねぇパパ！　あたしのは？」
フッティングルームのカーテンを取り払った末娘のシャンも、艶やかにドレスアップしており、俺に感想を求めてきた。
「シャン、そなたも可愛らしい」
「えへへー」
「父上、私への評価もどうか……」
ユートはスラッとしたモデル体型に、タキシードをこれ以上ないまでに着こなしていた。身長が泣けるほどに平均値な俺は、ユートのように何を着ても似合ってしまうルックスがそこはかとなく羨ましい。
「ユート、そなたはカッコイイ」
「父上、そんなっ、もったいなきお言葉を……」
ユートが恭しくも頭を垂れる。
『救難聖人』の無事帰還を記念して、今夜立食パーティーを開くのだと子供達に告げたら、さっそくとばかりに俺を衣裳室へと引き込み、こうして衣装選びに参加させられていたのだった。まあ、途中からなんだかファッションショーみたいな趣向に移行していたが、まあ俺は俺で、子供達がおめかしに取り組む光景を存分に堪能していた。
と、うっかり油断していたら。
「親父ぃ親父親父親父ぃぃぃぃいうわあああああああああああん！　あぁあああ…ああ…あっあっー！　あぁあああぁクンカクンカ！　クンカクンカ！　スーハースーハー！　スーハースーハー！　やべぇいい匂いだなぁ…くんくんはぁっ！　親父の髪モフモフしたいお！　モフモフ！　つーかサラサラ！　親父の髪の毛サラサラ！　髪髪カリカリサラサラ……きゅんきゅんきゅい！！　え！？　見…てる？　親父が僕を見てる？　親父が僕を冷たい目で見てる

よ！　親父が僕を可哀想な目で見てるよぉおお！　ほ、ほーっ、ホアアーッ！　ホアーッ！！」

「エル、お前は鬱陶しい」

そして気持ち悪い。

「パパに近づかないでよ、エル姉」シャンが機敏にも姉の肩に飛び乗り、何とも華麗なフランケンシュタイナーを喰らわせる。

「父上の神聖な髪に気安く触れるとは、なんてうらやま……恥を知れ！」とユートが床に転がったエルを担ぎ上げ、完璧なアルゼンチンバックブリンガーを決める。

「屁のツッパリはいりませんことよ」とエデは――うおっ、まさかあの体勢からくる技は、き、筋肉バスターだと！？

――そんな兄妹達からの温かく容赦ない洗礼を一身に受けたエルは、力なくその場に倒れ伏した。

「グフゥホッ……い、いい気になるなよ、超人共め。僕は『親父と爛れた淫乱生活を送ってみ隊』の四千四百四十四天王の一人に過ぎない……次期に残りの四千四百四十三天王がお前らを抹殺しにくるだろう。ふはははっ、それまで精々暢気に笑っているがいい。最後の最後で、親父と結ばれるのはこの僕さぁ！　フゥーンハハハハハハハハハハハハハハハハ――――ガクッ」

と完全に反応のなくなったエルを放置し、三人は早々に衣装選びを再開する。ちなみにエルは、黒のハイネックノースリーブと、暗色のベルボトムに皮製のロングブーツ、というスタイル以外は受け付けないと自ら公言しているので、衣裳選びどころか、ファッション全般に興味がないようである。

「……まったく」

そんなねぇ、俺のお古を頑なまでに着衣し続けなくてもいいのにねぇ。

しかもそれは、二十年以上も前の――俺がまだ『教会』に所属していた頃の服装なのである。

グリンダさんがオーダーメイドで作ってくれた、何かと丈夫な衣

服ではあるのだけれど。
ぼんやりとそんな雑念を抱いていると、廊下側から聞き覚えのある声がした。
「サーン、サンどこだー」
扉を開け放って、部屋の入り口から、ひょっこりと《怪物》の顔が覗く。
「あー、レイシがいたのだー」
「よお、スー」
「レイシ、サンが見当たらないのだ。知らないか？」
「ああ、サンなら今出払ってるぞ」
ロートが有言実行を果たしてくれるなら、二時間以内には帰ってくるらしいが。
「そうなのかー。サンめー、あとで遊んでくれるって言ったのにぃ」
ぷんすかー、と不機嫌そうに眉をしかめて怒りを露にするスー。
そして不意に、俺との視線を絡み合わせた。
それはまさに閃光が如き刹那の出来事。
「すっぺらぴっちょん？」
「うっぱぁカニバリズム体操」
「ほえほえにゅーん」
「トゥッディへろもっし～」
お約束の謎言語発動。
グッ、と俺達は互いにサムズアップを交わすが、子供達の頭上には、一斉に「？」マークが大量発生していた。推し量れるかな、子供達よ。そこに意味を追求してはいけないのだ。心が通じ合えば、多分それは紛うことなき真実なのさ。
「あーレイシ、それと一つ朗報なのだ」
そこでスーが、おもむろに自分の後方を指差した。
「アイギーがお前を探してたのだぞー」
マジか、と慌てて腰をあげようとした時、既に全てが遅かったのだと俺は痛感する。

「見つけましたよっ、レイシ様」

ドドドドドドドドドドドドドドドドとかいう効果音が背景に浮上していらっしゃるようなお方が、仁王立ちで俺の名前を呼んだ。

ああ、我らが鬼軍曹、アイギー＝オーガスタス。

赤褐色の長髪が、いつにも増して所々重力を無視して反り返っています。

けれども側頭部辺りにチョコンと生える二本の角が、今日はやけに尖っているように見えるのは、きっと気のせいだと思いたい。

「まったく……定例会が終わった途端、急に姿を消すんですから。さあ、早く仕事に戻りましょう、レイシ様」

「い、嫌だ……働きマンにはなりたくないっ、オッコトヌシ様ぁ！」

「また訳の分からんことを……何と言おうと、駄目なものは駄目です！」

「クソゥ俺を解き放て！　俺は国王だぞ！」

「だから何なのですか！　というか、国王なら国務というものがあるでしょうが」

「黙れ小娘！　そなたにサンが救えるか！」

「何故ここでサンの名前が!?」

しかし、いい加減この不毛な言い争いにも終止符を打ちたくなってきたのも事実。したがって俺は、早くも最終手段に打って出る。

何となく察しがついた者もいるかと思うが、まさにその通り。

正々堂々、猪突猛進に正面突破、ただそれだけである。

アイギーが待ち構える部屋の出入り口に向って、俺は一直線に駆け出した。

さあ、いざ。

「押し通ぉぉぉぉぉぉぉるっ！」

押し通れませんでした。
「あなたって人は……まったく、いったい今年でいくつですか」
「六十七です」
キリッ、と俺は決め顔でそう答える。
「そうじゃりません！　自分の立場を弁えて、歳相応の行動をとってくださいって言ってるんです。あとその決め顔やめてください。なんかムカつきます」
「う、うるさいうるさーい！　俺は老体だぞ、定年だぞ、とっくに還暦越えてるんだぞ！　だからもっと労れ敬え崇め奉れー！」
「だまらっしゃいこの六十七歳児！」
六十七歳児……初めて聞いたわ、そんな単語。
現在、アイギーに首根っこを掴まれ、キャリーバックかの如くズルズルと引きずられている俺。まるで散歩を嫌がる飼い犬になったような気分。だとしたら、飼い主はアイギーということになるのか。ん、待てよ。俺、アイギーの上司だよね？　記憶が正しければ、俺ってば王様のはずだよね？
あるぇー？
「なあ、アイギー」
「なんですか？」
「お前、結婚とかしないの？」
んなっ！？　とアイギーが声を百八十度裏返した。
「な、なんですか藪から棒に」
「だって、お前もそろそろいい歳だろ。気ぃ抜いてたらあっという間に三十路になっちゃうぜ？　本人も気づかぬうちに婚期逃してたなんて事態になったら、そりゃ一大事だなあって思って――というお節介」

「――お、鬼族の寿命は二百年前後なんです。なので、婚期とか何とかは、レイシ様が心配なさらずともまだまだ余裕なんです」

それが彼女なりの虚勢なのか、もしくは本音なのか、いかんせん俺には分からない。

「……んまぁ、アイギーは美人だからな。その気になれば、相手なんか腐るほどいるか」

アッハハハハー、と俺は空っぽの頭で笑う。

アイギーはしばらく怒ったように閉口していたが、やがて、

「……何故、そんなことをお聞きになるのですか」

単調な声音で、アイギーは尋ねる。

通路に敷かれた絨毯との摩擦が、不思議と心地良いものに俺は感じられた。

「いやさ、俺のせいでお前の大事な人生の一部が損なわれているのだとしたら、非常に申し訳ないなって」

仕事のせいで恋愛が出来ないだなんて、なんか切ないじゃない。

「損なうも何も、元々あなたがくれた人生です」

「《奪った》――の間違いだろ」

再び、俺達の間で幾許かの沈黙が続いた。

俺は、アイギーに途方もない借金を負っている。例えそれは、俺が一生涯を捧げたとしても、到底清算可能な額ではなかった。それでも俺は、せめて利子の分だけでも彼女に返済出来るよう、ありとあらゆる手を尽くしてみせる。

彼女の幸せの為なら、俺は自分の死だって厭わない。

否、むしろ進んで短剣をこの胸に突き刺してみせよう。

「……いずれにせよ、そういったことはまだ考えられません」

「別に、考えてみてもいいんだぜ？　例えばマキとかさ――」

「何で私があんな白髪ハゲと！」

思いのほか、アイギーは声を荒げて即答した。なるほど、どうやらあまり脈はなさそうだ。

そう俺が苦笑していると、アイギーは変わらず正面を向いたまま、

「私は――私は、あなたの支えになるって決めたんです」
チラッとアイギーの方に視線を向けてみるが、彼女の表情は髪に隠れてうまく窺えなかった。
「あなたの右腕になって、あなたを支えてみせるって、マキの奴と一緒に誓ったんです」
それ以上、彼女が言葉を口にすることはなかった。俺は心中で『ごめん』と小さく呟く代わりに、
「――ありがと」
「え？」
「んにゃ、別に」
その台詞が、彼女の鼓膜に届かなかったことに感謝しながら、俺は大人しくアイギーに引きずられ続けた。
「そういや、お前が俺の名前の後に『様』をつけるようになったのって、いつ頃からだっけ？」
「――忘れました」
「あ、そう」

自分のせいで誰かの人生が犠牲になるのは嫌だ、と彼は言う。それが自分にとって親しい者なら、尚更のことだと。
――だったら、レイシ様が責任とってくださいよ。
一瞬、喉元まで出かかった台詞を、必死になって飲み下す。
そんな他愛ない軽口でさえ、今の自分には荷が重過ぎた。
『忘れた』とわざと素っ気なくあしらったのは、アイギーなりのささやかな復讐だった。
生来の口調を矯正し、彼を敬称で呼び始めたのは、かれこれと十三年も前のこと。しかし彼女は、まるで昨日のことのように覚えて

いる。

『な、なんだよアイギー？　そのレイシ「様」ってのは。何か気恥ずかしいから、やめてくれよ。それにそのバカ丁寧に改まった口調も。ぬぉームズムズすんなぁ』

『これは、ケジメです。あなたを支えてみせるっていう、私なりの意思表明です。だから、慣れてください』

困り果てた顔で頭を掻く彼の仕草も、一つ一つアイギーは克明に記憶していた。

ひとの気持ちも知らないで、世に言う『女の幸せ』を押しつけようとする彼が、心底憎たらしかった。

あなたの右腕として仕えることが、私の喜びなのに。

あなたの役に立つことが、私にとって最大の幸せなのに。

他の誰かと結ばれて、幸せに満ちたまま舞台を降りろとのたまう彼が、無性に腹立たしくて。

私の気持ちなんて、あなたはまったく知らないで。

それなのに、あなたはいつまでも私に負い目を抱えて、気を遣い続けて。

「あ、そうだ……なあアイギー、今日のパーティ、俺と一緒に踊ってくれないか？」

ああ――本当に、なんて腹の立つ人なんだろう。

その頃、衣裳室に残された四人の子供達は。
「親父さ、嬉しそうだったね」
床で大の字を描きながら、次女のエルはポツリと呟いた。
「そりゃ、『救難聖人』の皆さんが久しぶりに帰ってきたんですもの」
クローゼットの中身を見分しつつ、長女のエデは言った。
「ふふふっ、パパはね、寂しがり屋だから」
そんな微笑を漏らしたのは、ミディアムボブの栗毛を指に巻きつけているシャンだった。
「何にせよ、父上の喜びは私達の喜び」
どこか誇らしげな口調のユートは、着用したタキシードに糸のほつれ等がないか確かめていた。
「ハハッ、まぁそうだろうね。だって親父(僕)が喜んでいるんだもの」
「……そう。結局わたくし達は、あの方の片割れであり、分身。父様とわたくし達は、同等であり同一。それ以上でも、それ以下でもない」
「そしてあたし達は、パパを生かす為に、生まれてきた」
「私達は、父上を死なせない為に、生かされている」
さながら台本を読み上げるように、四人は口々に言葉を紡いだ。
隅々まで分かりきった事実を、もう一度再確認するかのように。
「だから所詮、僕たちの『愛』は鏡に向かって叫ぶ、自分自身に対する自己愛でしかないのかもしれない」
「それでも、わたくし達は、あの方を愛するほか自身の見つけ方を知らないのですわ」
「故に我らが存在する意味も、意義も、理由も、証明も、全て父上だけが示してくださる」
「結局パパとあたし達は、お互いに残酷な関係なんだね」
「それか運命共同体とでも言うのかな……いや、違うか。僕らは親父そのものなんだから」

鯨木澪士の、実際に《血を分けた》子供である彼らは、見間違うほどにそっくりな笑い方で、思う存分自嘲を満喫した。

クツクツ。

くすくす。

にやにや。

けらけら。

芝居の成功を祝すかのように、予定調和を孕んだある種の儀式を成し遂げた子供達は、どこまでも無機質に、無気力に嗤い合っていた。

「――――あ、そういえば」

そこで、シャンがふと閃いたように、

「今夜のパーティ、いったい誰がパパと踊るの？」

その瞬間、兄弟達の間に電流が走った。

第十七話　王は解き放たれず、そなたにサンは救えない（後書き）

蝉の短編集。
『断片の短編』　新連載です。

というやらしい告知。

第十八話　軍神だけダンシング（前書き）

「はいはーい、毎度お馴染みクリューちゃんでーす。えー只今メモ帳を確認中……ふむふむ、なるへろー。どうやら今日は他国に単身赴任されていた『救難聖人』の方々が久々に帰郷なさり、定例会なるものは開いているらしいです。次のターゲットであるアキナスさんもそこに出席されているとかで、そろそろ終わるかと思う時間帯なのですが……あ、あっ、やってきました。『救難聖人』の皆さんです！　こちらに向かって廊下を歩いてきます。さあ、突撃しますよー……位置について、よーいド」

「おい、何やってんだクリュー」

「ン――って、およ、マキ先輩じゃありませんか。会議お疲れ様です。見て分かりませんか？　取材ですよ取材」

「取材にクラウチングスタートはいらんだろうが。つーか、いい加減そのポーズ止めろ。はしたない」

「やんっ、マキ先輩ったらあたしの突き上げたお尻の曲線美なんかで発情しないでくださいよぅっ」

「アホか、お前に劣情を催すような部位はねーよ」

「がびーんっ。その発言であたしのライフポイントはマイナス値まで落ち込みました。レイシ様の言葉を借りるなら、ユアァショォォオックです」

「ったく、レイシ様みたいな訳分からんことばっか言ってないで、仕事すんなら真面目に仕事しろ」

「ケッ、女に興味が無いってか――ああもう、これだからホモは！　これだからホモは！」

「おいテメッ、今なんつった」

「知ってるんですよ、マキ先輩がセメなことくらい！　そんでレイシ様がきっとウケなんだ！　『夜の残業が、まだ残ってますよ』とか気障ったらしくほざいてガンガン攻めていっちゃうんだ！　『や、

やめろマキ、俺達そういう関係じゃ……ひぐぅう』とかレイシ様も可愛く喘いじゃうんだ！　絶対そうなんだ！」

「やだ、何この後輩怖い」

「いいですもん、いいですもん！　そんな感じの薄い本作って城内どころか国中に無料配布してやりますもんだドンチクショウぉおおおお！」

「クリューって、ちょ、待ってよおいっ」

「先輩のガチホモ童貞薄らハゲぇえええええええええ！」

「――じょっ、上等だぜこのジャジャ馬がぁ！　上司にそんな暴言吐いてタダで済むと思うなよ！」

「きゃーガチホモ先輩が追いかけてくるぅ～。ウフフ～悔しかったらあたしをお捕まえになってごらんあそばせ～」

「待て待てぇー嬲り殺してやるー」

「おい、トーマさんよ……なんだアイツらは」

「ん？　あぁ気にするな、ルイド。ただのバカップルだ」

第十八話　軍神だけダンシング

涙ぐみながら走り去っていった姉の背中を、仕方なしとばかりに追いかけていった『硝煙行軍（ブレットマーチ）』ことマリナ＝シュヴェーゲルが、結局のところ辿り着いた先は、案の定自分達二人のマイルームであった。帰還後すぐに荷物を置きに入室してみたが、日頃から掃除がなされていたのか、埃が蓄積された箇所などは皆無で、二年前に出て行った時とほぼ同じ状態だった。メイドの三人に感謝である。

「うぅ、うっ……」

「もー、いい加減泣きやみなよぉ姉さん」

これもまた予想通りというか、そこではアンナが寝台にうつ伏せになってグズグズとべそをかいており、マリナはさっそくとばかりに姉を宥める作業に取り掛かっていた。

「うぅっ、う……わ、忘れられてたっ……たった二年会わなかっただけなのに、うぅーっ……あたいの顔、忘れられてたよぉ……」

「そ、それはアレだよ、レイシさんのジョークだって。ね？　ジョークだよ」

めそめそと嗚咽を漏らす姉のアンナを、妹のマリナは甲斐甲斐しくも慰め続ける。

「し、しかも、よりにもよって、あたいとマリナの名前を間違えらるしっ……ヒック、み、見分けがつくように、わざわざ修道服を改造したってのに、い、未だに間違えられるとか……うぅうっ、もうヤダぁ……」

ずびゅー、とシーツの端で鼻をかむアンナ。
「え、えと、それもお約束というか、何というか、ただの冗談だって」
内心ではニヤニヤとほくそ笑みながらも、マリナは懸命に姉のフォローに回ってみるが、
「……だ、だってアイツ、どっからが冗談で、どこまでが本気なのか分かんねーんだもん……」
まあ確かに、と苦笑しつつもマリナは頷いた。
軽薄であったり、かと思えば、誠実であったり。どこからが嘘で、どこまでが本当なのか。その境界線が、いつだってあやふやで、曖昧としている。
色々な意味で、喰えない人物であるのだけれど。
「まあ案外、根は単純だと思うんだけどねぇ」
鳩みたいに惚けた彼の顔が、ふと脳裏に映った。
「へ……？」
「んーんー、何でもないよ。それよりもさ、姉さんも今夜のパーティ用にドレス選ばなくちゃ。それでさ、思い切ってレイシさん誘っちゃいなよ」
ＹＯＵやっちゃいなよー、とマリナは愉快そうに囃し立てるが、当の本人は枕を抱えたままブンブンと首を横に振った。
「むっ、無理っ……あたい、撃っちゃたもん。アイツ、絶対怒ってる……」
「怒ってない怒ってない。むしろ笑ってたぐらい」
「……ホント？」
「本当だって。だから、ね？　涙拭いて、顔洗って、目元が赤いままじゃおかしいよ」
「う……うん」
渋々とながらも頷く姉に、世話が焼けるなぁ、と妹は溜息を吐かざるを得ない。まったく、ウチの姉はなんて可愛いのだろう、とかシスコンぶりを発揮しつつも、マリナは着々と今後のプランを組み

立てていた。
それでも、我が姉をこうまでも骨抜きにさせた魔王のことが、マリナは少しだけ憎らしく思えた。

澪士が部下に連行され、子供達四人の間には閃光が弾け、姉想い妹が泣きじゃくる姉を励ましているその一方で。
六畳一間の和室。藁のいい香りのする畳敷きの床。諸々の茶器と共に、中央には茶湯釜が乗った囲炉裏があり、控えめに白い煙を吐き出していた。若草色の土壁には『ゆっくりしていってね！』という達筆な字と、腹立たしい顔の生首が描かれた謎の掛け軸が吊るされている。そして、そこでは二人の男女が互いに正座で向かい合っていた。
「これを……つまらぬものでござるが」
「ほお、これは見るからに美味しそうで」
「甘芋の餡を薄皮で包んだ饅頭でござる」
「――確か、シイナ氏は北東の『ミチノーク』のお生まれでしたか」
「然様。我が故郷の名物でござる」
「それでは、こちらも取って置きのを――」
「そ、それはもしや、ヤンハオ殿っ」
「やはりシイナ氏にはお分かり頂けましたか。そう、これは極東でも一部の地域でしか栽培されていない貴重な茶葉――その名も、黄金玉露」
「お、黄金玉露……やはりそうでござったか。いやはや、まさか生

きてその実物を拝める日がこようとは思わなんだ」
「某（それがし）も、故郷の地を踏むのは四半世紀ぶりでしたが故、この茶葉を入手出来るとは夢にも思っていなかったのですがね」
「しかし、ヤンハオ殿。この茶葉は極東の王家でも滅多に飲めない程の最高級品と聞き及んでござるが……いったいどちらで」
「……まあ、よいではありませんか」
そう誤魔化すように笑うのは、ヤンハオと呼ばれた眼帯の青年。
澪士と同じく鴉の濡れ羽のような黒髪をしており、肩甲骨まで伸びた部分は、うなじの辺りで一本の束にしてまとめていた。袖口が大きく弛んだ白い長衣に、同色の下衣を着用している。脇には一本の太刀が据え置かれていた。
「……そうでござるな。これは拙者が野暮でござった」
僅かに目を伏せて頷くのは、シイナという若い女。片目が前髪で完全に隠れており、後ろ髪は髷のように結われていた。一際人目を引く水色の髪と、その独特の口調は、北東地方の出自である何よりの証拠。ヤンハオと同じく、傍らには大小二本の刀が揃えられている。どこのヴィジュアル系か。
「湯も沸いたようですね、しばしお待ちを」
ヤン＝ハオは言い、正面の釜から湯を専用の柄杓で汲み上げ、急須に流し込んでいく。
「……」
シイナ＝ミクモは、その光景をじっと眺めていた。
「さあ、どうぞ」
そっと音も無く湯気の立った湯飲みを差し出す。
「かたじけない」
ズズゥ……と一口すすってから、シイナはカッと目を見開いた。
「こ、この鼻を突き抜けるが如き芳醇な香りと、舌の上でじわりと広がる優美な甘み。それでいてどこまでも奥深く――嗚呼、いかに何と言おうとも、筆舌に尽くし難し！」
まさに黄金玉露の名に相応しい、とわなわなと震える唇で絶賛す

るシイナ。
「あ、シイナはん、ほのお饅頭も美味れすね」
ヤンハオが口に饅頭を咥えながら、もごもごと呟いた。

それからしばらく経って、双方の挙動が落ち着いた頃。シイナはゆっくりと口火を切った。
「……それで、ヤンハオ殿は如何様な話があって、拙者を呼び出したのでござるか？」
「と、言いますと？」
「惚けるのはお止めなされ、『龍殺し』」
先程までとは打って変わって、シイナの瞳は氷のように冷たく、かつ、鋭かった。
「これが単なる茶会ならば、拙者以外にも他の誰かを招くのが定石。そして、ヤンハオ殿は他者との調和を何よりも重んじるお方。然るに、拙者だけをわざわざここに召したということは、何ぞ裏があってのことでござろう」
シイナの凍てつくような視線を受け流すように、ヤンハオは柔和な笑みを浮かべ、自分の湯飲みに新しく茶を注いだ。
「そうですね、概ねシイナ氏の察する通りです」
茶飲み茶碗を両手で丁寧に包みこみ、口元に運ぶ。一回だけ口内に含ませてから、ヤンハオは、ほぅ、と熱い吐息を漏らした。
「……とは言っても、『裏』などと称すには少々物言いが過ぎるものですよ、シイナ氏。単純に某は、同じ『東』の人間として対談の席を設けたかっただけなのです。いかんせん、西の者に聞かれては、何かと障りのある話題もあるものですから」

シイナの湯飲みが空であることに気づいたのか、ヤンハオは急須を手に取り、とくとくと液体を注ぎいれていく。

そういえば、とシイナは何となく室内を見回してみる。部屋の四方に奇怪な文字が書かれた長方形の紙が貼り付けられていた。ヤンハオの『術符』である。どうやらこの部屋全体に結界を張り巡らしているらしい。

結界――と言うは容易いが、実際にこの手の技はあまりに高度が故に、施行出来る者は酷く限られる。一般によく使われる魔力障壁とは違い、結界とはすなわち、『領域』を定め、区切り、結びつけるという特性を抱える。そして、ヤンハオの術符による結界は、あの『空間の魔女（グリンダ）』でさえ干渉することは困難を極めるレベル。

――これ程までの念の入れようとは。

シイナは心中でボソリと呟きながら、自然と居住まいを正し、目の前の青年を見据えた。

ヤンハオは、

「同じ『救難聖人』とは言え、その内情は人それぞれです。我々がまだ教会に所属していた頃――『従僕せし異端者（ハエレシスレセプトゥス）』であった頃から、我々は組織内における共同体でありながらも、常に一つの『個』でありました。その根本は、現在でも何ら変わってはいません。それに加え、とどのつまり彼らは『西』の人間。某やシイナ氏のような『東』の者とは、大分事情が異なっています」

「それは、もっともでござるが」

ヤンハオがつらつらと述べた内容に対して、シイナは反駁出来ずに口篭もった。確かに、西と東の人間では、文化も風習もまるっきり違っている。その違和感や不調和の連鎖は、シイナ自身も身に染みて痛感していた。地続きである北東の『ミチノーク』出身のシイナはそれ程でもないが、しかし海を隔てて存在する極東の出であるヤンハオにとってみれば――あとはなべて推し量れるものであろう。

「……龍の生き血を浴び、『龍殺し（ゲオルギウス）』の名を与えられて国を追われた身の上ではありますが、この大陸に蔓延る思想や思考、それらに

準ずる考え方も、我々のそれとは根底的に相容れるものではないと、某は、これまでの生涯の中で思い知らされました」

ふと、ヤンハオの表情に暗い影が落ちた。何かの追憶に沈み込んでいるものとシイナは判断するが、彼女はヤンハオの人生録など欠片も知らない。だから、彼がどれほどの悲しみや苦しみに苛まれているのか、シイナには皆目見当もつかないが。

しかし、シイナは静かに言い放つ。

「この場にて、レイシ殿のお言葉を拝借してみるなら――『互いの相違を認め合わなければ、まず物事は始まらない。どんなに理解し合えなくても、納得出来なくても、互いに歩み寄る姿勢さえあれば、とりあえずは、それでいいんじゃね？』――と……」

きょとん、とヤンハオが目を瞬かせた。

「例え、ヤンハオ殿がどのような存念を抱いていようとも、我らは遍く矛盾と不和を承知で、あのお方に付き従っているのではござらぬか？」

「……まったく、おっしゃる通りです」

目を細めて、どことなく愉快そうに苦笑するヤンハオ。

「某も、どうかしていたようです。何でしょうかね、久々の帰還で緊張でもしていたのでしょうか」

或いはその反対でしょうかね、とヤンハオはクツクツと身体を揺らした。

「――もしや極東で、何かあったのでござるか」

西の者に聞かれては、何かと障りのある話題。

先程からシイナは、その台詞が妙に引っ掛かっていた。

「……いえ、何でもないのです。どうか忘れてください」

そう言ってヤンハオはシイナの質問を遮断し、何を思ったか、おもむろに起立した。

「ヤンハオ殿？」

「シイナ氏の名菓やこの玉露も、我らだけで楽しむというのは、どうにも忍びないと思いませんか。某（それがし）は、レイ氏や他の方々にも振る

舞って差し上げたい」
　見下ろしてきたヤンハオの微笑に応えるように、シイナは僅かに肩を竦めてから、首をもたげて頷いた。
「レイシ殿の狂喜する姿が、目に浮かぶでござるな」

　部下に連行された俺が到着した場所は、無論、刑務所でも留置所でもなく、言わずもがな魔王の業務室である。
「レイシ様、先日、民衆議会にて提出された民法の改正案と、新たに受け入れた難民の種族別リストです。全て目を通しておいてください」
　ドサッ、と俺の机に書類の束を乗せていくアイギー。うへぇ。
「それから国の収入源でもある塩の売買についてですが……」
「あぁー、商売関連は全部テレーニャの方に押し付けておいて」
「テレーニャ様にですか？　しかし、お帰りになったばかりの『救難聖人』の方にそのような――」
「ええの、ええの。アイツ何だかんだで商売と聞いたら否が応でも触手が勝手に動いちゃう奴だから」
　さて、ノリで窓の外に放り投げちゃったけど、生きてるかな。まあ、大丈夫でしょ。問題ない問題ない。
　と、俺がデスクワークに辟易としていた矢先に、ヤンハオとシイナの二人が手土産をぶら提げてやって来た。
　手土産をぶら提げてやって来た!?
「レイ氏、極東の珍しいお茶を手に入れましたよ」
「レイシ殿、拙者は甘味を持って参った」
　部屋の入り口で、ヤンハオが茶葉の入った瓶を見せびらかし、シ

イナは箱詰めにされた饅頭を掲げていた。
ガタッ、と俺は椅子を蹴って立ち上がる。
「ぶれいくたいむキタコレ！」
緑茶。饅頭。ウェヒヒヒヒやべぇ嬉し過ぎて禿げそう。
「お気持ちはありがたいのですが、お二方、それはまた別の機会になさってくれないでしょうか。今、ようやく仕事に本腰が入ってきた所なのです」
「それは、致し方ありませんね」
「ふむ。王の仕事を邪魔してしまうのは、こちらも本意ではございん。では、また日を改めて訪れるとしよう」
あら？
「申し訳ありません、せっかくのお気遣いを」
アイギーがぺこりと頭を下げる。
「いえいえ、アイギー氏も国を支えるお立場。どうぞお気になさらず」
「レイシ殿、お勤めご苦労でござる」
そう言い残して踵を返していく彼らの背中に、俺は声をかけることすら出来ずにいた。
「さあ、レイシ様。仕事に戻りましょう」
くるっと振り返ったアイギーは、晴れ晴れしいまでの笑顔で、俺に絶望的な宣言をかましてくれた。せめてもの抵抗として、俺は至極感情の抜け落ちた、能面のような顔で睨みつけてやるが、
「なんですか、その顔は」
例によって例の如く、素っ気無くあしらわれてしまった。

＞ｉ２７９２６―２０８８＜

二階の廊下を渡っていると、窓から城門を潜ってくるサンとロー

トの姿が見えた。急遽、シュネーは二人の同僚を出迎えるために玄関にへと行き先を変更する。吹き抜けになっている広い玄関ホールを抜け、外に出て二人が到着するのを待った。

「お疲れ様です、二人とも」

声が届く範囲に入ってくるのを見計らって、シュネーは二人に労いの意を伝えようとするが、

「何がオツカレサマだクソッたれめ！　ファックファックファックファックファァァアアアアキンッ！」

ロートは地面に唾を吐き、そして、今に至るまでその両手で引きずってきた『獲物』に蹴りを入れた。

その見るも巨大な白毛の猪――『戦猪（ヒルディスヴィーニ）』にである。

「クソッ糞ッ！　ただの豚公ごときにアタシが挽肉にされるなんてファアアアアック！　しかもこっちは反撃する暇もなくそこの××××アバズレにオイシイとこ根こそぎブン盗られたんだぞおい！　あ〝あ〝ぁ腹が立つ腹が立つ腹が立つぅッ！」

ガリガリと爪を突き立てて頭皮をかきむしるロートは、苛々を抑えきれないように地団駄を踏む。

シュネーはチラリとサンを一瞥するが、彼女はお手上げというふうに万歳をした。

一方のロートはといえば、奇声を上げながら既に息絶えた猪の巨躯にゲシゲシとナイスなミドルキックを喰らわし続けている。

シュネーは一度軽い溜息を吐いてから、事前に澪士から託されていた赤いフードを手に、死者に鞭打つ行為を繰り返しているロートに声をかけた。

「ロート」

「うるせぇ何だこの梅毒持ちがっ――――――！？」

ズボッ、とシュネーは無理矢理にもロートに赤頭巾を被せた。ロートはそのまま覚束ない足取りでフラついたかと思うと、ペタンとその場にへたり込んで、その強制着用させられたフードの両端をぎゅっと掴んでから、一言。

「……ふ、ふぁ……疲れ、ましたぁ……」
はふぅー、と長い吐息を漏らすその様は、何だか萎んだ風船を連想させた。魔力抑制の術式が込められた赤いフードによって途端にしおらしくなったロートは、しばらくしてからヨロヨロと立ち上がり、「あ、あの、すみません。アタシ、お先に休ませてもらってもいい、いいでしょうか？　何だか、疲れちゃって……その、すみません」
そう腰を折って、深々と頭を下げた。
サンとシュネーが揃って頷くと、ロートは再度「すみません」とか細く呟いてから、城の中に消えていった。その場に残された二人は、互いに顔を見合わせてから、何ともいえない微苦笑を浮かべる。
「……さて、シュネー。このお肉ちゃんをテオ料理長にお届けしたいんだけど、手伝ってくんないかな」
「仕方がないですね」
悪いねぇ、とサンは同僚の肩を叩いた。

宴会を開く際には、いつも玄関ホールの無駄な広さを利用している。外が次第に薄暗くなっていくのに対して、天井の豪奢なシャンデリアが自動的に火を灯し始めた。今やホールは立派なパーティ会場にへと変貌しており、近衛兵団の兵士や武官、魔術師小隊の隊員や文官達も各々に着飾っていたりいなかったりして、自由な時間を過ごしている。列をなしたテーブルには満漢全席とも引けをとらない料理の数々。その中でも目を奪われるのは、サンとロートが有言実行に仕留めてきたオッコトヌシ様のフルコースである。俺も早く食いたい。
「静粛に！」

アイギーが轟くような声で一喝し、ホール内が張り詰めたように静まり返る。
「では初めに、魔王陛下の挨拶から」
『救難聖人』と共に主賓席に着いていた俺は静かに起立し、一度だけ威厳たっぷりに咳払いをしてから、
「うぃーす」
うぃーす、と所々から合唱になって返ってくる。アイギーはずっこけていた。
「えー……今宵の宴は『救難聖人』の無事帰還を祝してのことですがー、ぶっちゃけ理由は何でもよかったっていうかー、まあとにかく、しっかり食って、がっちり飲んで、ちゃっかり騒いで、バッタリ倒れて、明日もきばって働きましょーってことで一つ」
ゲラゲラと沸く会場内を一旦手の動きで治めてから、俺はゆっくりと杯をかざす。
「んじゃ、『救難聖人』の無事帰還と、ティルナノーグの平穏を祝して――乾杯」
乾杯！　と全員の杯が勢いよく掲げられた。

「イエーイ親父の瞳に乾杯ぃ！」
さっそくとばかりに、次女のエルが俺に絡んで――いや、絡みついてきた。
「俺はお前を相手するのに困憊」
「ヒューッ親父のギャグセンスに僕は完敗！」
「そんな娘の将来が父は心配」
「だったら今すぐ神社に参拝！」
「まったくいつまでこの流れを続けるんだーい」

「親父の方こそノリノリだったやないかーい」
ルネッサ～ンス、と俺らはカチンッとワイングラスを鳴らした。
なにこの親子会話。
「んー？　親父は何飲んでんの？」
エルが俺のグラスを覗き込んで訊いてくる。俺は「林檎酒のアルコール抜き」とだけ答えておいた。
「それただの林檎ジュースじゃん！」
「酒はあんま好きくない」
「えーそんなぁ……それじゃ僕の『親父を泥酔させてーのベッドに運んでーのくんずほぐれつのニャンニャン計画』が台無しだよぉー」
「計画名なげーよ」
内容も恐ろしいわ。
「なら、夜のデュエットとでも言い換えようか？」
「やだ、オシャレ」
いやいや、そうじゃなくて。惑わされないで、俺。論点がまるでズレてますからね。
「ほらほら、親父の為に料理貰ってきたーの」
いつの間にか、俺の目の前にエルが持ってきた料理の皿が並んでいた。
「おぉ、これはありがてーの」
「冷めないうちに食べてーの」
「いただきますーの」
「嫁ぎーの？」
とりあえずエルの腕が首に回ってきたので、俺は渾身の裏拳で撃退する。
「フッ……まったく親父は、デレツンが過ぎるんだね！」
萌えるんだぜ！　とエルはぼたぼたと鼻血を垂らしながらサムズアップした。俺は酸欠になるのではないかと思うほど嘆息してから、エルに厳しく言って聞かせる。
「いいか、エル――俺、父。お前、娘。オーケー？」

「その前に親父――僕、女。親父、男。おーけー？」
う。やばい、言い返されてしまった。流石は我が娘。一部で女版『鯨木澪士』と囁かれるだけのことはある。まあ実際、容姿が似てるだけに間違われることもしばしばあるのだけれど。
いや、そんなことよりも――と俺は周囲を見回した。どうしたことだろうか、他の子供達のツッコミが飛来してこないとは。そろそろこの次女の暴走を止めに来て欲しいのだけれども。
「なあ、エル。ユートとエデとシャンの姿がさっきから見えないんだけど……」
主賓席にも座っていなかったから、後から遅れてやってくるものかと思っていたのだが。
「フフッ、兄貴達？　兄貴達なら、ほら、あっちの左奥の方にいるじゃないか」
エルが指差す方角に目を向けてみると、確かに子供達の姿が――しかし、何故だか三人は恨みがましそうな視線を絶えずこちらに送っていた。否、正確にはエルのにやけ顔を睨みつけているようであったが。
「なんで、あんな隅の方に」
「フフフッーン、何でだろね」
そしてエルは、心底愉快そうに口元を歪ませていた。

父親とのダンス権をかけて、熾烈で過酷な争いを繰り広げた子供達ではあったが、今はただ、虚しさだけが募る貶し合いを重ねていた。
「糞っ……まさかあそこでエルが『国士無双（ライジングサン）』を完成させるとは……」
「そりゃ、ユート兄がリーチなんて焦ってかけるからだよ」

「あぁ、まんまとエルの策謀に嵌りましたわ。わたくしが親の時に勝負を決めてれば、今頃はわたくしが父様と……」
「エデ姉は地道に平和（ピンフ）でツモってればよかったんだよ」
「なっ……そういうシャンこそ、二翻役なんて狙ってるからエルにしてやられたのではなくて？」
ざわ……ざわざわ……と穏やかではない空気が兄妹達の間に漂っていた。
そこで「ふんっ」と忌々しそうに鼻を鳴らしたのはユートだった。
「まったく誰だ。勝者が父上をダンスに誘うまでの間、他の者は父上に近づいてはならないという条件を課したのは」
「「お前だ長男」」
妹二人にツッコまれた兄は、ヤケクソ気味に手に持ったワイングラスを仰いだ。

テーブルに並ぶ料理を自分の皿に盛り付けているアイギーに、わらわらと集まってきたのは、魔術小隊の女性隊員達だった。
アイギーが振り向くと、何故だか「うわぁ」という小さい歓声が起こった。
「あ、アイギー隊長。マキ司令を見かけませんでしたか？」
気を取り直してから、その中の代表で尋ねてきたのは、司令補佐のクリューであった。
「いや、知らんな」
アイギーが素っ気なく答えると、女性隊員達は「絶対近くにいるはずですって」「逃がしゃしませんよー」「抜け駆けは禁止ですかんね」「クリュー司令補佐！　西側方面はまだ捜索してないです！」
「よし探せ！　草の根かき分けてでも捜し出せ！」と姦しくも去っていった。
アイギーはしらけたような目でその集団を見送ってから、ポツリ

と、
「……女相手に情けないな、マキ」
「うるせ」
アイギーの隣で、ゆらーりと空間が蜃気楼のように歪んだかと思うと、次の瞬間には白髪の青年が姿を現していた。所謂、『透明化（インビジブル）』の魔術である。基本原理は『幻視（ヴィジョン）』と同じく、周囲の温度と光の屈折を利用して、自身を不可視状態にする術である。
「あの娘らは、お前を舞踏に誘おうとしていたんじゃないか？　付き合ってやればいいじゃないか、この色男め」
もしゃもしゃとサラダを頬張りながらアイギーは同僚をからかうが、
「あーいう手合いは苦手なんだよ、正直」
反対にマキは苦虫を噛み潰したかのように吐き捨てた。
「仮に一人でも応じてやれば、全員の相手をしなくちゃいけなくなる。だから面倒臭いんだよ」
例えば特定の一人だけと踊った場合、翌日からその相手との関係を噂されたり、隊の空気が悪くなったりするのを、マキは経験則から悟っていた。
男性隊員からのやっかみや嫉視も、出来ることなら受けたくはない。
「だったらいっそのこと所帯でも持ったらどうだ？　それなら噂も立つまい」
「肝心の嫁はどこにいる」
「ゴロゴロいるじゃないか、お前の外面だけに釣られらた、哀れな娘達が」
ケラケラと笑うアイギーに、マキは憤然とした様子で通りすがりの給仕人からワイングラスをひったくり、一気に飲み干した。
「それにしたって、お前があまりにも女と遊ばないから、密かに男色家疑惑が立っているぞ」
「――ハンッ、どうせテメーが広めたんだろ」

「無論だ」
「……ブッ殺してぇ」
「おっ、ヤル気か？　いいぞ、いつでもかかってこい」
不敵な笑みでフォークを突きつけるアイギーであったが、
「こんな宴席にまで、テメーとの喧嘩を持ち込む気はねーよ」
思いのほか、あっさりとこちらの挑発を流されてしまう。
「つーかアイギー……まさかその身なりで、俺とまともに闘えるとでも思ってんの？」
嘲笑というよりも、半ば呆れた返ったようにマキはアイギーの着衣を指差した。
「うぐ」
アイギーは自分の格好を見下ろして、思わず呻いた。
現在、彼女が着用しているのは、自身の髪色と同じ情熱的な赤色のパーティードレスだった。絹の滑らかな触り心地に、身体の線が露骨なまでに表れたデザインで、背中は大胆にもばっくりと開いており、胸元は首輪のリングと布地によって覆われていたが、逆にどこか婀娜っぽく、扇情的だった。
普段の凛々しい軍服姿とはまるで違うスタイルに、周囲からもヒソヒソと「おい、おれの眼球腐ったかな？　アイギー隊長が女に見える」「やばい、オレもだ。隊長が女にしか見えねえ」「むしろ隊長って女だったのか？」などという囁きがあちこちで湧いていた。
先程の女子隊員らが驚いたように感嘆の声をあげたのも、偏にアイギーの艶美さのせいであった。
「こ、これはシュネーが勝手に選んだもので、け、決して私が率先して着たわけじゃ――」
しどろもどろに言葉を紡ぐアイギーの顔は、今更ながらの羞恥にかられたせいか、薔薇のような紅に色づいていた。
「……あ、そ」
特別マキは興味もなさそうに、自分の皿に大量の肉を乗せていた。

「フィリ氏、フィリ氏、某（それがし）が料理を持ってきましょうか？」「ええい、我に馴れ馴れしく近寄るでないわ『龍殺し（ゲオルギウス）』！　ああ鬱陶しい！」「う、鬱陶しい……」「なんやなんや、ハオやん、またあの嬢ちゃんに振られたんかいな」「ヤンも懲りないね。君と彼女じゃ、相性が最悪だってのに」「いえ、カルネイロ氏。いつか、フィリ氏と心通わせる日が来ると信じて某は……」「ハオやんのロリコンっぷりにも困ったもんやな～。なぁ、トーマはん？」「少女愛者という点なら、イサナギの方が専売特許だろう」「にゃはは、そりゃそうや」

「……」

テレーニャにアキナスめ……好き勝手言いやがって。

俺は玄関から正面の大階段を上り、壁際に沿って作られた二階通路の手すりに凭れかかりながら、ホール内を俯瞰していた。そして俺のちょうど真下から、件の『救難聖人』トークが聞こえてきたのである。まことに遺憾と思います。

「――と、こんなことしてる場合じゃなくて」

うちの『軍神』さんを捜索せねばなりませぬ。

と、ことのほか苦心することもなく、俺は早々にアイギーを発見出来た。

「アイギー」

真っ赤なドレスに身を包んだアイギーは、通路から外に突き出たバルコニーで、一人ぼんやりと城下の夜景を眺めていた。

「レイシ様……」

俺の声に気づいて、アイギーはゆっくりとふり返った。

「なんだよ、こんなところで」

そう言いながら、俺は彼女の隣に歩み寄る。

「いえ、ただ、やはりこの格好を晒すのは少し……」
「今になって気恥ずかしいってか――というよりも、お前がこういうパーティに出席するのって珍しいよな。たまに顔見せたとしても、いつもの色気のない軍服仕様だし」
「……随分とストレートな物言いをしてくれますね」
「だって俺、正直者だしぃ」
「というのは嘘ですね」
ばれたか、と俺は笑いながら頭を掻いた。アイギーも「あなたが嘘吐きなことは、十全に熟知してます」と苦笑した。
「でも、そのドレス――すごく似合ってるし、綺麗だと思うよ」
俺が率直な感想を漏らすと、アイギーは困ったように俺から視線をそらし、
「例え嘘でも、言って貰えれば嬉しいものですね」
何とも自虐的な忍び笑いをこぼした。
「嘘じゃねーよ」
俺は慌てて訂正するが、アイギーはまるで相手にしてくれない。
「……そういえば、もうすぐダンスの催しが始まりますね」
「ああ。さっき、マキのやつが大童で逃げ回ってたな」
「レイシ様も、戻ったほうがいいのでは？　きっと、ご子息様達が探していますよ」
あなたを誘うために、とアイギーはどこかもの寂しそうに微笑んだ。
俺は。
「断ったよ」
と少々不機嫌っぽく唇を尖らせながら言った。
「え？」
「エルがしつこいぐらいに口説いてきたけど、断ってきた」
「な、なぜ……？」
「だって、俺はアイギーを最初に誘ったわけだし」
それなのに自分の娘と先に踊っては、失礼千万というものだろう。

「……わ、私はまだ、そのお誘いへの返事は、していないと思いますが――」
「じゃあ、今聞かせてよ」
仕事中に私語は禁止です、と誤魔化されたその返事を聞かせてよ。
「わ、私は、その――」
それでもなお言いよどむ彼女の手を取りつつ、俺は恭しくも跪いた。驚愕といった感じに目を見開くアイギーに、俺は改めて頼み込んでみる。
「ミス・アイギー。俺と一曲、踊ってはいただけませんか？」
上司と部下といった関係なんてまるで関係なく、俺は目の前にいる一人の女性と相対していた。
「……」
困惑の境地に立たされたようにアイギーは、おろおろと言葉を失っていた。
「別に無理にとは言わない。この場で俺とお前は、対等な立場なんだ。嫌なら嫌で断ってもいいんだぜ？」
けれどもアイギーは「……違うんです」と首を振った。
「その、私……す、ステップとか全然知らなくて――」
「ははっ」
何だそんなことか、と俺は呵々と肩を揺らしながら立ち上がった。
「任せろ、俺もそんなのよく知らん」
魔術師小隊や近衛兵団の中から有志で集まった演奏者達が、それぞれの楽器を携えて隊列を作っている。楽団名は魔王の趣向で『ブ

レーメン』と名付けられている。
　シュネーは空になった皿やグラスを片付けながら、ふと小一時間前のことを思い返した。
『しゅ、シュネー！　レイシ様から一緒に踊ってくれと頼まれたんだがどうすればいい！？』と怒鳴り込んできたアイギーの切羽詰った形相に、シュネーはクスリと笑ってしまった。
　おぉお！　というどよめきが辺りから沸き起こって、シュネーは視線を正面の大階段の方に向ける。
　魔王が軍神の手を取りエスコートしながら、優雅な足取りで階段を降りてくるところだった。泰然としている澪士とは裏腹に、アイギーは面映そうに顔を俯けていた。
　やがて音楽隊が、指揮者のタクトの振りで軽快な音を奏で始める。他にも十数の組が踊っていたが、シュネーの網膜は魔王と軍神の二人だけを淡々と映していた。
　滅茶苦茶な足さばきとリズムに戸惑う軍神と、子供のようにはしゃぐ魔王の姿を。
　しかし、彼らを指差して嗤う者はここにはいない。元々、身内だけで開かれた宴会なので、正規のステップを知っている者は多くない。皆それぞれ流れる演奏に合わせて、好き勝手に踊っているのであった。
「何だか、お似合いでありますね」
　不意に横から声がしたと思ったら、モスグリーンの頭部が視界に飛び込んできた。相変わらずの灰褐色のつなぎを着た、ピノである。基本的に引きこもりな彼女が、地上に出てくるとは珍しい。
「羨ましいですか？」
　自分と同じ光景を映しているであろう瞳に、シュネーは問いかける。
「……小生は、あの人に大切なモノを貰ったであります。だから、これ以上の何かを望むというのは、すごく傲慢なことだと小生は思うであります」

ぎゅぅっと自分の左胸を掴んだピノは、そのまま重苦しく沈黙した。彼女が手を当てた場所に、その《大切なモノ》があるのだろうか。

「そうですか」

私は羨ましいです、とシュネーは表情を一切変えずに呟く。

「でも、それはきっと、毒のように罪深い気持ちなのでしょうね」

そう言ってシュネーは、すぅと眩しそうに目を細めた。

先刻、澪士がホール全体を見下ろしていた場所には、葡萄酒のグラスを傾けたマキの姿があった。転落防止の欄干に身を預けながら、マキは魔王と軍神のワルツなんだかフォークダンスなんだか判断のつかない舞踏を目で追って、

「やるじゃん」

と、心底愉快そうに鼻を鳴らした。

一方、パーティ会場の隅では、エルは他の兄妹達との対面を果たしていた。

「親父にあっさりとシャルウィーダンスを断られた件について、何か質問ある？」

ユートとエデとシャンの三人は、チラッとお互いに目配せをしてから、

「「「ぷぎゃー」」」

ビシッと若干の忍び笑いと共に人差し指を突きつける。

「チクショォオオオオオオ！！」
次女の叫びは虚しく木霊した。

第十八話　軍神だけダンシング（後書き）

ぐんしんだけだんしんぐ

澪士チルドレンの平和条項　その壱。

父親についての物事における優先順位は麻雀で決めるべし。

誰々を描いてくれー、というご要望があれば、がんばって描いてみます。リク絵募集中。

そういや、ヘルシングのＯＶＡ八巻が発売されますね。いえ、別に他意はないですけど。

第十九話　《怪物》と《異形》

「おはようございます、主（あるじ）」

いつもの朝。いつも通りのシュネーによる目覚まし。いつものように俺は無言の抵抗を試みる。

「今朝はなんだかどんよりと曇っていますね。何か不吉なことでも起こりそうな天気でございます」

やめてよ、シュネー。そう無闇やたらにフラグを立てるのは。前例がいくつかあるだけに、彼女の予報は油断ならない。

「……」

「いつまで布団でバリケードを築いていつおつもりですか？」

「……可愛いネコ耳メイドさんが優しく起こしにきたら、起きる」

無茶な注文を押し付けて逃げ切ろうとした俺であったが、

「にゃあー」

「……」

「ご主人様、これでよろしいですかにゃん？」

「ごめん、シュネー。お、俺が悪かった。お前のキャラを崩壊させてまで駄々こねてるつもりはなかったんだ。許してくれ、お願いします。だから、その能面みたいな無表情で、『にゃん』とか言わないで」

怖いから。純粋に怖いから。

眠気なんてとっくに覚めたから。

だから戻って来いシュネー。

「……そんなにネコ耳がお好きなら、主ご自身がネコ耳を生やしたらいかがですか？」

なるほど、と俺は側頭部に獣の両耳がニョキッと付属された自身の姿をイメージする。

「うん、何てステキでグッドなアイディアなわけがない」

我ながら吐き気が込み上げてきましたよ。

「そうでしょうか。私見を述べさせて頂ければ、こう何だか胸が熱くなるようなものがございます」

俺は身支度を済ます為に、胸の前でグッと拳を握りしめているメイドを早々に追い出した。

「もし主がその気になりましたら、ネコ耳カチューシャは勿論、尻尾の方も私物で持っておりますので――」

「着替えるんだから出てけよ！」

入り口の扉の影から顔を出すシュネーに、俺は思いっきり枕を投げつけてやった。

昼を過ぎて、食堂でテオドールの絶品エビチリ定食を胃に収めてきた俺は職務室に戻って午後の国務を再開する。ああ、早く引退したい。

カリカリカリカリと机に向ってペンを走らせていたら、

「レイシぃ」

ふと、甘えたような猫撫で声がした。

視線を落としてみると、俺の股座から見慣れたキャラメル色の頭部がひょっこりと覗いていた。別に防災訓練の真っ最中というわけ

でもないだろうが、《怪物（プティモンストル）》ことスーフェミオットは、俺の机の下にすっぽりと収納されていたのだった。というよりも、朝食時に対面してからずっとこんな調子なのである。

磁石のようにくっついてくるというか。

まるでカルガモ親子状態というか。

「なに、スー？」

「なんでもなぁい」

えへへへへー、とはにかむスーを訝しげに思いながらも、俺は気にせず業務を続行する。

またしばらくして。

「レイシー」

「なんだよー」

「なんでもなーい」

ワンピースの肩紐のずれを直しもせずに、クスクスと笑っているスー。

はて？　と首を斜めに傾げる俺。

何でしょうか、この図は。

そんな矢先に、マキとクリューのバカップルが訪ねてきた。

「誰がバカップルですか！」

「俺なんも言ってないよ！？」

突然キレだしたマキに、俺は思わずのけぞる。まったく、これだから最近の若者はすぐキレる。煮干を食え。牛乳を飲め。カルシウム不足を補え。

「流石はレイシ様！　クリューはその慧眼に感服です！　そして感服です！」

ビシッと敬礼を俺に向けたのは、若菜色のポニーテールを揺らすクリュー＝サンテムムであった。その両手には手提げ鞄をぶらさげている。クリューは喜色満面の笑みで、満足そうに頷いてから、

「どうしましょ、先輩。あたし達の関係が陛下に露見してしまいました。これはさっそく式の日取りを決めねばなりませんね！」

「お前の勝手な妄想を現実に垂れ流すな！」
ニヤニヤと俺は渾身のサムズアップで二人を祝福する。
「末永く爆発しろよ」
「レイシ様もこいつの言葉を鵜呑みにしないでくださいっ」
ほとほと疲れたようにマキは嘆息してから、俺に何枚かの書類を差し出し、
「これ、昨日ようやく可決した法案です。一応、目を通してからサインしておいてください」
あいよー、と俺は受け取りながら、マキの隣で忙しなく瞬きをしているクリューに目を向けた。
「で、そっちの相方の用件は？」
わざわざ俺の部屋まで同伴してきたくらいだから、何かしらの所用があってのことだろう。
「はい！　つきましては来月号の『月刊ティルナノーグ』で、レイシ様の特集を組むことは既にご存知かと思いますが」
「え、何それ初耳」
「……それでですね、表紙を方をレイシ様のドヤ顔で飾りたいと思いまして」
そう言って、クリューはこれ見よがしに随分とゴツいデザインのカメラを鞄から取り出した。ふうん、ピノの作品か。
「ん、まあ構わないけど」
俺が応じると、クリューはホッとしたように顔を綻ばせる。
「では、さっそくですが、これを――」
そして同じく鞄から、謎の白い物体が入ったお椀を慎ましくも俺に献上した。
「……何これ」
「乳酸発酵によって凝固された乳製品――つまりはヨーグルトです」
「いや、分かるよ。これがヨーグルト以外の何ものでもないということくらい、俺にだって理解出来るよ。で、これで何をどうしろと？」

いやですねぇそんなの決まってるじゃないですか、とクリューは至極当たり前のことのようにもったいつけてから、
「とりあえず顔面に塗りたくってから、だらしなく喘いでください」
「誰得だよ！？」
いつからウチの情報誌はＲ－１８指定になったんだよ。
というよりも、シュネー然り、クリュー然り、みんな俺をいったい何だと思ってんの。男だよ。今年で還暦だよ。つーか王様だよ。俺の想像していたロイヤルライフと全然違うんだってばよ。
まあ、嘆いてみても全部今更なんだけどさ。
「えー、せっかくバナナと蜂蜜も用意してきましたのにぃ……」
心の底から残念そうに、クリューは肩を落とす。その二品で俺はいったいナニをさせられる予定だったのだろうか。
「ちょっとマキ、お前の後輩病気だぞ」
「知ってます」
もう手遅れです、とマキは諦観したように嘆息した。

澪士のちょこっとお料理メモ。
『バナナヨーグルトの蜂蜜和え』。
調理方法は、輪切りにしたバナナをヨーグルトと蜂蜜で和えるだけ。お好みでブラックベリーピューレなんかを垂らしても、酸味が利いて美味しいですよ。これは、盗んだバイクで走り出すギザギザハートなお子様でも簡単に作れるデザートです。是非、皆さんも一度ご賞味ください。
「スー、あーん」

「あーん」
俺は二人羽織のようにして、膝の上でくつろぐスーの口に匙を運ぶ。スーは餌を貰う雛鳥のように大口を空けて食いついた。スーがもぐもぐと頬張っている間に、俺は自分の口内にもバナナヨーグルトを運搬しようとするが――誤ってスーの頬に零してしまった。俺は慌てて謝罪をし、懐からハンカチを引っ張り出すが、その前にスーは自分の指でその白濁を拭い、挙句には小さく突き出した紅梅色の舌で舐めとっていた。
えっへへへー、スーはと悪戯っぽくはにかんで。
ぬーん、と俺は反応に困る。
「レイシ様、何だか犯罪の臭いがします」
すかさず茶々を入れてくるクリュー記者。うるせー。
「つーか、お前だけには言われたくないぞ、クリュー」
「滅相もないですよ、レイシ様。さっきの一件を仰っているのなら、とんだ濡れ衣です。アレはあたしが求めているのではなく、世間一般が求めているのですよ。要するにニーズ。需要ですよ需要。あたしはただそれに応えているだけに過ぎないのです。世俗が、陛下の淫らに乱れた一枚を欲しているのですよ」
そんな風に堂々と、クリューは確信をもった口調で断言する。
「陛下が淫乱だと国民が喜びます」
「駄目だこの国……早く何とかしないと」
「レイシ様……こいつの妄想を真に受けないでください」
表紙の写真云々は後回しにして、現在俺はクリューからインタビューという名のセクハラを受けていた。だって初っ端から『今どんなパンツ履いてますか？』の質問でスタートだもの。マキが律儀にも彼女のボケに応対してくれてるから良いものの、もしもここに智将の存在がいなかったらと想定すると、いやはやゾッとする。多分俺、今頃裸ワイシャツ一貫になっていても何ら不思議じゃなかったと思うのね。
クリュー＝サンテムム……恐ろしい娘っ。

と、俺が彼女に一抹の恐怖を覚えている最中、さながらカンガルーのように抱きかかえていたスーが、おもむろに俺の喉仏に手を這わせてきた。皮膚の感触を確かめるように、ぺたぺたと。別段嫌な感じはしなかったが、そこはかとなくこそばゆい。

表情までは窺えなかったが、スーはそわそわと落ち着きがないようであった。トイレにでも行きたいのだろうか。

いや待て、《怪物》は排尿も排便もしないではないか。

だとしたら、何だ。

「では、次の質問ですが」

クリューが気を取り直したように口を開くのと同時に、マキは近くにあった書類の束を丸めて即席のバットを作成し――

「レイシ様の筆おろしの体験談と好きな体位を――」

スパッコォォォォォオンッ――と気持ちのいい音が室内に反響した。

「い、いきなり何するですか先輩！」

「お前が何を訊いてるですか後輩！」

ギャーギャーと喧しくも痴話喧嘩を始めた二人を傍目に、俺は一人苦笑を浮かべる。なんだ、やっぱりただのバカップルか。

「レイシ……」

不意に、太腿の上に鎮座していたスーが、俺の首に手を回してかじりついてきた。俺は怪訝に思いながら、スーの後頭部を優しく撫でる。

「どうした、スー？」

「――したい、のだ」

不覚にも、耳にかかる熱い吐息に全身が粟立った。気づけば、スーの身体も火照ったように熱を帯びていた。

「……え？」

俺は一度スーの矮躯を剥がしてから、穴が空く程にまじまじと彼女を凝視してみる。

「う、うぅ……」

無理矢理に視線を交えたせいか、スーは途端に顔を赤らめて、恥じ入るように目を伏せてから、自分の右手の指をしゃぶり始めた。
生後間もない赤ん坊がやるような、それ。
スーが平静を保とうとする時に行う癖のようなものであるが。
「……す、スーは、スーはその、レイシと……」
ちゅぱ、ぴちゃ、とかいう生々しくも艶かしい音を響かせながら、スーは潤んだ瞳をこちらに向ける。
ゆらゆらと水面のように揺れる淡褐色の双眸。ポタリ、と口元から零れた唾液が、指の隙間を伝って俺の服に黒いシミを作った。
ああ、これは、やばいな。
「スーは、レイシと、今すぐ……」
もぞもぞと羞恥を耐え忍ぶかのように身をくねらせ、酷く切なそうな声音で俺に囁く。
「……スーは今すぐ、レイシとしたいのだ」
俺はスーを首にぶら提げたまま、勢いよく椅子を蹴った。

急用が出来た、とスーを抱えながら、慌てたように部屋を飛び出していった上司の背中を、マキは呆然と見送った。
「……ありゃれ、逃げられちゃいましたか？」
ポカンと放心していたのは後輩も同じだったようで、マキに現状の説明を求めるように上目遣いを送るが、かくして返事はなかった。
――と、そこでやにわに響くノック音。
「失礼します、レイシ様。昨日の民衆議会の報告ですが……なんだ、マキにクリューか？　ん、レイシ様はどうした？」
扉を開けて入室してきたのはアイギーで、澪士の姿を探すようにキョロキョロと視線を巡らす。

「……いま、スーと一緒に急用が出来たって……」
マキは、信じ難いことのように眉根を寄せていた。
「……スー……と？」
まさか、と言う風にアイギーも眉間に溝を作る。
「もしや……例のアレか？」
「俺もまさかとは思うが――そういや、今朝から不自然なほどにレイシ様にまとわりついてたし……」
うーむ、とマキとアイギーは二人揃って唸りをあげる。一人だけ置いてけぼり気味なクリューは、困惑したようにマキの袖を引いた。
「な、何がどういうことなんですか、先輩？」
「何がどうって、まあ、果てしなく説明しづらいんだが……」
マキは言葉を探すかのように言いあぐねていたが、
「実はさ、スーとレイシ様って――――」

「いったい、いつからだ」
俺はスーを背負った状態で、廊下の窓の一つから外に出る。
「うー……こないだぁ、ホウモツコの『ジュワユーズ』を、見てからぁ？」
屋根伝いに駆け抜けて、先が途切れたところを見計らって跳躍する。俺が踏み込んだ一歩は、そのまま城門を通り越し、城下の街並みにへと着地した。
「何で、その時に言わなかった」
「だ、だってぇ……」
しかしながら、それは結局きっかけでしかなくて、前々から随分と『ソレ』が溜まっていたのだろう。

そう俺が言うと、スーは肩甲骨の間に顔を埋めるようにして、
「……うん。すっごく、たまってた」
ずっと、レイシとしたかったのだ、とくぐもった声で言う。
その間も俺は、民家の屋根を足場にしてなおも走り続けていた。
スーの燃えるような体温が、背中越しにじわじわと伝わってくる。
スーの荒い息遣いと、湯気のような呼気が耳元に吹きつけられる度に、俺の中の『何か』がざわざわと騒ぎ立てる。
意気揚々と心が弾む――のではない。
狂騒に胸を高鳴らせるのとも、少し違う。
それは、心の臓を直接鷲掴みにされたような――得も言われないエモーション。
なんて、暢気に駄洒落ている場合でもなく。
「よっと」
そんな掛け声と共に、脚部に魔力を集中させて、一気に俺は空高く舞い上がった。眼下に広がるティルナノーグの街。ビュォォォオオッという空気抵抗の感触を全身で受け止めながら、俺は街を囲む巨大な外壁さえも一足飛びで跳び越える。
「レイシぃ……まだなのかー……」
「まだだ。ここじゃまだ人目につく。一般人に目撃されたら大変だろ。だから、もう少しだけ我慢して」
「うー……」
「お願いだから。ほら、スーの気が済むまでいっぱいしてやるから。な？」
生い茂る森林地帯を疾駆し、後方の置いてきた王都がだんだんと縮小していく。
出来ることなら、もっと遠くへ。
人気も、人目もない場所で。
そこで改めてスーと二人っきりになって、事に及べばいい。
「レイシー……」
「……今度こそ、ちゃんとした用件はあるんだろうな？」

ただ呼んだだけってのは、流石にもう勘弁願いたい。
「スーは、レイシが好きなのだ。レイシは……スーが好きか？」
わお、とんだ告白タイムだぜこりゃ。
歳相応もなく、メランコリックにときめいちゃうぜ。
「おう、当たり前じゃないか」
「なら、愛しているのだな？」
「そんなの――初めて会った時からずっとそうだったじゃないか」
「……スーは、言葉で聞きたいのだ」
首に巻きついた細い腕が、ぎゅーと緩やかに喉元を締め上げる。
しょうがないなぁ、と俺は愉快に苦笑しながら、思いっきりに叫んでやった。
「ああ、《怪物（プティモンストル）》！　敬愛なる醜き忌避の体現者よ！　俺はお前を愛してるぜ！」
そして、誰の邪魔も、誰からの妨害もなく、静かに、激しく、血に飢えた獣のように、欲望に任せるまま快楽に溺れ、骨の髄が溶けるまで、二人でとことん愛し合おう。
チラッと俺が背後を一瞥してみると、スーは愉悦に浸ったかのようにトロンと目尻を下げ、興奮したようにより一層呼吸を荒くして――気づけば、その桜色の唇からはみ出た舌先が、にゅるりと俺の外耳道を侵略していた。
どうやら、俺もまっとうな理性を手放す時が来たらしい。

「――えー！　やばくないですかその関係！　だって、相手はあんな初潮も迎えてないような女の子なんですよ。幼女ですよ幼女。世間が黙っちゃいませんよ」

「お前が知っているスーは、何をするでもなく城内をうろちょろしている女の子のことだろうが。言っておくがな、スーは《怪物》だ。そもそも《怪物》に初潮もなんもねえんだよ」
「そりゃぁ、たまーにレイシ様とかがスーちゃんをそんな風な呼び方をするのは知ってましたが、単に渾名か何かだと……」
全然ちげーよ、とマキは面倒臭そうに頭を掻いてから、アイギーに続きを頼むという旨のアイコンタクトをする。無言で了承の意を返したアイギーは、一度軽く咳払いをしてから、
「えーとだな……二十年前、つまりはティルナノーグ建国前の話だが、この地には古から住まう《怪物》の伝説があった――」

元々この土地には、他に類を見ない大都市が繁栄の栄華を極めていたらしい。当然そこには多くの人々が生活を送っていた。しかし、それら全てに終止符を打ったのが、ほかでもないこの《怪物》なのである。
当時の名残であるのか、時折、苔むした人工物らしき物体や、蔦に覆われた石柱などが点在している森の中。
俺は滴る脂汗を拭いもせずに、
「まったく、堪え性のない奴め」
只今、俺の耳たぶをしゃぶることにご執心な様子のスーと、背中から胸にかけて貫通している彼女自身の腕とを見比べてみる。
ガブフッ、と食道から尋常じゃない量の血がせり上がった。
「えっへっへー」
『してやったり』と『面目ない』というメッセージが半々に込め

られたスーの喜色に、俺もにっこりと朗らかな笑みを返信した。
「こいつめ」
ベチッ、と可愛らしくも舌を突き出したスーの額に、軽くデコピンを食らわしてやる。
ただそれだけで、目も開けられないような爆風が起き、スーは地面を抉るようにして遥か彼方まで素っ飛ばされていった
「やったのだなっ」
と思いきや、立ち込める土煙をかき分けて、スーはすぐさまに折り返してきた。俺は迎え撃つ体勢で、力強く握りしめた拳を作る。
「ぬーっ！」
「てりゃっ！」
見事なまでのクロスカウンターが、俺たちの間で成立した。メシメッシィという嫌な響きは、果たしてどちらの首の骨が折れた音でしょうか。両方とも仲良くブッ倒れた俺らは、地面に仰向けになりながら、腹を抱えて哄笑する。
俺は貫通した胸の穴を再生させながら。
スーは三百六十度回転した頭部の位置を調整しながら。
狂ったように笑い声を張り上げていた。
「だめなのだ、レイシ。そんな気のぬけたパンチじゃ、スーはレイシを愛せないのだ」
げらげらげら。
「スーの方こそ、もっと張り切って俺を殺してくれないと、俺も本気になれないじゃないか」
ケタケタケタケタ。
「でもまあ、これからなのだ。レイシ、もっと二人で、それこそ互いのゲンケイがなくなるまで、ふかくふかーく愛し合おう」
そんな眩しいほどに無垢な笑顔に、俺も自然と微笑み返す。いいぜ、スーフェミオット。お前のご期待に十全に応えてやろうじゃないか。身を磨り潰し、骨を粉末にしてでも、殺害の限りを尽くし、殺戮のその果てを見せてやる。

――とまあ、これもまた随分と久しぶりなわけですが。
ではでは、さあさあ。
「殺し愛（うたげ）を始めようじゃないか！」

さながら俺は指揮者のように手を振り、空中に魔語（ルーン）を描く――すると、俺から足下から伸びる影が、ゆらりとその形を変えた。
これは、俺が内包する闇の形象。文字通り、投影された俺自身の内面本質。
「『愚劣なる半身（イマーゴー）』」
触手状に三次元へと昇華した影は、その先端を槍にへと変質させ、畳みかけるように目の前の標的に差し向けた。
結果的に言えば、影の槍は容赦なくスーの幼い体躯を串刺しにし、あたかも発泡スチロールかの如くあっさりと簡単に引き裂いた。
やったか？　なんて死亡フラグを吐くつもりは毛頭ない。
「――――っ！」
唐突に、足首を掴む何十もの『腕』。地面から植物のように顔を出したそれらは皆一様に青白く、そして死人のように冷たかった。
「がおー」
と、俺が意識を正面に戻すと、まず真っ赤な舌根があった。真っ白な牙があった。視認してみればただの『獅子』の顎だった。俺は問答無用で食われた。
なんて。
「悪いけど、俺はそんなの怖かねぇ」
瞬発的に、自分を軸として魔力を螺旋状に展開させる。俺の半径

二メートル以内にいたそれらは、バシュッと弾けたように消し飛んだ。
「準備運動は済んだか？」
俺は前方で蠢き犇く《怪物》を見遣った。俺が引き裂いて飛散したスーの肉片は、ブクブクと風船のように膨張して、今や一つの巨大な肉塊にへと変化を遂げている。
そして、不意に鼓膜を震わすビブラートのかかった低音。
「……ヒトは怖れるのだ」
その何ともグロテスクな塊から、先程の獅子が顔だけを出現させた。
「ヒトは、死を怖れ、理解出来ないものを怖れ、己より遥かに優れた者を怖れ、概ね大半の者がそれらに最後まで震え怯えながら、生涯を遂げるのである」
同じく大人一人を丸呑みに出来そうな大蛇が、気だるそうに首をもたげた。
「他の生き物とは違い、ヒトは有象無象を問わずに怖れを見出すのだ」
もはやビル的な高さにまで肥大化した《怪物》の巨躯を仰いで、俺は少し肩がこってしまう。まったく、それにしても相変わらずの不気味さというか、奇々怪々な外観というか。非常に形容しがたいのだが、まるで何百もの粘土細工を幾重にも合体させたかのような――うっかりするとダリの絵にも出てきそうな形状をなしていた。いやはや。デビルガンダムよろしく、ぶっちゃけ混沌とし過ぎていて、俺にもよく説明が出来ない。
いや、説明なんてそもそも必要ないのだが。
彼女は、そういう存在なのだから。
「このように臆病な生物も、なかなかに珍しいのだ」
「……だからこそ、ヒトはここまで生き残れてきたんじゃないか？」
脆弱だから、臆病だから、必死で生存への手段を追求してきた。
「では問うのだ、魔王よ。死を怖れなくなった時、ヒトは戦士にな

り、他者を怖れなくなった時、ヒトは賢者となる。ならば――死を拒み、生を忌み、自身を憎み、他人を愛した哀れなヒトの子は、果たしていったい『何』になるのだ？」

もはやどこから出しているのか判断がつかないその野太い声は、明らかな嘲笑を含んでいた。それでも、俺は胸を張って答えてやる。

どうしようもなく人間を失敗してしまったら、だなんて。

そんなもの、決まってるじゃないか。

「俺みたいな、《異形》になるのさ」

まさしくこの《異形（おれ）》が、その問いの解答だ。

「さあ、リハーサルは終わりだ」

それでは本番いってみようか。

「『歓喜（ジュワユーズ）に満ちよ』！」

ちょうど真横に展開された魔方陣から、俺は一振りの剣を引っ張り出す。

身の丈もある大きさに、煌めくような刀身。

聖剣ジュワユーズ。

高揚した《怪物》が、地鳴りのような歓声を上げる。

「聖剣！　そう、それがないとやはり何も始まらないのだ！」

威圧感の半端ない肉壁に、一筋の亀裂が入り、それがどうやら『口』であるらしいと分かった。ふむ、ということは毎度お馴染みのアレか。

案の定、その空洞を中心にして、大小含めて何十本もの白い鞭のようなものが飛来してくる。俺は柄を握る右手に力を込め、その肉鞭を切り捨てながら突き進むが、

「あー……ですよねー」

斬り刻んだ肉片が各々に変化して、多種多様な《怪物》達が生まれる。さながらゾンビのように続々と誕生していく彼らは、物言わずに俺を取り囲む。

魚類系やら、昆虫系やら、合成獣やら何やらでの大所帯。
百鬼夜行。
ふと、そんな単語が脳裏に浮かんだ。
この現状を説明するには、その一言で十分過ぎると思う。
まだ存命している触手からは、その突端だけが蛇の頭であったり、狼の顎であったり、ギギネブラやフルフルみたいな口腔であったりと、バリエーションは豊富。本体の方はようやく落ち着きを取り戻してきたのか、現在はイモムシのような細長いフォルムに治まっていた。まあ、そこから生白い巨人のような脚や腕が無秩序に生えているところを見ると、依然として怖気立つような気持ち悪さは拭えない。
それもそのはず。《怪物》は、その者が根底に抱える『忌避』を体現しているのだから。
誰もが嫌悪する醜悪な姿形を、彼女はとるのだ。
その昔、かつて一国の軍隊を相手取ったとされる《怪物》は、数千、数万単位の『忌避』をその身に取り込み、いったいどのような千変万化を魅せてくれたのであろうか。
とてもじゃないが、俺の乏しい想像力じゃその片鱗さえも窺い知れない。
と、のんびりと思考していたら、俺を包囲していたクリーチャー共が動き出した。
「もう、また一段とウジャウジャしてますなぁ。ま、気張るしかないね……『天と地は彼の栄光にあまねく満ちる』（プレーニ スン チェリエトゥ テッラグローリアエユス）」
俺の詠唱に呼応して、ジュワユーズの刃におぼろげな輝きが宿る。
「――俺が本当に怖いと思えるモノに比べれりゃ、お前らなんて球団マスコットみたいなもんよ」
消え失せな、とそのまま発光する聖剣を大地に突き立てる。
その刹那――不規則に大地が隆起し、その割れた地面の隙間から烈（はげ）しい光が無秩序に溢れ出した。
光は闇に還り、闇は照らされて然るべし。

閉じていた目蓋をのんびりと持ち上げてみると、そこは地形がややアトラクション染みてはいるものの、おおよそ何もない更地と化していた。周囲の樹木も全て同心円状に吹き飛ばされており、唯一残存しているのは馬鹿デカイ白芋虫――もとい、《怪物（スーフェミオット）》だけであった。

俺は口元を歪ませながら、ジュワユーズを肩に担ぎ、

「さーて、そんじゃいっちょ心いくまで殺戮してやんよ、《怪物》」

どことなく勝利の予感を噛み締めながら、俺は余裕に満ちた一歩を踏み出した。

やーん負けちゃいそう。

たっ、タンマタンマ！　ちょい待って。左腕再生するまで待ってて。あ、ちょっ、そこの蛇ちゃん、俺の左脚咥えていかないで。あらやだ、再生スピードめっちゃ遅くなっとりますやん。やばいやばい、マジで死んじゃうって。もう、俺が死んだら誰がこの子の面倒みるのさ。つーかそれだと国民諸共皆殺しにあっちゃうよ。ああよかった、やっと元に戻ったぁ。

「うぅぅぉおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

迫りくる巨腕の上に乗っかり、聖剣をブッ刺したままの状態で突っ走る。噴水のような血飛沫が全身を濡らすが、気にしない。

「があ〝あ〝あ〝ァァぁあああぁあああアアァァぁあああああ！！」

根元の部分でズブリと引き抜いて、肉迫してくる諸々の『忌避』達を白刃による一閃で切り倒していく。

絶好調で正気の沙汰じゃなくなっている俺は、愛のある限り、この醜い《怪物》を殺し続け、屠り続けていた。かれこれ何時間が経過しようとしているのか、或いは数分さえも過ぎてないのか。まっ

たくもって把握出来ていない。
「れーいしぃ」
《怪物》の背中で交戦中だった俺の足下から、スーフェミオットの上半身が出現し、がっしりと両脚に絡んできた。チクショウ、動けない。
「どうしたのだ《異形》？　何をそんなに悠長にしているのだ。もっとスーを愛せ！　殺せ！　さもなくばお前の中の『忌避』を無理にでも引きずり出してやってもいいのだぞ？」
ギョロリ、ギョロリ、とあちこちで等身大サイズの眼球が誕生し、一斉にこちらを向いた。うわキモッ。
「……そりゃ、是非とも勘弁願いたいところだなぁおいぃぃ！」
死ねエェェッとスーを木っ端微塵に切り刻む。
その拍子に、足場としていた《怪物》の巨躯が、ぐるりと反転した。咄嗟のことで宙に投げ出された俺は、例の色々な生物の頭部を模した触手の追撃を受ける。俺も最低限の抵抗は試みたが、結果は芳しくなく、まさに食い散らかされたゴミ袋ような体で地面に転がった。ええ、生ゴミは火曜日ですよ。気をつけてください。
じゃなくて再生。再生。再構築だ。欠落した患部に魔力を集中させろ。細胞の増殖率を極限にまで高めろ。なんだ、まだ四肢が千切れただけではないか。『恐慌』の魔王と七日間不眠不休で戦い続けたあの頃と比べたら屁でもない。それともなんだ、この二十年で本当に腑抜けたかクソッたれめ――と、何となく腹部を見下ろしてみれば、臓物が完璧にコンニチワーしていて、リアルに腑が抜けておりましたとさ。いやん恥ずかしっ。
復活し始めた雑魚兵クリーチャー共が、ドンちゃん騒ぎでこちらに進撃してくる。ははっ、今敏監督の『パプリカ』を思い出すな。平沢進師匠の『パレード』が聞こえてきそうだ。ラーイヤー。
『孤影群団（アンリミテッドレギオン）』。
偏（ひとえ）に、俺はそう呼んでいるが。
側面に何十本とある手足を支離滅裂に動かして、母体の方も進軍

してきやがった。ああ、休憩時間終了ですかそうですか。はい、皆さん揃ってご起立してください。こら右脚、アキレス腱が切断されたくらいで弱音を吐かないの。

聖剣を杖代わりにしてヨロヨロと立ち上がり、歯軋りをかき鳴らしながら目先の光景に臨んだ。

まったく、なんつー世紀末だこりゃ。

とりあえず突き抜けるような蒼穹を見上げてみて、死兆星がないか探してみる。うん、いいお天気。

「勝率が絶望的な感じですが、がんばろう魔王様」

これも総じて、自分が好きで背負い込んだ因果なのだから。

この《怪物》が孕む底なしの憎悪を、全て自分が引き受けてやると、小指を交わして約束したのだから。

精一杯に心から愛してやると誓ったのだから。

よっこらせ、と緩慢にジュワユーズを担ぎ直した俺が、ボロ雑巾のような身体で、無謀にも駆け出そうとした折に――

「――レイっち、水臭いにもほどがあるのさ」

スタッ、と俺の正面に舞い降りた人影。

次いでその者の弛んだ両袖から、視界を覆わんばかりの巨大な蟷螂（かまきり）の前肢が質量保存の法則をガン無視して現れ、前方のクリーチャー達を薙ぎ倒すように一掃した。

「ファ、ファーブル……？」

ファブルート＝デランブル。

世にも珍しい『蠱術師（ココペリ）』一族の末裔。

そちらに目を奪われていると、《怪物》の様子が急変していた。

何だろうか、白い糸のようなもので雁字搦めにされ、身動きが取れないでいるようだった。

「動けば動くほど絡みつく――『機織蜘蛛（アラクネ）』の糸さ。それにしても、相変わらず虫唾が走るような形態さね、あの《怪物》は――――今

のうちさ、ヤンハオ！」
俺らの頭上を跨いで、また一人見慣れた顔が着陸した。さながら尻尾のようにまとめられた長い後ろ髪。眼帯で覆われた片目。そもそも、俺と子供達以外で黒髪を有している奴なんて、自分が知っている中ではあと一人しかいない。
「微力ながら、助太刀させてもらいます」
ヤン＝ハオ。
極東の『龍殺し（ゲオルギウス）』。
「ハアァッ！」
藍色の長袍を身にまとったヤンハオが、数枚の術符を放つ――それは瞬く間にネズミ算方式で倍増していって、《怪物》の巨体を完全包囲した。
「術符――『召雷』！」
突如として目が眩むような閃光の応酬と、耳をつんざくような雷鳴が響き渡った。
プシュゥウウ――という音と、焼き焦げた肉の悪臭。《怪物》はピクピクと全身を痙攣させながら、黒煙を立てている。俺が一人唖然と言葉を失っていると、空から高飛車なコントラルトが降りかかってきた。
「小娘の癇癪ごときで、随分とてこずっているようではないか」
太陽を遮るようにその白き両翼を広げ、大空の中で仁王立ちをする銀髪の少女。白き両翼――といっても決して天使のような羽毛はない。どちらかといえば蝙蝠に近いそれ――と、本人を前にして言ったら大激怒すること間違いなしだろうが。
それこそ、彼女の逆鱗に触れてしまうだろうが。
「まったく世話が焼けるわい。どれ、我が一つ手を貸してやろう」
泣きながら跪いて感謝するがいい、と彼女は居丈高な物言いをしてから、ぱかぁっと大きく開口した。その瞬間、嫌でも感じる。分かってしまう。空気が戦慄（わなな）くように震動し、大気中のマナが彼女を中心にして収斂していくのを――

「……ドラゴン、ブレス……」

俺が悄然と呟いた時分には、既に彼女の息吹は地上に降り注いでいた。

直径数十メートルはくだらない『白光の柱（シャイニングブレス）』。直線的な高エネルギー放射。まともに浴びたら光子レベルで無に還される無慈悲な一撃。巻き起こる旋風と衝撃波。ジュワユーズを掴んでいなかったら、その余波で危うく俺も吹き飛ばされていたことだろう。

しばらくして、ようやく視野が晴れたと思ったら――そこには干ばつした湖跡を思わせるような途方もないスケールのクレーターが完成していた。その陥没した中央で、元のサイズの半分以下にまで縮んだ《怪物》が、スライムのように様々な形態に変化しながら苦しげにもがいていた。しかしながら、龍の息吹を直に喰らっても消滅してないとかすげぇ。

いや、或いは彼女の方が手加減をしたのか。

「……嗚呼、フィリ氏……今日はまた一段と美しい光を放ちなさる」

いつの間にか、隣でヤンハオが恋する乙女のような瞳で、うっとりと彼女に見蕩れていた。

えー……と俺は思わないでもないが、それでも確かに彼女の強さは筆舌に尽くしがたい。流石は彼の黒幻龍『ニーヴェルガント』や青雷龍『ペルナスヘイム』と並ぶ、創生の頃より存在せし最古の龍。白聖龍『アトモスフィリオン』。

何故、『擬人化（ポリモーフ）』した姿が白銀の髪を湛える幼女なのかは不明であるが。何だろ、趣味だろうか？

「いつまでそこで呆けておるつもりだ『畏憚』よ！　お主が片を付けないでどうするか！」

バッサバッサと上空で翼を羽ばたかせているフィリからの激励叱咤。

「……いらんお節介を」

「何か言ったか小童（こわっぱ）が！」

ボソッと誰にも聞こえないような声量で呟いたつもりであったが、

しっかりと拝聴されていた。地獄耳め。というか、そんな幼児体型で小童とか怒鳴られても説得力など皆無である。

とは言いつつも、フィリの大喝も至極正論なので、俺は溜息を吐きながらも、覚束ない足取りとで歩き出した。一歩ずつ一歩ずつトボトボと、確実に《怪物》のもとに近づいていく。《怪物》と目と鼻の先にまで至ったところで、俺は天に向かって剣先をかざします。

クリスさん……クリスティーナ＝レイブンハート。あなたの剣をこんな始末に負えないような殺し合いの為の道具に使って、毎度毎度非常に申し訳なく思うのですが、どうぞお許しください。

それからクリストファーさんにも大変恐縮ですが、あなたが教えてくれたこの『解放呪文（アクトスペル）』も、久しぶりに使わせて貰います。

我、至上の歓喜に満ちてより。

「『いざ来ませ異邦（ヴェニ レデン）の救い主（プトール）よ』」

詠唱と同時に辺り一帯の魔力が、この聖剣を渦の眼にして流れ込んでくる。次第にジュワユーズは曙光のような金色に輝き始め、俺自身もその負荷に両脚が挫けそうになる。徐々に集まっていく光の粒子により、現時点においての聖剣の刀身は通常の三倍ほどの大きさにまで成長を遂げていた。

「――辛いか、スー？」

すぐ、楽にしてやるからな。

俺は深く息を肺に溜め込み、腹の底から精一杯の咆哮を轟かせて。

それから、まっすぐに聖剣の切っ先を振り下ろした。

魔城の四階バルコニーにて、そこでは三人の魔女が《怪物》と《異形》の戦争を見物がてらに、午後のティータイムを嗜んでいた。

「うっわ、聖龍のドラゴンブレスの次は、聖剣の最終奥義かいな」

いったいどんだけ地形変えれば気がすむねん、と『隷属の魔女（テレーニャ）』は頬杖をつきながら笑った。

「やっぱりー、私も行ったほうがよかったのかしらー？」

間延びした語尾が相変わらずな『空間の魔女（グリンダ）』が、物憂げに眉を下げる。

「まあ……グリンダったら、あんな戦場に、好き好んで赴きたいの？」

大人しく本でも読んでたほうが懸命よ、と妙に訥々とした口調で諫めるのは、エルフ族特有の長く尖った耳が覗く濃緑色の長髪に、縁なしの眼鏡をかけた物言う花――『書架の魔女』ことセシリア＝メイザースだった。

「……にしても、ごっついキノコ雲やなぁ」

遥か彼方の山間で浮き上がるキノコ雲を眺めつつ、テレーニャはのんびりとティーカップに口をつけた。

忌まれ、嫌われ、蔑まされ――怪しまれる物。

つまるところ《怪物》とは、忌避されるれるモノの総称であり、象徴。だからこそ彼女は、ヒトを憎悪し、尽きることのない殺意を抱く。そして実際に彼女は、その絶えず沸き起こる殺戮衝動の中で生きて――否、存在している。

憎くて憎くてどうしようもなくて。
殺したくて殺したくて仕方がなくて。
けれども、それら本能的な感情は、《異形》と交わした『約束』という名の楔により厳重に封印されてしまった。しかして、無理矢理に抑圧した衝動が都合よく自然消滅するなんてことはなく、むしろ年月を重ねるたびに、歪みを経てゆっくりと沈殿していった。
かくして、今回の一件。
「――えーと、つまりガス抜きってことですか？」
クリューが分かりやすく一言で喩えると、
「まあ、簡単に言えばそうだな」
これまでにも二度ほど同じことがあった、とアイギーは肩を竦めて頷いた。
「でも、いったい何でスーちゃんはそんなに……」
「さてな……果たして《怪物》にどんな経緯があったのかは知らないが――仮に知っている者がいたとしたら、精々レイシ様ぐらいのものだろう」
そう言ってアイギーは窓際に近寄り、ガラス越しの世界を見つめる。
遠く山脈の向こう側から、キノコ雲がこちらを睥睨していた。

爆心地のど真ん中で大の字を描いているスーに、

「裸のまんまだと、風邪引くぞ」
そっと自分の上着を被せてやる。いつもの幼い少女の姿に戻ったスーは、天使のように愛らしい寝顔で安らかに夢の中だった。俺は彼女を両腕に抱き、満身創痍の身体を引きずって帰路につく。サポートに駆けつけてくれた他の三人は、とっくの昔に帰宅していた。フィリは翼、ファーブルには翅、ヤンハオにも術符による瞬間移動があるからいいけど、俺もどうしようかな。『転移（トランゼーション）』使おうかな。でもさっきの大技で、体内の魔力が底を尽きかけているし……ぬーん。
「すー……すー……」
規則的な気息が腕の中から聞こえる。んまぁ、いいか。スーの可愛い寝息をＢＧＭがてらに帰るのも悪くない……いや、イイ！
「……」
いつだったか、アキナスは俺達のこの殺し合いを『異端同士の自慰行為』だと言い、フィリは鼻で嗤ってから『妹の癇症を宥める兄の図』と談じ、司書のセシリア＝メイザースは『同族嫌悪と同属恋慕のアンシンメトリー』という何とも抽象的な見解を述べた。
どれもこれも正鵠を射ているようだが、どれも的外れな意見だという気がしないでもない。
本音を吐いてしまえば、そんなのは結局瑣末事に過ぎないのだ。俺達二人にだって、こんな愚行に意味があるだなんて思っちゃいない。本当に意味がある物事はもっと別の場所にあって、俺達はずっとそこから目を背け続けているんだ。
何故って、怖いからさ。
《異形》や《怪物》が真に『畏怖』し『忌避』するようなものが、そこにはあるからだ。もし直視でもしようものなら、俺らみたいな救いようもない存在は多分――――いや、こんな仮説をいくら並べてみたって、それこそ無意味で非生産的な所業だと思う。従って、この辺で一時的な思考停止宣言を布告させてもらいます。えいっ。
「……れぇいしー……あぁいしてる、のだ……」

むにゃむにゃとした寝言がスーの口からタダ漏れて、くすりと俺は微笑した。

「あぁ俺も愛してるよ、スーフェミオット」

君がヒトを憎むように、俺もヒトを愛しているから。

君をこんな醜い《怪物》にしてしまったヒトを、俺は愛しているから。

だから、君の憎悪は余すことなく俺が受け止めよう。

それが君に対して出来る、俺からのせめてもの罪滅ぼしだと思うから。

第十九話　《怪物》と《異形》（後書き）

――――君がくれた季節を――――

――――あなたのいない季節を――――

――――いったい俺は、あと何度繰り返せばいいのだろう――――

＞ｉ２９０５２―２０８８＜

祝、一周年！　ということでイリアの笑顔を。糞絵なのは仕様です。

ただの四コマ。

＞ｉ２８８９１―２０８８＜

＞ｉ２８８９２―２０８８＜

第二十話　『天使博士』の過去回想録　前編（前書き）

「こーんにーちはー！　来年辺りにマキ先輩と夫婦関係になる予定のクリュー＝サンテムムです！　アキナスさんいますかー！」
「うっ、お前はクリュー＝サンテムム……くそっ、まいったな」
「うふふふ～アキナスさぁん、ようやく捕まえましたよぉ。あたしがインタビューに訪れるたびにコソコソと逃げ隠れていたようですが、今日こそは追い詰めました。ここはあなたの部屋。文字通り袋鼠です」
「……袋鼠は、オポッサムの異称だ」
「んなこたぁどうだっていいんです。さあ、大人しく覚悟を決めて、あたしの取材を受けてくださいね」

第二十話　『天使博士』の過去回想録　前編

――さて、まずは自己紹介から始めようか。ワタシの名前はトーマ＝アキナス。三十代半ばのしがない研究員さ。昔の渾名を引きずって『天使博士（ドクターエンジェル）』だなんてこっ恥ずかしい名称をされることもあるが、ワタシにしてみれば迷惑極まりない呼び名だよ。

いずれにせよ、この度はありとあらゆる法則をガン無視してワタシが語り部だ。どうか悪く思わないでくれたまえ。あの男の道化師染みた語り口が恋しいのであれば、すぐさま引き返したほうが身のためだ。ワタシ自身、『語る』という行為はそんなに得意ではないし、殊更好きでも何でもない。故に、途中で力尽きて投げ出してしまうような可能性も捨てきれないのだからね。

それでもワタシの拙い昔話に付き合ってくれるというのなら、クリューが言うように予め（あらかじ）それなりの覚悟を決めておいたほうが賢明だろう。

では、話を戻そう。前記の通りワタシはまんまと自室でクリュー記者に捕縛されてしまい、あの男とのエピソードを聞かせろとせがまれているわけだが。んまぁ、ワタシなりに努力はしてみるとも。

――とは言いつつも、いざ開口してみようと思えば、いったいどこから話せばいいのやら。とりあえずは、ワタシの果てしなくどうでもいい経歴からご清聴してもらおうか。

ワタシが生まれ育ったのは、裕福な商人貴族の家系で、上に何人も兄姉がいてね、ワタシは一番下の末っ子だった。父は金儲けにしか興味のないような低俗な男で、母は社交界でいかに己が目立つか

ということだけに執着した卑俗な女だった。兄姉達も大体が両親に似たり寄ったりで、父母同様ワタシに人並みの愛情を向けてくれることはなかった。しかし、ワタシを実質的に育ててくれた乳母はとても優しい人で、幼弱なワタシが信頼をおく唯一の人物だった。

そんな風に、家族の愛というものに飢え続けた幼少期であったが、概ね何不自由のない暖衣飽食な生活を送ることが出来た。

唐突ですまないが、ワタシは読書が好きでね、幼いながらによく父の書斎に赴いたものだったよ。そうして満六歳になるまで、父の書斎にあった膨大な量の書物を全て読破したワタシの異常性が、周囲を驚愕と共に恐怖させるのは難しくなかった。八歳を数える頃には、早くも父親の商売にまで口出しできるほどの頭脳を、ワタシは有していたのだから。

偏(ひとえ)にワタシは、天才だったのだよ。

一応は貴族の子供らが通うような格式ばかりの学校にワタシも入れられたが、入学三年目でもう卒業書状を受け取っていた。卒業式で整列する十五歳の少年少女達の中に、独りポツンと九歳の女児が混ざっているのだから、さぞ滑稽な光景だったと思う。

それから、ワタシがいつぞやに気まぐれで書き綴った『存在と本質』についての論文が、どういう経緯か『シュテンベルグ教』のさる司祭の目に留まり、是非とも我が学院で学ばないかという勧誘が届いた。両親は一も二もなく賛成した。彼らも、ワタシという異質な子供の扱いに困っていたのだろう。しかしそれはワタシにとっても渡りに船だった。正直、ワタシもこの息苦しい肩身の狭さに発狂しそうであったからだ。分かるだろうか？　行き過ぎた相違とは既に個性とは認められず、もはや異端として見做される。イサナギがよく口にしているようにね。

こうしてワタシは、教会が直営する高等学院に入学する為、家を捨てサンタママゴリア帝国にへと旅立った。ただ一人ワタシを見送ってくれた乳母との別れは非常に辛かったが、決して後悔はなかった。

ここで察しのついた者もいるかもしれないが、そこでもワタシは、通常は八年かかる高等学院の学習過程を僅か三年で網羅し、史上最年少での卒業を果たした。その後はトントン拍子に帝国首都部にある教会本部の神殿に召喚され、めでたく『司教』の地位まで手に入れたのだった。

この世界宗教でもあるシュテンベルグ教は、『教皇（ポープ）』、『枢機卿（カーディナル）』、『総大司教（パトリアーク）』、『司教（ビショップ）』、『司祭（プリースト）』、『助祭（ディーコン）』、『牧師（クレリック）』という完全ヒエラルキー社会になっている為（他にも『聖徒（サンクトゥス）』などの特権的な階級はあるが割愛）、一定の地位を得たワタシに対して、露骨な嫉視や、陰湿な嫌がらせをしかけるような輩はいなかった。

ワタシに逆らう者は、もはや誰もいなかった。

もう毎日のように濡れ雑巾をぶつけられたり、私物が焼却炉で灰になって見つかったり、覚えのない誹謗中傷を囁かれたりすることはないのだと思うと、ワタシは衷心より安堵出来た。

別に自慢じゃないが、これまでにワタシは親しい友人どころか、まともに会話を交わすような相手すら持ち合わせていなかった。そのことをとりわけ苦だとは感じなかったが、時折届く乳母からの手紙にはそんなワタシを心配する旨がいつも書かれていた。大丈夫だ問題ない、との返事をいくらワタシが綴っても、彼女の憂いを晴らすことは、結局は最後まで叶わなかったわけだが、そんな彼女の変わらぬ優しさに、少なからずワタシは救われていたのだと思う。

人は、独りでは生きられない。

大昔、そんな愚にもつかない戯言を吐いた偽善者がいたそうだ。その名をルカリウス＝シュテンベルグ。シュテンベルグ教の開祖となった人物だ。しかしながら開祖とは言っても、本人が『アイアムゴッド』などと抜かしたわけではなく、彼の死後にその後援者たちが、彼を神格化した宗教を興し、それが現在にまで至るわけである。ちなみにヒエラルキートップの『教皇』の座は、ルカリウス＝シュテンベルグの直系が代々引き継いでいるのだとか。などと、その真偽は限りなく怪しいものだが。

閑話休題。

まあ、いずれにせよ異例の十三歳という若さで司教クラスに昇格したワタシは、自ら望んで研究職に従事した。研究内容はハッキリ言って雑食だ。哲学、神学、民俗学、宗教学、歴史学を初めとし、その中でも魔術や錬金術といったものにも没頭した。要するにワタシは、この世の正解とやらに近づきたかったのかもしれない。今に思えば馬鹿らしいことこの上ない話だが。

まったく、どこぞの『三賢人』でもあるまいし。

そんなある日、ワタシはその時期熱中していた歴史研究の過程で、山間の奥深くにある遺跡を訪れることになった。そこは半年前に発見されて以来、幾度か調査団が派遣されたにも関わらず、ろくな解明がなされていないとのことだった。表面上は、遠い昔にその土地に住んでいた者達が祀っていたとされる神々の霊殿らしいという報告がなされており、ちょうどその地域の歴史を洗っていたワタシにとって、その場所の視察は決して外せないものだった。

だが、難点が二つほどある。

山間の奥深く――つまりは地理的な問題で、目的地に辿り着くまでにワタシの体力がもつかということ。驚くなかれ、ワタシは蚊に刺されただけで熱を出してしまうほどの虚弱体質なのだ。初潮がきた時は死ぬかと思った。初潮が死因って、なかなかに笑えない。

残る一つは、魔物と遭遇する危険性があることだった。これが一番の難所である。まあ理想的には、腕の立つ無口な護衛が一人いればそれで十分であった。使えない雑兵が大勢で来らても迷惑なだけである。出来ることなら、ワタシ単独でのんびりと調査を行いたかった。

――――さて、どうしたものだろう。

「あらー、じゃーぴったりの人材を派遣してあげるわー」

そう妙に間延びした口調で解決案を提示したのは、『空間の魔女』ことグリンダ＝ジェラリッティである。大陸七代魔女の一人として数えられる彼女ではあるが、十年前の『第三次聖魔大戦』の後、『

従僕せし異端者（ハイエレスレセプトゥス）』として教会の犬に成り下がっていた。補足として説明しておくならば、『従僕せし異端者』とは、謂わば信仰を持たない傭兵集団である。教会は金で買った忠誠心で、その者達を従わせていたのだった。

そしてその一員である彼女が、どうしてワタシの相談事を聞いてくれたかというと……いや、これといって明確な理由は存在しないのだが、その発端としては、彼女の方からワタシに接触してきたのだ。前触れもなく研究室に現れては、『あなたの研究って興味深いわー』とか言いながら、ちょくちょく入り浸るようになったのである。特に仕事の邪魔になるでもないし、むしろ彼女はワタシよりも遥かに知恵者だったので、息詰まった際にはよく助けてもらった。流石は年の功。伊達に二百年は生きていないということか。

一応は乳母に次いで、ワタシが二番目に心を許した人物でもある。

「ぴったりな、人材？」

ワタシが訊き返すと、グリンダは糸のように細い両目をさらに細めて、

「ちょっと、無愛想な子だけどね」

出来の悪い弟を持った姉のように、グリンダは小さく苦笑した。

これまでのいきさつから、人見知りというか、軽い人間不信に陥っていたワタシにとって、翌日にその人材とやらを連れてくるというグリンダの提案には、酷く不吉じみたものを感じたのであった。

かくして明日が今日になり、グリンダはいつも通り前置きもなくワタシのもとを訪れた。

件の人材とやらを引き連れて。

「えとー、彼が昨日言ってたレイシくん。仲良くしてやってねー」

「……」

「……」

それが、イサナギとのファーストコンタクトだった。

第一印象をありのままに述べてみれば――不気味であった。

鬱陶しいほどに伸びた黒髪を後ろで一つに縛っており、女のように整った顔立ちをしていたので、最初は性別の判断がつかなかった。底冷えのするような生気の薄い双眸と、左頬には聖十字の『聖痕（スティグマ）』が彫られている。視線を下げてみると、その男はハイネックに襟の立った黒いフレアコートを着込み、暗褐色のレギンスと、留め金具がいくつも巻かれたロングブーツを履いていた。

「ほらー、レイシくんもご挨拶はー？」

つんつん、とグリンダが男の肩を指で突く。

おいやめろ、爆発したらどうする。

「……」

まるで救いのないような虚ろな瞳で、その男はじっとワタシを見据えていた。ワタシは蛇に睨まれた蛙の心境で、ひたすらに冷や汗を浮かべていた。何だ、コイツは。いったいどんな風に表現すればいいのか――そうまるで、退廃的なコラージュ作品を目にしているかのようだった。

人間という素体を一度切り刻んで、再びまた繋ぎ合わせたかのように。

チグハグで、ジグザグだった。

――駄目だ。何がどう駄目なのかは分からなかったが、ワタシは直感的にこの人間に関係してはいけないと思った。

さもなくば、自分の中身が丸ごと抉り出されるような――そんな気がした。

そうやってワタシが二の句も継げずに硬直していると、彼はすぅーと片手を差し出して、

「……え？」

もしかして、これは握手を求められているのか？

恐る恐るワタシが相手のシェイクハンドに応じると、彼は唐突にギュッとワタシの手を握り返してきた。いや、握手なのだからそれは当然のことなのだが、それだけでワタシの心臓は肋骨を突破する勢いで跳ね上がった。純粋な死の恐怖に支配された。不覚にも膝が震え、涙が零れそうになる。数秒後に彼が手を離してくれた際には、ワタシは初めて心の底から神に祈った。

「うんうん、レイシくんもその遺跡とやらに関心があるみたいだからー、アキナスちゃんと同行出来ることに感謝しているみたいよー」

……この女は、いったい何をほざいているのだ？　この男のどこから感謝の二文字を読み取れというのだね。先程からこの男は、瞬き一つすらしてないように思えるのは、果たしてワタシの錯覚だろうか。

「ふふふー、二人ともさっそく打ち解けてくれたみたいで私も安心だわー」

おいおいおい、グリンダ。その線を引いただけのような目をもっと開きたまえ。下手糞な鼻歌なんて奏でている場合じゃないぞ。ワタシはまさかこの死神みたいな男と一緒に遺跡探索をしなくちゃいけないのかね。なあ、冗談じゃないぞ。魔物云々の前に、ワタシがこいつの餌食になってしまうのではないか。

グリンダ、そうなったらどう責任をとってくれるというのだね！

「あーそうそうー、私これからしばらく総大司教（クソハゲ）の命令で、ちょっとブルートアイゼンまで斥候しにいかなきゃならないのよー。だからー、何か収穫あったら私にも教えてよねー」

ワタシの目線ビームを意にも返さず、グリンダはにこやかに微笑んだ。

あぁ……神は死んだか糞（ジーザス）ったれめ。

>i29394—2088<

「……おい君、確かレイシ＝イサナギという名だったか。いくらあの魔女からの紹介とはいえ、ワタシが君を信用したとは思わないことだ。その『聖痕（スティグマ）』による祝福だって、ワタシにしてみれば何の価値もない。そして何より、君が『従僕せし異端者（ハイエレスレセプトゥス）』であることには違いないのだから、階級的にはワタシの方が遥かに高い。この言葉の意味が理解できるかね？　例えワタシが十三の小娘であろうと、君は、ワタシの指示に、ぜっ、絶対服従なのだよ……わ、分かったかねっ！」

「……」

何の反応も示さず、人形のような無表情でワタシを見返すイサナギ。うぅっ、薄気味の悪い男だ。

「……で、では行くぞ！」

ナップサックを背負い直し、ワタシは目の前に続く踏み固めただけの山道を歩き始めた。服装に関しては白衣を貫いているが、果たしてこれでよかったのだろうかと少し不安になる。

サンタマゴリアの首都からこの麓までの道程は馬車であったが、ここから先は専ら徒歩である。ああ、既に脇腹が辛い。

それから半刻ほど経って。

「諦めよう」

ワタシは全てを投げ出していた。

はえーよ、と内心でセルフツッコミを入れてみるが、隙間風のような失笑を生んだだけであった。歩く為のエネルギーを消費し尽したワタシは、道端に転がっていた手ごろなサイズの石に腰を下ろし、喘ぐように酸素を求めながら、状況の整理に励んだ。

「まず、こんなろくに舗装もされてもいない山道を……それこそこ

んな根っからのインドア少女に登らせる自体、当初から理に適っていなかったのだよ。ふん……まったくもって論理的じゃない」

ブツブツと愚痴を零しているワタシの前で、イサナギはぼんやりと蒼穹を仰いでいた。

「……君、さっきから何が面白くて空なんて眺めているんだい……ハァンッ、そうか分かったぞ。『早くしないと日が暮れてしまう』と暗にワタシを諭しているのだろう」

言われなくてもさっさと下山するわこの低能め。

と、ワタシが改めてイサナギを睨もうとすると、

「……なんだい、その愉快なポーズは」

どういう訳か、イサナギはワタシに背を向けて跪いていた。

「まさかとは思うが、ワタシに乗れと言っているのかい？」

「……」

当然のように、イサナギからの返答はなかった。ワタシはしばし逡巡してから、彼の背中に搭乗する意思を示した。無論、尊大な態度は依然として崩さぬまま。

「ふ、ふんっ、乗り心地は最悪だが……まあいい。君にも雀の涙ほどの殊勝さがあることは認めよう。さあ、このままワタシを麓の村までいえええぇぁあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

突如として、天地が引っくり返った。少なくとも、ワタシにはそう思えた。ありのままに描写するならば、イサナギが私を負ぶった状態で、空中を駆けていたのだった。定期的に樹木の先端を足場にしつつ、イサナギは放物線を描くように跳躍していた。ワタシは半狂乱で絶叫しながら、無意識の内に乳母の顔を思い浮かべていた。

空が、こんなにも近い。地面が、あんなにも遠い。おまけに、ワタシの気も徐々に遠くなっていく。ああ、ミカエラ。ワタシは今日、死ぬのかもしれない――――

「――――何（ジーザス）てことだ」
ようやく思考が現実に追いついてきたらしいワタシの眼前には、底の窺えない洞窟が大きく口を開けていた。何を隠そう、これが目的地である遺跡の入り口である。その証拠に、教会が派遣した調査団が残していったと思われる聖十字の石柱二つが、縄を張って立ち入り禁止にしていた。
「おい、今の時刻は」
振り向きつつ怒鳴ってみると、イサナギは手際よく懐中時計を開いてみせた。なるほど、あれから一時間も経過していない。
調査団は到着するのに半日を費やしたというのに、ワタシ達はものの一時間で到着してしまったということか。
「……」
イサナギは物言いたげに、チラリとワタシを一瞥した。
「今度は何だね、言いたいことがあるのならハッキリと――」
ハッ、とその現象に気づいたワタシは慌ててイサナギに背を向けた。次いで眼鏡を外し、ゴシゴシと荒っぽく目元を拭う。
「……グリンダめ。こうなることを見込んで、この男をよこしたな」
次に会った時は覚えてるがいい、とワタシは眼鏡をかけなおす。
「まあ、いい」
臨死体験を存分に味わったところで、ワタシは気を取り直し、洞穴に足を踏み込む。その前に一つ訂正しておくが、ワタシは決して涙など流していない。これは汗だ。百歩譲っても冷や汗だ。
ワタシが汗と言ったら汗なのだよっ。

背嚢からランプを取り出し、薄暗い洞窟内部を照らす。沈んでいくような斜面をしばらく進むと、荒削りの岩肌から、積み石による明らかな人口の壁に変わっていった。

「これは……」

唐突に視野が広がり、ドーム状に開けた場所に出た。見上げれば天井は遥か高く、通気孔でも空いているのか、微量ながらも光源の確認がとれた。ここまでは、報告書どおり。

さらに奥にも通路らしき穴は続いていたが、ひとまずはこの空間の検分が済んでからにした。一方のイサナギは、ワタシの動向をじぃーと隅の方で挙手傍観していた。その間、ワタシは到底生きた感覚がしなかったが、どうにか耐え抜いた。偉いぞ、ワタシ。

一通り見回ったワタシは、ついに最奥の部屋へと赴いた。

「これか、謎の言語というのは」

全てが石造りという狭苦しい空間。中央には荘厳なデザインの祭壇がある。周囲の壁は、意味不明な記号の羅列で覆われており、遠目からだと壁画のようにも見えた。ゆっくりと近寄ってみると、祭壇の上にはこれまた謎の文字で書かれた石版がポツンと収められている。

「……一見、魔語のようにも思えるが、形式も形状もまるで違う。この大陸の言語ではないのか……まさか極東のものでもあるまい」

ふーむ……とワタシが顎に手を当てて唸っていると、

「龍の言葉だ」

辛うじて悲鳴を上げなかったワタシを、誰か褒めてくれ。
それでも大いに後ずさったワタシは、背後で亡霊のように佇んでいた彼に身体の芯から戦慄する。
「りゅ、龍の言葉……つまりは、『真言』ということか？」
コクリ、とイサナギは静かに頷いた。
「トーマ＝アキナス。お前は魔術の起源を知っているか」
しかし、初めて聞いたイサナギの声は、不思議と心地良い透き通ったようなテノールの響きだった。
というか、魔術の起源だと？
「確か……二千年以上も前に、後の『大賢者（ヴァイナモイネン）』と呼ばれた男が、『龍王（ドラゴンロード）』からの言葉――『真言』を授かったのが始まりとされる、という例のアレか？」
もはや神話の域にまで達しているような伝承なので、この手の話を研究している者は多くあれ、流石に本気にしている者はそういない。
ワタシが語ったその先の内容を、驚いたことにイサナギ自らが買って出た。
「――そして、『大賢者』ハイバーン＝ネグラントは、後世の人々にその『真言』を伝えようとしたが、いかんせんうまくいかず、結局は『魔語（ルーン）』という手段でこの世に残した。要するに『魔語（ルーン）』とは、『真言』を簡略化した――否、もはや形骸化したとも言える、哀れな成れの果てに過ぎない。初期の頃は、『真言』が起こす奇跡の力に最も近かった『魔法』という概念が多く存在し、その次には学べば誰もが扱える『魔術』というお手軽な奇跡が誕生した。『大賢者』が伝えようとした奇跡の力は、結果的には時代と共に広く普及していったが、それと同時に酷く廃れていったとも言い換えられる」
至極淡々とした口調でのイサナギは、壁の文字を指の腹でゆっくりとなぞった。
「――何故なら、奇跡が普遍的なものになった時点で、それは既に

奇跡でも何でもない。『真言』が『魔法』に降格し、やがては『魔術』へと落ちぶれた……それ故に『大賢者（ヴァイナモイネン）』は、『四柱（エレメンタルフォー）』なんて存在を創ったのかもしれないが――」

最後の部分は掠れてよく聞き取れなかったが、イサナギはさらにもこう続けた。

「――ともあれ、魔法は元々龍の所有物であり、すなわち龍とは魔法そのものと変わらない」

龍の存在自体が、つまりは魔法であると。

「――いつだったか本で読んだ、エルフの思想系列に近いものがあるな。では、イサナギ。先程君は、この部屋の文字を龍の言葉だと判断したようだが、君はその龍の言葉とやらが分かるのか？」

「分かる」

「それは――素晴らしい（メラヴィッリオーゾ）！」

未解明中の全研究分野において、誰もが匙を投げたとされる『真言』についてのさらなる展望が、これでめでたく臨めるということではないのか。

絶対にこの機会を逃してはいけないし、耳聡い他の連中にみすみす横取りされてもたまらない。『真言』が理解出来る者など、これまでに見たことも聞いたこともない。グリンダめ、次に会ったら菓子折を持って出向いてってやろう。このイサナギという男を紹介してくれたことに、咽び泣いて感謝してやろうじゃないか。

「ではイサナギ、君に命ずる。この場に書かれた『真言』を解読し、そしてワタシにもその『真言』を教えたまえ」

「それは出来ない」

「ふむ、やっぱりな。君ならいい返事を聞かせてくれると信じて――え？」

ワタシは一瞬自分の耳を疑ったが、どうやら彼の『ＮＯ』宣言に誤謬はないらしかった。

「――き、君は、ワタシの命令に逆らうというのかね。それは、教会組織においての秩序を乱す、は、反逆行為だとワタシは受け取る

ぞ！」

なけなしの虚勢を張ってはみるが、イサナギは微塵の動揺も見せず、絶えずワタシに虚ろな視線を注いでいた。

権威も立場も階級も、ワタシの方が圧倒的に上位なはずだというのに。

現状的にワタシの余命は、この男の如何によって容易く決められてしまう。

そんな状況にしか思えなくて、ワタシは精一杯に自分を鼓舞し、この恐怖からの逃亡に躍起になっていた。

「もし弁明があるのなら――なっ、何か言ったらどうだね！」

お願いだから弁明があって欲しい、とワタシは切に祈った。言い訳の『い』の字もないというのなら、その時ワタシの生命は、この男にとって一銭の価値もなくなる。

――さあ早く、何でもいいから喋って――

「□□□□□□□□」

「……は？」

「□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□」

「ちょ、ちょと待ちたまえ。は？　え、その……君は、何と言ったんだ？」

「□□□□□□□□□□……」

「だ、だから！　それでは何と言っているか分からないじゃないか！」

「これが、『真言』だ」

「そんな……嘘だろう？」

ワタシは瞠目せずにはいられなかった。今のが、『真言』だって？　まるで貴金属同士をすり合わせたような――もしくは、地鳴りとも海鳴りともつかない、腹の底から響いてくるような、おどろおどろしい奇怪音とでもいうのか。いや、正直に認めよう。まことに

遺憾ながら、ワタシの知識や語彙だけでは到底理解不能で、表現不可能な『音』を、イサナギは発したのだ。
　未だに耳が、キーンとしていて不快だった。
「何故、『大賢者』が後の人々にこの『真言』を伝えられなかったのか……理解したか？」
　思考が一向にまとまらない頭を抱えていたワタシに、イサナギは抑揚のない声音を降らしてくる。
「『真言』とはその字面通り、真理と真実の言語であり、真正にして真誠なる言葉。この『真言』を用いる場合、決して嘘は吐けないし、断じて偽ることも出来ない。そして何よりもこの『真言』は、人伝えでは絶対に教えられない」
「――ならばっ、君はいったい誰から、その『真言』を教わったというのかね！？」
　段々と苛立ちを覚え始めてきたワタシは、思わず声を荒げるが、イサナギは相も変わらず仮面のような無表情を張りつけて、
「『真言』とは龍の言葉。無論、龍から教わったに決まっている」
　それから例のイサナギ速達便で麓まで下山し、サンタマゴリア大聖堂に戻ってきたワタシ（ああ！　二度目はどうにか失神せずに耐えてみせたとも）が、まず初めに起こした行動はといえば、もちろん仮眠――というのは冗談。
「『龍守り（ドラゴンキーパー）』のヤンハオというのは君かね？」
「は、はい。某（それがし）がそうですが、あの、お嬢さんはいったい？」
　施設内部のとある一室を訪れたワタシは、その人物に単刀直入に詰め寄った。
「ワタシは、研究省総合部所属の『司教』トーマ＝アキナス。君に

命ずる、ワタシと龍を会わせたまえ、今すぐにだ」

部屋の出入り口前で向かい合った彼は、イサナギと同じく黒髪黒目（片方は眼帯で覆われていたが）で、うなじの辺りから腰にかけて伸びる長髪は、尻尾のようにして一本に束ねられていた。

容姿が似ていることから、イサナギも極東地方出身であると推測されるが、けれども何だというのだろう、この格差は。同じ黒髪黒眼でも、こうまでもまとう空気が違うというのか。極東人は皆、イサナギみたいな暗いオーラを放っているものと思っていたが、これからは認識を改めよう。ふむ、しかしこれでハッキリした。

アイツが異常なだけだ。

「なるほど、あなたが噂の最年少司教の……しかし、いきなり会わせろと仰られても、聖龍様とのお目通しは『総大司教』以上の方の許可証が必要で――」

「コレのことかね」

おろおろと戸惑う彼の眼前に、一枚の紙切れを突きつける。

「こ、これは確かに……しかも『枢機卿』、アルベール氏の直筆とは――なるほど、承知いたしました。それでは、少しお時間を貰えるでしょうか。なにぶん、準備が必要なもので」

「かまわない。だが早急に頼むよ」

ということで、廊下に一人待たされることになったワタシは、辺りに人気がないことを確認してから、小さくガッツポーズを決めた。

「アルベール様、感謝しますよ」

研究省総務監督官であり、偉大なる我が師でもある人物の名を呟く。でも一つだけ気になるのは、彼の御仁が、白聖龍に会いたいとせがむワタシに告げた、あの台詞。

『うにゅー？　トーマちゃんってば、あのフィリちゃんに会いたいんすかっ？　まーまー物好きっちゃねえ。あんなの見物したって面白くも何とも――んまっ、観たければ一度観てくればいいよ。どうせ意味なんてないと思うけどねーんクヒャヒャヒャッ』

――意味なんて、ない？

天才の中の天才にして、大陸最強の錬金術師とも謳われる――アルベール＝マグヌストゥス。『教皇』に次いでの地位と権力を誇る彼女の言動は、いつにも増してその真意を推し量ることは難しかったが、今回は妙に引っ掛かった。

意味の無いものに、意味を与えることこそが、彼女の信条であったはず。

それが、何故？

「お待たせしました、アキナス氏」

扉を開け、ワタシの正面に現れた彼は、純白の長袍（チャンパオ）に身を包み、一振りの長剣を携えていた。聖龍に面会する為の正装ということだろうか。

「……一つ尋ねたい。ご覧の通り、ワタシはいつもの白衣姿のままなのだが、問題はないだろうか？」

「ええ、服装に関しては特に指摘されることはありません。某の衣裳は、『龍守り』としての矜持と礼儀から着ているだけに過ぎませんから」

さあ、参りましょうか、とヤンハオはワタシのその場所へと先導する。

『龍』、という単語を前にして、諸君らはいったいどんな想像を巡らすであろうか。十中八九それは、異様なほどの巨体に、天を覆うかのような両翼。吐き出される息吹に抗う術など皆無であるとい

う、ある種の超越的な生命体をイメージすることだろう。
　そしてこの世界には、古より龍という生き物があらゆる生態系の頂点に君臨している――とはいえ、龍にだってピンからキリまであり、所謂、亜竜種や飛竜種などの分類もある。しかして、本当の意味での『龍』と言わしめる存在は、紅炎龍『エリュプスカリア』、青雷龍『ペルナスヘイム』、緑地龍『マグナマヤテル』、黒幻龍『ニーヴェルガント』、白聖龍『アトモスフィリオン』などの《名を冠せし者達》だけである。
「ヤンハオ」
「何でしょう」
「もしや君が腰に差しているのは、『アスカロン』ではないかね？」
　あの『ジュワユーズ』や『ミュルグレス』と並ぶ、七聖剣が内の一本。ヤンハオは振り返らぬまま、感心したように頷いた。
「おや、よくお分かりで」
　シュテンベルグ教の総本山である、ここサンタマゴリア大聖堂の広大無辺さについては、この場で簡単に語り尽くせるものでもない。この場所が大聖堂のどの辺に位置しているのかは定かではないが、方今、ワタシ達は大理石の廊下をのこのこと辿っていた。
「教祖シュテンベルグが、民衆を苦しめていた白聖龍をその剣で倒し、それからシュテンベルグと盟約を交わした白聖龍は、人々の守護者となり、この教団のシンボルともなった。その後、代々白聖龍の世話役に任命された者には聖剣『アスカロン』と『龍守り』の称号が与えられる――ふん、これでもワタシは司教だ。これくらいの歴史は学んでいる」
　憤然としてワタシは、先を行く彼の背中を睨みつける。
「これは失礼を。流石は、『天使博士（ドクターエンジェル）』と言ったところでしょうか」
「えんじぇ――何だねそれは？」
「あなたの渾名ですよ。天使に祝福された才知の持ち主、ということでしょうかね」
「フンッ、くだらない。そう名づけた奴の嫉妬心が、ありありと見

透かせるようだよ」
　案の定と言うべきなのか、こんな場所でもワタシへの妬みや嫉みは絶えないということらしい。まあ、他の有象無象との馴れ合いを強制させられた学生時代に比べれば、現在の方が大いに気楽である。他人との関わりを持たなくても、結果を出しさえすれば、ここでは誰もワタシに文句など言えやしないのだから。
　人至って賢ければ友なし、とはよく言ったものである。
「アキナス氏、自分からも一つ訊いてもよろしいでしょうか」
　と、不意にヤンハオが口火を切った。
「言ってみたまえ」
「どうして、龍に会いたいなどと？」
　半ばその質問内容を予想していたワタシは、反対に尋ね返してみる。
「時にヤンハオ、君は龍の言葉とやらを話せるかね？」
「……ええ、話せます。だからこそ某は極東の人間でありながらも、『龍守り』としてのお役目を先代の教皇様から任されたのですから」
「やはりそれは、龍から直接教わったのかね？」
　ヤンハオはしばし沈黙を返してから、
「アキナス氏は、某が『龍殺し』であることをご存知ですか？」
「ああ、君の名は色々なところで耳にするからね」
『龍殺し（ゲオルギウス）』にして『龍守り（ドラゴンキーパー）』。
　極東からの異邦人。
　彼が『龍守り』としてこの教団に仕えたのは、かれこれと半世紀も前の話だという。その割には特に歳をくった様子もなく、彼は二十代半ばぐらいの容姿を維持し続けていた。龍の血はそれだけでも延命の秘薬とも言われているほどであるから、龍を屠り、その血を浴びたであろう彼の寿命は到底計り知れるところではない。
　んまぁ、自分のことは棚に上げておくとして、良くも悪くも何かと話題の欠かない人物でもある。
「――君のしているその眼帯も、『龍殺し』としての能力に何かし

ら関係があるものと推測するが？」
　ヤンハオは軽く肩を揺らして、ワタシの問いには答えなかった。
チッ、はぐらかされたか。まあいい。いずれ君もワタシの研究対象だ。いつの日かこの手で解明し尽くしてやる。
「ともあれ、概ねアキナス氏が仰った通りですよ。某は『龍殺し』による恩寵で、龍の言葉を解しているだけに過ぎないのです――レイ氏のように、聖龍様から直々にお言葉を頂いたわけではありませんから」
　その名前が出てきたと途端、ワタシの心臓はヒヤリと温度を失う。彼の歩行は神経質なほどに乱れがなく、穏やかな雰囲気も相変わらずだった。それでも、いつの間にか透明な刃を喉元に添えられていたような心地に、ワタシはそれ以上の発言を控えざるを得なかった。
　同様にヤンハオも道中、寡言沈黙を貫いていた。

　地の底にまで続いているかのような、長く狭い螺旋階段を降りていく。光源はヤンハオの持つランタンのみで、気を抜くと足を踏み外してしまいそうだった。ぐるぐると回っているうちに、方向感覚が完全に麻痺してしまう。帰りにまたこの段差を上らなければいけないのかと思うと、少々死にたくなってくるが、流石にこればかりは割り切らなければならない。
　全ては、龍に会う為なのだから。
「着きました」
　ヤンハオが立ち止まり、ワタシも歩みを停止させる。ようやく平坦な地面に相まみえたワタシの正面には、巨大な鉄扉がズーンと待

ち構えていた。
「しばし、お待ちを」
ランタンを床に置いてから、ヤンハオが『アスカロン』を頭上にかざし、何ごとかをブツブツと唱え始めた。
「！」
突如として、鉄の門に浮かび上がる五芒星（ペンタゴン）の魔方陣。ヤンハオが鞘に収まったままの『アスカロン』で十字を切ると、魔方陣は光りを失い、扉は轟音と共に内側に向けて開かれていった。
「……では、某の案内はここまで。この先はアキナス氏お一人で参られよ」
弛んだ両袖同士で手を合わせて、深々と頭を下げるヤンハオ。
鉄扉の奥に広がるのは、静謐さを湛えた無明の闇。まとわりつく不安を振り払ながら、ワタシは放置されていたランタンを手にし、晦冥の続く道にゆっくりと足を踏み入れた。

常闇だけが横たわる空間を抜けたらそこは――洞窟だった。
岩氷柱（いわつらら）と石筍（せきじゅん）が乱立する紛うことなき鍾乳洞の中……であるはずなのに、視界は驚くほどに鮮明だった。理由はすぐに判明した。それは、遥か高みにある天井で輝く巨大な水晶のせいだった。正確な規模は分からないが、全長十数メートルはくだらないだろう。結晶化された内包魔力が発光現象の主な原因だと思われるが、おかげでワタシはその相手を視認することが出来た。
それは王座なのか。
それともただの岩棚であったのか。
いずれにせよ、ワタシはその『ソレ』と対面した。

「これが、龍……」
白聖龍『アトモスフィリオン』。
その名に偽りのない白き巨躯。思わず平伏してしまいそうな威圧感。翼は丁寧に折り畳まれており、身体の半分を隠している。真上から降り注がれる水晶の照明によって、その鱗一枚一枚が宝石のようにキラキラと蠱惑的な光彩を放っていた。
いつか乳母が枕元で聞かせてくれたお伽噺。そんな童話や伝説の中の存在が、今、ワタシの目の前にいる。
だがしかし。
「……」
ワタシの心は、何ら動かされることもなく、むしろ遣る瀬のない虚しさだけが漂っていた。
龍は一切の身動もせず、瞳を閉ざしていた。刺々しい甲殻で覆われた長い首が、無気力に投げだされている。まるでよくできた石膏像のように、白聖龍はひたすらに静寂を保っていた。
生物としての息遣いがまるで感じられない。しかし、この朽ちた巨木を連想させるような感覚はいったいなんだ。
『どうせ意味なんてないと思うけどねーん』
アルベール様の言葉が、耳元でやけに生々しく再生された。ワタシは無性に悔しくなって、当り散らすように叫んだ。
「――アトモスフィリオンっ！　ワタシの求める声に応じよ！　お前ら龍が扱う『真言』を、このワタシにも授けたまえ！」
僅かな間、岩窟内で残響する自身の声。そして再びやってくる容赦のない黙(しじま)。
ギリッ、と歯軋りをする。
「どうして、目覚めない！？　白聖龍よ、ワタシの願いを聞き届けてはくれないのか！」
冷静さを欠いたワタシは、足下の小石を握りしめ、力の限りに投擲してやった。カツーン、と石は頭頂部の角に直撃したが、相手はまったくもって微動だにしない。後々になって思い返してみると、

何とも背筋が凍るような蛮行である。
「――アイツには教えて、ワタシは駄目だというのかっ」
地団駄を踏みたい衝動を堪えて、もう少しだけ辛抱強く待ってみるが、さてこそ事態が好転することはなかった。
「……空の王と呼ばれていた龍が、まさかこんな洞穴で惰眠を貪っていようとは、とんだお笑い種だ」　負け惜しみだと理解しつつも、ワタシは鼻で嗤ってやる。
龍はプライドが酷く高い生き物だと一般的に言われているが、こんな小娘に投石され、侮辱されても、断固として静止の姿勢を崩さなかった。
ワタシは行き場のないフラストレーションを抱えたまま踵を返し、その場を立ち去った。
それにつけても、本当に無意味だった。

「まさかあの龍は、死んでいるんじゃないだろうね」
「いえ、眠っておられるだけです」
「……いつから、あんな様なのかね」
「――それは、分かりません。某がこの任に就く以前から、ずっと」
出口付近で待機していたヤンハオとの会話。ワタシは努めて淡々とした口調で彼に尋ねる。
「理由は？」
「それも、不明です」
「君は、アレと対話をしたことがるのだろう？」
「ええ……過去に一度だけ」
「何と言われた？」

「言われたというよりも――なんでしょう、『伝えられた』に近いでしょうか」
悲しみと、失望の念を。
そう言ってヤンハオは、物寂しそうに微笑んだ。

一つ訊き忘れていたことがある、とワタシはイサナギを捉まえた後に自室に招き入れ、来客用のソファに座らせた。
「君もヤンハオも、『真言』を解し、話せるとのことだったが、ならばその『真言』が起こす奇跡の力も使いこなせるということかね？」
常に軽く目を伏せた状態のイサナギは、ぼぅと虚空を見据えてから、不意に思い出したかの如く開口した。
「いや、不可能だ」
「それは、何故だね？」
「……トーマ＝アキナス。お前にとって《奇蹟》とは何だ」
「な、何だって、それは――」
「人の力や、自然現象をも超越した事象。『まさに奇跡だ』、『奇跡的に助かった』――などの通りに、概ね全てがプラスのイメージを持つ。決して、マイナスイメージの意味合いを持つことはない」
「相変わらず、要領を得ない言い回しだな」
だから、何だというのだね、とワタシはギラギラと眼光を鋭くする。侮るなよ、今のワタシは度し難く苛々しているのだ。例え相手が教皇でも、容赦なく噛みつく勢いであった。
「有史以来、成り下がったとはいえ、魔術や魔法といった奇蹟の片

鱗を利用して、人々は何をしでかしてきた？」
ワタシは、答えに窮した。
その問い掛けに対する解答のせいではない。今まで茫洋とした無表情を張り付けていたイサナギが、ふいと悲愁に満ちた表情を浮かべたからだ。
思わずこちらの胸まで痛くなってくるような、なんて哀しい顔（かんばせ）。
「――ただ、争いだ」
「……」
「幾多の血肉で穢され、数多の死によって彩られ、繰り返し繰り返し貶められてきた奇蹟は、その本質を歪ませ、変容させた。それは『真言』としての力が消滅するのと、同義だった」
これがどういうことか解るか、とイサナギはワタシの瞳をじっと見返してきた。
たったそれだけなのに、ワタシはギュッと締めつけられたような息苦しさを覚えた。いったい何だというのだろう、この気持ちは。
いったいワタシは、どうしてしまったというのだろうか。
「この世に、もはや奇蹟など存在しないということだ」
ただひたすらに不快で、不可解だった。
「あの手の客人も随分と久しぶりですが……いつぞやのアルベール様以来でしょうか。それにしても、なかなか可愛らしいお方でしたね。そうは思いませんか――聖龍様」
先程までアキナスが怒声を喚き散らしていた場所に、ヤンハオは

いた。言わずもがな彼の正面には、山のように動かない白聖龍の姿もあった。

無論、アトモスフィリオンからの返答はなく、ヤンハオはクスリと苦笑を漏らす。

「いつか某も、レイ氏のように貴方と言葉を交わしてみたいものです」

龍は黙して語らず、極東の『龍殺し』は柔和に目元を細めた。

第二十話　『天使博士』の過去回想録　前編（後書き）

中編

いつの間にやら季節は巡り、ワタシは齢（よわい）十七の冬を迎えていた。

「まったく、やっと見つけたぞ」

修道士の住居と列柱廊で囲まれた中庭のベンチで、鬱陶しいほどに伸びた黒髪を後ろで縛った青年が、一人聖典の頁をめくっていた。

「イサナギ」

その者の名を口にしながら、ワタシがズカズカと近づいていくと、彼は静かに顔を上げた。

「……君ね、こんな凍死してしまいそうな時期に外で読書だなんて、気でも狂っているのかね」

君を探すワタシの身にもなってみたまえ。

「……」

イサナギはどこか惚けたように首を傾げた。

「むぅ……まあいい。ところで君、ワタシの部屋まで来て、資料整理に手を貸してはくれる気はないかね？　えーとその、アレだ。人手が足りなくて困っているのだよ」

イサナギはしばらく黙考するように間を空けてから、コクリと小さく首肯した。

その頃の時代背景を簡単に説明しておくならば、サンタマゴリア帝国及び諸国連合は、邪教の温床と成り果てたブルートアイゼンと目下戦争中であった。戦況は至ってはすこぶる優勢。これも大陸最大勢力を誇る『十字軍（クルセイダーズ）』や、それらを率いる名だたる名将らが前線で活躍しているおかげである。

しかし、それとは別個にあるもう一つの軍隊。

裏切りの逆十字。信仰を持たない傭兵集団――『従僕せし異端者（ハイエレスレセプトゥス）』。

正規軍である『十字軍（クルセイダース）』と比べ、その構成員は三十人にも満たない。けれども、その一人一人が一騎当千の実力を有しており、俗に個人部隊（ワンマンアーミー）とも呼ばれ、教会内部でもその存在は酷く恐れられている。そのせいか彼らは、非常に特異な立場にあった。

その中でもさらに拍車をかけて特異な存在が、イサナギである。

何故ならイサナギは、『従僕せし異端者』でありながらも『聖痕（スティグマ）』をその身に刻んでいるからだ。『聖痕』とは教皇から直々に与えられる祝福であり、称号である。そして『従僕の異端者』で初めて『聖痕』を受けたという前代未聞の事件に、当時はそれなりに騒がれたらしい。普通、『聖痕』を刻んだ者は、教皇の親衛隊である『聖堂騎士団（タンプリエ）』に昇格されるのが常だが、イサナギは現在の地位のままを欲したという。

理由については、思いのほか単純であった。

『――俺は、生まれついての無神論者だよ』

だ、そうだ。

この件については、『空間の魔女』ことグリンダ＝ジェラリッティからもこんな言及がある。

『あー、それはレイシくんが賢明だったわねー、うん。あんなねーキチガイばっかの部署にレイシくんを配属させるだなんてー、まず私が許さないわよー。ほらートーマちゃんだってー、『聖堂騎士団（タンプリエ）』のキナ臭い噂は知ってるでしょー？』

確かに『聖堂騎士団』の中には、その情け容赦のない残虐性から、

悪評の絶えない人物らがちらほらと在籍している。そう例として挙げるなら――

『魔女狩り将軍（トライアルエンパスター）』――マッシュ＝パンプキンズ。

『焚刑劇（マキシマムカノン）』――ペテロ＝ドランクール。

『断罪執行人（インシジョン）』――ニコ＝レーミラ。

『蒐集家（デモノマニア）』――ヨハン＝ボタン。

――『裁判所が服着て歩いている』とまで言わしめた彼らであるが、ワタシからしてみれば、ただの大量殺戮者なのではないかと、少々反感的な印象を抱かざるを得ない。夥（おびただ）しい数の異教徒や異端者を屠り、その功績で成り上がっただけの処刑人。

それは偏にワタシが、形式ばかりの信仰心しか持ち合わせていないから言えることなのだろうか。或いは、単に若さ故の青臭さからくるものなだろうか。

ふむ。

それからグリンダはもう一つ、ワタシに驚くべき事実をヒソヒソと耳打ちしてきた。

『あとねーここだけの話ぃー、ぶっちゃけ今の教皇って少年愛者っていうかー、変態なのよー。ほらレイシくんって何かー……アレじゃない？　だからーそういう意図もあってー、レイシくんを自分の近くに置きたかったのかなって思うのよー。わーっ、なんか鳥肌立ってきちゃったー！』

何気に国家機密に近い情報をワタシに曝露してくれたグリンダは、薄ら寒そうに自身の腕をさすった。教皇が男色家などということ以前に、ワタシは、イサナギに大虐殺の看板を背負って欲しくはなかった。だからその時、ホッと息を吐いて安堵していたように記憶している。

――しかし、どうしてワタシはそんな風に思ったのか。さて、解らない。結論に至るまでの方程式が、まるで見えてこない。イサナギと出会った四年前から、ワタシはどうにも変なってしまった。

どこがどう、と一概に言えるものでもないのだが。

いずれにせよ、これは本人に直接責任のいかんを追及してみるべきだろうか。

「イサナギ、そっちは終わったか？」

ワタシが声を掛けると、イサナギは無言で頷いた。ワタシは席を立ち、あらかじめ用意しておいたティーセットを戸棚から取り出し、肩を竦めるようにして掲げた。

「では、イサナギ。お茶にしようか」

厚みのあるシャトル式のカーペット。太陽が真冬の雲に隠れたおかげで、室内は薄暗かった。ぱちぱちと音を立てる暖炉の火が、ワタシ達の影をゆらゆらと躍らせている。肘掛け椅子に深く腰を下ろしながら、ワタシはティーカップに口をつけた。イサナギもカップを両手で包みながら、ぼんやりと炎の揺らめきを眺めていた。

「……君、最近とんと姿を見かけなかったが、遠出でもしていたのかい」

「……遠征に」

「――ああ、件のオスナブルック城制圧作戦か。あの街まで到達すれば、ブルートアイゼンとの戦争もあともう一息だな。武官らがよく噂しているよ。もしかしたら、この長きに亘った戦乱も次の春があける頃には、終わっているのではないかって」

「……」

「え――ああ、うむ」

会話に詰まってしまい、わざとらしくカップを傾けるが、既に中身は空だった。

もう何百年も前に死んだ聖人の命日に、毎年このサンタマゴリア帝国の首都では、狂騒とした活気に包まれる。その祭りの概要は、普段世話になっている家族や友人または恋人に、手製の菓子などを贈呈するという趣向であった。まあ、ワタシのようなしがない研究職の者にはあまり関係のない話である。

――少なくとも、ここ二、三年前までは。

「シェフテオドール、大変だ。卵のからが大量に入ってしまった」

「落ち着いてくださいマドモワゼル。一つずつ取り除いていけば大丈夫ですから」

「シェフドール、この砂糖はどれくらい投入すればいいのかね？」

「『料理人形（シェフドール）』、とはこれまた言いえて妙な――あとマドモワゼル、それは砂糖ではなく塩です」

「すまない、もう入れてしまった」

「……仕方ありませんね、そっちはクラッカーの生地にでもしましょう」

サンタマゴリア大聖堂の西棟にある大食堂。その厨房にて、ワタシは調理というの名の戦闘に明け暮れていた。監修を勤めるのは、シェフのテオドール＝エスコフィエである。その色香漂う甘いマスクは、教会内部のあちこちで話題にされる。特に熟年婦人層の方々に。

ちなみに彼も、一応は『従僕せし異端者（ハイエレスレセプトゥス）』の一員であった。何故にこんな場所でシェフをやっているかは、未だに大いなる謎であるが。

「では、一定の間隔をあけて並べてください」
「りょ、了解した」
アーモンドを練りこんだものから、マーブル模様のものまで、多様な種類のクッキー生地を鉄板の上に整列させていく。それらの工程が終わると、テオドールはオーブンの中に鉄板を収納し、コック帽を外してからワタシに一礼した。
「……はい、これであとは焼きあがるのを待つだけです。お疲れ様でした」
その際に、ライトグリーンの短髪から花のようなフレグランスがふんわりと香った。男のくせに香水でもつけているのだろうか。
「ワタシの方こそ、突然すまなかったね。グリンダの紹介とはいえ、君に菓子作りの指導を頼んでしまって」
「いえいえ、ぼくもこんな可愛らしい方と一緒に過ごせる時間をいただけて、こちらこそグリンダさんに感謝です」
――世辞やリップサービスの類ではなく、真顔で言ってくるから反応に困る。なるほど、これが教会の婦女子達を騒がせる伊達男の戦法か。
「さて、少し休憩にしましょうか」
お茶も用意しますので、とテオドールはいやに色っぽく微笑んだ。

斜陽の差す窓際の席で、テオドールがワタシのカップに紅色の液体を注ぐ。冷めるのを待ってから、チビチビと飲んでみたが、ワタシが淹れたのよりずっと美味しかった。これは流石に悔しい。
木の骨組みが露になった高い天井に、無骨な石床からは薄っすら

と冷気が這ってきて、どうにも辛い。主に階級の低い修道士達が利用するこの大食堂であるが、時間帯のせいもあってか、現在はワタシとテオドールの二人だけだった。

彼はそんな仕事の合間を縫って、ワタシの菓子製作に付き合ってくれたのだから、非常に申し訳なく思う。

「それにしても、少し驚きですね」

コックコート姿のままのテオドールが、口を開いた。

「何がだね」

「あなたのような研究者が、いきなりお菓子の作り方を教えろだなんて。やはり、明日の聖祭のためにですか？」

「――ん、まあ、そうだが」

窓の外に目線を泳がせつつ、ワタシは紅茶を口に含む。

「恋人に贈るのですか？」

逆流してきた紅茶が鼻腔から溢れ出した。

「だ、大丈夫ですかっ」

吐血でもするかのような勢いで咽ぶワタシに若干引きつつも、料理長の青年は至極紳士的な対応でハンカチを差し出した。

「えと、すみません。もしかして熱かったでしょうか？　適温で提供したつもりだったのですが……」

「ゴッフェ、ゴハッ……い、いや、こっちが勝手に自爆しただけだ。決して君の紅茶に問題があったわけじゃない。大丈夫だ、気にしないでくれたまえ」

ゼーハーと呼吸を整えながらも、ワタシは自分が赤面していないかだけが心配だった。

「そ、それと……今の質問に答えておくならね、ただ、ワタシはいつも世話になっているアルベール師にでもと思っただけで、べ、別に恋人うんぬんについてはまったく関係なくてだね――」

チラチラと脳裏をかすめる黒髪が鬱陶しい。別にそういうんじゃないと何度も言っているだろういい加減にしろ。え、ヤンハオ？

誰だねそいつは。

「あーいえ、特に他意はないんですよ、マドモワゼル。普通、あなたぐらいの歳でしたら、そういった物事に感心を示すものですから」
「――このワタシを、そこら辺の浮ついた街娘と一緒にして欲しくないものだね」
　これは失礼をば、とテオドールはクスクスと目を細めながら、ワタシの中身のなくなったカップに紅茶を注いだ。
「じゃあ今度は、君のことを聞かせてもらおうか」
「ぼくの、ですか？」
　少々戸惑った風に、彼は自分を指差した。僅かな復讐心を添えつつも、ワタシは鷹揚に頷く。
「テオドール＝エスコフィエ。君のことは、グリンダからも色々と聞かされていてね――他所に出陣する以外は、この食堂でシェフをしている変わり者の『従僕せし異端者』。その腕前は戦場でも厨房でも見劣るところなし、とね」
「そんな……過大評価ですよ」
　テオドールはひとしきり苦笑してから、ゆっくりと首を横に振った。
「だがね、一つ疑問だ。何故君は、そんなにも無信仰の姿勢を貫くのだね？　君の実力なら、正規軍でも幹部クラスにまで上り詰めることなど他愛もないだろう、とグリンダも太鼓判を押していたが」
「……マドモワゼル、ぼくにそんな野心はありません。ただこうして、自分の好きな料理を続けられれば、それでいいのです。何より正規軍に入ってしまえば、こんな道楽に浸れる時間もありません」
「ならば、どうして君はこんな教会でも末端の戦闘職に身を置いているのだね？」
　下町などでレストランを開いていたほうが、よっぽど賢い選択だと思うが。
「マドモワゼル……あなたの家族は、お元気ですか？」
　質問しているのは自分なのだが、と不満に思わないでもなかったが、ワタシは律儀にも答えてやる。

「家族、か……多分、相変わらずなんじゃないかな」
出来ることなら、あの人達のことはあまり思い出したくもないのだけど。
「それは、良かったですね」
フッ、と彼が冷たく嘲(わら)ったような気がした。

中編（後書き）

久々に中二病をこじらせてみた。

特に他意はない

結局のところ、彼の爽やか過ぎる甘いスマイルでうやむやにされてしまったわけであるが、ワタシとしてもそれ以上彼の事情に土足で踏み込むことは何だか躊躇われた。あの温和を体現したかのような美丈夫が、その仮面の下から覗かせた刹那の冷笑に、ワタシは臆したのだった。

あの『龍殺し』もそうであるが、誰も彼もがその貼り付けた笑みの裏に、鋭い刃を潜ませている。そして無邪気な子供を怯えさせるかのように、その刀身をチラつかせるのだ。

お前は何も知らなくていい、とでも言うかのように。

ワタシは、咽返るような血の臭いや、戦の風景を知らない。飢えることも、寒さに打ち震えることも、何一つ覚えがない。一生残るような怪我も、身悶えるような心的外傷を負ったこともない。人並み以上に恵まれた環境で育ち、人並み外れた才能も持ち合わせ、凡そ平穏に満ちた生活を送ってきた。

――だから、ワタシはいつまで経っても籠の中なのだ。

「……う、む……」

窓から差し込む朝日に目を覚ました。場所が自室であることは違いなかったが、起床した地点が机だった。どうやら昨夜まで続けていた論文作成の途中で寝入ってしまったらしい。

「む……？」

そこでワタシは、肩に掛けられていた綿毛布の存在に気づいた。無論、自身で羽織った記憶はない。

「グリンダ、か？」
まあ、ワタシの部屋に気安く出入りする者といったら、あのブロンドの魔女ぐらいしか思い当たる節がないわけだが、
「……まさか、な」
一瞬、黒髪の無愛想な顔が浮かんで、ワタシは一人苦笑した。視線を横に移すと、昨日テオドールと共に制作した焼き菓子が詰まった幾つかの紙袋があった。そうだ、本日は聖なる祝日。慈愛と献身の守護聖人に祈りを捧げ、気の知れたもの同士で杯を交わし、恋人達はお互いの気持ちを確かめ合う。
贈り物は、その為の代弁者に過ぎない。
「……」
――特に他意はない。

テオドールのところで朝食を済ましてから、ワタシは紙袋を抱えて師であるアルベール様のもとに赴いた。
『うにゅー？　なになにトーマちゃん、もしかしてソレ、ボクちゃんにくれちゃったりしますですかぁ！？　そっかそっか、今日は聖祭だったっけ。クヒャヒャヒャ、でも嬉しぜぇ愛弟子ぃ。ボクちゃん、不覚にもときめいちゃったんだね！』
そう言って、感極まったように熱烈な愛撫とベーゼを強制してくる師から逃走してきたワタシなのであった。例えそこに師弟愛があったとしても、ワタシにレズの気は毛頭ないのであった。
というよりも、あんな見た目年端もいかない少女と接吻しようものなら、逆にこちら側が犯罪者扱いされそうである。くわばらくわ

ばら。
　そして、僅かばかりの胸の高鳴りと、渡すときの台詞を噛み締めながら、ワタシはイサナギの部屋を訪れた。
　コンコンッ、と控えめにノッカーを鳴らす。
「……」
　留守だった。
「まったくあの男は……こちらに用があるときに限っていやしないんだ」
　酷い肩透かしを喰らったワタシは、奴が出没しそうな心当たりを巡回してみることにした。真冬の外気にさらされたワタシの身体は、早くも部屋の暖炉を求めて悲鳴を上げていた。この建物は、装飾や造形美ばかりに重点を置きすぎたせいか、実用性が丸っきりない。特に木枯らしが吹く頃になると、実家に帰郷する者も続出するくらいだ。やがて聖堂内から、ワタシは枯葉の舞う閑散とした庭に出た。庭――と一言で言っても、軽くピクニックが出来るくらいの敷地面積を有し、新入りの修道士が泣きべそになりながら道に迷っている姿がよく確認される……かくいう自分もその一人であったことは永久に秘密だ。
「……そういえば、あの時もイサナギはワタシを見つけてくれたんだっけ」
　日が暮れて、帰り道が分からなくなったワタシを、イサナギは無言のまま導いてくれた。どうしようもない羞恥からついワタシも寡黙になってしまい、そのまま礼を言いそびれてしまったわけである

が。
「さぶっ」
時折吹き抜けていく寒風がどうにも身に堪える。サクサクと落葉を踏み散らしながら、ワタシは随分と奥深くまで来てしまった。よくこの近辺でイサナギがフラフラしているのを目撃したりするのだが――
「これは、アキナス氏」
背の低い茂みを抜けたところで、不意にヤンハオとばったり出くわした。
「ヤンハオ、何故君がここに？」
彼は答える代わりに、クイッと右方を見遣った。釣られてワタシも視線をそちらに向ける。
「い、イサナギ……？」
そこでは、一振りの大剣を構えたイサナギと、大小二本の刀を振りかざした子供が、静かに相対していた。
子供――少年（？）は、人目を引く綺麗な水色の髪を頭頂部でまとめており、前髪は一方の目が完全に隠れたアイハイディングコワフになっている。いつか資料で閲覧したことがあるのだが、少年は北東地方特有の『キモノ』という衣服を着用していた。しかもこんな厳冬の時期だというのに、少年のキモノは肩口までの袖に、下は膝丈にも届いていなかった。見ているこっちが寒気を覚えてくるほどである。
三分ぐらいじっと事の成り行きを見守ってみたが、シーンと二人は一切の挙動を停止させていた。もうしばし辛抱強く待ってみたが、事態が進展するといったことはなかった。
「……いったい何をやっているのだね、あの二人は。け、決闘なのか？」
「ええ、文字通りの真剣勝負ですよ。まあ、かれこれと二十分ぐらいあの状態のままですがね」
二十分と聞いて、ワタシは目眩がした。

「何故、あの二人は、ずっと固まっているんだい？」
「相手の呼吸を窺っているんです。呼吸を読まれるということは、すなわち相手の動きを掌握したも同義。今、あの二人は互いの呼吸のリズムを探り、どちらが先に集中力が切れるのかを慎重に見定めているんです」
ヤンハオは二人の動向を静観しながら、至って真面目な口調で語る。
「……要は、我慢比べということか？」
「一流の戦士ともなれば、闘い方も次元が変わってくるということです」
厳粛な雰囲気を演出しつつも、フツフツと興奮したような熱気が、彼から伝わってきた。それはまるで、闘争に血を滾らせる一匹の野獣のよう。
ヤンハオらしくもないな、とワタシは思った。自分には、あの二人の間に満ちる張り詰めた空気ぐらいしか見て取れるものはない。実際は、静謐ながらも高度な心理戦が繰り広げられているものと思われるが。
そんな思索の最中、いつの間にか場面は急展開を迎えていた。
「え――――」
巨大な、氷の、樹木が、突如として、ワタシの、目の前に。
あくまでも残響として鼓膜を揺さぶる、金属同士の衝突音。
いつの間にか、ヤンハオがワタシの正面に立ち塞がっていて――
そして次の瞬間に襲いくる、激しい突風。加えて、「いけないッ！」というヤンハオの叫び。
「――縛符（ばくふ）、『隔歴三帝（かくりゃくさんてい）』！」
いったい、何が起こったのかさっぱり状況が呑み込めなかった。
ヤンハオが縦長の紙切れを投擲したと思ったら、正面で眩い閃光と放電現象のようなものが発生し、ワタシの視界を奪っていった。
ようやく現状が落ち着きを取り戻した頃、ヤンハオの背中から恐る恐る顔を出してみると、そこには刀を手放し、膝を着いて項垂れ

る北東の少年（仮）と、自分の影に《ズブズブ》と大剣を沈めているイサナギの姿があった。
「イサナギっ」
思わずワタシは駆け出して、
「うぉっ!?」
すってーん、と見事なまでのコケっぷりを披露してみせた。それはもう近年まれに見る滑りようである。腰が砕けるかと思った。ん、滑る？　とワタシは周囲の有様を即座に把握した。
辺り一面が、同心円状に分厚い氷で覆われていたのである。
強打した臀部からは、鈍痛と共にズボン越しの氷の冷たさが伝わってくる。ワタシは軽く呻きながらも立ち上がろうとして、ふと頭の中が真っ白に塗り潰された。
「……アキナス」
どこまでも朴訥とした、感情の読めない鉄面皮。しかしここ最近、ワタシはイサナギの微妙な表情の変化の具合が何となく分かるようになってきた。甘いお菓子を食べるとき、彼は少しだけ口元を綻ばせる。子供を見かけるときは、いつも優しそうに目を細めるし、一人でいるときは、決まって物悲しそうな雰囲気を醸した。
だから、尻餅を着いたワタシに手を差し出し、相変わらずの無表情を崩さない彼は、
「……？」
困ったような、呆れたような、それでもどこか可笑しそうに――
「あ」
カーッと頭に血が上っていくのが自分でも解った。頬が、火照る。身体が、熱い。気持ちの悪い汗が額に浮かんだ。寒さなどもはや敵ではなかった。
気づくと、ワタシは背を向けて逃げ出していた。

澪士のもとに駆け寄ろうとし、凍りついた地面の上ですばらしいスリップを見せつけ、顔を真っ赤にしながら（若干涙目で）立ち去っていったうら若き研究員を、ヤンハオは黙って見送った。

アイヤー……と内心哀れに思いながら。

澪士もまた遣り場のなくなった手を引っ込めて、不思議そうに小首を傾げた。

「どうでした、レイ氏」

ヤンハオが声を掛けると、澪士は先程まで試合をしていた相手を指差しながら、近づいてきた。

「……ヤンハオ、アイツは戦力になる」

「――レイ氏がそう言うのであれば、それはそうなのでしょう。ですが、某（それがし）はあの子を戦地に送るのは、いささか頷きかねます。聞けば、まだ十にも満たない年齢らしいではないですか」

「……剣を握れば、女子供であろうと、皆等しく兵士だ」

「それはごもっとですが、某が真に危惧しているのは、あの子――シイナ＝ミクモ自身についてです」

どういうことだ、と澪士は無言でその先を促す。

「北東全域を統治するミチノークという列強国で、シイナといえば古今無双の武士（もののふ）の一族の名。ミチノークが数百年に亘って他国からの侵略を退け続けてきたのも、偏にかの者達の功績があってこそのものと聞き及んでいます。それで随分前のことになりますが、その一族の中から『鬼仔』が出たという噂を小耳に挟んだことがあります。なんでも、伝家の宝刀を持ち出し、肉親数十人を斬り殺した後に、現在行方不明だとか……某が先日見定めたところ、あの小刀と大刀、やはり盗まれた『花吹雪』と『雪月花』の二本に相違いあり

ませんでした」
　長く弛んだ袖口を合わせて、ヤンハオは思案げにミクモを見据えた。ミクモは、しょんぼりと肩を落とした様子で、抜き身の刃を鞘に収めていた。
「ただでさえ、この異端部隊は教会内部でも白眼視されているんですから、これ以上厄の介事を持ち込まれては、某も庇いに庇いきれません」
　これから敵方の本丸を叩きにいくという慌しい時期に、とヤンハオは疲れたように嘆息した。
「ならば、俺の付き人としてでもいい。なにも正式な入隊を望んでいるわけではない」
「――レイ氏も、どうしてそんなにもあの子を戦場に立たせたがるのですか？」
「俺じゃない」
「はい？」
　ヤンハオが訝しげに眉根を寄せると、澪士はとぼとぼとやってきたミクモの頭に手を乗せた。
「コイツが、自ら戦いたいと言っている。全てはコイツの――ミクモの意思だ」
　不意にミクモから氷のように冷めた瞳を向けられ、不覚にもヤンハオは言葉に詰まってしまう。
「……なにとぞ」
　外見の幼さとは裏腹に、底冷えのするような低い声が発せられた。ヤンハオは俄かに信じられなかった。自分が、この童の気迫にたじろいだという事実に。
　眼帯の裏が、微かに疼いた。
「仕方が……ありませんね。上にはうまいこと伝えておきます」
　それにしたってレイ氏は、よく自分を斬殺しかけた者を仲間にしようだなんて思いましたね、とヤンハオは誤魔化すように苦笑した。
「すまない。上層部に顔が利くのは、お前ぐらいしか見当がつかな

かった」
「……かたじけない」
双方からの感謝の意を胸にしまいこみ、ヤンハオは人の好い笑顔を浮かべた。そして彼らに別れを告げてから、眼帯で覆われた右目に手を当ててみる。
ズキズキと、暴れ狂るように脈を打っていた。
「――クハハハッ」
極東の『龍殺し（ゲオルギウス）』は、愉快に笑う。
己が内に息を潜める獣の鼓動を、必死になって抑え込みながら。

特に他意はない（後書き）

ヤンハオさんってどんなひとー？

こんなひと←

＞ｉ３１３９８―２０８８＜

うっかりうっかり。特に他意はないんです。お札の模様に見覚えがあったら、セミトアナタハトモダチー。

ミクモは、多分次の話で描くと思う。多分ですよ、多分。

なんかリクエストあったらくだせぃ。

いろいろと妄想してたら、ヤンハオやミクモとかの外伝書けそう。

『氷結の鬼仔』　みたいな？

『龍滅の申し子』　みたいな？

タイバニの二期はくるの？　みたいな？

本物の恋愛とかしてみよーぜ？　なあ？

何故逃げたし。

「知るかそんなものっ」

焼き菓子の詰まった紙袋を携えて、ワタシは目的地も定めずにズンズンと歩き続けていた。やがては上昇していた血流も降下していき、幾分冷静さを取り戻したところで、ワタシは自室にへとルートを変更した。

沸々と再燃してきた羞恥心に、小一時間ほどベッドで枕を抱えながら悶えていたら、いつの間にかまどろみの中に沈んでいった。

ハッとして目を覚ました頃には、既に夜の帳は盛大に下りていた。

途中で幾度も踵を返しかけたが、結局ワタシは再びイサナギの部屋を訪れていた。例の紙袋を持って扉の前でグルグルと往来をリピートし、ついにワタシは勇気を振り絞ってノッカーを鳴らした。

落ち着け、ワタシ。大丈夫だ、イサナギは人の恥部を蒸し返して笑うような奴じゃない。そもそもイサナギの方から話題を提供してくるなんてことが、これまでに一度でもあっただろうか。というか、イサナギの前で犯した失態など別に今回が初めてではなかろうに、何をそんなにワタシは意識しているのか。そうとも、ワタシは過去にもっと恥ずかしいハプニングをぉぉおお違う違う！　そうじゃない。論点はそこじゃない。ええい、自ら昔の恥部を穿り出してどうするか。忘れろ、忘れるんだワタシ。自身の裸体を晒してしまったことだとか、イサナギの前で失禁してしまったことだとか、そんな些事は遥か歴史の向こう側だ。もはや前世の出来事だ。遠いどこ

かの国の御伽噺なのだ。だから、さっさと忘却の彼方にでも置いてくるのだトーマ＝アキナス。そしてその火を吹いた顔面を早急にどうにかしたまえ。これから件の彼に会うというのにああもうジーザス！　どうしたらいいというのかガッデム！

「……」

部屋の入り口で悶々と頭を抱えていたワタシであったが、訪問の音を奏でたというのに、しばらく待ってみても先方からの応対はなかった。

不審に思ったワタシは、ドアノブをそっと握って押してみる。

「お」

ドアは、ゆっくりと内側へ開いた。

「……い、イサナギ？　いるのか？　は、入るぞ」

兎のようにビクビクしながら、ワタシは足を踏みいれた。

明かりのない室内はぼんやりと薄暗く、息の詰まるような静寂に満ちていた。部屋はそれなりの広さを誇っていて、トイレやバスルームなども設置されていた。見知った空間ではあるが、ワタシは壁伝いに怖々と進んでいき、どうにかその場所まで行き着いた。

「……おい、イサナギ……ぉーぃ」

寝台。

案の定といえば、案の定であるが。

几帳面に敷かれたシーツの上で、イサナギは絶命したように目蓋を閉じていた。コートは乱暴に脱ぎ捨てており、黒のハイネックノースリーブといった出で立ちであった（寒くないのだろうか）。寝息はまったく聞こえなかったが、恐らく熟睡していることには間違いない。何せあの警戒心旺盛なイサナギが、ワタシの立てた物音や声にも気づかず、こうしてぐっすりと眠り続けているのだから。

「――存外、寝顔は可愛いんだな」

この男が他人に寝顔を見せるというのも、なかなかに珍しい。せっかくなので、もっとじっくり観察してみることにする。

今更であるが、この男の綺麗な顔の造形にワタシは改めて感心し

てしまう。色素の薄い滑らかな肌は、とても男性のそれとは思えない。目元に浮き出たクマと相俟って、いくらか病人じみているが、女のワタシでも嫉妬を覚えるような美貌だった。

不意に、ワタシの中で悪魔が囁いた。

「……ふ、ふふふっ、こ、これは君がいけないのだよ、イサナギ。ワタシにつけいる隙を作った、君が悪いのだ。したがって、恨むなら自分自身の迂闊さを恨むがいい」

司教という立場も忘れ、悪魔の甘言に耳を貸したワタシは、ゴクリと生唾を嚥下し、イサナギの柔らかそうな頬に指を伸ばした。ほほぅ……何という弾力性。想像以上にぷにぷにしているぞ。こ、こうなったら、起床するまで延々と連打してやろうか。こんなレアな機会は、もう二度と来るものでもないだろう。ならば、思う存分欲望の赴くままにぷにぷにぷにぷにぷにぷにと――――

「ようやく寝かしつけたとこなんだ。そっとしておいてくれるかい、お嬢ちゃん？」

脈拍と呼吸の停止を確認。まことに残念ながら、ワタシは死んだ。

「クススッ、期待どーりのリアクションをごちそーさん。ほら、そんなままゆーっくりとツラ上げな」

驚愕のあまり、声帯の震わせ方すらド忘れしたワタシは、錆びて動かなくなったブリキ人形のような動作で、ギギギッと差し仰いだ。

「……ォ、おっ、お――」

酸欠に喘ぐ金魚のようにパクパクと顎を上下させながら、ワタシは半ば腰を抜かしていた。

「『お前は何者だ』ってか？　クススッ、そりゃぁオレでも難解な質問だ」

《ソレ》は、深淵が如き闇だった。

さながら黒煙のように揺らめきながら、徐々にワタシの視界をその漆黒で覆っていく。見間違いでなければ、ソレはイサナギの身体

から滲み出ている影のようだった。
「だったらこっちからも逆に質問してやんよ。オレはいったいどんな声で、どんな喋り方で、どんな形でアンタの目の前にいる？」
放棄していた思考を取り戻し、ワタシは努めて現状の把握に励んだ。どこに口があるのかは知らないが、男勝りな口調とは裏腹に、声つきは凛とした女性のものだった。そう認識した途端、ゆらゆらと無秩序に広がっていた闇は、たちまちに収斂していき、やがては女のような肢体を模った。そしてその真っ黒なシルエットから、頭部にだけ人間としての部位が現れる。
「――なるほどな、アンタにはオレがこういう風に見えてるわけだ。クスス、この笑い方にも納得ナットク。まあ確かに、アンタと《彼女》はどこかしら似通った部分があるもんな。ははーん、つまりはそういうことかい」
目鼻立ちの整った、同世代ぐらいの美しい少女だった。湛えた微笑はどこか艶美的であったが、限りなく人間味が排されたものだった。
いや、人間ではないのだからそれは当然のことなのだろうが。
「な、何なんだ、貴様は――」
立ち上がることが困難であると気づいたワタシは、仕方なく床に尻を癒着させたまま、ズリズリと後ずさる。得心がいったように頷いていた彼女は、大仰な仕草で自分を指差した。
「あぁん、オレかい？　もしかしなくてもオレのことかい？　さーてね。オレは先代がコイツに継承させた能力とは別個の、ちょっとした付録さ。まさか先代はそこまで意図したわけじゃなかったんだろうが、結果的にオレはコイツに引き継がれちまった。先代はオレのことを『源泉（イド）』って呼んでいたが、コイツはオレを『愚劣なる半身（イマーゴ）』っていう『魔名（まな）』で縛りつけ、それで完全に制御した気になっていやがる。ふん、こんな説明で満足してくれたかい、泣きボクロのお嬢ちゃん？」
「……お前は、あ、悪魔なのか……」

「おいおい冗談きついぜ、眼鏡のお嬢ちゃん。神だの悪魔だのっつーのは、アンタら教会のご都合主義で区別したもんだろが。オレらにしてみたら、そんなものはまるで関係がない。アニミズムってご存知？　万物有魂論。もしくはポリセイズムでもいいけどさ。アンタらの教典とは真逆の真理――つまりは逆理。お宅ん家の神様がどんだけ偉くて尊かろうが、オレみたいなその他大勢にとっちゃ、心底どうでもいいのさ。例えオレがアンタらの仰る悪魔なのだとしても、オレにしてみれば、そんなクダラナイ定義で括らないで欲しいわけ。ぶっちゃけて言えば、オレは《何者でもないし、何者でもある。それ以上でも以下でもない。裏であり、表であり、どこまでも虚構だが、いくらでも真実になり得る存在》。要するに、それがオレなのさ」

この言葉の意味が分かるかい、くすんだ赤毛のお嬢ちゃん？

明らかに見下したような物言いで、彼女は壁際にまで後退したワタシを睥睨した。ワタシは精一杯に睨みつけてやるが、尻餅を着いた状態ではまったく様になっていない。

「まぁともあれ、オレの宿主の安眠を妨げる行為はヤメテ欲しいってわけよ、天才のお嬢ちゃん」

人形のように端正な顔立ち。けれども生気の一向に感じられない笑顔で、彼女はイサナギに這い寄り、トーンの低い不気味な腕でイサナギの黒髪を蹂躙する。その黒い手が彼の頬に添えられた瞬間、ワタシは途方もない嫌悪感に襲われた。

だから、つい。

「い、イサナギに触れるなっ」

膝がちゃんちゃら可笑しく笑っている。それでもワタシは何とかして起立し、噛みつくようにして小さく叫んだ。

「アンタこそ、オレの主人に気安く近づいてんじゃねーぞ？」

予想外なことに、先方からも鋭い反駁が投げ返された。

「ははん、アンタの用件は承知してんぜ。その大事そうに抱えてるクッキーを贈りたいんだろ。カーッ、乙女だねぇ。甘酸っぱすぎて

吐き気がしてくるぜ」

わざと癇に障るような声音を出し、『源泉（イド）』は愉快気に肩を揺らす。

「一つ言っておくけどな、白衣のお嬢ちゃん。この男はな、誰も憎まねぇし愛しもしねぇ。他人に余計な感情を持ち合わせない、悲しいくらいに『人間失敗』なんだ。加えて、アンタはこの男にご執心のようだが、それは間違っても恋心なんかじゃねーぜ」

それは、ただの同情だ。

「なっ、ち、ちが――」

訳も分からぬまま、ワタシは咄嗟に口を開いたが、

「何が違うっていうんだい。まさか自覚してないわけじゃないだろ？　でもな、アンタがコイツに寄せるのは感情じゃないくて、ただの同情だってことよ。オレぁ老婆心から教えてやってんだぜ？」

――何が、老婆心だ。ワタシの心は、ワタシだけのものだ。お前みたいな悪魔に、いったい何が分かるというのか。

「いいかい、無知なお嬢ちゃん。コイツは自ら進んで傷を負い、疵を追いかけるようなアホだ。傷つくこと事態に、もはや何の抵抗も感じてない壊れた奴なんだよ。それでさ、偶にいるんだなこれが。自分の傷口をコイツ越しに覗いちゃった、お嬢ちゃんみたいなのがさ。ハッキリ言って自慰行為なんだよ。コイツの傷跡と、自分の傷跡を重ねてさ、まるで同士を見つけたみたいに一人で舞い上がっちゃって、勝手に勘違いしちゃうおバカな子。単なるマスターベーションだって気づきもしないで。まったくシコシコシコシコ忙しなくさァ、恥ずかしいったらありゃしない」

腰に手を当てて、厳しく立った『愚劣なる半身（イマーゴー）』は、小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

――何か、反論しなくてはいけないのに。

「アンタもさァ、こんな男をオカズにオナニーなんかしてないで、もっと別のことに目を向けたらどうだい。そんで本物の恋愛とかしてみよーぜ？　なあ？」

「……」

こんな暴力的な論理に、異議を唱えなくてはいけないのに。

「つーか、アンタはいったいコイツに何を求めてたわけ？　相互理解の絆でも欲しかったのかい？　クススッ、彼ならワタシの気持ちを分かってくれるってか？　わっかんねーよ！　こんな『人間失敗』に他人の心情なんざ理解できるわきゃねーだろ！」

そんなものは全てデタラメだと、否定しなくてはいけないのに。

「もうこの際だ、ついでにアンタのバケの皮も剥がしてやんよ」

ワタシは、何故だか重く口を閉ざしたままだった。

「――家族の誰からも相手にされなかったアンタは、狂いたくなるほど寂しかった。構って欲しかった。振り向いて欲しかった。その天才的な頭脳をひけらかしてまで、アンタは家族の気を引こうとした。その結果がこれだ。アンタの行き過ぎた秀才ぶりは、偏狭な兄姉達に疎まれ、実の両親からも気味悪がられ、気づけば居場所なんざとっくに無くなってた。ああ、いじらしいじゃねーか。アンタが本当に手に入れたかったモノは、皮肉にもアンタ自身の才能が潰しちまったってわけさ！」

ワタシは我が身を抱きしめながら、ガタガタと震えていた。心臓が締めつけられたように痛くて、中途半端な嗚咽と、苦い涙だけが溢れた。

「しかしアンタは、あの家から半ば強制的に追い出されても、内心どっかで期待してたんだ。ある程度の地位を獲得し、偉くなって帰郷すれば、きっと家族も自分を認めてくれる。温かく迎えて入れて、ワタシを愛してくれるってなぁ……んなわきゃねぇのによぉぉおっ！」

――もう、やめてくれ。

「史上最年少司教？　『天使博士（ドクターエンジェル）』？　全然違うね。お前は、不様で、脆弱な、肉親からの愛も知らない、ただの××××××ッ！」

これ以上、ワタシの心を抉らないで。

「否定しようだなんて考えるな。反論しようだなんて思い上がるな」

ワタシの醜い中身を突きつけないで。
「所詮、無駄な抵抗なんだよ」
ワタシが一生懸命築いてきた惑わしの城壁。それが、無慈悲にもガラガラと音を立てて崩壊していく。その中心で膝を抱えて怯えるワタシが、白日の下に引きずり出された。
ワタシの大事に匿ってきた『籠の中（らくえん）』が、余すことなくもなく荒され、明かされ、暴かれていく。
「ああ、そうだ。誰かがアンタを『籠の中』に閉じ込めたわけじゃない。アンタ自身が、安全な『籠の中』に閉じこもったのさ。ご丁寧なことに、柵やら壁やらを厳重にも張り巡らせてなぁ」
そこでワタシは、ようやくこの影の正体を把握した。むべなるかな、彼女の言うとおりである。否定反論など、そもそも初めから不可能であったのだ。
何故なら、彼女の台詞は全てワタシの――――
「お嬢ちゃん。結局アンタって人間は――チッ」
唐突に彼女が不快気に舌打ちしたと思ったら、すぅーと雲散霧消していった。直感的に後ろを振り向くと、そこには見覚えのある髪色の少年が、生まれた時のままの姿で立っていた。
部屋の奥にある浴室から出てきたのか、まだ水滴のついた状態の髪にタオルを宛がっており、ワシャワシャと布の擦れる音だけが室内に響いていた。

＞i31860―2088＜

「……」
「……」
奇妙な沈黙が、ワタシ達の間で交わされる。
何となしに視線を下降させてみると、そこにあるべきはず物が、ナニもなかった。というよりも、それは性別的に随分と見慣れた光景であった。

茫然と我を失っているワタシを尻目に少年――改め少女は、ベッドの脇にあるクローゼットから藍色の『キナガシ』を取り出して、熟練した手つきで身にまとい、キュッと帯を締めた。

「……そのほう、もう夜分おそくゆえ、そうそうにおひきとりねがいたく……」

想定していたよりもずっとハスキーな低音が、少女から発せられた。

「……」

どうにも返す言葉が見つからぬまま（というかまともに喋れる精神状態でもなかった）、ワタシがすごすごと退室しようとした際に、今しがた聞いたばかりのハスキーボイスが忠告するように追いかけてきた。

「……おぬしがさきほどまで見聞きにしていたモノは、すべてザレゴトにてそうろう。あんいに真に受けることは、だんじてけんめいにあらず。なにとぞ、気をもむことのなきよう……」

焼き菓子の袋は入り口付近にあった台座の上に残して、ワタシはその場を後にした。

フラフラと幽鬼のように覚束ない足取りで、どうにか自室にまで辿り着いたワタシは、ひたすらに乳母のことを考えていた。

ミカエラ。こんな哀れなワタシに、唯一親愛の情をもって接してくれた人物。深夜の排泄に付き合ってくれたのも、枕元で物語を読み聞かせてくれたのも、休日に街へと連れ出してくれたのも、みんな彼女だった。故郷を離れてからも、彼女の手紙だけがワタシの支

えだった。ワタシがここまでやってこれたのも、ひとえに彼女の存在があったからだ。

その晩、ワタシは暖炉の火に照らされながら、今まで大切に保管しておいたミカエラからの便箋を全て引っ張り出した。破壊され尽した牙城の復興の目処はつかなかったが、文面から滲み出る優しい温もりに、ワタシの視界はいつまでも酷くぼやけたままだった。

泣き疲れた挙句に、猛烈な睡魔に襲われる。色々な意味でグチャグチャだったワタシは、そのまま溶けていくように夢を結んだ。

翌日、ワタシのもとに故郷から一通の書状が届いた。

使用人の誰かが綴ったと思われる、長ったらしい礼儀的な前置きと、興味もない家族の近況。そして、言葉を失った突然の訃報。

ワタシは、ミカエラが亡くなったという事実を知る。

本物の恋愛とかしてみよーぜ？　なあ？（後書き）

澪士が自分の為に用意してくれた着流しを見下ろし、ミクモは静かに微笑んだ――が、すぐに氷のように冷めた目つきに戻る。

「ひとの《心》をたぶらかす……『覚（さとり）』め」

どこからともなく「クススッ」という少女のような笑い声が短く反響した。

「ぬ……」

先頃まで自身の内面を容赦なく踏み荒らしていた相手に、ミクモは忌々しそうに呻いた。それから寝床で仰向けになっている澪士の隣に、同じく身体を横たわらせる。何回か逡巡するような素振りを見せてから、ミクモは隣人の手を軽く握り、ゆっくりと目蓋をおろした。

触れ合った肩と手が、奇妙な熱を帯びる。自分の生涯の中で、これほどまでに他者との温度を共有した例が果たしてあっただろうか。

ミクモは、染み染みと感じ入る。

なにゆえか、この人は、あたたかい――

得体の知れぬ不思議な安心感が、その時のミクモには満ちていた。

『妖精の替え子』

乾いたノック音がにわかに響いた後、誰かが断りもなしに入室してきた。

足音もなく、声を掛けるでもなく、部屋の隅で膝を抱えるワタシの斜め前で、静かに止まる。

「……うら若き淑女の部屋に無断で侵入するのは、夜這いでもない限り失礼だと思うがね」

久方ぶりに震わせた喉が奏でたのは、酷く掠れた濁声。その淀んだ音色に、自分でも少し驚く。

「……すまない」

ワタシが開口一番に嫌味を吐くと、イサナギは子供のような素直さで謝った。どうしてか、無性にイライラした。

「それとも何だ？　ワタシのような根暗は、女の範疇には入っていないというのかね？」

八つ当たり気味に意地悪く責め立ててみるが、イサナギはこれといった反応を示さなかった。だからなのか、余計に腹が立った。

どうせ、グリンダ辺りにでもワタシの様子を見てこいとでも言いつけられたのだろう。三日ぐらい部屋から出てこないからといって、いったい何だというのだろうか。あの魔女のお節介にも、ほとほと困ったものである。

そればかりか自分の意思でもないくせに、ワタシの前に姿を現した彼がどうにも憎らしかった。元はと言えば、君が従えているあの『影』のせいで、ワタシは見たくもない自分の醜悪さを覗いてしまったんだ。

お前さえ、いなければ――

「出ていきたまえ。君の顔なんて、見たくもない」

数秒ほど間を置いてから、イサナギは相変わらずの無表情でコクリと首を縦に振った。その瞬間、胸の辺りで針で刺されたような痛みが広がる。

「……」

しかしながらイサナギはその場を動かず、懐をゴソゴソと弄っていた。

「……で、出ていけと、ワタシは言ったはずだ。何をいつまで突っ立って――」

そこでワタシが台詞を途切れさせたのは、眼前に垂れ下がる十字架に目を奪われたせいだった。小さなチェーンに通された、銀のクロス。細やかな彫り装飾に、中央には透きとおった紺碧の石がはめ込まれていた。

イサナギはそれを丁寧にワタシの手の平へと落としていく。僅かな重み。冷たい感触。ワタシはしげしげと眺め回してみながら、頭上にかざしてみた。クロスは窓辺から差し込む真冬の陽光に、キラキラと反射している。

純粋に、キレイだなと思った。

「何だい、これは？」

「やる」

「いきなりどうして」

「先日の、焼き菓子の礼」

釣り合うかどうかは定かでないが、とイサナギは素っ気ない口調で言った。

「……純粋な銀は、魔を払う力がある。加えて、俺からも退魔の『呪（まじない）』をこめた。即席でこしらえたものだが、効き目ほどは保証する」

汝に、幸多きこれからが訪れんことを。

「……あ…」

「用件は、それだけだ」

そう言い残して、イサナギは立ち去ろうとする。
気づくとワタシは、彼のコートの裾をしっかりと握りしめていた。

何故彼を引き止めてしまったのかは自分でもよく分からない。一抹の寂寥が、ワタシにあんな行動をとらせたのか。それでも、イサナギが近くにいてくれるだけで、ワタシは幾分かの冷静さを維持することが出来た。
何だろう、イサナギの隣がしっくりと落ち着くというか。
譬えるなら、真夜中に飲むホットミルクのようなホッとした安心感というか。
ふむ。
「なあ、イサナギ」
「……」
息づかいさえ聞こえてくるほどの距離に腰を下ろしたイサナギは、チラリとワタシを一瞥した。
「君は、『妖精の替え子』というのを知っているかね？」
いい加減この窒息してしまいそうな沈黙にも飽きてきたワタシは、半ば自暴自棄な心境のまま話題をふってみる。
「ごく稀に、容姿や髪色が両親のそれとはまるで似ても似つかない子供が産まれることがある。世間では俗に、妖精の子と取り替えられた――つまりは取替え子というらしい」
イサナギはただ無言で、その先を促した。

「ワタシの家系はね、代々金髪碧眼だった」
卑屈な苦笑を浮かべながら、ワタシは自身のくすんだ赤毛を指に絡めて弄ぶ。
「初めこそは、母親の姦淫を疑われたが、我が家はみな熱心な信仰者で、母にしてもその線は薄いように思えた。特に性に関しては厳格な宗派に属していたからね。何より、もし母が不貞を犯していたというなら、ワタシを孕んだ時点で、秘密裏にでも堕ろしていたはずだ。上にはもう独立した兄達がいたのだから、わざわざワタシを産む必要などなかったんだ」
話を戻そうか、とワタシは気持ちだけ居住まいを正す。
「諸説はいくつかあるのだが、ワタシなりに研究した結果、どうやら大気中の魔力――マナによる移変が主な原因だという事実を突きとめた」
この世界の隅々まで遍在する漫然的な『力』。それが、マナ。おおよそ全ての魔法や魔術は、それら超自然的なエネルギーがあることを前提にして行われている。すなわちマナとは、ありとあらゆる物質、概念、存在、魔力の根源であると理解しておけば良い。
「そしてマナは、月の満ち欠けによって大きく流動する。それが人体のメラニン色素にどんな風に影響するかまでは解明に至っていないが、しかし、ワタシはこの仮説の正当さをほとんど確信しているよ。潜在魔力の質が体外に現れるといった俗説は、恐らくココからきているのかもしれない。ちなみにワタシが産まれた夜は、ちょうど二つの満月が赤く輝いていたそうだ」
成長するにつれ、毛色も虹彩もまるで違ってくるワタシを目にし、両親はいったい何を思ったのであろうか。
「とはいえ、ワタシのような人種は、偶然と偶然が重なったが故の産物に過ぎない。無論、この現象は人によって千差万別だ。調べた中では、アルビノや、極東人でもないのに黒髪黒目をした子供は、非常に高い潜在魔力を秘めているというデータも出てきた。そのせいで奴隷狩りの被害にあったり、邪教の標的になって攫われたりし

た事件が多発したらしいが……」

イサナギの表情が、少しだけ怖いものに変わった。

「……その他にもごく少数であるが、変わった症例があってね。人間としての欠陥を抱えながらも、特定の分野で秀でた能力を持ち得ているケースがいくつかあったりしてだな――」

例えば、聾唖（ろうあ）でありながらも名声を勝ち取ったピアニスト。六歳で精神年齢の成長を停めた彫刻家。紙面上でしか会話が出来なかった文豪。

――或いは、自ら『籠の中』に閉じこもった孤独な研究者。

「……まるで、サヴァンだな」

「え？」

ふと思い出したように、イサナギはポツリと呟いた。

「白痴の賢人……俺がいたところでは、サヴァン症候群と呼ばれていた」

イサナギは、続けてこうも言う。

「または百鬼（なぎり）……知人の言い回しを借りるならばそれは――」

『神様（ギフト）からの贈り物』、とも。

その時、ワタシの脳裏に映し出される在りし日の光景。

過呼吸に苦しみながら泣きじゃくる幼い頃のワタシを、乳母のミカエラが優しく抱擁している。

『ミカエラ、ミカエラ、兄さまや姉さまがね、ワタシに言うの。お前は、とりかえ子だって。この家の子じゃないって』

『まあ、どうしてそのような』

『かみの色も、ひとみの色も、ぜんぜんちがうから。こんな、きもちわるい赤毛も、灰色の目も、ワタシいやだよ』

『――お嬢様、他者との違いを恥じてはなりません。他人と異なるということを嘆いてはなりません。全ては、偉大なる主がお決めになったことなのですから』

『なら、きっと神さまっていうのは、鼻のとがったしわくちゃ顔のイジワルにちがいないんだわ。ワタシは、このようしのせいで辛いことばかりよ。幸せなことなんてひとつもない。ワタシは、そんなひどい神さまなんて信じないわ！』

『お嬢様……わたくしはお嬢様と出会えたことが、生涯で一番の幸せでございます。わたくしは、わたくしとお嬢様を会わせてくれた主に、毎日心から感謝しています。だから、お嬢様。見た目なんて、そもそも関係ないのでございますよ。お嬢様は、お嬢様なのですから』

『……ミカエラ、じゃあワタシは、いったいどうしたらいいの』

『確かに、お嬢様はご自身の容姿に苦しまれているかもしれません。ですが、お嬢様の利発さや、聡明さ。それだって、主があなたにお与えになったものです。だからもっと、誇りにお持ちなさい』

『その神様からの贈り物は、やがてあなたを必ず幸福へと導くから』

じわりと、涙腺が緩やかに決壊する。イサナギの虚ろな双眸がワタシを捉えているのが分かった。本音を晒せば、こんな情けない姿を見ないで欲しかった、いっそのこと、どこか遠く逃げ出したいほどであった。

だが、それ以上に。

「……大事な人が、死んでしまったんだ」

案の定堪えきれずに吐露してしまった、剥き身の本心。

「……ワタシという人間を、初めて認めてくれた人だった」

彼女がいてくれたからこそ、ワタシは最低限の人間味を有することが出来た。

「自身の体のことなど、なに一つ報せてはくれなかったくせに、最後の最後までワタシのことを心配してくれて……」

たった一人の女性の憂いすら晴らすことも出来ずに、なにが『天使博士（ターエンジェル）』か。なにが『天才（ドク）』というは、全てが名ばかり

だ。ワタシは、本当に学ぶべき事柄を、ずっと疎かにしてきたのだから。

故にワタシは、いつまでも無知で、どこまでも無力で、どうしようもないほどに独りぼっちだった。

「既にワタシは、この悲しみを乗り越えられるような自信がない。この先もずっと後悔し続けて、ズルズルと引きずっていくのだと思う」

今頃になってようやく気づいた自分の愚かさに、嫌悪感と吐き気だけが込み上げる。

「だから、ワタシはもう――」

「悲しみってのは、無理に乗り越えるようなものじゃない」

バッサリと遮るように紡がれた彼の言葉は、ワタシの鼓膜を鋭く震わせた。

「乗り越えられない悲しみなら、そのまま大事にしまっておけ。それでいつか気が向いた時にでも取り出して、そっと愛でてやればいい」

俺みたいに《失敗》したくなきゃ、そのくらいの余裕は持ち合わせておいた方が賢明だ。

視線を虚空に固定したまま、イサナギは嘯くように独りごちる。

「……」

ワタシの勘違いでなければ、これは彼なりの慰めだと受け取ってもいいのだろうか。

「――イサナギ」

「ん」

「すまないな」

「ぬ？」

「いや、違うか。こういう場合は、感謝してる――と言ったほうが正しいのかな」

「む」

「あと、これからも……ワタシの研究に手を貸してくれる、か？

内容は相変わらず、フィールドワークに限定されるが」
「うん」
そのあまりにも純朴な返事に、思わず吹き出してしまった。涙と笑いがごちゃ混ぜになった、何とも奇妙な感覚。だが別に不快な感じはなく、むしろ得も言われぬ心地良さが香った。
彼の無愛想で不器用な気遣いが、妙に可笑しくて。
ただ彼が自分の傍にいてくれることが、そこはかとなく嬉しくて。
そしてワタシは、今まで目を合わせぬようひた隠しにしてきたその『本当』と、正面から対峙してみようと覚悟を決める。逃げることも、怯えることもなく、堂々と胸を張って向き合ってやる。
同情でも、自慰行為でも、理由なんて何でもいい。
単純にワタシは、この男に心底惚れているんだな、と。
「この銀のクロスも、大切にするよ」
そう小声で付け加えてから、さりげなくイサナギの肩に寄りかかってみた。

それから一ヶ月も経たないうちに戦争は終盤へと移行する。『十字軍（クルセイダーズ）』、『聖堂騎士団（タンプリエ）』など軍勢は、ブルートアイゼンの帝都『ゲーフェンシュタット』へ一斉に進撃。その一方で『従僕せし異端者（ハイエレスレセプトゥス）』は、サンタマゴリア本国の守衛を名目に待機命令を言い渡された。
基本的に彼らの存在は教会の秘すべき暗部であるので、前線に立たせるようなことは滅多にない。
というよりも、これはサンタマゴリアにとって邪教の巣窟であるブルートアイゼンは、手負いの獣以下の相手だと判断されたという

ことだ。もはや東の列強国も崩落寸前。そこでわざわざ飼い犬の異端者たちに手柄を与える必要もない、という上層部の傲慢に満ちた笑みが見え透けるようだった。

しかし、戦況は一変。

総勢十二万以上の『十字軍（クルセイダーズ）』が、華々しく壊滅。同じく『聖堂騎士団（タンプリエ）』の古兵達（ふるつわもの）もほぼ再起不能状態だという。これまでの衝突は全部茶番だったかのように、先方の巻き返しが激しく始まったのだという。

そのニュースがサンタマゴリア大聖堂内を駆け巡った折の、人々の驚愕と狂騒ぶりといったら、歴史の名場面として末永く後世に伝えておきたいほどに情けないものであった。

いずれにせよ、かくして『従僕せし異端者（ハイエレスレセプトゥス）』の緊急出兵が命ぜられたのであった。

『妖精の替え子』（後書き）

あと二話ぐらいで終わる、かな。

うんたらのかんたら子　っていうのは、自分でもよく分からないこだわり。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1141n/

魔王の息子

2011年10月5日03時24分発行